

——農業開発総合センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ——

農業開発総合センター遺跡群Ⅵ

NAKA O ARA TA
中 尾 遺 跡 荒 田 遺 跡

SAKURA DANI
桜 谷 遺 跡

2009年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



荒田遺跡・桜谷遺跡 遠景（空中写真）





荒田遺跡 縄文時代早期 土器



桜谷遺跡 ①縄文時代早期 土器
 ②異なる色の粘土により製作された土器（内面）
 ③赤色顔料が塗られた岩本式土器

序 文

この報告書は、鹿児島県農業開発総合センター建設に伴って、平成8年度から平成15年度にかけて実施した南さつま市金峰町（旧日置郡金峰町）に所在する中尾遺跡、荒田遺跡、桜谷遺跡の発掘調査の記録です。

中尾遺跡では、旧石器時代、縄文時代草創期・早期・晩期の遺構・遺物が発見されました。特筆すべきものとしては、縄文時代草創期の集石遺構10基と連穴土坑8基が検出され、その周辺に数多くの頁岩の剥片と隆帯文土器が伴って出土していることです。

また、荒田遺跡では、旧石器時代、縄文時代草創期・早期の遺構・遺物が発見されました。本遺跡からは旧石器時代の細石器文化とナイフ文化の2つの文化期が確認され、これまで南薩地域における旧石器時代の遺跡数は少なくその様相については不明で、それを補うものとして貴重な資料と言えます。

桜谷遺跡では、旧石器時代、縄文時代草創期・早期・晩期、弥生時代の遺構・遺物が発見されました。縄文時代早期の県内では希少な文様を有する押型文土器が出土し、南九州における押型文土器の様相を考えていく上で貴重な資料となるものと考えています。また、弥生時代の竪穴住居跡からは、入来式土器が一括で出土し中期前葉の数少ない資料となっています。

本報告書が、県民の皆様はじめ多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心と御理解をいただくとともに文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

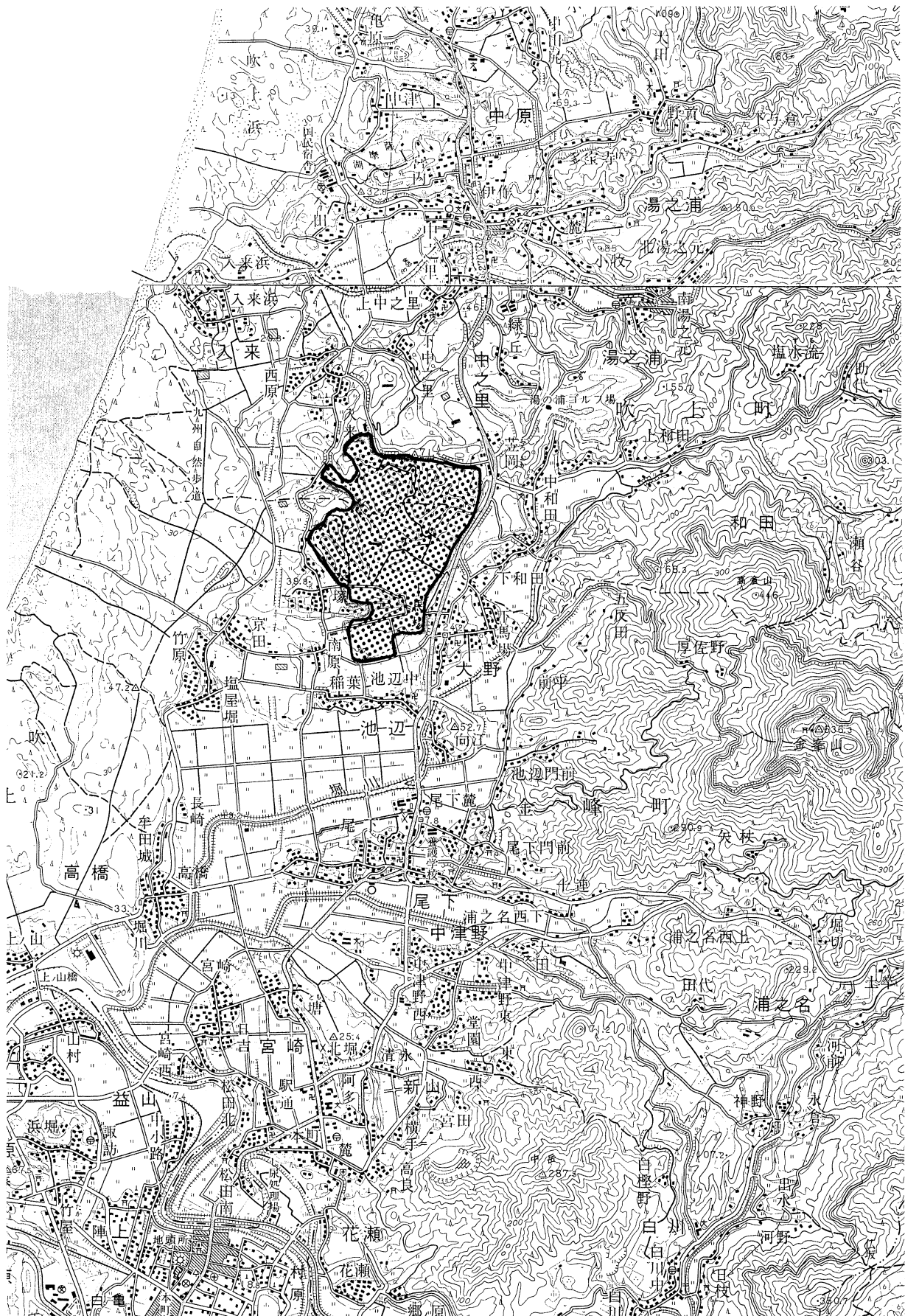
最後に、調査に当たり御協力いただいた県農政部、南さつま市の関係部局及び発掘調査に従事された地域の方々に厚くお礼申し上げます。

平成21年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 宮 原 景 信

報告書抄録

ふりがな	のうぎょうかいはつそうごうせんたいせきぐん なかおいせき あらいせき さくらだいいせき							
書名	農業開発総合センター遺跡群Ⅵ （中尾遺跡・荒田遺跡・桜谷遺跡）							
副書名	農業開発総合センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	Ⅵ							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	138							
編集者名	関明恵，長崎慎太郎，吉岡康弘，新中なるみ							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL0995-48-5811							
発行年月日	2009年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° / ′ ″	東経 ° / ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査起因
なかお 中尾遺跡	かこしまけん 鹿児島県 みなみ 南さつま市 きんぼうちょう 金峰町	462209	35-18	31° 28′ 16″	130° 20′ 16″	2001年度 2003年度	25,260	農業開発総合センター 建設
あらた 荒田遺跡		462209	35-10	31° 28′ 52″	130° 20′ 24″	2002年度	17,000	
さくらだに 桜谷遺跡		462209	35-12	31° 28′ 42″	130° 20′ 23″	2002年度	20,000	
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な出土遺物		特記事項
中尾遺跡		旧石器時代 縄文時代 (草創期) (早期) (後期) (晩期) 古墳時代		落とし穴・土坑 集石遺構・連穴土坑 落とし穴・土坑 集石遺構 集石遺構・柱穴列 掘立柱建物跡		ナイフ形石器・三稜尖頭器 隆帯文土器・石鏃・石槍・石斧・丸ノミ形石斧・スクレイパー・磨石・敲石 石坂式土器・押型文土器・石鏃 市来式土器 上加世田式土器・入佐式土器・石鏃・石匙・石斧・磨石・石皿 成川式土器		
荒田遺跡		旧石器時代 縄文時代 (草創期) (早期)		ブロック ブロック 集石遺構		ナイフ形石器・三稜尖頭器 細石刃核・細石刃 隆帯文土器 桑ノ丸式土器・押型文土器 右京西タイプ・石鏃・磨石・凹石		
桜谷遺跡		旧石器時代 縄文時代 (草創期) (早期) (晩期) 弥生時代		ブロック 集石遺構 石器製作跡 土坑・柱穴列 竪穴式住居跡		ナイフ形石器・台形石器 三稜尖頭器・細石刃・細石核 土器・石鏃・磨石 前平式土器・石坂式土器・押型文土器・石鏃・礫器・磨石・石皿 環状石斧・有溝砥石 上加世田式土器・入佐式土器・磨製石鏃・磨製石斧 入来式土器		
遺跡の概要	中尾遺跡は、旧石器時代から古墳時代までの複合遺跡である。旧石器時代では落とし穴状遺構が検出され、三稜尖頭器が出土している。縄文時代草創期では、集石遺構と連穴土坑に隆帯文土器と打製石斧が伴い出土している。遺構周辺では土器や石斧などの石器とともに頁岩の剥片も多数出土している。縄文時代早期では押型文土器や石坂式土器が出土している。縄文時代晩期では掘立柱建物跡9軒が検出されている。 荒田遺跡では、旧石器時代の包含層が2層確認されている。縄文時代草創期については、頁岩のブロックが検出され石器製作所の跡の様相が窺える。縄文時代早期については、押型文土器・桑ノ丸式土器の出土量が多く、南九州における押型文土器についての在地の土器との関連性を考える上で貴重な資料である。 桜谷遺跡では、縄文時代早期の遺物が多数出土しており、特に網代底など県内では希少な文様を有するものを含む押型文土器が特徴的であり、南九州における押型文土器の様相を考えていく上での資料としていきたい。弥生時代においては中期の竪穴住居跡1軒が検出され、住居内から入来式土器が出土し、柱穴や炉跡と思われる掘り込みも検出され注目される。							



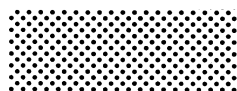
農業センター遺跡群 位置図 (1/50,000)

例 言

- 1 本書は、鹿児島県農業開発総合センター建設に伴う中尾遺跡、荒田遺跡、桜谷遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、鹿児島県南さつま市金峰町（旧日置郡金峰町）に所在する。
- 3 発掘調査及び報告書作成は、鹿児島県農政部農業開発総合センター整備事務局から鹿児島県教育委員会が依頼を受け、鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。
- 4 発掘調査は、中尾遺跡を平成13・15年度に、荒田遺跡を平成14年度に、桜谷遺跡を平成14年度に実施した。
整理作業・報告書作成は平成19・20年度に実施した。
- 5 遺物番号は、各遺跡毎に通し番号とし、本文・挿図・表・図版の番号は一致する。
- 6 挿図の縮尺は、基本的に土器は3分の1、大型石器は3分の1、小型石器は原寸とするが、遺物によっては例外もある。各挿図毎の縮尺を参考にされたい。
- 7 本書で用いたレベル数値は、農業開発総合センター整備事務局が提示した工事計画図面に基づく海拔絶対高である。
- 8 発掘調査における図面の作成、写真の撮影は調査担当者が行ったが、一部は株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。空中写真撮影は、有限会社ふじたに委託した。
- 9 遺構実測図のトレースは、整理担当者が行った。
- 10 土器の実測・トレースは、整理作業員の協力を得て整理担当者が行った。
- 11 石器の実測・トレースは、整理作業員の協力を得て整理担当者が行ったが、一部は国際航業株式会社、株式会社パスコ、株式会社九州文化財研究所、株式会社埋蔵文化財サポートシステム、大成エンジニアリング株式会社に委託し、監修は整理担当者が行なった。
- 12 遺物の写真撮影は、吉岡康弘が行った。
- 13 本書の執筆・編集は、中村耕治・井ノ上秀文・佐藤義明・関明恵・長崎慎太郎・吉岡康弘・新中なるみ・福蘭慶明が担当し、執筆分担は以下のとおりである。

第Ⅰ章 発掘調査の経過	中村耕治
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	佐藤義明
第Ⅲ章 層位	中村耕治
第Ⅳ章 中尾遺跡の発掘調査成果	長崎慎太郎・関明恵・吉岡康弘・新中なるみ 井ノ上秀文
第Ⅴ章 荒田遺跡の発掘調査成果	新中なるみ・福蘭慶明
第Ⅵ章 桜谷遺跡の発掘調査成果	関明恵・吉岡康弘・佐藤義明
- 14 遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示活用する予定である。なお、各遺跡の遺物注記の略号は次のとおりである。中尾遺跡（ノセナカ）、荒田遺跡（ノセアラ）、桜谷遺跡（ノセサク）。

凡 例



煤付着範囲



石皿作業面

目次

序	文
報告書抄録	
例	言
凡	例

第Ⅰ章	調査の経過	1
第1節	調査に至るまでの経過	1
第2節	調査の組織	1
第3節	調査の経過	1
第Ⅱ章	遺跡の位置と環境	2
第1節	遺跡の位置	2
第2節	周辺遺跡	2
第Ⅲ章	層位	4
第Ⅳ章	中尾遺跡の発掘調査成果	5
第1節	調査の経過	5
第2節	遺跡の層序	7
第3節	発掘調査の方法及び概要	7
第4節	旧石器時代の調査	11
第5節	縄文時代の調査	14
1	縄文時代草創期の調査	14
(1)	遺構	14
(2)	遺物	27
2	縄文時代早期の調査	45
(1)	遺構	45
(2)	遺物	47
3	縄文時代後期の調査	61
4	縄文時代晩期の調査	61
(1)	遺構	61
(2)	遺物	69
第6節	その他の遺物	81
第7節	小結	82

第Ⅴ章	荒田遺跡の発掘調査成果	83
第1節	調査の経過	83
第2節	遺跡の層序	88
第3節	発掘調査の方法及び概要	88
第4節	旧石器時代の調査	88
第5節	縄文時代の調査	98
1	縄文時代草創期の調査	98
(1)	遺構	98
(2)	遺物	101
2	縄文時代早期の調査	104
(1)	遺構	104
(2)	遺物	118
3	縄文時代晩期の調査	159
第6節	小結	160
第Ⅵ章	桜谷遺跡の発掘調査成果	161
第1節	調査の経過	161
第2節	遺跡の層序	161
第3節	発掘調査の方法及び概要	165
第4節	旧石器時代の調査	165
第5節	縄文時代の調査	167
1	縄文時代草創期	167
2	縄文時代早期	173
(1)	遺構	182
(2)	遺物	191
3	縄文時代前期・後期の調査	262
4	縄文時代晩期の調査	262
(1)	遺構	262
(2)	遺物	262
第6節	弥生時代の調査	268
第7節	その他の時代の調査	270
第8節	小結	272
第Ⅶ章	まとめ	273

写真図版	287
あとがき	

挿 図 目 次

第 1 図	周辺遺跡位置図	3
第 2 図	模式柱状図	4

中 尾 遺 跡

第 1 図	中尾遺跡位置図	5
第 2 図	中尾遺跡地形図	6
第 3 図	土層断面図 1	8
第 4 図	土層断面図 2	9
第 5 図	土層断面図 3	10
第 6 図	旧石器時代 遺構・遺物分布図	11
第 7 図	旧石器時代 遺構	12
第 8 図	旧石器	13
第 9 図	縄文時代草創期 遺構・遺物分布図	14
第10図	縄文時代草創期 遺構配置図	15
第11図	集石遺構 1	16
第12図	集石遺構 2	17
第13図	集石遺構 3	18
第14図	集石遺構 4	19
第15図	連穴土坑 1	20
第16図	連穴土坑 2	21
第17図	連穴土坑 3	22
第18図	連穴土坑 4	23
第19図	落とし穴状遺構・土坑	24
第20図	遺構内遺物	26
第21図	縄文時代草創期 土器出土状況	27
第22図	縄文時代草創期 土器 1	28
第23図	縄文時代草創期 土器 2	29
第24図	縄文時代草創期 土器 3	30
第25図	縄文時代草創期 土器 4	31
第26図	縄文時代草創期 土器 5	32
第27図	縄文時代草創期 石器出土状況	36
第28図	縄文時代草創期 石材別分布図	37
第29図	縄文時代草創期 頁岩剥片分布図	38
第30図	縄文時代草創期 石器 1・石鏃分類図	39
第31図	縄文時代草創期 石器 2	40
第32図	縄文時代草創期 石器 3	41
第33図	縄文時代草創期 石器 4	42

第34図	縄文時代草創期 石器 5	43
第35図	縄文時代早期 遺構・遺物分布図	45
第36図	集石遺構	46
第37図	縄文時代早期 土器出土状況	48
第38図	縄文時代早期 土器 1	49
第39図	縄文時代早期 土器 2	50
第40図	縄文時代早期 土器 3	51
第41図	縄文時代早期 土器 4	52
第42図	縄文時代早期 石器出土状況	55
第43図	縄文時代早期 石器 1	56
第44図	縄文時代早期 石器 2	57
第45図	縄文時代早期 石器 3	58
第46図	縄文時代後期 土器	61
第47図	集石遺構	61
第48図	縄文時代晩期 遺構配置図	62
第49図	掘立柱建物跡 1	63
第50図	掘立柱建物跡 2	64
第51図	掘立柱建物跡 3	65
第52図	柱穴列 1	66
第53図	柱穴列 2	67
第54図	柱穴列 3	68
第55図	柱穴	69
第56図	縄文時代晩期 土器 1	70
第57図	縄文時代晩期 土器 2	71
第58図	縄文時代晩期 土器 3	72
第59図	縄文時代晩期 石器 1	74
第60図	縄文時代晩期 石器 2	75
第61図	縄文時代晩期 石器 3	76
第62図	縄文時代晩期 石器 4	77
第63図	縄文時代晩期 石器 5	78
第64図	縄文時代晩期 石器 6	79
第65図	縄文時代晩期 石器 7	80
第66図	その他の遺物	81
第67図	縄文時代後期・晩期, その他の遺物出土状況	81

荒 田 遺 跡

第1図	荒田遺跡位置図 (1/25000)	83
第2図	地形図及びグリッド配置図	84
第3図	土層断面図1	85
第4図	土層断面図2	86
第5図	土層断面図3	87
第6図	旧石器時代遺物出土状況	89
第7図	旧石器1	90
第8図	旧石器2	91
第9図	旧石器3	92
第10図	旧石器4	93
第11図	旧石器5	94
第12図	旧石器6	95
第13図	旧石器7	96
第14図	旧石器8	97
第15図	縄文時代草創期 出土状況	98
第16図	縄文時代草創期 集石遺構	98
第17図	縄文時代草創期1	99
第18図	縄文時代草創期2	100
第19図	縄文時代草創期3	101
第20図	縄文時代草創期4	102
第21図	縄文時代早期 遺構配置図	103
第22図	縄文時代早期 集石遺構1	104
第23図	縄文時代早期 集石遺構2	105
第24図	縄文時代早期 集石遺構3	106
第25図	縄文時代早期 集石遺構4	107
第26図	縄文時代早期 集石遺構5	108
第27図	縄文時代早期 集石遺構6	109
第28図	縄文時代早期 集石遺構7	110
第29図	縄文時代早期 集石遺構8	111
第30図	縄文時代早期 集石遺構9	112
第31図	縄文時代早期 集石遺構10	113
第32図	縄文時代早期 集石遺構11	114
第33図	縄文時代早期 土坑	115
第34図	縄文時代早期 土器出土状況1 (Ⅱ類～Ⅵ類)	116
第35図	縄文時代早期 土器出土状況2 (Ⅶ類～Ⅺ類)	117
第36図	縄文時代早期 土器1 (Ⅱ類～Ⅳ類土器)	

		118
第37図	縄文時代早期 土器2 (Ⅴ類土器)	119
第38図	縄文時代早期 土器3 (Ⅴ類土器)	120
第39図	縄文時代早期 土器4 (Ⅴ類土器)	121
第40図	縄文時代早期 土器5 (Ⅴ類土器)	122
第41図	縄文時代早期 土器6 (Ⅴ・Ⅵ類土器)	123
第42図	縄文時代早期 土器7 (Ⅶ類土器)	124
第43図	縄文時代早期 土器8 (Ⅶ類土器)	125
第44図	縄文時代早期 土器9 (Ⅶ類土器)	126
第45図	縄文時代早期 土器10 (Ⅶ類土器)	127
第46図	縄文時代早期 土器11 (Ⅶ類土器)	128
第47図	縄文時代早期 土器12 (Ⅶ類土器)	129
第48図	縄文時代早期 土器13 (Ⅶ類土器)	130
第49図	縄文時代早期 土器14 (Ⅶ類土器)	131
第50図	縄文時代早期 土器15 (Ⅷ類土器)	132
第51図	縄文時代早期 土器16 (Ⅸ類土器)	133
第52図	縄文時代早期 土器17 (Ⅸ類土器)	134
第53図	縄文時代早期 土器18 (Ⅸ類土器)	135
第54図	縄文時代早期 土器19 (Ⅸ類土器)	136
第55図	縄文時代早期 土器20 (Ⅹ類土器)	137
第56図	縄文時代早期 土器21 (Ⅹ類土器)	138
第57図	縄文時代早期 土器22 (Ⅹ類土器)	139
第58図	縄文時代早期 土器23 (Ⅹ類土器)	140
第59図	縄文時代早期 土器24 (Ⅹ類土器)	141
第60図	縄文時代早期 土器25 (Ⅺ類土器)	142
第61図	縄文時代早期 石器出土状況	143
第62図	縄文時代早期 石器1	144
第63図	縄文時代早期 石器2	145
第64図	縄文時代早期 石器3	146
第65図	縄文時代早期 石器4	147
第66図	縄文時代早期 石器5	148
第67図	縄文時代早期 石器6	149
第68図	縄文時代早期 石器7	150
第69図	縄文時代早期 石器8	151
第70図	縄文時代早期 石器9	152
第71図	縄文時代早期 石器10	153
第72図	縄文時代早期 石器11	154
第73図	縄文時代早期 石器12	155
第74図	縄文時代早期 石器13	156

第75図	縄文時代早期	石器14	157
第76図	縄文時代晩期	土器・石器	159

桜 谷 遺 跡

第1図	桜谷遺跡位置図（1/25000）	161
第2図	桜谷遺跡地形図・調査範囲・グリッド 配置図（1/2000）	162
第3図	土層断面図1	163
第4図	土層断面図2	164
第5図	旧石器時代遺構配置図及び遺物出土状況	165
第6図	旧石器時代ブロック1 遺物出土状況	166
第7図	旧石器時代ブロック2 遺物出土状況	167
第8図	旧石器1	168
第9図	旧石器2	169
第10図	旧石器3	170
第11図	旧石器4	171
第12図	旧石器5	172
第13図	縄文時代草創期 出土遺物	173
第14図	縄文時代早期 遺構配置図及び 遺物出土状況図	174
第15図	縄文時代早期 土器出土状況1	175
第16図	縄文時代早期 土器出土状況2	176
第17図	縄文時代早期 土器出土状況3	177
第18図	縄文時代早期 土器出土状況4	178
第19図	縄文時代早期 石器出土状況及び 頁岩製大型剥片出土状況	179
第20図	石材別 小型剥片出土状況	180
第21図	集石遺構1	181
第22図	集石遺構2	182
第23図	集石遺構3	183
第24図	集石遺構4	184
第25図	集石遺構5	185
第26図	集石遺構6	186
第27図	集石遺構7	187
第28図	集石遺構8	188
第29図	集石遺構9	189
第30図	集石遺構10	190

第31図	集石遺構11	191
第32図	縄文時代早期 土器1（Ⅰ類）	192
第33図	縄文時代早期 土器2（Ⅰ類）	193
第34図	縄文時代早期 土器3（Ⅱ類）	194
第35図	縄文時代早期 土器4（Ⅲ類）	195
第36図	縄文時代早期 土器5（Ⅲ類）	196
第37図	縄文時代早期 土器6（Ⅲ類）	197
第38図	縄文時代早期 土器7（Ⅳ類）	198
第39図	縄文時代早期 土器8（Ⅳ類）	199
第40図	縄文時代早期 土器9（Ⅴ類）	200
第41図	縄文時代早期 土器10（Ⅴ類）	201
第42図	縄文時代早期 土器11（Ⅴ類）	202
第43図	縄文時代早期 土器12（Ⅴ類）	203
第44図	縄文時代早期 土器13（Ⅴ類）	204
第45図	縄文時代早期 土器14（Ⅴ類）	205
第46図	縄文時代早期 土器15（Ⅴ類）	206
第47図	縄文時代早期 土器16（Ⅴ類）	207
第48図	縄文時代早期 土器17（Ⅴ類）	208
第49図	縄文時代早期 土器18（Ⅴ類）	209
第50図	縄文時代早期 土器19（Ⅴ類）	210
第51図	縄文時代早期 土器20（Ⅴ類）	211
第52図	縄文時代早期 土器21（Ⅴ類）	212
第53図	縄文時代早期 土器22（Ⅴ類）	213
第54図	縄文時代早期 土器23（Ⅴ類）	214
第55図	縄文時代早期 土器24（Ⅴ類）	215
第56図	縄文時代早期 土器25（Ⅴ類）	216
第57図	縄文時代早期 土器26（Ⅴ類）	217
第58図	縄文時代早期 土器27（Ⅵ類）	218
第59図	縄文時代早期 土器28（Ⅵ・Ⅶ類）	219
第60図	縄文時代早期 土器29（Ⅷ類）	220
第61図	縄文時代早期 土器30（Ⅷ類）	221
第62図	縄文時代早期 土器31（Ⅸ類）	222
第63図	縄文時代早期 土器32（Ⅸ類）	223
第64図	縄文時代早期 土器33（Ⅹ類）	224
第65図	縄文時代早期 土器34（Ⅹ類）	225
第66図	縄文時代早期 土器35（Ⅹ類）	226
第67図	縄文時代早期 土器36（Ⅹ類）	227
第68図	縄文時代早期 土器37（Ⅹ類）	228
第69図	縄文時代早期 土器38（Ⅹ類）	229
第70図	縄文時代早期 土器39（Ⅺ・Ⅻ類）	230

第71図	縄文時代早期	土器40 (ⅩⅢ類)	231
第72図	縄文時代早期	土器41 (ⅩⅢ類)	232
第73図	縄文時代早期	土器42 (ⅩⅣ類)	233
第74図	縄文時代早期	土器43 (ⅩⅤ・ⅩⅥ類)	234
第75図	縄文時代早期	石器 1	240
第76図	縄文時代早期	石器 2	241
第77図	縄文時代早期	石器 3	242
第78図	縄文時代早期	石器 4	243
第79図	縄文時代早期	石器 5	244
第80図	縄文時代早期	石器 6	245
第81図	縄文時代早期	石器 7	246
第82図	縄文時代早期	石器 8	247
第83図	縄文時代早期	石器 9	248
第84図	縄文時代早期	石器10	249
第85図	縄文時代早期	石器11	250
第86図	縄文時代早期	石器12	251
第87図	縄文時代早期	石器13	252
第88図	縄文時代早期	石器14	253

第89図	縄文時代早期	石器15	254
第90図	縄文時代早期	石器16	255
第91図	縄文時代早期	石器17	256
第92図	縄文時代早期	石器18	257
第93図	縄文時代早期	石器19	258
第94図	縄文時代早期	石器20	259
第95図	縄文時代前期～弥生時代遺構配置図 及び遺物出土状況		263
第96図	縄文時代前期・後期 土器 (ⅩⅦ類～ⅩⅧ類)		264
第97図	土坑 1～3・土坑 3 内出土遺物 及び柱穴列		265
第98図	縄文時代晩期出土遺物 1		266
第99図	縄文時代晩期出土遺物 2		267
第100図	弥生時代中期 竪穴式住居跡		269
第101図	竪穴式住居跡内出土遺物		270
第102図	その他の出土遺物		271

図 版 目 次

巻頭図版 1	荒田遺跡・桜谷遺跡 遠景(空中写真)
巻頭図版 2	中尾遺跡 縄文時代草創期 土器
巻頭図版 3	荒田遺跡 縄文時代早期 土器
巻頭図版 4	桜谷遺跡 ①縄文時代早期 土器 ②異なる色の粘土により製 作された土器(内面) ③赤色顔料が塗られた岩本 式土器

中 尾 遺 跡

図版 1	中尾遺跡全景 縄文時代草創期 遺構検出状況 (B～D— 9～11区)
図版 2	①土層断面 (C—9区西壁) ②・③旧石器時代落とし穴状遺構 ④・⑤縄文時代草創期 1・2号集石遺構

図版 3	縄文時代草創期 ①～④ 3～6号集石遺構 ⑤調査風景 (C—10～11区)
図版 4	縄文時代草創期 ①～④ 7～10号集石遺構 ⑤・⑥ 1・2号連穴土坑 ⑦遺構検出状況 (C—11区)
図版 5	縄文時代草創期 ①～④ 3～6号連穴土坑 ⑤ 4号連穴土坑煙道部 ⑥・⑦ 7号・8号連穴土坑
図版 6	縄文時代草創期 ① 1号落とし穴状遺構 ②土器(18)出土状況 ③遺物出土状況 (C—10～11区) 縄文時代早期 ④ 2号集石遺構 ⑤土器(233)出土状況 縄文時代晩期 ⑥ 2号集石遺構 ⑦ 7・8号掘立柱建物跡検出状況 ⑧土器(285・293)出土状況
図版 7	旧石器 縄文時代草創期 土器 1

- 図版 8 縄文時代草創期 土器 2
図版 9 縄文時代草創期 土器 3
図版10 縄文時代草創期 石器 1
図版11 縄文時代草創期 石器 2
図版12 縄文時代早期 土器・石器
図版13 ①縄文時代後期・晩期 土器
②縄文時代晩期 石器

荒 田 遺 跡

- 図版14 ①荒田遺跡 近景
②土層断面
③・④旧石器時代遺物出土状況
⑤石斧出土状況
⑥縄文時代草創期 集石遺構
図版15 縄文時代早期
①～⑥10・12・20・23・29・31号集石遺構
⑦1号土坑
⑧V類土器出土状況
図版16 旧石器時代
図版17 縄文時代草創期 石器・土器
図版18 縄文時代早期 土器 1
図版19 縄文時代早期 土器 2
図版20 縄文時代早期 土器 3
図版21 縄文時代早期 土器 4
図版22 縄文時代早期 土器 5
図版23 縄文時代早期 石器 1
図版24 縄文時代早期 石器 2

桜 谷 遺 跡

- 図版25 桜谷遺跡 全景
図版26 ①土層断面
②旧石器時代遺物出土状況
③～⑥縄文時代早期 1・3～5号集石遺構
図版27 ①～⑥縄文時代早期 6・7・9・12～14号
集石遺構
図版28 縄文時代早期 ①～④20・21・24・25号
集石遺構
⑤磨石集積遺構
図版29 縄文時代早期
①石皿出土状況
②環状石斧出土状況
③有溝砥石出土状況
④X類土器出土状況
弥生時代 ⑤竪穴式住居跡検出状況
図版30 ①旧石器 ②旧石器時代 接合資料
図版31 縄文時代早期 土器 1
図版32 縄文時代早期 土器 2
図版33 縄文時代早期 土器 3
図版34 縄文時代早期 土器 4
図版35 縄文時代早期 土器 5
図版36 縄文時代早期 土器 6
図版37 縄文時代早期 石器 1
図版38 縄文時代早期 石器 2
図版39 ①・②縄文時代早期 石器 3
③縄文時代前・後・晩期 土器
図版40 ①縄文時代晩期 石器
弥生時代中期
②～④竪穴式住居内出土土器
⑤刳痕のついた土器
⑥電子顕微鏡拡大写真

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

県農政部農業開発総合センター整備事務局（以下農開総センター整備事務局）は、「鹿児島県総合基本計画」（平成6年）に基づく戦略プロジェクト「食の創造拠点鹿児島の形成」の一環として、鹿児島県農業開発総合センター建設事業を日置市吹上町（大字入来・中之里・湯之浦・和田）、南さつま市金峰町（大字大野・代表地番南さつま市金峰町大野諏訪前2935-1番地）内において計画した。このため農開総センター整備事務局は、本事業に先立って、対象地内における埋蔵文化財の有無について県教育庁文化課（平成8年から文化財課以下文化財課）に照会を行った。これを受けた文化課は平成6年11月に分布調査を実施した。その結果、事業区域内に10遺跡が存在することが判明した。

分布調査の結果を受けて、県農政部・文化財課・県立埋蔵文化財センター（以下埋文センター）の三者で協議した結果、対象地内の遺跡の範囲と性格を把握するために当該地域において確認調査を実施することとし、調査は埋文センターが担当した。

確認調査は、平成8年度・9年度に実施した。確認調査の結果、24遺跡（約100ヘクタール）が存在することが明らかになり、建築物予定地及び圃場整備により削除される部分等について記録保存のための本調査を引き続き平成15年度まで実施した。

報告書作成のための整理作業は平成15年度からはじめて、平成16年度に日置市（旧日置郡吹上町）に所存する7遺跡の報告書を刊行した。平成17年度に南さつま市（旧日置郡金峰町）に所在する4遺跡について報告書を刊行した。平成18年度は南さつま市金峰町に所在する4遺跡の報告書を刊行した。平成19年度は南さつま市金峰町の5遺跡について報告書を刊行した。平成20年度は南さつま市の中尾遺跡・荒田遺跡・桜谷遺跡の3遺跡について報告書を刊行することとした。

第2節 調査の組織

平成20年度

事業主体者	鹿児島県経営技術課技術管理係
整理主体者	鹿児島県教育委員会
整理責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター 所長 宮原 景信
整理企画者	次長兼総務課長 平山 章 次長兼 南の縄文調査室長 池畑 耕一 調査第一課長 青崎 和憲 主任文化財主事兼調査第一課 第二調査係長 井ノ上秀文
整理担当者	文化財主事 関 明恵 文化財主事 長崎慎太郎 文化財主事 吉岡 康弘 文化財主事 新中なるみ
事務担当者	総務係長 紙屋 伸一 主事 木曾 美幸
整理指導	鹿児島大学法文学部准教授 本田 道輝 南九州縄文研究会 新東 晃一
報告書作成検討委員会	平成20年12月3日(水) 宮原所長他12名
報告書作成指導委員会	平成20年12月1日(月) 池畑次長他5名
企画担当	黒川忠広・馬籠亮道

第3節 調査の経過

中尾遺跡・荒田遺跡・桜谷遺跡は、平成6年度の分布調査により確認されたもので、平成8・9年度の確認調査で旧石器時代から中世までの遺物が出土することが判明した。

本調査は、平成10年度から平成15年度まで、農業大学校用地及び耕種試験場用地の中で建築物予定地、幹線道路、研究畑等で削平される範囲、深さについて実施した。詳細については各遺跡の概要で記す。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置

農業開発総合センター建設予定地は南さつま市金峰町大野と日置市吹上町和田・中之里・入来に計画され敷地面積180㌥と広範囲におよぶものである。南さつま市は、平成17年度に加世田市・笠沙町・大浦町・金峰町の1市3町が合併してできたもので、人口約42,000人の市となったものである。

南さつま市金峰町は、西側は東シナ海に面し、中央に金峰山がそびえ、東から西へ山地・シラス台地・低地・海岸砂丘へと続く地勢を示す。また、万之瀬川の支流堀川・境川・岩元川・長谷川が山地や台地を縫うように西流している。これらの河川に開析された谷が発達し、谷に面した台地上に多くの遺跡が存在する。代表的な遺跡としては、縄文時代の阿多貝塚、弥生時代の高橋貝塚・松木藪遺跡、古墳時代の中津野遺跡が知られているが、近年万之瀬川の河川改修に伴う調査で、持鉢松遺跡・芝原遺跡など古代から中世の重要な遺跡も発見されている。

第2節 周辺遺跡

金峰町側は主に耕種試験場関連の計画地であるが、大字は大野で大野原と呼ばれている広大な台地である。遺跡は大門口遺跡・諏訪前遺跡・諏訪牟田遺跡・尾ヶ原遺跡・馬塚松遺跡・諏訪脇遺跡・宗円堀遺跡・神原遺跡・桜谷遺跡・荒田遺跡・頭無遺跡・頭無迫田遺跡・市堀遺跡・中尾遺跡・南原内堀遺跡・加治屋堀遺跡とほぼ全域にわたって遺跡が存在し、旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代・古代・中世・近世と各時期の遺構・遺物が出土している。

金峰町は古くより発掘調査が行われ、県内外で著名な遺跡が多い。阿多貝塚は縄文時代前期を中心とした遺跡で、人骨の出土した上焼田遺跡と共に貝塚を形成する希少な遺跡である。小中原遺跡は旧石器時代・縄文時代早期・古代の遺構・遺物が多く出土した遺跡であるが、現在残っている阿多という地名と同じ「阿多」という文字が刻まれた土師器・須恵器が出土したことで注目された。上水流遺跡では縄文時代中期・後期・晩期の夥しい遺物が出土している。その中には、南島との交流をうかがわせる遺物

(南島系の土器)も見られる。弥生時代になると遺跡数も増加し内容も豊富になる。下原遺跡は縄文時代から弥生時代への移行期にあたる遺跡で、杵痕の認められる土器片が出土し、早くから稲作が行われていたことがうかがえるものである。高橋貝塚は下原遺跡の後続するものであるが、弥生時代前期の土器(高橋式)と共に杵痕のある土器片・柱状挟入石器・ノミ形石器・磨製石鏃・磨製石剣・石鎌・石包丁等が出土しており、稲作農耕がいち早く伝わってきたことを物語る遺跡である。また、貝塚を形成することや南海産のゴホウラ貝が出土することから、海洋性に富んでおり南島と北部九州などとの中継地としての位置付けも重要視されている。

下小路遺跡では、鹿児島県では数少ない合口甕棺が発見され、弥生時代中期に北部九州との交流があったことが知られる。近年調査された下堀遺跡では、弥生時代中期の集落が確認され、大隅半島から西海岸に分布する間仕切りを持つ堅穴住居跡が当地方にも存在することが知られた。また、中九州や北部九州系の土器が多く出土している点も注目される。松木藪遺跡は、限られた範囲の調査であるが、弥生時代後期の大溝(幅4～5m・深さ3mのV字状)が発見され環状集落の可能性を想定させられる。また、溝中より出土した多量の土器はそれまで希薄だった弥生時代後期の土器編年に欠かせないものである。

中津野遺跡からは、弥生時代から古墳時代への移行期にあたる土器群が出土している。万之瀬川改修工事に伴う近年の調査では、持鉢松遺跡・芝原遺跡・渡畑遺跡などから古代・中世の遺構・遺物が数多く発見されている。特に中世の中国製陶磁器が大量に出土しており、南島・中国との交流が大きく取り沙汰されてきている。平成16年・17年の調査では縄文時代後期の足形土製品が渡畑遺跡と芝原遺跡から出土し接合している。荒平古窯跡群は県内でも数少ない古代の須恵器窯で、生産遺跡の研究上欠かせないものである。白樫野遺跡では、石組を伴った墓壇が発見され、その中から土師器の蔵骨器(短頸壺・蓋)と4隅に「山」と墨書された土師器坏と鍛冶滓・甕の羽口2点が出土している。

遺跡地名表（金峰町）

番号	遺跡名	所在地	時代	番号	遺跡名	所在地	時代
1	塚山	大野	古墳	22	寺下	大野	中世
2	大塚	〃	古墳	23	京田	〃	縄文・古墳・中世
3	尾ヶ原	〃	縄文早～晩期・弥生・古墳	24	京田原	〃	古墳
4	諏訪牟田	〃	縄文・古墳・古代・中世	25	鎮守尾	〃	古墳・中世
5	諏訪前	〃	縄文早期・晩期	26	南原A	〃	縄文中期・後期
6	馬塚松	〃	縄文晩期・中世・近世	27	砂漠	池辺	古墳
7	諏訪脇	〃	縄文早期・晩期・中世	28	小堀	〃	古墳・古代
8	大門口	〃	縄文早期・晩期	29	萩ノ上	〃	古墳
9	宗円堀	〃	旧石器・縄文早期・中世	30	地頭堀	〃	古墳・古代
10	荒田	〃	旧石器・縄文早期	31	塩屋堀	〃	古墳
11	秋葉	〃	旧石器	32	玄同堀	〃	古墳・中世
12	桜谷	〃	旧石器・縄文早期・弥生	33	主水堀	〃	弥生・古墳
13	神原	〃	旧石器・縄文早期・古代	34	秋葉下	〃	古墳
14	頭無	〃	縄文早期・古代	35	島田	〃	古墳
15	市堀	〃	縄文早期・中世	36	宮園	〃	古墳・古代
16	頭無迫田	〃	旧石器・縄文早期・中世	37	牟礼ヶ城跡	〃	中世
17	加治屋堀	〃	縄文	38	小城田	〃	縄文
18	中尾	〃	旧石器・縄文草創期・早期	39	本寺	〃	古墳
19	南原内堀	〃	縄文後期・晩期	40	前平	〃	縄文・古墳
20	南原外堀	〃	古墳・古代	41	宮の前	〃	縄文・古代
21	原口	〃	古墳・古代				



第1図 周辺遺跡位置図

第Ⅲ章 層位

I 層 灰黒色土
II 層 黒色土
III 層 黄橙色火山灰土
IV 層 黄褐色土
V 層 黒褐色土
VI 層 暗黄橙色火山灰土
VII 層 明茶褐色土
VIII 層 茶褐色粘質土
IX 層 暗茶褐色粘質土
X 層 黄橙色シルト質
XI 層 白色シラス

第2図
模式柱状図

農業開発総合センター予定地は、旧日置郡金峰町と吹上町にまたがる南北2km、東西1.5kmの広大な範囲に及ぶ。地形も標高86mから13mと高低差があり、山・台地・沖積地・開析谷と変化に富んでいる。そのために、それぞれの地点で層位が異なっている。第2図は台地部分の標準的な地層の模式図である。

また、以下の各層の説明も標準的なものである。

I 層 灰黒色土

現在の耕作土。白色の小軽石を含むことによってII層との区別が可能である。地点によってはa・b・cの3層に細分できる。I c層は黒色に近い色調であるが、3mm大の白色軽石が混在している。中世末から近世初めの層である。I層の平均的な厚さは20cm程度であるが、圃場整備により削除されたり、盛り土されたりしており一定ではない。

II 層 黒色土

弥生時代・古墳時代・奈良時代～鎌倉時代の遺物包含層である。圃場整備により削除されている部分が多いが、谷の部分などを中心に良好に残存している。層厚10～30cm。

III 層 黄橙色火山灰土

鬼界カルデラ起源のアカホヤ火山灰（B P 6400年）とその腐植土である。上位（III a層）はII層との漸位層であり、やや黒色をおびる。縄文時代晩期及び

弥生時代前期の遺物包含層である。中位（III b層）は縄文時代前期から後期の遺物包含層である。下位（III c層）はアカホヤ火山灰の一次堆積と考えられるが残存状況は悪く、IV層との境目が明瞭ではない。層厚30～40cm。

IV 層 黄褐色土

III層と類似するが、より褐色味を帯び粘質である。縄文時代早期の遺物包含層で層厚20～30cm。

V 層 黒褐色土

硬質でよくしまる。2～3cm大の黄橙色のパミスが混入する。縄文時代早期の遺物包含層で層厚30cm。

VI 層 暗黄橙色火山灰土

桜島起源の薩摩火山灰（B P 11,500年）である。非常に薄くブロック状に堆積している。層厚は厚い所で15cm程度堆積している。

VII 層 明茶褐色土

粘質土であるが、火山灰の混入によるザラついた感触を持つ。縄文時代草創期の遺物包含層で層厚10cm。

VIII 層 茶褐色粘質土

いわゆるチョコ層である。粘質が強く含水率が高い。旧石器時代から縄文時代草創期の遺物包含層である。層厚10cm。

IX 層 暗茶褐色粘質土

VIII層とほとんど同じ土質であるが、VIII層に比べてやや褐色土味を帯び、シルト質化している。旧石器時代の遺物包含層である。層厚30cm。

X 層 黄橙色シルト質（シラス質）

シラスの腐食したもので、5cm大の黄色軽石を含む。上位は旧石器時代（ナイフ形石器文化）の遺物包含層である。層厚80cm。

XI 層 白色シラス

始良カルデラ起源のシラス（B P 24,500年）である。近辺の露頭では10数mの堆積が見られる。

各遺跡の大半が標準土層のとおりであるが、中尾遺跡一部は上部の層が削除されているため表層下位はVII層で縄文草創期の遺物が出土する状況である。また、荒田遺跡・桜谷遺跡も一部上層が削除されているところがある。詳細については各遺跡の調査成果の項で記述することとする。

中 尾 遺 跡

第Ⅳ章 中尾遺跡の発掘調査成果

第1節 調査の経過

中尾遺跡の本調査は、平成12年7月に行った農開総センター事務局との現地協議の結果に基づいて調査区域と調査深度を設定した。本調査は、工事に伴う削平部分、建設にかかる範囲を対象とした。

1 調査日誌抄

平成13年

10月 表土剥ぎ、B～C-9～11区、D～F-10～12区Ⅲ～Ⅳ層掘り下げ

11月 E～G-9～11区Ⅱ～Ⅳ層掘り下げ

12月 E～I-9～12区Ⅲ～Ⅳ層掘り下げⅢ層コンター図作成、B～D-9～11区Ⅶ～Ⅷ層掘り下げ、集石遺構・連穴土坑検出

平成14年

1月 B～D-10～11区Ⅷ層掘り下げ、C～D-2～6区、H～J-3～5区Ⅱ～Ⅴ層掘り下げ、上部層削平確認、晩期掘立柱建物跡検出、C～D-10～11区土層断面実測

2月 B～D-10～11区Ⅷ層掘り下げ、D～E-3～4区Ⅱ～Ⅳ層掘り下げ

3月 C～D-4～6区Ⅱ～Ⅳ層掘り下げ
B～D-9～11区Ⅸ層コンター図作成

平成15年

8月 D～H-12～17区表土剥ぎ、下層確認トレンチ設定・掘り下げ

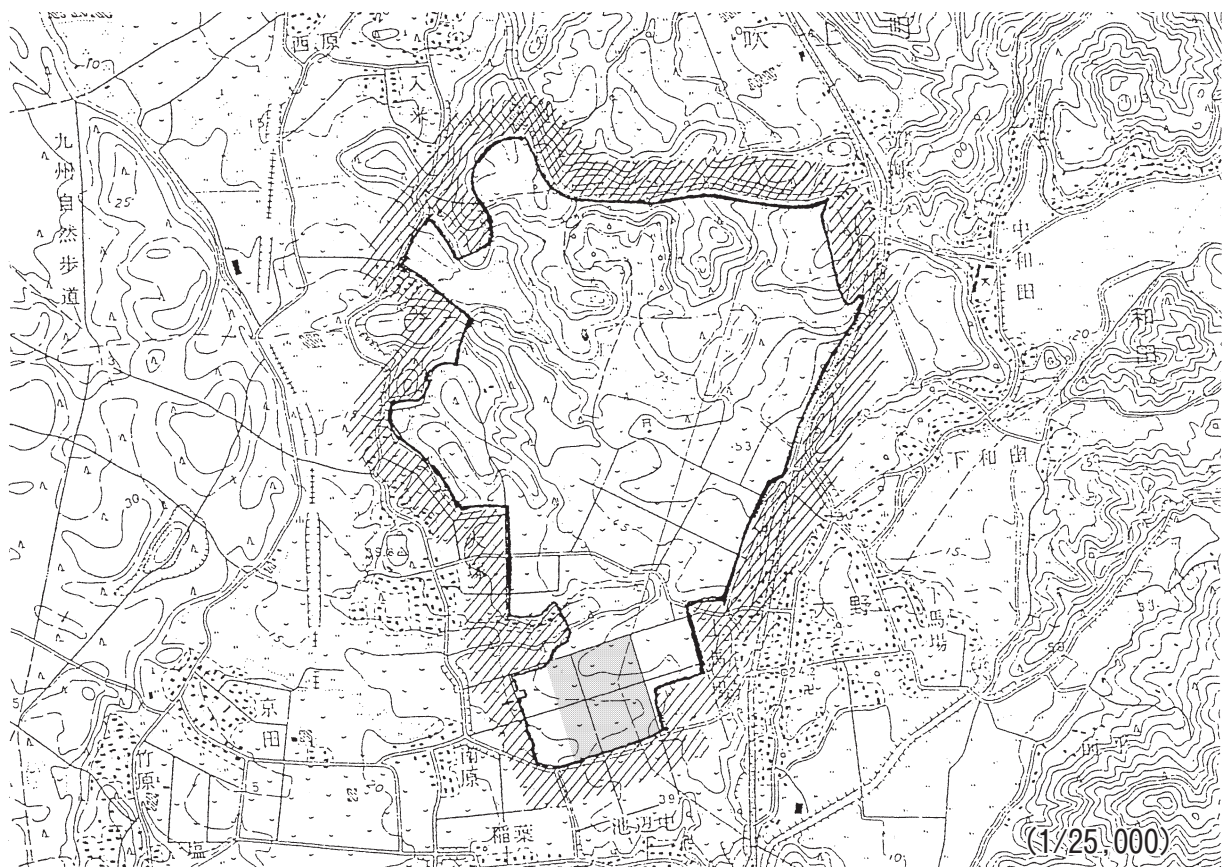
9月 D～H-12～17区トレンチ掘り下げ、9T早期集石検出、K～L-5～8区トレンチ掘り下げ、P～R-8～9区Ⅲ層掘り下げ、トレンチ掘り下げ

10月 P～R-8～9区トレンチ掘り下げ

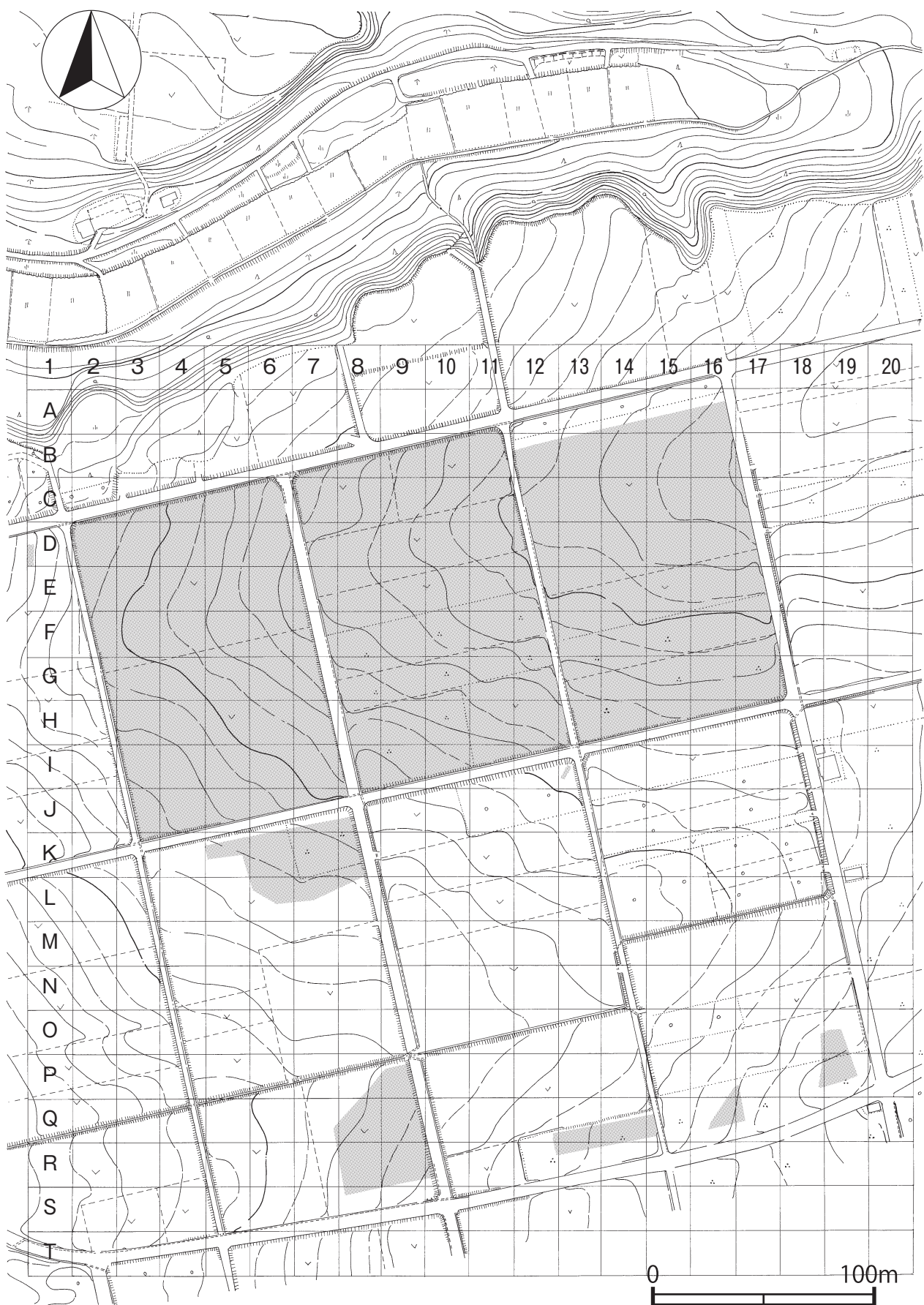
平成16年

1月 C～D-12～16区Ⅳ層掘り下げ、集石・柱穴列検出、A～C-16～17区Ⅴ～Ⅷ層掘り下げ、O～P-19区、P～Q-16区、Q-13～15区表土剥ぎ、トレンチ掘り下げ、Ⅲ～Ⅳ層掘り下げ、I-13区トレンチ掘り下げ

2月 B～C-15～16区、B-13～14区Ⅶ～Ⅷ層



第1図 中尾遺跡位置図



第2図 中尾遺跡地形図

掘り下げ，C～D－12～13区Ⅲ～Ⅳ層掘り下げ，集石遺構検出，F～H－8～12区トレンチ掘り下げ，落とし穴状遺構検出，トレンチ拡張精査，I～J－4～6区トレンチ掘り下げ

第2節 遺跡の層序

中尾遺跡は，大野原台地の南側に位置しており，農業開発総合センター遺跡群の最南端部になる。その層序は，農業開発総合センター遺跡群における標準的な層序と同様である。

土層断面図とコンター図から，旧地形は八つ手状の尾根をもつ台地であったと考えられる。昭和40年代の圃場整備で，尾根部分の削平・谷部の埋め立てが行われ，現在は緩やかに傾斜するほぼ平坦な地形である。

削平の影響で，表土直下にV～X層が検出される箇所もみられた。なお，工事深度に応じた調査のため，全面掘り下げはB～D－9～11区のみで，コンター図もこの範囲のみ作成している。

主な時代と包含層，遺構・遺物は以下の通りである。

- ・弥生時代～古墳時代初期（Ⅱ層）
成川式土器
- ・縄文時代後～晩期（Ⅲ～Ⅳ層）
集石遺構・柱穴列・掘立柱建物跡・土坑
土器・石器
- ・縄文時代早期（Ⅳ層）
集石遺構
土器・石器
- ・縄文時代草創期（Ⅶ～Ⅷ層）
集石遺構・連穴土坑・落とし穴状遺構・土坑
土器・石器
- ・旧石器時代（Ⅷ層）
落とし穴状遺構・土坑
石器

第3節 発掘調査の方法及び概要

中尾遺跡は，東西に延びた馬の背状の小台地に立地しており，南北及び西方向に傾斜している。北側

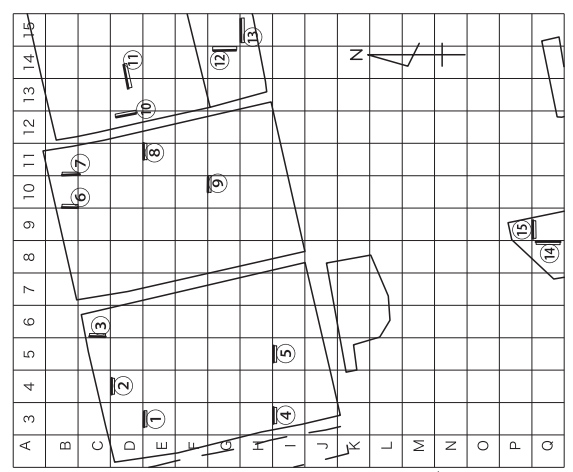
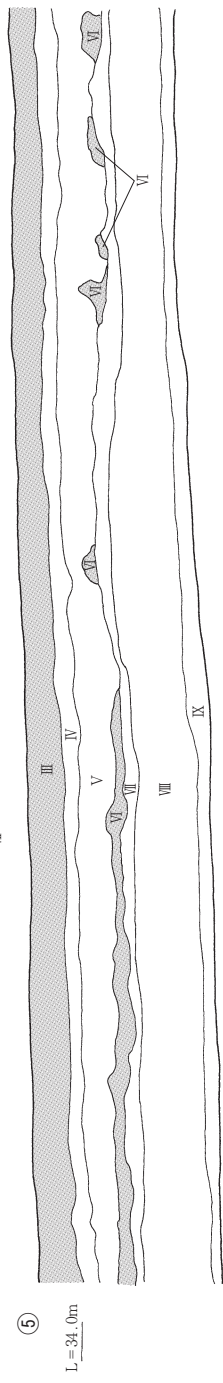
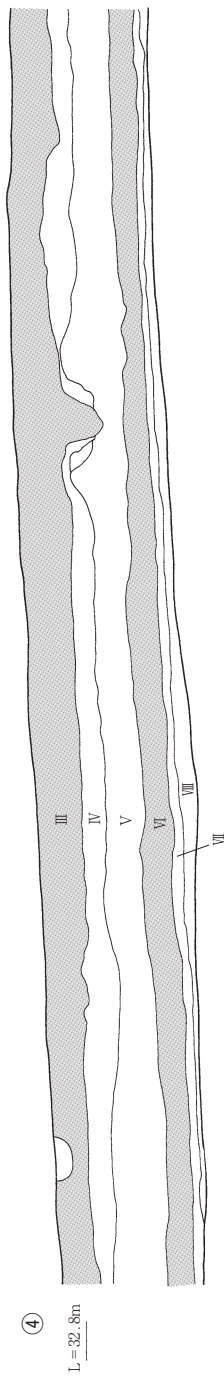
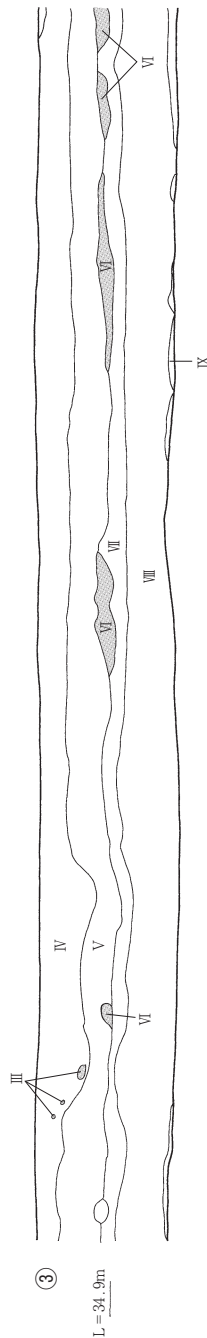
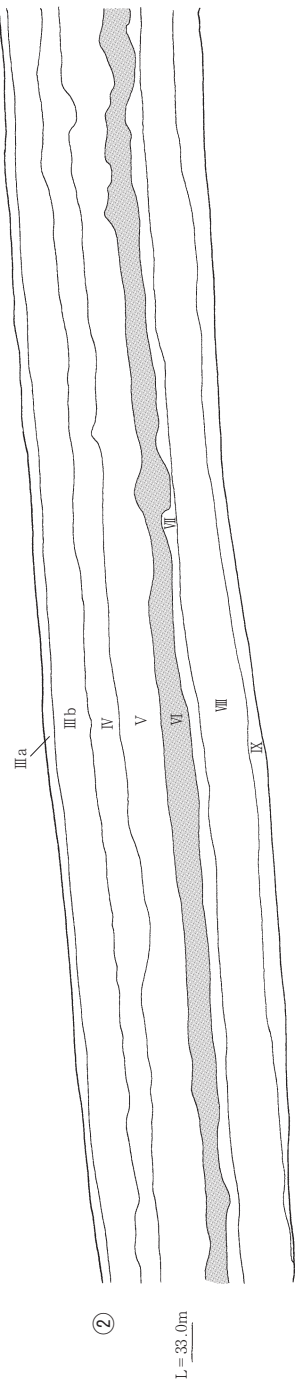
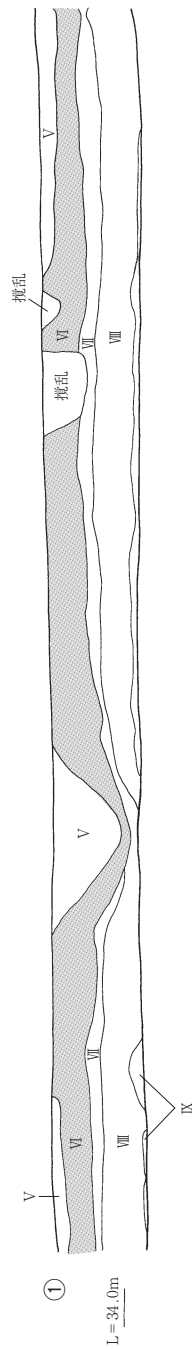
は頭無迫田遺跡へと続き，急激に谷へ落ちる地形である。西方向へは，やや緩やかに傾斜して，南原内堀遺跡に続いている。東側には，北から市堀遺跡，加治屋堀遺跡が隣接している。南側へは緩やかに傾斜して，農業開発総合センター遺跡群調査区外へと続いている。

調査前の現状は，畑地として利用されていた。発掘調査は，公共座標Ⅱ系にあわせ一辺20mの調査区域（グリッド）を設定し，遺跡地内の北側からA・B・C…，西側から1・2・3…とした。A－1区の北西地点で，X座標－169.120，Y座標－62.560になる。調査面積は，平成13年度が約18,000㎡，平成15年が約7,000㎡である。調査方法は，表土を重機で掘り下げ，その後，人力での掘削を行った。旧石器時代と縄文時代草創期・早期・後期・晩期の遺構・遺物，弥生時代～古墳時代の遺物が，検出・発見された。

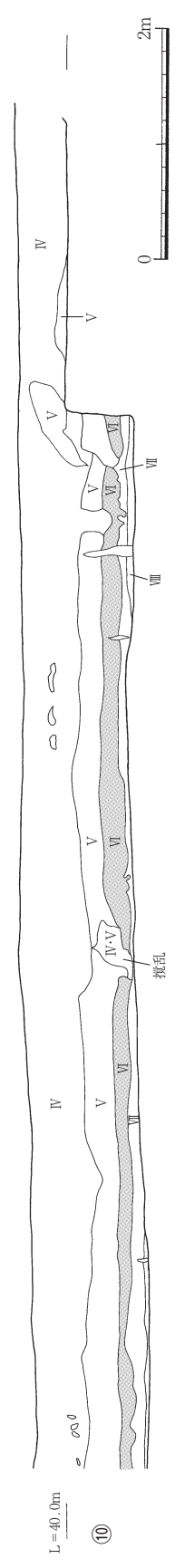
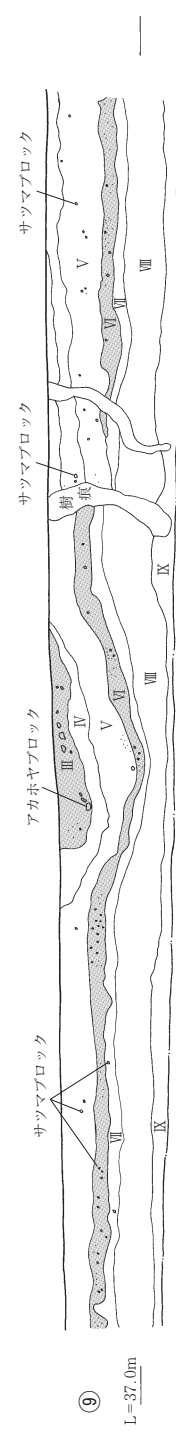
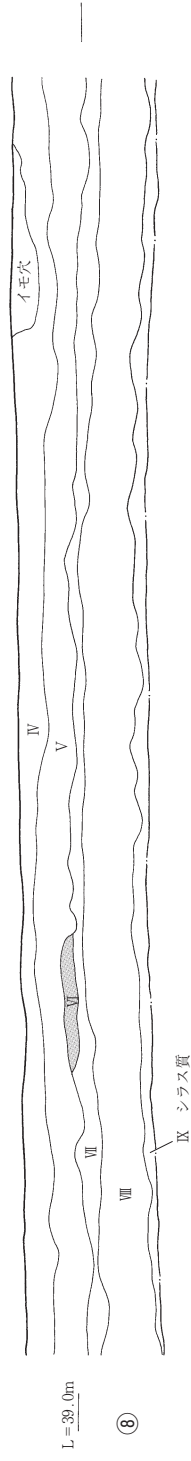
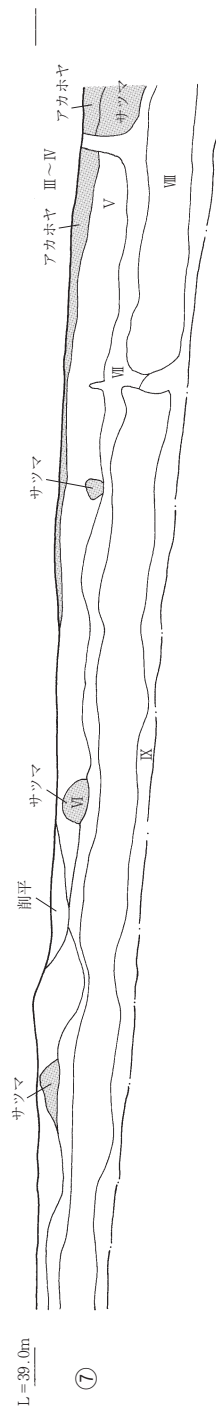
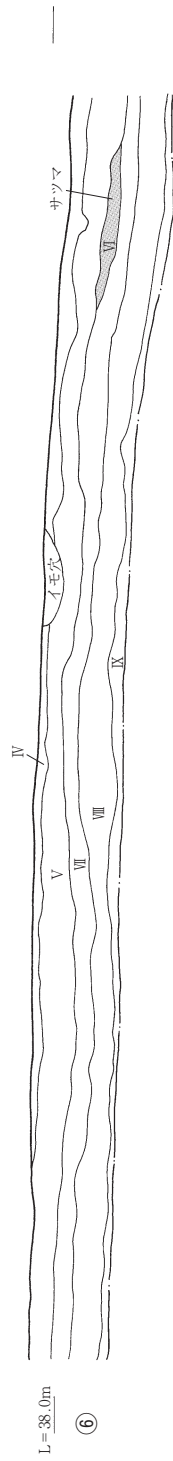
表土を除去したところ，一部分はV～X層が露出していた。また，工事掘削深度と傾斜した地形，圃場整備に伴う削平と埋め立ての関係から，調査区南側は南端隅部のみの調査となり，調査深度の大きい調査区北側が調査の中心になった。調査区北側では，B－9～D－11区はⅨ層面まで調査されたが，その他の区域は工事掘削深度に応じて，Ⅳ・Ⅴ・Ⅷ層上面までの調査である。調査区南側は，P－10区，P～Q－16区，P～Q－8～9区で下層確認トレンチ設定し調査した。

調査区北側では，旧地形の馬の背状の尾根北側で旧石器が出土した。尾根伝いに縄文草創期の土器と石斧を中心とした石器，頁岩の剥片が出土し，集石遺構と連穴土坑，落とし穴状遺構を検出した。また，縄文時代早期の土器・石器も出土している。調査区中央部では，縄文晩期の掘立柱建物跡と柱穴列を検出した。下層確認トレンチからは，調査区中央部で旧石器時代の落とし穴状遺構を検出し，調査区南側ではナイフ形石器が出土している。

なお，南原内堀遺跡（既刊行）の一部遺物が，中尾遺跡の遺物とされていたため，本報告書に掲載している。



第3図 土層断面図1



第4図 土層断面図2



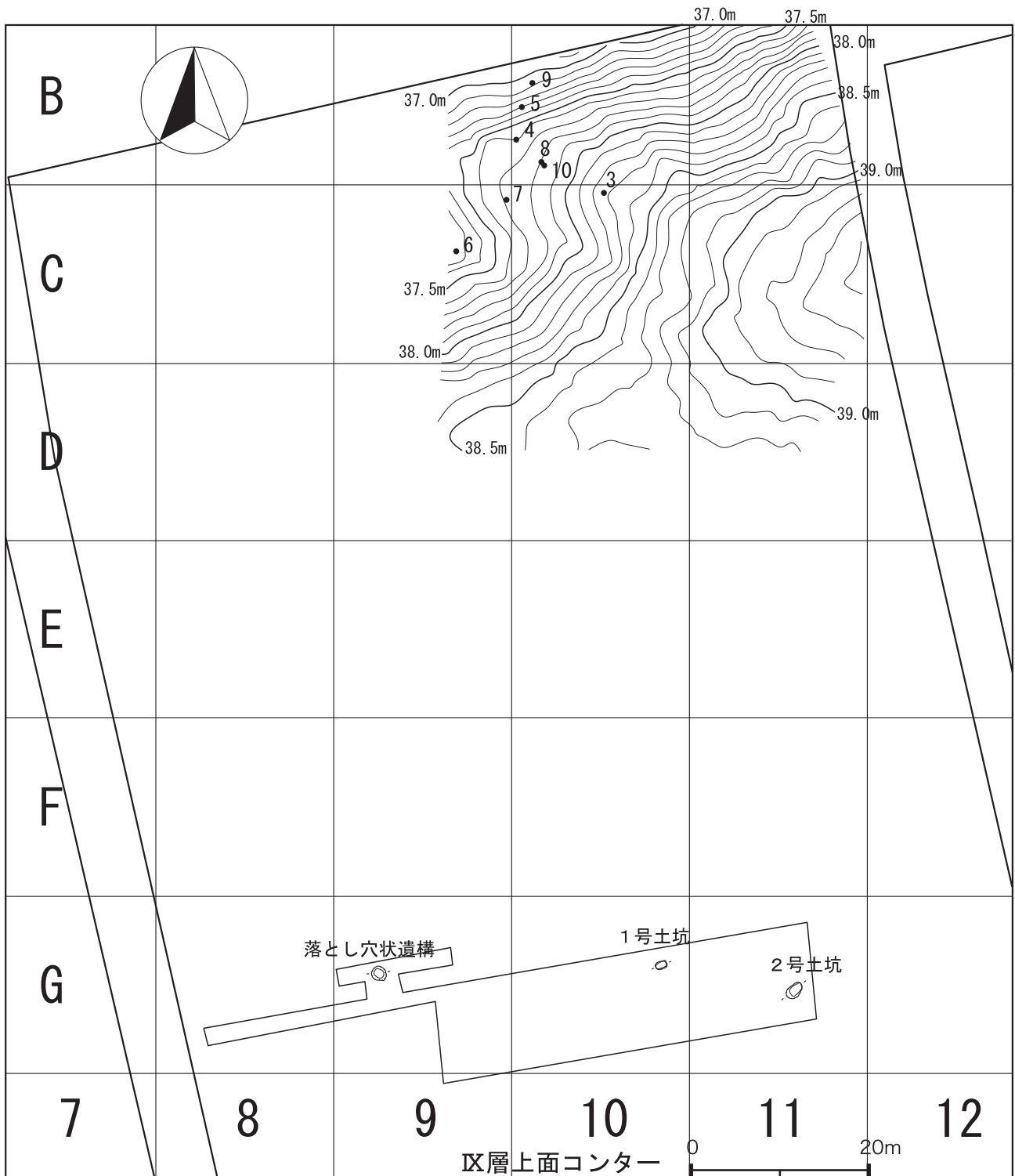
第5図 土層断面図3

第4節 旧石器時代の調査

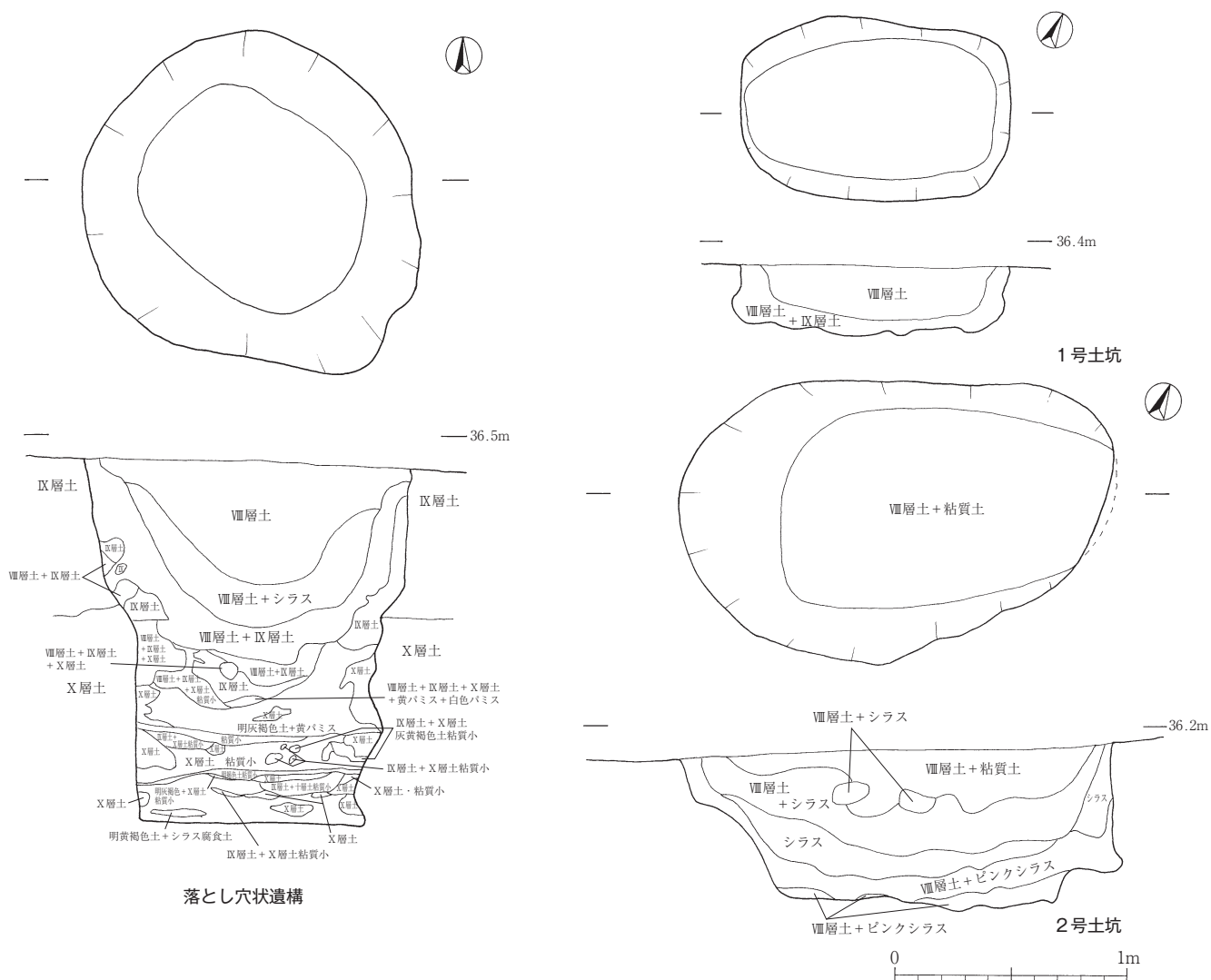
旧石器時代は，Ⅷ層から下位の層に該当する。落とし穴状遺構1基と土坑2基が検出された。Ⅷ層は縄文時代草創期とも重なり，旧石器時代と考えられる石器と縄文草創期土器が混在して出土している。Ⅷ層出土の石器を旧石器時代と縄文時代草創期に選

別することは困難であり，Ⅷ層出土遺物の中から，ナイフ形石器と台形石器，三稜尖頭器，両面加工尖頭器を，旧石器時代の遺物として本節に掲載している。

調査区中央部に近い，G－9区の下層確認トレンチからは，深さ1.5m超の落とし穴状遺構が検出さ



第6図 旧石器時代 遺構・遺物分布図



第7図 旧石器時代 遺構

れた。

周辺を拡張して調査したが、1基のみの検出であった。北側に隣接する頭無迫田遺跡でも、同様の落とし穴状遺構が1基のみ検出されている。遺物は頭無迫田遺跡に隣接するB～C-9～10区で三稜尖頭器などが出土し、調査区南西部のQ-8～9区の下層確認トレンチでは、ナイフ形石器が出土している。

1 遺構

遺構は、落とし穴状遺構1基と土坑2基が確認された。

(1) 落とし穴状遺構 (第7図)

落とし穴状遺構は、G-9区のIX層上面で検出された。平面形は円形に近い楕円形で、底面は隅丸の

方形を呈している。大きさは長径1.57m、短径1.42m、である。底面は長径1.03m、短径0.82mである。深さは検出面から1.56mである。底面はほぼ平坦で小ピット等は確認されなかった。

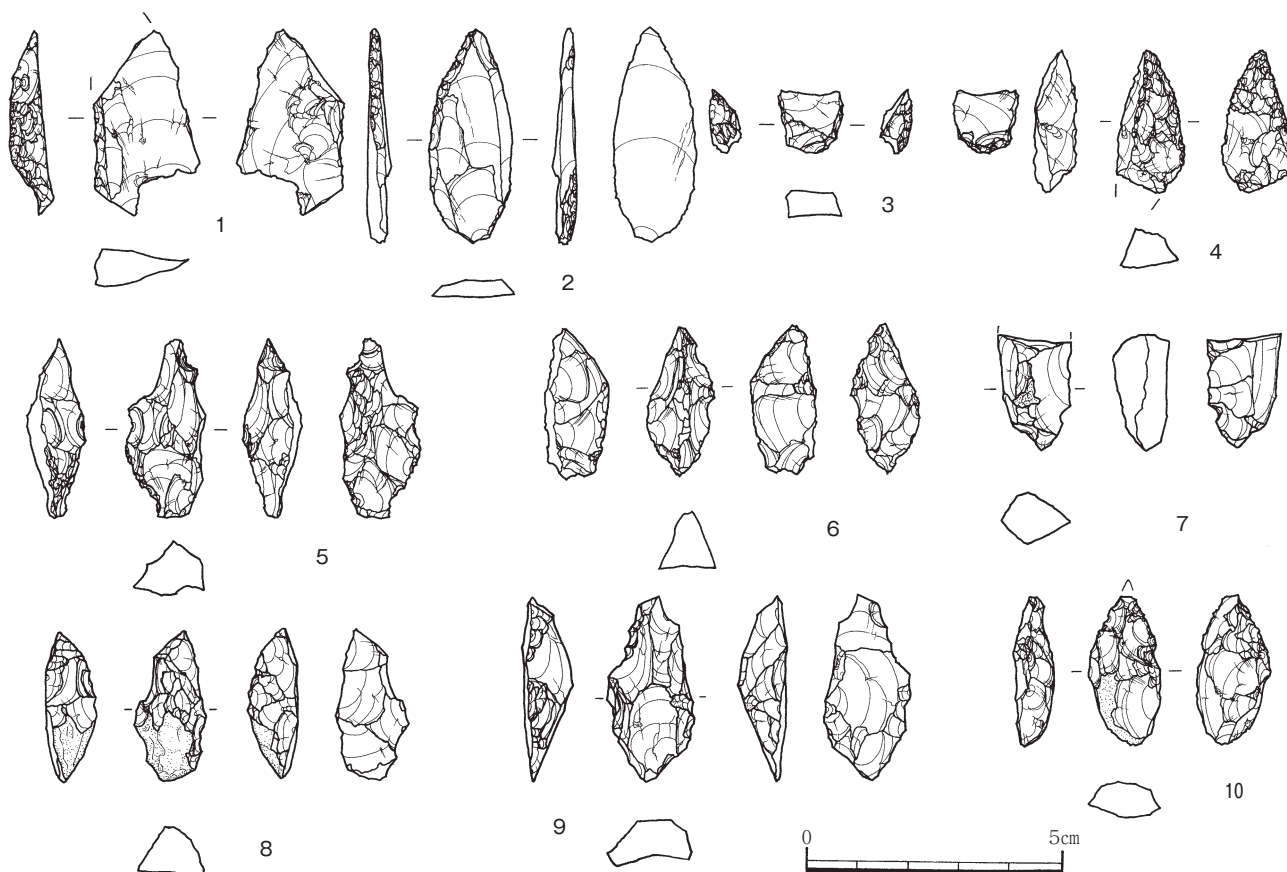
(2) 土坑

1号土坑 (第7図)

G-10区IX層上面で検出された。平面形は隅丸の長方形で、大きさは長径1.16m、短径0.80m、検出面からの深さは0.31mである。底面はわずかな凸凹が見られる。

2号土坑 (第7図)

G-11区IX層上面で検出された。平面形は楕円形で、長径1.85m、短径1.23m、深さは検出面から



第8図 旧石器

0.67mである。短軸方向の掘り込みが、片方は段を持つ形で緩やかであるが、もう片方は垂直に近く挟るように掘り込んでいる。

2 遺物

石器10点を図化し掲載した。3～10は、旧石器時代の遺構・遺物が多数確認された頭無迫田遺跡に隣接するB～C-9～10区から出土している。なお、黒曜石の分類については、P36を参照されたい。

(1) ナイフ形石器 (第8図 1～2)

1は西側に隣接する南原内堀遺跡の9トレンチ内から出土した。左側縁にブランディングが施されている。基部が欠けている。2は調査区南端に位置するQ-8区内の下層確認トレンチから出土した。薄手の木の葉形剥片に左側縁と基部へブランディングが施されている。

(2) 台形石器 (第8図 3)

3は、剥片を横位に利用し細かいブランディングを施された部分を両側縁にしたものである。

旧石器時代 石器観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	出土区	層	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	遺物番号	備考
第8図	1	ナイフ形石器	南原内堀	VIII	黒曜石C	3.65	2.10	0.90	3.98	南原内堀1339	P13
	2	ナイフ形石器	Q-8	VII	頁岩	4.25	1.70	0.50	3.04	2934	下層確認トレンチ
	3	小型台形石器	C-10	VII	黒曜石C	1.30	1.30	0.35	0.91	2104	
	4	三稜尖頭器	B-10	VII	黒曜石A	2.80	1.35	0.80	2.50	1183	レンズ状
	5	三稜尖頭器	B-10	VII	黒色安山岩	3.60	1.50	1.10	4.22	1164	
	6	三稜尖頭器	C-9	VII	黒曜石C	3.05	1.29	1.28	3.45	2154	
	7	三稜尖頭器	C-9	VII	黒曜石C	1.40	130.00	1.02	3.24	2115	基部
	8	三稜尖頭器	B-10	VII	黒曜石C	3.05	1.40	0.90	2.93	1748	
	9	三稜尖頭器	B-10	VII	黒色安山岩	3.70	1.75	0.75	4.08	2085	
	10	両面加工尖頭器	B-10	VII	黒曜石C	2.90	1.40	0.80	2.99	1225	

(3) 三稜尖頭器 (第8図 4～9)

4～9は三稜尖頭器である。4は裏面の剥離面をほぼ残し、右側縁および基部への二次加工を施されている。7は基部のみ残存している。

(4) 両面加工尖頭器 (第8図 10)

薄手の剥片の両面と周辺に調整を施し、先端部を作り出している。

第5節 縄文時代の調査

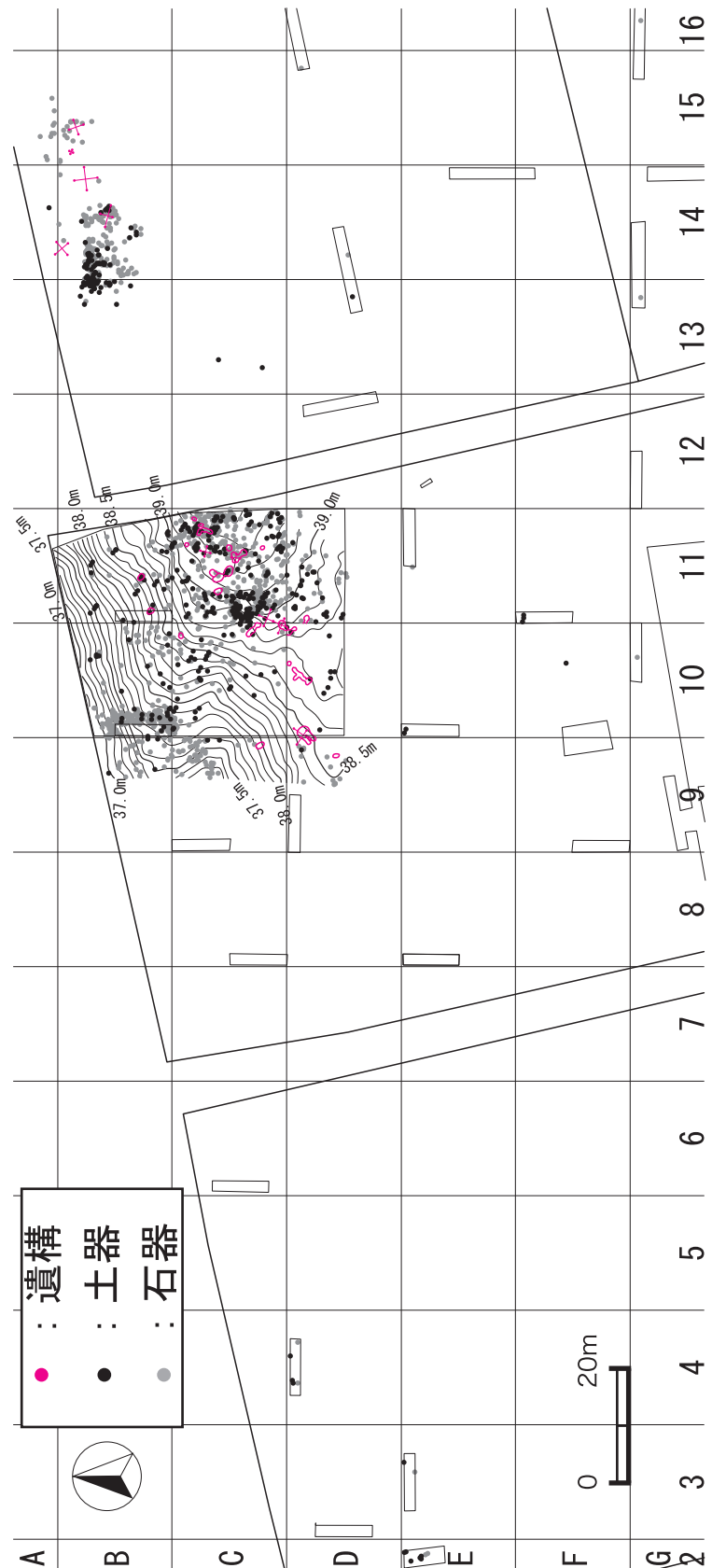
本遺跡では縄文時代草創期と晩期の遺構数および遺物数が際立っている。調査区北側で、この時期の集石遺構と連穴土坑、落とし穴状遺構、土坑が検出されている。その周辺からは隆帯文土器と石器、剥片が出土している。早期は、土器を中心に出土している。後期～晩期は、土器・石器とも出土量が増え、掘立柱建物跡と柱穴列が多数検出されている。

1 縄文時代草創期の調査

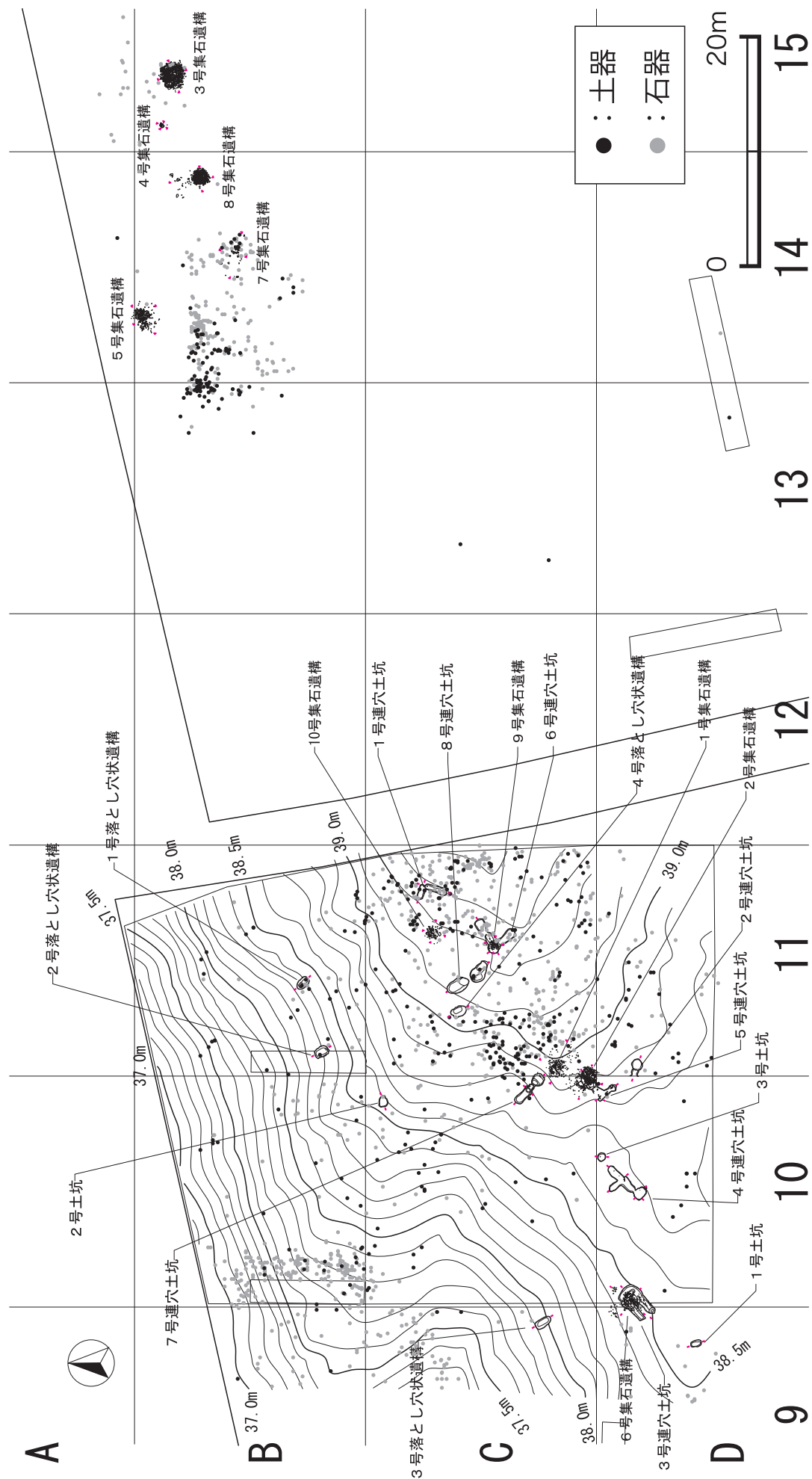
草創期では、Ⅸ層上面まで掘り下げたB～D-9～11区と、削平によりⅦ～Ⅷ層が露出したB-13～15区といった、遺構・遺物が出土している。調査区北側で集石遺構10基と連穴土坑8基、落とし穴状遺構4基、土坑3基が検出された。隆帯文土器と石器、頁岩の剥片が多く出土している。また、石器の中では石斧が多く出土している。

(1) 遺構

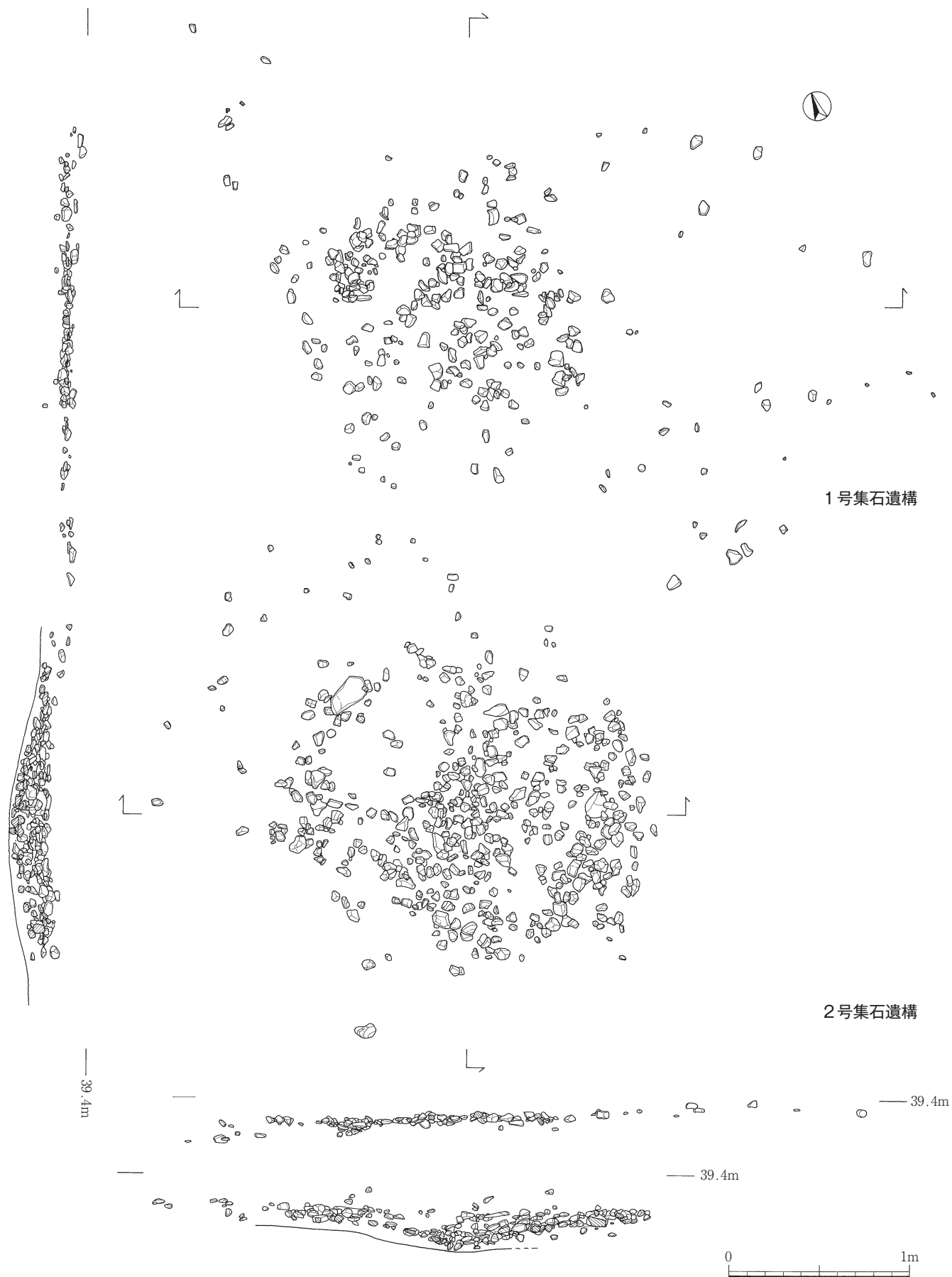
遺構は、集石遺構10基と連穴土坑8基、落とし穴状遺構4基、土坑3基が検出されている。旧地形の平坦部で集石遺構、連穴土坑、傾斜面で落とし穴状遺構が検出されている。



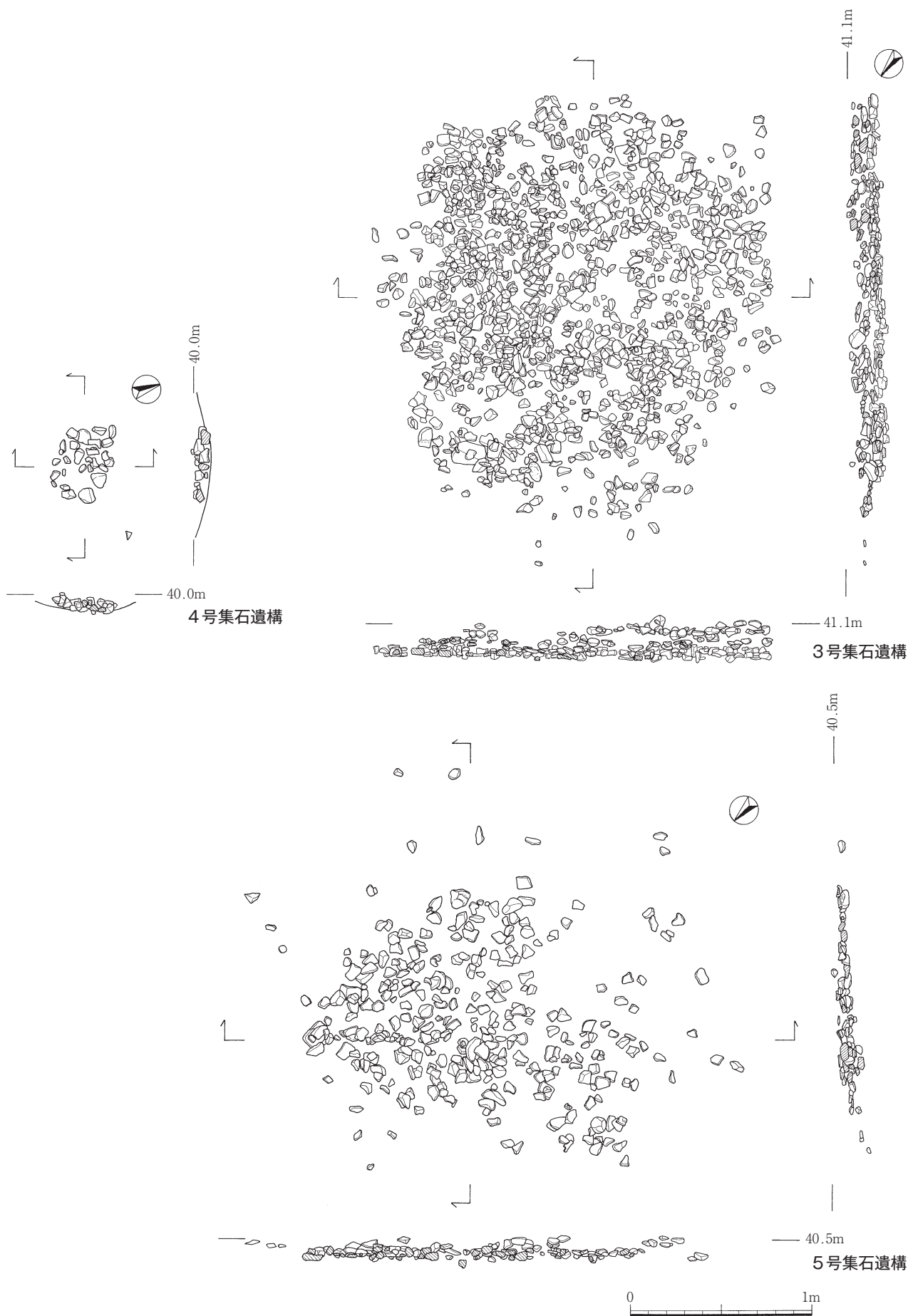
第9図 縄文時代草創期 遺構・遺物分布図



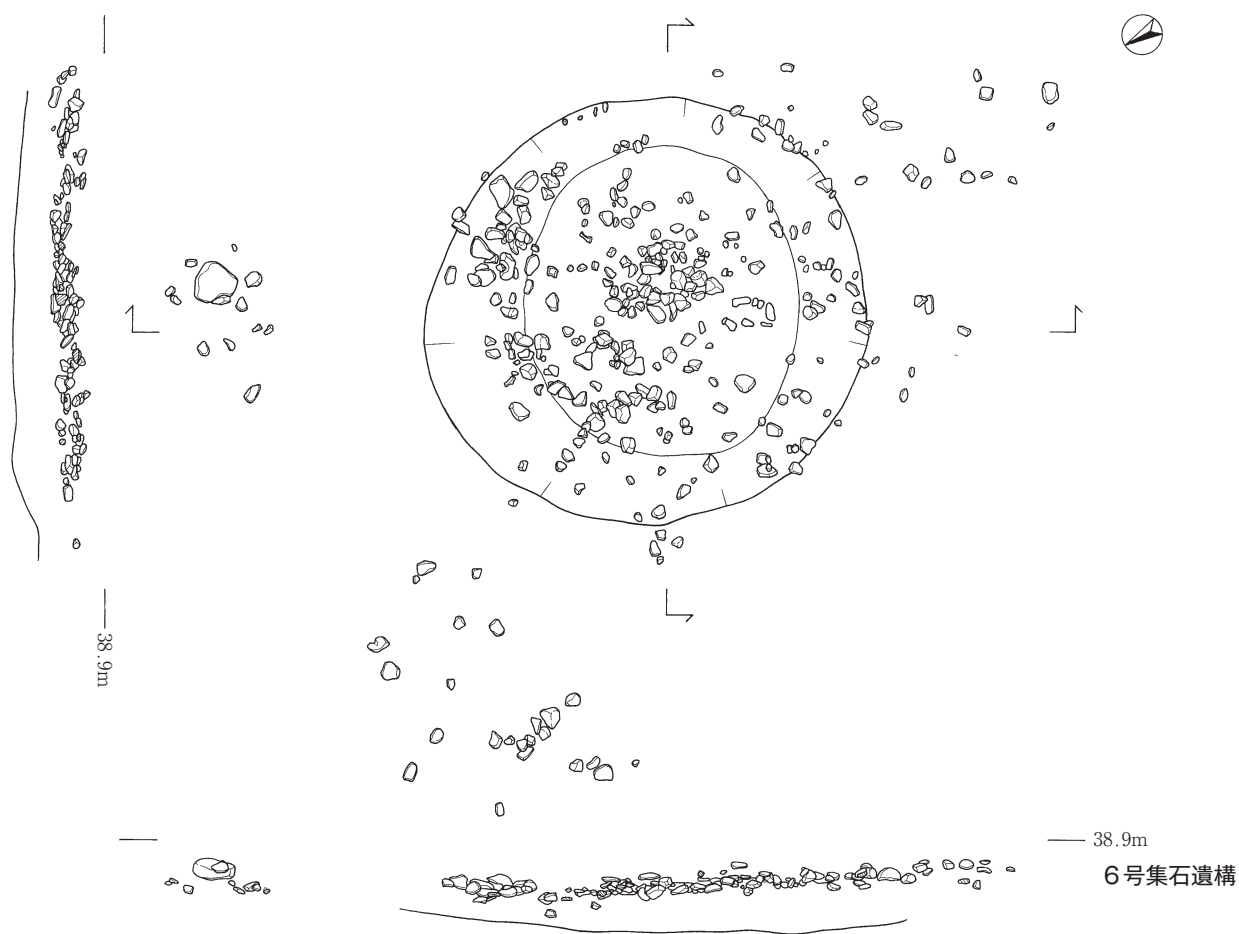
第10図 縄文時代草創期 遺構配置図



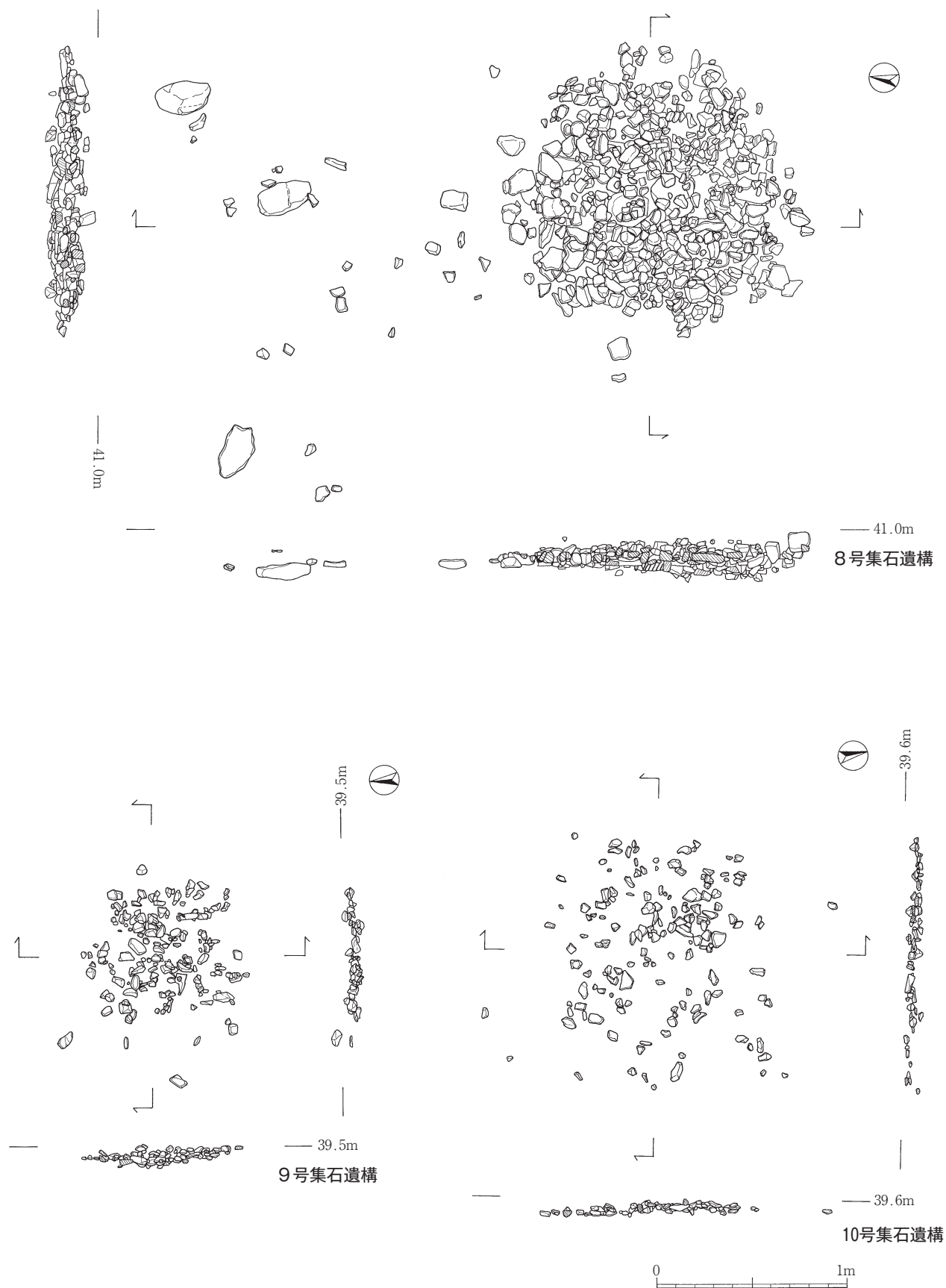
第11図 集石遺構 1



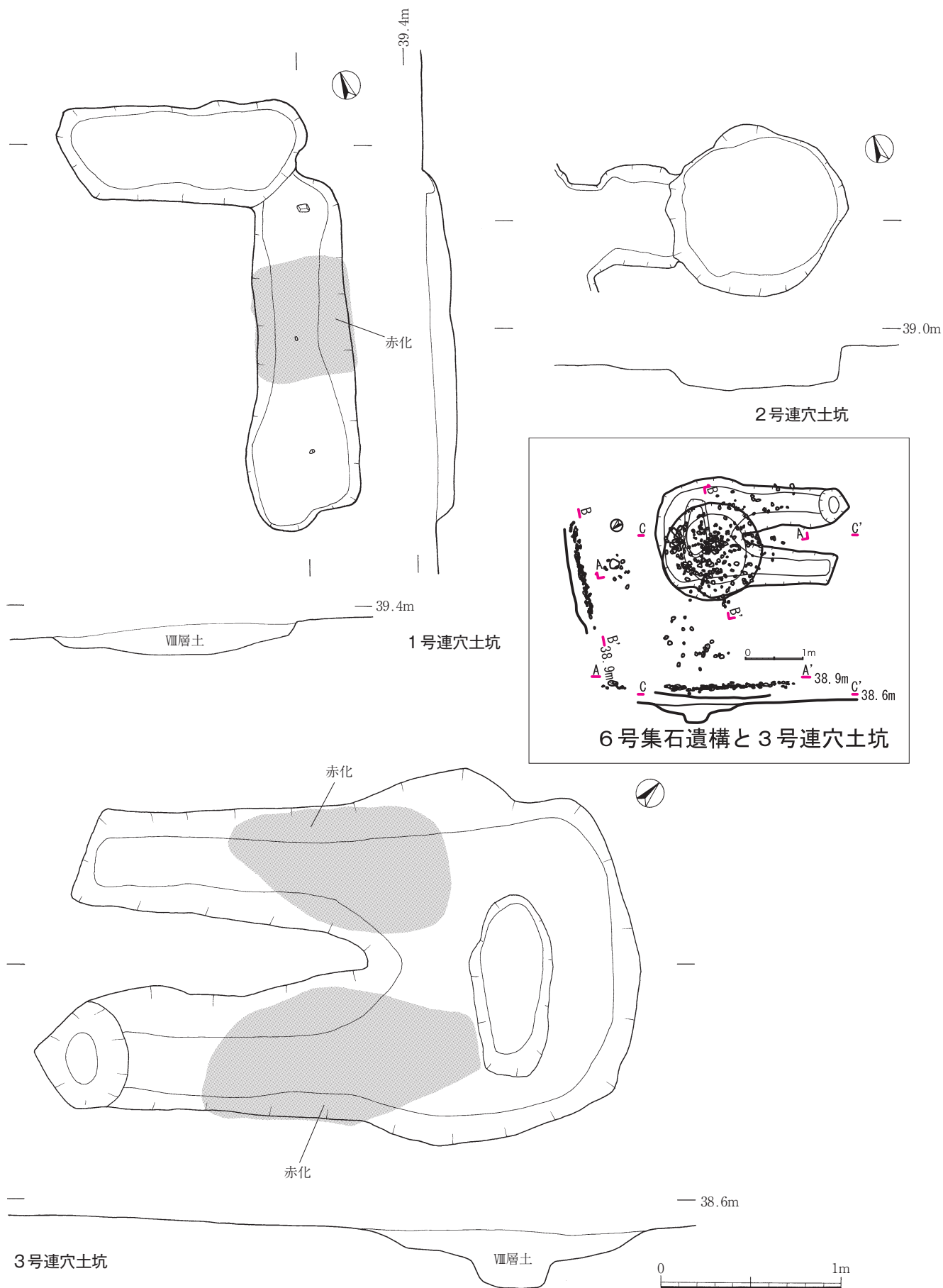
第12図 集石遺構2



第13図 集石遺構3



第14図 集石遺構 4



第15図 連穴土坑 1

①集石遺構

1号集石遺構 (第11図)

C-11区で検出された。礫数301, 平均重量76.2 gである。掘り込みは見られず, 平坦である。土器片を出土した。2号集石遺構, 7号連穴土坑と隣接している。

2号集石遺構 (第11図)

C-10~11区で検出された。礫数550, 平均重量106.9 gである。円形の掘り込みがあり, 直径1.6mで, 検出面からの深さは0.25mである。土器片・石器を出土した。1号集石遺構と隣接し, 直下で5号連穴土坑が検出された。

3号集石遺構 (第12図)

B-15区で検出された。礫数1175, 平均重量97.6 gである。直径2.3mの円形に集中している。掘り込みは見られず, 平坦である。

4号集石遺構 (第12図)

B-15区で検出された。礫数29, 平均重量155.5 gである。5cm大の礫で構成されている。検出面からの深さ0.1mの掘り込みがある。

5号集石遺構 (第12図)

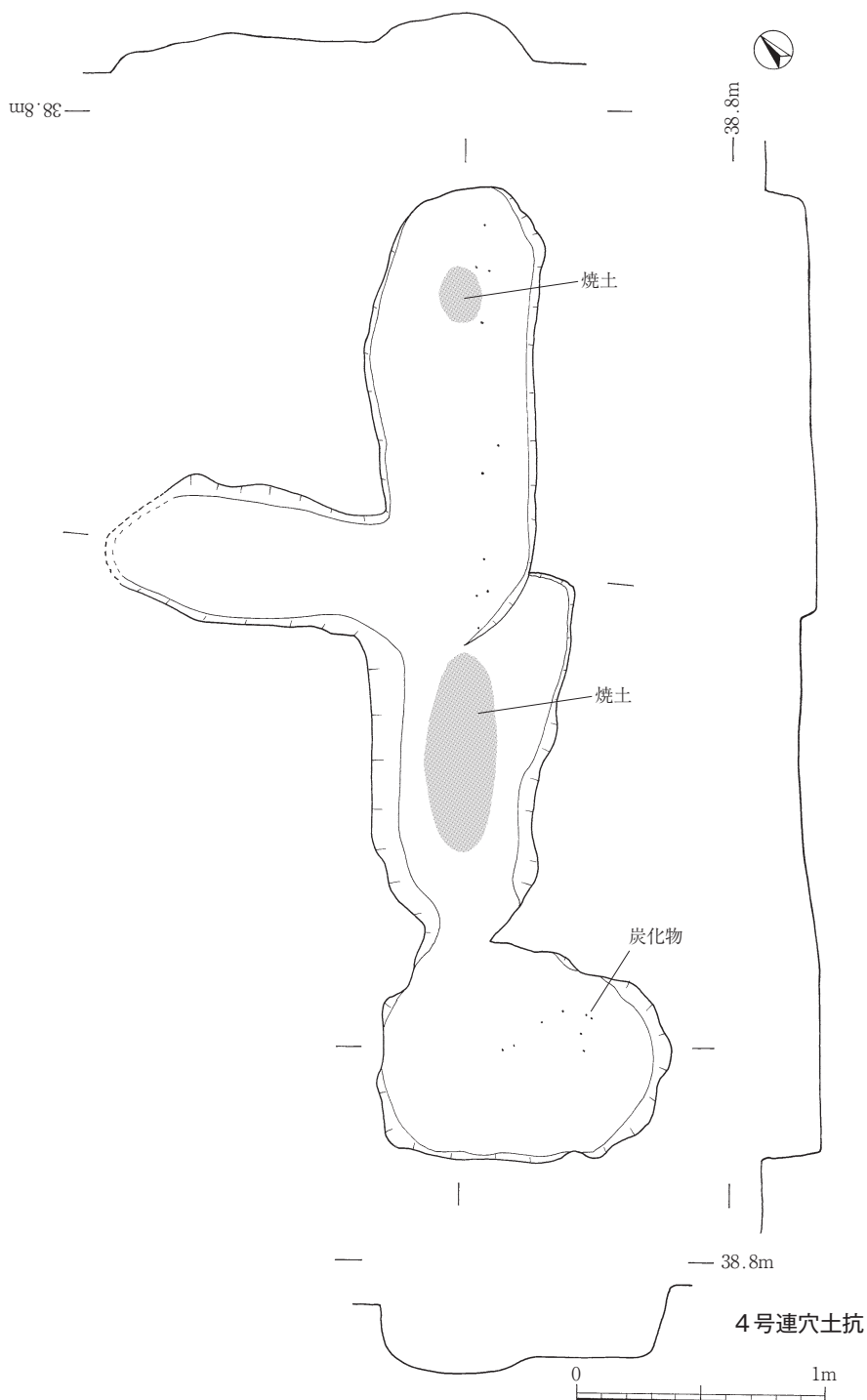
A~B-14区で検出された。礫数320, 平均重量110.4 gである。掘り込みは見られず, 平坦である。

6号集石遺構 (第13図)

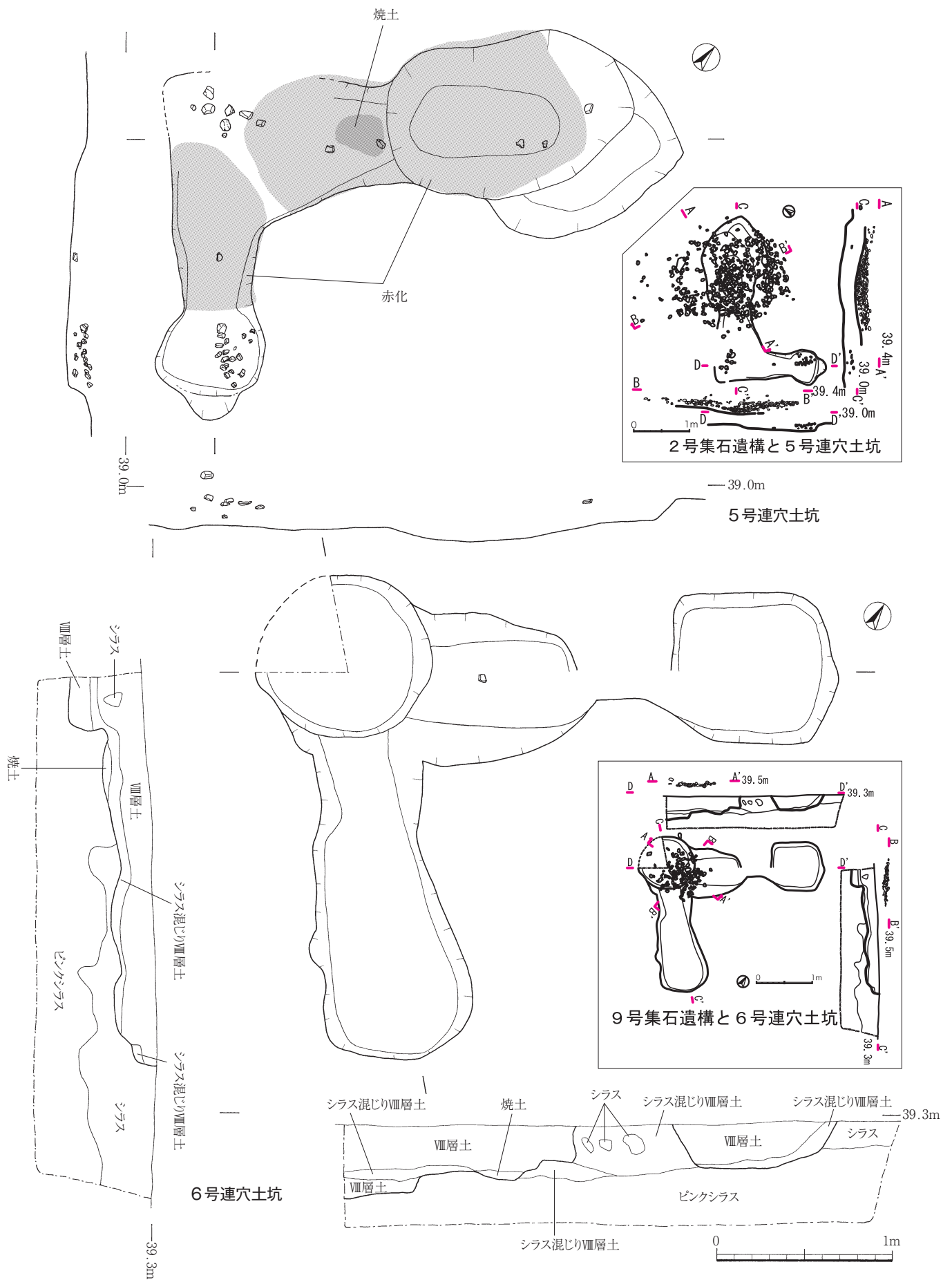
D-9~10区で検出された。礫数335, 平均重量52.0 gである。円形の掘り込みがあり, 直径1.8mで, 検出面からの深さは0.3mである。直下で3号連穴土坑が検出された。

7号集石遺構 (第13図)

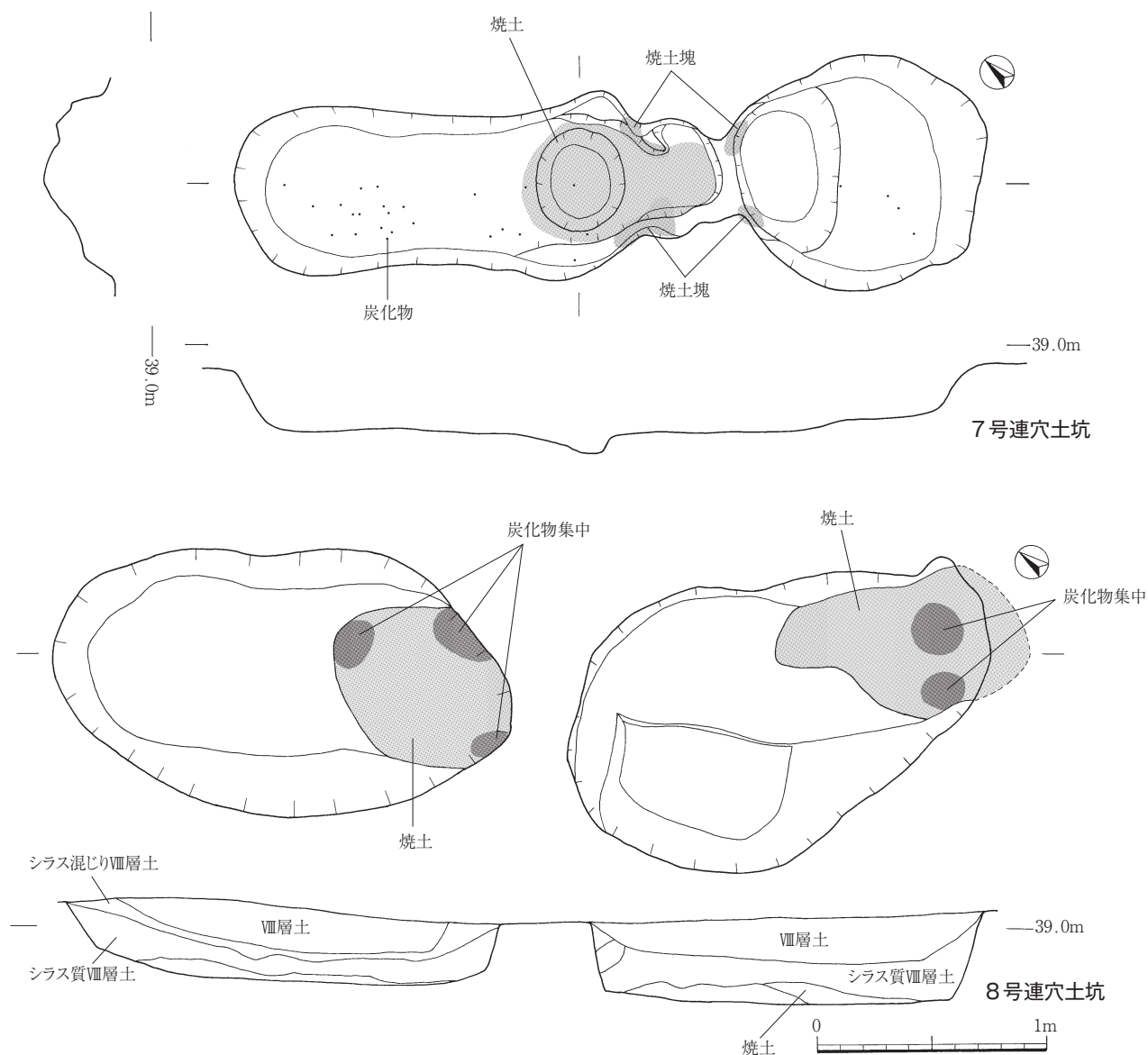
B-14区で検出された。礫数50, 平均重量371.7 gである。15cm大の礫で構成されている。直径0.7mの円形に集中している。掘り込みは見られず, 平坦である。



第16図 連穴土坑2



第17図 連穴土坑3



第18図 連穴土坑 4

8号集石遺構（第14図）

B-14区で検出された。礫数602，平均重量224.6gである。1.6×1.4mの楕円形に集中している。掘り込みは見られず，平坦である。

9号集石遺構（第14図）

C-11区で検出された。礫数178，平均重量56.8gである。0.7×0.6mの楕円形に集中している。掘り込みは見られず，平坦である。直下で6号連穴土坑が検出された。

10号集石遺構（第14図）

C-11区で検出された。礫数158，平均重量56.5gである。掘り込みは見られず，平坦である。

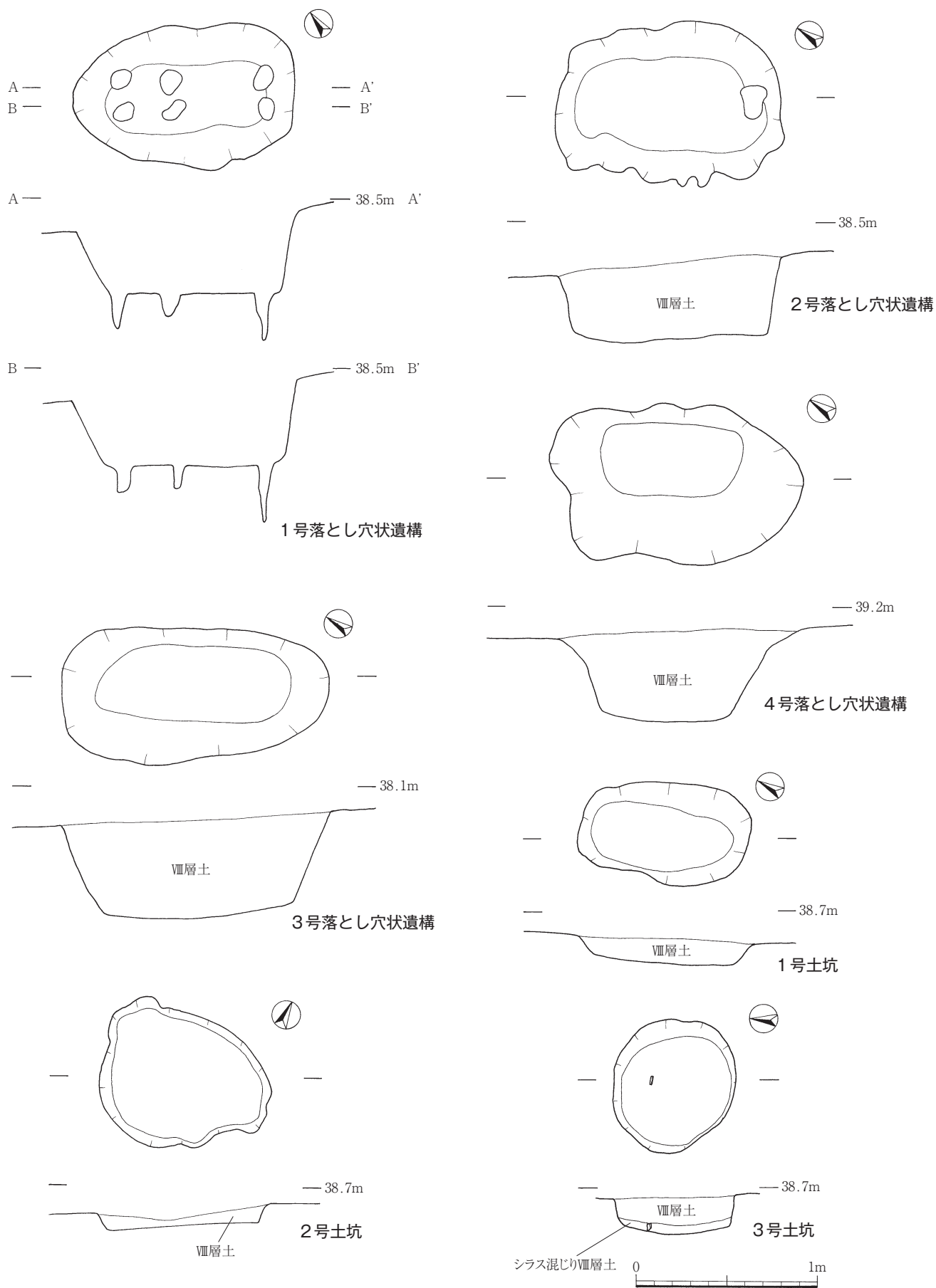
②連穴土坑

1号連穴土坑（第15図）

C-11区で検出された。平面形はL字形で，大きさは，長辺の長径1.9m，短径0.6m，検出面からの深さは0.15mで，短辺の長径1.7m，短径0.6m，検出面からの深さは0.15mである。底面は平坦である。土器片を出土した。

2号連穴土坑（第15図）

D-11区で検出された。一部削平されている。平面形は円形で，大きさは直径0.9m，検出面からの深さは0.25mで，長さ0.7m以上，深さ0.1mの土坑が接続している。底面は平坦である。



第19図 落とし穴状遺構・土坑

3号連穴土坑（第15図）

D-9～10区で検出された。平面形はコの字型で、連結部直上では6号集石遺構が検出された。大きさは、長径3.2m、短径0.6m、検出面からの深さは0.2mと、長径2.9m、短径0.6m、検出面からの深さは0.2mの2つの平行する土坑が、片方の端部で接続している。接続部の長さは2.1mで、中心部に長径1.2m、短径0.3m、検出面からの深さは0.35mの掘り込み面がある。

4号連穴土坑（第16図）

D-10区で検出された。平面形はト字形で、大きさは長辺の長径3.9m、短径0.7m、検出面からの深さは0.2mで、短辺の長径1.3m、短径0.6m、検出面からの深さは0.1mである。長辺は、2つの楕円形の炉穴と円形の炉穴が直線的に連続している。円形の炉穴と楕円形の炉穴の結合部には、ブリッジの下半分が残存していた。底面は平坦である。炭化物と土器片を出土した。

5号連穴土坑（第17図）

C～D-10区で検出された。平面形はL字形で、長辺の端部直上では2号集石遺構が検出された。大きさは、長辺の長径2m、短径0.4m、検出面からの深さは0.15mで、短辺の長径1.6m、短径1.3m、検出面からの深さは0.1mである。底面は平坦である。礫を33点出土した。

6号連穴土坑（第17図）

C-11区で検出された。平面形はL字形で、連結部直上では9号集石遺構が検出された。大きさは、長辺の長径3.3m、短径0.8m、検出面からの深さは0.4mで、短辺の長径2.7m、短径0.8m、検出面からの深さは0.2mである。

7号連穴土坑（第18図）

C-10区で検出された。平面形は隅丸方形と円形が接続している。大きさは長径3.3m、短径0.7m、円形部の直径1mで、検出面からの深さは0.2mである。底面は平坦である。炭化物と土器片を出土した。炭化物については放射性炭素年代別測定を行っており、年代は11620BP（修正年代11590BP）の結果を得ている。

8号連穴土坑（第18図）

C-11区で検出された。平面形は2つの楕円形で、大きさは長径2m、短径1.2m、検出面からの深さは0.2mと、長径1.8m、短径1.2m、検出面からの深さは0.3mである。削平により連結部が消失している。底面は平坦で、連結部近くには、円形の掘り込み部がある。隆帯文土器と炭化物を出土した。炭化物については樹種同定及び放射性炭素年代別測定を行っており、イネ科タケ亜科のミヤコザサ節を多く検出し、年代は11660BP（修正年代11620BP）の結果を得ている。

③落とし穴状遺構

1号落とし穴状遺構（第19図）

B-11区で検出された。平面形は楕円形で、大きさは長径1.2m、短径0.8m、検出面からの深さは0.5mである。底面は平坦で2列の小ピットが検出された。

2号落とし穴状遺構（第19図）

B-11区で検出された。平面形は隅丸方形で、大きさは長径1.2m、短径0.9m、検出面からの深さは0.4mである。底面は平坦である。

3号落とし穴状遺構（第19図）

C-9区で検出された。平面形は隅丸方形で、大きさは長径1.5m、短径0.7m、検出面からの深さは0.5mである。底面は平坦である。

4号落とし穴状遺構（第19図）

C-11区で検出された。平面形は隅丸方形で、大きさは長径1.3m、短径0.9m、検出面からの深さは0.5mである。底面は平坦である。

④土坑

1号土坑（第19図）

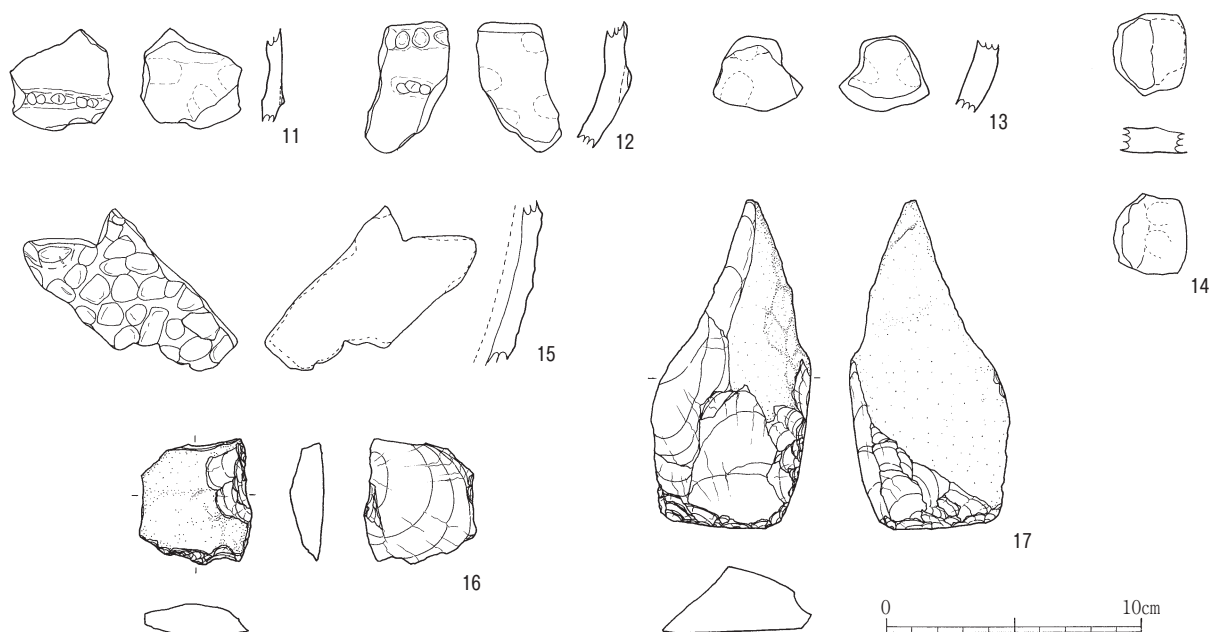
D-9区で検出された。平面形は隅丸方形で、大きさは長径1.5m、短径0.5m、検出面からの深さは0.1mである。底面は平坦である。

2号土坑（第19図）

C-10区で検出された。平面形は円形で、大きさは長径0.9m、短径0.8m、検出面からの深さは0.1mである。底面は平坦である。

3号土坑（第19図）

D-10区で検出された。平面形は円形で、大きさ



第20図 遺構内遺物

は直径0.7m，検出面からの深さは0.2mである。底面は平坦である。

⑤遺構内遺物

土器（第20図 11～15）

11，12は屈曲部近くの胴部で，稜上に隆帯文が施され，爪痕を確認できる指頭圧痕が，重ならないで施されている。後述するⅠ類土器に該当する。13は底部近くの胴部で，14は底部である。1号集石遺構で出土した。

15は胴部で，爪痕を確認できる指頭圧痕が密接に施され，隆帯文は幅広で薄くなり，条数は確認できない。後述するⅣ類土器に該当する。8号連穴土坑で出土した。

石器（第20図 16・17）

石材は頁岩と硅質頁岩である。16はスクレイパーで，下部に細かな剥離を施し，刃部を形成している。17は打製石斧未製品である。刃部の内外面に丁寧な剥離調整を施している。2号集石遺構で出土した。

縄文時代草創期 遺構内遺物（土器）観察表

挿図番号	掲載番号	層位	出土区	部位	色調(内面)	色調(外面)	胎土 石英	長石	角閃石	その他	焼成	調整(内面)	調整(外面)	類	遺物番号	備考
第20図	11	Ⅷ	C-11	屈曲部	にぶい黄褐	にぶい赤褐	○	○			良	指圧痕	指圧痕, ナデ	I	SS4-7	1号集石遺構出土
	12	Ⅷ	C-11	屈曲部	にぶい黄褐	赤褐	○	○		赤石	良	指圧痕, ナデ	ナデ	I	SS4-8	1号集石遺構出土
	13	Ⅷ	C-11	胴部	にぶい黄褐	赤褐	○	○		赤石	良	指圧痕	指圧痕, ナデ	I	SS4-10	1号集石遺構出土
	14	Ⅷ	C-11	底部	にぶい黄褐	赤褐	○	○		赤石	良	指圧痕, ナデ	ナデ	底部	SS4-5	1号集石遺構出土
	15	Ⅷ	C-11	胴部	にぶい黄褐	赤褐	○	○	○		良		指圧痕	IV	2194	8号連穴土坑出土

縄文時代草創期 遺構内遺物（石器）観察表

挿図番号	掲載番号	器種	出土区	層	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	遺物番号	備考
第20図	16	スクレイパー	C-11	Ⅷ	頁岩	4.90	4.30	1.30	32.73	SS5-2	2号集石遺構
	17	打製石斧未製品	C-11	Ⅷ	硅質頁岩	12.80	6.20	2.60	200.00	SS5-3	2号集石遺構

(2) 遺物

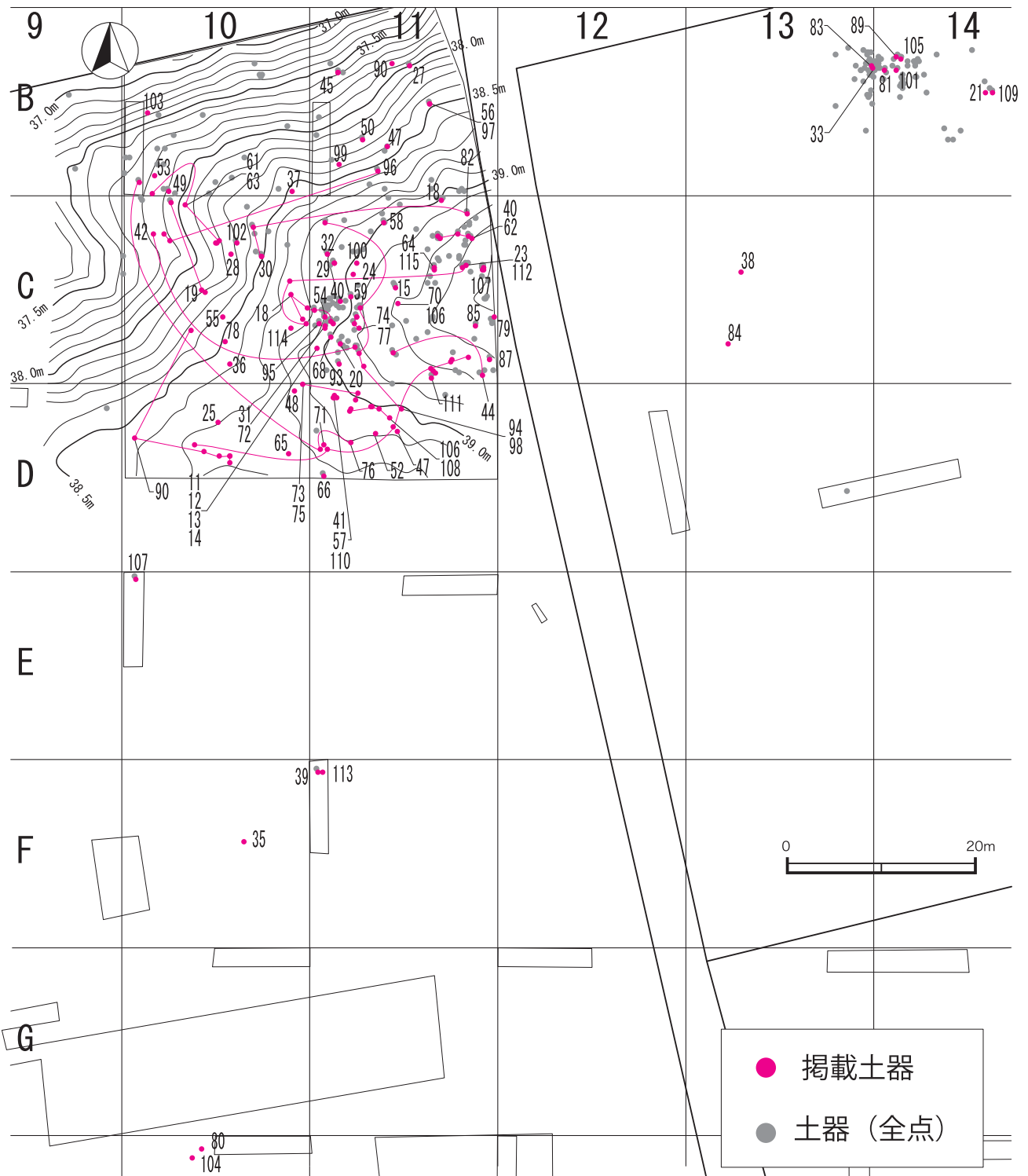
土器102点と石器57点を図化し掲載した。

① 土器

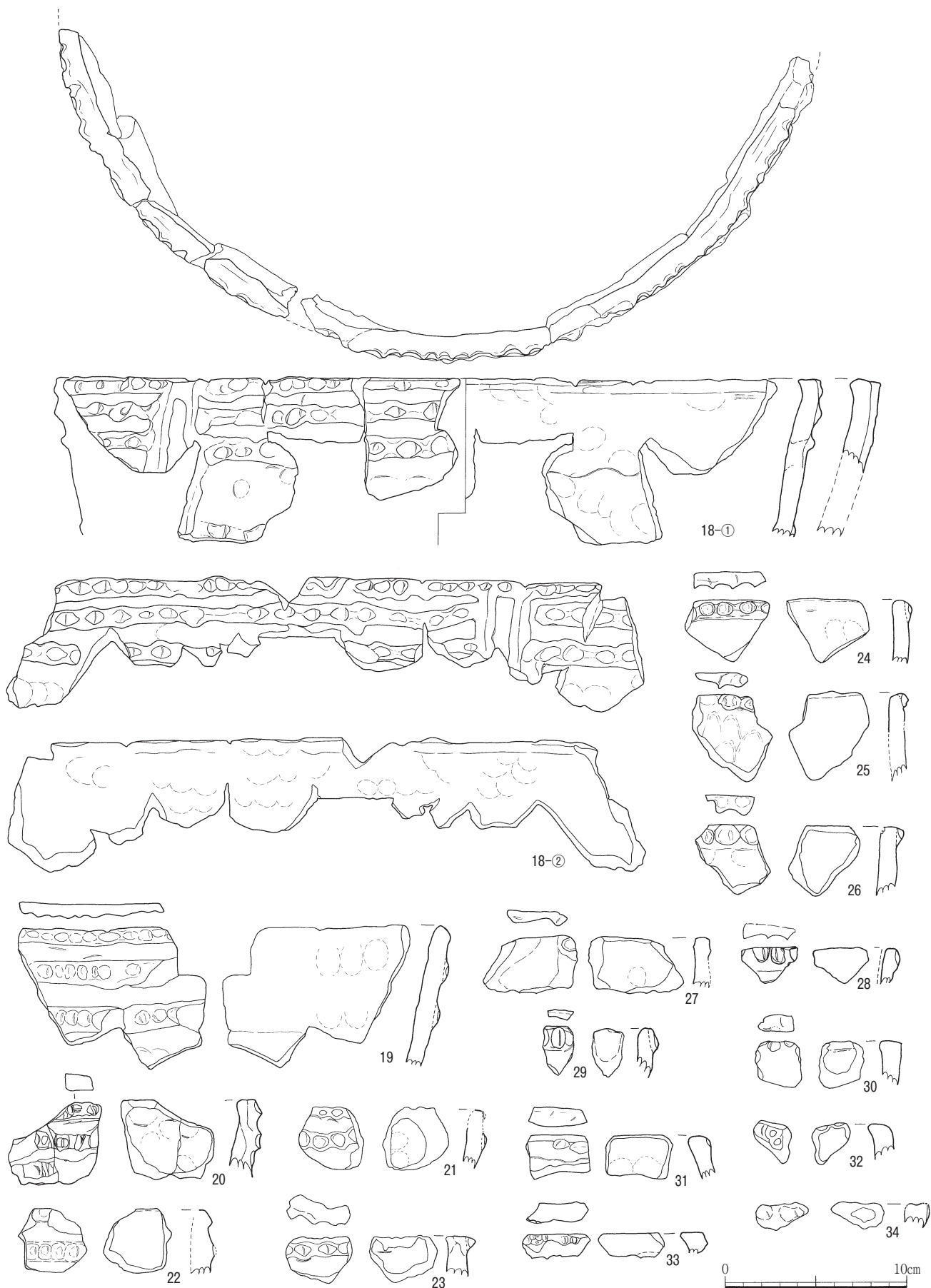
B～D-10～11区と、B-13～14区を中心に出土した。断片が多く、隆帯文の条数と全体的な器形を確定できる資料を得られなかったので、隆帯文の形

状から以下のように分類した。

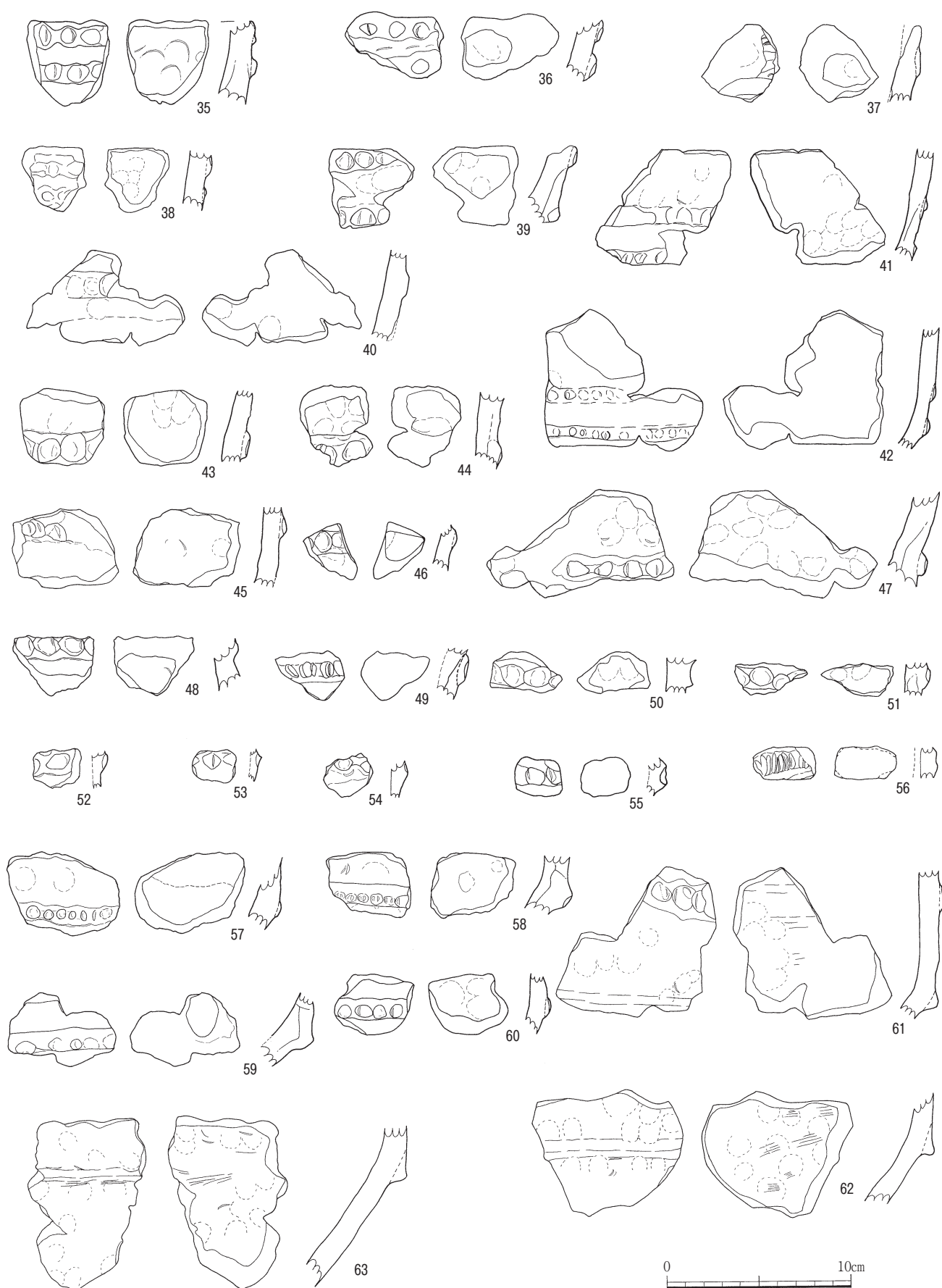
- I 類土器 太い隆帯文を施したもの
- II 類土器 細い隆帯文を施したもの
- III 類土器 隆帯文を密接に施したもの
- IV 類土器 幅広の隆帯文を施したもの
- V 類土器 隆帯文を施さないもの



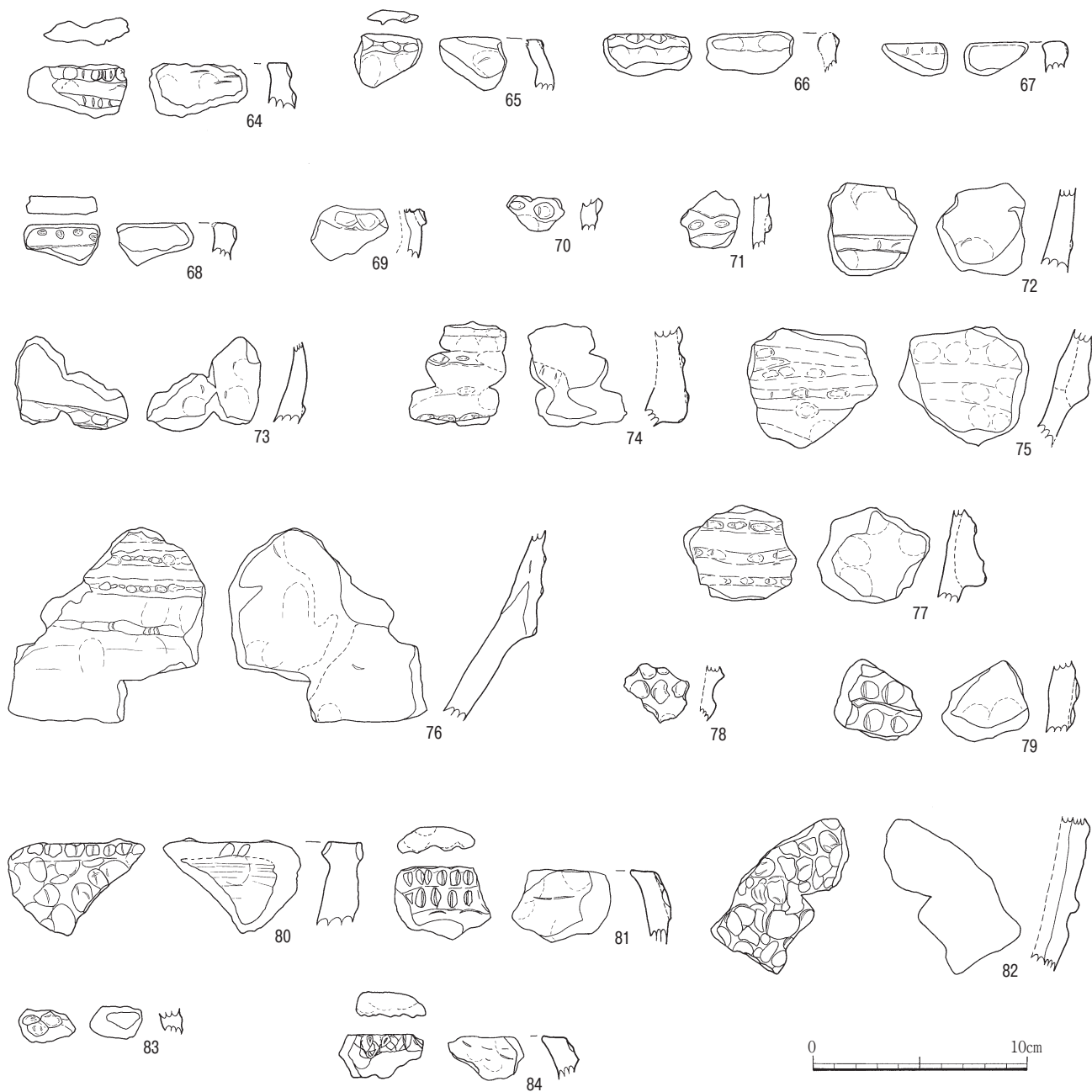
第21図 縄文時代草創期 土器出土状況



第22図 縄文時代草創期 土器 1



第23図 縄文時代草創期 土器 2

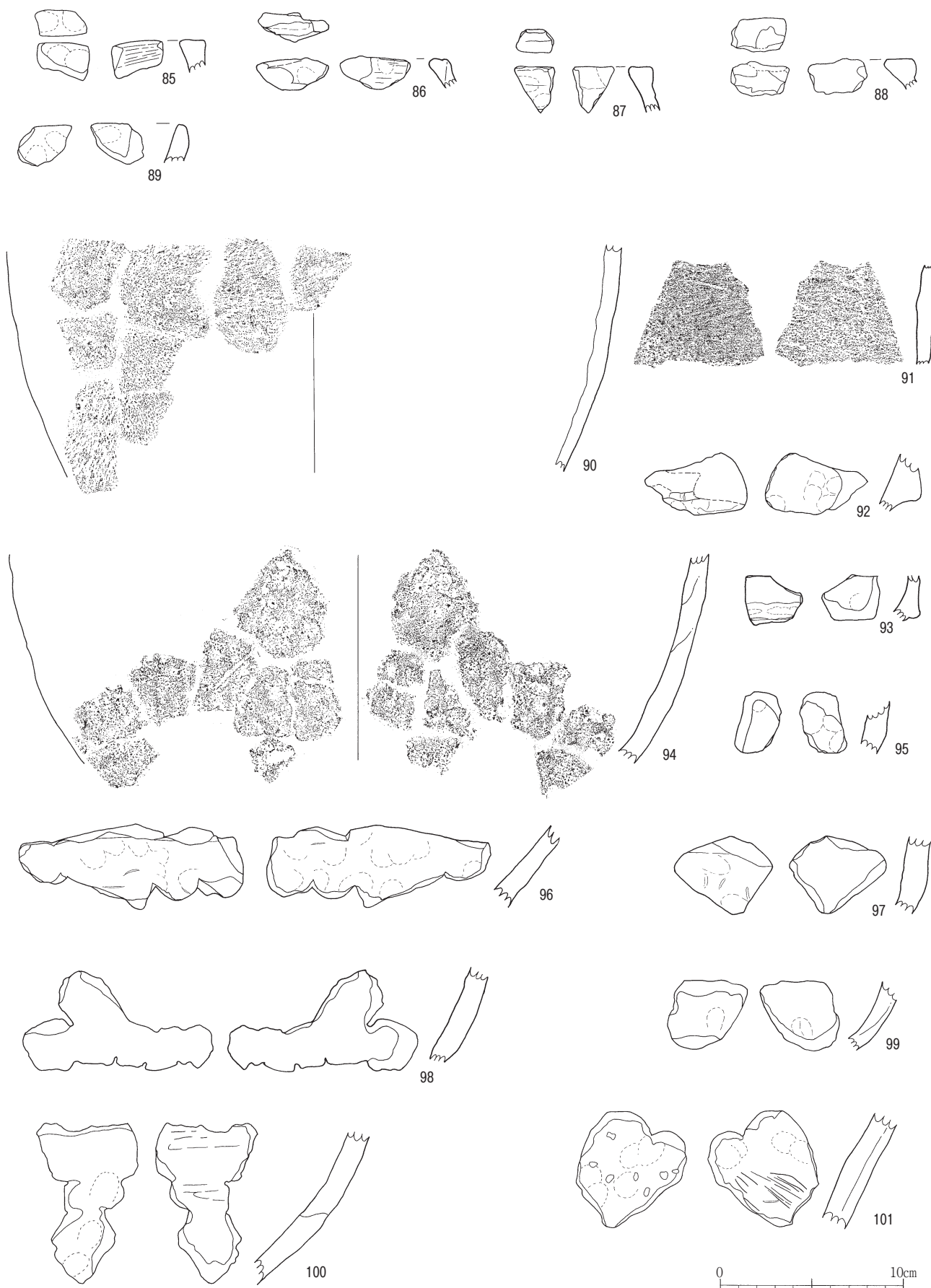


第24図 縄文時代草創期 土器3

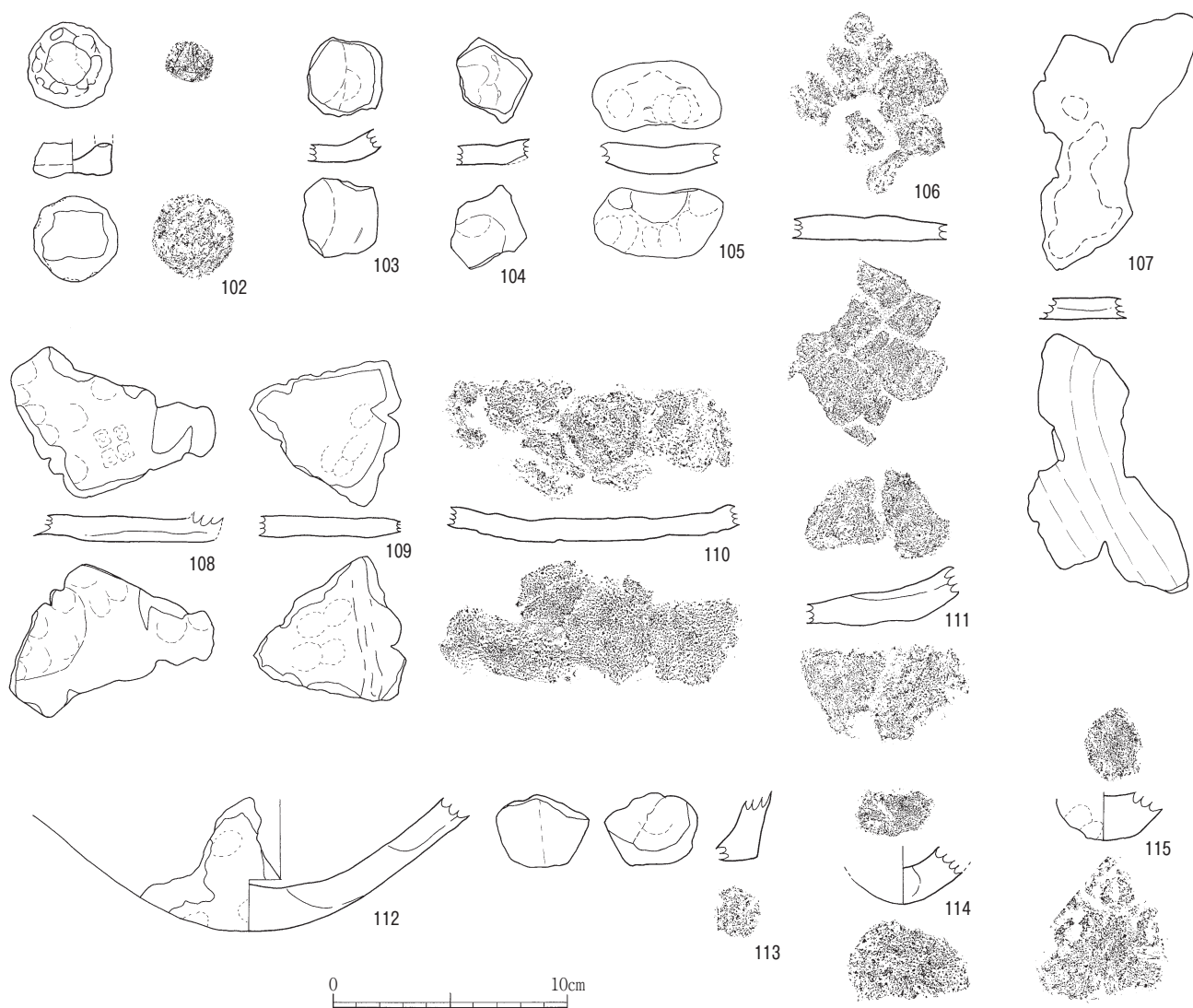
I 類土器 (第22図 18~34・第23図 35~63)

18は口縁部に間隔をあけた横位3条の隆帯文と口縁部から垂下する縦位の2条の隆帯文が施されている。横位の隆帯文には、爪痕を確認できる指頭圧痕が重ならないで施されている。縦位の隆帯文には指頭圧痕は施されていない。胴部には3条の隆帯文から離れて施された横位の隆帯文の剥離痕が確認できる。口唇部内側に張り出す形で隆帯文が施されているが、指頭圧痕は施されていない。

隆帯文は断面三角形で、貼り付ける際の押圧による波状痕が確認できる。やや内湾する器形である。19は口縁部に間隔をあけた横位3条の隆帯文が施され、爪痕を確認できる指頭圧痕が、間隔を開けずに施されている。直線的に開く器形である。20は口縁部に間隔をあけた横位3条の隆帯文が施され、爪痕を確認できる指頭圧痕が、重ならないで施されている。口唇部内側に張り出す形で隆帯文が施されているが、指頭圧痕は施されていない。



第25図 縄文時代草創期 土器 4



第26図 縄文時代草創期 土器5

21は指頭圧痕が、重ならないで施され、貼り付ける際の押圧による波状痕が確認できる。22は指頭圧痕が重なりながら施され、隆帯文の上下には調整段階でついた横位の爪痕が確認できる。22は口縁部に間隔をあけた横位2条の隆帯文が施され、隆帯文は断面三角形である。23は18と同一個体の可能性がある。口唇部内側に張り出す形で隆帯文が施されているが、指頭圧痕は施されていない。24～27, 29は横位1条の隆帯文が施され、残存する胴部に他の隆帯文が確認できない。また、口唇部内側の張り出しも確認できない。25と26, 29は爪痕を確認できる指頭圧痕が、密接に施されている。28と34は口縁部に横位の隆帯文が施され、爪痕を確認できる指頭圧痕が、

重ならないで施されている。30～33は口縁部に横位の隆帯文が施され、隆帯文と平行した押圧が間隔をあけて施されている。35と36, 38～40は胴部に横位2条の隆帯文が施され、爪痕を確認できる指頭圧痕が重ならないで施されている。36と39は器形と厚みから、屈曲部直上の可能性がある。37は19と同一個体の可能性がある。41は屈曲部とその直上の胴部に横位2条の隆帯文が施され、爪痕を確認できる指頭圧痕が重ならないで施されている。屈曲部は肥厚しない。43～51は胴部に横位1条の隆帯文が施され、爪痕を確認できる指頭圧痕が施されている。45と46, 48, 50, 51, 53, 57には密接な指頭圧痕が施されている。47は隆帯文の端部が確認できる。短い粘土紐

を用いたか、螺旋状の貼り付けが施されていた可能性がある。隆帯文のある土器片では最も厚いものである。49は19と同一個体で、2条目の隆帯文の左側に接合する。52～56は隆帯文が胴部から剥離したものと考えられる。56は爪型文を横位に密接して施している。57～60は屈曲部で、稜上に隆帯文が施され、爪痕を確認できる指頭圧痕が、重ならないで施されている。同様のものが1号集石遺構からも出土している。58と59は屈曲外側に稜を確認できるが、57と60は緩やかである。61は横位1条の隆帯文がやや左上がりに施され、爪痕を確認できる指頭圧痕が、重なるように施されている。屈曲部は内外面とも、隆帯文を施さず、やや肥厚する。器形から62と63と同一個体の可能性がある。

Ⅱ類土器（第24図 64～77）

64は口縁部に間隔をあけた横位2条の隆帯文が施され、爪痕を確認できる指頭圧痕が、間隔をあけて施されている。口唇部内側に張り出す形で隆帯文が施されているが、指頭圧痕は施されていない。65～68は口縁部に横位の隆帯文が施され、爪痕を確認できる指頭圧痕が、重ならないで施されている。口唇部内側に張り出す形で隆帯文が施されているが、指頭圧痕は施されていない。69～71は隆帯文が胴部から剥離したものと考えられる。72と73は口縁部に近い胴部で、横位1条の隆帯文を施されている。指頭圧痕は施されていない。74～77は屈曲部で、横位3～4条の隆帯文を施されている。屈曲部の肥厚が大きい。隆帯文は断面三角形で、貼り付ける際の押圧による波状痕を確認できる。爪痕を確認できる指頭圧痕が、重ならないで施されている。75では隆帯文の1条目と2条目の一部重なりが確認できる。

Ⅲ類土器（第24図 78, 79）

78は横位2条の隆帯文がやや蛇行しながら、密接に施され、爪痕を確認できる指頭圧痕が重ならないで施されている。2条の間で、爪による条痕が隆帯文と平行していることが確認できる。79は胴部から剥離した隆帯文で、2列の指頭圧痕が重ならないで施されている。2列の間に境目はない。

Ⅳ類土器（第24図 80～84）

80は口縁部に横位の隆帯文が施され、爪痕を確認できる指頭圧痕が、間隔を開けずに施されている。口唇部内側に張り出す形で隆帯文が施されているが、調整時についた爪痕が確認できる。胴部には爪痕を確認できる指頭圧痕が密接に施され、隆帯文は幅広で薄くなり、条数は確認できない。81は口縁部に幅広の扁平な隆帯文を貼り付け、それに2条の爪型文を横位に施し、口唇部は内側に張り出している。82は胴部で、内面は剥落している。爪痕を確認できる指頭圧痕が密接に施され、条数は確認できない。8号連穴土坑から出土した15に類似する。83は密接して、貝殻腹縁による刺突が施されている。84は口唇部のみである。

Ⅴ類土器（第25図 85～101）

85は口縁部外面に横位のナデ調整が施され、口唇部は内側に張り出している。89は舌状の口縁断面形で、内外面に調整段階での指押さえが確認できる。90と91, 94～99, 101は隆帯文のない胴部である。91は隣接する南原内堀遺跡のトレンチ内から出土した胴部である。92と93は屈曲部で、稜上に浅い指圧が確認できる。97は屈曲部直下の胴部である。96と98, 99は底部近くの胴部である。96の外面上部には接合痕が確認できる。98は胴部から底部にあたり、厚みが大きい。99の内面下部は内湾している。100の部位は胴部から底部にかけてであり、62と112に類似する。101は厚みがあり、5mm大の石粒が外面に確認できる。

底部（第26図 102～115）

102は口台様の底部で、底部内側は丸く落ち込んでいる。接合面には間隔をおいて、浅い指頭圧痕が確認できる。103～107は平丸底の底部である。107の外面には、弧状の浅い溝を2条確認できる。108～111は丸平底の底部である。112は丸底の底部で、89～92と同一個体の可能性がある。113は平底の底部で、外面に緩やかな稜が確認できる。114と115は尖底状の底部である。114は断面中央に接合痕が確認できる。

縄文時代草創期 土器観察表（1）

挿図 番号	掲載 番号	層位	出土区	部位	色調 (内面)	色調 (外面)	胎土 石英	長石	角閃 石	その 他	焼 成	調整（内面）	調整（外面）	類	遺物番号	備考
第 22 図	18	Ⅶ・Ⅷ	C-10・C-11	口縁部	橙	橙	○	○	○	赤石	良	爪あと,指ナデ	指おさえ,指ナデ	I	851, 855, 1055, 1056, 1100, 2186, 2203	
	19	Ⅶ・Ⅷ	C-10	口縁部	明赤褐	褐	○	○	○		良	指圧痕	指圧痕,爪あと	I	1111, 1112, 2105	
	20	Ⅶ	C-11	口縁部	明赤褐	褐	○	○	○		良	指圧痕	指圧痕,爪あと	I	1444	
	21	Ⅶ	B-14	口縁部	にぶい黄褐	褐	○	○	○	赤石	良	指圧痕	爪あと,指ナデ	I	3789	
	22	-	-	口縁部	明黄褐	暗褐	○	○			良		指圧痕,爪あと	I	-	
	23	Ⅶ	C-11	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	指圧痕,爪あと	ナデ,爪あと	I	1289	
	24	Ⅶ	C-11	口縁部	明黄褐	黒褐	○	○		赤石	良	指圧痕	指圧痕,爪あと	I	1084	
	25	Ⅶ	D-10	口縁部	赤褐	黒褐	○	○			良	ナデ	指圧痕	I	752	
	26	Ⅶ	-	口縁部	にぶい赤褐	黒褐	○	○		赤石	良	指圧痕,爪あと	ナデ	I	-	
	27	Ⅶ	B-11	口縁部	明赤褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	指圧痕,ナデ	爪あと	I	2256	
	28	Ⅶ	C-10	口縁部	黒褐	黒褐	○	○			良		爪あと,条痕	I	1115	
	29	Ⅶ	C-11	口縁部	黒褐	黒褐	○	○		赤石	良	ナデ	指圧痕,ナデ	I	1507	
	30	Ⅶ	C-10	口縁部	にぶい黄橙	暗褐	○	○	○		良	ナデ,条痕	指圧痕,ナデ	I	1550	
	31	Ⅶ	C-11	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○	○		良	指圧痕,ナデ	指圧痕,ナデ	I	1051	
第 23 図	32	Ⅶ	C-11	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○		良	ナデ	指圧痕,爪あと	I	1508	
	33	Ⅶ	B-13	口縁部	にぶい黄褐	明赤褐	○	○	○	赤石	良	指ナデ	刺突	I	3648	
	34	Ⅶ	-	口縁部	黒褐	灰褐	○	○	○		良	ナデ	指圧痕,ナデ	I	-	
	35	Ⅶ	B-10	胴部	明赤褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	指圧痕,ナデ	爪あと,指ナデ	I	1571	
	36	Ⅶ	C-10	胴部	暗灰黄	橙	○	○			良	指圧痕,爪あと	爪あと	I	793	
	37	Ⅶ	B-10	胴部	褐	にぶい黄褐	○	○		赤石	良	指圧痕	指圧痕	I	1760	
	38	Ⅳ	C-13	胴部	明褐	にぶい黄褐	○	○			良	指圧痕	指圧痕,ナデ	I	3486	
	39	Ⅶ	F-11	屈曲部	にぶい黄橙	赤褐	○	○	○		良	指圧痕	指圧痕,爪あと	I	1232	
	40	Ⅶ	C-11	胴部～屈曲部	黄褐	にぶい黄褐	○	○	○	赤石	良	指圧痕,ナデ	指圧痕	I	1262, 1269, 1483	
	41	Ⅶ	D-11	胴部	にぶい黄	明赤褐	○	○			良	指圧痕,ナデ	指圧痕,ナデ	I	614	
	42	Ⅶ	C-10・C-11	胴部	褐	赤褐	○	○	○		良	指ナデ	指圧痕,爪あと	I	1119, 1424	
	43	Ⅶ	C-11	胴部	にぶい黄橙	明赤褐	○		○		良	指圧痕,ナデ	指圧痕,爪あと	I	-	
	44	Ⅶ	C-11	屈曲部	にぶい褐	暗褐	○		○	赤石	良	指圧痕,ナデ	指圧痕,ナデ	I	1378, 1398	
	45	Ⅶ	B-11	胴部～屈曲部	明褐	にぶい黄褐	○	○			良	指圧痕	ナデ,爪あと	I	2259	
	46	Ⅶ	C-11	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○		○		良	指圧痕	指圧痕,ナデ	I	1507	
	47	Ⅶ	B-11	胴部	明黄褐	赤褐	○	○	○		良	指圧痕	指圧痕,爪あと	I	2248	
	48	Ⅶ	D-10	胴部	黄褐	暗+赤褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ,爪あと	I	769	
	49	Ⅶ	B-10	胴部	黒褐	黒褐	○	○			良		爪あと	I	1964	
	50	Ⅶ	B-11	胴部	にぶい褐	にぶい赤褐	○		○		良	指圧痕,ナデ	爪あと	I	2253	
	51	Ⅶ・Ⅷ	B-11・D-11	胴部	赤褐	褐	○		○		良	指圧痕	指圧痕,爪あと	I	689, 2248	
	52	Ⅶ	D-11	胴部	明褐	赤褐	○	○	○		良		指圧痕,ナデ	I	546	
	53	Ⅶ	B-10	胴部	にぶい黄褐	褐	○	○	○		良		指圧痕,爪あと,ナデ	I	1599	
	54	Ⅶ	C-11	胴部	にぶい黄褐	赤褐	○	○	○		良		指圧痕,ナデ	I	1462	
	55	Ⅶ	C-10	胴部	にぶい橙	にぶい黄橙	○	○	○		良		指圧痕,爪あと	I	821	
	56	Ⅶ	B-11	胴部	にぶい褐	褐	○	○	○		良		爪あと	I	2254	
	57	Ⅶ	D-11	屈曲部	にぶい黄褐	明赤褐	○	○	○		良	ナデ	指圧痕,ナデ	I	613	
	58	Ⅶ	C-11	屈曲部	にぶい褐	褐	○	○	○		良	指圧痕	指圧痕,爪あと	I	1725	
	59	Ⅶ	C-11	屈曲部	褐	赤褐	○	○	○		良	ナデ	指圧痕,爪あと	I	1065	
	60	Ⅶ	D-11	屈曲部	灰黄褐	赤褐	○	○	○	赤石	良	指圧痕	ナデ,爪あと	I	-	
	61	Ⅶ	B-10, C-10	屈曲部	明黄褐	明褐	○	○			良	指圧痕,条痕	指圧痕	I	858, 859, 1585	
	62	Ⅶ	C-11	屈曲部	暗灰黄	赤褐	○		○		良	指圧痕,条痕	指圧痕,ナデ	I	1263	
	63	Ⅶ	C-10	屈曲部～胴部	黄褐	明赤褐		○	○		良	指圧痕,爪あと,指ナ デ	指圧痕,条痕	I	860, 866	

縄文時代草創期 土器観察表（2）

挿図 番号	掲載 番号	層位	出土区	部位	色調(内面)	色調(外面)	胎土 石英	長石	角閃 石	その他	焼 成	調整（内面）	調整（外面）	類	遺物番号	備考
第 24 図	64	Ⅶ	C-11	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○	○		良	指圧痕,爪あと	指圧痕	Ⅱ	1007	
	65	Ⅶ	D-10	口縁部	褐	にぶい赤褐	○	○	○		良	指圧痕,爪あと	指圧痕	Ⅱ	726	
	66	Ⅶ	D-11	口縁部	褐	暗褐褐	○	○	○		良	指圧痕	指圧痕,爪あと	Ⅱ	1670	
	67	Ⅶ	B-10	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○	○		良	指圧痕,爪あと,ナデ	爪あと,指ナデ	Ⅱ	1977	
	68	Ⅶ	C-11	口縁部	明赤褐	にぶい黄褐	○	○			良	指圧痕,爪あと,ナデ	爪あと,刺突	Ⅱ	1455	
	69	-	-	胴部	にぶい黄褐	赤褐	○	○	○		良		指圧痕,ナデ	Ⅱ	-	
	70	Ⅶ	C-11	胴部	暗灰黄	にぶい赤褐	○	○			良		指圧痕	Ⅱ	975	
	71	Ⅶ	D-11	胴部	にぶい黄	橙	○		○		良		指圧痕,ナデ	Ⅱ	646	
	72	Ⅶ	C-11	胴部	にぶい黄橙	明赤褐	○	○	○		良	指圧痕,爪あと,ナデ	指圧痕,爪あと,ナデ	Ⅱ	1052	
	73	Ⅶ	C-10・D-11	胴部	にぶい黄褐	橙	○	○			良	指圧痕,爪あと	指圧痕,爪あと,ナデ	Ⅱ	597, 773	
	74	Ⅶ	C-11	屈曲部	にぶい黄褐	橙	○		○		良	指圧痕	指圧痕	Ⅱ	1036, 1037	
	75	Ⅶ	D-11	屈曲部	にぶい褐	明赤褐	○	○	○		良	指圧痕	指圧痕	Ⅱ	599	
	76	Ⅶ	B-10・D-11	屈曲部	にぶい黄褐	橙	○	○	○		良	指圧痕	指圧痕,条痕	Ⅱ	633, 639, 1199	
	77	Ⅶ	C-11	屈曲部	黄褐	橙	○	○	○		良	指圧痕	指圧痕	Ⅱ	1453	
	78	Ⅶ	C-10	胴部	黄褐	にぶい赤褐	○	○			良		指圧痕	Ⅲ	824	
	79	Ⅶ	C-11	胴部	赤褐	黒褐	○	○			良	指おさえ	指圧痕,爪あと	Ⅲ	2223	
	80	Ⅶ	C-11	口縁部	明褐	橙	○		○		良	指圧痕,条痕	指圧痕,爪あと	Ⅳ	1389	
	81	Ⅶ	B-14	口縁部	明黄褐	橙	○	○	○		良	指圧痕,条痕	指圧痕,爪あと	Ⅳ	3628	
	82	Ⅶ	C-10・C-11	胴部	黄褐	褐	○	○	○		良		指圧痕,爪あと	Ⅳ	1268, 1554	
	83	Ⅶ	B-14	胴部	にぶい黄褐	橙		○			良	指圧痕	ナデ	Ⅳ	3646	
	84	Ⅶ	B-13	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○	○		良	刺突	指圧痕,ナデ	Ⅳ	3570	
第 25 図	85	Ⅶ	C-11	口縁部	にぶい褐	にぶい黄褐	○	○			良	条痕	指圧痕	V	1367	
	86	Ⅶ	C-11	口縁部	橙	黒褐	○	○	○		良	条痕	指圧痕	V	-	
	87	Ⅶ	C-11	口縁部	にぶい黄褐	暗灰黄	○	○	○		良	指圧痕,条痕	ナデ	V	1372	
	88	Ⅶ	C-10・C-11	口縁部	にぶい褐	黒褐	○	○			良	条痕	指圧痕	V	1268, 1550, 1554	
	89	Ⅶ	B-14	口縁部	黄褐	にぶい黄橙	○	○	○		良	指圧痕	指圧痕,爪あと	V	3666	
	90	Ⅶ・Ⅷ	B-11・C-10・ D-10	胴部	暗褐	赤褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	V	735, 737, 738, 739, 740, 748, 816, 2257, 2259	
	91	Ⅶ	D-1	胴部	にぶい黄褐	黄褐	○	○			良	ナデ	ナデ,条痕	V	南原内堀23	
	92	Ⅶ	D-11	屈曲部	にぶい黄褐	にぶい黄橙	○	○	○		良	指圧痕	ナデ	V	-	
	93	Ⅶ	C-11	胴部	にぶい黄褐	明赤褐	○	○	○		良	指圧痕	指圧痕	V	1045	
	94	Ⅶ	C-11・D-11	屈曲部	にぶい黄褐	明赤褐	○	○	○		良	指圧痕,爪あと,ナデ	指圧痕,ナデ	V	539, 540, 647, 915, 925, 933, 946, 1034	
	95	Ⅶ	C-11	胴部	明赤褐	橙	○	○	○		良	指圧痕	指圧痕	V	2295	
	96	Ⅶ	B-10・C-10	胴部	にぶい黄褐	褐	○	○			良	指圧痕,爪あと,ナデ	指圧痕,爪あと,ナデ	V	868, 870, 1169	
	97	Ⅶ	B-11	胴部	にぶい黄褐	橙	○	○	○		良	ナデ	指圧痕,爪あと	V	2254	
	98	Ⅶ	D-10・C-11	胴部	にぶい褐	赤褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	V	742, 934, 942, 943, 1425, 1533	
	99	Ⅶ	B-11	胴部	にぶい黄	明褐	○	○	○		良	指圧痕,ナデ	指圧痕,ナデ	V	1770	
	100	Ⅶ	C-11	胴部	にぶい黄橙	赤褐	○	○	○		良	条痕	指圧痕	V	878, 1239, 1272	
	101	Ⅶ	B-14	胴部	にぶい黄	明黄褐	○	○	○		良	条痕	指圧痕	V	3643	
第 26 図	102	Ⅶ	C-10	底部	明赤褐	明赤褐	○	○	○		良	刺突	ナデ	底部	1548	
	103	Ⅶ	B-10	底部	浅黄	橙	○	○			良	指圧痕,ナデ	ナデ	底部	1155	
	104	Ⅶ	C-11	底部	明赤褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	指圧痕,ナデ	指圧痕,ナデ	底部	1377	
	105	Ⅶ	B-14	底部	にぶい黄	橙	○	○	○		良	指圧痕	指圧痕	底部	3667	
	106	Ⅶ	C-11・D-11	底部	にぶい黄	明赤褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	底部	578, 589, 1036	
	107	Ⅶ	C-11・E-10	底部	黄褐	橙	○	○	○		良		指ナデ,条痕	底部	1233, 1309, 1310, 1311	
	108	Ⅶ	D-11	底部	暗灰黄	橙	○	○	○		良	指圧痕,?	指圧痕,ナデ	底部	577, 584, 1142, 1143	
	109	Ⅶ	B-14	底部	にぶい黄橙	明褐		○	○		良	指圧痕	指圧痕	底部	3790	
	110	Ⅶ	D-11	底部	にぶい黄褐	赤褐	○	○	○		良	指圧痕	指圧痕	底部	617, 1131	
	111	Ⅶ	C-11	底部	にぶい黄褐	赤褐	○	○	○		良	指圧痕,条痕	指圧痕	底部	1022	
	112	Ⅶ	C-10・C-11	胴部～底部	にぶい黄	明褐	○	○			良	指圧痕,ナデ	ナデ	底部	852, 1102, 1302	
	113	Ⅶ	C-11	底部	にぶい黄褐	赤褐	○	○	○		良	指ナデ	指圧痕	底部	926	
	114	Ⅶ	C-10	底部	橙	明赤褐	○	○			良	ナデ	指ナデ	底部	1105	
	115	Ⅶ	C-11	底部	にぶい黄褐	黒褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	底部	1008	

②石器

石器はB～D－9～11区とB－14区を中心に出土している。遺物包含層はⅦ～Ⅷ層であるが、Ⅷ層には旧石器時代の遺物も含まれる。黒曜石および頁岩の類別出土状況を、第28図と第29図に掲載した。

打製石鏃と楔形石器、石槍、スクレイパー、礫器、二次加工剥片、使用痕剥片、剥片、丸ノミ型石斧、磨製石斧、打製石斧、磨石、敲石、砥石などが出土している。55点を図化した。

なお、黒曜石を次のように分類する。

黒曜石A

黒色・ガラス質で、小粒の不純物が多く含まれる。伊佐市大口日東産に類似する。

黒曜石B

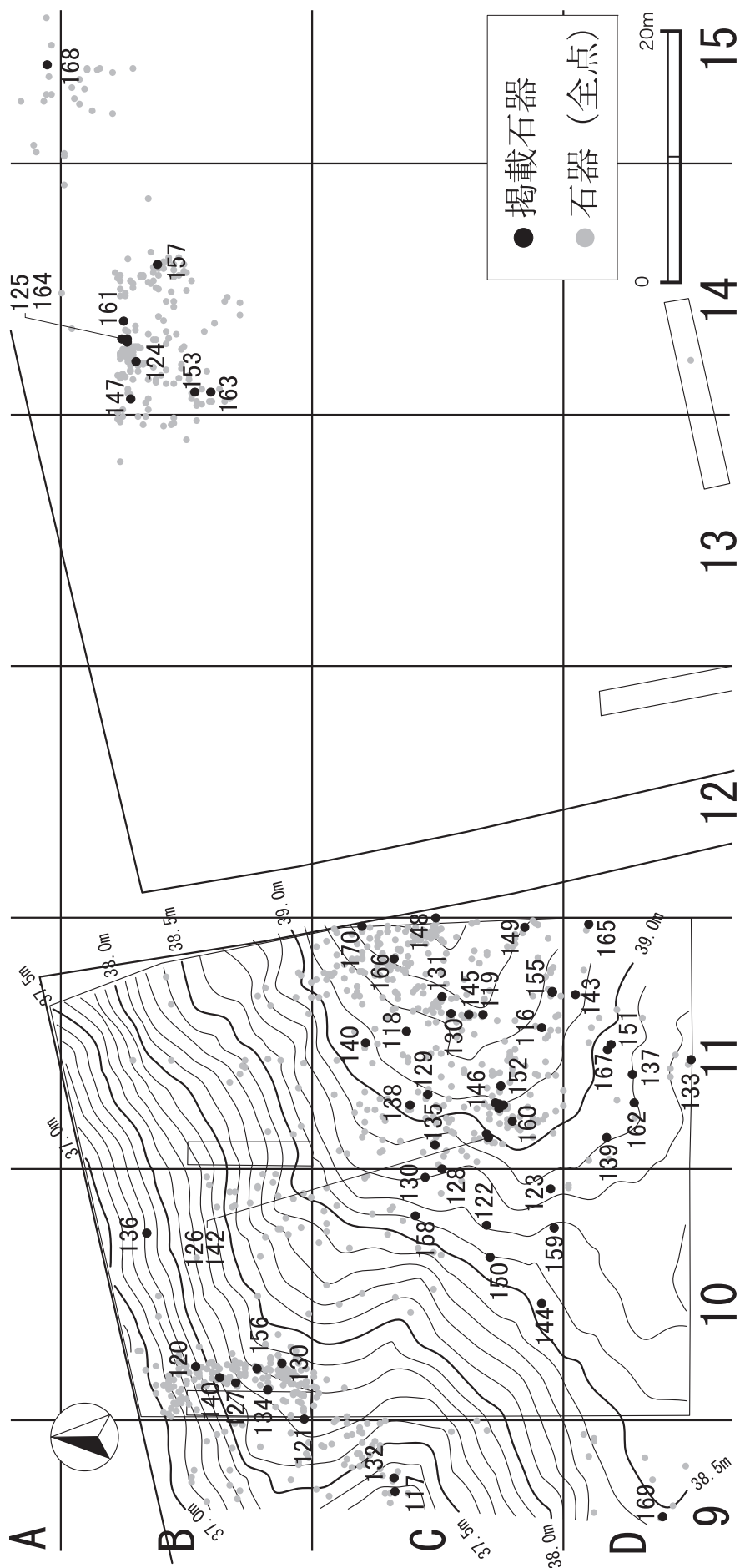
青灰色で、不純物が少なく良質。長崎県佐世保市針尾、淀姫産等西北九州系に類似する。

黒曜石C

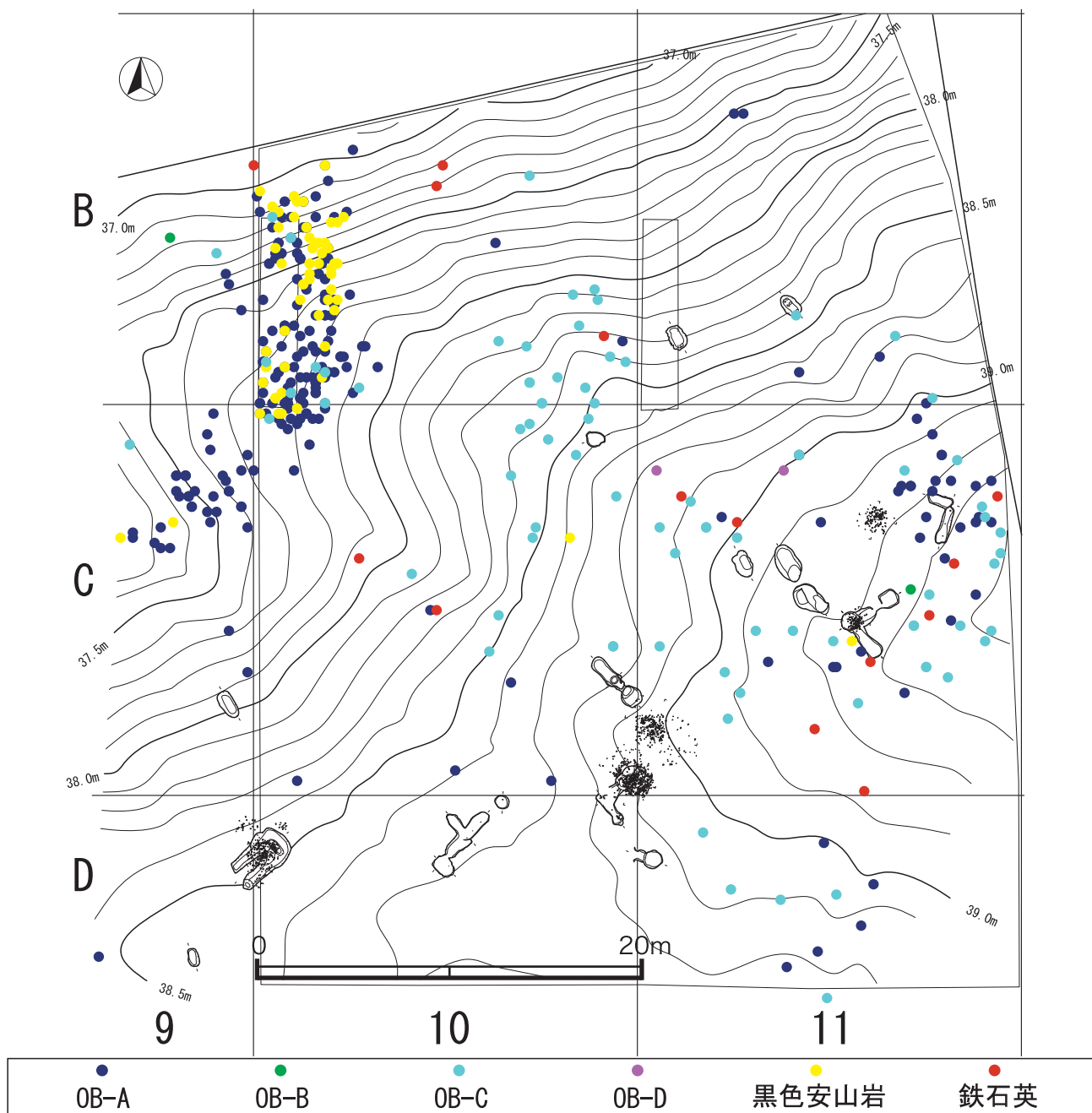
黒色・炭状で、光を通さず、不純物が少ない。薩摩川内市樋脇町上牛鼻、いちき串木野市平木場産に類似する。

黒曜石D

灰色もしくはアメ色で半透明のガラス質。不純物は少なく、黒色の紐状の縞が入る。宮崎県えびの市桑ノ木津留産に類似する。



第27図 縄文時代草創期 石器出土状況



第28図 縄文時代草創期 石材別分布図

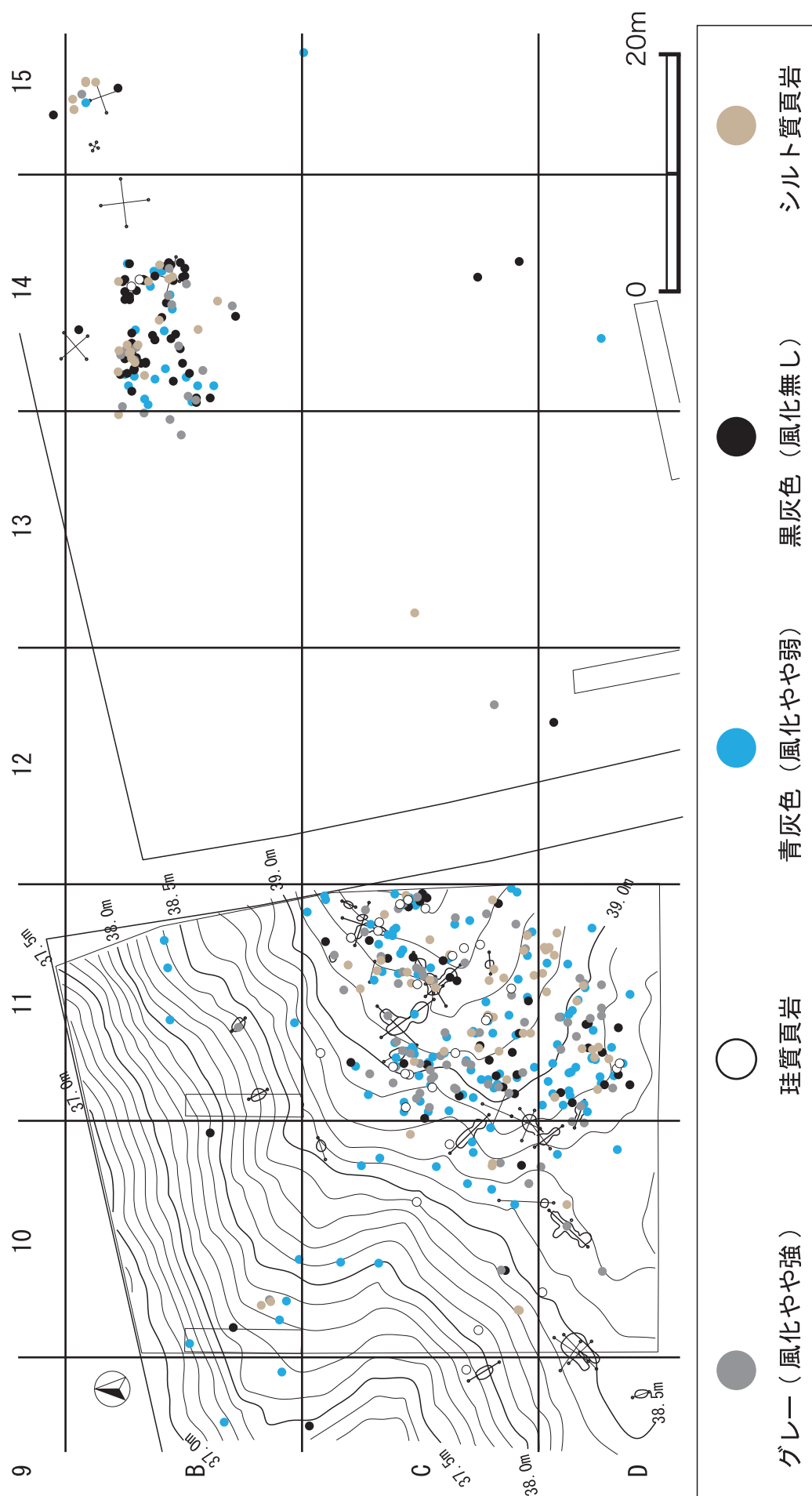
石鏃（第30図 116～119）

欠損品を含めて5点を図化した。すべて打製石鏃で、入念な交互剥離により調整されている。116は背面に自然面を残して側縁部がやや外湾し、逆刺は丸く抉れ、先端部は鋭い作りになっている。117は直線的な側縁部と基部を持つ二等辺三角形で先端部を欠損している。118は背面に自然面を残す二等辺三角形で、逆刺はわずかに丸く抉れ、先端部を一部

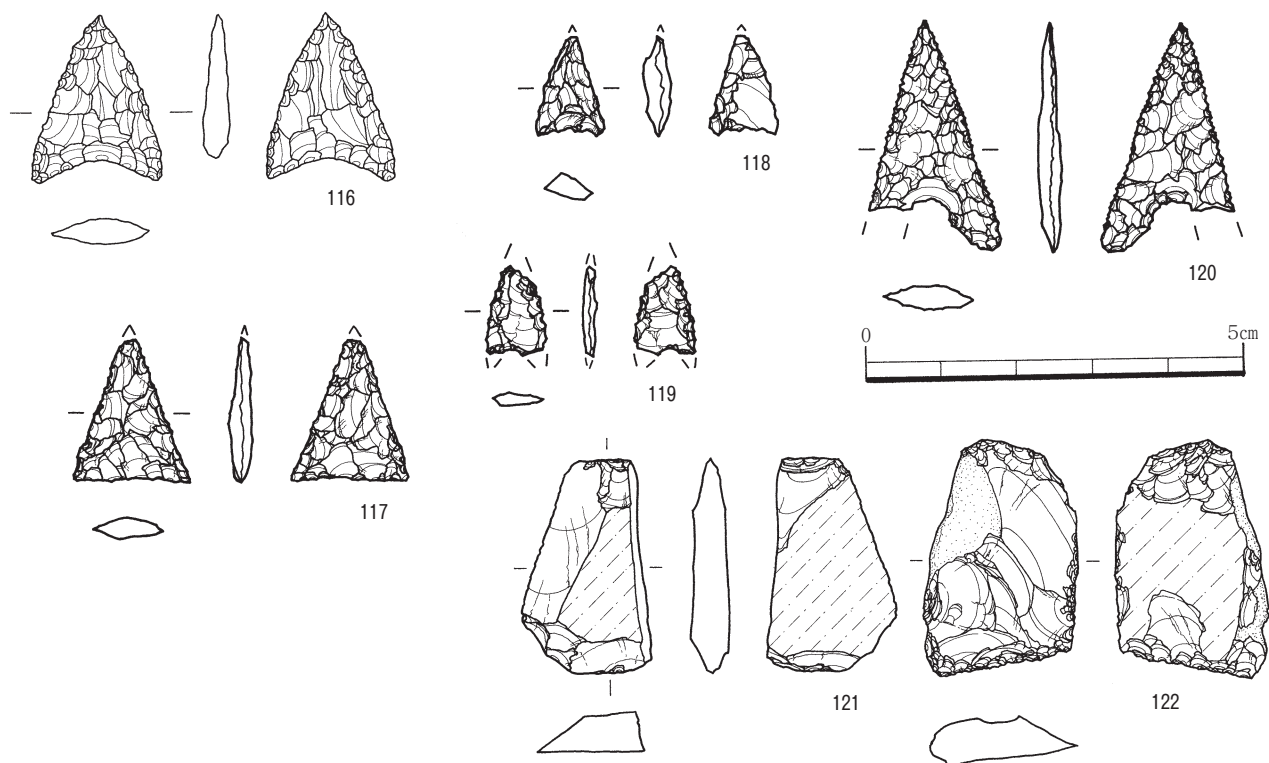
欠損している。119は逆刺がV字形に抉れ先端部と基部の一部を欠損している。120は側縁部が直線的な作りで、逆刺はU字形に抉れ、先端部は鋭い作りになっている。基部の一部を欠損している。

楔形石器（第30図 121～122）

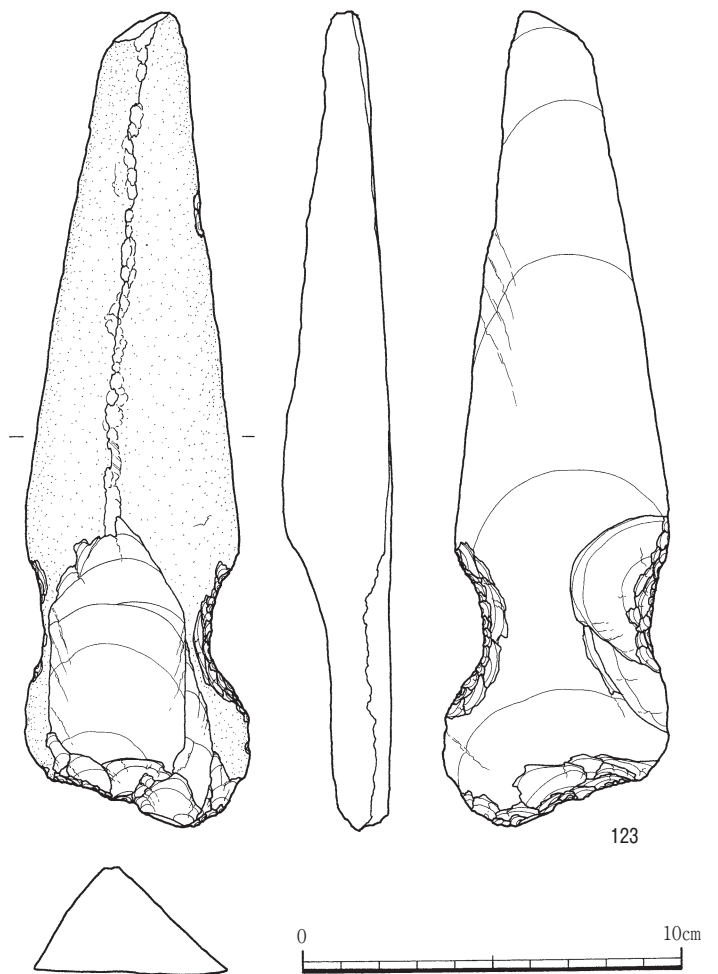
2点を図化した。上部と下部の表裏に二次加工を施し刃部としている。122には入念な剥離調整が施されている。



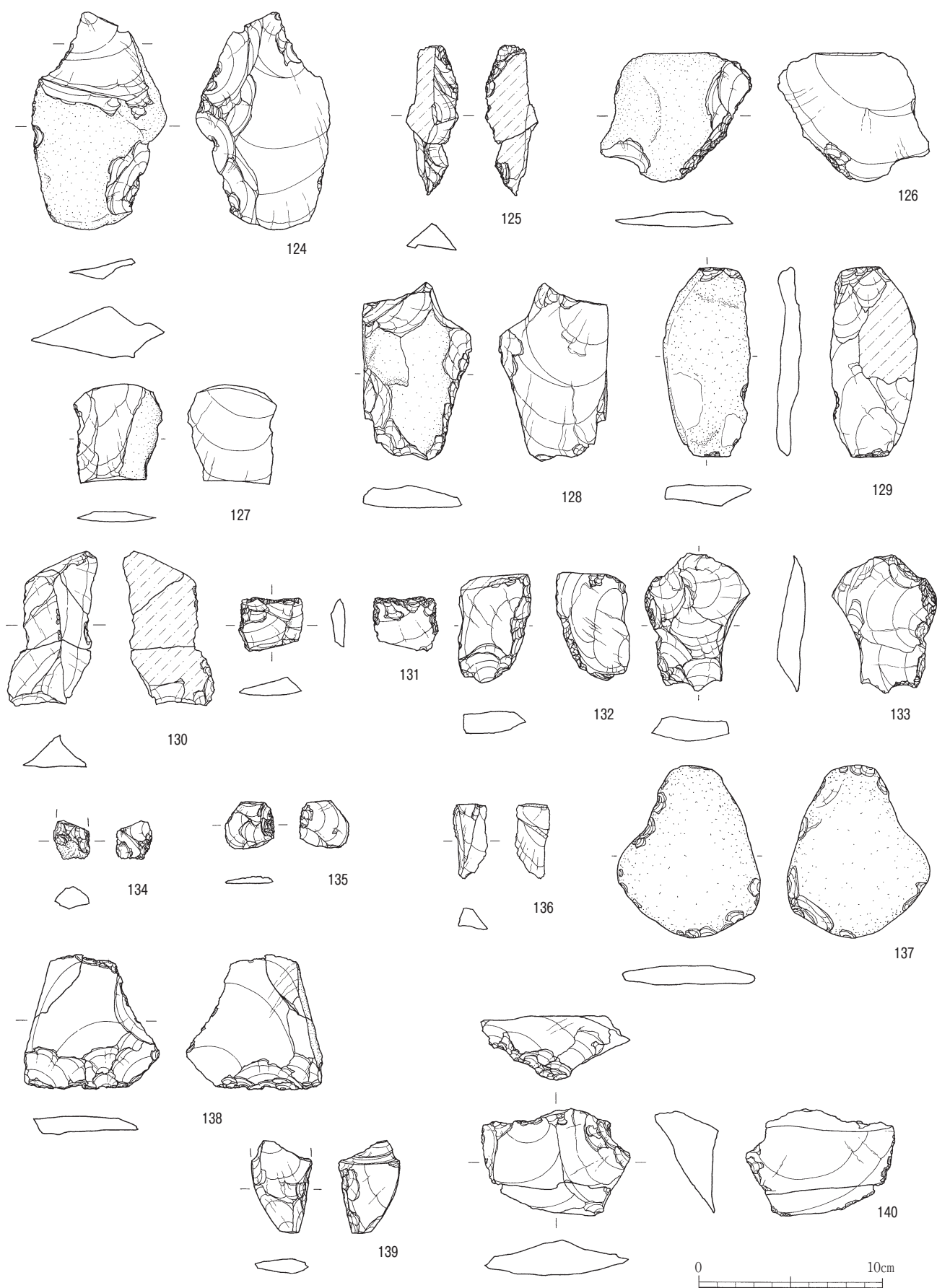
第29図 縄文時代草創期 頁岩剥片分布図



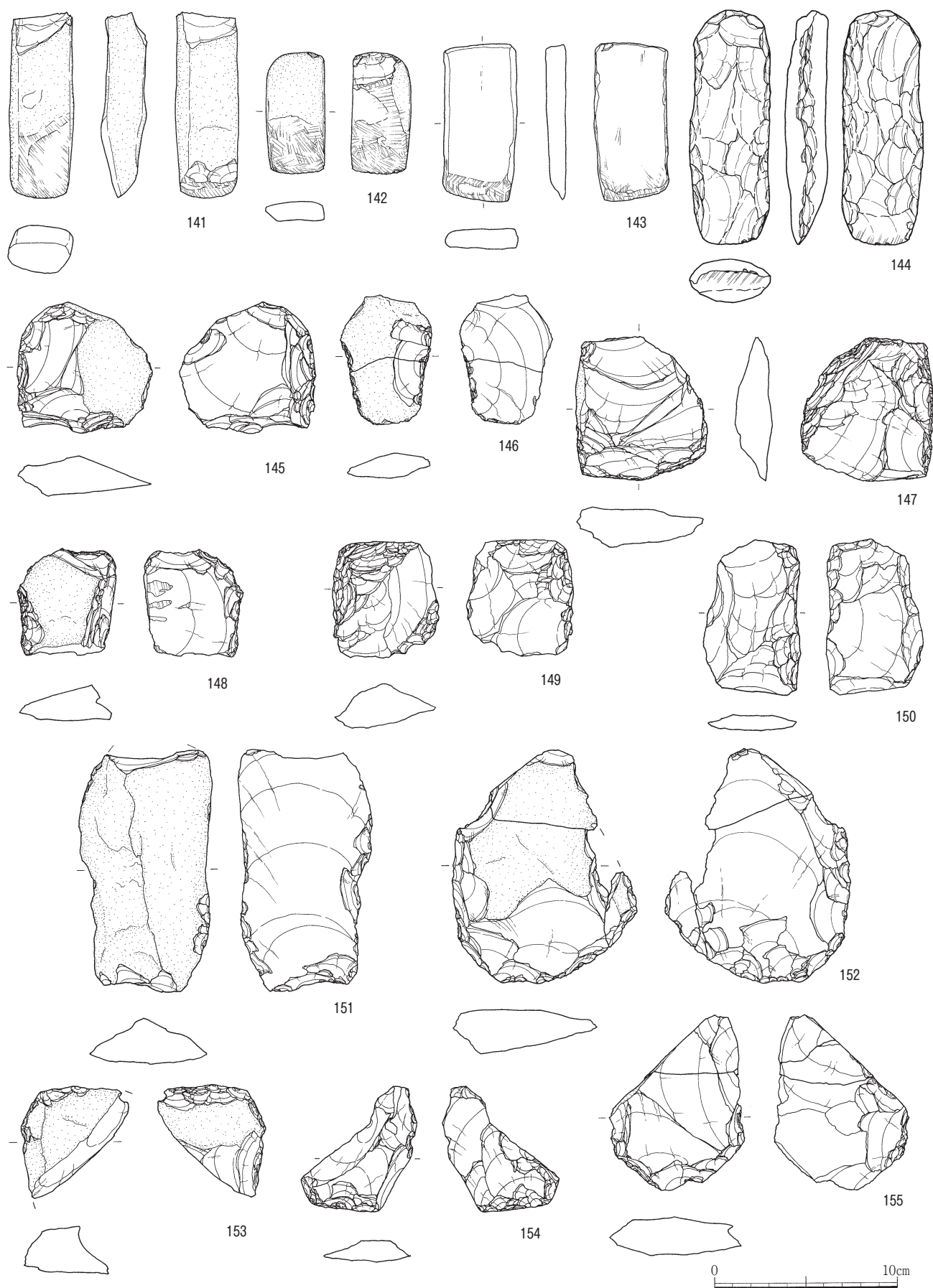
	A (ほぼ三角形)	B (ほぼ五角形)	C (ほぼ丸形)	
形状				
	a (1~1.5 : ほぼ正三角形)	b (1.5~2 : ほぼ二等辺三角形)	c (2以上 : 縦長)	
長幅比 (長さ ÷幅)				
	a (平坦)	b (浅い)	c (深い)	d (U字形)
基部				



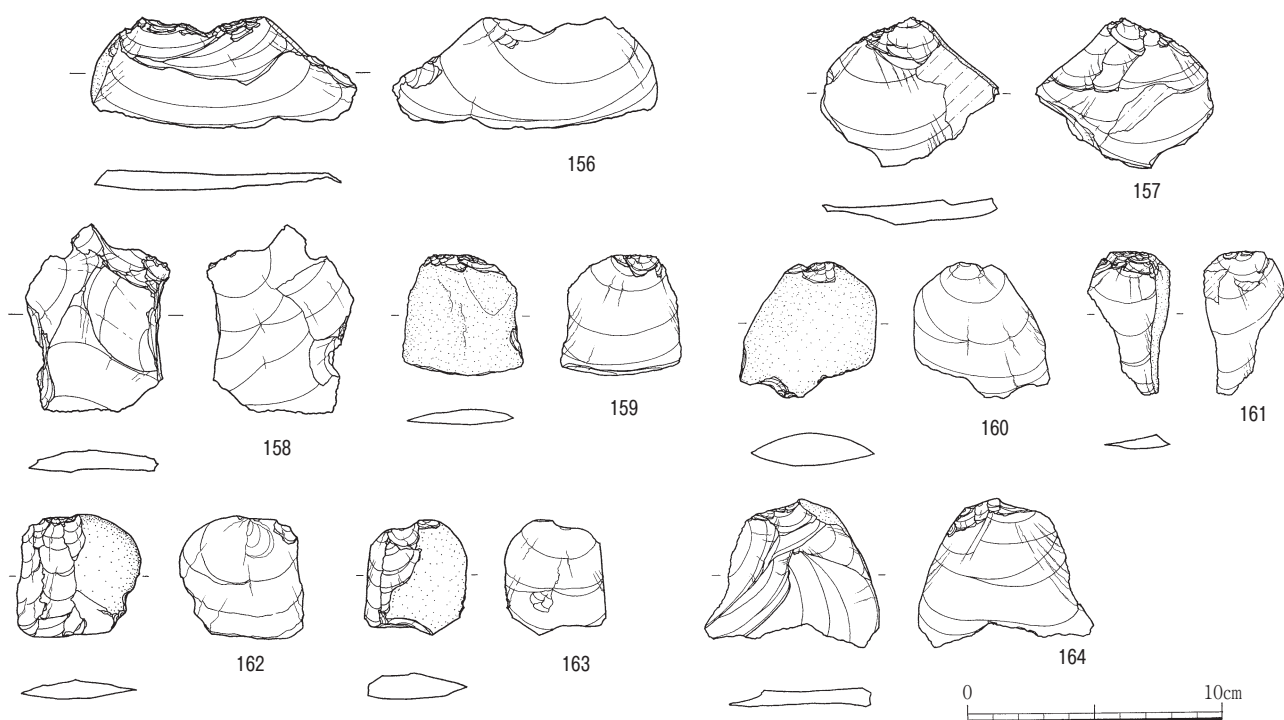
第30図 縄文時代草創期 石器1・石鏃分類図



第31図 縄文時代草創期 石器2



第32図 縄文時代草創期 石器 3



第33図 縄文時代草創期 石器 4

石槍（第30図 123）

自然礫の稜部を生かした縦長剥片を素材とし、左右側縁の挟り部に敲打調整を施している。

スクレイパー（第31図 124～129, 131～135, 138）

12点を図化した。125は縦長の剥片を素材とし、断面は三角形で上部を欠損している。126と128は右側縁に二次加工を施し刃部としている。129は円礫の剥片を素材とし、右側縁の背面に大きめの剥離を施し刃部としている。131は右側縁に二次加工を施し刃部とし、上部の表裏にも細かな剥離を施している。140は上部の背面と左側縁の表裏に二次加工を施し、刃部としている。149は左右側縁に二次加工を施し、刃部としている。

礫器（第31図 137）

137は扁平な円礫を素材とし、下部に二次加工を施し刃部としている。

使用痕剥片（第31図 130・140）

縦長の剥片を素材としたもので、片側側縁に微細な使用痕がみられる。

二次加工剥片（第31図 136）

136は縦長の剥片を利用したもので、断面は三角

形で、稜部に二次加工がみられる。

丸ノミ形石斧（第32図 141）

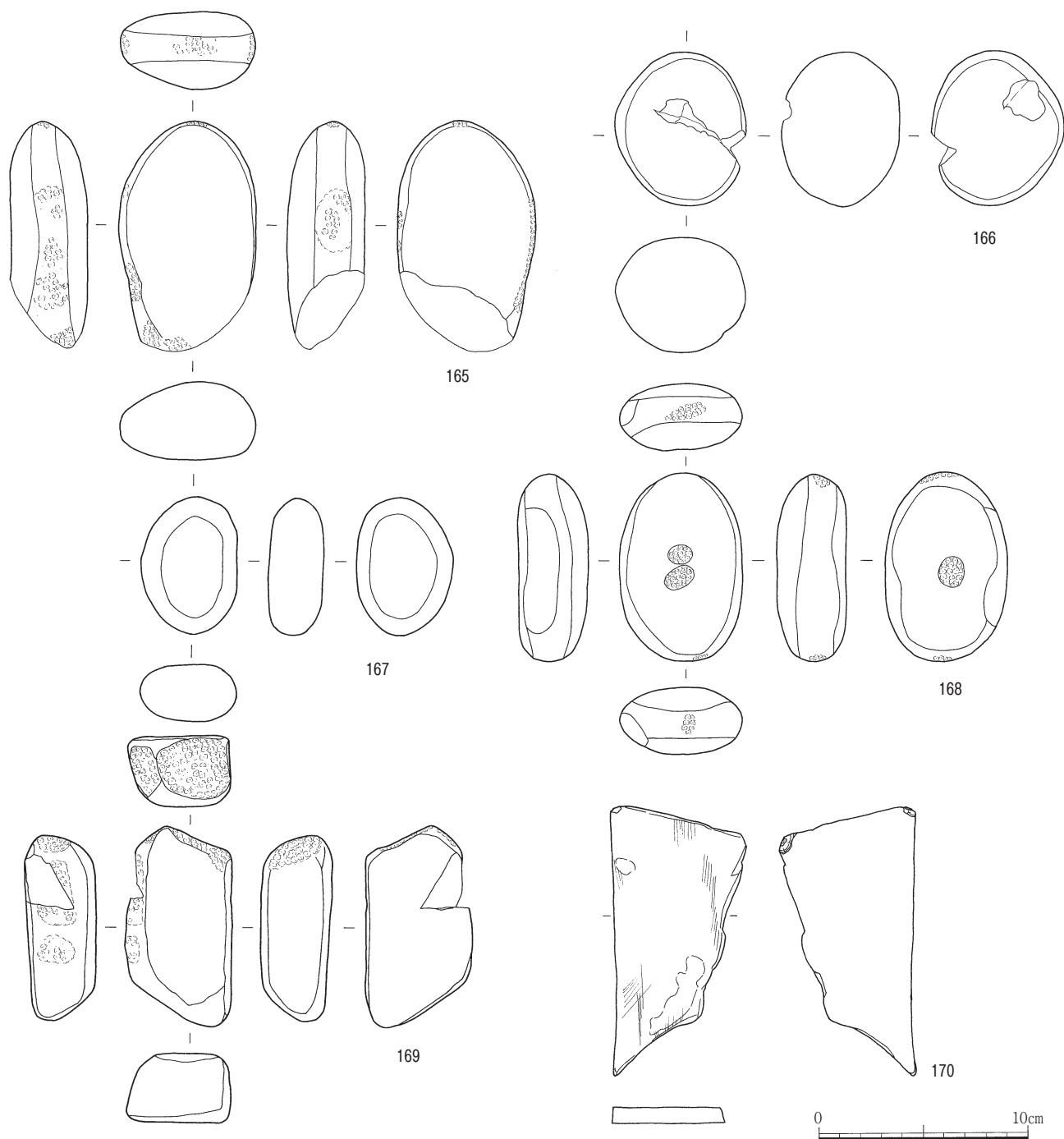
厚手の角柱状の頁岩を素材とし、基部を欠損している。刃部内外面に入念な研磨調整を施し、内面には下部から剥離調整が加えられている。E-3区トレンチで出土した。

磨製石斧（第32図 142～144）

3点を図化した。142と143は、短冊状の頁岩へ研磨調整を施し、刃部内外面に丁寧な調整を施している。144は角柱状のシルト質頁岩へ粗い剥離を施し、刃部に丁寧な研磨調整を施している。

打製石斧（第32図 145～155）

欠損品を含めて、12点を図化した。石材は頁岩とシルト質頁岩である。148は未製品で、左側縁に剥離調整を施している。149は全面に粗い剥離を施し、中間部と刃部を欠損している。151は縦長の剥片の側縁に二次加工を施している。基部と刃部の一部を欠損している。153は表裏に自然面を残す礫の基部に粗い剥離を施している。中間部と刃部を欠損している。155は未製品である。左側縁と刃部に粗い剥離を施している。



第34図 縄文時代草創期 石器5

石斧製作に伴う剥片（第33図 156～164）

中尾遺跡のⅦ～Ⅷ層では、頁岩類の打製石斧が12点出土している。また、頁岩類の薄手の剥片が多数出土している。第29図で頁岩の類別出土状況を提示し、ここでは頁岩の剥片の9点を図化した。

磨石・敲石・砥石（第34図 165～170）

6点を図化した。円礫を利用した4点、角礫を利

用した1点である。165は上部と右側縁に敲打痕がみられ、左側縁から下部、右側縁背面下部を欠損している。166と167には敲打痕がみられない。168は上端と下端、正面と背面の中央部に小さめの敲打痕がみられる。169は角礫を利用したもので、上部から左側縁にかけて敲打痕がみられる。170は頁岩の板状の剥片を利用した砥石である。

縄文時代草創期 石器観察表

挿図 番号	掲載 番号	器種	出土区	層	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	遺物番号	備考
第30図	116	打製石鏃	C-11	VIII	ホルンフェルス	2.20	1.65	0.35	1.27	920	A-a-b
	117	打製石鏃	C-9	VII	黒曜石B	1.90	1.55	0.25	0.78	2152	A-a-a
	118	打製石鏃	C-11	VIII	黒曜石A	1.30	0.95	0.30	0.29	986	A-a-a
	119	打製石鏃	C-11	VIII	黒曜石A	1.20	0.85	0.15	0.17	968	A-b-c
	120	打製石鏃	B-10	VIII	安山岩	3.00	1.60	0.30	1.11	1627	A-b-d
	121	礫器	B-9	VII	硅質頁岩	5.70	3.45	1.20	24.38	2161	
	122	楔形石器	C-10	VIII	硅質頁岩	6.00	3.95	1.10	35.55	838	
	123	石槍	C-10	VIII	頁岩	21.45	5.70	3.00	300.00	775	
第31図	124	スクレイパー	B-14	VIII	硅質頁岩	11.90	7.30	2.80	193.80	3673	
	125	スクレイパー	B-14	VIII	頁岩	8.10	2.80	1.30	23.76	3690,3699	
	126	スクレイパー	C-11	VIII	頁岩	7.00	7.35	0.80	53.42	1458	
	127	スクレイパー	B-10	VIII	頁岩	5.25	4.30	0.60	20.07	1995	
	128	スクレイパー	C-10	VIII	頁岩	9.70	5.90	1.20	96.46	1099	
	129	スクレイパー	C-11	VIII	頁岩	10.40	4.65	1.10	74.31	1072	
	130	使用痕剥片	B-10・C-11	VIII	硅質頁岩	8.35	4.95	3.50	67.40	856,1595,2287	
	131	スクレイパー	C-11	VII	安山岩	2.95	3.45	1.00	10.75	2191	
	132	スクレイパー	C-9	VII	硅質頁岩	5.80	3.55	1.20	39.04	2148	
	133	スクレイパー	D-11	VIII	頁岩	7.00	5.65	1.20	56.45	1672	
	134	スクレイパー	B-10	VIII	黒曜石C	7.50	1.85	1.15	4.63	1646	
	135	スクレイパー	C-11	VIII	頁岩	2.10	2.65	0.40	3.56	1093	
	136	二次加工剥片	B-10	VIII	シルト質頁岩	2.60	1.95	1.38	9.62	1980	
	137	礫器	D-11	VIII	頁岩	4.10	7.70	1.00	92.10	543	
	138	スクレイパー	C-11	VIII	頁岩	9.35	7.40	1.25	57.40	1083,1495	
	139	剥片	D-11	VIII	シルト質頁岩	7.40	3.25	0.80	13.67	573	
	140	使用痕剥片	B-10・C-11	VIII	頁岩	4.70	8.00	3.45	110.24	993,1999	
第32図	141	丸ノミ形石斧	E-3	VIII	頁岩	10.25	3.60	2.50	133.45	2278	
	142	磨製石斧	C-11	VIII	頁岩	6.70	3.30	1.20	42.29	904	
	143	磨製石斧	D-11	VIII	頁岩	8.65	4.10	1.30	76.05	710	
	144	磨製石斧	C-10	VIII	シルト質頁岩	12.90	3.00	2.60	198.30	798	
	145	打製石斧	C-11	VIII	シルト質頁岩	6.90	7.35	2.00	135.53	962	
	146	打製石斧	C-11	VIII	頁岩	7.05	5.00	1.55	55.08	1039,1448	
	147	打製石斧	B-14	VIII	頁岩	7.80	7.15	2.10	146.44	3652	
	148	打製石斧未製品	C-11	VIII	頁岩	5.75	5.30	1.90	82.17	1334	
	149	打製石斧	C-11	VIII	頁岩	5.75	5.70	2.20	83.51	1706	割れ
	150	打製石斧	C-10	VIII	シルト質頁岩	13.30	7.15	2.90	300.00	825	
	151	斧形石器	D-11	VIII	頁岩	8.30	5.75	0.80	50.10	686	
	152	打製石斧	C-11	VIII	頁岩	12.18	10.20	2.40	300.00	1418,1419	
	153	打製石斧	B-14	VIII	シルト質頁岩	5.70	5.25	2.55	81.28	3602	割れ
	154	打製石斧		VII	シルト質頁岩	6.20	5.20	1.20	38.07		割れ
	155	打製石斧	C-11	VIII	頁岩	9.60	7.40	2.20	160.12	936,1386,1414	
第33図	156	打製石斧製作に伴う剥片	B-10	VIII	硅質頁岩	5.95	10.40	0.80	38.11	1604	
	157	打製石斧製作に伴う剥片	B-14	VIII	頁岩	4.40	6.90	0.80	33.43	3781	
	158	打製石斧製作に伴う剥片	C-10	VIII	頁岩	5.60	5.35	0.90	41.56	1110	
	159	打製石斧製作に伴う剥片	C-10	VIII	頁岩	7.35	4.65	0.70	16.28	786	
	160	打製石斧製作に伴う剥片	C-11	VIII	頁岩	4.75	5.15	1.30	33.66	1441	
	161	打製石斧製作に伴う剥片	B-14	VIII	頁岩	5.20	3.15	0.60	9.74	3722	
	162	打製石斧製作に伴う剥片	D-11	VIII	シルト質頁岩	5.60	4.60	0.80	18.73	532	
	163	打製石斧製作に伴う剥片	B-14	VIII	硅質頁岩	4.80	3.90	1.05	19.38	3598	
	164	打製石斧製作に伴う剥片	B-14	VIII	頁岩	4.60	6.85	0.80	30.15	3841	
第34図	165	磨石・敲石	D-11	VII	安山岩	10.90	6.60	3.70	390.00	1669	
	166	磨石・敲石	C-11	VII	砂岩	7.40	6.35	5.50	300.00	2225	
	167	磨石	D-11	VIII	砂岩	6.60	4.10	2.70	124.41	591	
	168	磨石・敲石	A-15	VIII	砂岩	9.00	5.80	3.30	250.00	3812	
	169	磨石・敲石	D-9	VII	砂岩	8.80	5.20	3.30	250.00	2171	
	170	砥石	C-11	VII	頁岩	12.90	6.50	0.80	100.21	2233	

2 縄文時代早期の調査

早期の包含層であるⅣ層は、調査区北側では削平の影響を受け、調査区南側では工事掘削深度に達しないために、前後の時期に比べ、調査面積が小さい。

遺構は集石遺構が2基検出された。また、遺物は土器の出土量が比較的大きい。調査区北側で出土した。

(1) 遺構

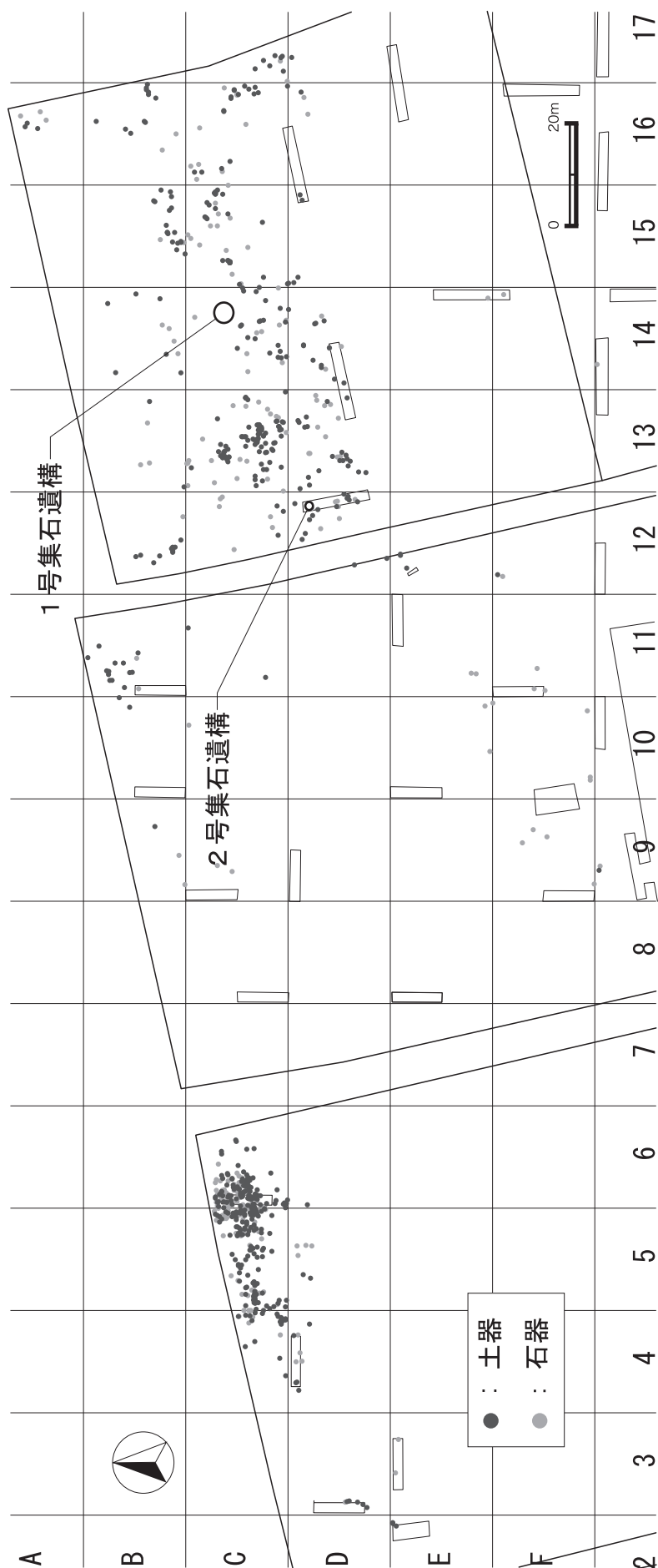
遺構は、調査区北西部のⅤ層直上で集石遺構が2基検出されている。

1号集石遺構（第36図）

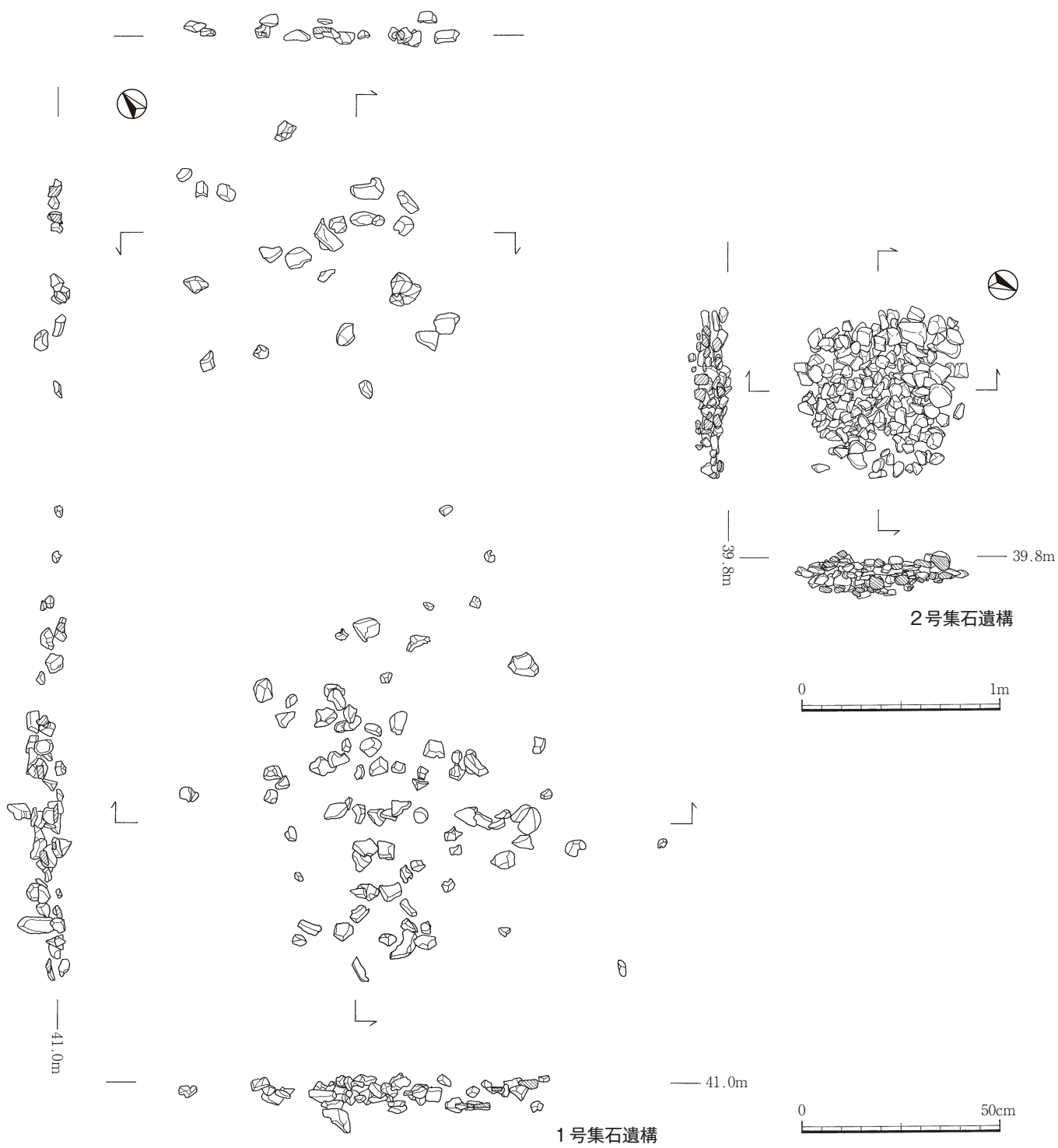
C-14区で検出された。400×250cmの範囲に散礫状に広がる。礫数113、平均重量80.7gである。掘り込みは見られず、平坦である。

2号集石遺構（第36図）

D-12区の9トレンチ内で検出された。80×80cmの範囲に集中する。礫数247、平均重量229.4gである。10cm大の礫で構成されている。



第35図 縄文時代早期 遺構・遺物分布図



(2) 遺物

調査区北半分で土器、石器が出土した。土器を65点、石器を36点図化し掲載した。

①土器

縄文時代の早期の土器は、調査区北側で出土した。Ⅵ類からⅪ類土器に分類できた。出土数の多かったものでは、Ⅸ類土器が調査区東側、Ⅺ類土器が調査区西側で出土している。

Ⅵ類土器 (第38図 171)

Ⅵ類土器は口唇部が外面に傾斜する貝殻条痕文系円筒土器である。1点を図化した。

171は口縁部に貝殻刺突文が連続して施されている。胴部には横位、斜位の貝殻条痕が施されている。C-6区で出土している。

Ⅶ類土器 (第38図 172・173)

Ⅶ類土器は、口縁部に横位の貝殻刺突文、胴部に斜位の条痕を施し、その上から貝殻刺突文を重ねているものである。また、楔形貼付文を有するものもある。

172と173は胴部である。172は左右に刺突を施した楔形貼付文を有する。173は縦位の貝殻刺突文が直線状に施されている。B-C-15区で出土している。

Ⅷ類土器 (第38図 174・175)

Ⅷ類土器は口縁部が外反し、横位の貝殻刺突文がめぐり、その下に楔形貼付文や密接な貝殻刺突文を施すことで、楔状を呈するものである。また、胴部には貝殻押引文が施されるものである。

174は口縁部である。口縁部上端に横位の貝殻刺突文が1条廻り、その下に貝殻押引文、その下に横位の条痕文が施されるものである。175は胴部である。貝殻押引文が施されている。隣接する南原内堀遺跡から出土している。

Ⅸ類土器 (第38図 176~192・第39図 193~198)

Ⅸ類土器は、口縁部に貝殻刺突文が廻り、胴部には貝殻条痕が施されている円筒形の土器である。貝殻条痕文は綾杉状のものがほとんどであるが、縦位、横位のものもある。口唇部には刻目を施すものが大半である。口縁部が肥厚し外反するものと、ほぼ直行的なものがある。

176~188は外反もしくはやや外反する口縁部をもつタイプである。176~183は口縁部に斜位の貝殻刺突文を施すものである。176と177は胴部に綾杉状の貝殻条痕文が施されている。183は斜位の刺突文の下部に横位の貝殻刺突文が1条廻る。184~188は口縁部に横位の貝殻刺突文が数条施されるものである。また、口唇部には刻目が施されている。185は不完全なヘラ状の工具による補修孔がある。189~192は口縁部が直行的タイプである。189と190は口縁部に横位の貝殻刺突文が施されている。また、胴部には横位の条痕文が施されている。191と192は口縁部に縦位の貝殻刺突文が施されている。192は縦位の貝殻刺突文の下部に横位の貝殻刺突文が1条廻る。193~196は胴部である。193と194は綾杉状の条痕文が施されている。195と196は棒状の工具による矢印状の刺突文が施されている。197と198は底部である。内面はヘラもしくは指で撫でて調整されている。

C-4~6区を中心に出土している。また、南原内堀遺跡に隣接する調査区北東端のトレンチ内や、調査区北端中央部のB-11区からも出土している。

Ⅹ類土器 (第39図 199)

Ⅹ類土器は1点である。199は口縁部が直行的、短い条痕を施すものである。内面は丁寧に磨かれている。B-12区で出土している。

Ⅺ類土器 (第39図 200~203)

円筒形条痕文土器と呼ばれるものである。胴部から口縁部にかけて波状の条痕文が横位に施されている。

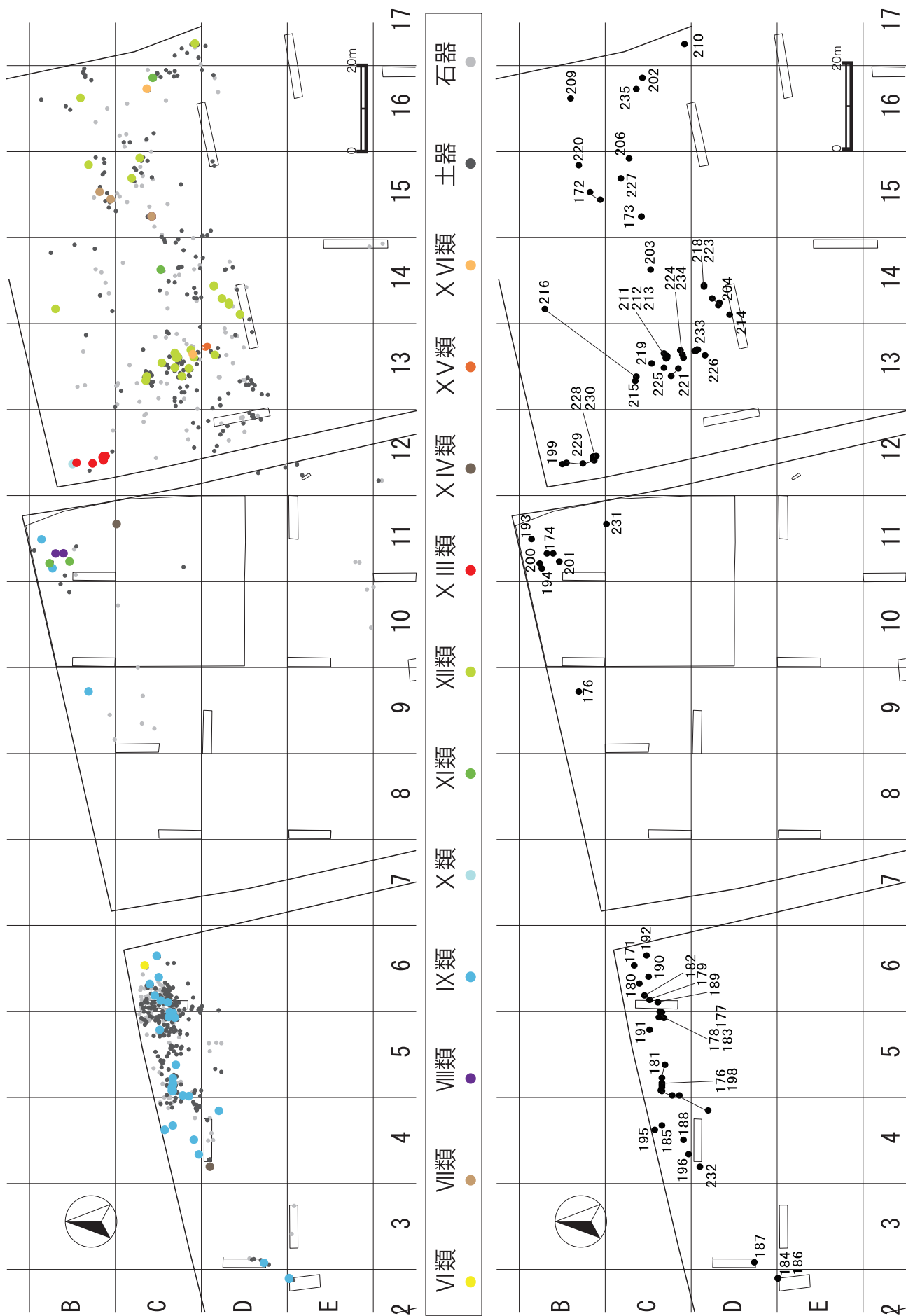
200は口縁部である。端部は丸くつくられている。201~203は胴部である。波状の条痕文が施されている。B-11区と調査区西側にかけて出土している。

Ⅻ類土器

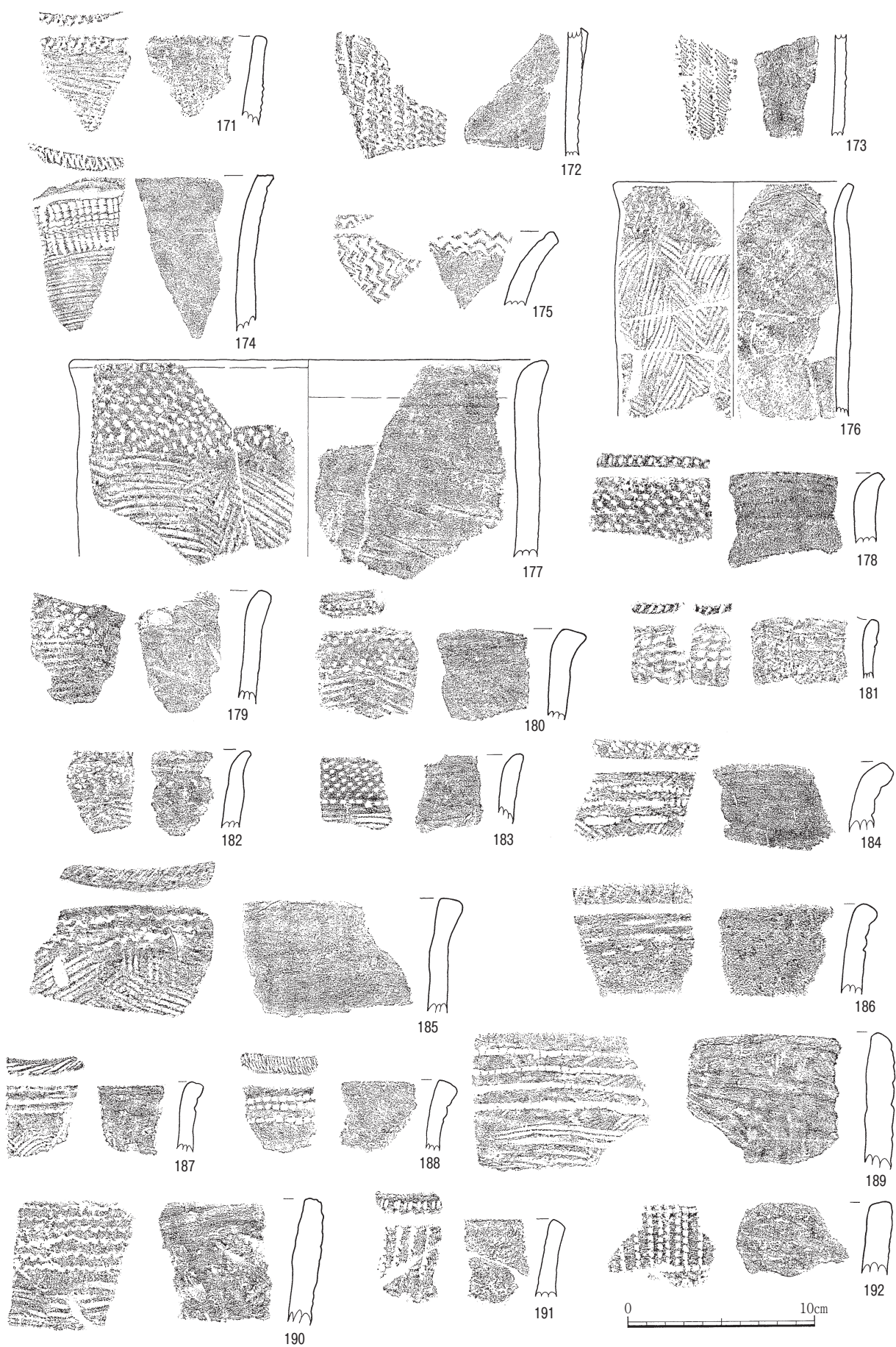
(第39図 204~210・第40図・第41図 223~227)

Ⅻ類土器は器面に山形・楕円の押型文を施文するものである。

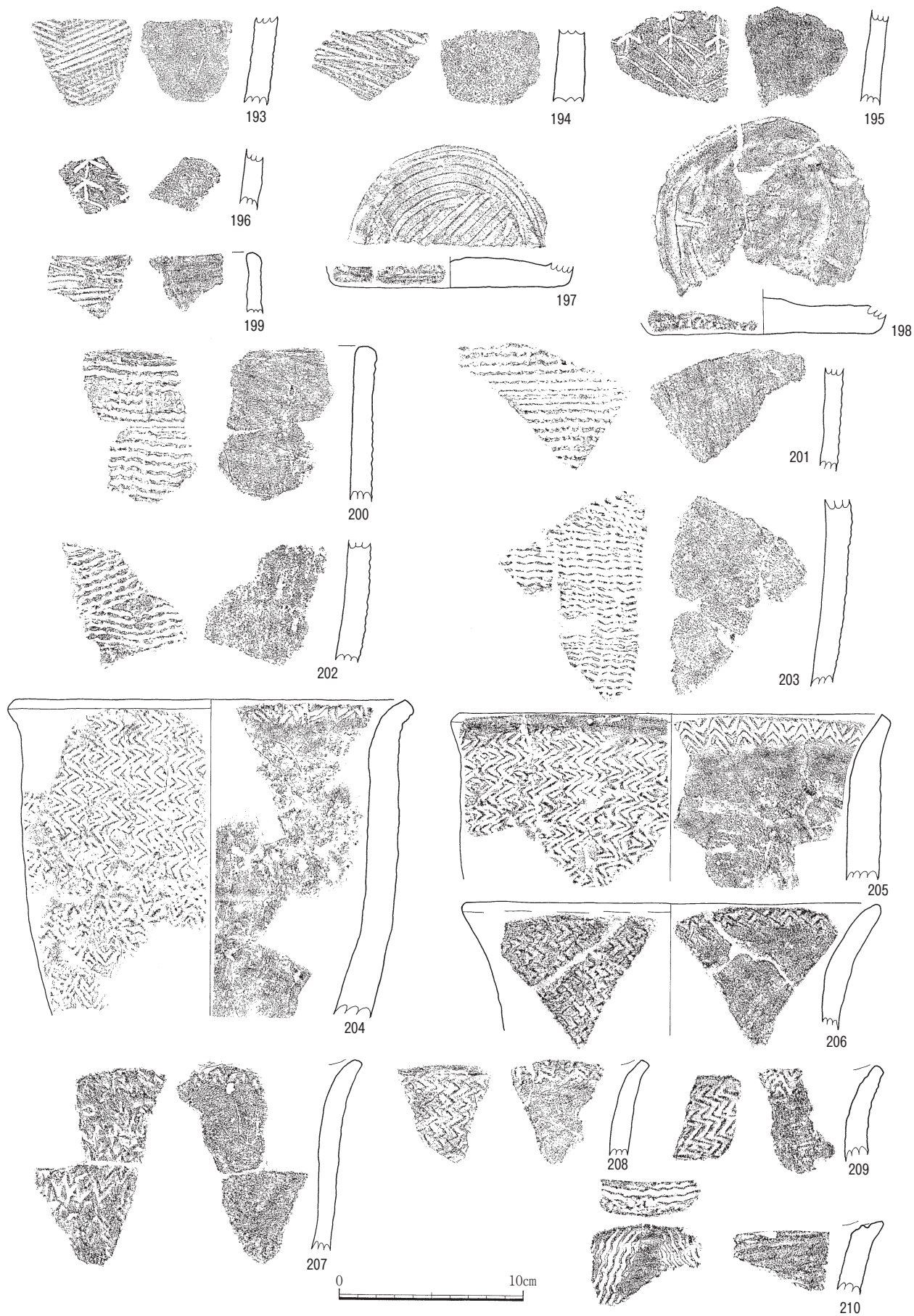
204~214は山形の押型文土器である。204~210は口縁部である。内面上端に山型押型文が施されている。204と205は膨らんだ胴部から口縁部にかけてやや窄まり外反するものである。206~210は外反もしくはやや外反するものである。207~210は波状口縁



第37図 縄文時代早期 土器出土状況



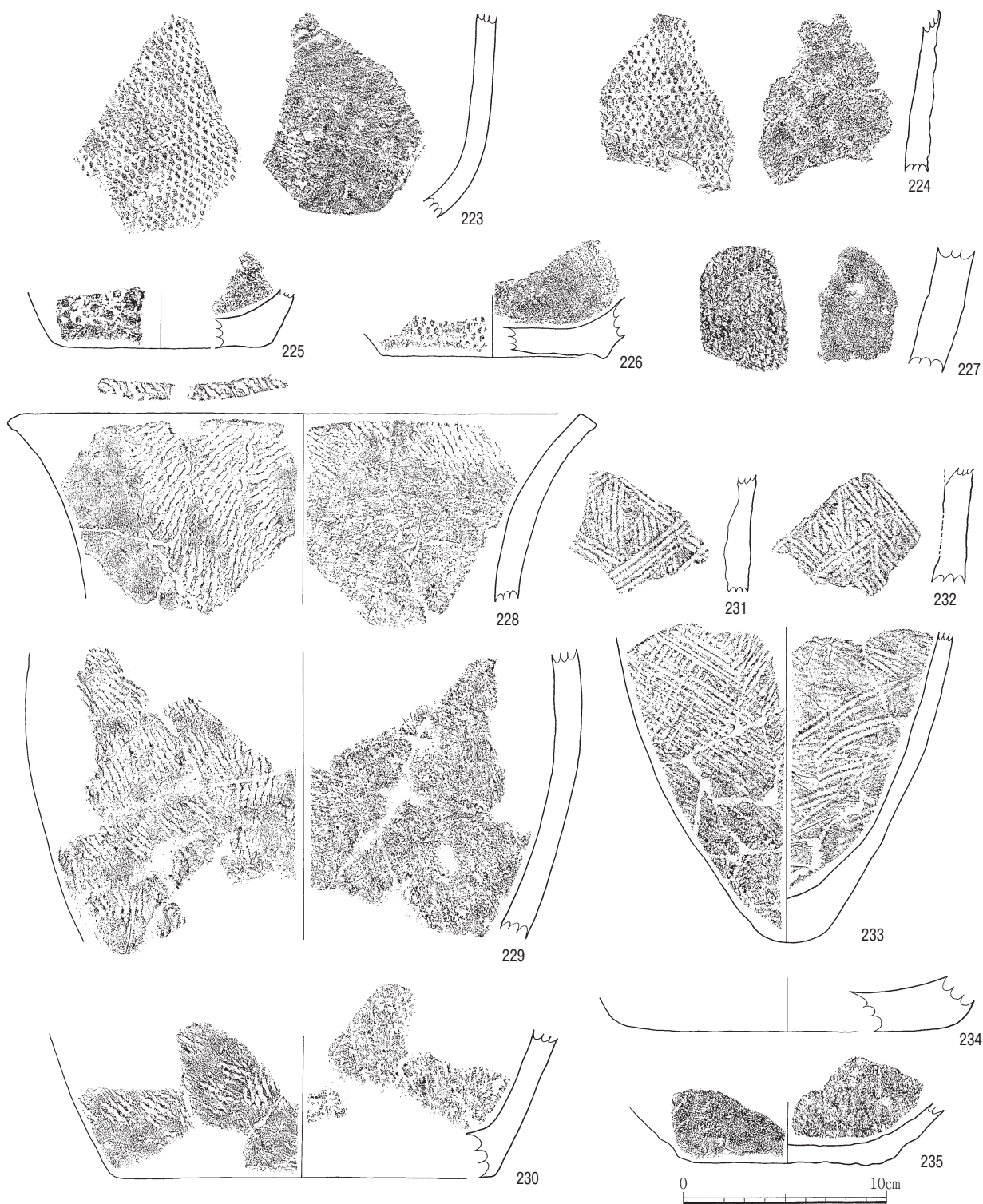
第38図 縄文時代早期 土器 1



第39図 縄文時代早期 土器 2



第40図 縄文時代早期 土器3



第41図 縄文時代早期 土器 4

である。210は山型押型文が一部撫で消されている。また、口唇部に竹管によると思われる刺突文が施されている。211～213は同一個体と思われる。口唇部から内面上端に刻みが施され、口縁部から胴部上部にかけて山型押型文が施され、胴部下部から底部にかけて短い横位の条痕が施されている。210は底部である。

215～226は楕円の押型文土器である。211～218は外反もしくはやや外反する口縁部である。口縁部内面上端部にも楕円の押型文が施されている。222は外面をナデで調整している。223と224は胴部である。225と226は底部である。226の内面はナデで調整されている。227は苺の表面状の文様が施されている。C-13, D-14区を中心に、調査区西側にかけて出土している。

XIII類土器（第41図 228～230）

XIII類土器は縄文が施されるものである。228は口縁部である。口縁部外面、口唇部、内面上端に縄文が施されている。外面については結節縄文が施されている。上端から下部に向かい連続した「R」字状の文様が見られる。229と230は胴部である。同一個体と思われる。B-12区で出土している。

XIV類土器（第41図 231・232）

XIV類土器は2点である。231と232は胴部である。斜位の条痕文が施されている。D-4, C-11区で出土している。

XV類土器（第41図 233）

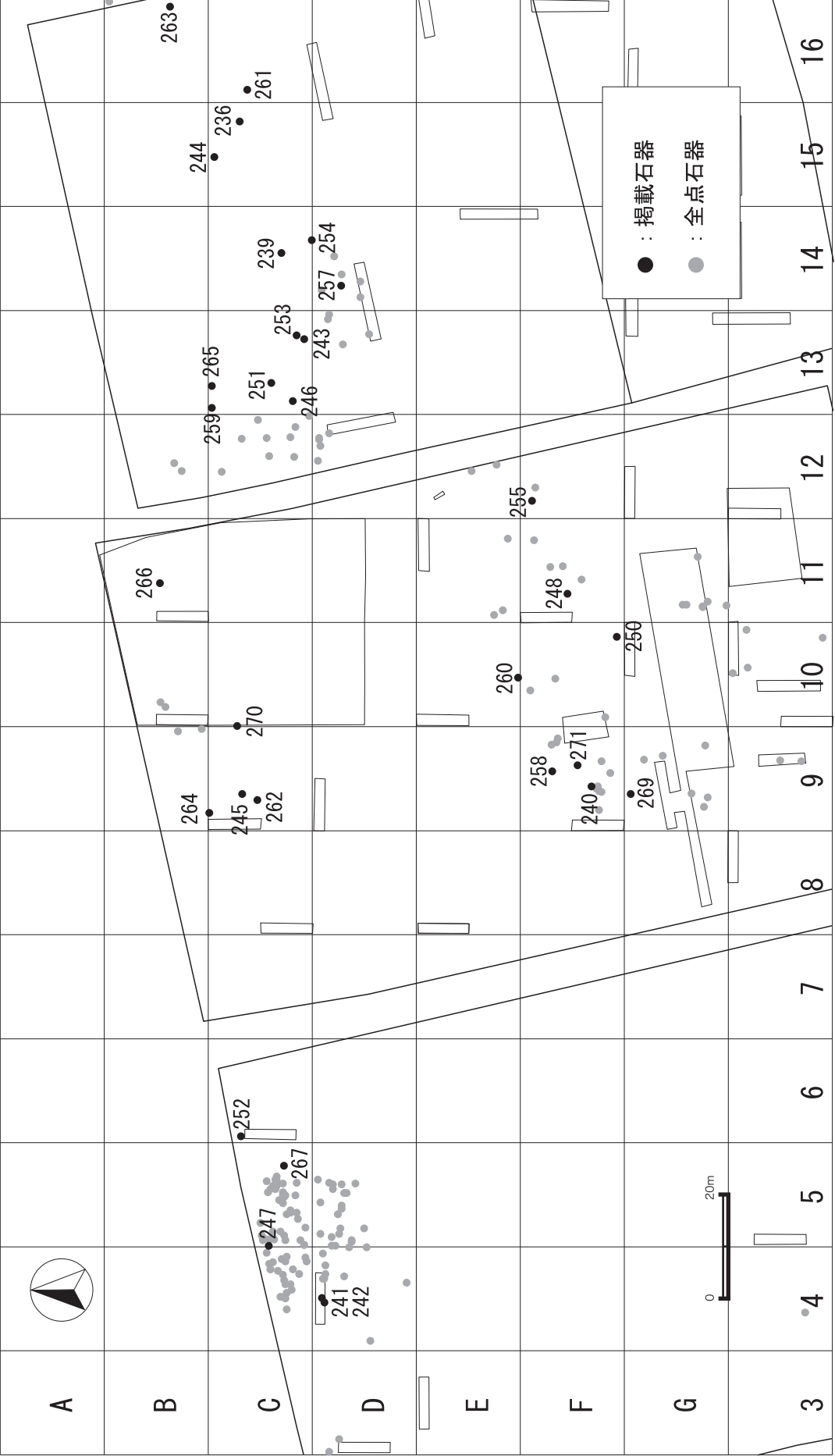
XV類土器は1点である。233は尖底の器形である。外面の文様はIX類土器と類似した条痕文が施されている。D-13区で出土している。

XVI類土器（第41図 234・235）

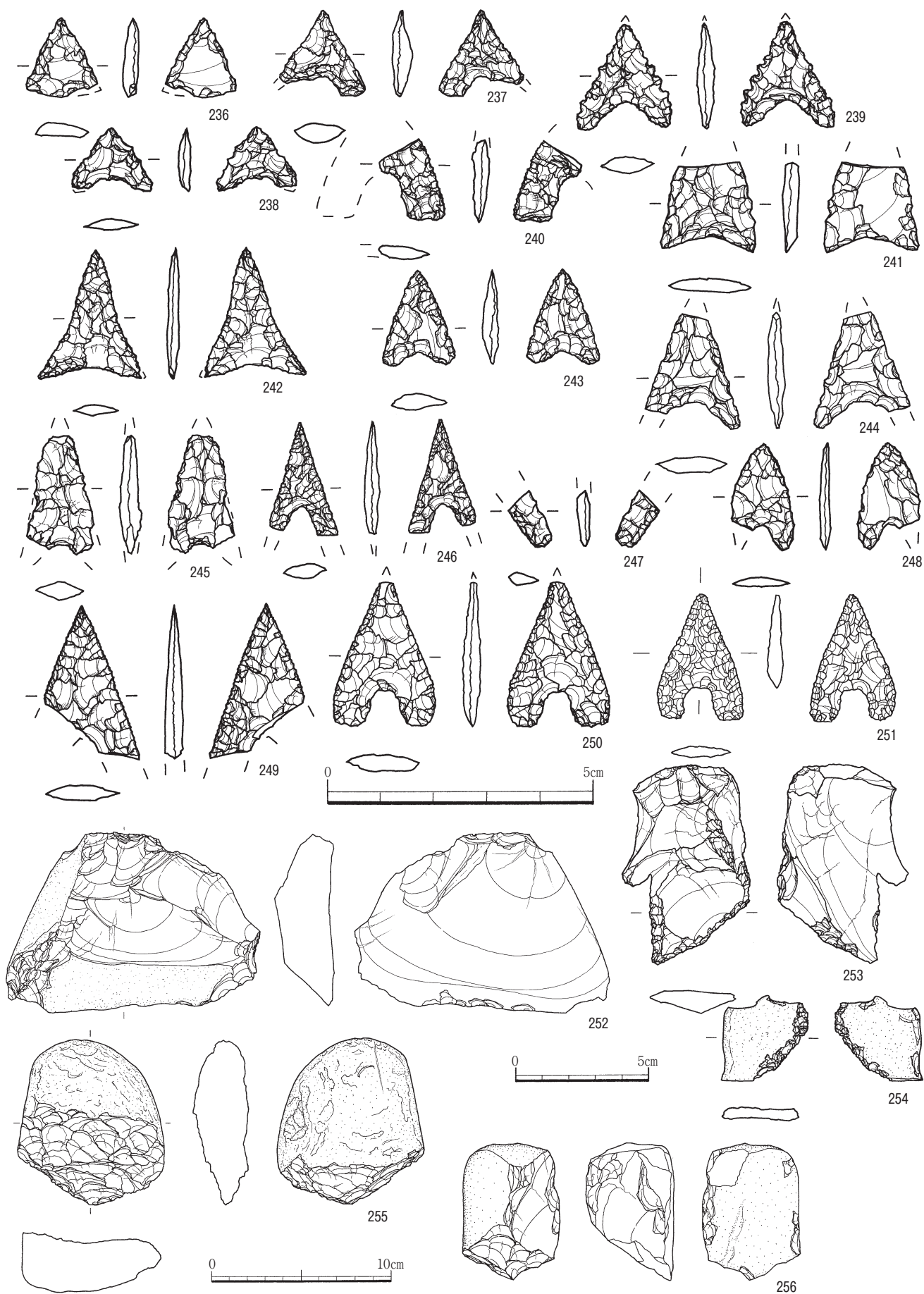
早期の特徴を持つものの、細分化が不可能なものを一括しXVI類として扱った。234と235は底部である。234の底部外面は磨かれている。235は底部から大きく開いて立ち上がるものである。C-13, 16区で出土している。

縄文時代早期 土器観察表

挿図 番号	掲載 番号	層位	出土区	部位	色調		胎土				焼成	外 面	内 面	類	遺物番号	備考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他						
第38図	171	Ⅳ	C-6	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ナデ	Ⅵ	2323	
	172	Ⅳ	B-15	胴部	灰黄	黒褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・条痕文	ナデ	Ⅶ	3826, 3371	
	173	Ⅳ	C-15	胴部	にぶい橙	黒褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・条痕文	ナデ	Ⅶ	3276, 2983	
	174	Ⅳ	B-11	口縁部	にぶい褐	にぶい黄橙	○	○	○		良	貝殻押し引き文	ナデ	Ⅷ	11, 12	
	175	Ⅲ	南原内堀	胴部	にぶい橙	明黄褐	○	○			良	貝殻条痕文	ナデ	Ⅷ	5 T	
	176	Ⅲ	C-5	口縁～胴部	にぶい黄褐	にぶい褐	○	○	○		良	貝殻条痕文・貝殻刺突文	ナデ	Ⅸ	2635, 2634, 2638 2846, 2064, 2667	
	177	Ⅳ	C-5	口縁部	にぶい黄橙	浅黄橙	○	○	○		良	貝殻条痕文・貝殻刺突文	ナデ	Ⅸ	2459, 2464	
	178	Ⅳ	C-5	口縁部	にぶい褐	褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ナデ	Ⅸ	2476	
	179	Ⅳ	C-6	口縁部	灰黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ナデ	Ⅸ	1800	
	180	Ⅳ	C-6	口縁部	にぶい褐	黒褐	○	○	○		良	貝殻刺突文 綾杉状貝殻条痕文	ナデ	Ⅸ	2326	
	181	Ⅲ	C-5	口縁部	暗灰黄	にぶい赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅸ	2606, 2552	
	182	Ⅳ	C-6	口縁部	黒褐	褐	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ナデ	Ⅸ	2360	
	183	Ⅳ	C-5	口縁部	にぶい黄褐	にぶい褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ナデ	Ⅸ	2474	
	184	Ⅳ	E-2	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ナデ	Ⅸ	2307	
	185	Ⅲ	C-4	口縁部	にぶい褐	にぶい橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・ヘラ刺突文 綾杉状貝殻条痕文	ナデ	Ⅸ	2743	補修孔
	186	Ⅶ	E-2	口縁部	明褐	黄褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・ヘラ刺突文	ナデ	Ⅸ	2309	
	187	Ⅳ	D-3	口縁部	黒褐	黒褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・ヘラ刺突文 綾杉状貝殻条痕文	ナデ	Ⅸ	2275	
	188	Ⅲ	C-4	口縁部	黄褐	黄褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・ヘラ刺突文	ナデ	Ⅸ	2779	
	189	Ⅳ	C-6	口縁部	にぶい黄褐	にぶい赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅸ	2073	
	190	表採	C-6	口縁部	にぶい褐	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ナデ	Ⅸ	1786	
第39図	191	Ⅳ	C-5	口縁部	にぶい橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ナデ	Ⅸ	2501	
	192	Ⅳ	C-6	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ナデ	Ⅸ	2886	
	193	Ⅲ	B-11	胴部	明褐	橙	○	○			良	綾杉状貝殻条痕文	ナデ	Ⅸ	1	
	194	Ⅳ	B-11	胴部	明褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	貝殻条痕文	ナデ	Ⅸ	7	
	195	Ⅲ	C-4	胴部	黒褐	にぶい褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ナデ	Ⅸ	2767	
	196	Ⅲ	C-4	胴部	黒褐	黒褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ナデ	Ⅸ	2784	
	197	Ⅳ	-	底部	にぶい赤褐	橙	○	○	○		良	ナデ	貝殻条痕文	Ⅸ	-	
	198	Ⅲ	C-5	底部	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○		良	ナデ	ヘラケズリ後ナデ	Ⅸ	2617, 2629, 2639	
	199	Ⅲ	B-12	口縁部	褐	灰黄褐		○	○		良	貝殻条痕文	ナデ	X	3322	
	200	Ⅲ	B-11	口縁部	にぶい黄橙	暗灰黄	○	○	○		良	貝殻条痕文	ナデ	XI	4	
	201	Ⅳ	B-11	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ナデ	XI	13	
	202	Ⅳ	C-16	胴部	灰黄褐	橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ	XI	3397	
	203	Ⅳ	C-14	胴部	浅黄	浅黄	○	○	○		良	貝殻条痕文	ナデ	XI	3229	
	204	Ⅲ	D-14	口縁～胴部	にぶい褐	橙	○	○	○		良	山形押型文	山形押型文・ヘラケズリ後ナデ	XII	3220, 3215, 3216 8 T-11	
	205	Ⅳ	E-10	口縁部	にぶい褐	にぶい橙	○		○		良	山形押型文	山形押型文・ヘラケズリ後ナデ	XII	8T-13	
	206	Ⅳ	C-15	口縁部	明褐	にぶい褐	○		○		良	山形押型文	山形押型文・ヘラケズリ後ナデ	XII	2955	
	207	Ⅳ	E-10	口縁～胴部	にぶい黄橙	にぶい橙	○		○		良	山形押型文	山形押型文・ヘラケズリ後ナデ	XII	8T-3, 4	
	208	Ⅳ	F-11	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	○		○		良	山形押型文	山形押型文・ヘラケズリ後ナデ	XII	11T-32	
	209	Ⅳ	B-16	口縁部	暗灰黄	黒褐		○			良	山形押型文	山形押型文・ヘラケズリ後ナデ	XII	3394	
	210	Ⅳ	C-17	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○	○		良	山形押型文	波状文・ヘラケズリ後ナデ	XII	3413	口唇部に刺突
第40図	211	Ⅳ	C-13	口縁部	黒褐	にぶい褐	○	○	○		良	刻目・山形押型文	刻目・ヘラケズリ	XII	3445, 3475, 3466	
	212	Ⅳ	C-13	胴部	黒褐	橙	○	○	○		良	貝殻条痕文・山形押型文	ヘラケズリ	XII	3465, 3470, 3468 34?	
	213	Ⅳ	C-13	胴部	黒褐	橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ	XII	3463, 3470, 3?72	
	214	Ⅲ	D-14	底部	にぶい黄橙	暗黄灰	○	○			良	山形押型文・ナデ	ナデ	XII	3210	
	215	Ⅳ	C-13	口縁部	にぶい褐	浅黄橙		○			良	楕円押型文	楕円押型文・ヘラケズリ	XII	3497	
	216	Ⅳ	C-13	口縁～胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○	○		良	楕円押型文	楕円押型文・ヘラケズリ	XII	3494, 3677	
	217	Ⅳ	F-11	口縁部	灰黄褐	にぶい黄橙		○	○		良	楕円押型文	楕円押型文・ナデ	XII	11T-33	
	218	Ⅲ	D-14	口縁部	褐	にぶい橙		○	○		良	楕円押型文	楕円押型文・ナデ	XII	3222	
	219	Ⅳ	C-13	口縁部	橙	にぶい橙		○	○		良	楕円押型文	楕円押型文・ヘラケズリ	XII	3477	
	220	Ⅳ	B-15	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄橙		○	○		良	楕円押型文	楕円押型文・ナデ	XII	3379	
	221	Ⅳ	C-13	口縁部	橙	にぶい褐	○	○	○		良	楕円押型文	楕円押型文・ナデ	XII	3258	
	222	Ⅳ	F-11	口縁部	にぶい褐	にぶい褐		○			良	楕円押型文・ナデ	楕円押型文・ヘラケズリナデ	XII	11T-31	
第41図	223	Ⅲ	D-14	胴部	にぶい橙	明赤褐	○	○	○		良	楕円押型文	ヘラケズリ後ナデ	XII	3221	
	224	Ⅳ	C-13	胴部	にぶい黄褐	にぶい橙	○	○	○		良	楕円押型文	ヘラケズリ後ナデ	XII	3442, 3438	
	225	Ⅳ	C-13	底部	にぶい黄橙	にぶい褐	○	○	○		良	楕円押型文	ヘラケズリ	XII	3452	
	226	Ⅳ	D-13	底部	にぶい褐	灰黄褐	○	○	○		良	楕円押型文	ヘラケズリ後ナデ	XII	3548	
	227	Ⅳ	C-15	胴部	暗褐	明赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ナデ	XII	2964	いちご
	228	Ⅲ	B-12	口縁部	橙	にぶい褐	○	○	○		良	結節状文	結節状文・ヘラケズリ	XIII	3310, 3313, 3311	
	229	Ⅲ	B-12	胴部	黒褐	明赤褐		○	○		良	撫糸文	ヘラケズリ後ナデ	XIII	3268, 3273, 33? 3318	
	230	Ⅲ	B-12	胴～底部	黒褐	明赤褐	○	○	○		良	撫糸文	ヘラケズリ後ナデ	XIII	3270, 3267, 3271	
	231	Ⅶ	C-11	胴部	にぶい赤褐	明赤褐		○	○		良	綾杉状貝殻条痕文		XIV	2201	内面剥離
	232	Ⅲ	D-4	胴部	剥落	橙		○	○		良	綾杉状貝殻条痕文		XIV	2810	内面剥離
	233	Ⅲ・Ⅳ	D-12・13	胴～底部	灰黄褐	橙	○	○			良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	XV	3202, 3203, 3204 3205, 3297	
	234	Ⅳ	C-13	底部	にぶい赤褐	褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	Ⅸ	3441	
	235	Ⅳ	C-16	底部	にぶい褐	にぶい黄橙	○	○	○		良	ナデ	ヘラケズリ後ナデ	Ⅸ	2942	



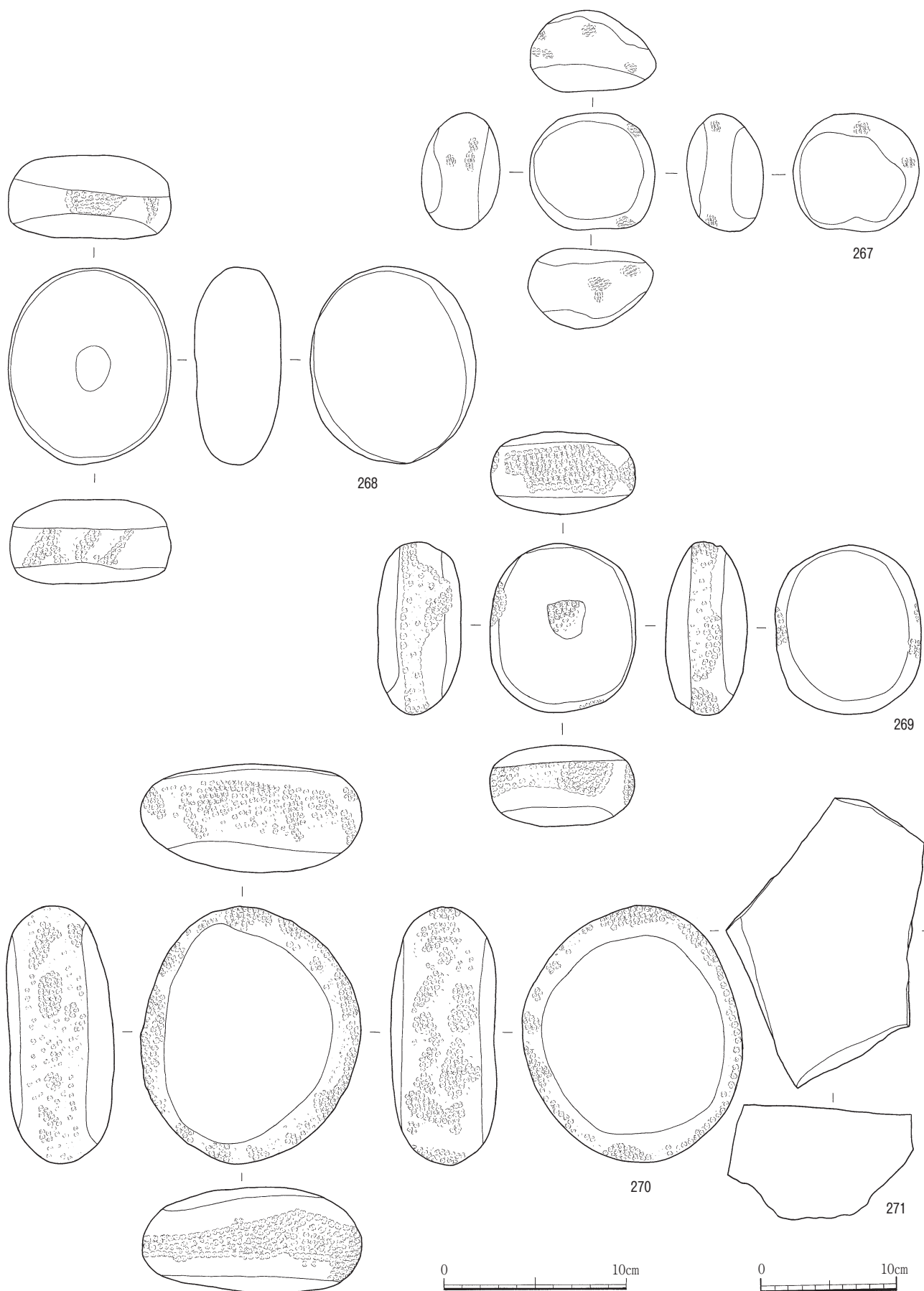
第42図 縄文時代早期 石器出土状況



第43図 縄文時代早期 石器 1



第44図 縄文時代早期 石器2



第45図 縄文時代早期 石器3

②石器

縄文時代早期の石器は石鏃とスクレイパー、礫器、磨製石斧、打製石斧、磨石、敲石、石皿が出土している。

石鏃（第43図 236～251）

石鏃は、欠損品を含めて16点を図化した。すべて打製石鏃で、入念な交互剥離により調整されている。石材は黒曜石C、チャート、頁岩、粘板岩である。

236は背面に自然面が残る正三角形で、基部に丸みを持ち一部に欠損がある。237は逆刺にU字状の挟りのある正三角形で、基部の一部に欠損がある。238は逆刺が深く丸く挟れて幅がやや大きく、基部の一部が欠損している。239は逆刺が深く丸く挟れた正三角形で、先端部が一部欠損している。240は側辺が外湾的な作りで、先端部と左側面が欠損している。241は背面に自然面が残り、先端部に欠損があり、逆刺は浅く直線的である。242は側辺が内湾的な作りで、逆刺は浅く直線的で、先端部は鋭い作りになっている。243は逆刺が浅く直線的な二等辺三角形である。244は逆刺が丸い二等辺三角形で、先端部と基部の一部が欠損している。245は断面形が菱形で、先端部と基部を欠損している。246は逆刺が深く直線的に挟れ、先端部が鋭い二等辺三角形で、基部の一部が欠損している。247は逆刺が深く直線的に挟れる二等辺三角形で、右側面の基部のみを残して欠損している。248は側辺が外湾的な作りで、背面に自然面が残り、基部の一部に欠損がある。249は逆刺が深く直線的に挟れ、先端部が鋭い二等辺三角形で、基部の一部を欠損している。250は側辺が内湾的な作りになっていて、逆刺はU字形で先端部が欠損している。251は側辺が内湾的な作りで、逆刺はU字形である。

スクレイパー（第42図 252～254）

スクレイパーは3点図化した。石材は頁岩と黒色安山岩、玉髄である。剥片の側縁に連続した剥離を施し刃部としている。252は厚めの剥片を素材とし、自然面を残した横長剥片の下部を刃部としている。253は下部の左右側縁に二次加工を施し、刃部としている。254は右側縁の両面に二次加工を施し、刃部としている。2号集石遺構近くのV層直上で出土

している。

礫器（第42図 255, 256）

礫器は2点図化した。石材は頁岩である。255は自然面を多く残した円礫の下部に、二次加工を施し、刃部としている。256は一部自然面を残した丸みを帯びた角礫の下部に、二次加工を施し、刃部としている。敲石の転用品の可能性はある。

磨製石斧（第44図 257～260）

磨製石斧は、4点図化した。石材は頁岩と砂岩である。257は両面および両側縁に、丁寧な研磨加工を施し、刃部にも入念な調整を施している。258と259は上部を欠損し、刃部には丁寧な研磨加工を施している。260は上部および裏面を欠損している。

打製石斧（第44図 261～263）

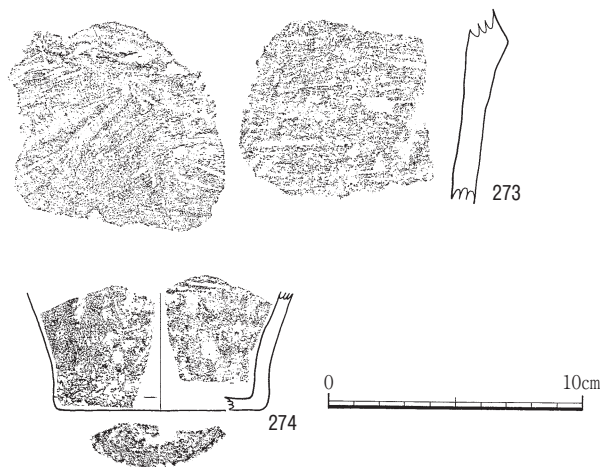
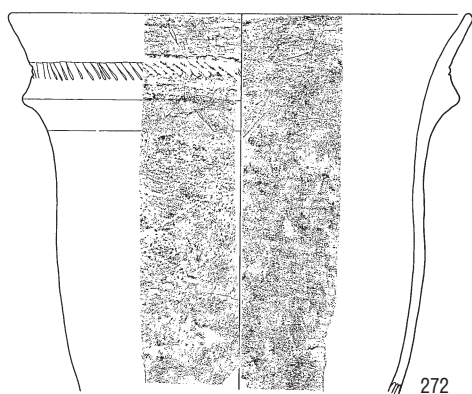
打製石斧は、3点図化した。石材は頁岩である。261は礫器から打製石斧への転用品の可能性はある。262は刃部を欠損している。263は自然面を多く残した礫の上部と下部、右側面に二次加工を施している。

磨石・敲石・石皿（第44図 264～266・第45図）

磨石・敲石は、7点図化した。石材は砂岩と安山岩である。264は下部と左側縁に敲打痕がみられる。265は正面と上部、下部、右側縁に敲打痕がみられる。266は正面中央に大きな敲打痕がみられ、上部から右側縁をまわり、下部へと連続的に続く敲打痕がみられる。267はほぼ全周縁に敲打痕がみられる。268は正面中央と上部、下部に敲打痕がみられる。269は正面中央とほぼ全周縁に敲打痕がみられる。270はほぼ全周縁に敲打痕がみられる。271は石皿で、表面が赤化している。

縄文時代早期 石器観察表

挿図 番号	掲載 番号	器種	出土区	層	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	遺物番号	備考
第 43 図	236	打製石鏃	C-15	IV	チャート	1.50	1.35	0.25	0.48	2960	A - a - a
	237	打製石鏃	P-9	IV	黒曜石 A	1.20	0.75	0.25	0.35	2936	A - a - c
	238	打製石鏃		IV	頁岩	1.65	1.05	0.25	0.70		A - a - b
	239	打製石鏃	C-14	IV	黒曜石 B	2.00	1.75	0.35	0.74	3426	A - a - c
	240	打製石鏃	F-9	IV	黒曜石 C	2.70	1.25	0.25	1.40	231	
	241	打製石鏃	D-4	IV	シルト質頁岩	2.40	1.55	0.25	0.75	1848	
	242	打製石鏃	D-4	IV	チャート	1.50	1.35	0.25	0.46	2270	A - a - b
	243	打製石鏃	C-13	IV	黒曜石 B	2.70	1.75	0.30	1.14	3437	A - b - b
	244	打製石鏃	C-15	IV	頁岩	2.20	1.20	0.25	1.00	3423	A - b - b
	245	打製石鏃	E-17	IV	頁岩	2.00	0.90	0.20	0.44	30	
	246	打製石鏃	C-13	IV	チャート	1.00	0.65	0.25	0.15	3506	A - b - d
	247	打製石鏃	C-4	IV	黒曜石 B	2.40	1.55	0.25	0.82	2651	
	248	打製石鏃	F-11	V	硅質頁岩	2.80	1.45	0.30	1.14	84	C - b - d
	249	打製石鏃	I-3	IV	黒曜石 B	1.80	0.90	0.25	0.50	2317	A - c - d
	250	打製石鏃	F-10	IV	黒曜石 B	2.15	0.85	0.20	0.50	172	A - c - d
	251	打製石鏃	C-13	IV	黒曜石 B	2.20	1.25	0.35	1.02	3485	A - b - d
	252	スクレイパー	C-6	IV	頁岩	6.60	9.30	2.05	176.00	2415	
	253	スクレイパー	C-13	IV	黒色安山岩	7.20	4.85	0.85	52.44	3436	
	254	スクレイパー	C-14	IV	玉髄	3.20	3.20	0.50	2.95	3424	
	255	礫器	F-12	IV	頁岩	9.20	8.20	3.10	300.00	58	
	256	礫器	E-8	9 T	硅質頁岩	7.60	5.40	5.00	200.00		敲石転用品 ?
第 44 図	257	磨製石斧	D-14	IV	頁岩	14.85	6.15	2.95	400.00		
	258	磨製石斧	F-9	IV	砂岩	9.10	6.25	3.40	300.00	278	
	259	磨製石斧	B-13	IV	頁岩	4.80	4.20	1.70	44.80	3355	
	260	磨製石斧	E-10	IV	頁岩	7.90	6.70	1.60	80.42	177	
	261	打製石斧	C-16	IV	硅質頁岩	7.60	6.15	3.10	167.60	2946	
	262	打製石斧	D-16	IV	頁岩	9.00	3.40	1.40	58.80	31	
	263	打製石斧	B-16	IV	頁岩	12.55	4.90	0.90	108.50	3390	
	264	磨石・敲石	D-12	IV	砂岩	12.50	5.70	4.30	410.00	28	
	265	敲石	B-13	IV	安山岩	9.60	4.80	2.40	150.00	3357	
	266	磨石・敲石	D-14	IV	砂岩	8.70	8.10	5.60	510.00	16	
第 45 図	267	磨石・敲石	C-5	IV	砂岩	6.90	6.40	4.30	710.00	2483	
	268	磨石・敲石	G-10	V	安山岩	10.80	8.95	4.60	720.00	12T	
	269	磨石・敲石	G-9	V 上	砂岩	14.10	12.00	5.70	1260.00	288	
	270	磨石・敲石	C-10	IV	安山岩	9.20	8.00	4.50	510.00	2285	
	271	石皿	F-9	IV	安山岩	19.90	13.60	8.30	3200.00	280	



第46図 縄文時代後期 土器

3 縄文時代後期の調査

縄文時代後期については、遺構は検出されず土器の出土のみであった。

272～274はⅦ類に分類されるものである。272は口縁部下位に断面三角形の突帯と細かな爪形文が廻る。器面調整は外面が条痕文で、内面はナデである。273は胴部である。内外面とも条痕文が施される。274は底部である。

4 縄文時代晩期の調査

縄文時代晩期の調査としては集石遺構が2基と掘立柱建物跡は9棟、柱穴列が18基検出された。遺物は土器、石器が出土している。

(1) 遺構

集石遺構（第47図）

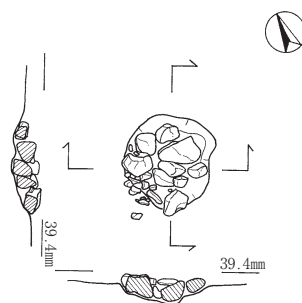
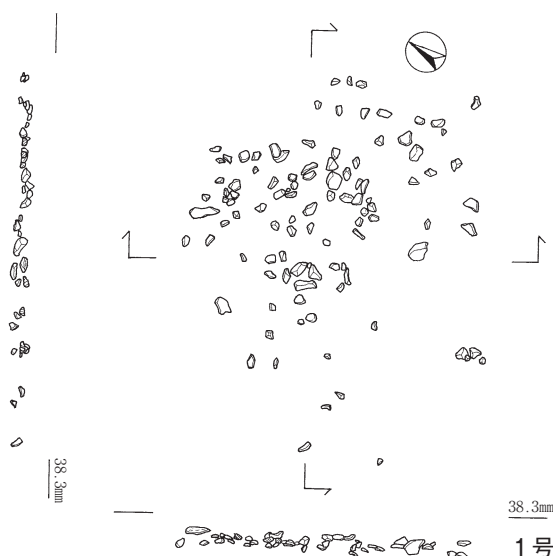
集石遺構は、Ⅲ層上面でE-9区とB-11区から2基検出された。

1号集石（第47図）

E-9区で検出された。103個の小礫からなる集石で、平均重量は38.1gである。長径約160mm×短径約120mmを測り、掘り込みはなく、石は散石している。

2号集石（第47図）

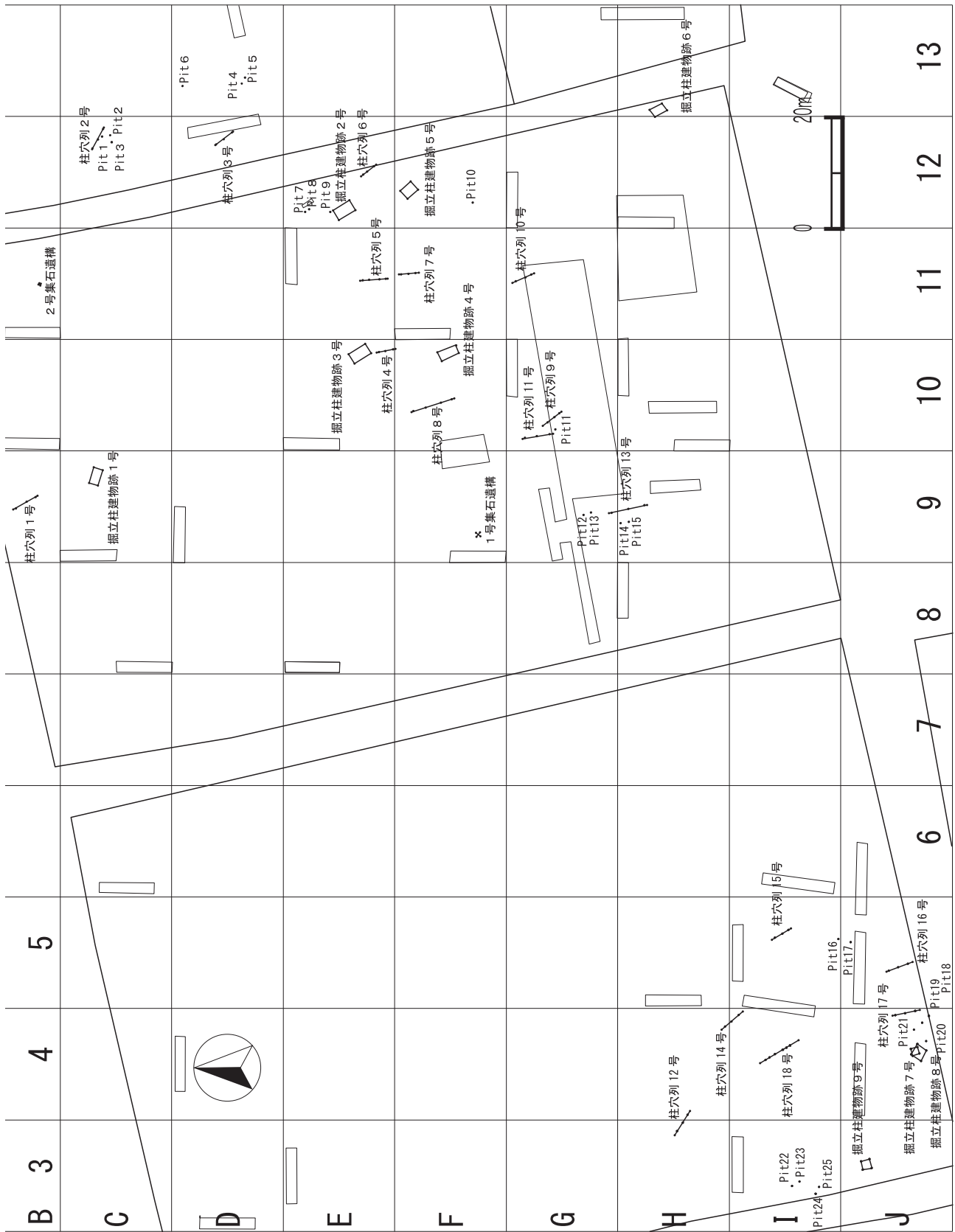
B-11区で検出された。27個の握り拳大の礫からなる集石で、平均重量は259.8gである。長径約40cm×短径約35cmを測り、約10cmの掘り込みを有する。



2号集石遺構

1号集石遺構

第47図 集石遺構



第48図 縄文時代晚期 遺構配置図

掘立柱建物跡（第49図～第51図）

掘立柱建物跡と考えられる遺構は、9棟検出された。いずれも柱が4本の1間×1間のもので、簡易な建物であったと思われる。柱穴内等からの遺物は出土していない。各掘立柱建物跡の詳細については、観察表を参考にされたい。なお6号については、掘削深度の関係から、Ⅲ層上面までの発掘調査であったため、平面図実測で終了している。

柱穴列（第52図～第54図）

3個以上の柱穴が並んだものを柱穴列と見なして掲載した。柱穴3個からなるものが15基、4個、5個、6個からなるものがそれぞれ1基であった。軸は、概ね北西または北北西にとっており、掘り方の平面形状は円もしくは楕円である。

掘立柱建物跡観察表（小数点第2位以下は四捨五入）

掘立柱建物跡1号 1間×1間									
棟部	柱穴番号	梁間柱間(cm)	柱穴番号	桁行柱間(cm)	Pit	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)	掘り方
	P1-P2	212.0	P1-P4	184.0	1	13.0	-	-	-
	P3-P4	218.0	P2-P3	177.0	2	20.0	22.0	20.0	円
					3	17.0	27.0	25.5	円
					4	33.0	27.0	26.0	円

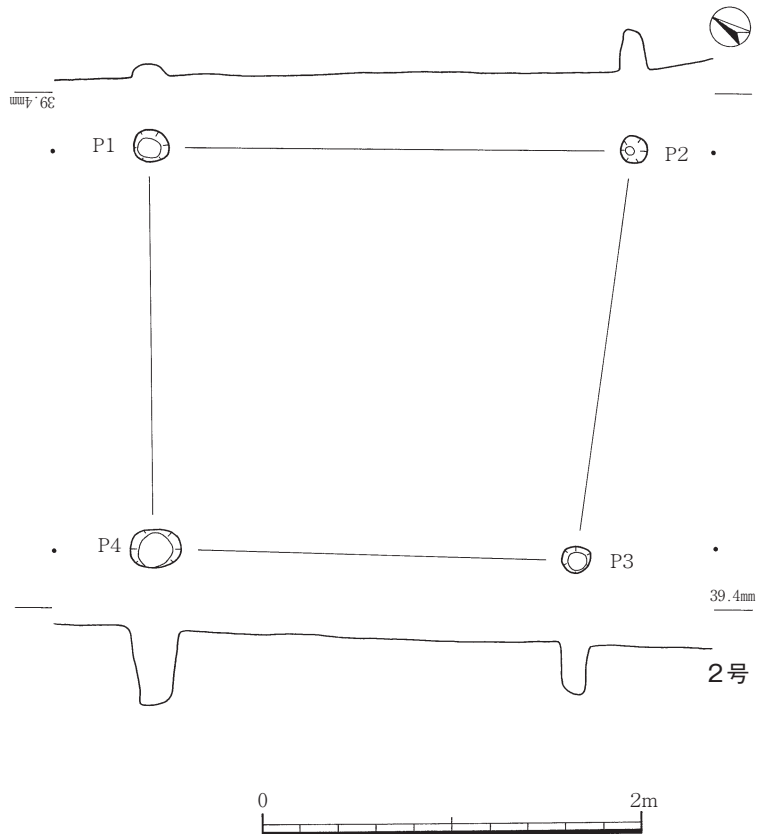
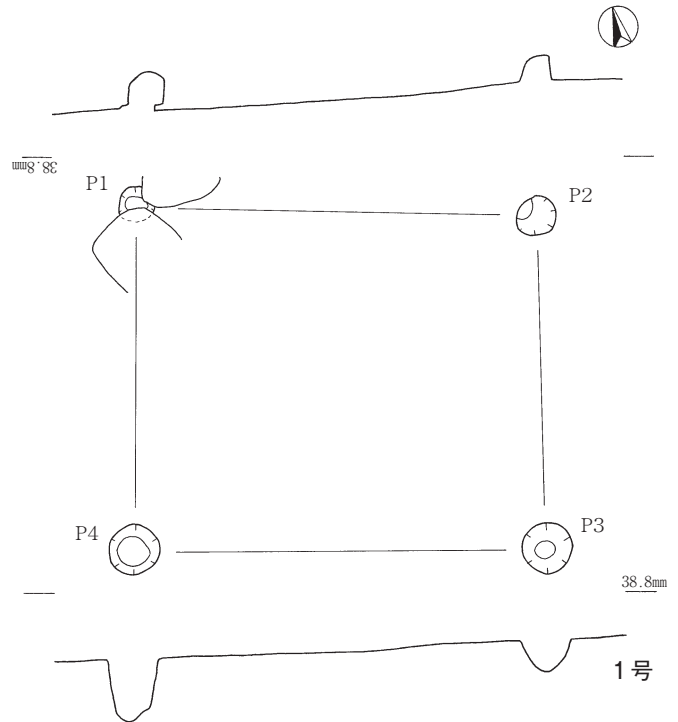
掘立柱建物跡2号 1間×1間									
棟部	柱穴番号	梁間柱間(cm)	柱穴番号	桁行柱間(cm)	Pit	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)	掘り方
	P1-P2	255.0	P1-P4	212.0	1	7.0	19.0	17.0	円
	P3-P4	224.0	P2-P3	217.0	2	22.0	15.0	14.0	円
					3	26.0	16.0	14.0	円
					4	41.0	27.0	15.0	楕円

掘立柱建物跡3号 1間×1間									
棟部	柱穴番号	梁間柱間(cm)	柱穴番号	桁行柱間(cm)	Pit	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)	掘り方
	P1-P2	270.0	P1-P4	220.0	1	52.0	20.0	18.0	円
	P3-P4	283.0	P2-P3	204.0	2	13.0	21.0	16.0	円
					3	44.0	17.0	15.0	円
					4	43.0	25.0	23.0	円

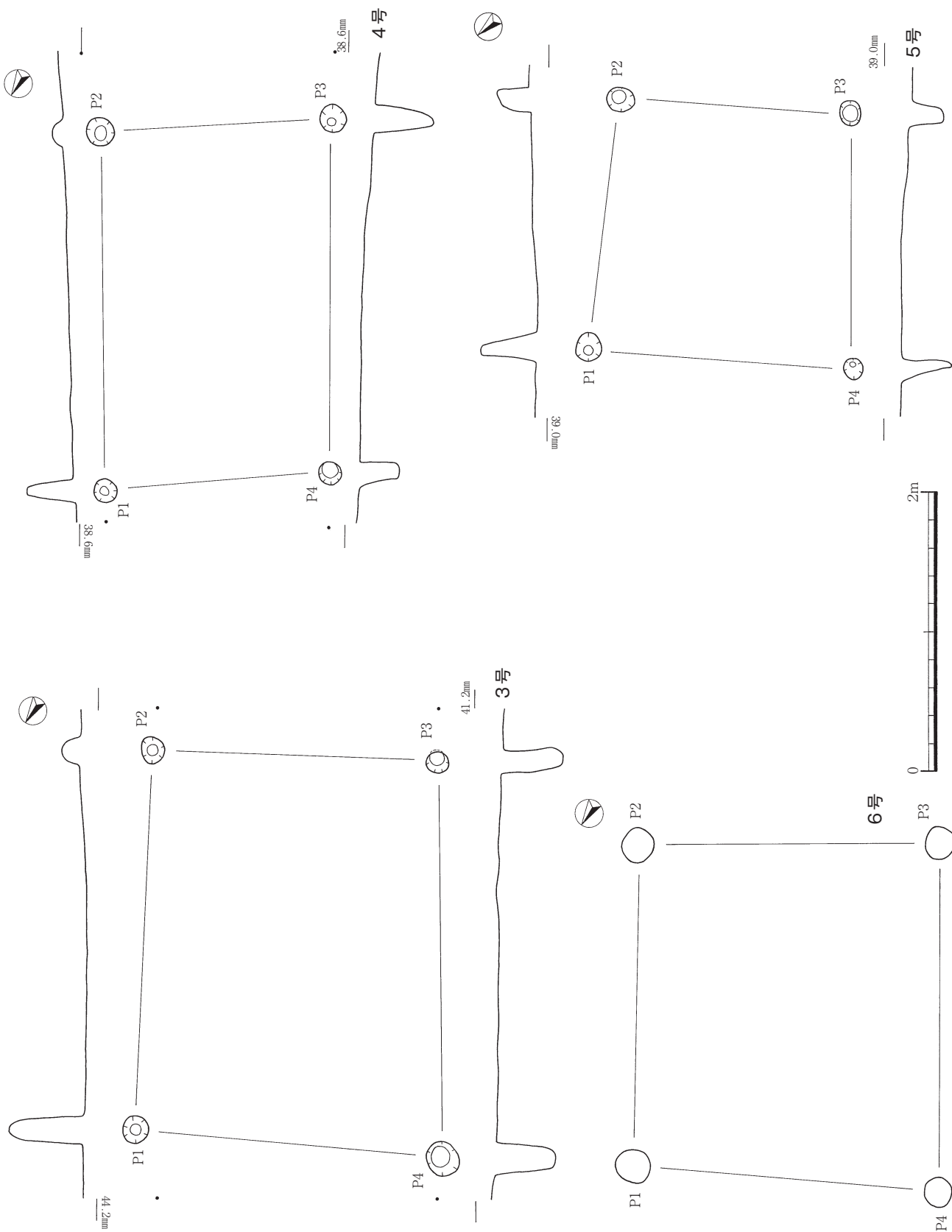
掘立柱建物跡4号 1間×1間									
棟部	柱穴番号	梁間柱間(cm)	柱穴番号	桁行柱間(cm)	Pit	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)	掘り方
	P1-P2	257.0	P1-P4	162.0	1	34.0	16.5	16.0	円
	P3-P4	253.0	P2-P3	165.0	2	8.0	21.0	20.0	円
					3	43.0	20.0	19.0	円
					4	29.0	17.0	16.5	円

掘立柱建物跡5号 1間×1間									
棟部	柱穴番号	梁間柱間(cm)	柱穴番号	桁行柱間(cm)	Pit	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)	掘り方
	P1-P2	180.0	P1-P4	190.0	1	39.0	20.5	19.0	円
	P3-P4	184.0	P2-P3	165.0	2	23.0	20.0	17.5	円
					3	24.0	18.5	15.0	円
					4	35.0	15.0	14.0	円

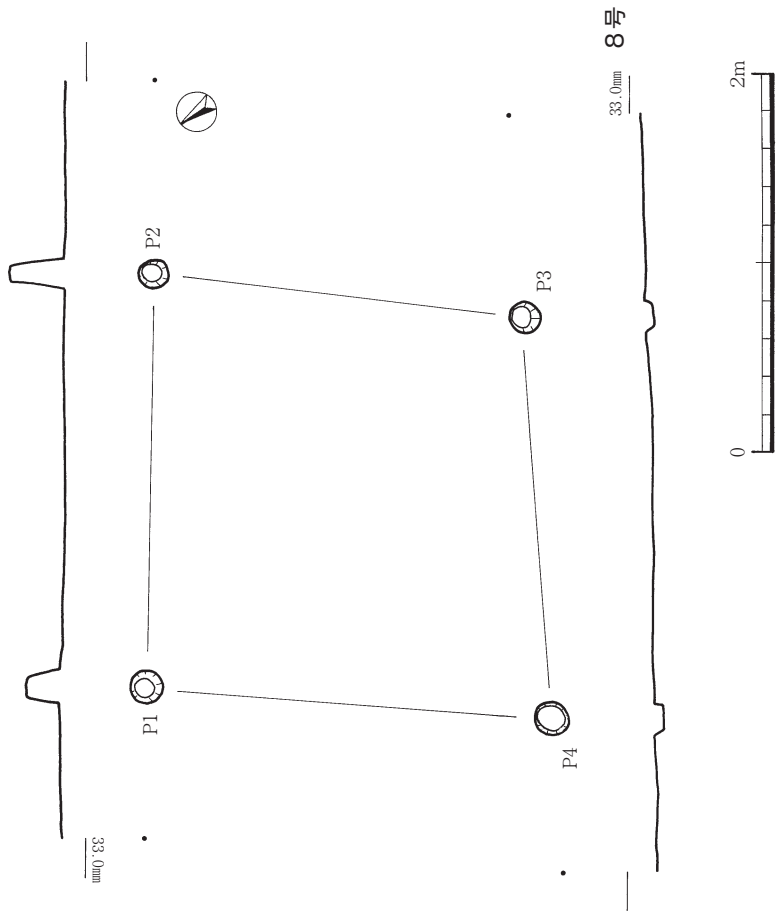
掘立柱建物跡6号 1間×1間									
棟部	柱穴番号	梁間柱間(cm)	柱穴番号	桁行柱間(cm)	Pit	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)	掘り方
	P1-P2	163.0	P1-P4	155.0	1	-	19.0	17.0	円
	P3-P4	177.0	P2-P3	155.0	2	-	18.0	16.0	円
					3	-	17.0	15.0	円
					4	-	16.0	14.0	円



第49図 掘立柱建物跡1



第50图 掘立柱建物跡2



掘立柱建物跡 8号

1間×1間

棟部	柱穴番号	梁間柱間(cm)	柱穴番号	桁行柱間(cm)	Pt	深さ(cm)	長さ(cm)	短径(cm)	掘り方
棟部	P1-P2	218.0	P1-P4	150.0	1	17.0	17.5	17.0	円
	P2-P3	213.0	P2-P3	152.0	2	29.0	16.0	15.0	円
	P3-P4				3	5.0	16.0	15.5	円
					4	6.0	17.0	16.0	円

掘立柱建物跡 9号

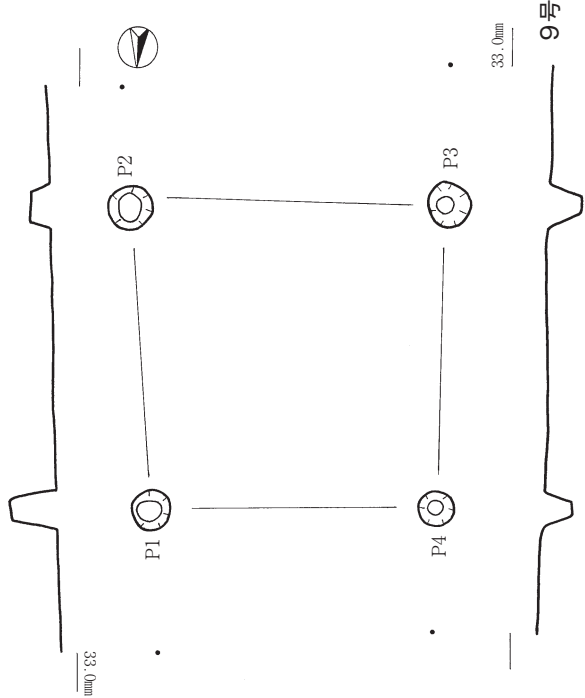
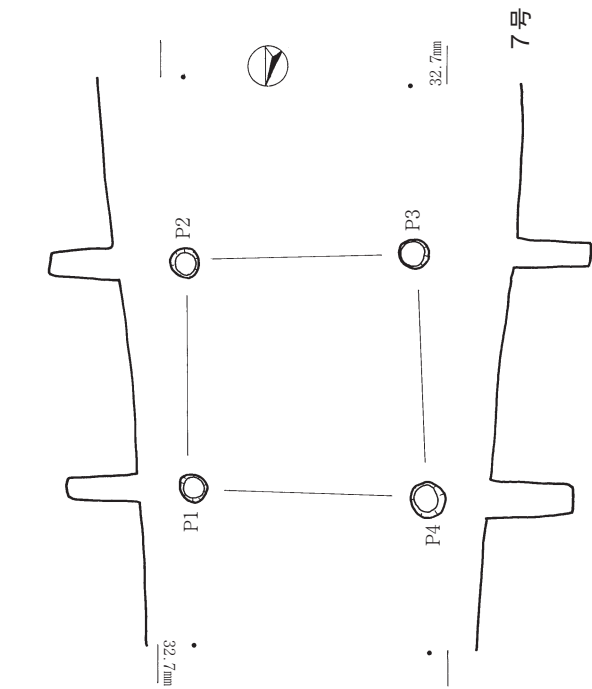
1間×1間

棟部	柱穴番号	梁間柱間(cm)	柱穴番号	桁行柱間(cm)	Pt	深さ(cm)	長さ(cm)	短径(cm)	掘り方
棟部	P1-P2	160.0	P1-P4	150.0	1	25.0	21.0	20.0	円
	P2-P3	160.0	P2-P3	152.0	2	11.0	24.0	22.0	円
	P3-P4				3	18.0	23.5	23.0	円
					4	17.0	20.0	19.0	円

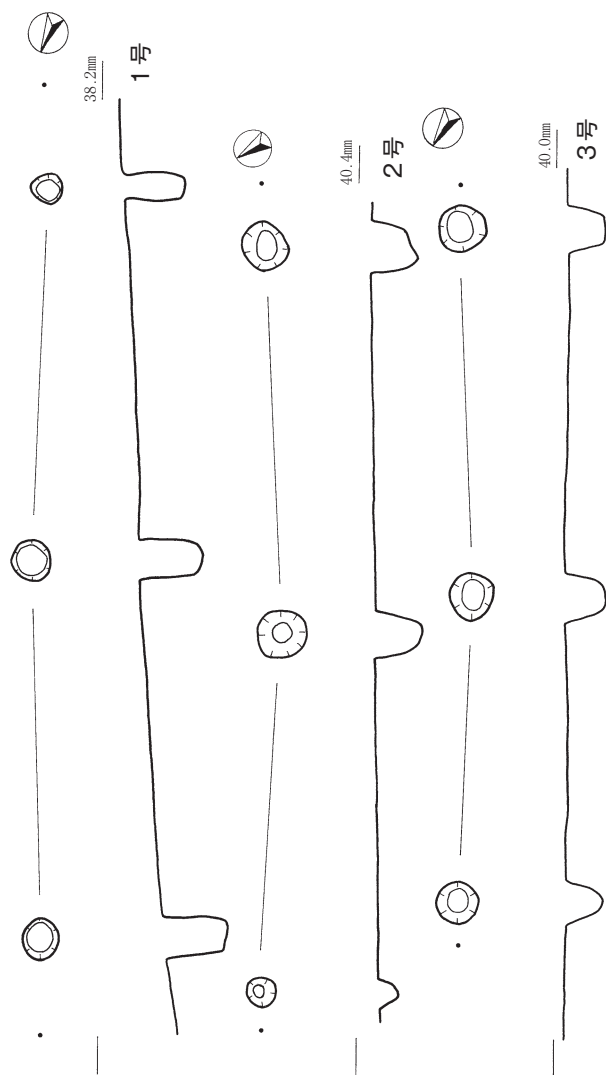
掘立柱建物跡 7号

1間×1間

棟部	柱穴番号	梁間柱間(cm)	柱穴番号	桁行柱間(cm)	Pt	深さ(cm)	長さ(cm)	短径(cm)	掘り方
棟部	P1-P2	120.0	P1-P4	152.0	1	37.0	16.0	13.0	円
	P2-P3	131.0	P2-P3	149.0	2	36.0	16.0	15.0	円
	P3-P4				3	-	16.0	15.0	円
					4	45.0	20.0	18.0	円

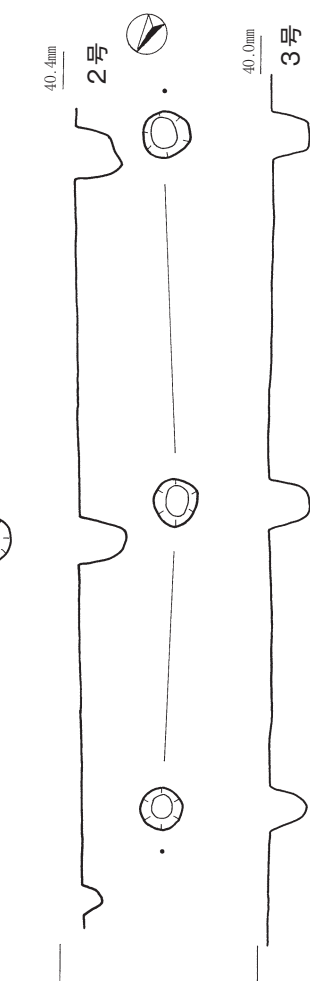


第51図 掘立柱建物跡3



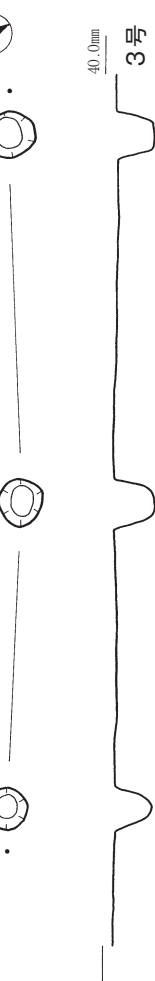
柱穴列1号 B-9

Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	柱間距離 (cm)	全長 (cm)
1	34.0	22.0	19.0	円	P1-P2 199.0	
2	34.0	21.0	20.0	円	P2-P3 194.0	393.0
3	33.0	16.0	13.5	楕円	P3-P4	



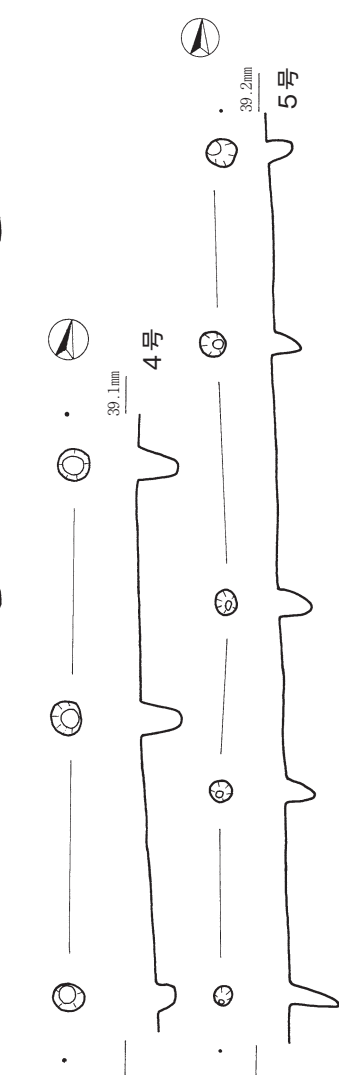
柱穴列2号 C-12

Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	柱間距離 (cm)	全長 (cm)
1	11.0	16.0	16.0	円	P1-P2 189.0	
2	25.0	26.0	25.0	円	P2-P3 203.0	392.0
3	25.0	27.0	22.0	円	P3-P4	



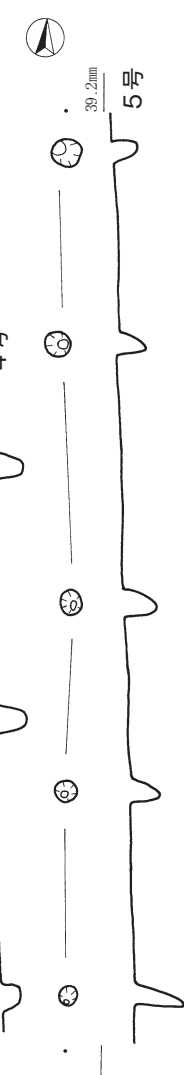
柱穴列3号 D-12

Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	柱間距離 (cm)	全長 (cm)
1	20.0	23.0	21.0	円	P1-P2 162.0	
2	23.0	26.0	22.0	円	P2-P3 194.0	356.0
3	20.0	25.0	25.0	円	P3-P4	



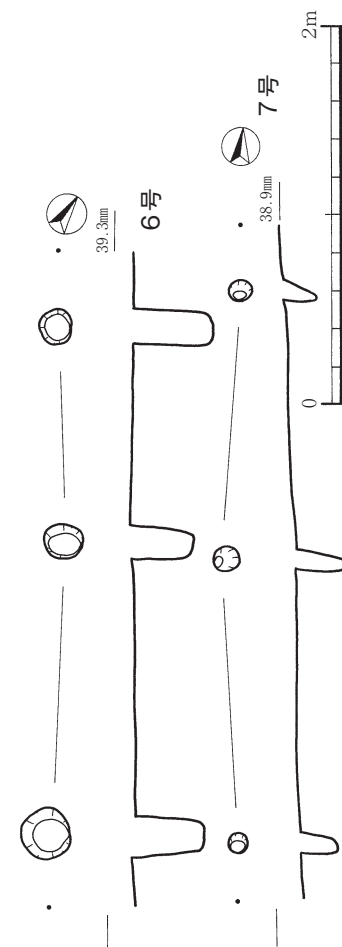
柱穴列4号 E-10

Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	柱間距離 (cm)	全長 (cm)
1	10.0	16.0	14.0	円	P1-P2 145.0	
2	22.0	18.0	16.0	円	P2-P3 134.0	279.0
3	22.0	17.0	16.0	円	P3-P4	



柱穴列5号 E-11

Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	柱間距離 (cm)	全長 (cm)
1	27.0	11.0	9.0	円	P1-P2 109.0	
2	15.0	12.0	11.0	円	P2-P3 100.0	
3	17.0	14.0	11.0	楕円	P3-P4 138.0	450.0
4	15.0	14.0	13.0	円	P4-P5 103.0	
5	14.0	16.0	13.0	円		



柱穴列6号 E-12

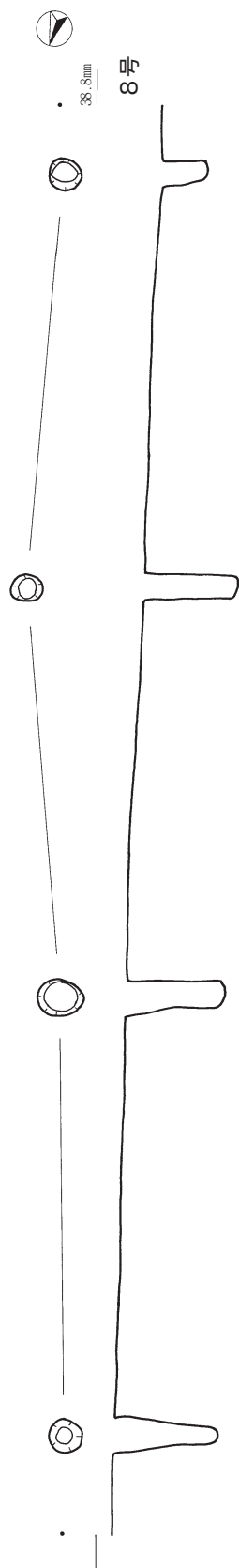
Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	柱間距離 (cm)	全長 (cm)
1	39.0	27.0	25.0	円	P1-P2 153.0	
2	33.0	20.0	18.0	楕円	P2-P3 115.0	268.0
3	33.0	19.0	16.0	楕円	P3-P4	



柱穴列7号 F-11

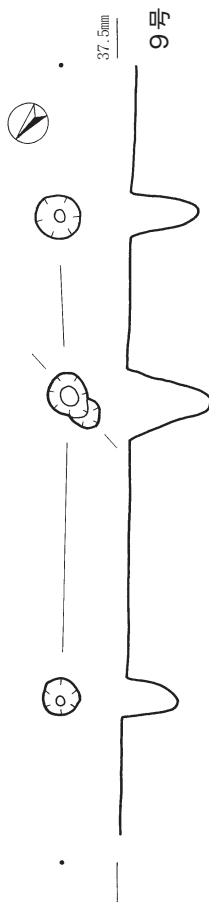
Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	柱間距離 (cm)	全長 (cm)
1	20.0	11.0	8.0	楕円	P1-P2 151.0	
2	27.0	13.0	12.0	円	P2-P3 141.0	292.0
3	18.0	12.0	10.0	円	P3-P4	

第52図 柱穴列 1



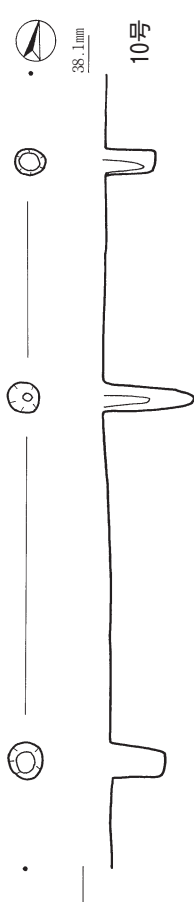
柱穴列 8号 F-10

Pit	深さ (cm)	長さ (cm)	短径 (cm)	掘り方	柱間距離 (cm)	全長 (cm)
1	59.0	20.0	19.0	円	P1-P2	242.0
2	55.0	27.0	20.0	楕円	P2-P3	229.0
3	53.0	19.0	15.0	楕円	P3-P4	234.0
4	26.0	19.0	18.0	円	P4-P5	



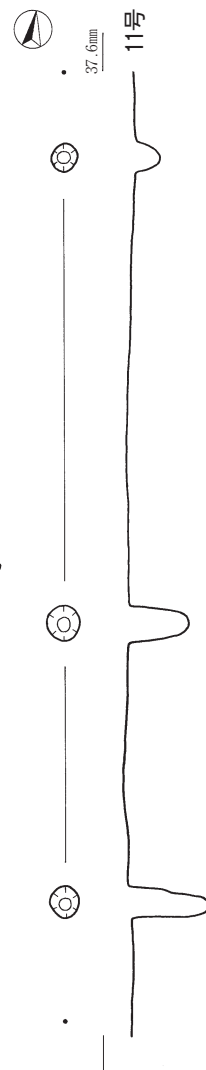
柱穴列 9号 G-10

Pit	深さ (cm)	長さ (cm)	短径 (cm)	掘り方	柱間距離 (cm)	全長 (cm)
1	30.0	21.0	20.0	円	P1-P2	161.0
2	44.0	34.0	21.0	変形	P2-P3	95.0
3	36.0	24.0	23.0	円	P3-P4	



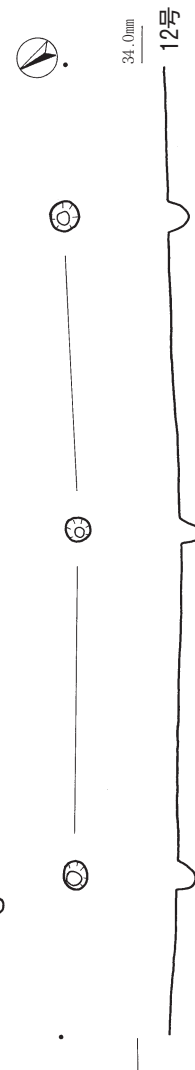
柱穴列 10号 G-11

Pit	深さ (cm)	長さ (cm)	短径 (cm)	掘り方	柱間距離 (cm)	全長 (cm)
1	29.0	19.0	17.0	円	P1-P2	193.0
2	46.0	17.0	15.0	円	P2-P3	125.0
3	29.0	15.0	14.0	円	P3-P4	



柱穴列 11号 G-10

Pit	深さ (cm)	長さ (cm)	短径 (cm)	掘り方	柱間距離 (cm)	全長 (cm)
1	43.0	17.0	15.0	円	P1-P2	148.0
2	32.0	19.0	18.0	円	P2-P3	245.0
3	13.0	16.0	14.0	円	P3-P4	

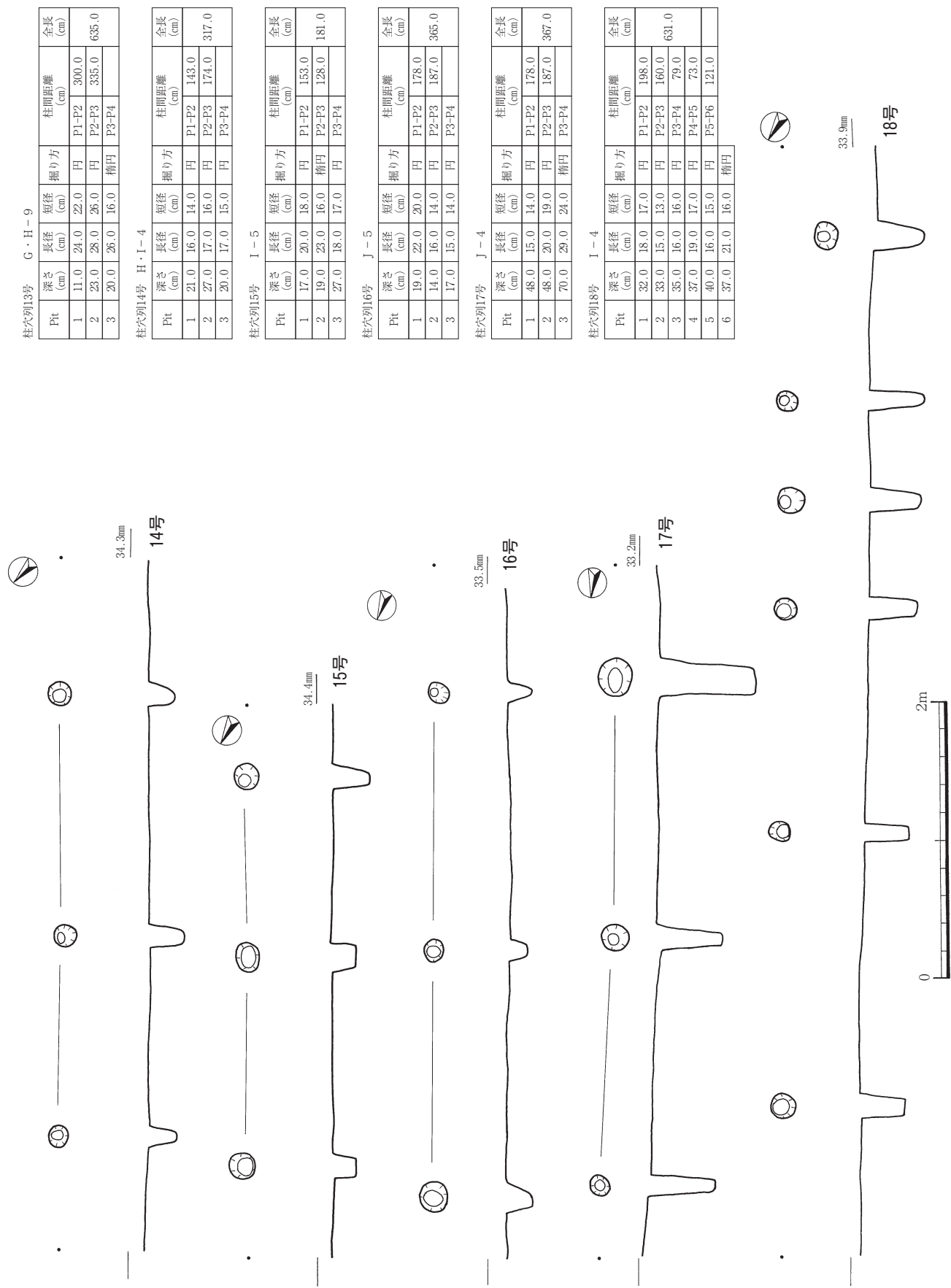


柱穴列 12号 H-3・4

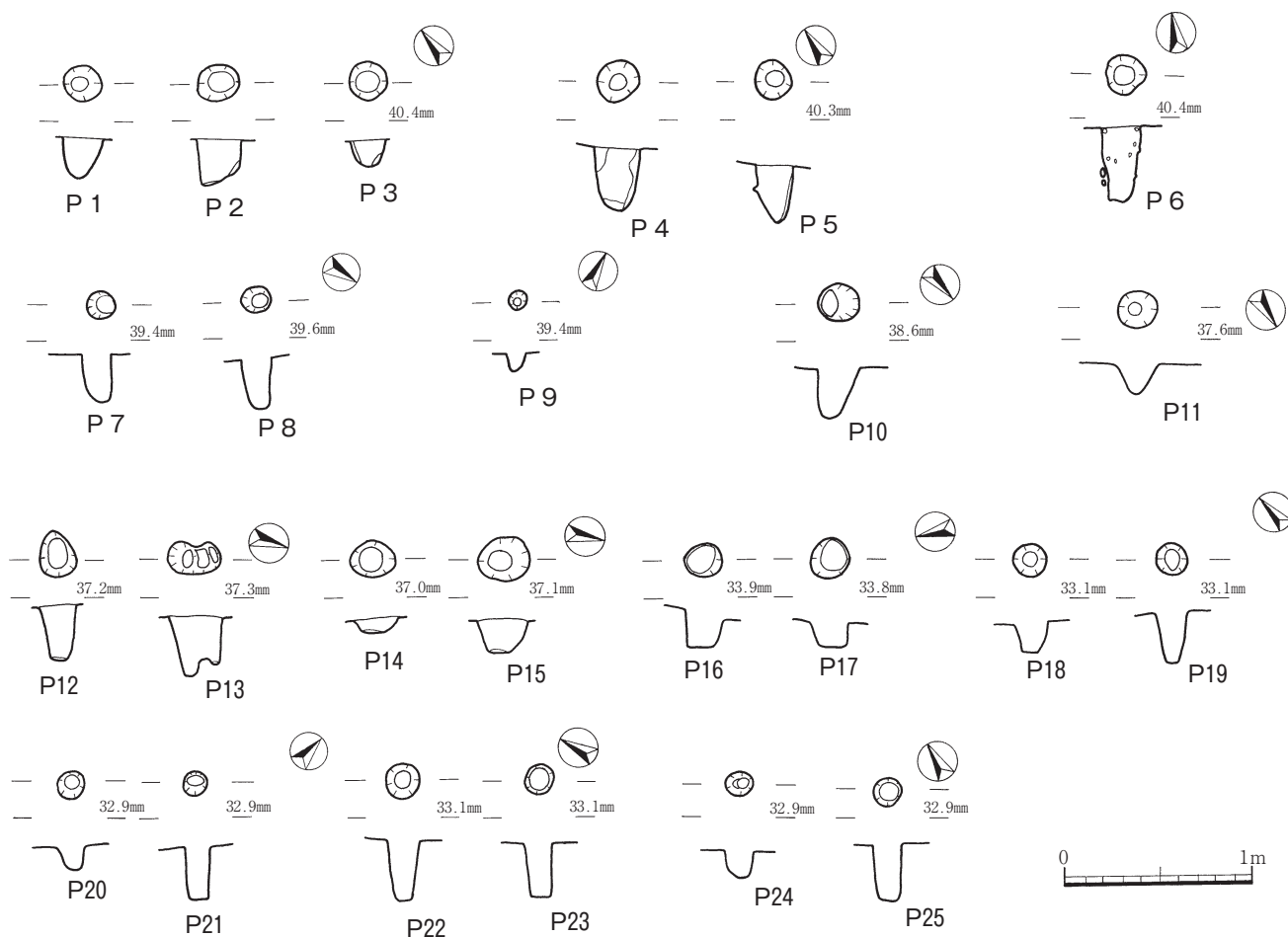
Pit	深さ (cm)	長さ (cm)	短径 (cm)	掘り方	柱間距離 (cm)	全長 (cm)
1	10.0	14.0	11.0	楕円	P1-P2	184.0
2	11.0	13.0	12.0	円	P2-P3	165.0
3	12.0	16.0	14.0	円	P3-P4	



第53図 柱穴列 2



第54図 柱穴列3



第55図 柱穴

各柱穴列の詳細については観察表を参考にされた
い。

柱穴（第55図）

柱穴が1個もしくは2個で、柱穴列にならなかった
ものを掲載した。

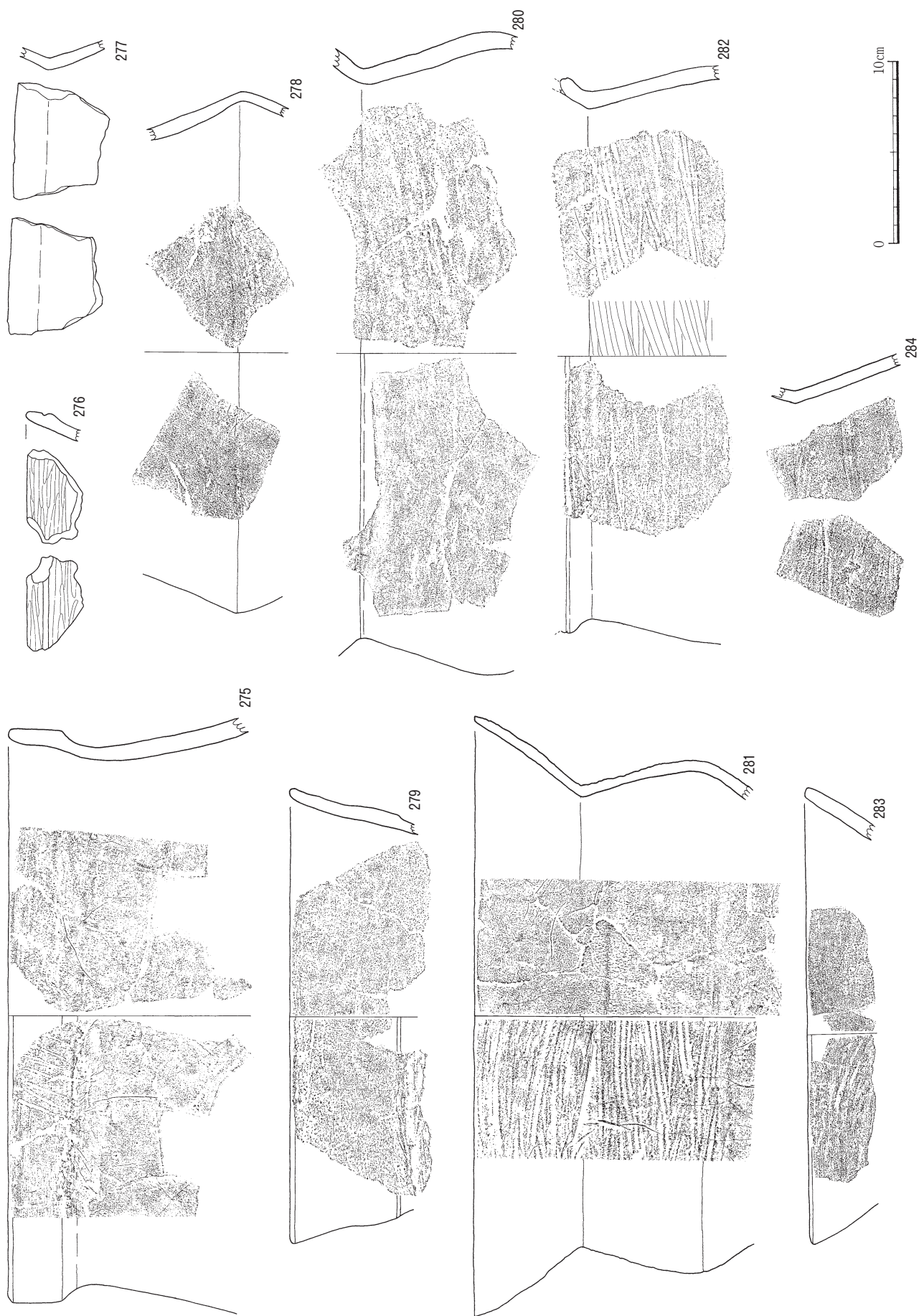
（2）遺物

①土器（第56図～第58図）

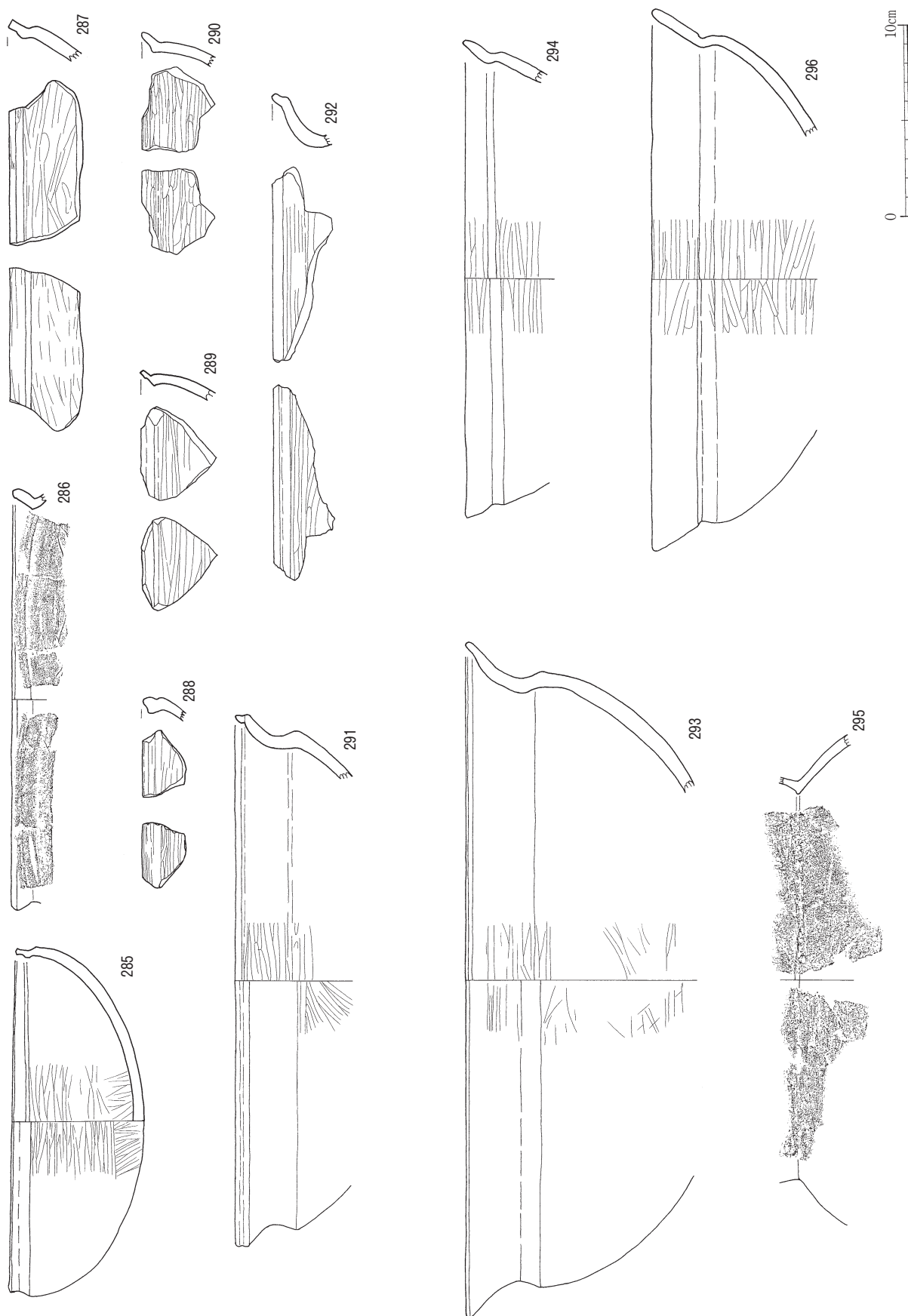
土器はⅪ類～ⅩⅩ類に分類した。

275～294は深鉢形土器である。275～279はⅪ類土
器に分類されるものである。275は口縁部文様帯の
一部に縦位の沈線が見られるものの、他は無紋であ
る。276は口縁部文様帯に2条の沈線を有する。
280～284はⅩⅨ類土器に分類されるものである。
280は口縁部がやや内湾しながら「逆ハの字」上に開
き、外面に条痕文が施される。

Pit	区	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
1	C-12	22.0	20.0	19.0	円
2	C-12	26.0	23.0	17.0	円
3	C-12	15.0	22.0	20.0	円
4	D-13	35.0	24.0	23.0	円
5	D-13	31.0	20.0	19.0	円
6	D-13	41.0	22.0	21.0	円
7	E-12	25.0	15.0	13.0	円
8	E-12	28.0	16.0	14.0	円
9	E-12	10.0	10.0	10.0	円
10	F-12	27.0	22.0	16.0	円
11	G-10	16.0	21.0	20.0	円
12	G-9	30.0	30.0	19.0	楕円
13	G-9	33.0	重複		
14	H-9	8.0	22.0	2.0	円
15	H-9	19.0	27.0	24.0	円
16	I-5	20.0	20.0	17.0	円
17	I-5	13.0	21.0	20.0	円
18	J-4	18.0	18.0	17.0	円
19	J-4	28.0	17.0	17.0	円
20	J-4	13.0	15.0	15.0	円
21	J-4	29.0	14.0	13.0	円
22	I-3	34.0	19.0	18.0	円
23	I-3	30.0	17.0	15.0	円
24	I-3	15.0	15.0	13.0	円
25	I-3	30.0	16.0	15.0	円



第56図 縄文時代晩期 土器 1

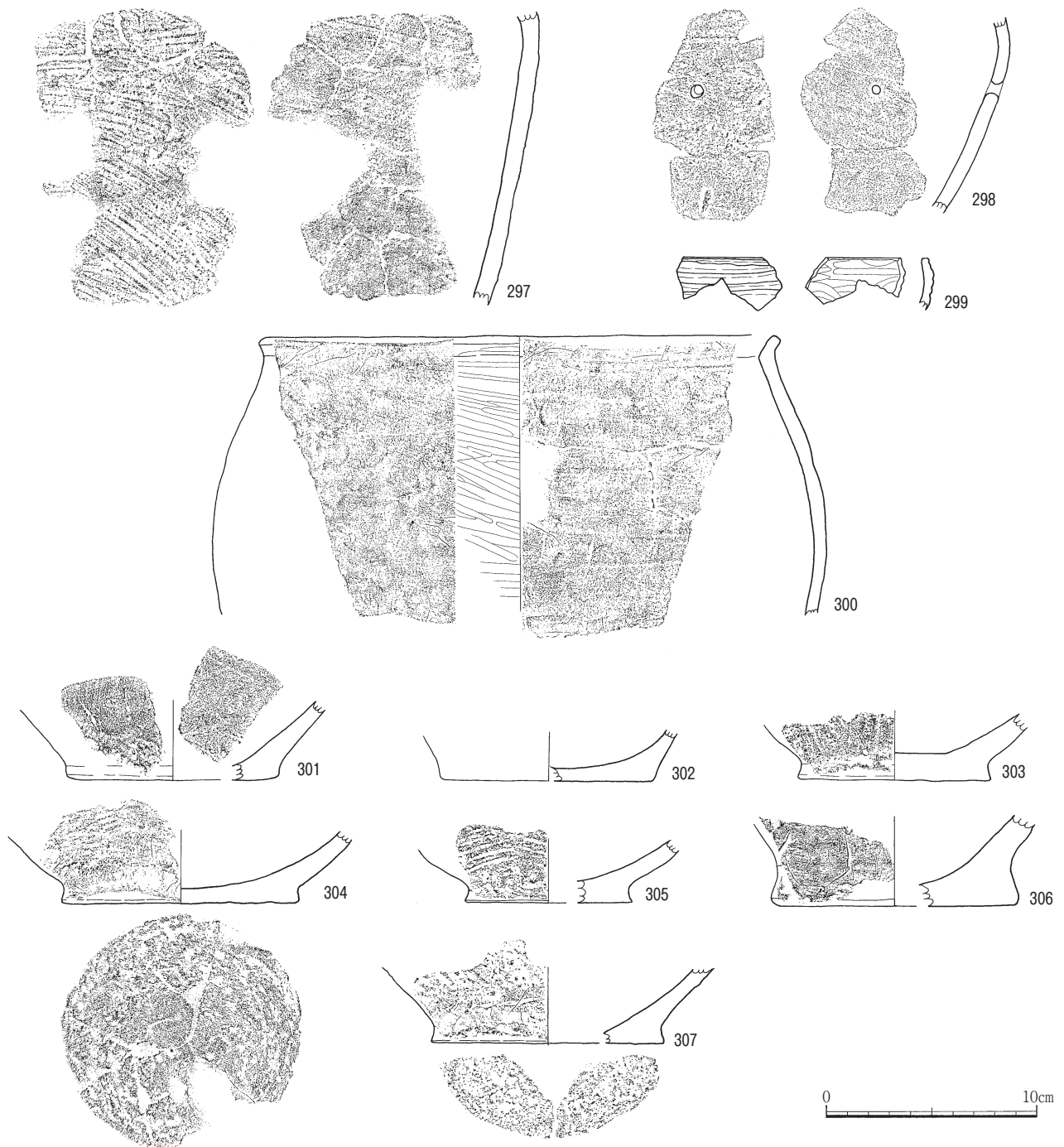


285～296は浅鉢形土器である。全てXⅨ類土器に分類した。286～290は浅いマリ状の形状を呈するもので、口縁部から頸部、頸部から肩部の幅が短い。器面調整は内外面とも丁寧なミガキが施される。281～285は口縁部がやや長くのびるものである。器面調整は内外面ともミガキ調整である。

286は頸部から肩部が長くなるものである。

297・298は深鉢形土器の胴部である。XⅧ類土器に分類されるものと思われる。297は条痕文による外面調整が施される。298は胴部に補修孔が穿たれたものである。補修孔の形状は円形を呈し、ドリル状の工具であけられたものと思われる。

299・300はXⅩ類に分類されるものである。299は口縁部がやや内湾し、5条の沈線が回るものである。



第58図 縄文時代晩期 土器3

る。浅いマリ状の形状になるものと思われる。300は口縁部が短く、口唇部は平坦につくられる。胴部は丸みを帯び、外面は丁寧なミガキ調整が施される。内面はヘラ状の工具によるナデ調整である。

301～307は、XⅧ類またはXⅨ類土器の底部である。301・302は底部と胴部の境がはっきりしない形状のものである。303・307は底部と胴部の境がはっきりしており、縊れが見られるものである。

②石器（第59図～第65図）

縄文時代晩期の石器は石鏃、石匙、石斧、磨石、石皿などが出土している。

石鏃（第59図 308～324・第60図 325～346）

石鏃は、39点図化した。すべて打製石鏃でほとん

どのものが丁寧な交互剥離が施されている。欠損しているものは18点あった。石鏃分類表を元に分類を行うと決りの深いものが多かった。石材は黒曜石が多く19点あった。

石匙（第61図 347・348）

石匙は2点図化した。側縁部に明瞭な決りが施され、つまみ部が形成されている。下部にも剥離が施されている。Ⅲ層で検出されたため晩期に掲載したが形状や層の攪乱等から早期の可能性もあるものである。

楔形石器・スクレイパー（第61図 349・350）

349は黒曜石製の楔形石器である。側縁に剥離を施している。350は横型のスクレイパーである。一部欠損しているが、側縁部に剥離を施している。

縄文時代後期・晩期 土器、その他の遺物観察表

挿図番号	掲載番号	層位	部位	出土区	色調		胎土				焼成	外 面	内 面	類	遺物番号	備 考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他						
第46図	272	Ⅲ	口縁～胴部	H-10	にぶい黄橙	にぶい黄褐		○	○		良	条痕文、爪形文	ナデ	Ⅷ	309,310,311	爆付着、市来式同一
	273	Ⅲ	胴部	P-9	明赤褐	にぶい赤褐		○	○		良	条痕文	ナデ	Ⅷ	2907	市来式
	274	Ⅲ	胴～底部	H-10	にぶい黄橙	にぶい黄		○	○		良	ナデ	ナデ	Ⅷ	308,312,314	市来式同一
第56図	275	Ⅲ	口縁～胴部	G,H-10	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○		良	ミガキ後ナデ	ナデ	Ⅷ	393,399,464,384,460,323,344,435,444,449,447	上加世田、深鉢
	276	Ⅲ	口縁～胴部	D-4	褐灰	褐灰	○	○			良	ミガキ	ミガキ	Ⅷ	2811	深鉢
	277	Ⅲ	口縁部	H-10	灰黄	明黄褐	○	○			良	ナデ	ナデ	Ⅷ	317	
	278	Ⅱ	口縁～胴部	E-11	にぶい黄橙	褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	Ⅷ	70	深鉢
	279	Ⅲ	胴部	H-4	にぶい褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	Ⅷ	1888	
	280		口縁～胴部		明黄褐	明黄褐		○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅷ		深鉢
	281	Ⅲ	口縁～胴部	F-11	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○	○		良	ナデ	ヘラケズリ	Ⅷ	294,107	深鉢
	282	Ⅲ	胴部	F-9	にぶい褐	にぶい黄褐	○	○			良	ナデ	ナデ	Ⅷ	266,267,268	
	283	Ⅲ	口縁部	F-10	にぶい黄橙	にぶい黄褐		○	○		良	ヘラナデ	ナデ	Ⅷ	124,125,131	
	284	Ⅲ	頸部～胴部	B-11	にぶい黄橙	にぶい褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	Ⅷ	1	深鉢
第57図	285	Ⅲ	完形品	C-12	にぶい橙	明赤褐		○	○		良	ミガキ	ミガキ	Ⅷ	3274	浅鉢
	286	Ⅲ	口縁部	D-12	明黄褐	橙	○	○			良	ミガキ	ナデ	Ⅷ	3146,3143,3168	浅鉢
	287		口縁部	P-8	にぶい黄	にぶい黄橙		○	○		良	ミガキ	ミガキ	Ⅷ	2921	浅鉢
	288	Ⅱ	口縁部	P-9	暗灰黄	黒褐		○	○		良	ミガキ	ミガキ	Ⅷ	2910	浅鉢
	289	Ⅲ	口縁部	F-11	黒褐	黒		○			良	ミガキ	ミガキ	Ⅷ	91	浅鉢
	290	Ⅲ	口縁部	F-11	黒褐	黒褐		○			良	ミガキ	ミガキ	Ⅷ	93	浅鉢
	291	Ⅲ	口縁部	D-12	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	ミガキ	ミガキ	Ⅷ	3107,3108,3145,3175	浅鉢
	292	Ⅱ	口縁部	F-11	にぶい黄褐	にぶい黄		○	○		良	ミガキ	ミガキ	Ⅷ	83	浅鉢
	293	Ⅲ,Ⅳ	口縁部	C-12	にぶい黄橙	明黄褐	○	○	○		良	ミガキ	ミガキ	Ⅷ	3274	浅鉢
	294	Ⅲ	口縁部	C-12	明赤褐	橙		○	○		良	ミガキ	ミガキ	Ⅷ	2994,2996,3286,2995,3003,3002	浅鉢
	295	Ⅲ	口縁部		にぶい黄褐	にぶい黄橙		○	○		良	ミガキ	ミガキ	Ⅷ		浅鉢
	296	Ⅲ	頸部	C-12	灰黄	にぶい黄橙		○	○		良	ナデ	ナデ	Ⅷ	3038	深鉢
第58図	297	Ⅲ	胴部	F-9,11	にぶい橙	にぶい黄褐		○	○		良	貝殻条痕文	ナデ	Ⅷ	297,103,104,108,101,202,98,97,293,291,106	深鉢
	298	Ⅲ	胴部	C-12	黄褐	明黄褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	Ⅷ	3084,3069,3076	深鉢
	299	Ⅳ	口縁部	H-10	灰黄褐	灰黄褐		○	○		良	沈線文、ミガキ	ミガキ	Ⅷ	417	
	300	Ⅲ	口縁～胴部	N-8?	灰	灰黄			○		良	ナデ	ナデ	Ⅷ	60T	
	301	Ⅲ	底部	I-5	にぶい褐	橙	○	○	○		良	ヘラナデ	ナデ	底部	1932	
	302	Ⅲ	底部	B-12	褐灰	明黄褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	底部	3316	
	303	Ⅲ	底部	D-4	褐	橙	○	○			良	ヘラナデ	ナデ	底部	1828,2834,2842	
	304	Ⅱ	底部	E-11	にぶい黄橙	にぶい褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	底部	70	
	305	Ⅲ	底部	C-12	灰黄	にぶい黄褐		○	○		良	貝殻条痕文	ナデ	底部	3008,3070	
	306	Ⅲ	底部	E-11,12	黒褐	橙	○	○			良	ナデ	ナデ	底部	55,64	
	307	Ⅲ	底部	E-12	にぶい褐	橙	○	○			良	ナデ	ナデ	底部	34,50	
第66図	374	Ⅱ	口縁部	I-10	にぶい黄橙	橙		○	○		良	ナデ	ハケメ	成川	495	
	375	Ⅱ	口縁部	D-4	にぶい橙	にぶい橙		○	○		良	ヘラミガキ	ミガキ	成川	2820	
	376	Ⅱ	底部	H-9	にぶい黄橙	橙		○			良	ナデ	ナデ	成川	488	

石包丁・ノミ形石器 (第61図 351・352)

351は頁岩製の石包丁である。ほとんどが欠損しているが、下部と一部の側面は磨痕による刃部形成が行われている。352は頁岩製のノミ形石器である。棒状で各面に磨痕が施されている。

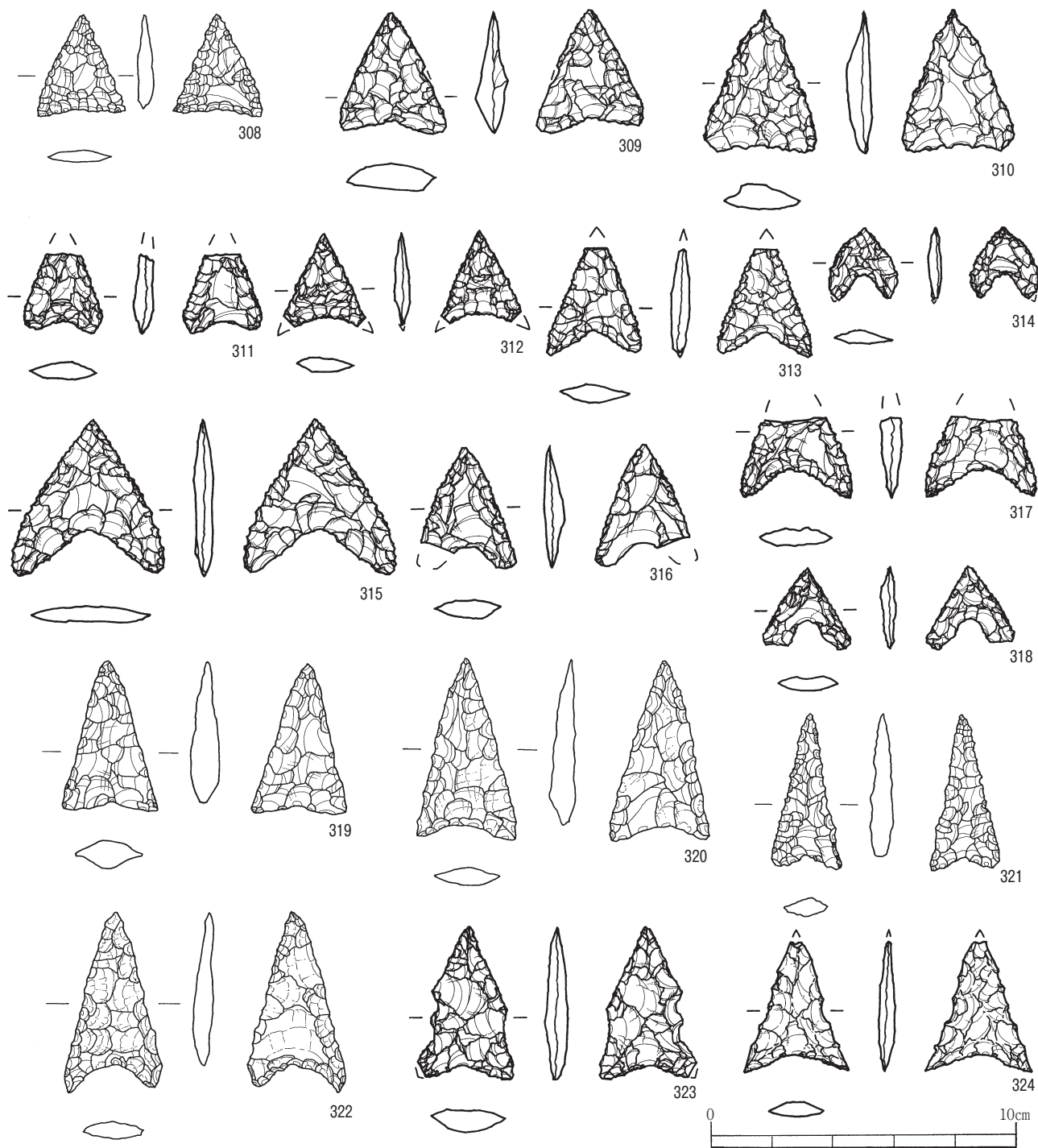
剥片・礫器 (第61図 353・354)

353は薄型剥片である。側縁部に剥離が施されて

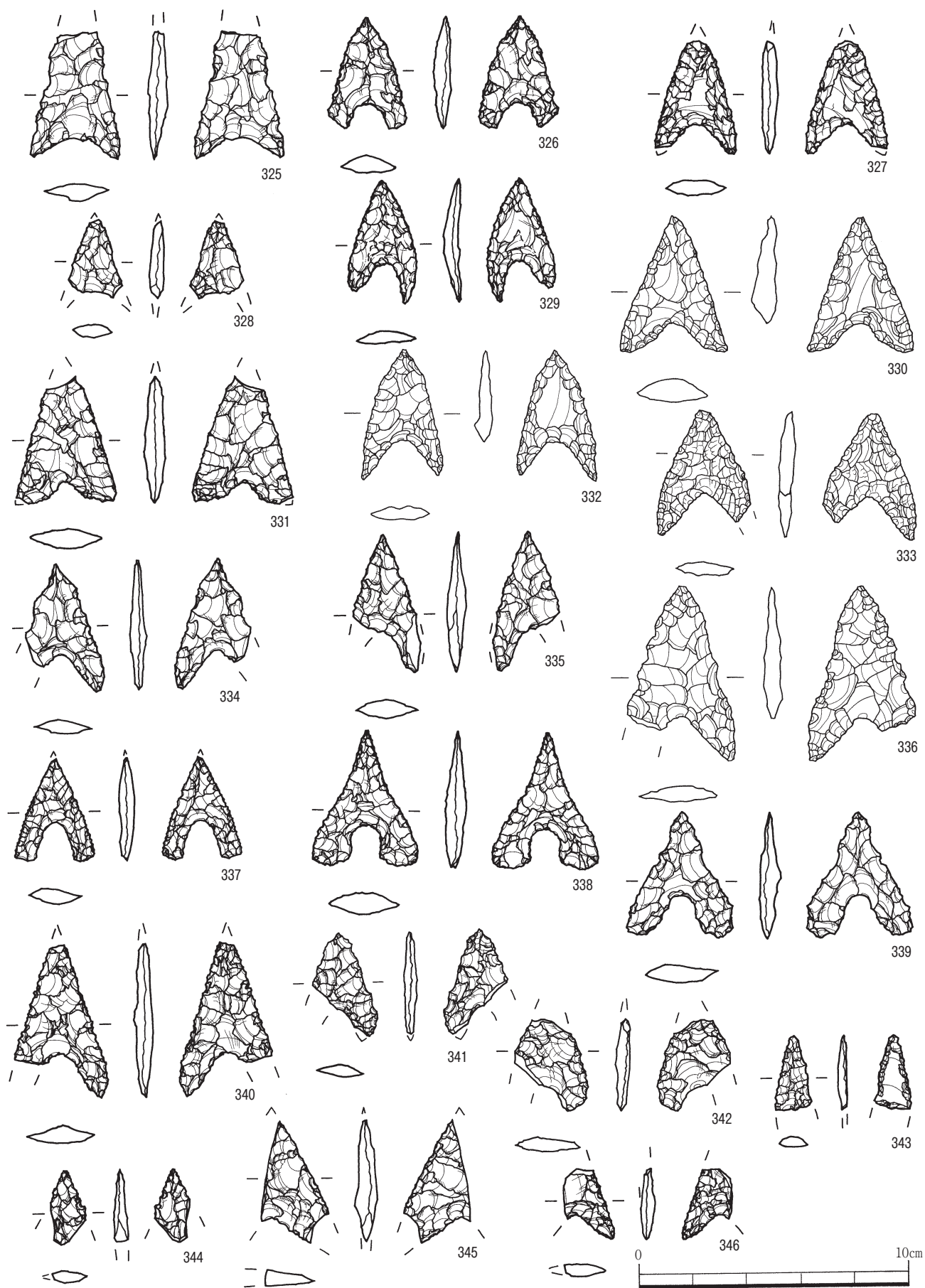
いる。354は礫器である。側縁に剥離を施し刃部形成が行われている。

石斧 (第62図 355～363)

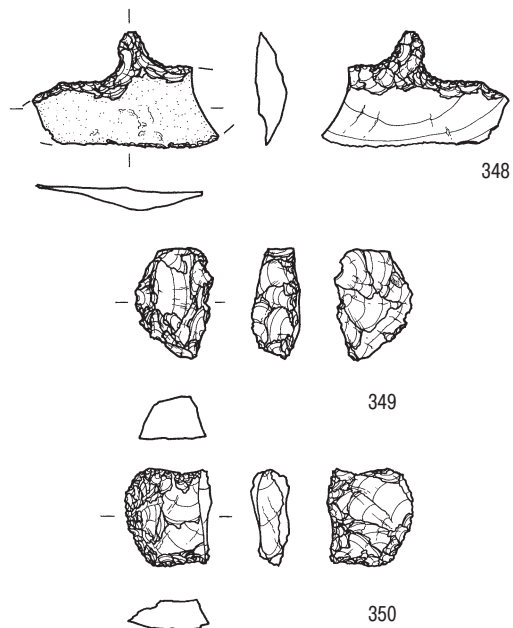
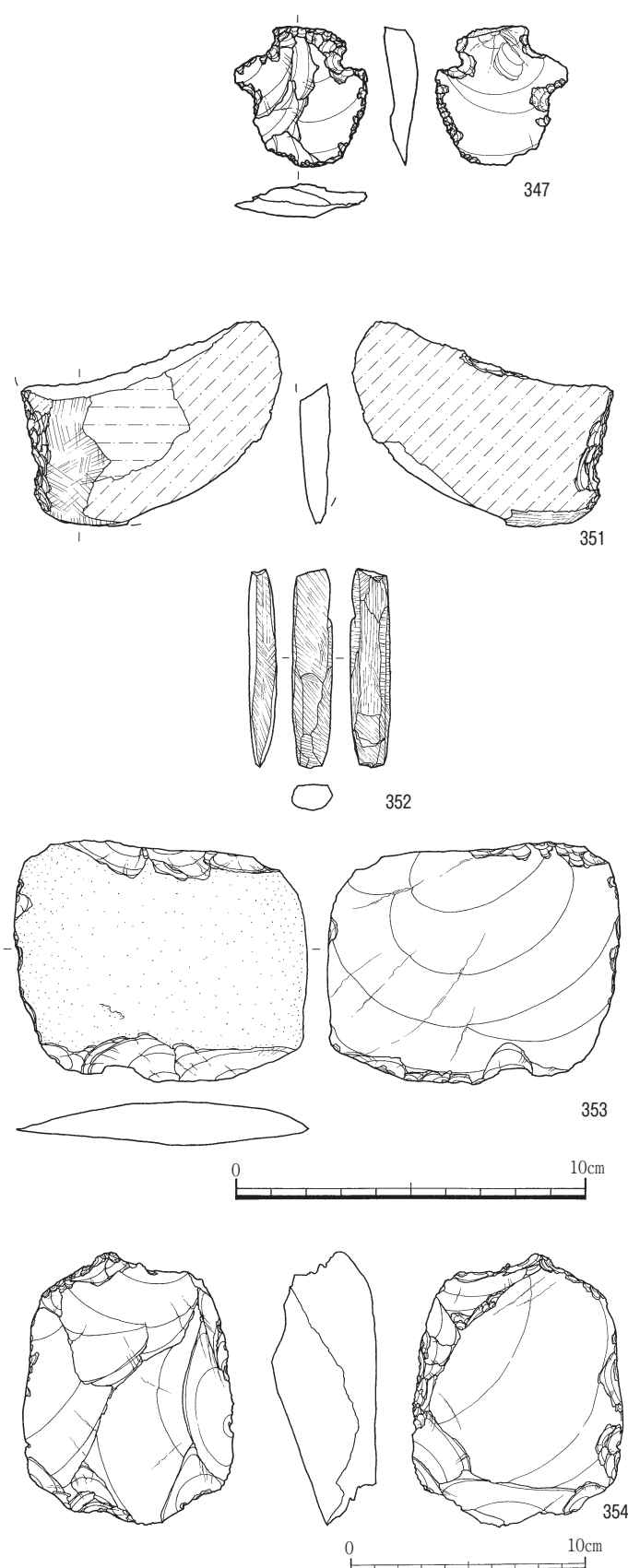
355～358は磨製石斧である。359～363は打製石斧である。355は全面を丁寧な敲打形成をした後で刃部を中心に研磨が施される。356は全面に敲打による剥離が施される上部である。一部磨痕があること



第59図 縄文時代晩期 石器 1



第60図 縄文時代晩期 石器2



から磨製石斧であると思われる。

357は両面に丁寧な磨痕が施され、側縁は敲打による剥離が施されている。358は磨製石斧の刃部である。359は刃部が敲打によって欠損している。360は刃部に剥離が施されている。361は自然面を利用し側縁部に敲打による剥離が施されている。362は自然面を利用した縦長剥片を用い、側縁に敲打を施すものである。下部は欠損している。362は全側面敲打による剥離が施されている。

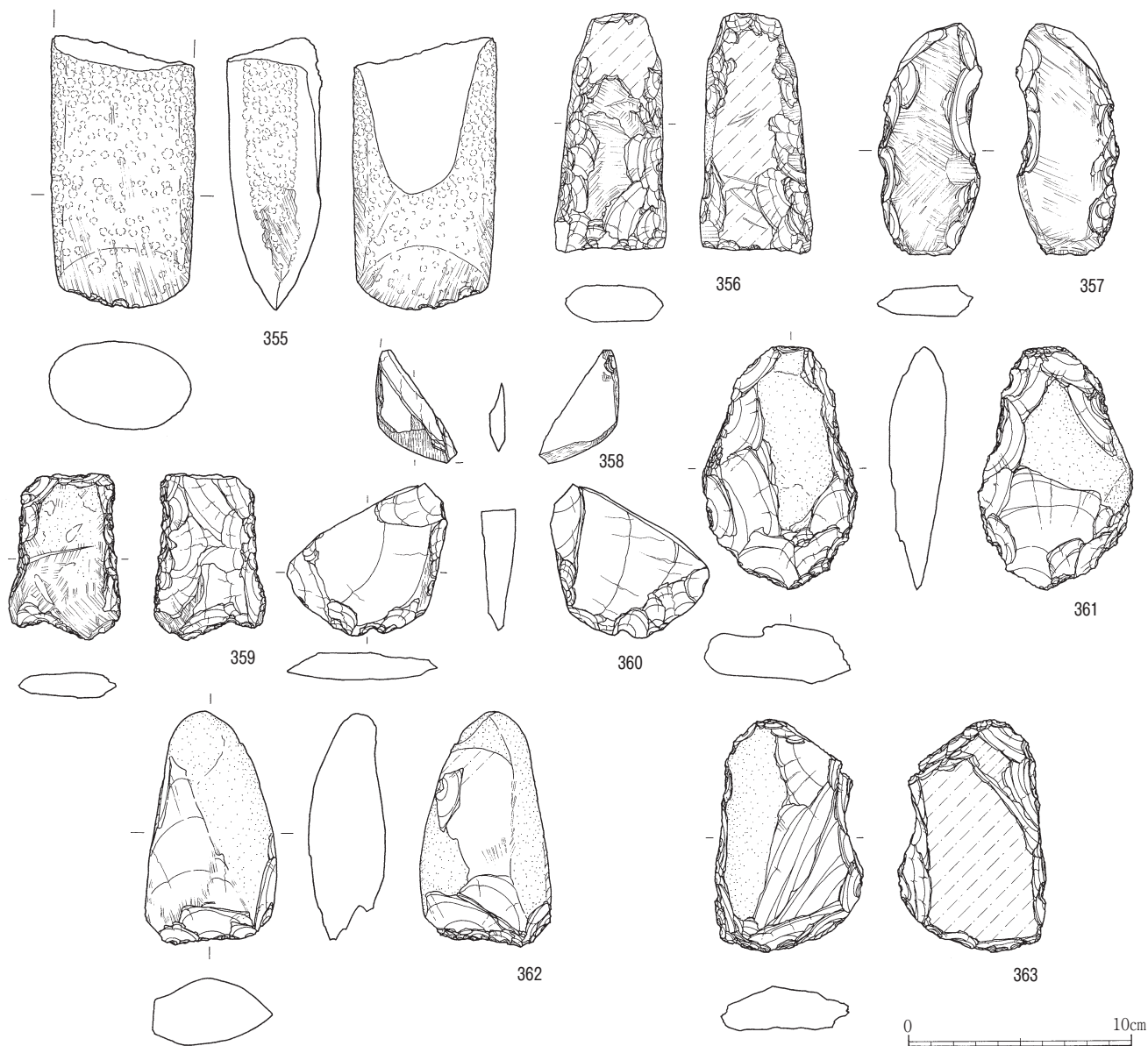
磨石・敲石(第63図 364～368・第64図 369)

円礫を用い、両面に作業面を施すものが多かった。368と369は磨石の機能と敲石の機能を持つものである。

石皿(第64図 370～372・第65図 373)

4点を図化した。370～372は両面作業面のあるもの。373は片面のみの作業面である。敲打痕などはみられなかった。

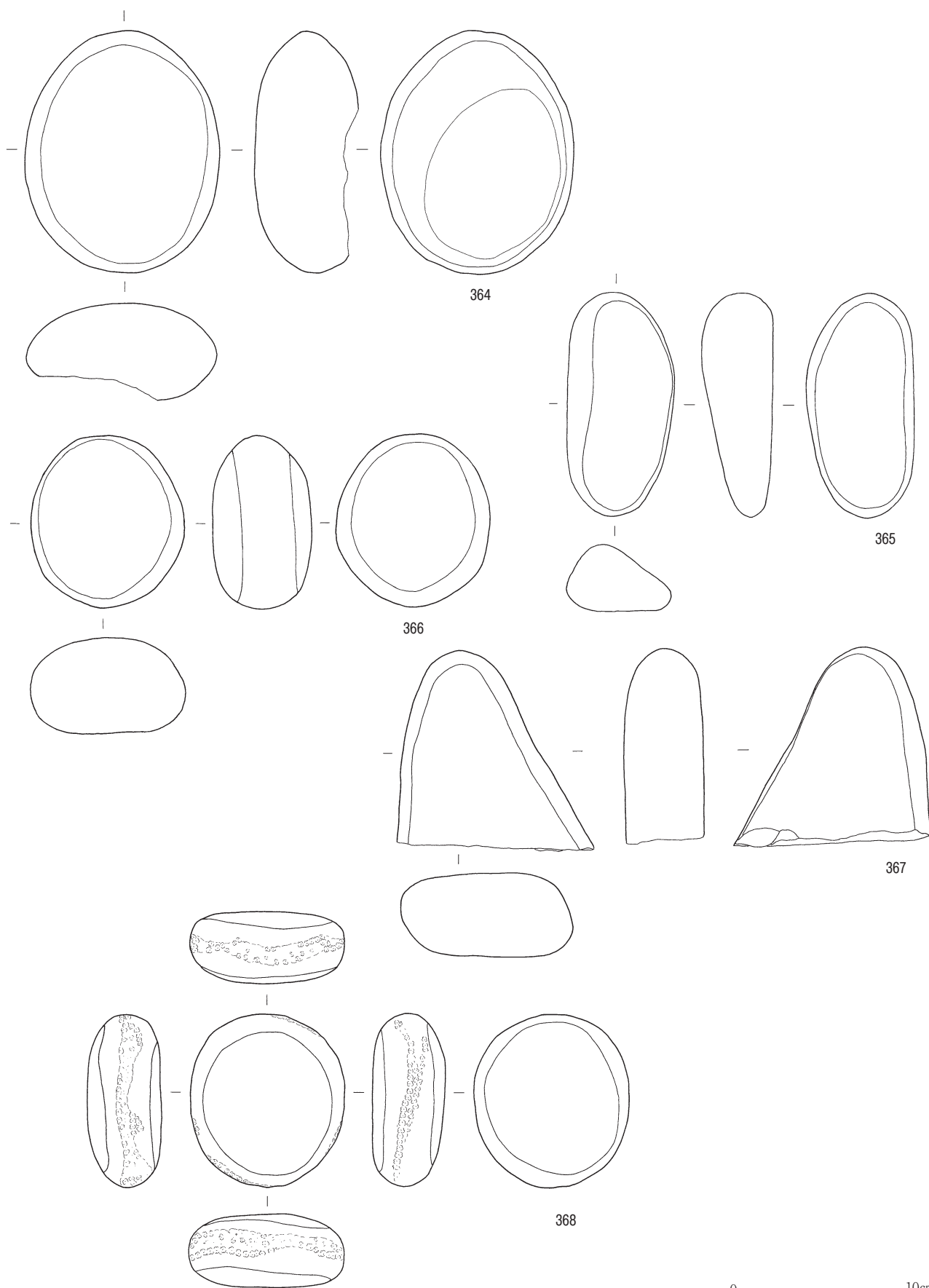
第61図 縄文時代晩期 石器3



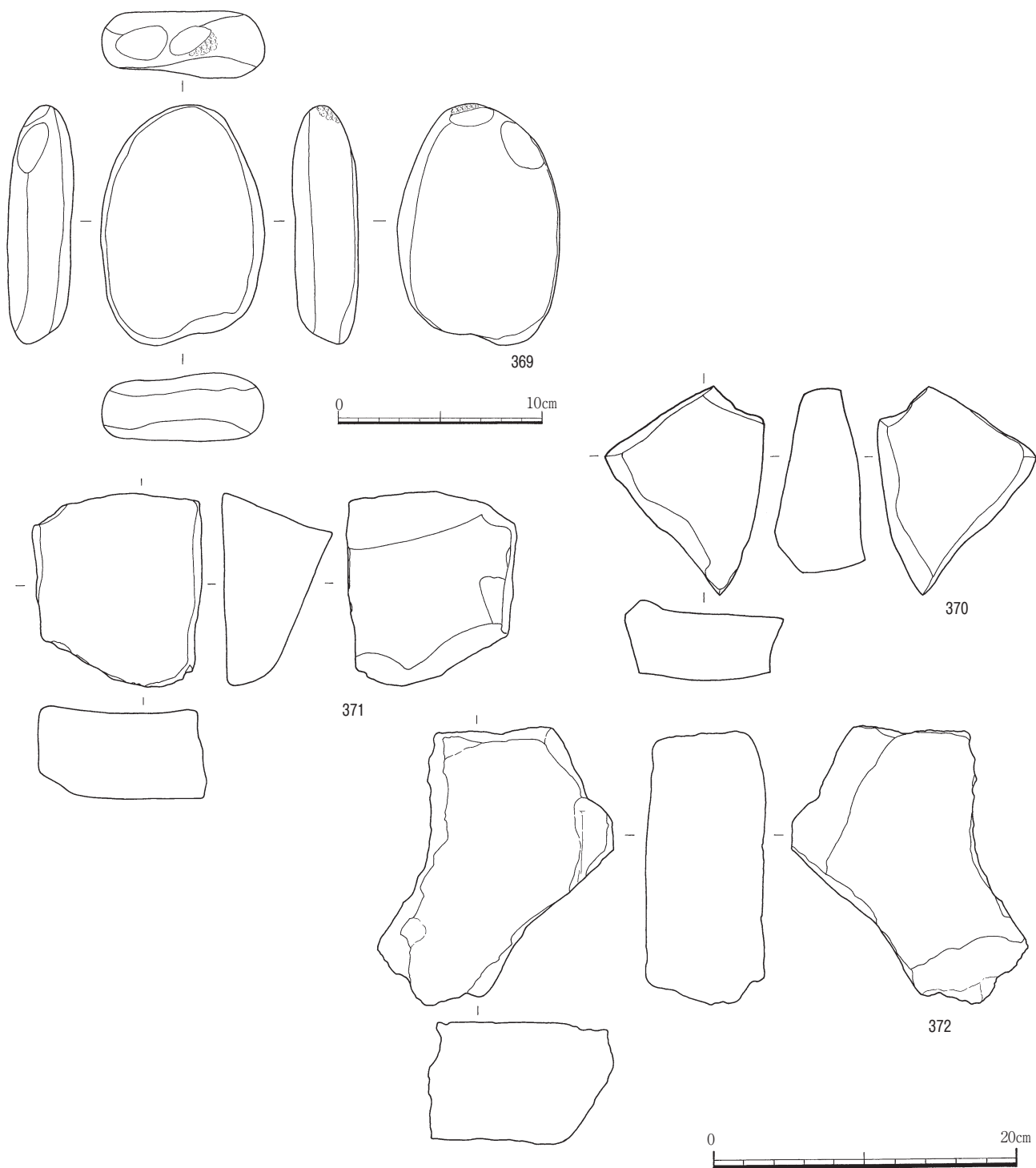
第62図 縄文時代晩期 石器 4

縄文時代晩期 石器観察表 1

挿図 番号	掲載 番号	器種	出土区	層位	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	遺物番号	備考
第59図	308	打製石鏃	G-11	Ⅲ	黒曜石A	1.75	1.45	0.20	0.47	510	A-a-a
	309	打製石鏃	I-9	Ⅲ	黒曜石B	2.00	1.75	0.45	1.10	489	A-a-a
	310	打製石鏃	C-5	Ⅲ	頁岩	2.40	1.85	0.45	1.42	2574	A-a-a
	311	打製石鏃	C-5	Ⅲ	シルト質頁岩	1.30	1.45	0.35	0.52	2612	A-a-b
	312	打製石鏃	E-12	Ⅲ	黒曜石A	1.60	1.30	0.25	0.32	49	A-a-b
	313	打製石鏃	H-9	Ⅲ	黒曜石B	1.80	1.45	0.35	0.30	486	A-a-b
	314	打製石鏃	H-10	Ⅲ	黒曜石B	1.20	1.15	0.25	0.62	406	A-a-c
	315	打製石鏃	D-4	Ⅲ	頁岩	2.50	2.30	0.25	1.41	2269	A-a-c
	316	打製石鏃	D-4	Ⅲ	頁岩	2.00	1.50	0.35	0.66	2851	A-a-c
	317	打製石鏃	G-11	Ⅲ	黒曜石C	1.30	1.40	0.35	0.71	511	A-a-c
	318	打製石鏃	C-12	Ⅲ	頁岩	1.30	1.15	0.25	0.28	3093	A-a-d
	319	打製石鏃	F-10	Ⅲ	安山岩	3.00	1.65	0.35	1.48	175	A-b-a
	320	打製石鏃	E-11	Ⅲ	黒曜石B	2.60	1.55	0.50	1.10	71	A-b-b
	321	打製石鏃	D-5	Ⅲ	黒曜石	2.50	1.10	0.35	0.62	2867	A-b-b
	322	打製石鏃	D-4	Ⅲ	シルト質頁岩	3.10	1.60	0.35	1.13	2830	A-b-b
第60図	323	打製石鏃	D-4	Ⅲ	チャート	2.50	1.60	0.40	1.27	2822	A-b-b
	324	打製石鏃	D-5	Ⅲ	黒曜石	2.20	1.55	0.25	0.72	2881	A-a-b
	325	打製石鏃	C-4	Ⅲ	頁岩	2.40	1.60	0.35	1.16	1841	A-b-b
	326	打製石鏃	C-4	Ⅲ	安山岩	2.10	1.35	0.40	0.74	1843	A-b-c
	327	打製石鏃	C-12	Ⅲ	黒曜石B	2.00	1.40	0.35	0.81	3091	A-b-c
	328	打製石鏃	C-4	Ⅲ	黒曜石A	1.40	1.05	0.25	0.36	2673	A-b-c
	329	打製石鏃	F-11	Ⅲ	シルト質頁岩	2.30	1.25	0.25	0.71	80	A-b-c
	330	打製石鏃	G-9	Ⅲ	玉随	2.60	1.75	0.45	1.56	505	A-b-c



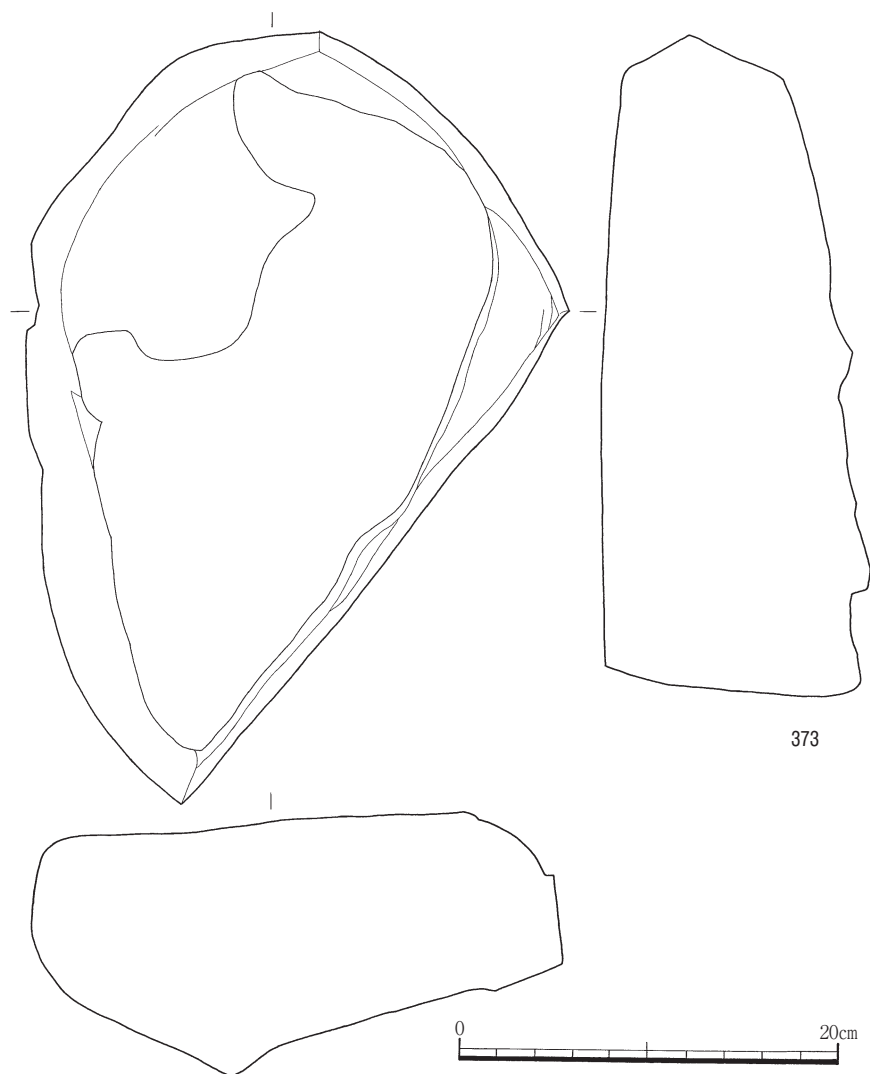
第63図 縄文時代晩期 石器5



第64図 縄文時代晩期 石器6

縄文時代晩期 石器観察表2

挿図 番号	掲載 番号	器種	出土区	層位	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	遺物番号	備考
第 60 図	331	打製石鏃	D-5	Ⅲ	黒曜石B	2.40	1.75	0.40	1.33	2873	A-b-c
	332	打製石鏃	H-9	Ⅲ	頁岩	2.30	1.40	0.25	0.68	487	A-b-c
	333	打製石鏃	I-10	Ⅲ	シルト質頁岩	2.30	1.65	0.25	0.82	497	A-b-c
	334	打製石鏃	H-10	Ⅲ	シルト質頁岩	2.40	1.25	0.25	0.62	326	A-b-c
	335	打製石鏃	D-4	Ⅲ	黒曜石B	2.60	1.20	0.40	0.72	2852	A-b-c
	336	打製石鏃	G-9	Ⅲ	黒曜石B	3.20	1.95	0.35	1.30	501	A-b-c
	337	打製石鏃	C-4	Ⅲ	玉随	1.90	1.15	0.35	0.53	2725	A-b-a
	338	打製石鏃	E-12	Ⅲ	黒曜石B	2.50	1.65	0.45	1.18	53	A-b-d
	339	打製石鏃		表採	安山岩	2.30	1.65	0.25	0.95		A-b-d
	340	打製石鏃	F-9	Ⅲ	黒曜石B	2.90	1.60	0.35	1.08	275	A-b-d
	341	打製石鏃	F-11	Ⅲ	黒曜石A	1.95	0.95	0.25	0.35	76	A-b-?
	342	打製石鏃	I-5	Ⅲ	黒曜石A	1.70	1.30	0.35	0.54	1921	A-b-?
	343	打製石鏃	D-5	Ⅲ	黒曜石	1.40	0.65	0.20	0.15	2874	A-?-?
	344	打製石鏃	D-4	Ⅲ	黒曜石B	1.40	0.70	0.25	0.23	2823	A-?-?
	345	打製石鏃	C-12	Ⅲ	黒曜石	2.30	1.30	0.35	0.77	3052	?
	346	打製石鏃	D-5	Ⅲ	黒曜石C	1.30	0.80	0.25	0.30	2864	?



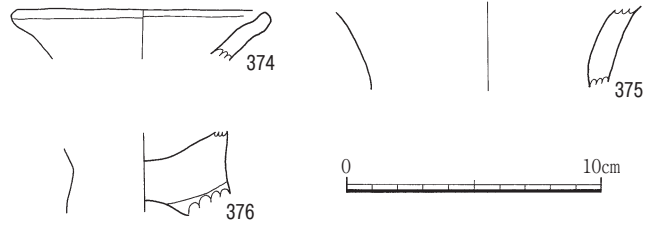
第65図 縄文時代晩期 石器 7

縄文時代晩期 石器観察表 3

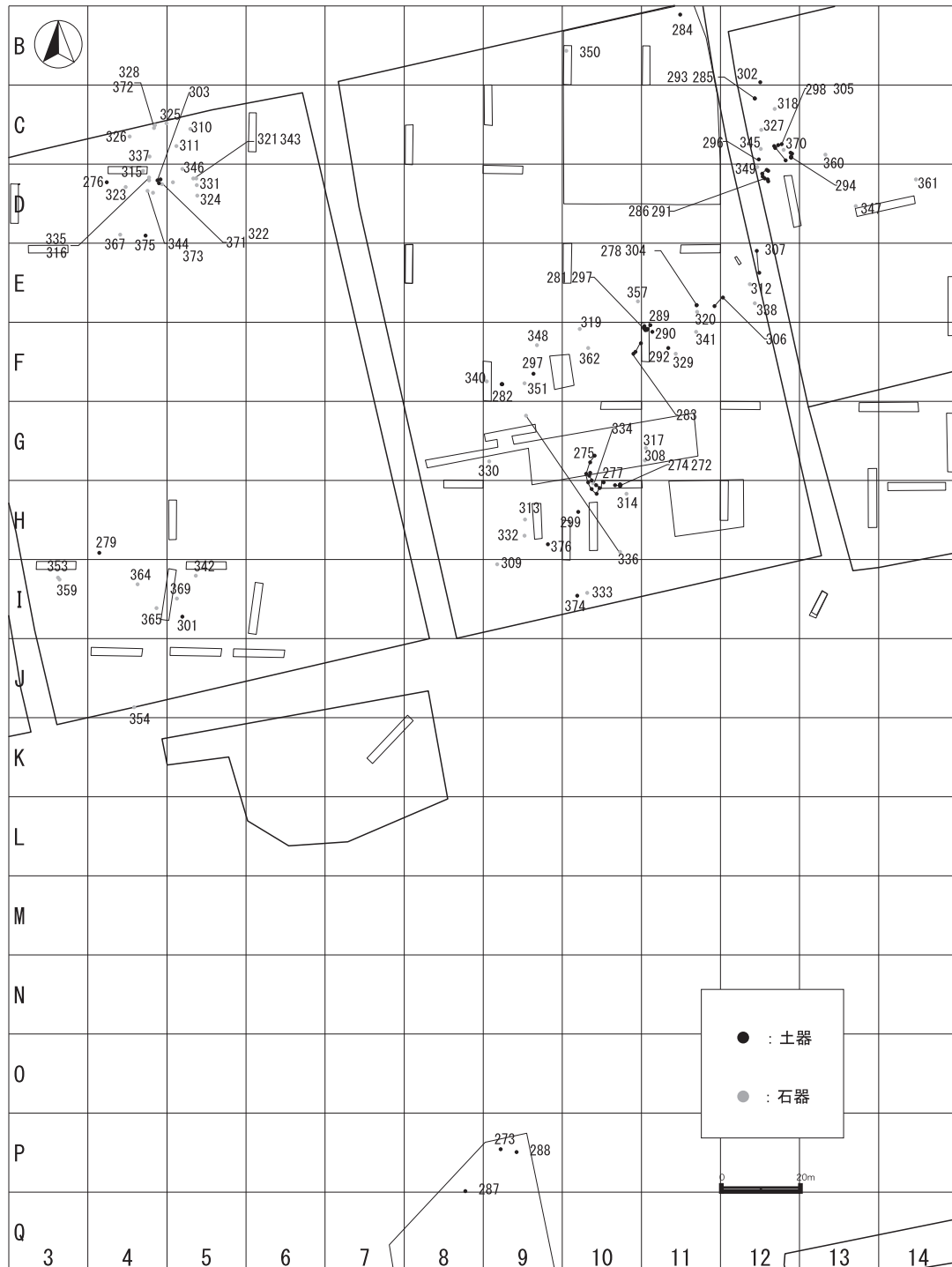
挿図 番号	掲載 番号	器種	出土区	層位	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	遺物 番号	備考
第61図	347	石匙	D-13	Ⅲ	チャート	4.00	5.60	1.50	1.17	3200	
	348	石匙	F-9	Ⅲ	玉随	3.10	5.00	0.85	6.28	180	
	349	楔形石器	D-12	Ⅲ	黒曜石	2.95	1.80	1.10	6.45	3098	
	350	スクレイパー	B-10	Ⅲ	黒曜石	2.25	1.00	0.80	6.60	23	※コアを2次加工
	351	石包丁	F-9	Ⅲ	頁岩	4.30	7.25	0.90	34.63	197	
	352	ノミ形石器	E-8	9T	頁岩	5.75	1.15	0.80	8.53		
	353	剥片	I-3	Ⅲ	頁岩	6.70	8.35	1.30	85.25	1944	
	354	礫器	J-4	Ⅲ	頁岩	11.65	9.05	4.40	500.00	1951	
第62図	355	磨製石斧		表採	頁岩	12.30	6.50	4.30	500.00		※金峰山ホルンフェルス
	356	局部磨製石斧		表採	頁岩	10.65	5.05	1.70	141.10		
	357	磨製石斧	E-10	Ⅲ	頁岩	4.10	2.85	0.70	9.48	473	割れ
	358	局部磨製石斧		表採	頁岩	7.40	5.00	1.20	66.82		
	359	打製石斧	I-3	Ⅲ	頁岩	6.20	6.75	1.20	73.76	1945	割れ
	360	打製石斧	C-13	Ⅲ	頁岩	10.90	6.90	2.45	200.00	3280	
	361	打製石斧	D-14	Ⅲ	頁岩	10.55	5.95	3.60	300.00	3223	
	362	打製石斧	F-10	Ⅲ	頁岩	10.40	4.60	1.60	101.72	174	
	363	打製石斧		表採	頁岩	10.45	6.65	1.90	177.74		
第63図	364	磨石	I-4	Ⅲ	安山岩	13.10	10.30	5.20	1100.00	1942	
	365	磨石・敲石	I-4	Ⅲ	砂岩	12.10	5.30	4.00	300.00	1940	
	366	磨石・敲石	G-9	Ⅲ	安山岩	9.25	8.30	5.10	600.00	282	
	367	磨石・敲石	D-4	Ⅲ	砂岩	10.70	10.60	4.40	700.00	2819	
	368	磨石・敲石		T	砂岩	9.40	8.40	4.00	485.00	表	
第64図	369	磨石・敲石	I-5	Ⅲ	砂岩	11.50	8.00	3.20	453.00	1929	
	370	石皿	C-12	Ⅲ	安山岩	13.80	10.30	5.70	800.00	3080	
	371	石皿	D-4	Ⅲ	砂岩	12.70	11.10	7.20	1300.00	2859	
	372	石皿	C-4	Ⅲ	凝灰岩	18.00	11.90	7.70	2800.00	2676	
第65図	373	石皿	D-4	Ⅲ	砂岩	40.75	28.70	14.00	1920.00	1830	

第6節 その他の遺物（第66図 374～376）

本遺跡では、古墳時代以降に相当する包含層の多くが削平を受けたが、一部で包含層が残存し、数点の遺物を出土していたため、ここで掲載しておきたい。374・375は成川式土器の壺の口縁部である。375は先端が欠損している。376は甕形土器の底部であるが、脚部の先端が欠損している。



第66図 その他の遺物



第67図 縄文時代後期・晩期，その他の遺物出土状況

第7節 小結

中尾遺跡の現地形は緩やかに傾斜した平坦な台地であるが、発掘調査から馬の背状の尾根が東西方向に数条走る旧地形を想定できる。尾根部分は、圃場整備等による攪乱をうけて古代～近世の包含層の大部分を消失し、一部では表土直下に縄文時代早期～旧石器時代の包含層が出現した。Ⅸ層上面までの調査は、調査深度の大きい尾根部分に相当するB～D－9～11区と、下層確認トレンチに限られた。縄文時代草創期の遺構・遺物が出土したB－13～15区などその他の調査区は、包含層の上部のみの調査で、遺構配置・遺物出土状況は限定的なものである。

調査の結果、中尾遺跡は旧石器時代～古墳時代の複合遺跡で、縄文時代草創期と縄文時代晩期の遺構・遺物を主とした遺跡であることが判明した。

（1）旧石器時代

旧石器時代は、Ⅷ層から下位の層に該当する。Ⅷ層より下位の層を埋土とする落とし穴状遺構1基と土坑2基が、G－9～11区で検出された。Ⅷ層は縄文時代草創期とも重なり、Ⅷ層出土の石器は旧石器時代と縄文時代草創期が混在している。Ⅷ層出土遺物の中から、ナイフ形石器と台形石器、三稜尖頭器、両面加工尖頭器を旧石器時代の遺物とした。8点の旧石器が出土したB－10区周辺は第6図と第28図の出土状況の比較から、石器製作址であった可能性も考えられる。

（2）縄文時代草創期

縄文時代草創期では、調査区北側のB～D－9～11区を中心に、集石遺構10基と連穴土坑8基、落とし穴状遺構4基、土坑3基が検出され、隆帯文土器と石斧などの石器、頁岩類、黒曜石などの剥片が出土した。一部の集石遺構と連穴土坑は近接して検出され、重複した状態3組、隣接した状態1組が検出された。連穴土坑は、平坦部の傾斜面際から、北東軸4基と北西軸3基、東西軸1基を検出された。B－14～15区では、集石遺構の礫より下面を未調査であり、連穴土坑の存在は未確認である。

隆帯文土器は、隆帯上に連続して指頭圧痕を施したものが大半を占め、太い隆帯文が多数であり、細い隆帯文や密接したものは少数であった。口唇部内面に張り出すものや屈曲部が肥厚するものが目立った。少数であるが、隆帯文が垂下するものや隆帯文の端部のあるもの、爪形文を施されたもの、無文の

ものも出土した。C－11区では遺物を伴った集石遺構と連穴土坑の間で、隆帯文土器や石斧、頁岩類の剥片の集中が確認された。

（3）縄文時代早期

縄文時代早期の包含層であるⅣ層は、攪乱と調査深度の関係から、前後の時期より調査面積が小さい。調査区北側で遺構・遺物が出土した。

早期土器では、Ⅵ類を前平式土器、Ⅶ類を加栗山式土器、Ⅷ類を吉田式土器、Ⅸ類を石坂式土器、Ⅹ類を桑ノ丸式土器、Ⅺ類を中原式土器、Ⅻ類を押型文式土器、Ⅼ類を縄目文土器、Ⅽ類を右京西式土器、Ⅾ類を右京西式の文様で尖底の土器、Ⅿ類を形式不明の土器に比定される。調査区東側では集石遺構2基と押型文土器、石斧などの石器を検出・出土した。調査区西側では石坂式土器が出土した。

（4）縄文時代後期・晩期

縄文時代後期では、市来式土器が出土した。縄文時代晩期では、集石遺構2基と1間×1間の掘立柱建物跡9軒、柱穴列18基、柱穴25個が検出された。晩期土器では、ⅰ類を市来式土器、ⅱ類を上加世田式土器、ⅲ類を入佐式土器、ⅳ類をその他の土器に比定される。

（5）古墳時代

D－4区で、数点の成川式土器が出土した。

<参考文献>

- 鹿児島県教育委員会「加治屋園遺跡」1981 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(14)
吹上町教育委員会「塚ノ越遺跡ほか」1990 吹上町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)
鹿児島市教育委員会「掃除山遺跡」1992 鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(12)
西之表市教育委員会「奥ノ仁田遺跡・奥嵐遺跡」1995 西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書(7)
加世田市教育委員会「梶ノ原遺跡」1998 加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(15)
西之表市教育委員会「鬼ヶ野遺跡」2004 西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書(14)
始良町教育委員会「建昌城跡 平成11～15年度」2005 始良町埋蔵文化財発掘調査報告書(10)
鹿児島県立埋蔵文化財センター「三角山遺跡群(3)」2006 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(96)

荒 田 遺 跡

第Ⅴ章 荒田遺跡の発掘調査成果

第1節 調査の経過

荒田遺跡は平成14年に本調査を実施した。本遺跡は研究水田用地造成のための発掘調査を行った。尾根状の台地全体にわたる遺跡である。近隣には秋葉遺跡、桜谷遺跡がある。調査は平成14年5月12日から11月5日まで行い、実働日数は89日であった。

平成14年度 日記抄

5月 表土剥ぎ。U-9・10区Ⅲ～Ⅴ層掘り下げ、遺物取り上げ。1号～11号集石検出・実測・写真撮影。トレンチ設定、掘り下げ、土層断面図作成、写真撮影。T・U-9区Ⅳ～Ⅴ層掘り下げ。

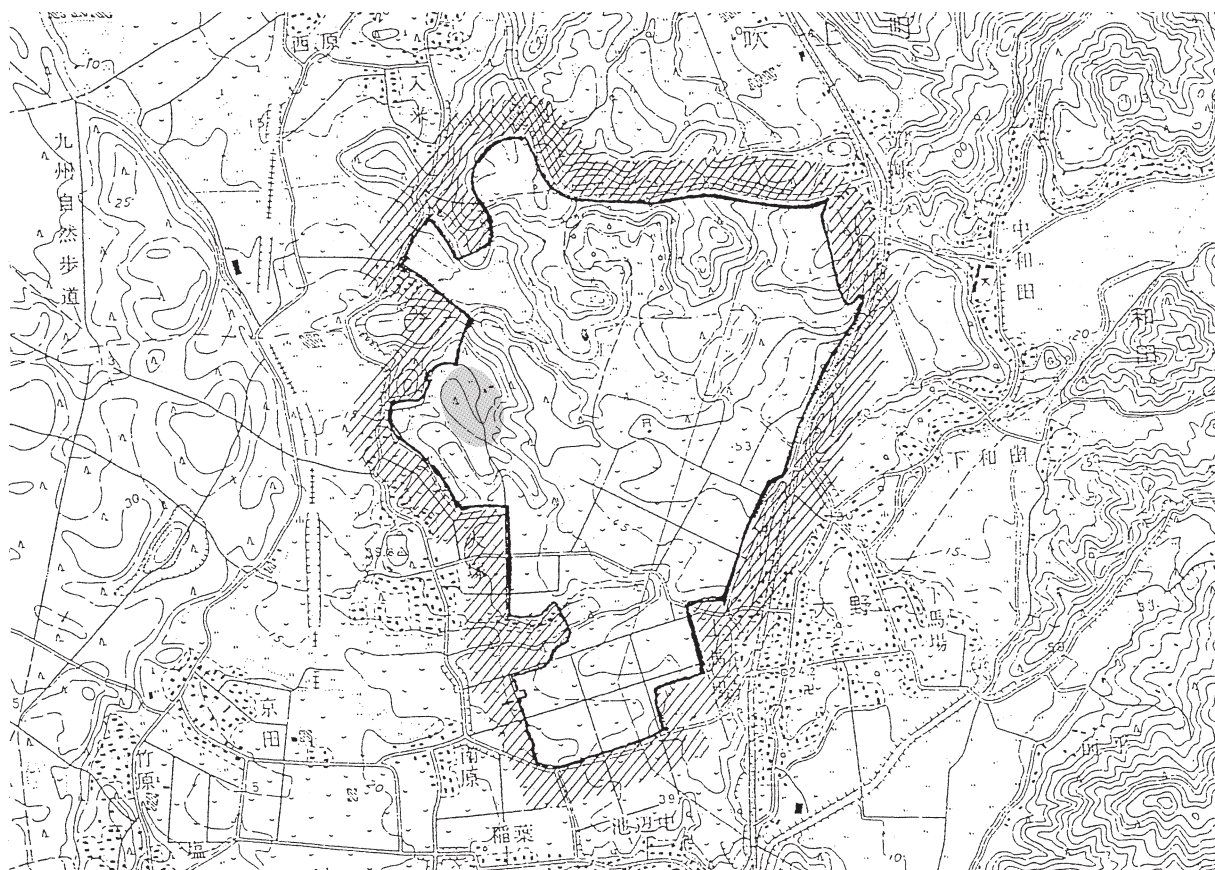
6月 T-8・9区Ⅳ層掘り下げ、遺物取り上げ。4号集石下部掘り込み。コンタ図作成。土坑1～3号掘り下げ、土坑断面図作成。S-8区掘り下げ。集石遺構掘り下げ、実測。写真撮影。

7月 S-8・9区Ⅳ層掘り下げ。土坑4号検出、

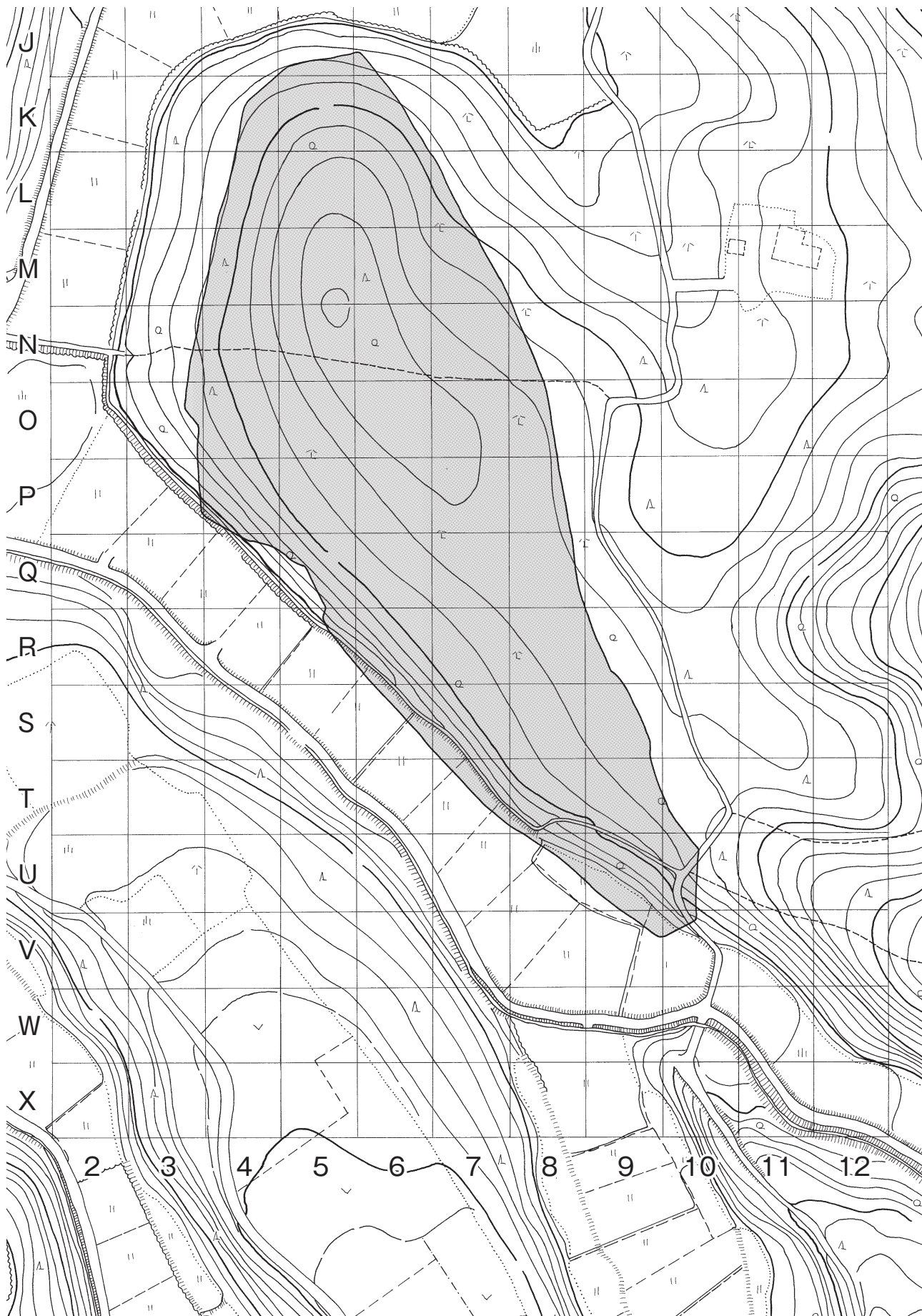
実測、写真撮影。R・U-8区Ⅳ層掘り下げ。S・R-7区表土～Ⅳ層掘り下げ。T-8・9区表土除去。19～22号集石検出、実測、写真撮影。遺物取り上げ。S・R-8・9区、T-9区コンタ図作成。Ⅶ層、Ⅷ層掘り下げ。

8月 R-6, R・S-7・8・9区トレンチ掘り下げ。R・S-6区表土剥ぎ、Ⅳ層掘り下げ。U-7・8・9区, F-8区Ⅷa, Ⅷb層掘り下げ。P・Q-5区Ⅳ層掘り下げ。R・S-6・7区Ⅳ層コンタ図作成。R・S-8・9区, T-9区土層断面図作成。T・U・V-8・9・10区Ⅷ層遺物取り上げ。

9月 P-6・7区, Q-7区Ⅳ層掘り下げ。コンタ図作成。U-8・9区Ⅷb層掘り下げ。S-7, R・S-6・7区Ⅷa層, P・Q-6・7区Ⅴ層コンタ図作成。遺物取り上げ。S・T-7区土層断面図作成。R-8・9区北側土層断面図作成。

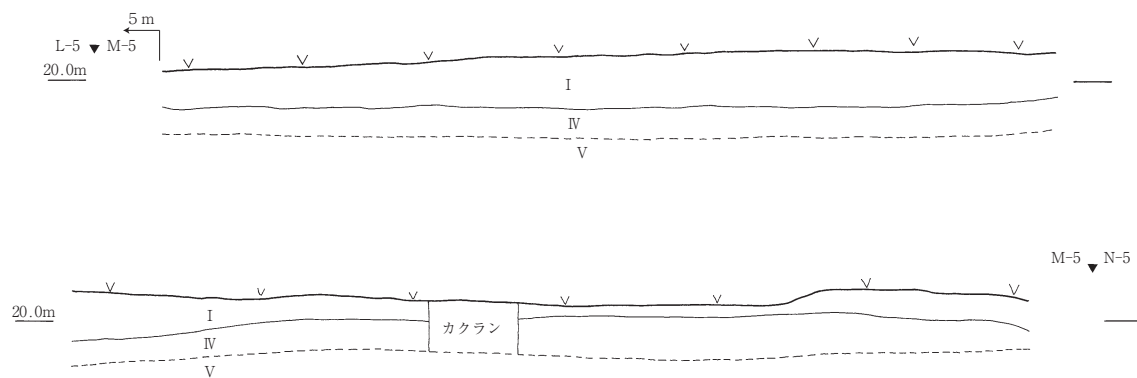


第1図 荒田遺跡位置図 (1/25000)

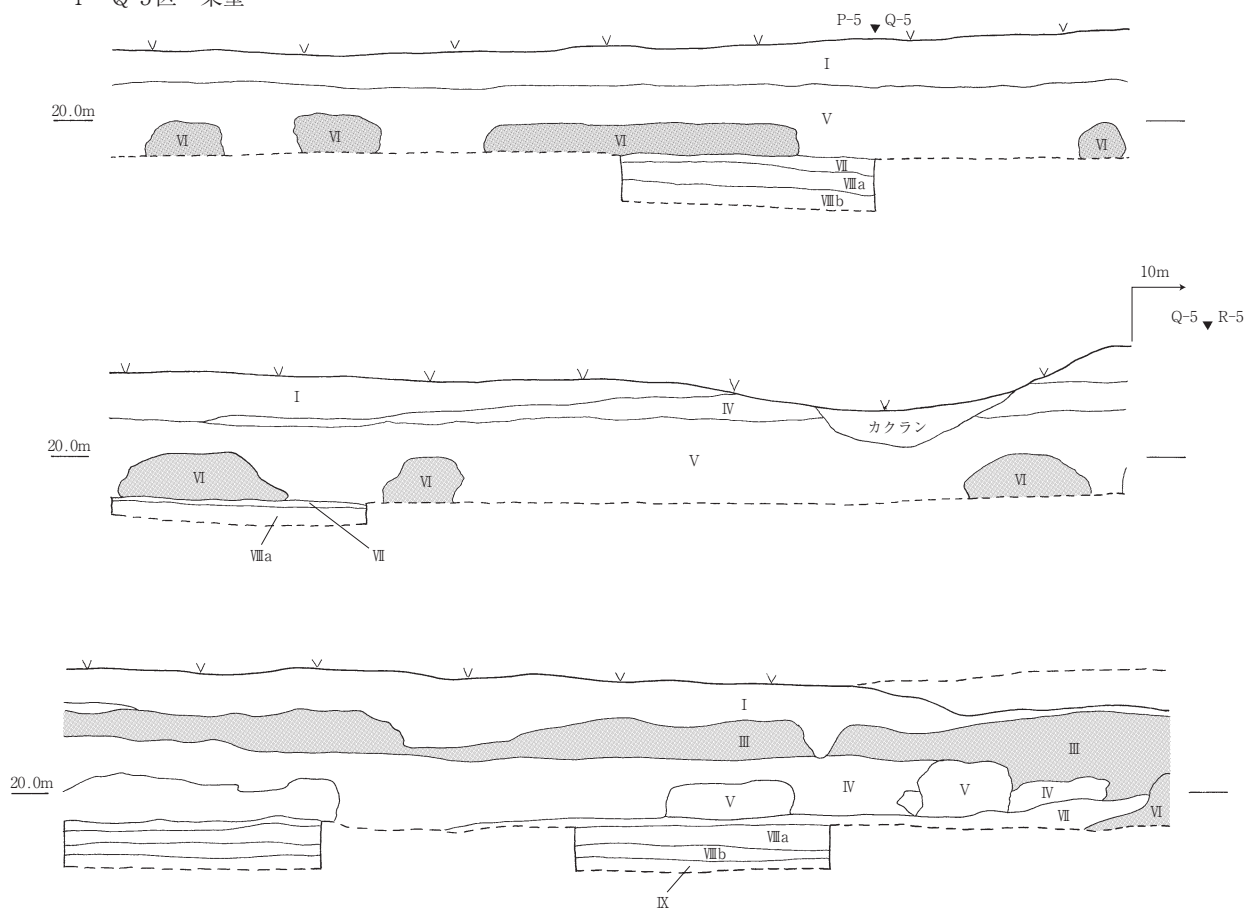


第2図 地形図及びグリッド配置図

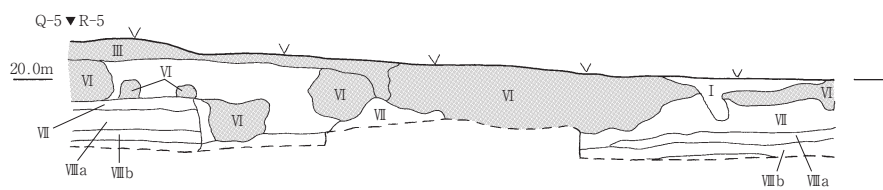
M-5区 東壁



P・Q-5区 東壁

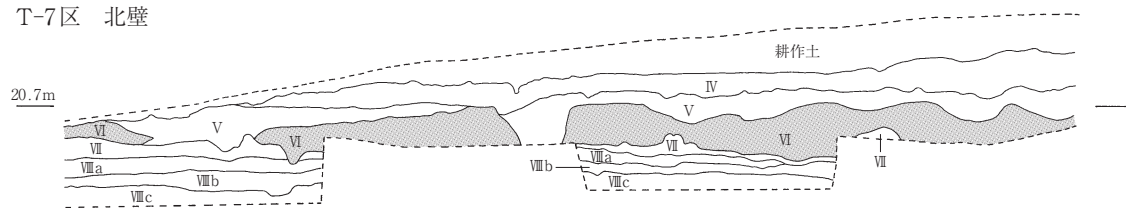


R-5区 東壁

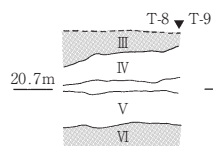
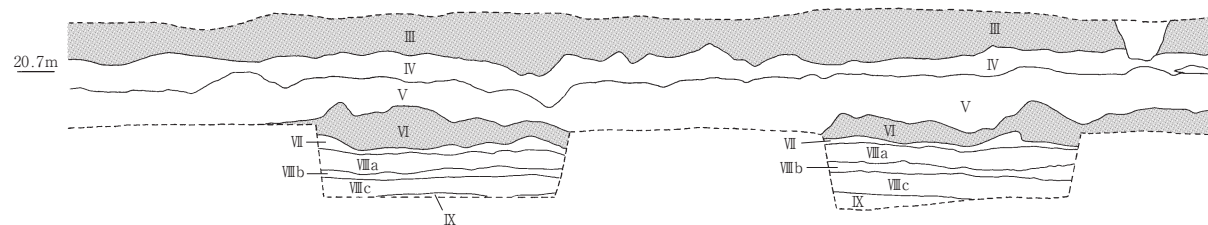
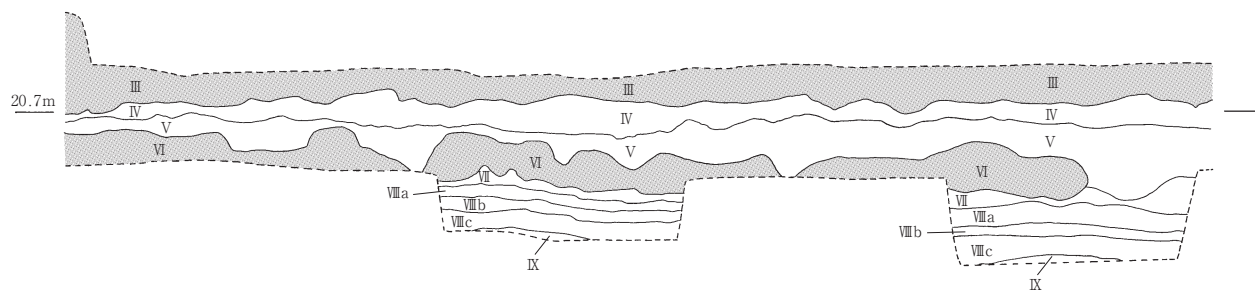


第3図 土層断面図1

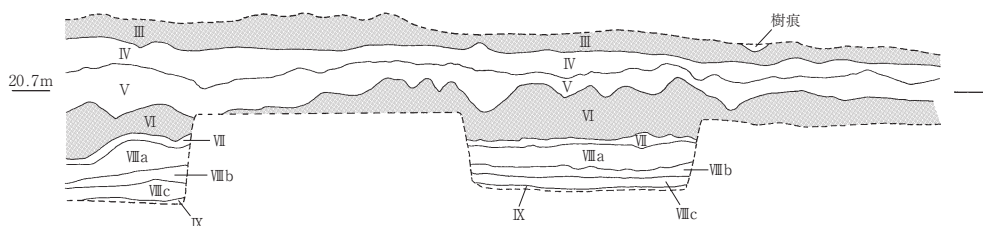
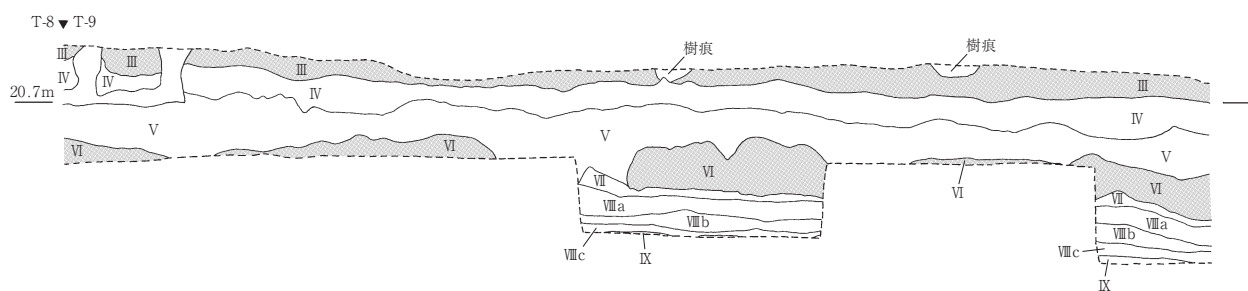
T-7区 北壁



T-8区 北壁

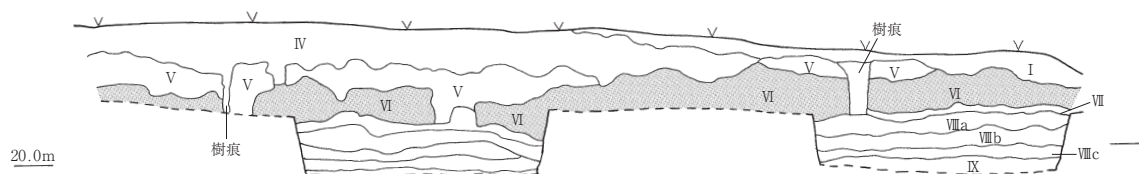


T-9区 北壁

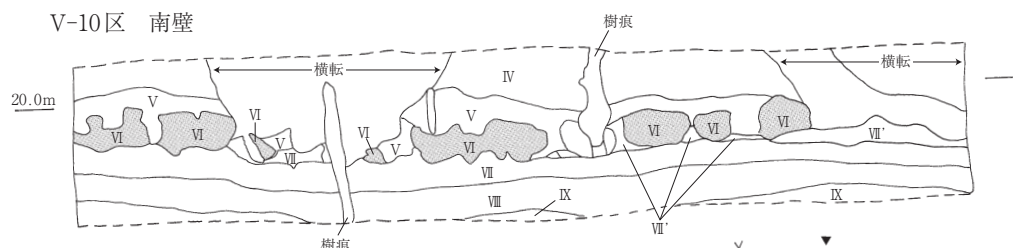


第4図 土層断面図2

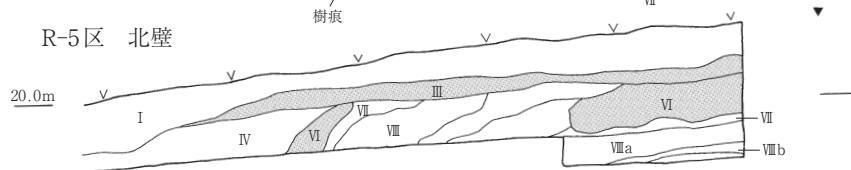
T-9区 東壁



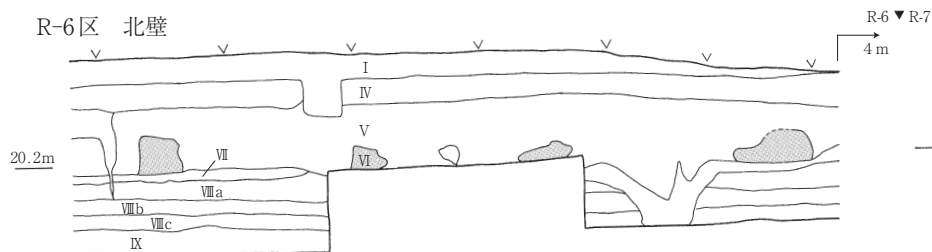
V-10区 南壁



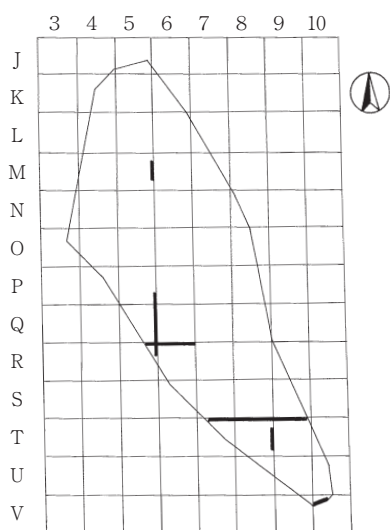
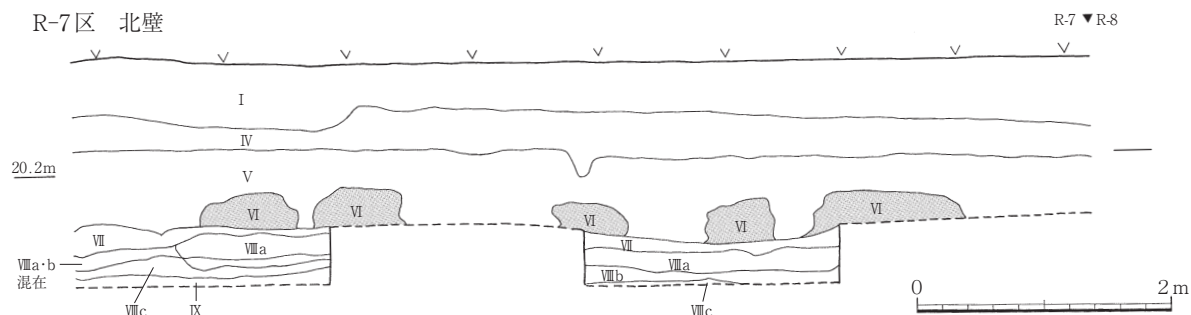
R-5区 北壁



R-6区 北壁



R-7区 北壁



- III — 黄橙色火山灰土
- IV — 黄褐色土
- V — 黑褐色土
- VI — 暗黄橙色火山灰土
- VII' — 弱粘質土
- VII — 茶褐色粘質土
- VIII — 暗茶褐色粘質土
- IX — 黄褐色砂質土

第5図 土層断面図3

10月 N・O・P・Q-4・5区Ⅷ層掘り下げ。
L・M-4・5・6・7区Ⅳ層掘り下げ。
コンタ図作成。遺物取り上げ。M-4・
5・6区トレンチ掘り下げ。土層断面図作
成。28号集石実測，O-6・7区トレンチ
土層断面図作成。写真撮影。
11月 土層断面図作成。集石実測。

第2節 遺跡の層序（第3図～第5図）

荒田遺跡における層序は農業開発総合センター遺
跡群における標準的な層序と同様である。Ⅱ層はほ
んど削平されている。主な時代と遺物包含層は以
下の通りである。

- ・縄文時代晩期（Ⅲ層）
土器・石器
- ・縄文時代早期（Ⅳ層）
集石・土坑・土器・石器
- ・縄文時代草創期（Ⅷa層）
ブロック・集石
土器・石器
- ・旧石器時代（Ⅷb層）
ブロック
石器

第3節 発掘調査の方法及び概要

荒田遺跡の発掘調査は，農業開発総合センター内
の国土座標に合わせた20×20mの調査範囲（グリッ
ド）を設定して実施し，遺跡内の北側からA・B・
C…，西側から1・2・3…とした。調査面積は
17000㎡である。表土は重機により除去しⅡ層以下
は人力で掘り下げた。調査前は竹林状の荒地で
あった。Ⅱ層はほとんどなかった。Ⅲ層からは縄文
時代晩期で土器と石器が数点ずつ出土している。Ⅳ
層からは縄文時代早期で，遺構が集石35基と土坑3
基が検出されている。土器では桑ノ丸式・押型文・
右京西式土器の出土が多かった。また，塞ノ神式土
器や石鏃，石斧，磨石などが出土している。Ⅷa層
では縄文時代草創期で集石が検出された。また，頁
岩製のブロックが1基検出され，石斧が出土してい
る。また，隆帯文土器や磨石が数点出土している。

Ⅷb層は旧石器時代のブロックが3基検出されてい
る。遺物ではナイフ形石器，三稜尖頭器，細石刃核，
細石刃が出土している。

第4節 旧石器時代の調査

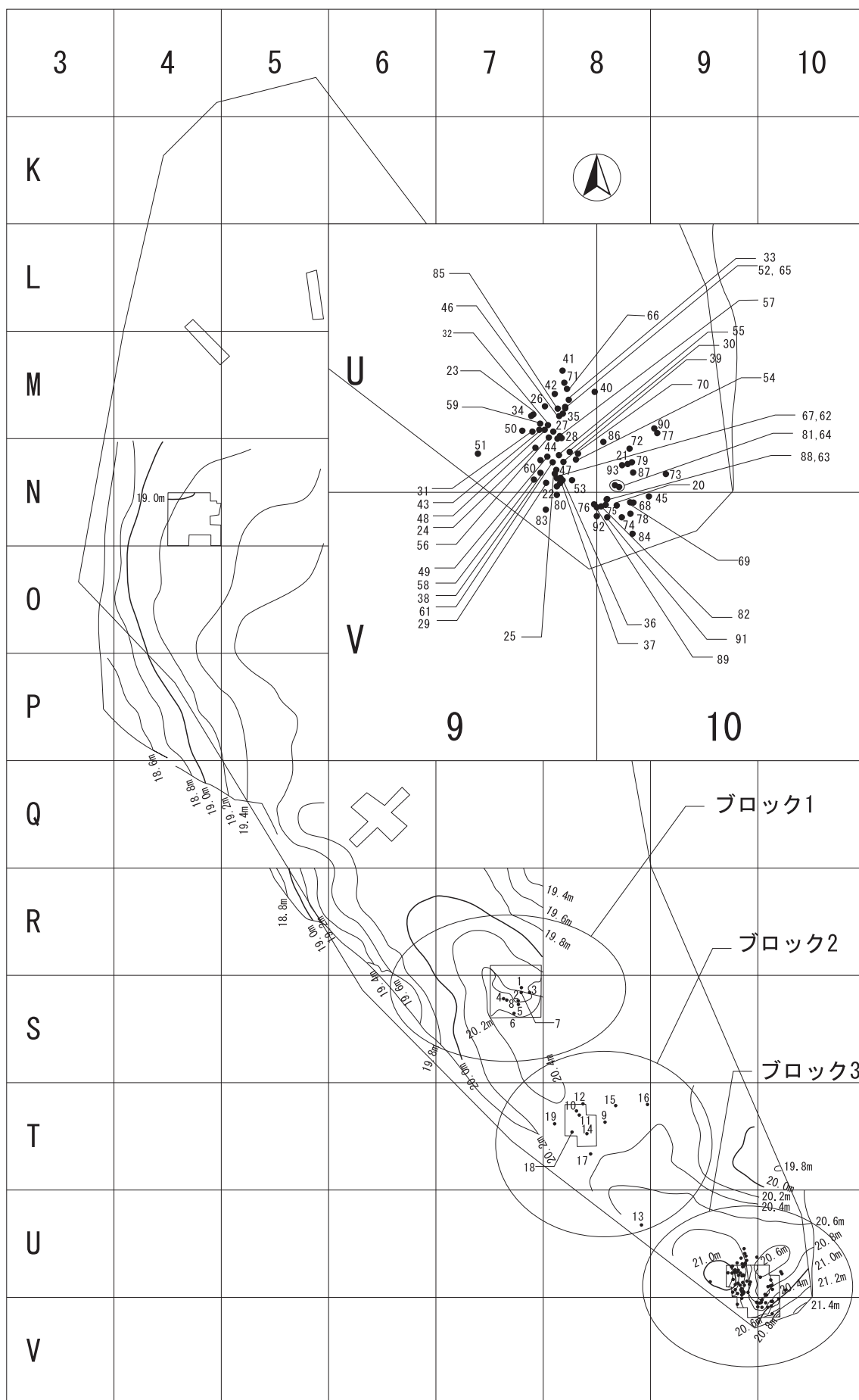
荒田遺跡の旧石器時代の遺物は，Ⅷb層から出土
している。また，分布状況から3つのブロックに分
け，北側からブロック1・2・3と設定した。

ブロック1（第7図 1～8）

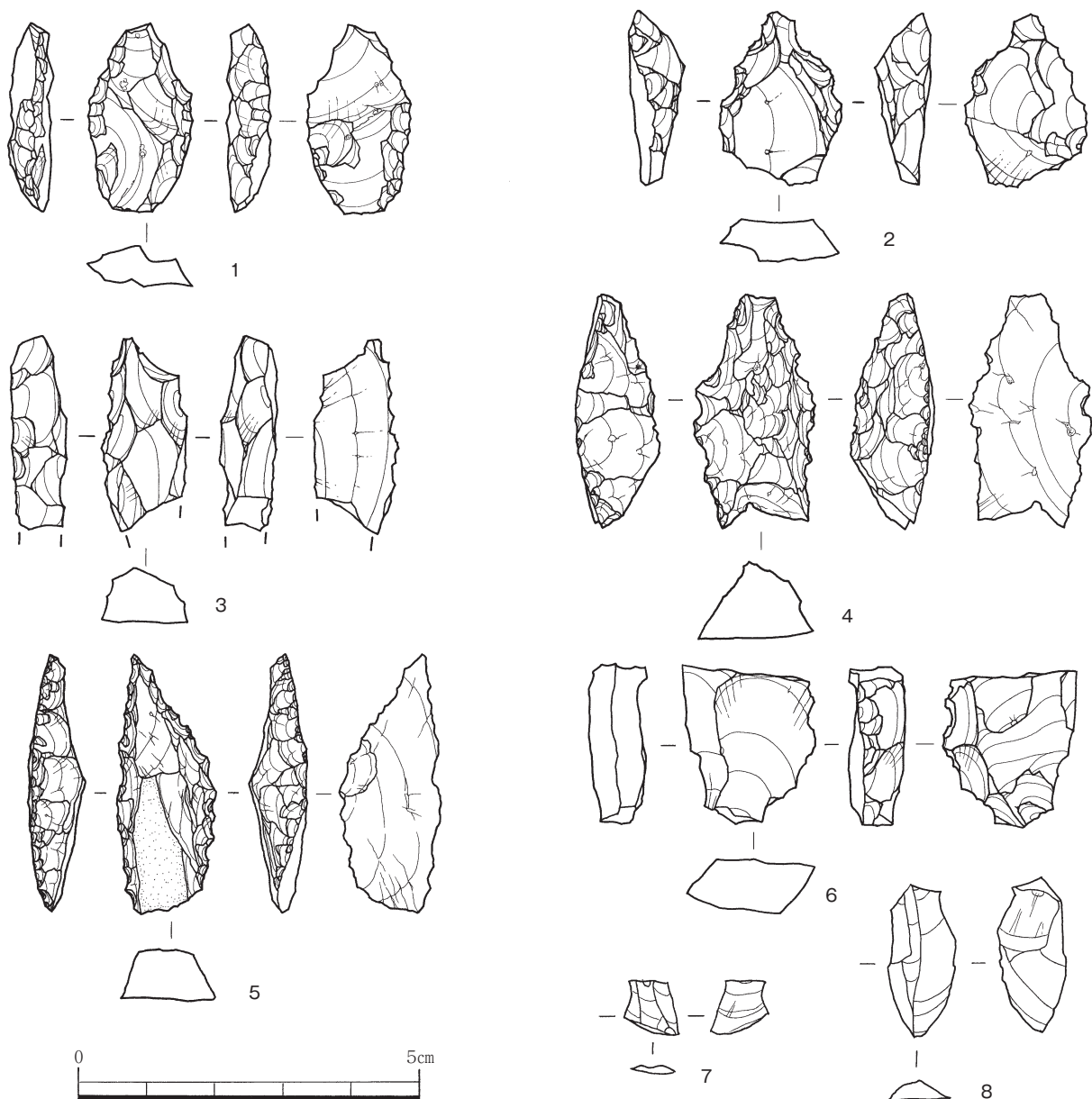
1はナイフ形石器。黒曜石の縦長剥片を素材とし
ている。左側面に，正面からと裏面からのブラン
ディングが施されている。2～4は三稜尖頭器。と
もに横長剥片を素材としている。2は下部から上部
に向けて窄まる形状で，細かな剥離が観察できる。
3は横長剥片を素材とし，正面のみ左右両側面から
剥離を形成している。4は横長剥片を素材とし，正
面を両側面からの加工により整形した後，側縁部に
細かな剥離を施している。裏面には加工が確認で
きない。5は両面加工尖頭器。正面に自然面を残す横
長剥片を素材としている。両側縁の下部から上部に
かけて細かな剥離を正面から施している。6は二次
加工剥片。右側縁部に裏面からの細かな剥離形成が
観察できる。7と8は細石刃。7は断面がほぼ平坦，
8は三角形状を呈する。

ブロック2（第8図～第9図 9～19）

9から14はナイフ形石器。9は鉄石英製の縦長剥
片を素材とし，両側縁部から基部にかけて細かなブ
ランディングを施す。10は上部からの打撃により剥
片を取り出したもので，右側縁部に細かなブラン
ディングを施す。11は，縦長剥片の左側面をほぼ垂
直に加工し，その上下に細かなブランディングを施
している。12は縦長剥片を素材とし，左側縁部に細
かなブランディングを施している。裏面には加工が
確認できない。13は右側面を上部から，左側面は裏
面からのブランディングが施される。14も縦長剥片
を素材とし，左側面にブランディングを施している。
15は台形石器。縦長剥片を素材とし，両側縁部に細
かな剥離を施している。16は細石刃。断面は平坦な
方形となる。17～19は細石刃核。いずれも自然面を
残すものである。17は正面を作業面とし，上部から



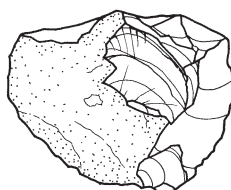
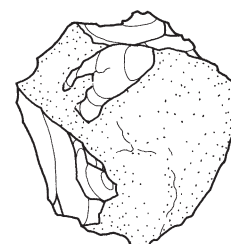
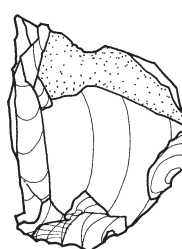
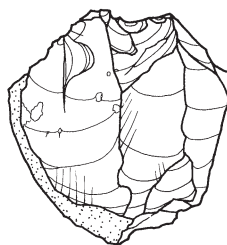
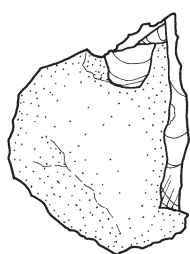
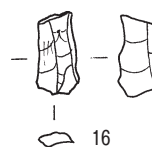
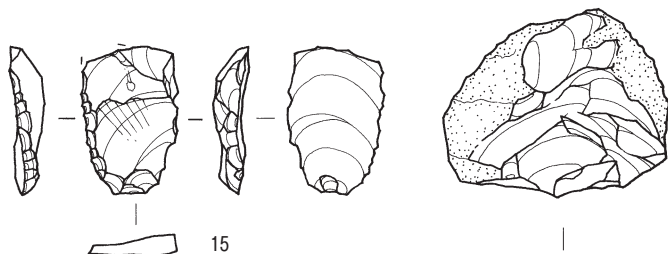
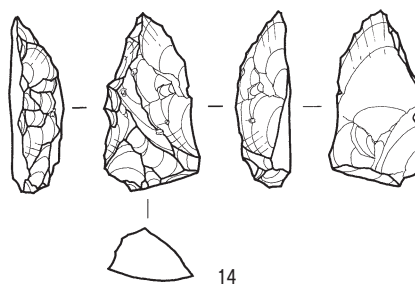
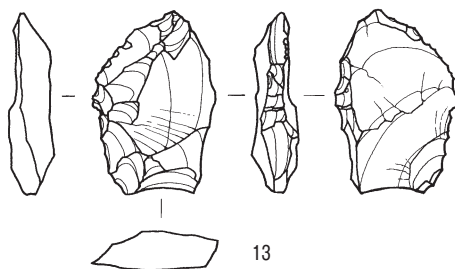
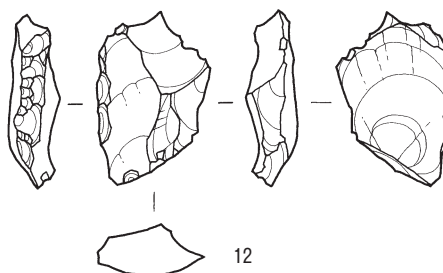
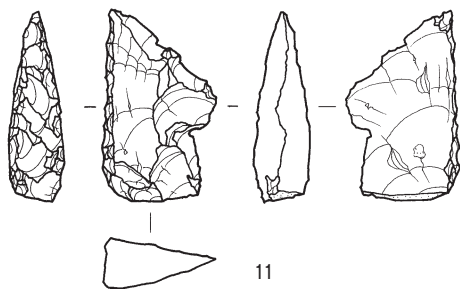
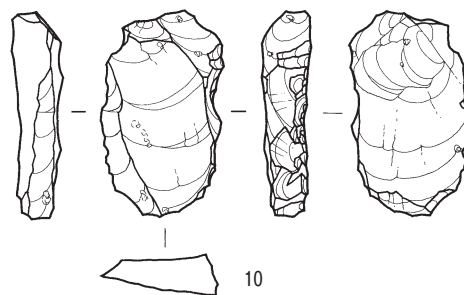
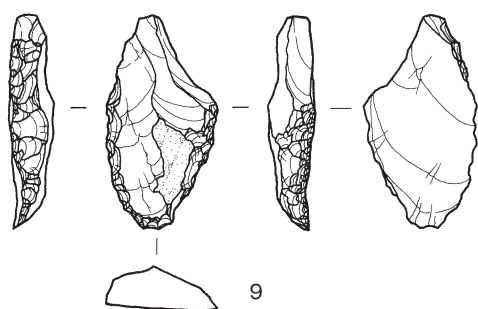
第6図 旧石器時代遺物出土状況



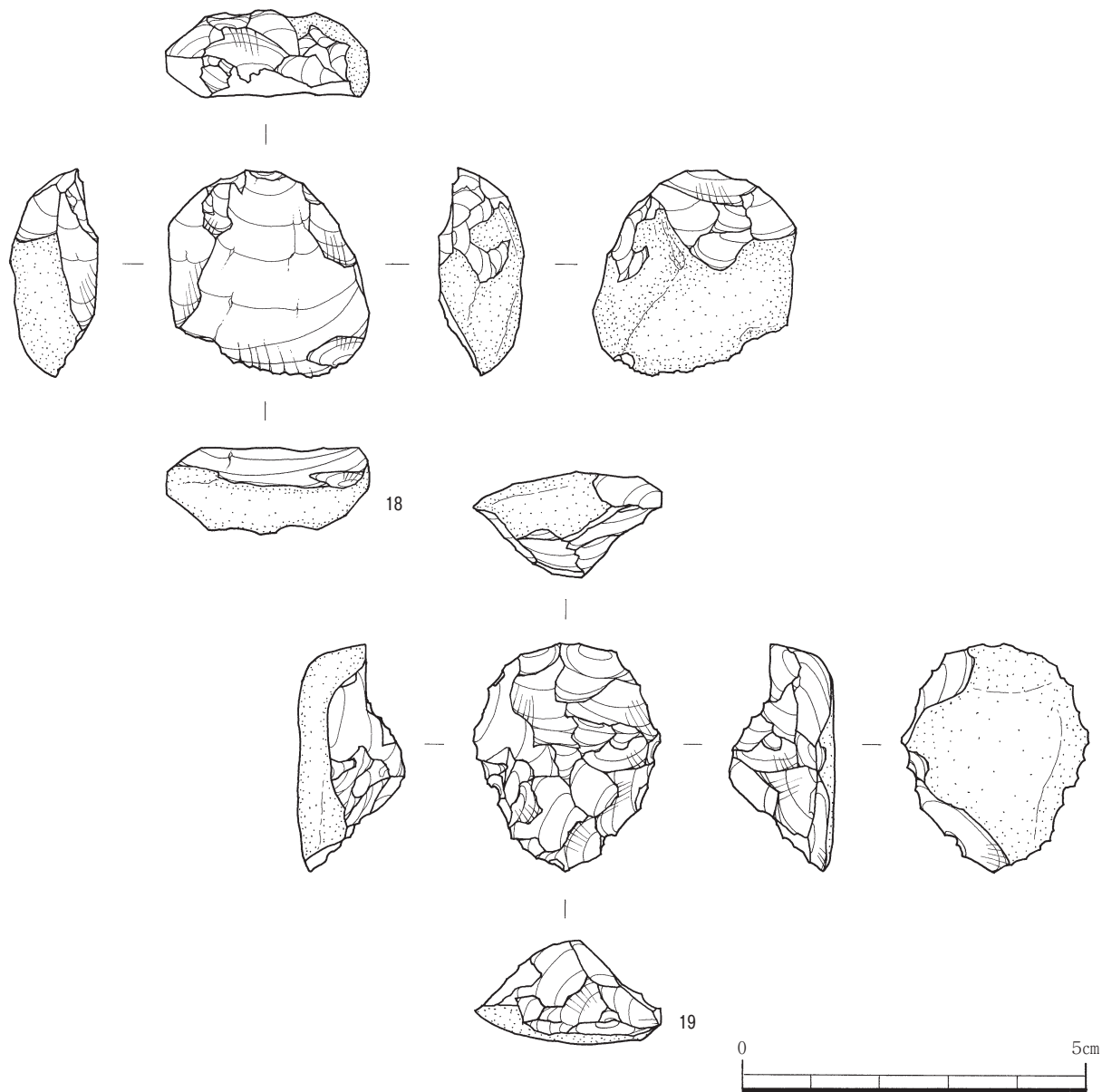
第7図 旧石器1

旧石器時代石器観察表

挿図番号	番号	器種	出土区	層位	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
第7図	1	ナイフ型石器	S-7	VIII	黒曜石	2.75	1.55	0.7	2.56	
	2	三稜尖頭器	S-7	VIII	黒曜石	3.0	1.8	0.85	3.03	
	3	三稜尖頭器	S-7	VIII	黒曜石	(2.9)	1.3	0.8	3.1	
	4	三稜尖頭器	S-7	VIII	黒曜石	3.5	1.7	1.1	5.77	
	5	両面加工尖頭器	S-7	VIII	黒曜石	3.8	1.4	0.7	3.82	
	6	二次加工剥片	S-7	VIII	黒曜石	2.3	2.0	0.8	3.91	
	7	細石刃	S-7	VIII	黒曜石	0.75	0.6	0.15	0.07	
	8	細石刃	S-7	VIII	黒曜石	2.2	1.0	0.27	0.64	
第8図	9	ナイフ型石器	T-8	VIII	鉄石英	2.9	1.5	0.6	2.27	
	10	ナイフ型石器	T-8	VIII	黒曜石	2.7	1.65	0.65	3.02	
	11	ナイフ型石器	T-8	VIII	黒曜石	2.5	1.4	0.7	2.32	
	12	ナイフ型石器	T-8	VIII	黒曜石	2.3	1.5	0.65	2.07	
	13	ナイフ型石器	U-8	VIII	黒曜石	2.4	1.7	0.6	2.38	
	14	ナイフ型石器	T-8	VIII	黒曜石	1.9	1.3	0.4	1.01	
	15	台形石器	T-8	VIII	黒曜石	2.3	1.3	0.73	1.82	
	16	細石刃	T-8	VIII	黒曜石	1.1	0.5	0.1	0.12	
第9図	17	細石刃核	T-8	VIII	黒曜石	3.1	3.0	2.4	19.87	
	18	細石刃核	T-8	VIII	黒曜石	3.1	3.0	1.2	10.94	
第10図	19	細石刃核	T-8	VIII	黒曜石	3.35	2.3	1.4	10.91	
	20	ナイフ型石器	V-10	VIII	安山岩	(4.2)	1.6	0.8	5.61	
	21	二次加工剥片	U-10	VIII	頁岩	3.6	4.5	1.2	20.72	



第8図 旧石器2



第9図 旧石器3

旧石器時代石器観察表

挿図番号	番号	器種	出土区	層位	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
第 11 図	22	細石刃	U-9	VIII	黒曜石	1.0	0.5	0.2	0.12	
	23	細石刃	U-9	VIII	黒曜石	1.5	0.6	0.25	0.28	
	24	細石刃	U-9	VIII	黒曜石	1.1	0.6	0.2	0.12	
	25	細石刃	U-9	VIII	黒曜石	1.2	0.15	0.7	0.12	
	26	細石刃	U-9	VIII	黒曜石	1.2	0.5	0.2	0.23	
	27	細石刃	U-9	VIII	黒曜石	1.2	0.8	0.15	0.19	
	28	細石刃	U-9	VIII	黒曜石	1.6	0.6	0.15	0.32	
	29	細石刃	U-9	VIII	黒曜石	1.3	0.6	0.2	0.16	
	30	細石刃	U-9	VIII	黒曜石	1.4	0.6	0.2	0.3	
	31	細石刃	U-9	VIII	黒曜石	1.1	0.6	0.15	0.18	
	32	細石刃	U-9	VIII	黒曜石	1.3	0.75	0.2	0.17	
	33	細石刃	U-9	VIII	黒曜石	1.3	0.1	0.6	0.17	
	34	細石刃	U-9	VIII	黒曜石	1.55	0.7	0.25	0.42	
	35	細石刃	U-9	VIII	黒曜石	1.1	0.6	0.2	0.14	
	36	細石刃	U-9	VIII	黒曜石	1.3	0.8	0.1	0.13	
	37	細石刃	U-9	VIII	黒曜石	0.85	0.5	0.1	0.1	
	38	細石刃	U-9	VIII	黒曜石	1.25	0.6	0.3	0.22	
	39	細石刃	U-9	VIII	黒曜石	1.0	0.55	0.15	0.1	
	40	細石刃	U-9	VIII	黒曜石	1.15	0.6	0.13	0.17	
	41	細石刃	U-9	VIII	黒曜石	1.0	0.7	0.2	0.21	
	42	細石刃	U-9	VIII	黒曜石	1.45	0.5	0.2	0.26	
	43	細石刃	U-9	VIII	黒曜石	1.15	0.5	0.15	0.13	
	44	細石刃	U-9	VIII	黒曜石	1.0	0.55	0.1	0.06	
	45	細石刃	V-10	VIII	黒曜石	1.4	0.8	0.2	0.22	
	46	細石刃	U-9	VIII	黒曜石	1.6	0.9	0.3	0.37	
	47	細石刃	U-9	VIII	黒曜石	1.4	0.6	0.1	0.17	

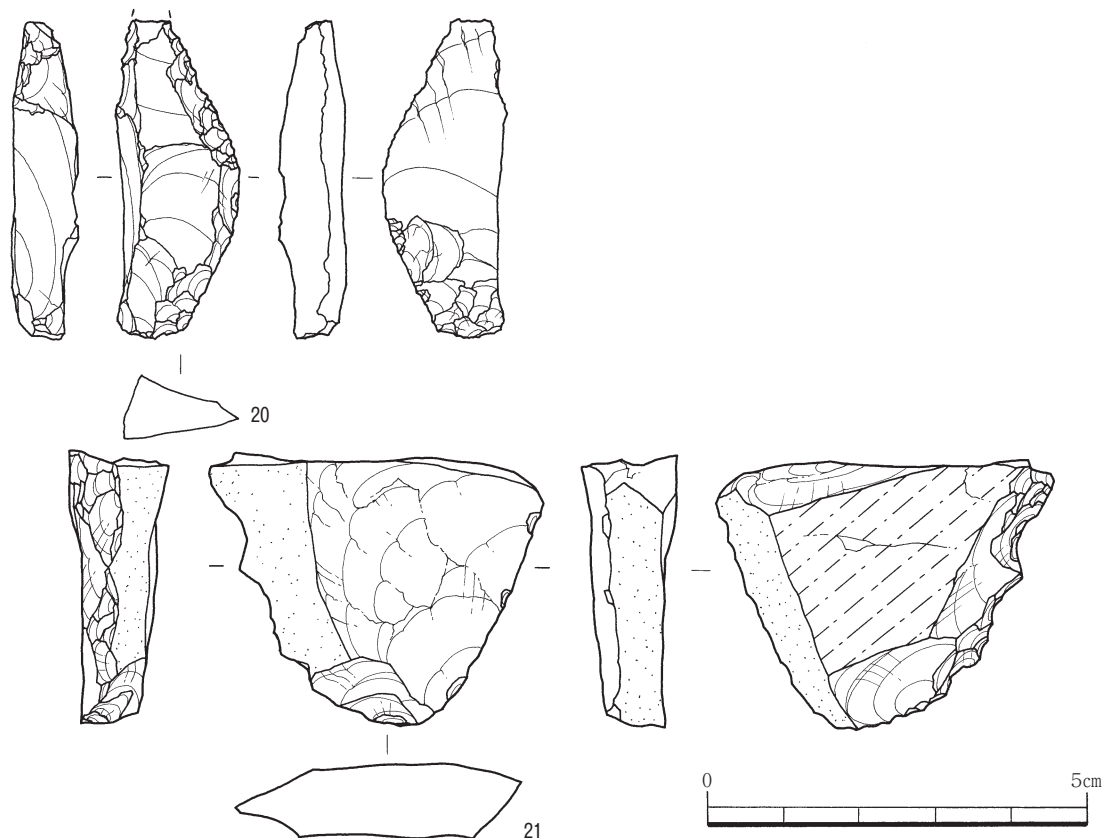
の打撃で細石刃を取り出している。18は正面に大きな剥離を有する。19は左右下部からの剥離により作業面を成形し、正面を主作業面とするものである。

ブロック3（第10図～第14図 20～93）

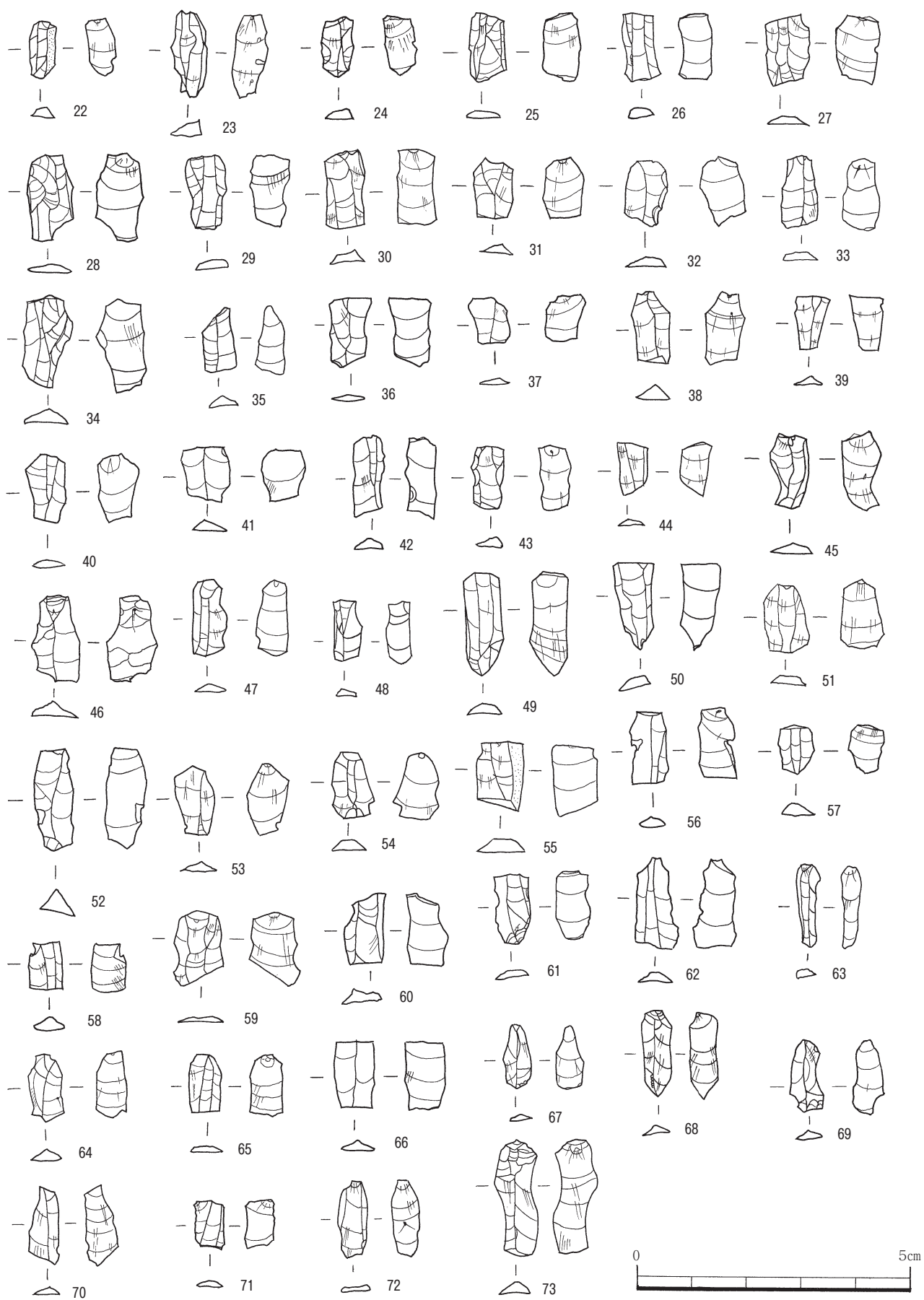
20はナイフ形石器である。縦長剥片を素材としている。右側面基部から上部まで正面より細かなブランディングを施している。基部には裏面からも加工している。先端部は欠損している。21は頁岩製の二次加工剥片。両側面に自然面、裏面に平坦な摂理面を有する。左側面の自然面に細かな剥離を施している。

22～73は細石刃である。断面は、三角形を呈するものがほとんどであるが、一部平坦なものもある。74～93は細石刃核。74は正面を作業面とするもので、打面は後方に傾斜する。裏面に細かな剥離を観察することができる。75は作業面を正面と左側面に有するものである。下面に自然面が残る。76は、作業面が正面と両側面の3面で、上部の打面が三角形に残るものである。77は正面に作業面を有する。打面となる上面はほぼ平坦で、緩やかに後方に傾斜する。

78は打面を正面からの細かな剥離で成形している。作業面は正面。79は作業面が正面になる。上部の打面は左側から加工をして平坦面を成形している。80は正面と左側面に作業面を有する。上部は平坦で後方へ傾斜し、下面とV字状に交わる。81は正面が作業面である。左側面から裏面に掛けて自然面が残る。82は正面と左側面に作業面を有する。上面と下面が平坦でほぼ平行になる。83は右側面からの打撃により上部の打面を形成し、正面で左側から順に細石刃をとりだしている。84は正面を主作業面とする裏面に細かな調整の跡を確認できる。85は打面に比較して作業面が狭い。86は上部に平坦な打面を有し、正面の作業面がほぼ方形となる。87は横長の剥片を素材としている。88は正面と左側面に作業面を有する。89は正面と右側面を作業面とし、下部に向けて窄まる形状となる。90は打面が平坦で正面の作業面と垂直に交わる。91は正面と右側面に作業面を有する。92は作業面の正面に対して、打面が後方に傾斜する。93は打面が三角形となるが、両側面には細かな加工は確認できない。



第10図 旧石器4



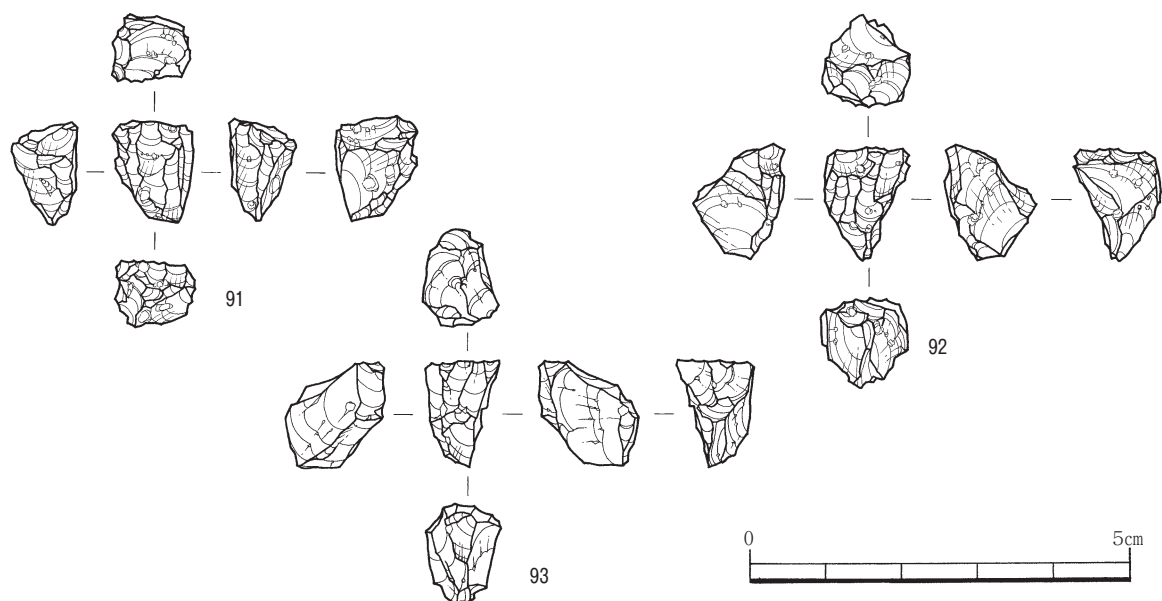
第11图 旧石器5



第12図 旧石器6



第13図 旧石器7



第14図 旧石器8

旧石器時代石器観察表

挿図番号	番号	器種	出土区	層位	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
第 11 図	48	細石刃	U-9	VIII	黒曜石	1.1	0.35	0.2	0.1	
	49	細石刃	U-9	VIII	黒曜石	1.9	0.6	0.2	0.56	
	50	細石刃	U-9	VIII	黒曜石	1.6	0.6	0.2	0.33	
	51	細石刃	U-9	VIII	黒曜石	1.2	0.7	0.15	0.19	
	52	細石刃	U-9	VIII	黒曜石	1.8	0.6	0.4	0.39	
	53	細石刃	U-9	VIII	黒曜石	1.25	0.7	0.2	0.18	
	54	細石刃	U-9	VIII	黒曜石	1.2	0.65	0.2	0.22	
	55	細石刃	U-9	VIII	黒曜石	1.2	0.9	0.2	0.27	
	56	細石刃	U-9	VIII	黒曜石	1.27	0.4	0.2	0.21	
	57	細石刃	U-9	VIII	黒曜石	0.8	0.6	0.2	0.1	
	58	細石刃	U-9	VIII	黒曜石	0.9	0.6	0.55	0.16	
	59	細石刃	U-9	VIII	黒曜石	1.3	0.8	0.1	0.21	
	60	細石刃	U-9	VIII	黒曜石	1.25	0.7	0.23	0.25	
	61	細石刃	U-9	VIII	黒曜石	1.25	0.6	0.1	0.15	
	62	細石刃	U-9	VIII	黒曜石	1.6	0.15	0.7	0.3	
	63	細石刃	V-10	VIII	黒曜石	1.5	0.3	0.2	0.13	
	64	細石刃	U-10	VIII	黒曜石	1.2	0.9	0.2	0.18	
	65	細石刃	U-9	VIII	黒曜石	1.05	0.6	0.1	0.14	
	66	細石刃	U-9	VIII	黒曜石	1.2	0.6	0.2	0.18	
	67	細石刃	U-9	VIII	黒曜石	1.2	0.5	0.2	0.07	
	68	細石刃	V-10	VIII	黒曜石	1.5	0.6	0.1	0.19	
	69	細石刃	V-10	VIII	黒曜石	1.3	0.5	0.2	0.15	
第 12 図	70	細石刃	U-9	VIII	黒曜石	1.3	0.5	0.15	0.16	
	71	細石刃	U-9	VIII	黒曜石	0.8	0.5	0.1	0.08	
	72	細石刃	U-10	VIII	黒曜石	1.3	0.5	0.1	0.13	
	73	細石刃	U-10	VIII	黒曜石	2.1	0.6	0.2	0.29	
	74	細石刃核	V-10	VIII	黒曜石	2.5	1.15	1.6	2.86	
	75	細石刃核	V-10	VIII	黒曜石	1.65	1.25	1.2	2.51	
	76	細石刃核	V-9	VIII	珪質頁岩	2.0	1.2	1.0	1.95	
	77	細石刃核	U-10	VIII	珪質頁岩	2.5	1.7	1.3	5.15	
第 13 図	78	細石刃核	V-10	VIII	黒曜石	1.35	1.2	0.9	1.34	
	79	細石刃核	U-10	VIII	黒曜石	1.95	1.8	1.4	3.64	
	80	細石刃核	V-9	VIII	黒曜石	1.9	1.8	1.8	4.73	
	81	細石刃核	U-10	VIII	黒曜石	1.6	1.2	0.7	2.7	
	82	細石刃核	V-10	VIII	黒曜石	1.3	1.4	1.3	2.25	
	83	細石刃核	V-9	VIII	黒曜石	1.9	1.5	1.55	3.26	
	84	細石刃核	V-10	VIII	黒曜石	1.4	1.4	0.95	1.79	
	85	細石刃核	U-9	VIII	黒曜石	1.6	1.0	1.15	1.73	
	86	細石刃核	U-10	VIII	黒曜石	1.6	1.0	1.15	1.79	
	87	細石刃核	U-10	VIII	黒曜石	1.7	1.3	1.05	1.23	
	88	細石刃核	V-10	VIII	黒曜石	1.3	1.25	0.9	1.27	
	89	細石刃核	V-10	VIII	黒曜石	1.55	1.55	1.1	2.3	
第14図	90	細石刃核	U-10	VIII	黒曜石	1.1	0.8	0.8	0.83	
	91	細石刃核	V-10	VIII	黒曜石	1.35	1.05	0.9	1.24	
	92	細石刃核	V-10	VIII	黒曜石	1.5	1.15	1.1	1.45	
	93	細石刃核	U-10	VIII	黒曜石	1.4	1.0	1.3	1.45	

第5節 縄文時代の調査

縄文時代は本遺跡の中心的なものである。草創期，早期，晩期で遺構，遺物が出土している。

1 縄文時代草創期の調査

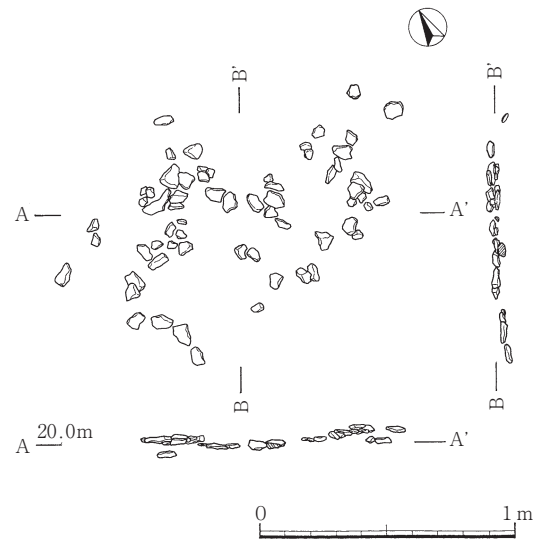
縄文時代草創期は，Ⅷ a 層で集石が検出されている。石器では頁岩のブロック内から石斧や礫器，隆帯文土器が出土している。

(1) 遺構

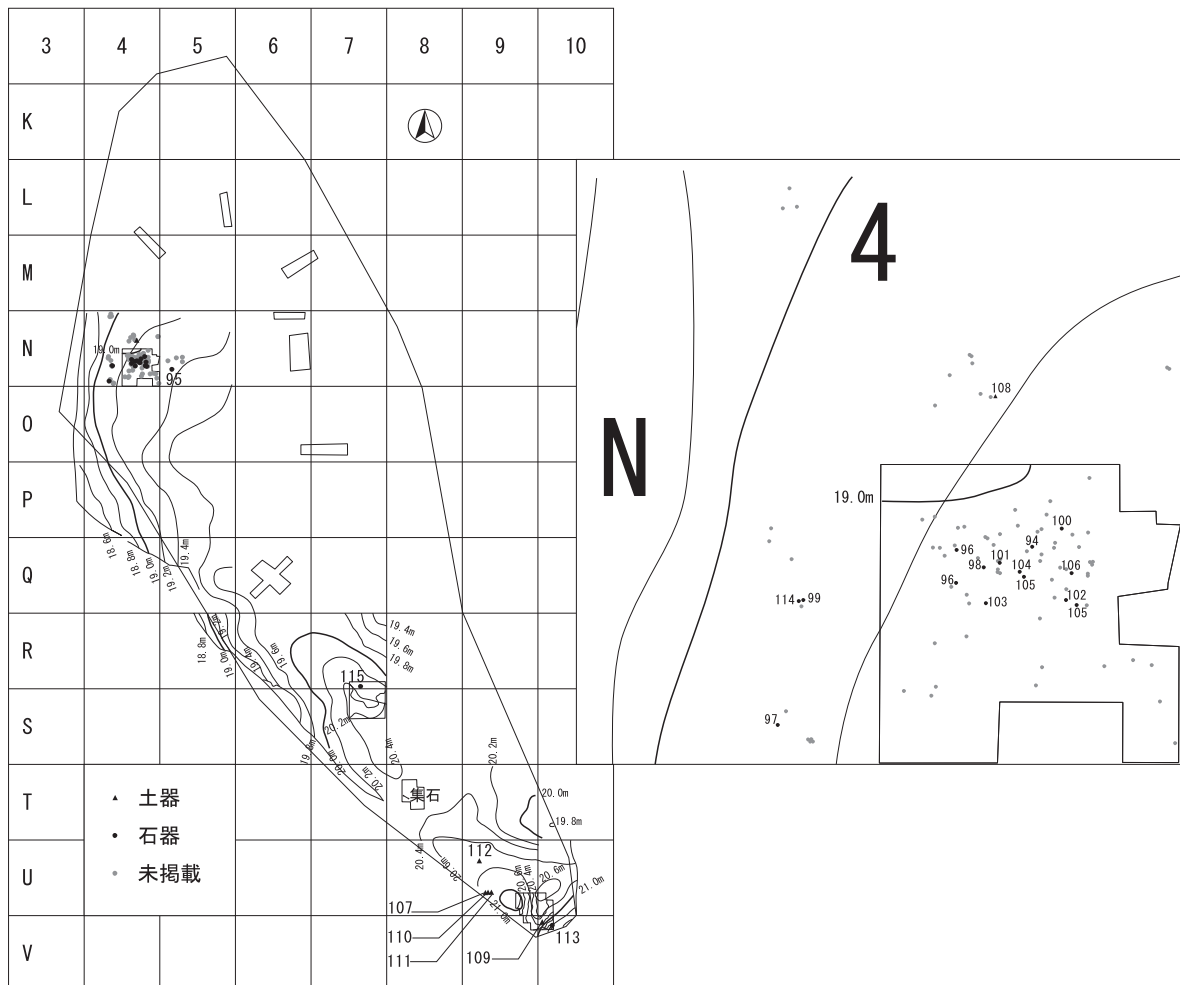
縄文時代草創期は集石が1基と石器製作の跡と思われる頁岩のブロックが1基検出している。

集石（第16図）

T－8区のⅧ a 層で検出されたもので，110×140cmの範囲に広がる。こぶし大の礫を中心に63個からなり，平均重量は約55.8gである。礫はほぼ集中している。平坦で掘り込みは見られない。



第16図 縄文時代草創期 集石遺構

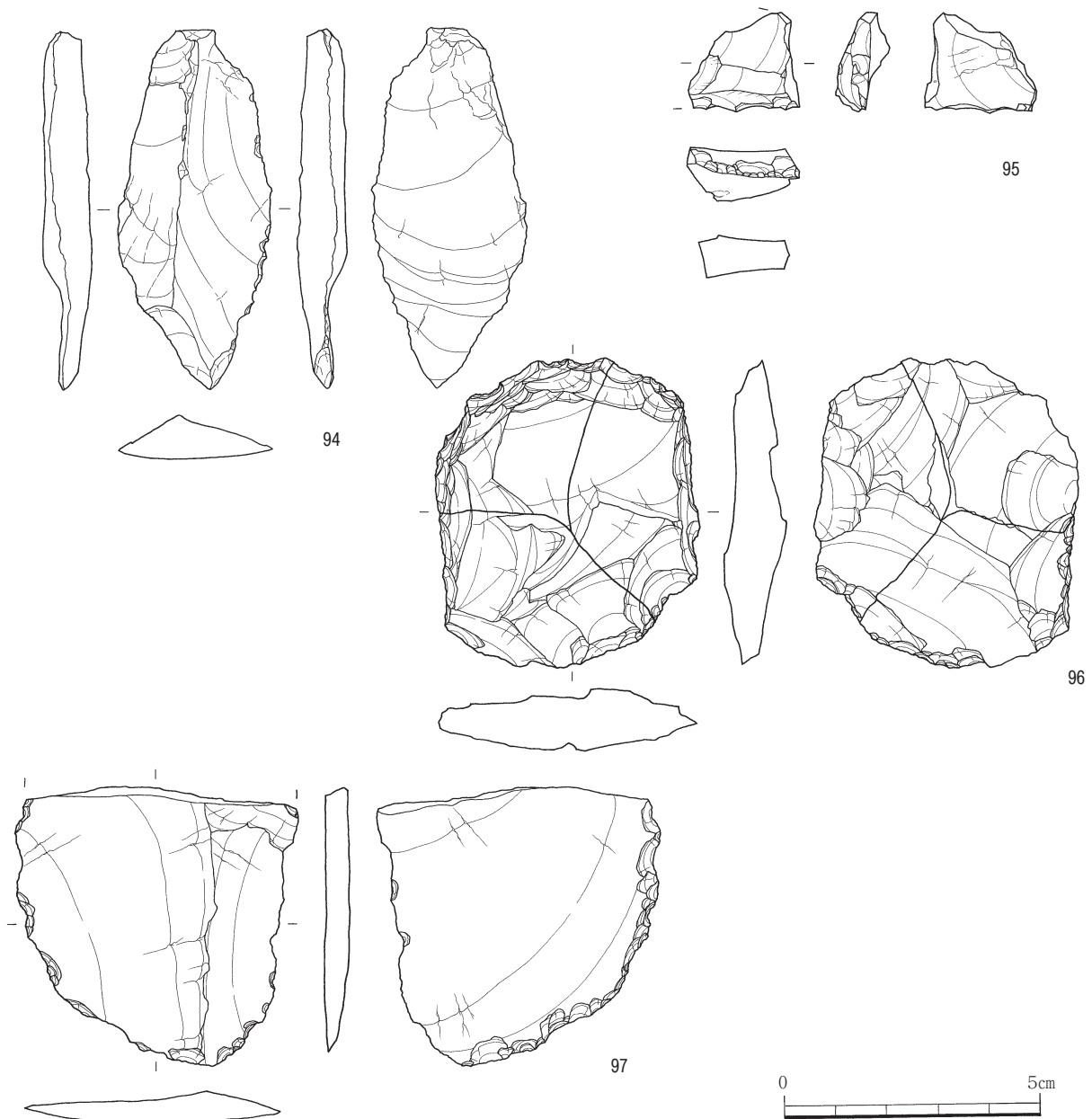


第15図 縄文時代草創期 出土状況

ブロック (第17図・第18図 94~104)

N-4区で検出された、頁岩のブロックである。94はナイフ型石器である。縦長剥片の右側縁にブランディングを行っている。95は上牛鼻産黒曜石に類似し下部に細かいブランディングを施した台形石器である。96~98は、スクレイパーである。96・98は全側縁にブランディングを施したものである。97は薄型の剥片の下部にブランディングを施している。99~105は、打製石斧である。99は縦長剥片を使用し、側縁には抉りが見られ、下部側縁には刃部形成が見

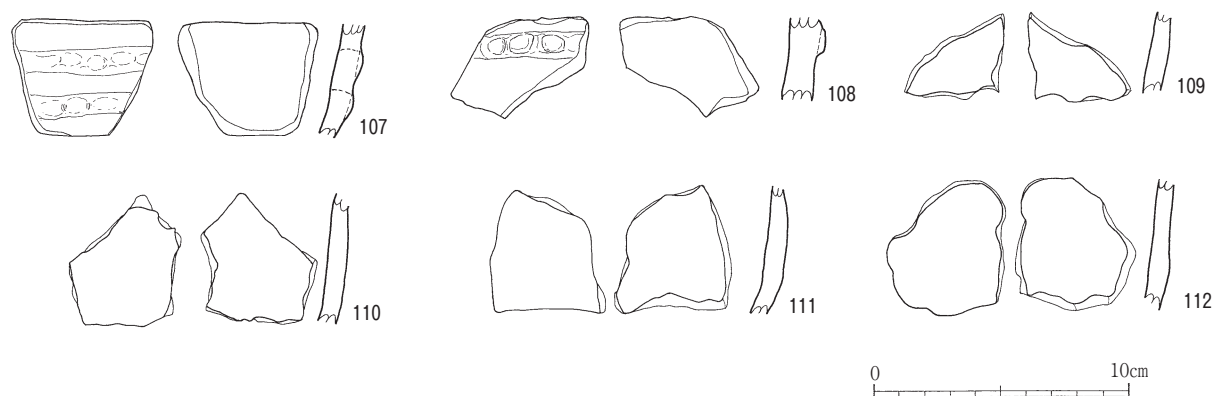
られる。100は縦長剥片の側縁に抉りが見られ下部に刃部形成が行われている。101は薄型の剥片に両側面にブランディングが施されている。102~105は打製石斧に二次加工が施されている。106は自然面を利用し、下部に刃部形成が見られる礫器である。



第17図 縄文時代草創期 1



第18図 縄文時代草創期2



第19図 縄文時代草創期 3

(2) 遺物

①土器 (第19図 107～112)

草創期の土器は、ほとんどのものが風化し、小片であった。そのうち6点を図化した。107は2条の隆帯文が施され、その上に爪痕が観察できる。108は1条の隆帯文で爪痕が観察できる。109～112は風化が著しく、上下や傾きなどを判別することはできなかった。

②石器 (第20図 113～115)

草創期の石器はⅧa層からブロック以外で磨石が出土した。

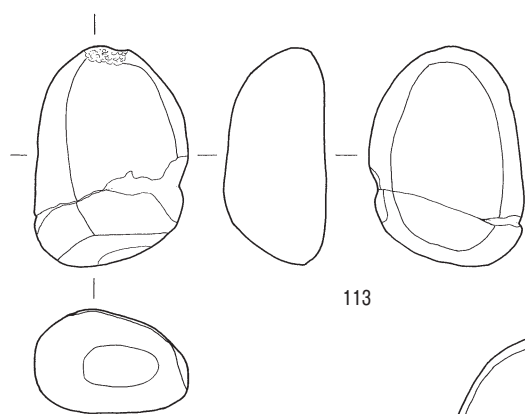
113～115は磨石である。円礫を利用し両面に作業面のあるものである。敲打痕も見られる。

縄文時代草創期石器観察表

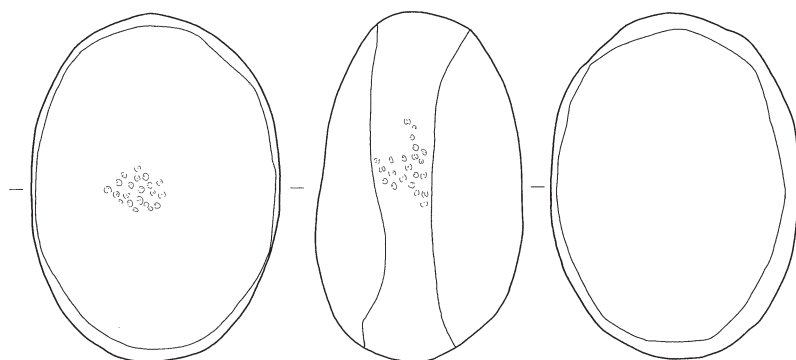
挿図番号	番号	器種	出土区	層位	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
第17図	94	ナイフ型石器	N-4	Ⅷ	頁岩	2.75	1.55	0.7	15.95	
	95	台形石器	N-5	Ⅷ	黒曜石(上牛鼻)	3.0	1.8	0.85	3.23	
	96	スクレイパー	N-4	Ⅷ	頁岩	6.9	5.0	1.1	44.92	
	97	スクレイパー	N-4	Ⅷ	頁岩	5.2	5.0	0.6	19.58	
第18図	98	スクレイパー	N-4	Ⅷ	頁岩	4.0	4.5	0.7	15.59	
	99	打製石斧	N-4	Ⅷ	頁岩	12.5	4.2	1.7	89.38	
	100	打製石斧	N-4	Ⅷ	頁岩	19.0	4.7	2.0	205.9	
	101	打製石斧	N-4	Ⅷ	頁岩	7.0	4.4	0.9	32.18	
	102	打製石斧	N-4	Ⅷ	頁岩	4.4	6.8	1.2	36.27	
	103	打製石斧	N-4	Ⅷ	頁岩	4.0	5.0	1.2	24.92	
	104	打製石斧	N-4	Ⅷ	頁岩	8.3	6.3	1.6	102.23	
	105	打製石斧	N-4	Ⅷ	頁岩	4.7	7.1	1.1	37.18	
第20図	106	礫器	N-4	Ⅷ	頁岩	11.0	11.4	2.0	280	
	113	磨石	V-10	Ⅷ	砂岩	8.5	5.9	4.0	280	
	114	磨石	N-4	Ⅷ	砂岩	13.8	9.8	8.2	1540	
	115	磨石	R-7	Ⅷ	砂岩	22.7	13.2	6.1	2480	

縄文時代草創期土器観察表

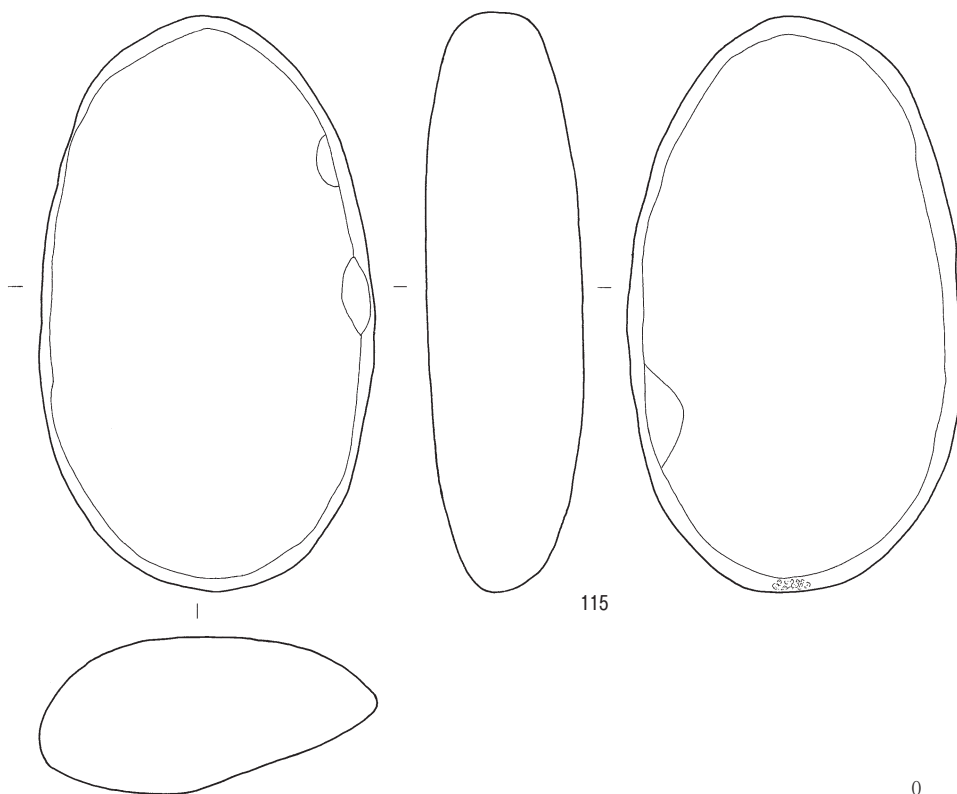
挿図番号	番号	層位	出土区	部位	色調		胎土				焼成	外面	内面	備考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他				
第19図	107	Ⅶ	U-9	胴部	にぶい黄橙	褐	○	○			やや良	—	—	
	108	Ⅶ	N-4	胴部	にぶい黄橙	橙	○	○			不良	—	—	
	109	Ⅶ	V-10	胴部	黄褐	明赤褐	○	○			不良	—	—	
	110	Ⅶ	U-9	胴部	黒褐	褐	○	○			不良	—	—	
	111	Ⅶ	U-9	胴部	褐	赤褐	○	○			不良	—	—	
	112	Ⅶ	U-9	胴部	褐	明褐	○	○			不良	—	—	



113



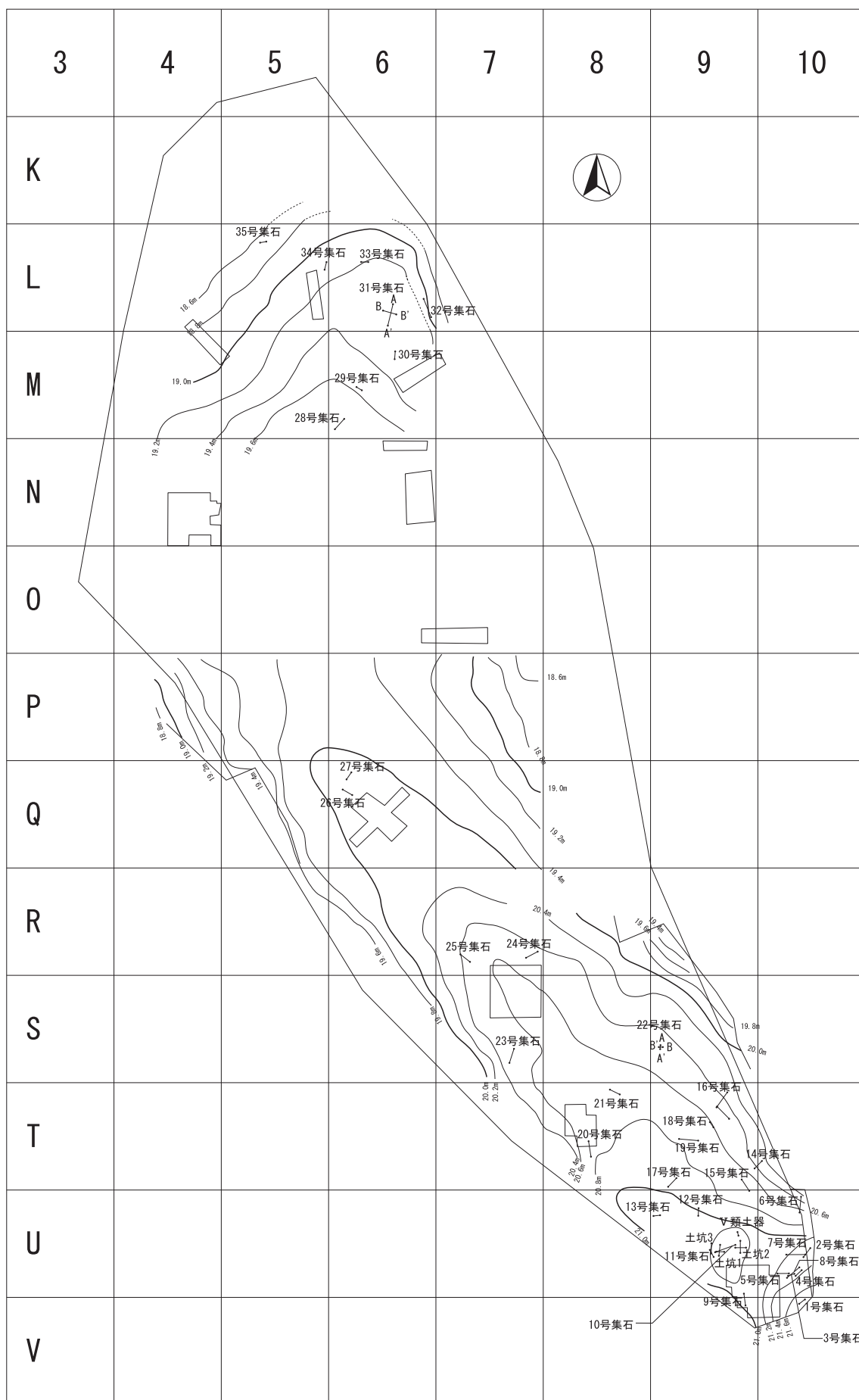
114



115



第20図 縄文時代草創期 4



2 縄文時代早期の調査

縄文時代早期は遺構で35基の集石や3基の土坑が検出し、遺物は土器、石器が出土している。

(1) 遺構 (第22図～第33図)

縄文時代早期の遺構は集石が35基、土坑が3基検出されている。遺物はⅡ類からⅪ類までの土器、石鏃や磨石、石皿などの石器が出土した。

①集石 (第22図～第32図)

集石は、U-10区で8基、M-6区・T-9区・U-9区で4基、L-6区で3基、L-5区・Q-6区・R-7区で2基などと広範囲で検出された。

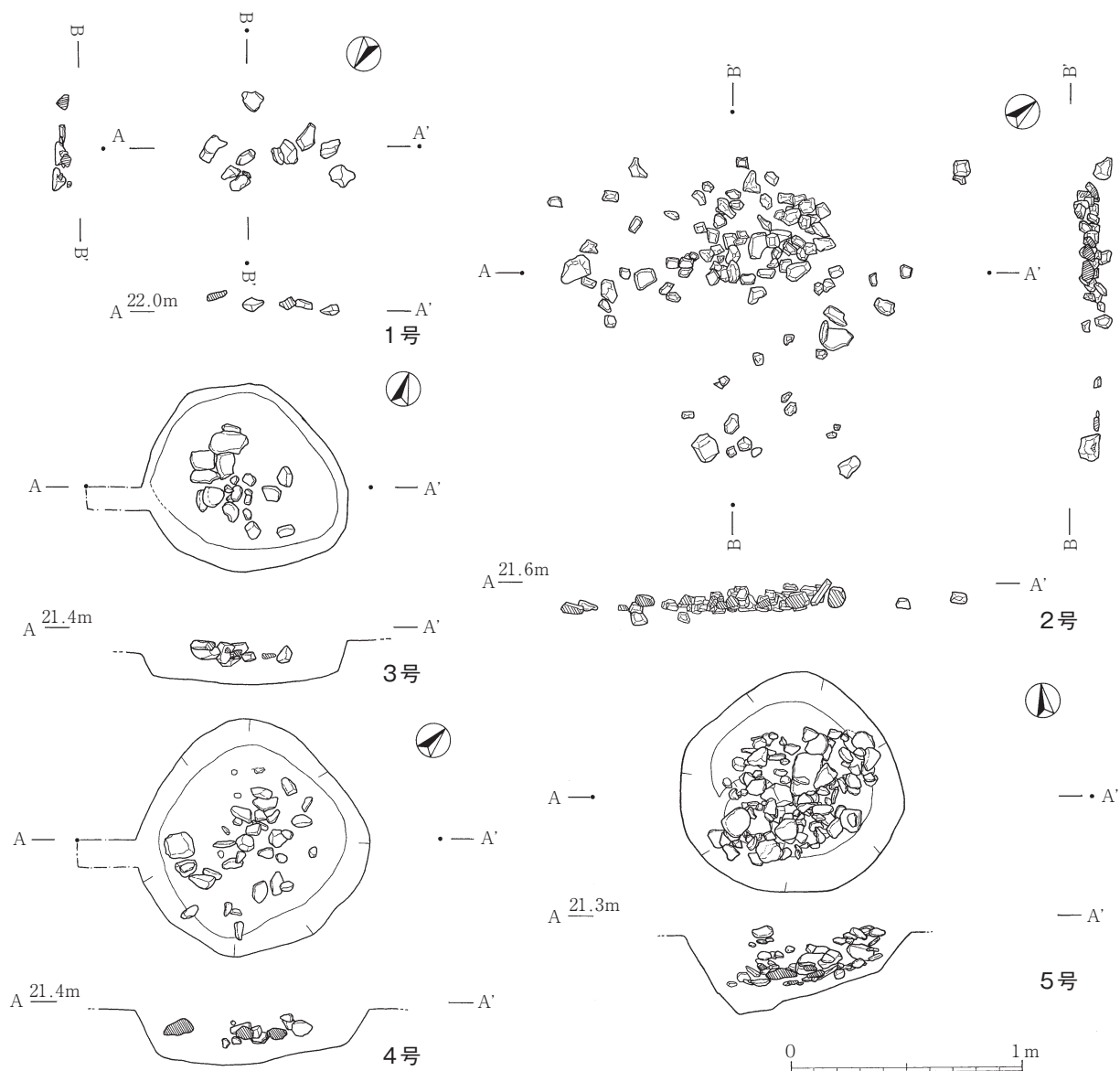
合計35基である。

1号集石 (第22図)

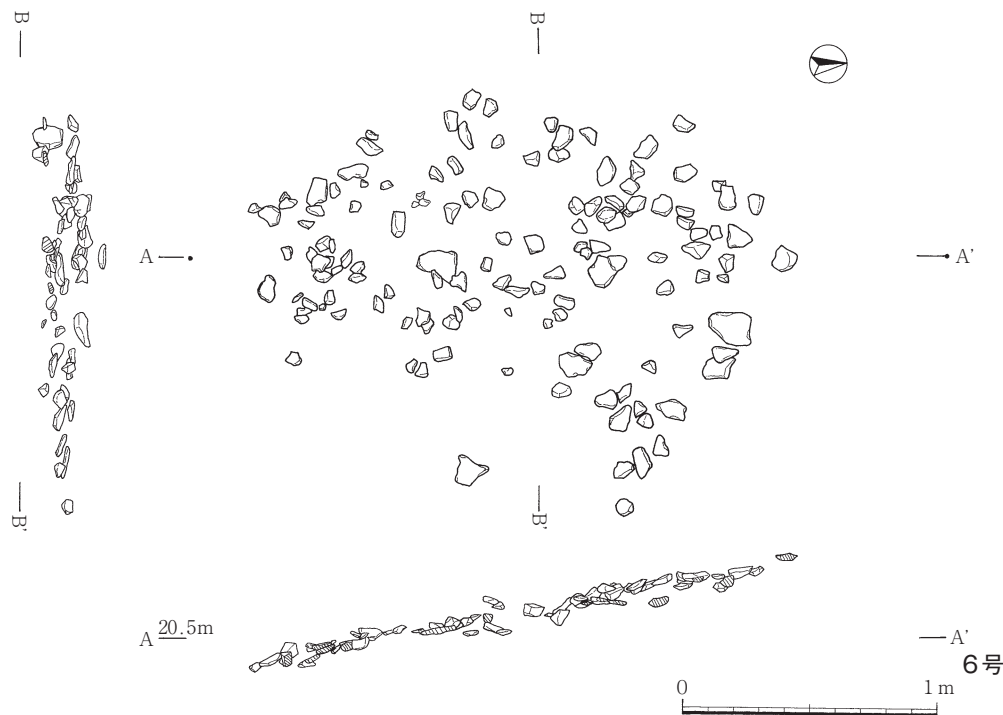
V-10区で検出されたもので、45×70cmの範囲に広がる。こぶし大の礫を中心に11個からなり、平均重量は約267.7gである。まともにはみられず、ほぼ平坦で掘り込みは見られない。

2号集石 (第22図)

U-10区で検出されたもので、149×175cmの範囲に広がる。こぶし大の礫を中心に95個からなる。礫は集中しているが、ほぼ平坦で掘り込みは見られない。



第22図 縄文時代早期 集石遺構 1



第23図 縄文時代早期 集石遺構2

3号集石 (第22図)

U-10区で検出されたもので、50×45cmの範囲に広がる。10cm大の角礫を中心に21個からなり、平均重量は約199.3gである。掘り込みは集中している範囲の下位にあり、80×85cm、深さ約18cmである。

4号集石 (第22図)

U-10区で検出されたもので、77×65cmの範囲に広がる。10cm大の角礫を中心に37個からなり、平均重量は約154.1gである。掘り込みは集中している範囲の下位にあり、120×100cm、深さ約25cmである。

5号集石 (第22図)

U-10区で検出されたもので、60×70cmの範囲に広がる。こぶし大の角礫を中心に128個からなり、平均重量は約106.3gである。掘り込みは集中している範囲の下位にあり、65×70cm、深さ30.2cmである。礫は掘り込みの下部に入り込んでいる。

6号集石 (第23図)

U-10区で検出されたもので、170×216cmの範囲に広がる。10cm大の礫を中心に131個からなり、平均重量は約108gである。まともにはみられず、ほぼ平坦で掘り込みは見られない。

7号集石 (第24図)

U-10区で検出されたもので、285×260cmの範囲に広がる。10cm大の礫を中心に133個からなり、平均重量は約121gである。まともにはみられず、ほぼ平坦で掘り込みは見られない。

8号集石 (第24図)

U-10区で検出されたもので、235×235cmの範囲に広がる。こぶし大の礫を中心に69個からなり、平均重量は約182.8gである。まともにはみられず、ほぼ平坦で掘り込みは見られない。

9号集石 (第25図)

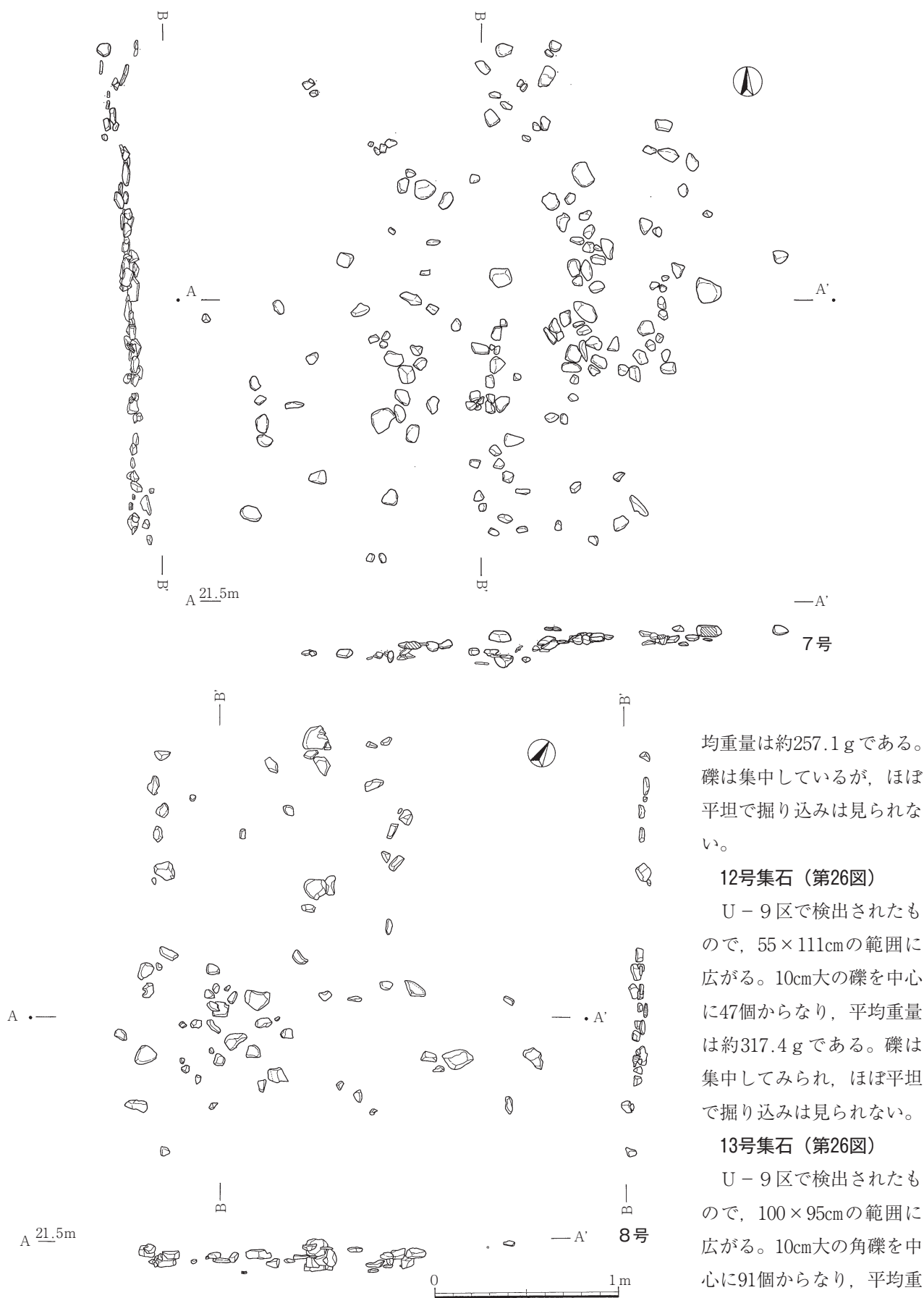
U・V-9区で検出されたもので、195×315cmの範囲に広がる。こぶし大の礫を中心に111個からなり、平均重量は約189gである。まともにはみられず、ほぼ平坦で掘り込みは見られない。

10号集石 (第25図)

U-9区で検出されたもので、300×367cmの範囲に広がる。こぶし大の礫を中心に291個からなり、平均重量は約95.9gである。まともには東側にみられる。ほぼ平坦で掘り込みは見られない。

11号集石 (第26図)

U-9区で検出されたもので、70×85cmの範囲に広がる。こぶし大の礫を中心に125個からなり、平



均重量は約257.1gである。
 礫は集中しているが、ほぼ
 平坦で掘り込みは見られな
 い。

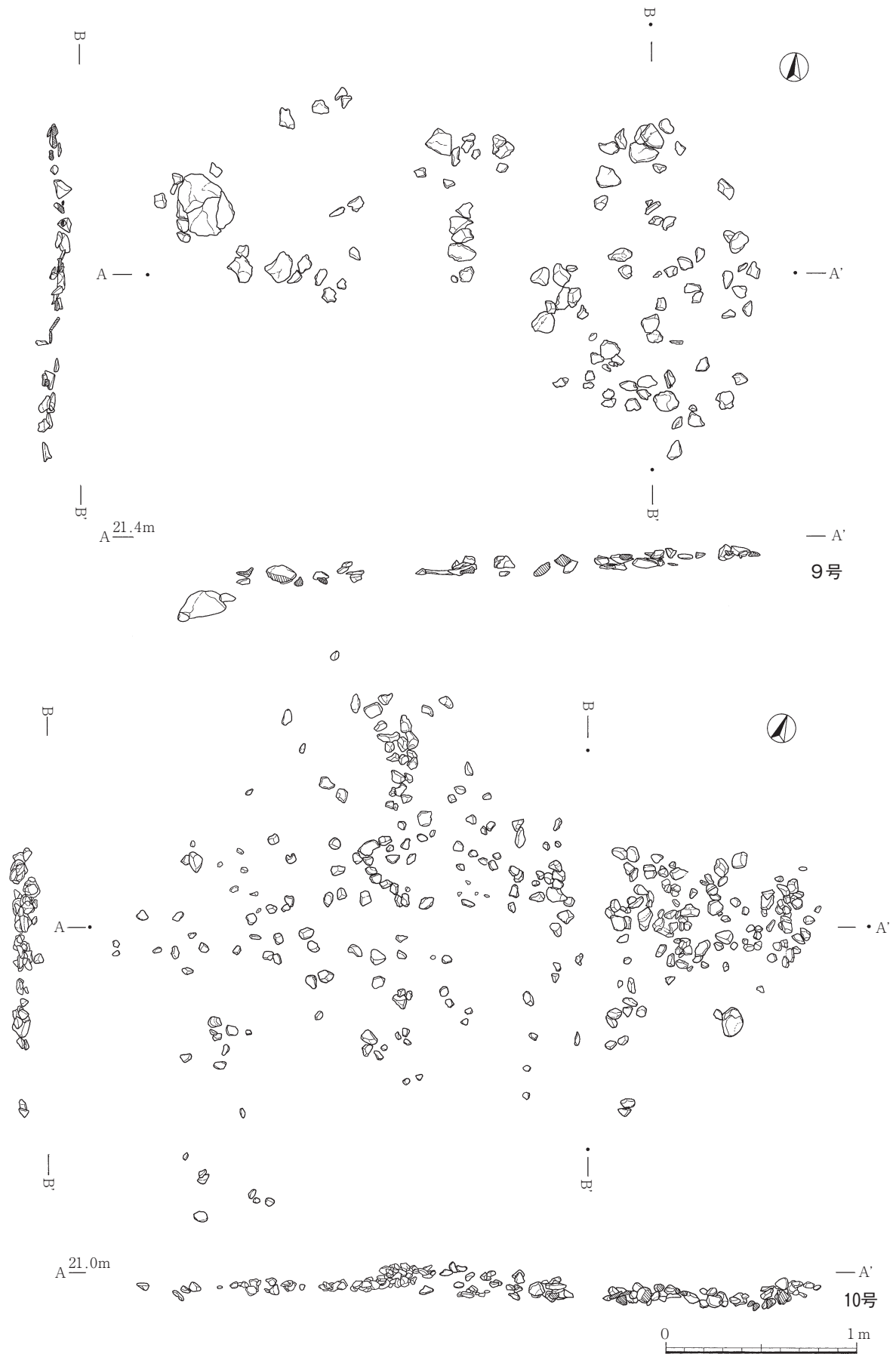
12号集石 (第26図)

U-9区で検出されたも
 ので、55×111cmの範囲に
 広がる。10cm大の礫を中心
 に47個からなり、平均重量
 は約317.4gである。礫は
 集中してみられ、ほぼ平坦
 で掘り込みは見られない。

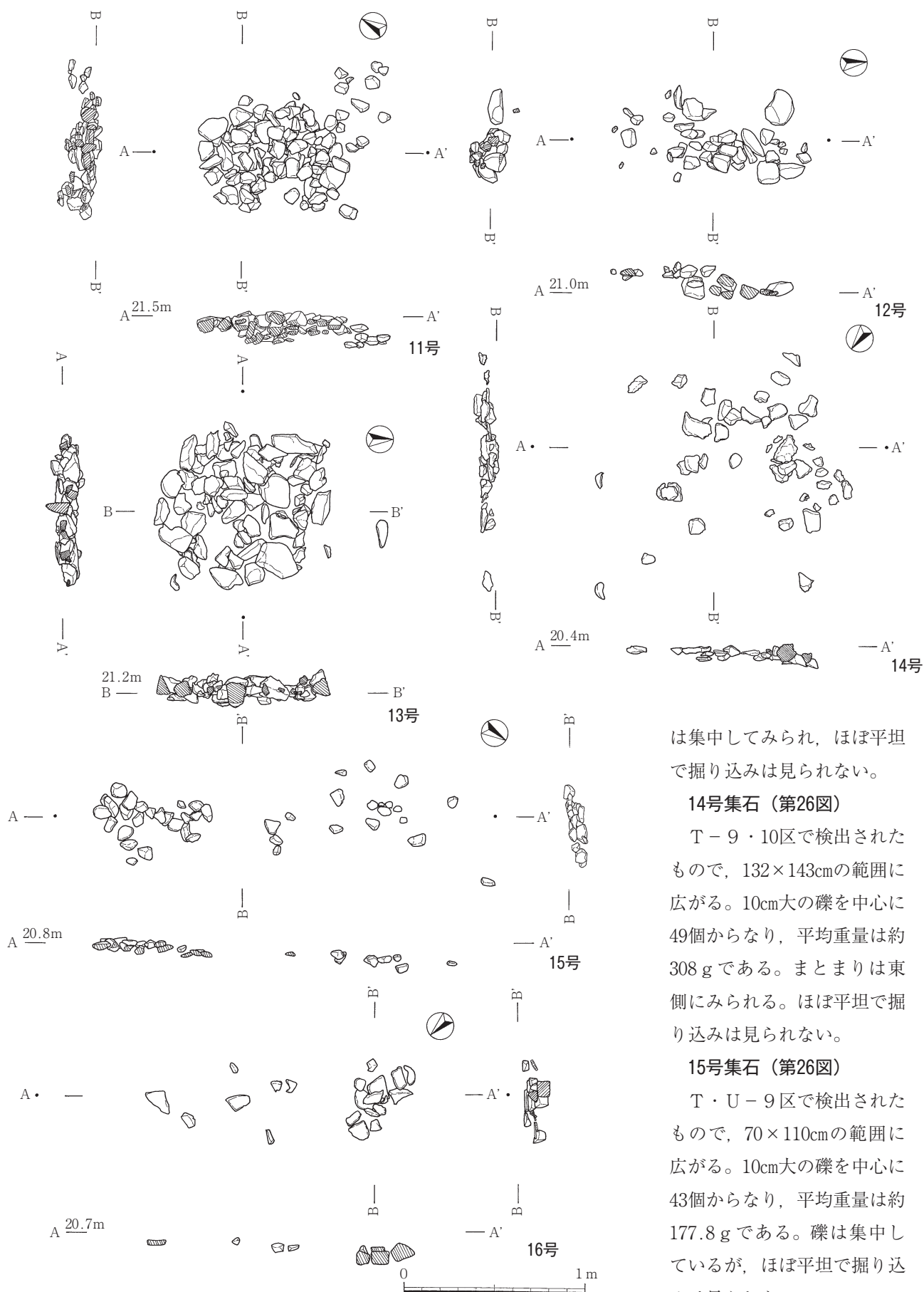
13号集石 (第26図)

U-9区で検出されたも
 ので、100×95cmの範囲に
 広がる。10cm大の角礫を中
 心に91個からなり、平均重
 量は約754.8gである。礫

第24図 縄文時代早期 集石遺構3



第25図 縄文時代早期 集石遺構4



第26図 縄文時代早期 集石遺構5

は集中してみられ、ほぼ平坦で掘り込みは見られない。

14号集石（第26図）

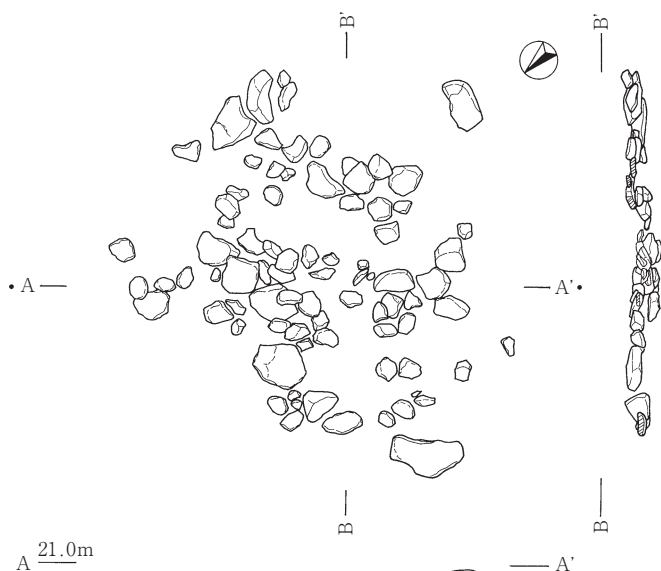
T-9・10区で検出されたもので、132×143cmの範囲に広がる。10cm大の礫を中心に49個からなり、平均重量は約308gである。まともは東側にみられる。ほぼ平坦で掘り込みは見られない。

15号集石（第26図）

T・U-9区で検出されたもので、70×110cmの範囲に広がる。10cm大の礫を中心に43個からなり、平均重量は約177.8gである。礫は集中しているが、ほぼ平坦で掘り込みは見られない。

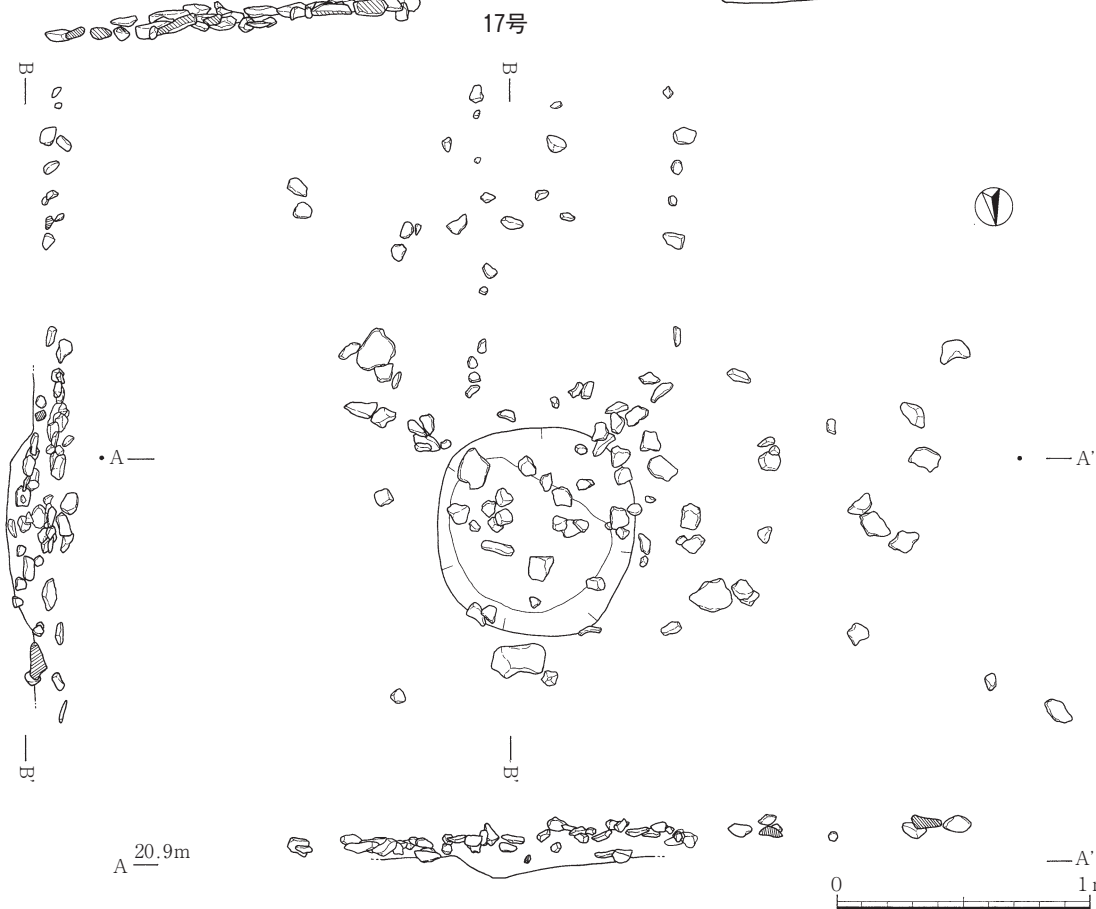
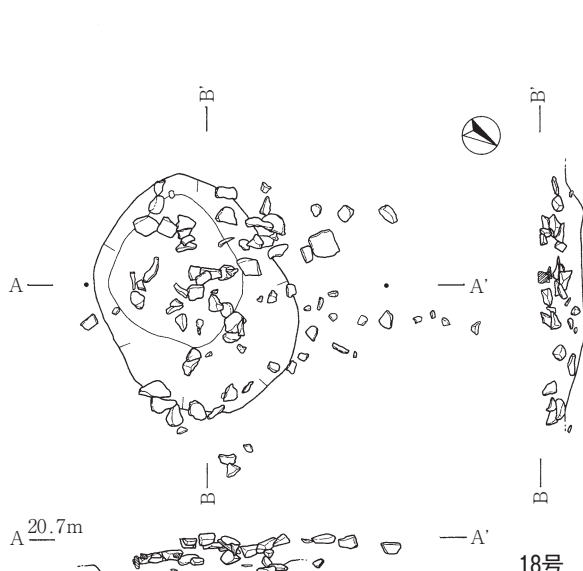
16号集石（第26図）

T-9区で検出されたもので、 $46 \times 150\text{cm}$ の範囲に広がる。10cm大の礫を中心に19個からなり、平均重量は約331.3gである。まともは東側にみられる。ほぼ平坦で掘り込みは見られない。



17号集石（第27図）

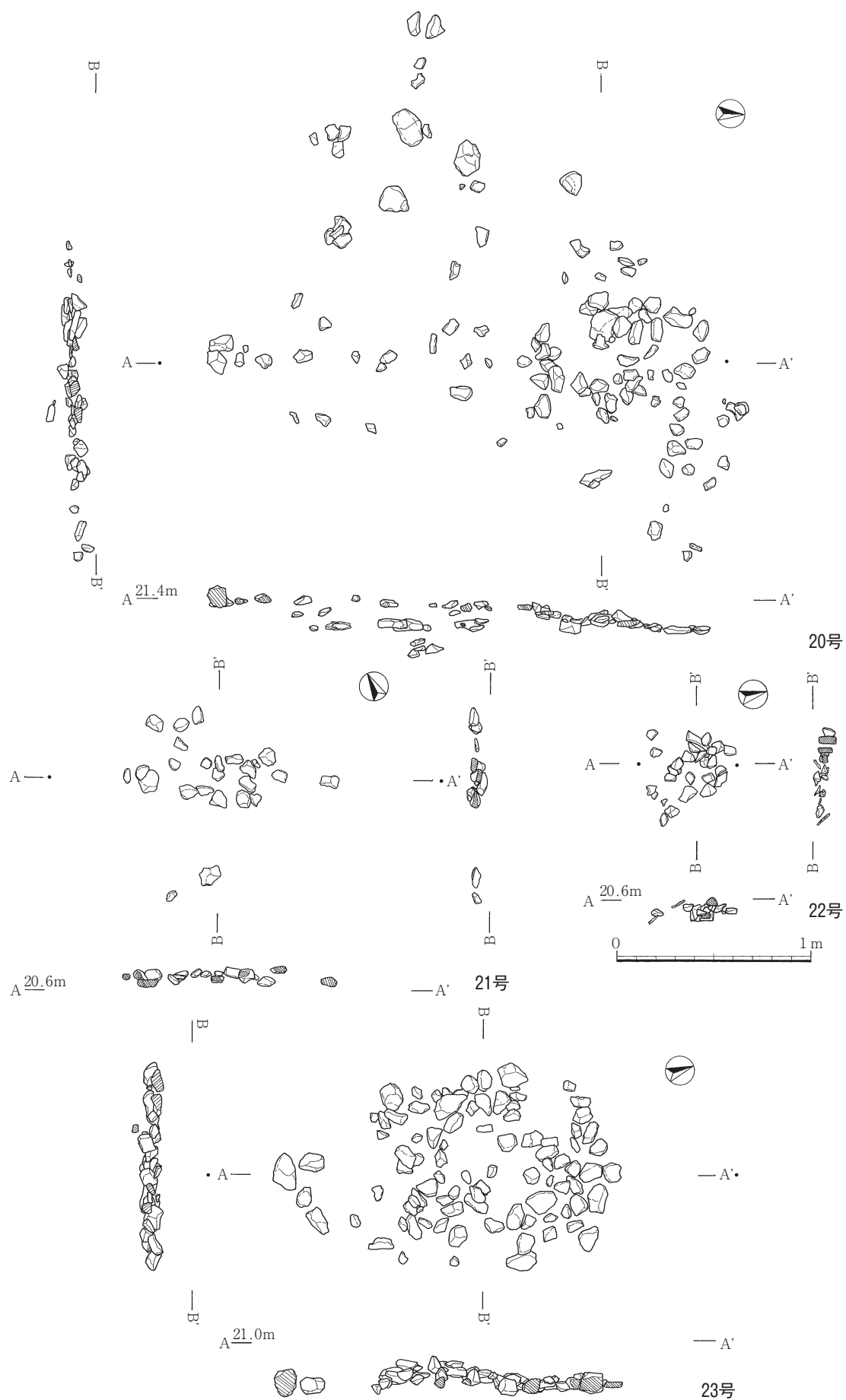
T-9区で検出されたもので、 $165 \times 150\text{cm}$ の範囲に広がる。20cm大の礫を中心に83個からなり、平均重量は約297.7gである。礫は集中しているが、ほぼ平坦で掘り込みは見られない。



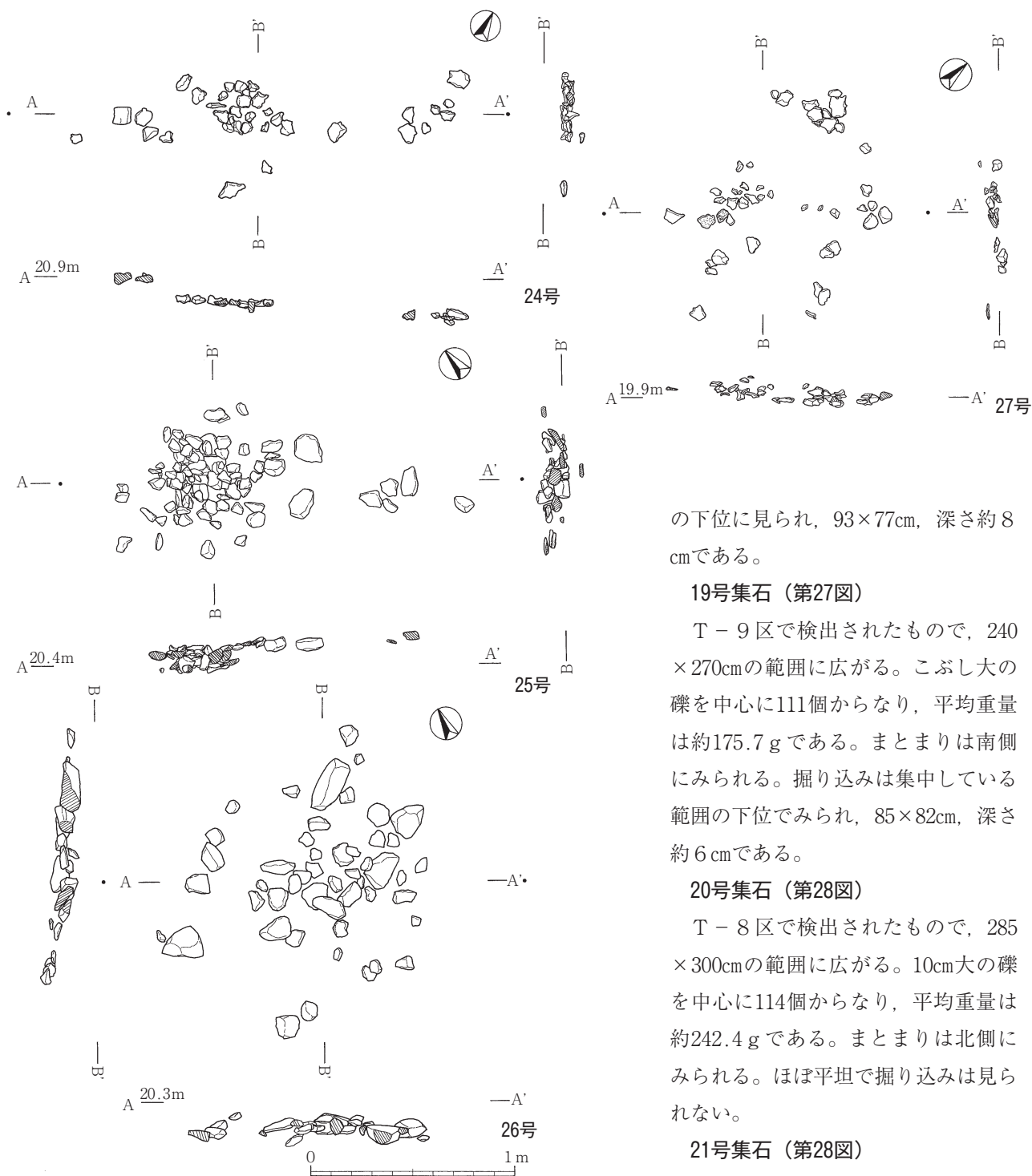
18号

19号

第27図 縄文時代早期 集石遺構6



第28図 縄文時代早期 集石遺構7



第29図 縄文時代早期 集石遺構 8

18号集石 (第27図)

T-9区で検出されたもので、96×147cmの範囲に広がる。10cm大の礫を中心に84個からなり、平均重量は約87.2gである。掘り込みが集中している礫

の下位に見られ、93×77cm、深さ約8cmである。

19号集石 (第27図)

T-9区で検出されたもので、240×270cmの範囲に広がる。こぶし大の礫を中心に111個からなり、平均重量は約175.7gである。まともは南側にみられる。掘り込みは集中している範囲の下位でみられ、85×82cm、深さ約6cmである。

20号集石 (第28図)

T-8区で検出されたもので、285×300cmの範囲に広がる。10cm大の礫を中心に114個からなり、平均重量は約242.4gである。まともは北側にみられる。ほぼ平坦で掘り込みは見られない。

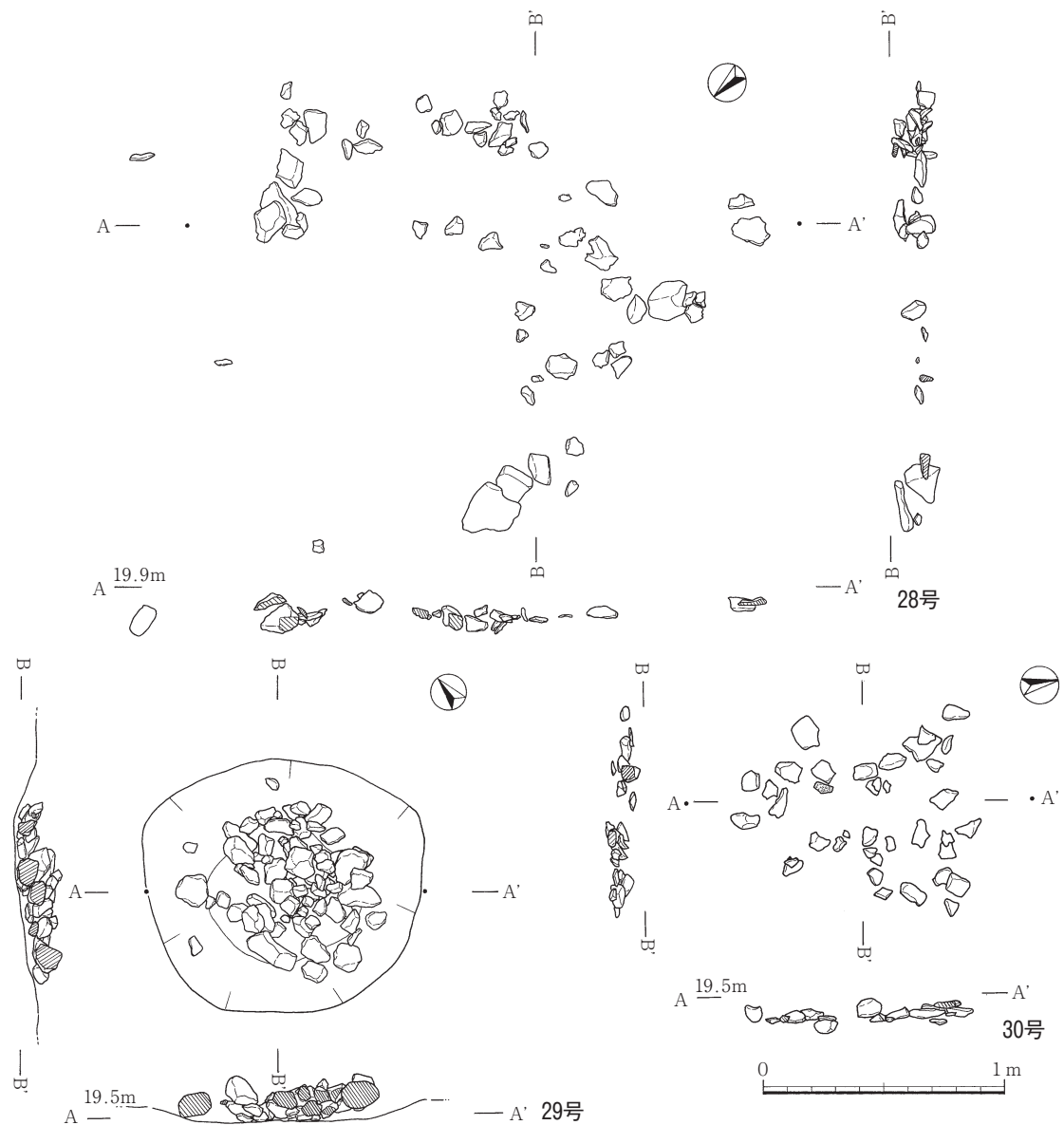
21号集石 (第28図)

T-8区で検出されたもので、115×95cmの範囲に広がる。10cm大の礫を中心に25個からなり、平均重量は約252.8gである。礫は集中してみられ、

ほぼ平坦で掘り込みは見られない。

22号集石 (第28図)

S-9区で検出されたもので、47×52cmの範囲に広がる。こぶし大の礫を中心に29個からなり、平均



第30図 縄文時代早期 集石遺構9

重量は約113.9 gである。礫は集中してみられ、ほぼ平坦で掘り込みは見られない。

23号集石（第28図）

S - 7区で検出されたもので、108×180cmの範囲に広がる。10cm大の礫を中心に91個からなり、平均重量は約366.7 gである。礫は集中してみられ、ほぼ平坦で掘り込みは見られない。

24号集石（第29図）

R - 7区で検出されたもので、63×197cmの範囲に広がる。こぶし大の礫を中心に36個からなり、平均重量は約130 gである。中央にまとまりがみられ

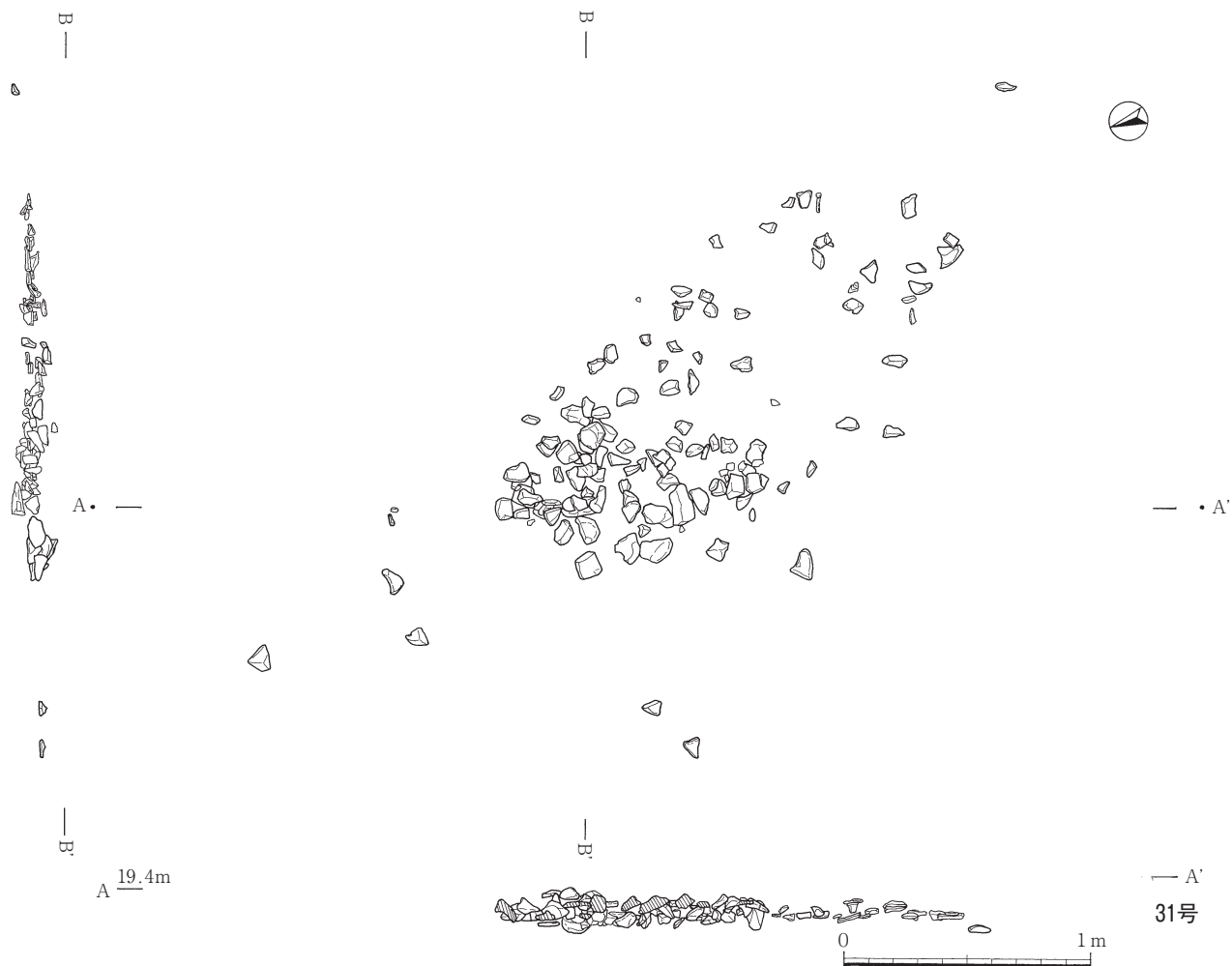
る。ほぼ平坦で掘り込みは見られない。

25号集石（第29図）

R - 7区で検出されたもので、77×180cmの範囲に広がる。こぶし大の礫を中心に94個からなり、平均重量は約143 gである。礫は集中してみられる。ほぼ平坦で掘り込みは見られない。

26号集石（第29図）

Q - 6区で検出されたもので、155×135cmの範囲に広がる。10cm大の礫を中心に49個からなり、平均重量は約340 gである。礫は集中してみられる。ほぼ平坦で掘り込みは見られない。



第31図 縄文時代早期 集石遺構10

27号集石（第29図）

Q-6区で検出されたもので、112×112cmの範囲に広がる。こぶし大の礫を中心に47個からなり、平均重量は約87.3gである。土器も6点みられる。まともにはみられず、ほぼ平坦で掘り込みは見られない。

28号集石（第30図）

M-6区で検出されたもので、187×266cmの範囲に広がる。15cm大の礫を中心に59個からなり、平均重量は約414.7gである。まともにはみられず、ほぼ平坦で掘り込みは見られない。

29号集石（第30図）

M-6区で検出されたもので、85×88cmの範囲に広がる。10cm大の礫を中心に73個からなり、平均重量は約438.2gである。掘り込みは集中している礫の下位でみられ、105×112cm、深さ約6cmである。

30号集石（第30図）

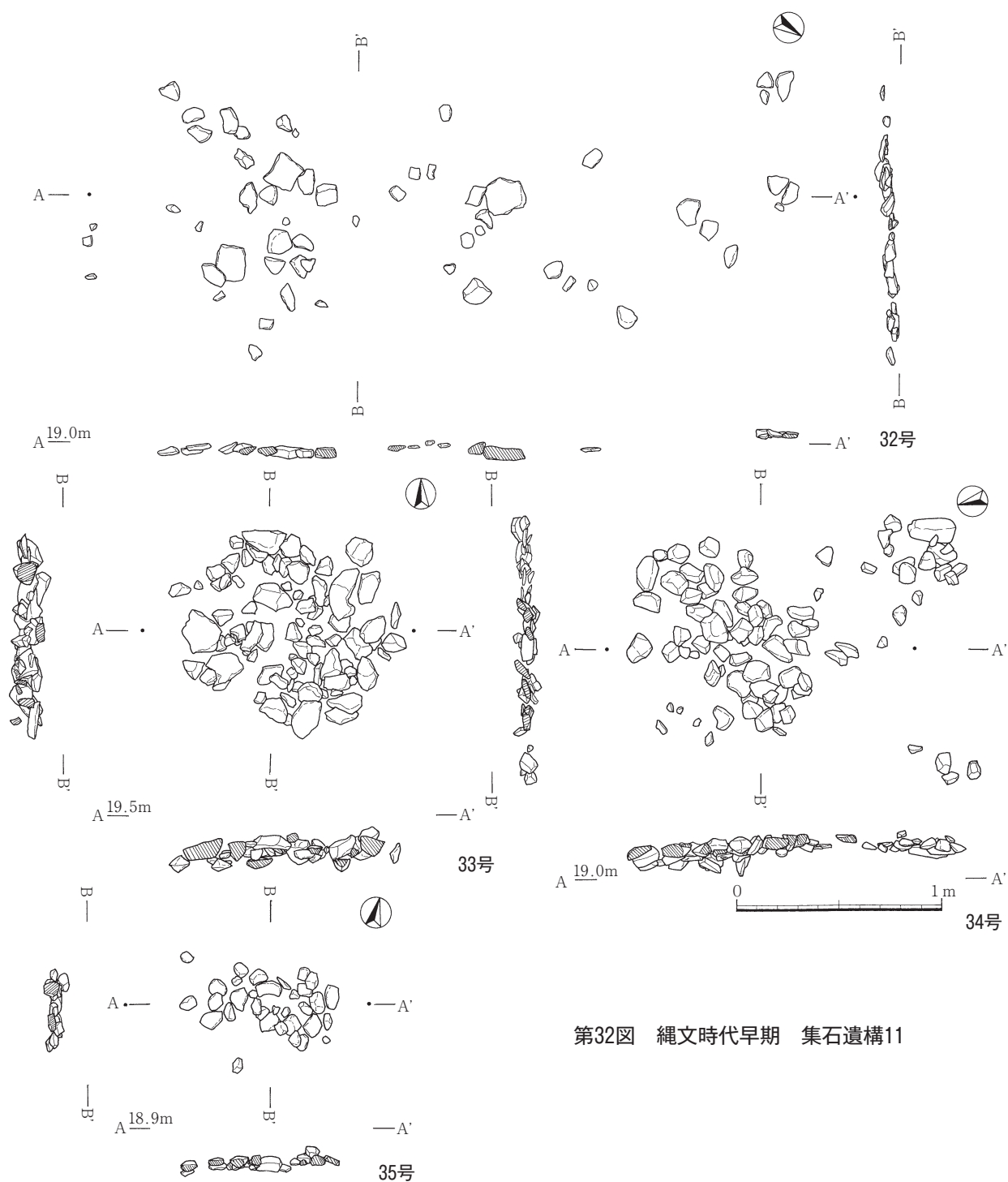
M-6区で検出されたもので、90×105cmの範囲に広がる。こぶし大の礫を中心に37個からなり、平均重量は約212.5gである。土器が一点あった。礫は集中してみられ、ほぼ平坦で掘り込みは見られない。

31号集石（第31図）

L-6区で検出されたもので、275×310cmの範囲に広がる。10cm大の礫を中心に130個からなり、平均重量は約197.6gである。礫は南西に集中してみられ、ほぼ平坦で掘り込みは見られない。

32号集石（第32図）

L-6区で検出されたもので、140×200cmの範囲に広がる。10cm大の礫を中心に57個からなり、平均重量は約245.6gである。まともにはみられず、ほぼ平坦で掘り込みは見られない。



第32図 縄文時代早期 集石遺構11

33号集石 (第32図)

L-6区で検出されたもので、103×115cmの範囲に広がる。15cm大の礫を中心に79個からなり、平均重量は約583.2gである。礫は集中してみられ、ほぼ平坦で掘り込みは見られない。

34号集石 (第32図)

L-5区で検出されたもので、135×165cmの範囲

に広がる。10cm大の礫を中心に87個からなり、平均重量は約374.5gである。礫は集中してみられ、ほぼ平坦で掘り込みは見られない。

35号集石 (第32図)

L-5区で検出されたもので、60×79cmの範囲に広がる。こぶし大の礫を中心に34個からなり、平均重量は約210.1gである。礫は集中してみられ、ほぼ平坦で掘り込みは見られない。

②土坑 (第33図)

3基の土坑はU-9区で集中して検出された。遺物等は3基とも検出されなかったが3基とも炭化物を含んでおり、火を使用したと思われる。

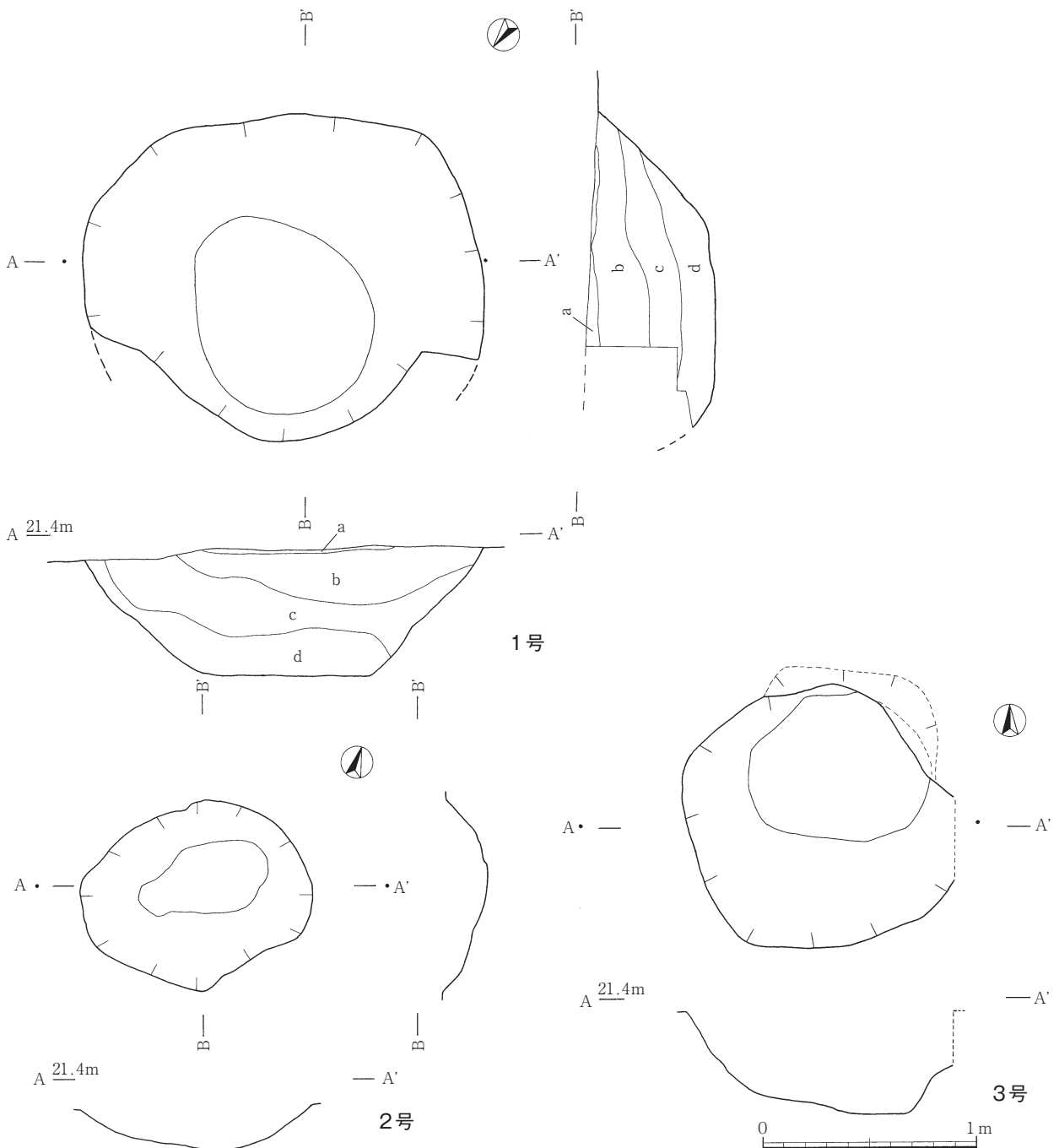
1号土坑

U-9区で検出された。平面プランは不整形で北側がトレンチによる削平をうけていた。深さ40cm。a層は茶褐色土、b層は黒褐色土で礫をまばらに含む。c層は黒褐色土だが、軽石がぎっしり詰まった

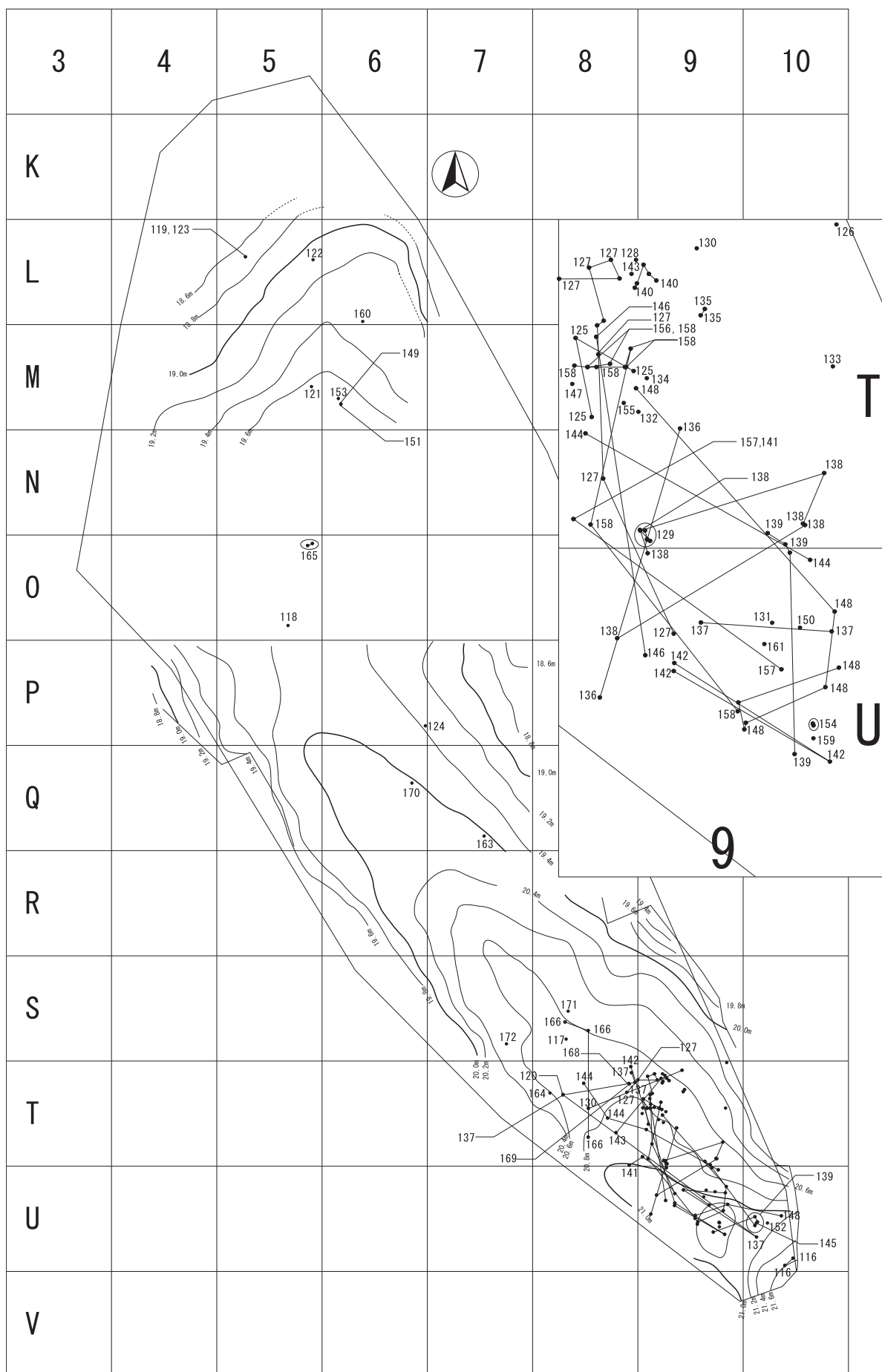
状態であった。d層は黒色土で細粒の礫と4～5mmの炭化物をまばらに含んでいる。

2号土坑

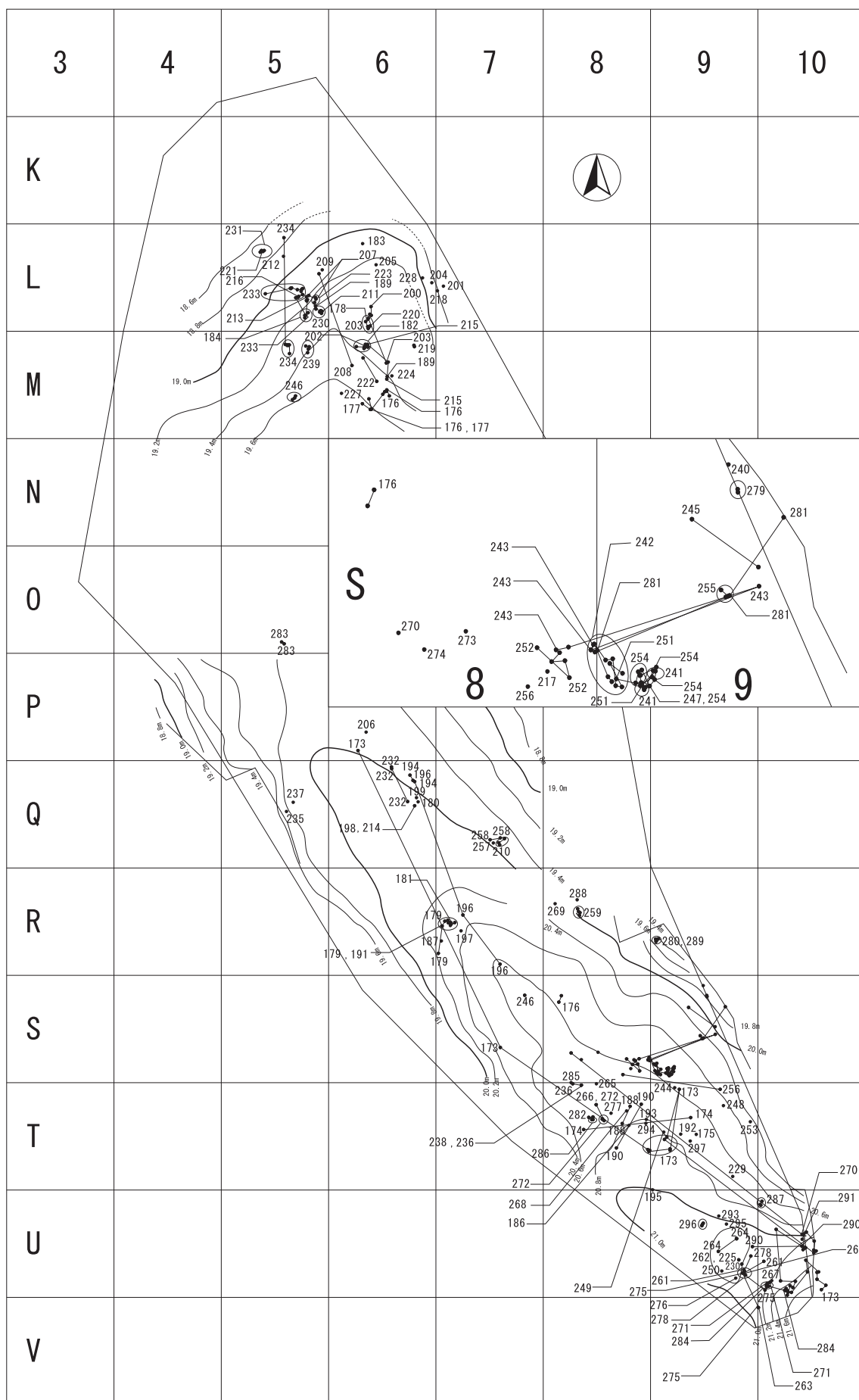
U-9区で検出された。平面プランは攪乱を受けているため原形をとどめていない。深さは20cm。4～5cm大の礫をまばらに含み比熱による赤化が認められた。埋土は黒褐色土で5mm大の炭化物を多く含んでいる。



第33図 縄文時代早期 土坑



第34図 縄文時代早期 土器出土状況 1 (Ⅱ類～Ⅵ類)



第35図 縄文時代早期 土器出土状況2 (Ⅶ類～Ⅺ類)

3号土坑

U-9区で検出された。平面プランは樹木の横転による攪乱を受けているため、不整形である。深さは約44cm、埋土は軽石を多く含み、炭化物を含んでいる。

(2) 遺物 (第36図～第76図)

①土器 (第36図～第60図)

縄文時代の早期の土器はⅡ類からⅪ類土器に分類できた。

Ⅱ類土器 (第36図 116・117)

Ⅱ類土器は2点である。116・117は胴部で縦位の貝殻刺突文が施される。117は角筒の可能性もある。

Ⅲ類土器 (第36図 118～122)

Ⅲ類土器は5点であった。口縁部は緩やかに外反または直行する。胴部は貝殻条痕文が施される。118は口縁部で貝殻刺突文を施す。119は瘤状突起のある口縁部である。刺突文が施される。120は口縁部が直行し、貝殻刺突文と貝殻条痕文が施される。121は瘤状の口縁が横に広がるもので瘤上に刺突文が施される。122は胴部で綾杉条痕文が施される。

Ⅳ類土器 (第36図 123・124)

Ⅳ類土器は2点である。123・124は胴部で横位の貝殻刺突文が施される。

Ⅴ類土器 (第37図～第41図 125～170)

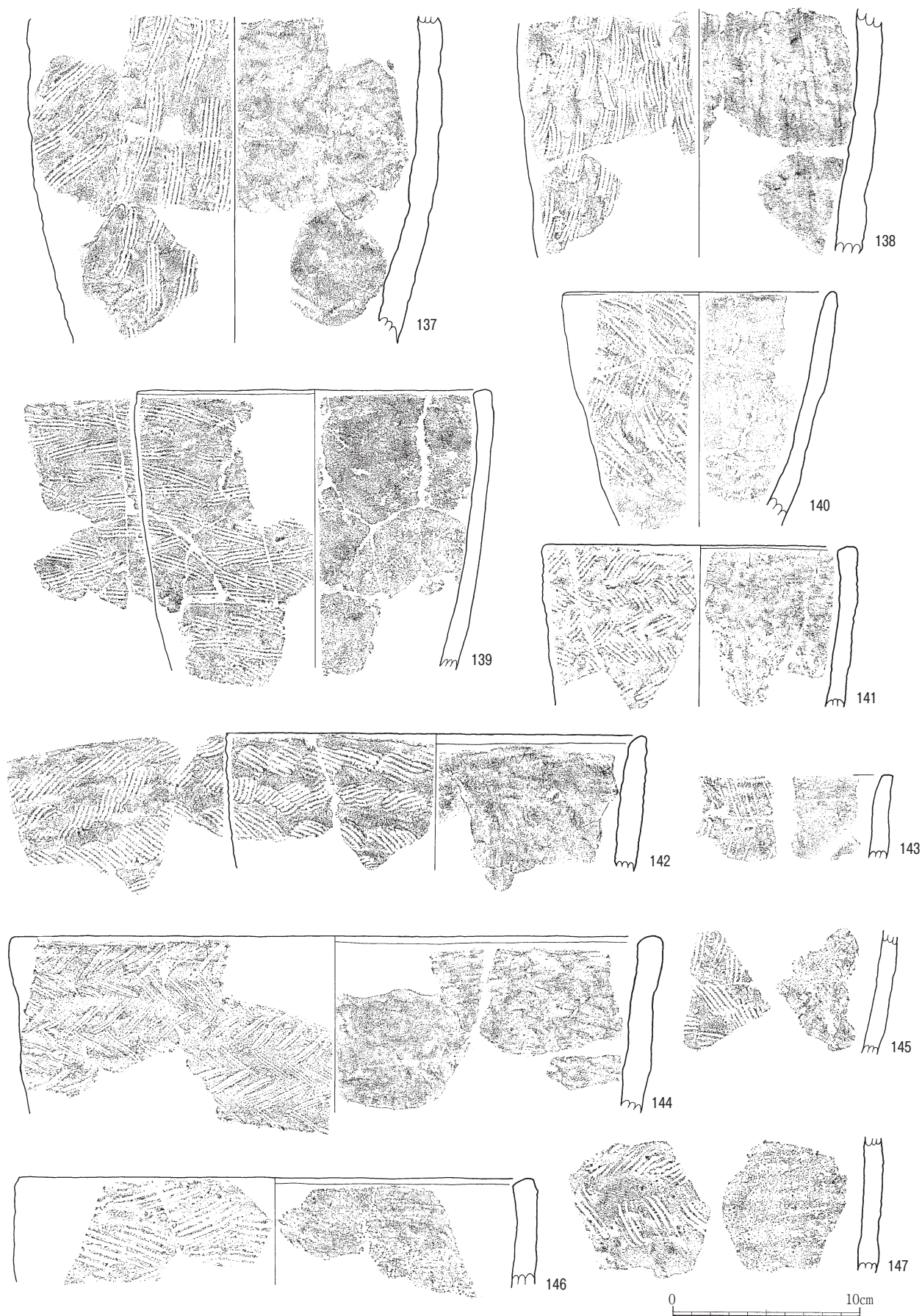
Ⅴ類土器は46点図化した。口縁部は直行または緩やかに外傾し、バケツ状を有するものである。口唇部は内傾するものが多い。貝殻または櫛状工具による施文が施される。125～138は施文具による縦位の文様のあるものである。125は3本の櫛状の施文具で条痕が施されている。内側は施文具によるケズリが施されている。126は3本の櫛状の条痕が施されている。127は底部付近まで3本の櫛状の条痕が施されている。128は127の同一個体である。129・130は4本の櫛状施文具で条痕文が施される。131は補修孔もみられる。132～136は4・5本の櫛状の施文具で条痕が施されている。134・135は同一個体である。137・138は胴部で、3・4本の施文具で条痕文が施されている。139～147は施文具による斜位の文様や同一方向への条痕文が施されたものである。139は3本の鋭い櫛状の施文具で斜位に条痕が施されている。140～147は「く」の字状に2本から6本



第36図 縄文時代早期 土器 1 (Ⅱ類～Ⅳ類土器)



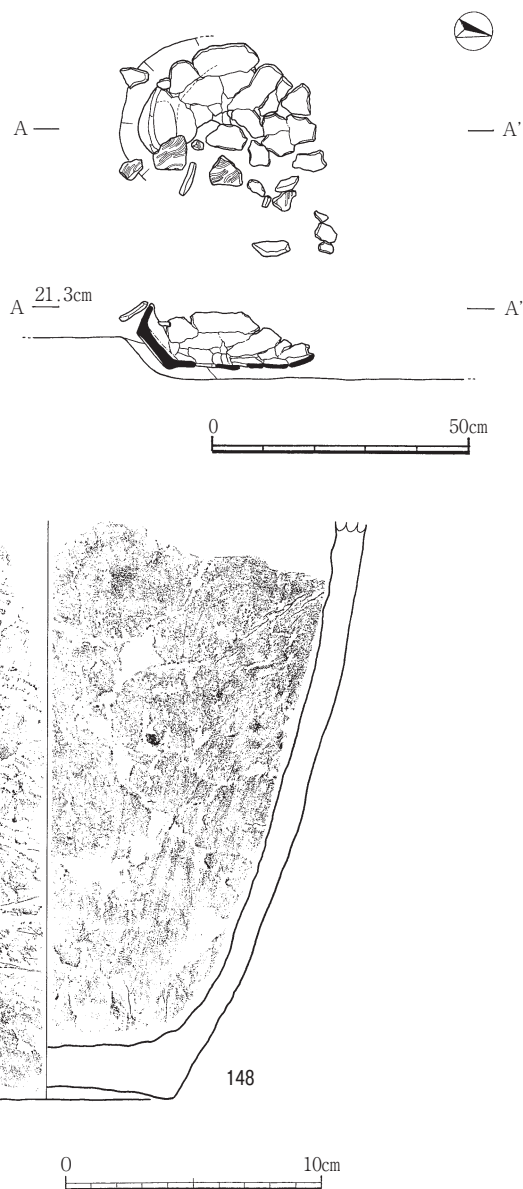
第37図 縄文時代早期 土器2 (V類土器)



第38図 縄文時代早期 土器3 (V類土器)

の櫛状の施文具で条痕が施されている。

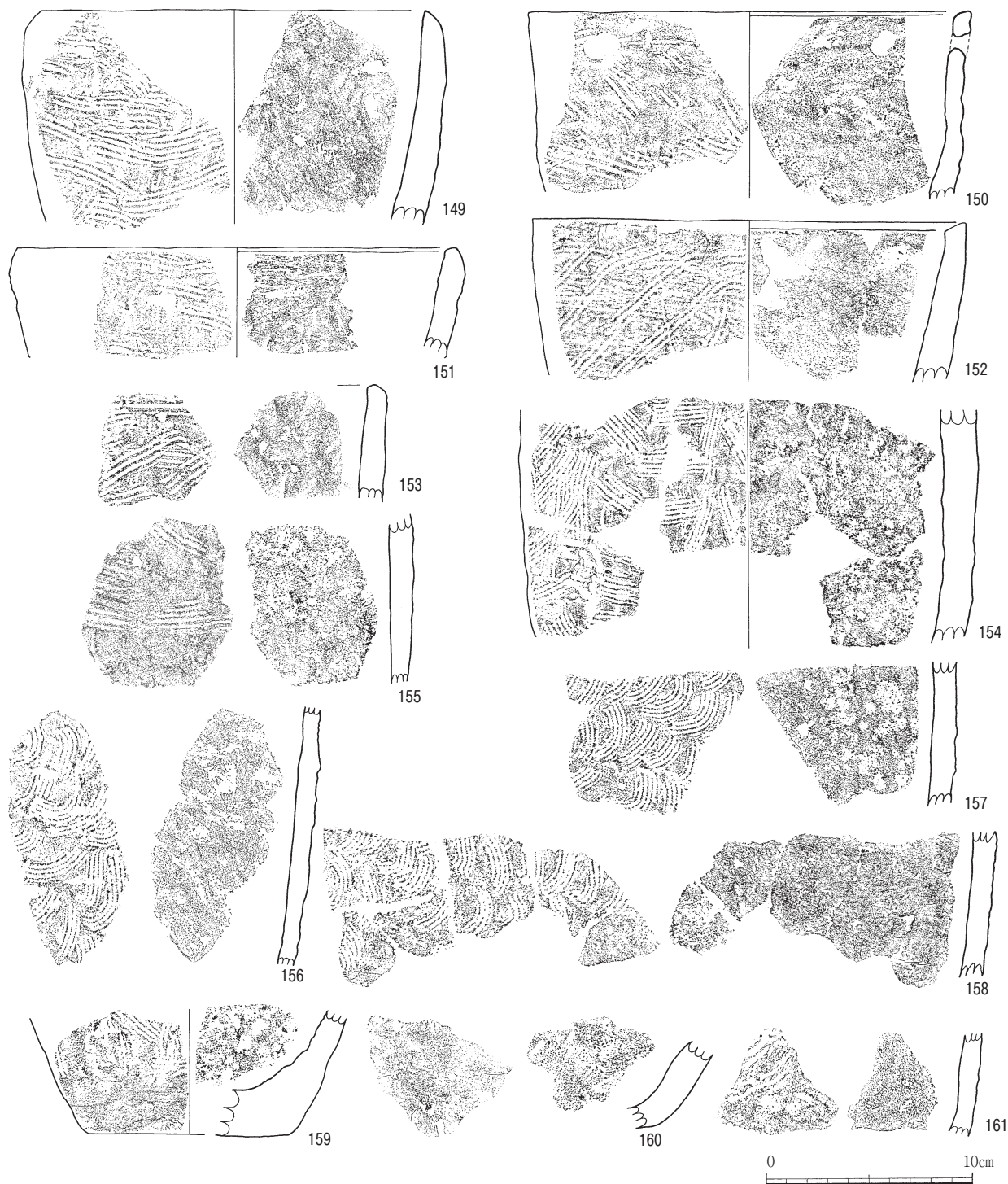
第39図はU-9区で検出された148の出土状況図である。148がつぶれた状態で出土している。外面は不規則な文様で2本から6本の櫛状の条痕文を施される。149~155は外面に不規則な文様が施されているものである。149は口唇部から4本の櫛状の文様が施されている。150は補修孔が施される。152は横位の条痕の上を斜位または縦位の文様が施されている。156~158は流水文の文様を施される。159は



第39図 縄文時代早期 土器4 (V類土器)

縄文時代早期土器観察表

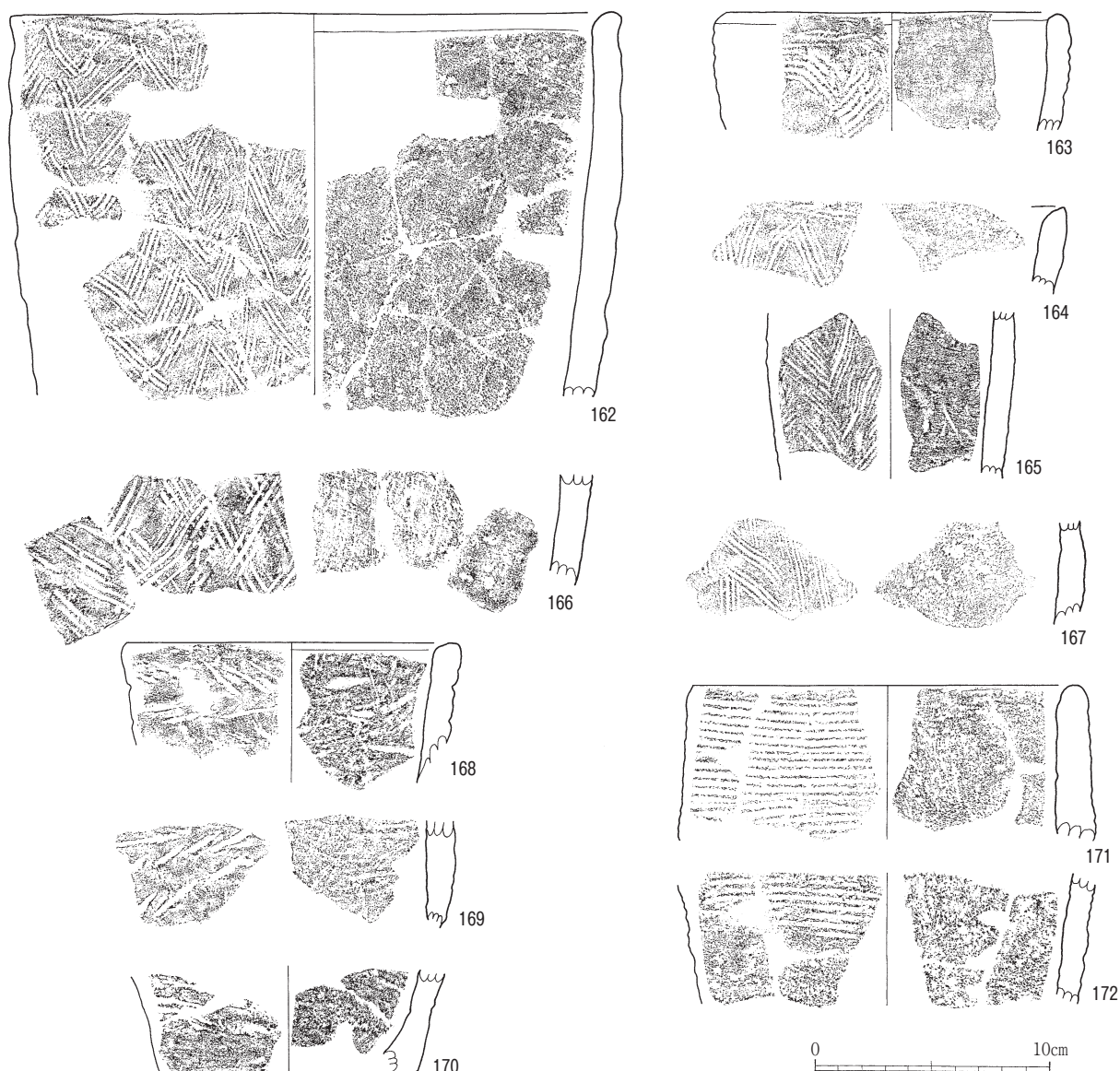
挿図 番号	番号	層位	出土区	部位	色調		胎土				焼成	外面	内面	備考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他				
第36図	116	IV	U-10	胴部	黒褐	にぶい褐	○	○			良	貝殻刺突文	ケズリ	
	117	IV	S-8	胴部	褐	にぶい褐	○	○			良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	118	IV	O-5	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	○	○			良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	119	IV	L-5	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ミガキ	
	120	IV	T-8	口縁部	にぶい黄橙	橙	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	121	IV	M-5	口縁部	橙	明赤褐	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ	
	122	IV	L-5	胴部	橙	橙	○	○			良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	123	IV	L-5	胴部	にぶい褐	にぶい黄橙	○	○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
第37図	124	IV	P-6	胴部	にぶい黄橙	橙	○	○			良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	125	IV	T-9	口縁部	橙	褐	○	○			良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	煤付着
	126	IV	T-9	口縁部	にぶい褐	橙	○	○			良	貝殻条痕文	ミガキ	煤付着
	127	IV	T・U-9	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	128	IV	T-9	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	129	IV	T-9	口縁部	にぶい黄橙	橙		○	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	煤付着
	130	IV	T-8・9	口縁部	橙	橙	○	○			良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	煤付着
	131	IV	U-9	口縁部	黄褐	橙	○	○			良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	補修孔有り・煤付着
	132	IV	T-9	口縁部	にぶい褐	橙		○	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	133	IV	T-9	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	134	IV	T-9	口縁部	黒褐	橙	○		○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	135	IV	T-9	口縁部	にぶい黄褐	橙	○	○			良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ・ミガキ	
	136	IV	T・U-9	口縁部	にぶい黄褐	橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	



第40図 縄文時代早期 土器5 (V類土器)

縄文時代早期土器観察表

挿図 番号	層位	出土区	部位	色調		胎土				焼成	外面	内面	備考
				内	外	石英	長石	角閃石	その他				
第38図	137	IV	T-8、U-9・10	胴部	橙	橙	○	○	○	良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	138	IV	T・U-9	胴部	橙	明黄褐	○	○	○	良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	139	IV	U-9・10	口縁～胴部	にぶい黄橙	橙	○	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	煤付着
	140	IV	T-9	口縁～胴部	にぶい黄褐	橙	○	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	141	IV	T-8・9	口縁部	にぶい褐	橙	○		○	良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	煤付着
	142	IV	T-8・9	口縁部	にぶい黄橙	橙	○	○	○	良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	煤付着
	143	IV	T-8・9	口縁部	にぶい黄褐	橙	○		○	良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	144	IV	T-8・9	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○	良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	煤付着
	145	IV	U-10	胴部	にぶい黄橙	橙	○	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	146	IV	T・U-9	口縁部	にぶい黄褐	橙	○	○	○	良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	煤付着
第39図	147	IV	T-9	胴部	にぶい褐	橙	○	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	煤付着
	148	IV	T-9、U-10	胴～底部	橙	明赤褐	○	○	○	良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	



第41図 縄文時代早期 土器6 (V・VI類土器)

縄文時代早期土器観察表

挿図 番号	番号	層位	出土区	部位	色調		胎土				焼成	外面	内面	備考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他				
第40 図	149	Ⅳ	M-6	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	煤付着
	150	Ⅳ	U-9	口縁部	にぶい黄橙	橙	○		○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	補修孔有り
	151	Ⅳ	M-6	口縁部	橙	橙	○	○			良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	煤付着
	152	Ⅳ	U-10	口縁部	橙	橙	○	○			良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	煤付着
	153	Ⅳ	M-6	口縁部	橙	にぶい黄褐	○	○			良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	煤付着
	154	Ⅳ	U-9	胴部	黒褐	橙	○	○			良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	煤付着
	155	Ⅳ	T-9	胴部	黒褐	橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	156	Ⅳ	T-9	胴部	にぶい赤褐	明赤褐	○	○	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	煤付着
	157	Ⅳ	T・U-9	胴部	赤褐	赤褐	○	○			良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	158	Ⅳ	T・U-9	胴部	黒褐	明赤褐	○	○	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	159	Ⅳ	U-9	底部	にぶい褐	橙	○	○			良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
第41 図	160	Ⅳ	L-6	底部	橙	橙	○	○			良	ナデ	ケズリ後ナデ	
	161	Ⅳ	U-9	底部	黒褐	橙	○	○			良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	162	Ⅳ	-	口縁～胴部	にぶい褐	橙	○	○			良	貝殻条痕文	ナデ	
	163	Ⅳ	Q-7	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	164	Ⅳ	T-8	口縁部	橙	橙	○	○			良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	165	Ⅳ	O-5	胴部	にぶい黄橙	にぶい褐	○	○			良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	166	Ⅳ	S-8	胴部	にぶい褐	明赤褐	○	○			良	貝殻条痕文	ケズリ	煤付着
	167	Ⅳ	-	胴部	橙	橙	○	○			良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	168	Ⅳ	T-8	口縁部	橙	明赤褐	○	○			良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	169	Ⅳ	T-8	胴部	にぶい黄橙	明赤褐	○	○			良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	170	Ⅳ	Q-6	底部	にぶい黄橙	明赤褐	○	○			良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	171	Ⅳ	S-8	口縁部	にぶい黄橙	橙	○	○			良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	172	Ⅳ	S-7	胴部	にぶい黄橙	橙	○	○			良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	煤付着



第42図 縄文時代早期 土器7（Ⅶ類土器）

縄文時代早期土器観察表

挿図 番号	層位	出土区	部位	色調		胎土				焼成	外面	内面	備考
				内	外	石英	長石	角閃石	その他				
第42図	173	Ⅳ	S-7, T-8・9, U-10	口縁～胴部	にぶい黄橙	橙	○	○		良	山形押型文	ナデ	
	174	Ⅳ	T-8・9	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○			良	山形押型文	ナデ	煤付着
	175	Ⅳ	T-9	口縁部	灰黄褐	明黄褐		○		良	山形押型文	ヘラケズリ後ナデ	

3・4本の施文具で条痕文が施されている底部である。160・161も同様の底部付近である。162～167は斜位の文様が格子状に施されたものである。168～170は1本の施文具で条痕文が施されている。同一個体と思われる。

Ⅵ類土器（第41図 171・172）

Ⅵ類土器は貝殻条痕文を口縁部から胴部上半部にかけて横位に廻らすものである。171は復元口径約16cmを測る。172は胴部である。

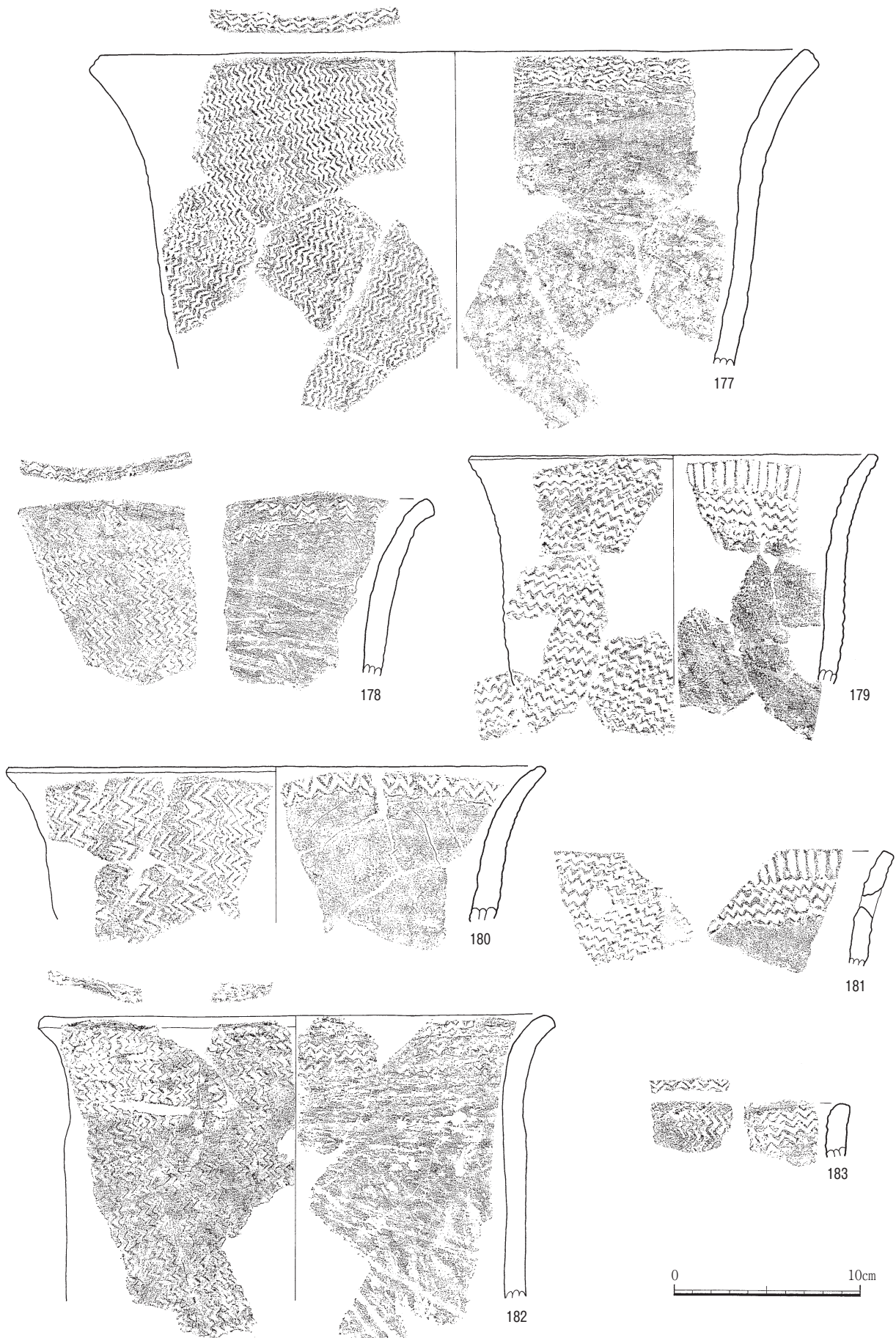
Ⅶ類土器（第42図～第49図 173～233）

Ⅶ類土器は回転施文具による押型文土器である。173～195は山形押型文で196～231は楕円押型文である。173は直行する口縁で胴部に緩やかなふくらみを持つ。174・175は直行または緩やかに外反する口縁を持つ。173～175は内側は無文である。176～178・180・183は外反する口縁部を持ち内側に横位の施文を施すものである。179・181は同一個体と思われる。内面が原体条痕と横位の施文を施すものである。184～192は胴部である。184・185は縦位と斜位の施文が施されている。193～195は底部である。195は無文であるが、わずかに山形押型文が施され

ている。196～207は楕円押型文の口縁部である。196・197は外反する口縁を持ち内面が原体条痕と横位の文様を施すものである。同一個体と思われる。198～201・204は外反する口縁を持ち楕円押型文が施されている。202・203は壺形の器形で外反する口縁を持ち、外側の口縁部上段は無文であるが、下段には小粒の押型文が施される。205～207は小粒の楕円押型文が施され、一部ナデ消しを施す。208～227は楕円押型文の胴部である。210は196と同一個体と思われる。214は内側に横位の押型文がわずかに残る。222は小型の楕円押型文が施され一部ナデ消しを施す。223は枝回転文と思われる胴部である。224は上半部は無文である。225・226は同一個体である。228～231は底部である。228は楕円押型文が施されたあと一部ナデ消しを施す。229は底部に編布を使用したと思われる圧痕が施される。232は下部に櫛状の条痕文を持ち、上面は楕円押型文を施す。底面は棒状のもので十字のような圧痕が見られる。233は外反する口縁部を持ち胴部から上面は縦位の山形押型文が施され、底部にかけては楕円押型文が施される。



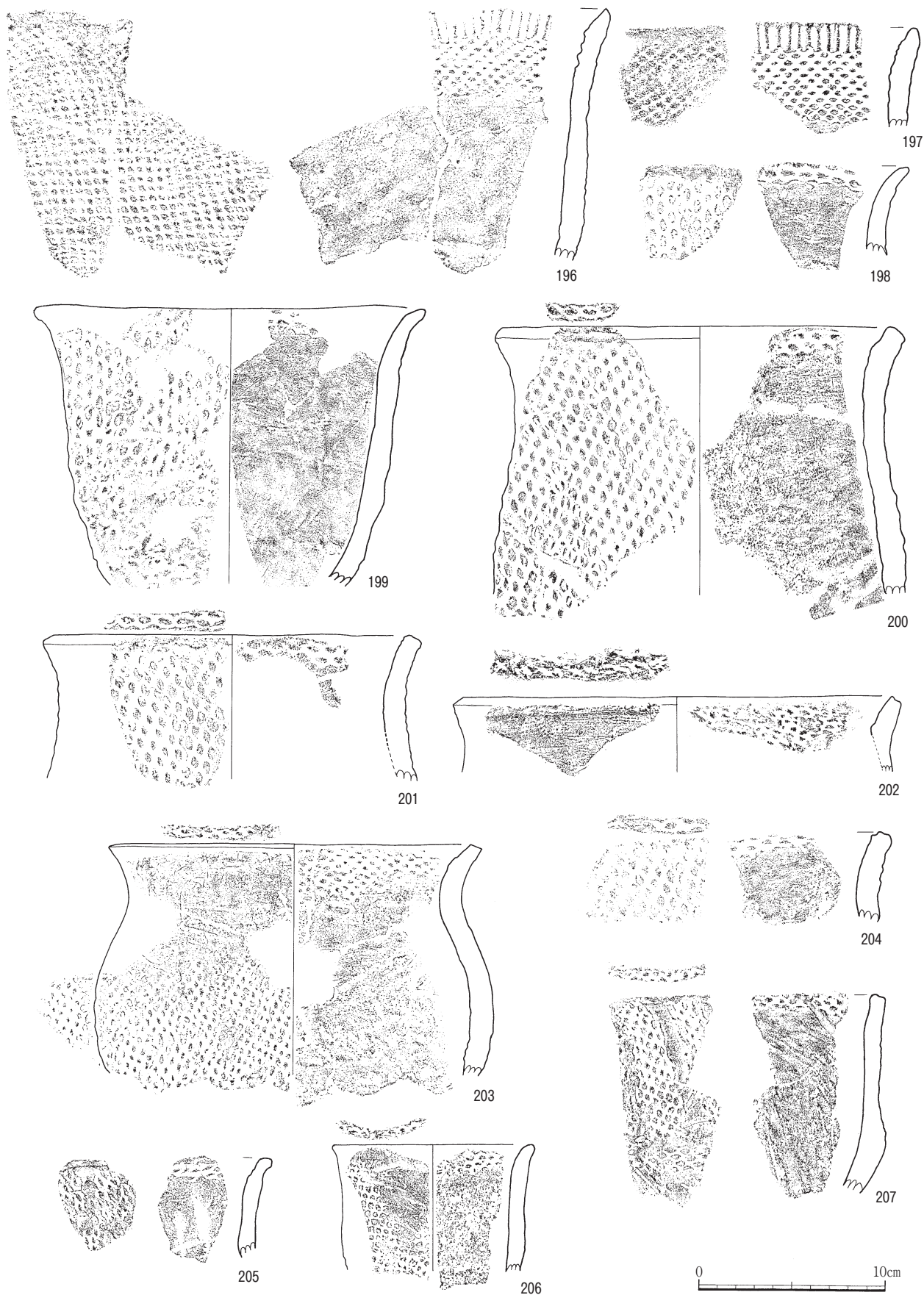
第43図 縄文時代早期 土器8（Ⅶ類土器）



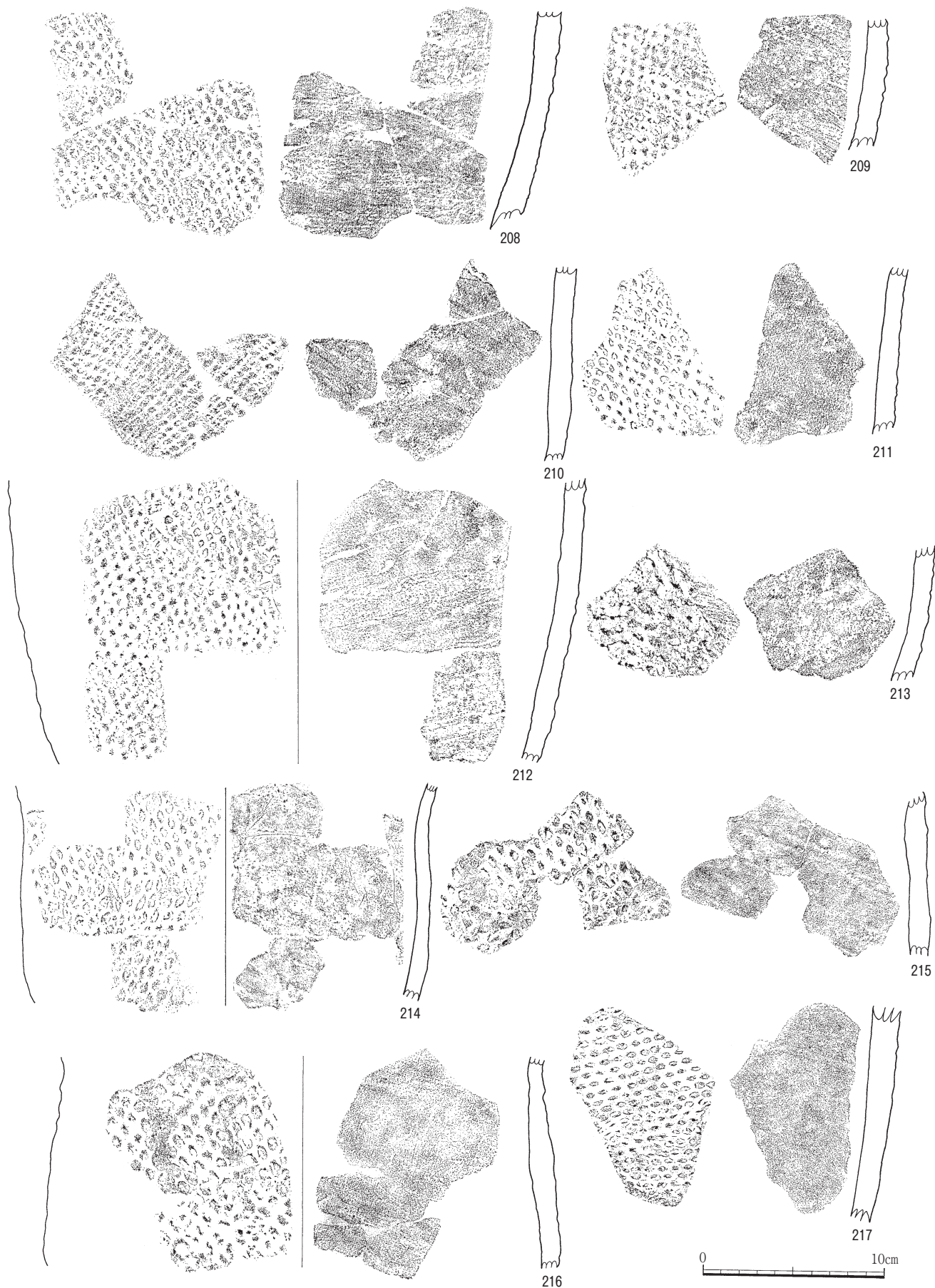
第44図 縄文時代早期 土器9 (Ⅶ類土器)



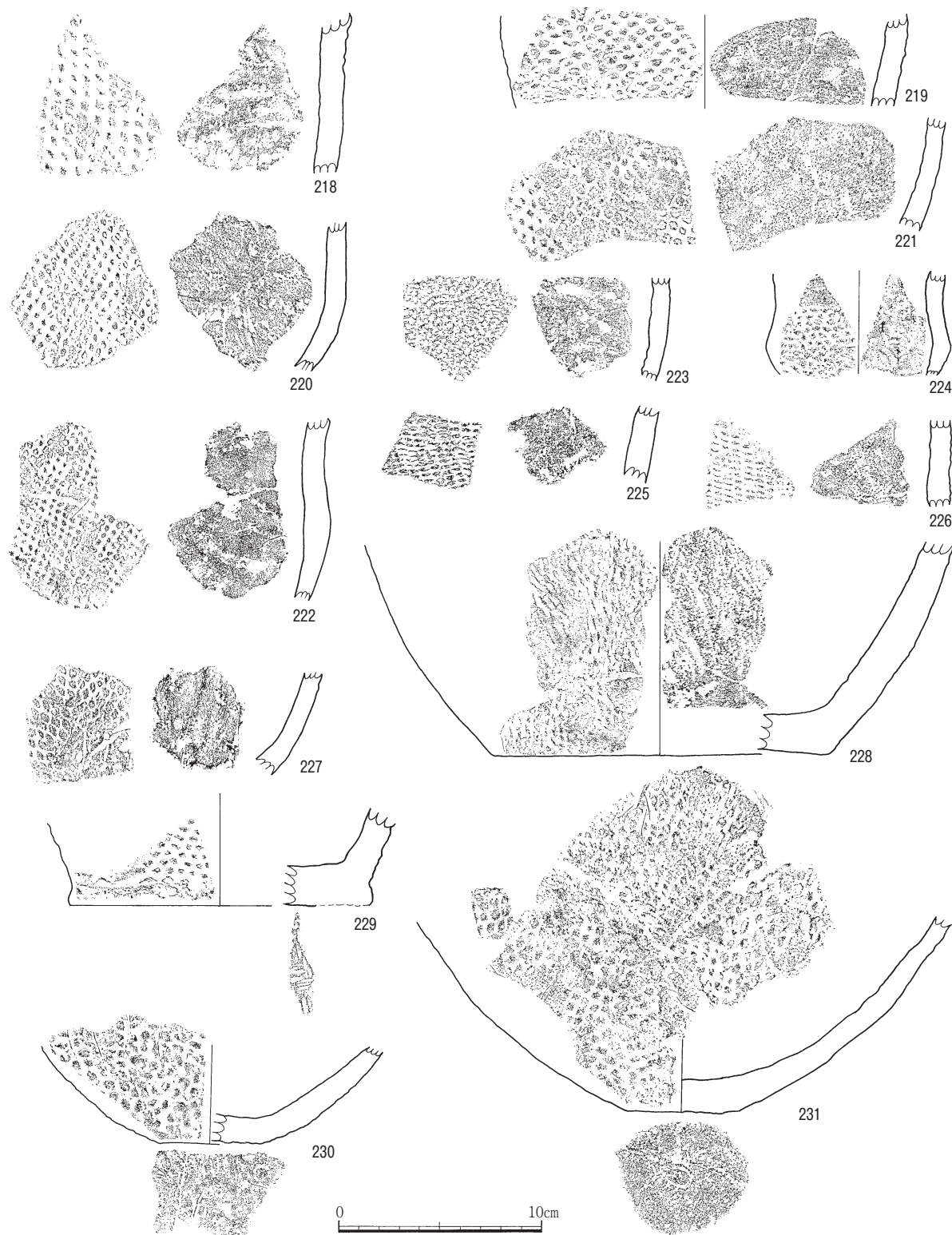
第45図 縄文時代早期 土器10 (Ⅶ類土器)



第46図 縄文時代早期 土器11 (Ⅶ類土器)



第47図 縄文時代早期 土器12 (Ⅶ類土器)



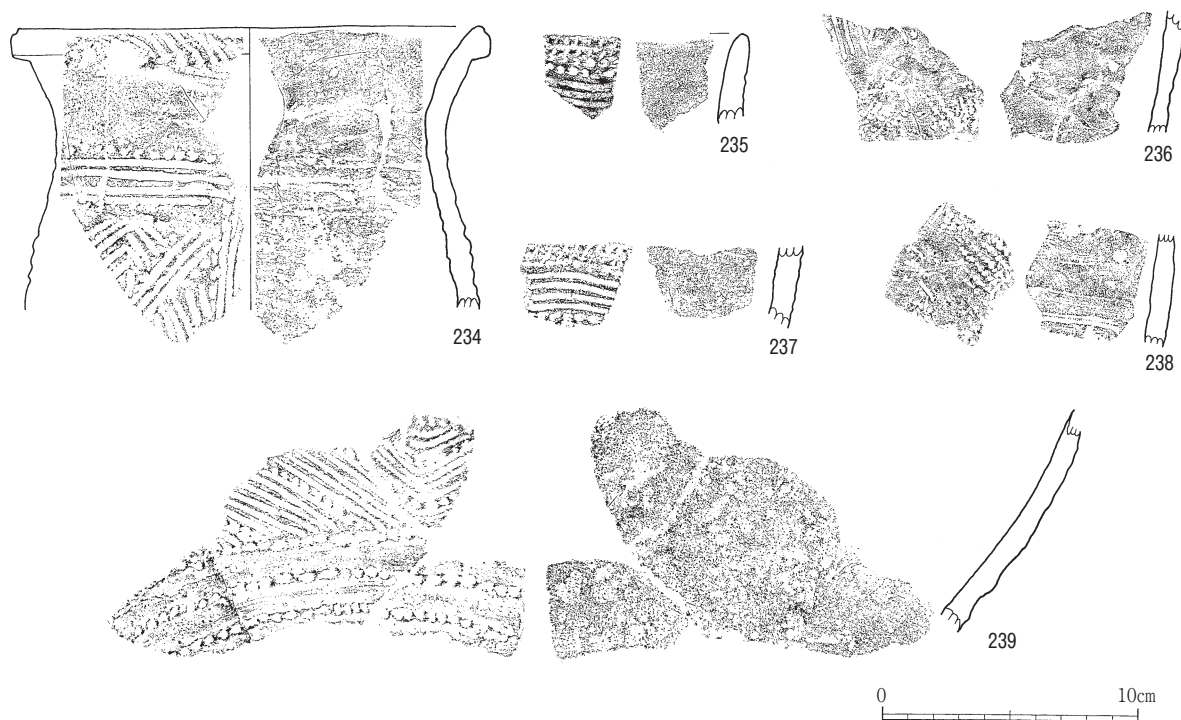
第48図 縄文時代早期 土器13 (Ⅶ類土器)

縄文時代早期土器観察表

挿図 番号	番号	層位	出土区	部位	色調		胎土				焼成	外面	内面	備考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他				
第44図	176	Ⅳ	M-6, S-8	口縁・胴部	橙	橙		○			良	山形押型文	押型文・ナデ	煤付着
	177	Ⅳ	M-6	口縁部	明褐	明褐	○	○			良	山形押型文	押型文・ナデ	口唇部押型文・煤付着
	178	Ⅳ	L-6	口縁部	明赤褐	明赤褐	○	○			良	山形押型文	押型文・ナデ	口唇部押型文
	179	Ⅳ	R-7	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○		良	山形押型文	押型文・ナデ	
	180	Ⅳ	Q-6	口縁部	にぶい褐	にぶい黄褐	○				良	山形押型文	押型文・ナデ	煤付着
	181	Ⅳ	R-7	口縁部	にぶい黄橙	橙	○				良	山形押型文	押型文・ナデ	
	182	Ⅳ	M-6	口縁部	明赤褐	にぶい褐	○	○			良	山形押型文	押型文・ナデ	口唇部押型文・煤付着
	183	Ⅳ	L-6	口縁部	にぶい黄橙	橙	○				良	山形押型文	押型文・ナデ	口唇部押型文・煤付着



第49図 縄文時代早期 土器14 (Ⅶ類土器)



第50図 縄文時代早期 土器15 (Ⅷ類土器)

Ⅷ類土器 (第50図 234～239)

Ⅷ類土器は沈線文や刺突文を直線・曲線的に組み合わせたものである。234は口縁径17.6cmを測り、棒状の器具で沈線や刺突文が施される。235は口縁部上部に貝殻刺突文が施される。236～238は胴部である。236と238は同一個体と思われる。239は頸部付近である。

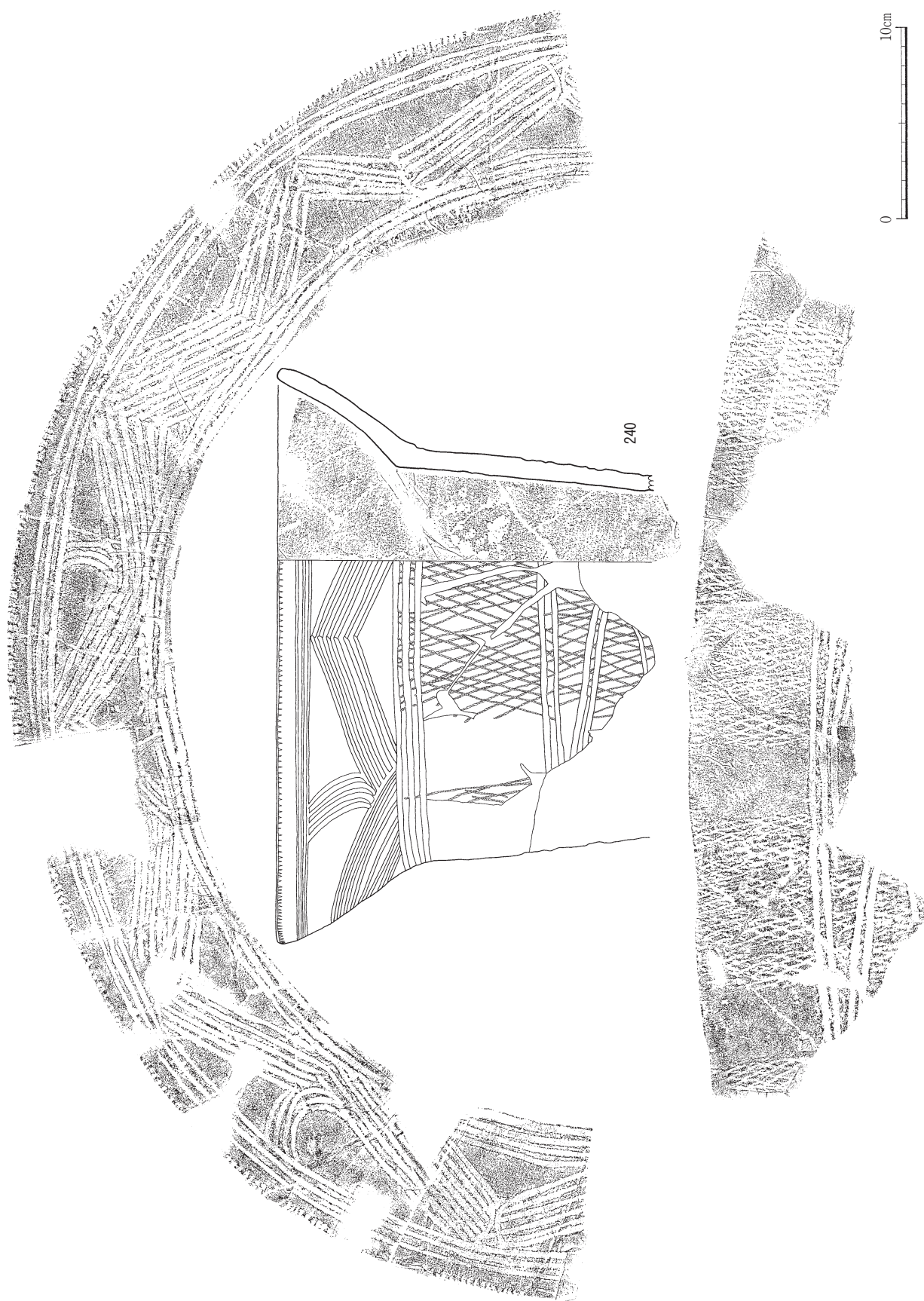
Ⅸ類土器 (第51図～第54図 240～258)

Ⅸ類土器はラッパ状に開いた口縁を持ち、沈線文を施し、胴部は沈線や撚糸文・連点文を施すものである。240～246は口縁部である。240～245は胴部に撚糸文と沈線文が施され口縁部には刺突文が施されている。245は口唇部に横位と斜位の刺突文が施されている。246は口唇部に刻目が頸部に連点文が施された壺形のものである。247～251は撚糸文と沈線文・連点文が施された胴部である。252～255は撚糸文・沈線文が施された底部である。254は上げ底である。256～258は頸部および肩部に微隆突帯を廻らすもので壺形土器となる胴部である。

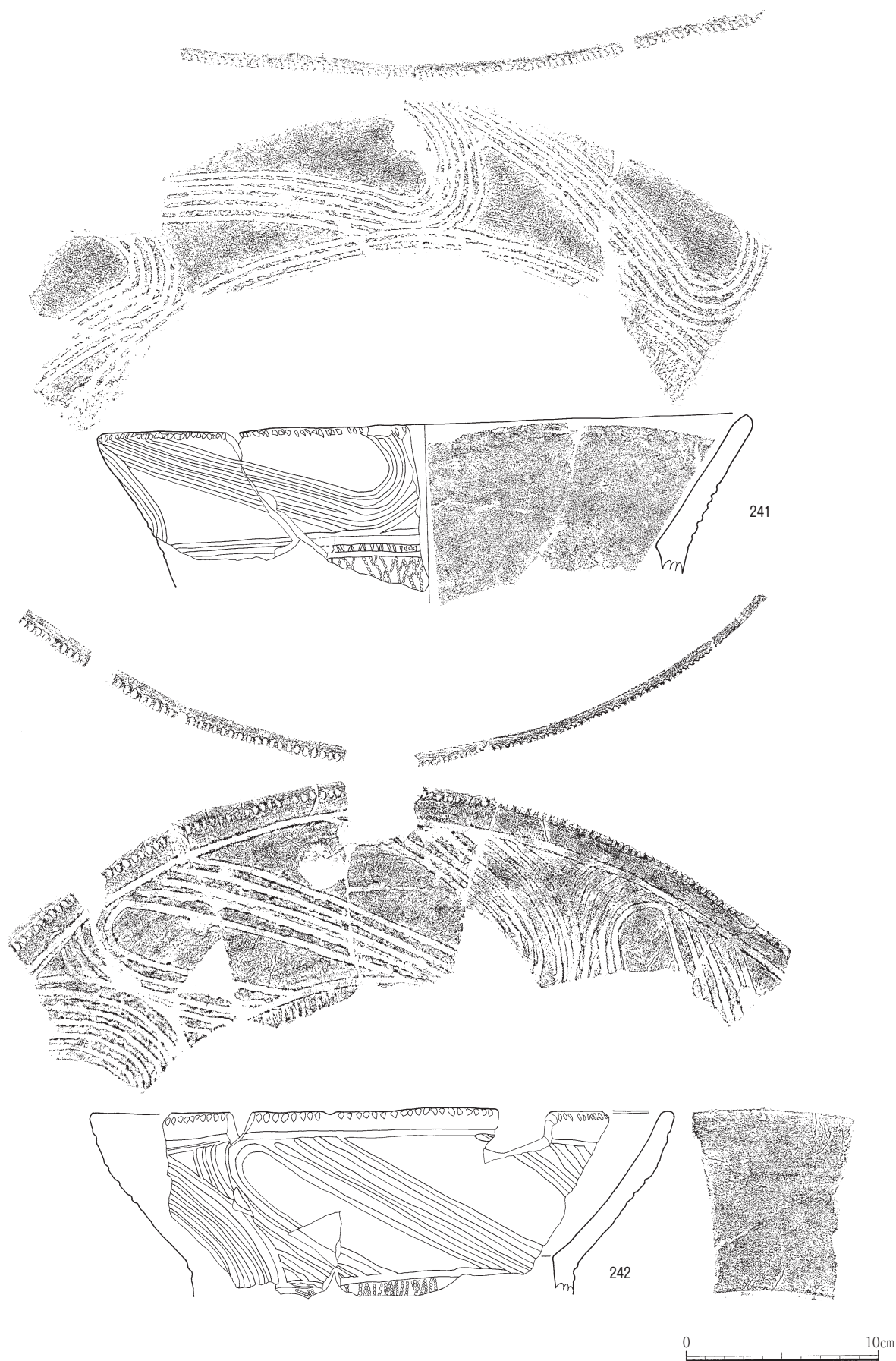
X類土器 (第55図～第59図 259～289)

X類土器は口縁部がわずかに開き口唇部が平坦に

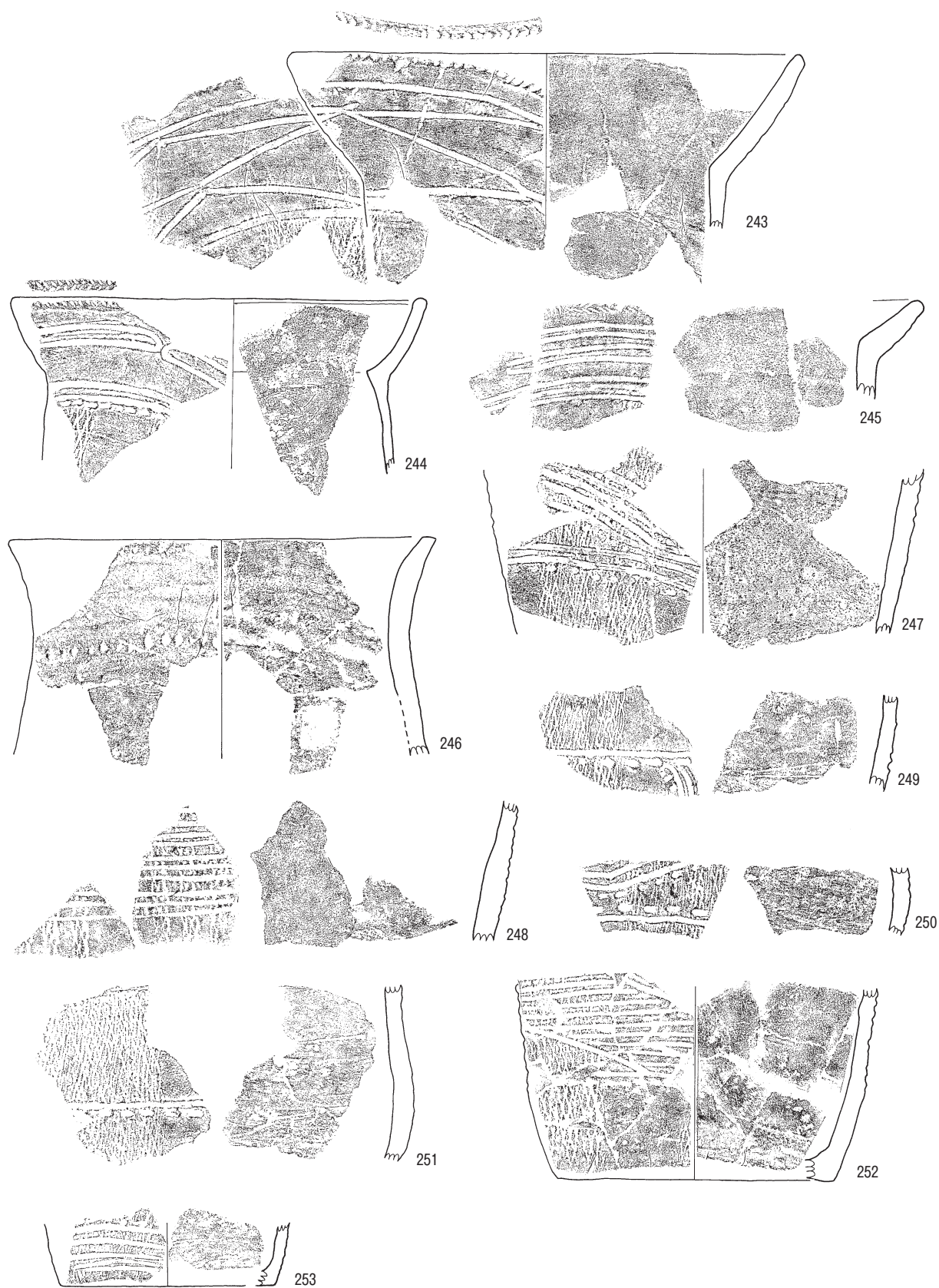
作られ刻目があるものである。外面は文様化を試みたような貝殻条痕文で器面調整が施されている。259は縦位の文様の上から横位・斜位の文様が施される。260は縦位の文様の上から斜位の文様が施される。補修孔が施される。261～264は口唇部に刻目があり、外面の文様が斜位に不規則に施される。265～270は口唇部に刻目があり外面の文様は斜位の文様が不規則に刻まれ、口縁部に横位の文様が施される。270は補修孔が施される。271は内湾口縁で口縁部の上部には横位または斜位の文様を施し、下部は縦位の文様が施される。272は5・6本の条痕が間隔をあけて斜位の文様で施され、その上を横位の文様が施される。273～278は胴部である。279は口唇部に刻目があり、縦位の文様が施された後、横位と縦位の文様が施される。波状の口縁部を持つものである。280・281は口縁部である。280は斜位の文様が施された後、胴部に横位と斜位の文様が施されている。289の底部と同一個体である。281は器面が丁寧に磨きかけられ、櫛状の条痕で横位の文様が施されている。282～285は胴部である。284～287は縦位の文様が施される底部付近である。288・289は



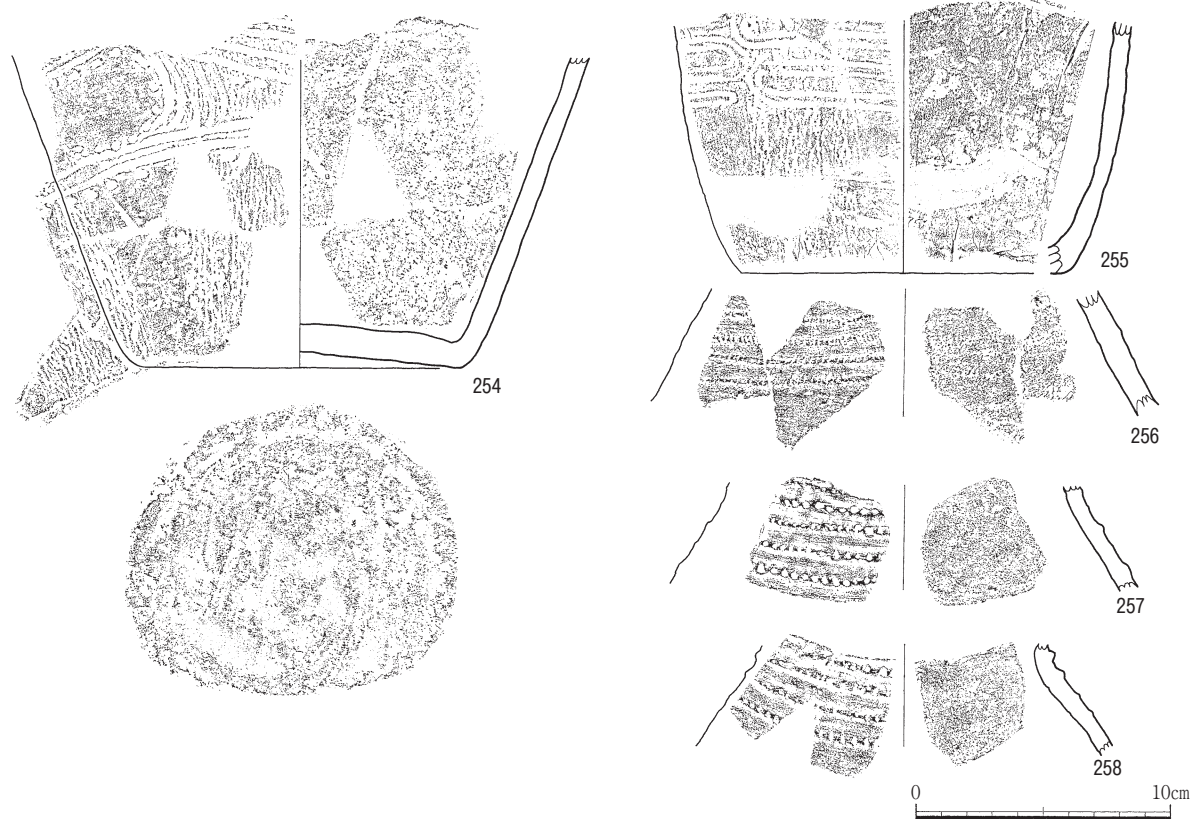
第51図 縄文時代早期 土器16 (Ⅰ類土器)



第52図 縄文時代早期 土器17 (Ⅸ類土器)



第53図 縄文時代早期 土器18 (Ⅸ類土器)



第54図 縄文時代早期 土器19 (Ⅸ類土器)

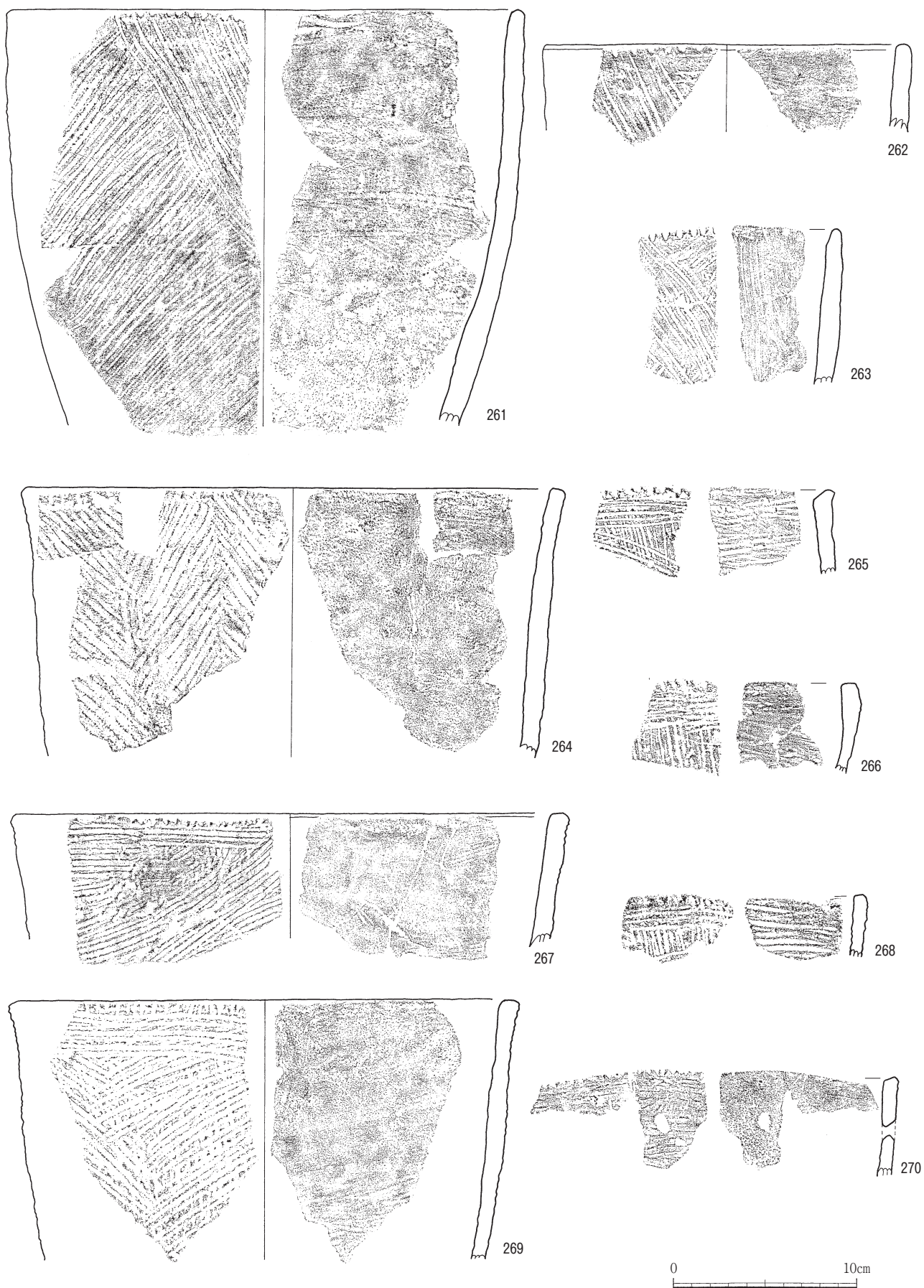
縄文時代早期土器観察表

挿図 番号	層位	出土区	部位	色調		胎土				焼成	外面	内面	備考
				内	外	石英	長石	角閃石	その他				
第45図	184	Ⅳ	M-5	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄橙	○	○		良	山形押型文	ヘラケズリ後ナデ	煤付着
	185	-	-	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○		良	山形押型文	ヘラケズリ後ナデ	
	186	Ⅳ	T-8	胴部	にぶい黄橙	橙	○			良	山形押型文	ケズリ	
	187	Ⅳ	R-7	胴部	灰黄褐	明黄褐		○		良	山形押型文	ケズリ	
	188	Ⅳ	T-8	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○			良	山形押型文	ケズリ	
	189	Ⅳ	M-6	胴部	灰黄褐	にぶい黄橙	○	○		良	山形押型文	ヘラケズリ後ナデ	煤付着
	190	Ⅳ	T-8	胴部	にぶい黄褐	にぶい橙	○			良	山形押型文	ケズリ後ナデ	
	191	Ⅳ	R-7	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○		良	山形押型文	ケズリ後ナデ	
	192	Ⅳ	T-9	胴部	にぶい黄褐	明赤褐	○			良	山形押型文	ケズリ	
	193	Ⅳ	T-8	底部	にぶい黄橙	明赤褐		○		良	山形押型文	ケズリ後ナデ	
	194	Ⅳ	Q-6	底部	にぶい黄橙	橙	○	○		良	山形押型文	ケズリ後ナデ	
	195	Ⅳ	T-9	底部	灰黄褐	橙		○		良	山形押型文	ケズリ後ナデ	
第46図	196	Ⅳ	Q-6・R-7	口縁部	にぶい黄橙	橙	○	○	○	良	楕円押型文	押型文・ナデ	煤付着
	197	Ⅳ	R-7	口縁部	にぶい黄橙	浅黄橙	○	○		良	楕円押型文	押型文・ナデ	
	198	Ⅳ	Q-6	口縁部	にぶい黄褐	橙	○	○	○	良	楕円押型文	押型文・ナデ	口唇部押型文
	199	Ⅳ	Q-6	口縁部	灰黄褐	橙	○		○	良	楕円押型文	ケズリ後ナデ	煤付着
	200	Ⅳ	L-6	口縁部	橙	明赤褐	○	○	○	良	楕円押型文	押型文・ナデ	口唇部押型文・煤付着
	201	Ⅳ	L-7	口縁部	橙	黒褐	○	○	○	良	楕円押型文	押型文・ナデ	口唇部押型文・煤付着
	202	Ⅳ	M-6	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄橙	○	○		良	ヘラケズリ	押型文	口唇部押型文・煤付着
	203	Ⅳ	L・M-6	口縁部	橙	橙	○	○	○	良	楕円押型文	押型文・ケズリ	口唇部押型文・煤付着
	204	Ⅳ	L-6	口縁部	橙	橙	○	○	○	良	楕円押型文	押型文・ナデ	口唇部押型文・煤付着
	205	Ⅳ	L-6	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○		良	楕円押型文	押型文	口唇部押型文
	206	Ⅳ	P-6	口縁部	明黄褐	明赤褐	○	○	○	良	楕円押型文	押型文・ケズリ	口唇部押型文
	207	Ⅳ	M-5	口縁部	赤褐	明赤褐	○	○		良	楕円押型文	押型文	口唇部押型文
第47図	208	Ⅳ	L-5・M-6	胴部	にぶい黄橙	浅黄橙	○	○		良	楕円押型文	ケズリ後ナデ	
	209	Ⅳ	L-5	胴部	浅黄	浅黄	○	○		良	楕円押型文	ケズリ後ナデ	
	210	Ⅳ	Q-7	胴部	にぶい黄橙	浅黄橙	○	○	○	良	楕円押型文	押型文・ケズリ	
	211	Ⅳ	M-5	胴部	にぶい黄褐	黒褐	○	○	○	良	楕円押型文	ケズリ後ナデ	煤付着
	212	Ⅳ	M-5	胴部	にぶい黄橙	浅黄	○	○		良	楕円押型文	ケズリ後ナデ	
	213	Ⅳ	M-5	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○		良	楕円押型文	ケズリ後ナデ	
	214	Ⅳ	Q-6	胴部	灰黄褐	橙	○	○		良	楕円押型文	押型文・ケズリ	
	215	Ⅳ	M-6	胴部	黄褐	浅黄褐	○	○		良	楕円押型文	ケズリ後ナデ	
	216	Ⅳ	L・M-5	胴部	にぶい黄褐	橙	○	○		良	楕円押型文	ケズリ後ナデ	
	217	Ⅳ	S-8	胴部	にぶい黄褐	橙	○	○	○	良	楕円押型文	ケズリ後ナデ	

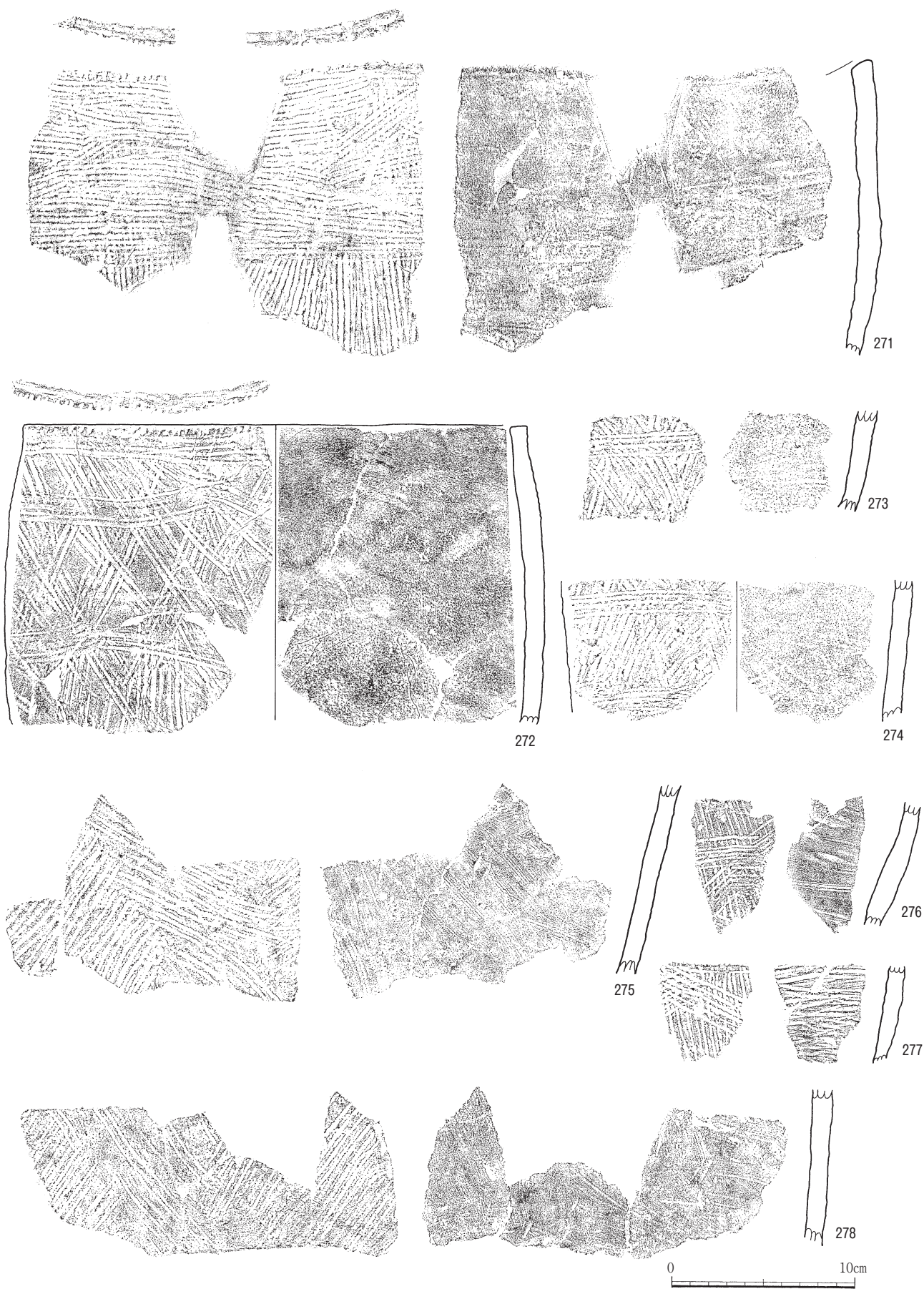


0 10cm

第55図 縄文時代早期 土器20 (X類土器)



第56図 縄文時代早期 土器21 (X類土器)



第57図 縄文時代早期 土器22 (X類土器)



第58図 縄文時代早期 土器23 (X類土器)

縄文時代早期土器観察表

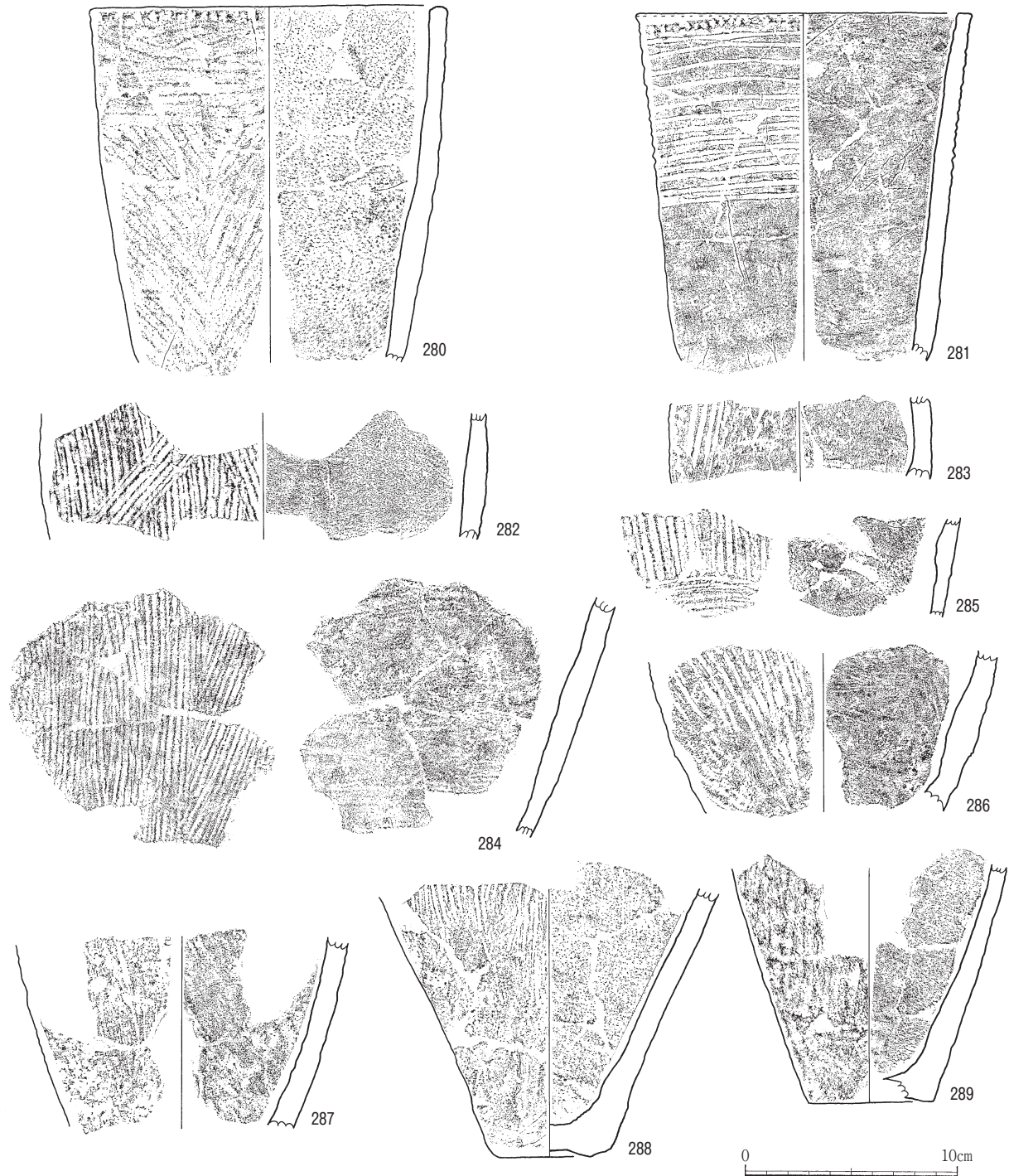
挿図 番号	番号	層位	出土区	部位	色調		胎土				焼成	外面	内面	備考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他				
第48図	218	Ⅳ	L-7	胴部	褐	にぶい褐	○	○			良	楕円押型文	ケズリ後ナデ	煤付着
	219	Ⅳ	M-6	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			良	楕円押型文	ケズリ後ナデ	
	220	Ⅳ	L-6	胴部	暗褐	明赤褐	○	○			良	楕円押型文	ケズリ後ナデ	
	221	Ⅳ	L-5	胴部	にぶい褐	橙	○	○			良	楕円押型文	ケズリ後ナデ	煤付着
	222	Ⅳ	M-6	胴部	にぶい赤褐	明赤褐	○	○			良	楕円押型文	ケズリ後ナデ	
	223	Ⅳ	M-5	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			良	枝回転文	ケズリ後ナデ	
	224	Ⅳ	M-6	胴部	にぶい褐	橙	○	○			良	楕円押型文	ケズリ後ナデ	
	225	Ⅳ	U-9	胴部	橙	橙	○	○			良	楕円押型文	ケズリ後ナデ	
	226	Ⅳ	-	胴部	橙	橙	○	○			良	楕円押型文	ケズリ後ナデ	
	227	Ⅳ	M-6	胴部	にぶい褐	にぶい褐	○	○			良	楕円押型文	ケズリ後ナデ	
	228	Ⅳ	L-6	胴～底部	橙	橙	○	○	○		良	楕円押型文	ケズリ後ナデ	
	229	Ⅳ	T-9	胴～底部	にぶい褐	橙	○	○			良	楕円押型文	ケズリ後ナデ	
	230	Ⅳ	M-5・U-9	胴～底部	にぶい褐	橙	○	○			良	楕円押型文	ケズリ後ナデ	
第49図	231	Ⅳ	L-5	胴～底部	橙	橙	○	○			良	楕円押型文	ケズリ後ナデ	煤付着
	232	Ⅳ	Q-6	胴～底部	にぶい黄橙	橙	○	○			良	楕円押型文・条痕文	ケズリ後ナデ	煤付着
	233	Ⅳ	L・M-5	完形	橙	橙	○	○			良	山形押型文・楕円押型文	ケズリ後ナデ	
第50図	234	Ⅳ	M・N-5	口縁～胴部	橙	にぶい褐	○	○		金雲母	良	刺突文・条痕文	ケズリ後ナデ	
	235	Ⅳ	Q-5	口縁部	橙	橙	○	○			良	刺突文・条痕文	ケズリ後ナデ	
	236	Ⅳ	T-8	胴部	橙	橙	○	○			良	刺突文・条痕文	ケズリ後ナデ	
	237	Ⅳ	Q-5	胴部	橙	橙	○	○			良	刺突文・条痕文	ケズリ後ナデ	
	238	Ⅳ	T-8	胴部	橙	橙	○	○			良	刺突文・条痕文	ケズリ後ナデ	
	239	Ⅳ	N-5	頸部	暗褐	にぶい黄橙	○	○			良	刺突文・条痕文	ケズリ後ナデ	煤付着
第51図	240	Ⅳ	S-9	口縁～胴部	橙	橙	○	○			良	網目撫糸文・沈線文	ケズリ後ナデ	煤付着
第52図	241	Ⅳ	S-9	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	網目撫糸文・沈線文	ケズリ後ナデ	煤付着
	242	Ⅳ	S-9	口縁部	橙	橙	○	○			良	網目撫糸文・沈線文	ケズリ後ナデ	煤付着
第53図	243	Ⅳ	S-8・9	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	網目撫糸文・沈線文	ケズリ後ナデ	煤付着
	244	Ⅳ	T-9	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			良	網目撫糸文・沈線文	ケズリ後ナデ	
	245	Ⅳ	S-9	口縁部	橙	橙	○	○			良	網目撫糸文・沈線文	ケズリ後ナデ	煤付着
	246	Ⅳ	N-5・S-7	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			良	網目撫糸文・沈線文・連点文	ケズリ	煤付着
	247	Ⅳ	S-9	胴部	明褐	明褐	○	○			良	網目撫糸文・沈線文・連点文	ケズリ	煤付着
	248	Ⅳ	T-9	胴部	にぶい黄橙	橙	○	○			良	網目撫糸文・沈線文	ケズリ	
	249	Ⅳ	T-9	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄橙	○	○			良	網目撫糸文・沈線文・連点文	ケズリ	煤付着
	250	Ⅳ	U-9	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄橙	○	○			良	網目撫糸文・沈線文・連点文	ケズリ	煤付着
	251	Ⅳ	S-9	胴部	暗褐	にぶい黄橙	○	○			良	網目撫糸文・沈線文・連点文	ケズリ	
	252	Ⅳ	S-8	底部	明赤褐	明褐	○	○			良	網目撫糸文	ケズリ	
	253	Ⅳ	T-9	底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			良	網目撫糸文・沈線文	ケズリ	
第54図	254	Ⅳ	S-9	底部	にぶい褐	明赤褐	○	○			良	網目撫糸文	ケズリ	
	255	Ⅳ	S-9	底部	明黄褐	橙	○	○			良	網目撫糸文	ケズリ	
	256	Ⅳ	S-8・T-9	胴部	にぶい橙	橙	○	○			良	微隆帯文	ケズリ	
	257	Ⅳ	Q-7	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			良	微隆帯文	ケズリ	
	258	Ⅳ	Q-7	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			良	微隆帯文	ケズリ	

縦位の文様が施された底部である。

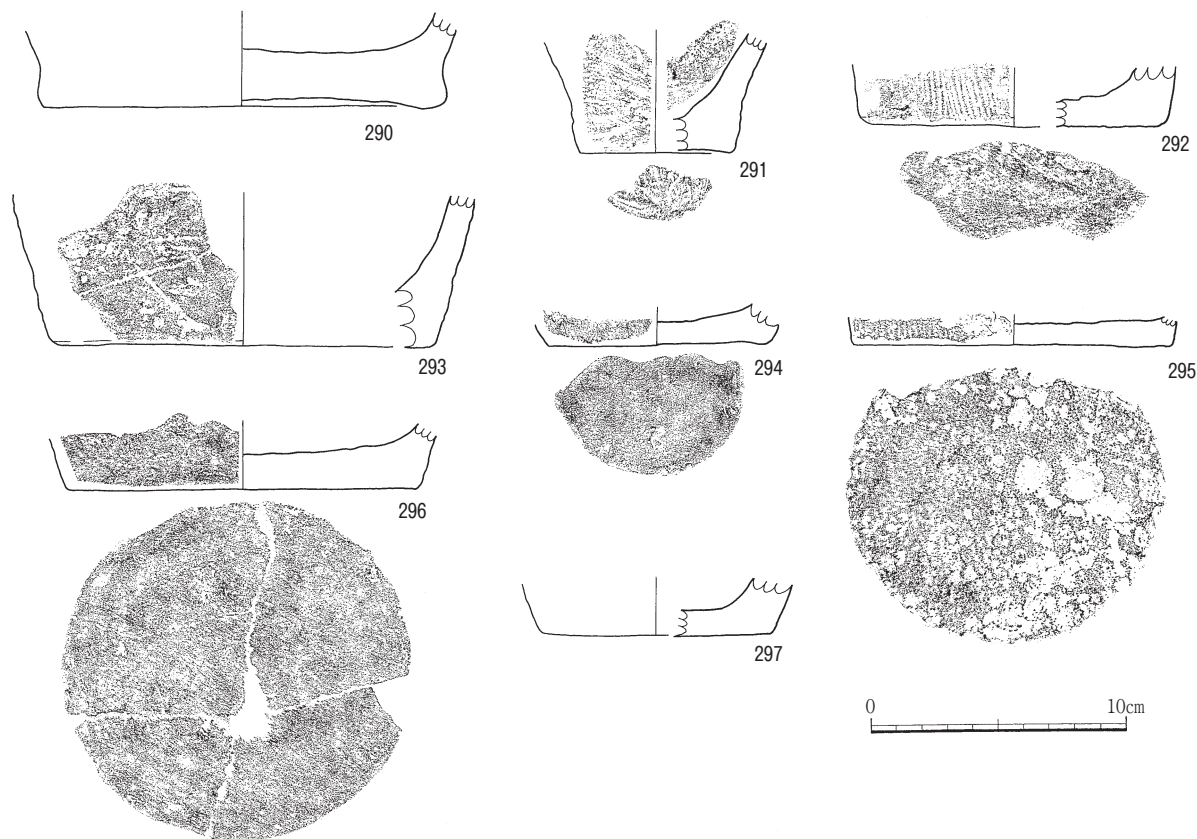
XI類土器（第60図 290～297）

XI類土器は早期の底部の細分化が難しいものである。290は上げ底で底部径15.9cmを測る。側面，底部とも磨きがかけられている。291はヘラケズリが

施される。292・295は側面に縦位の貝殻条痕文が施される。297は側面に磨きがかけられている。



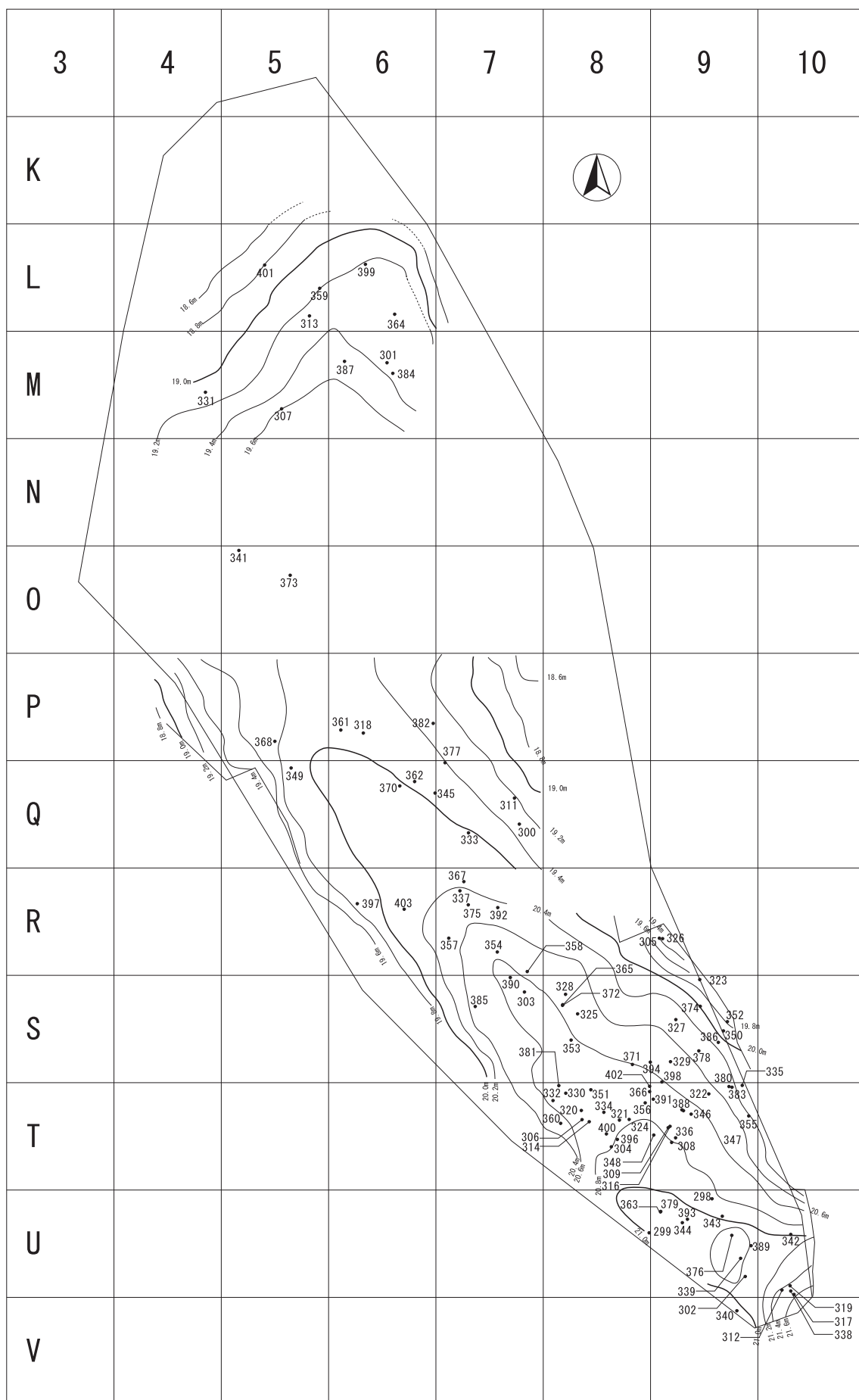
第59図 縄文時代早期 土器24（X類土器）



第60図 縄文時代早期 土器25 (XI類土器)

縄文時代早期土器観察表

挿図 番号	番号	層位	出土区	部位	色調		胎土				焼成	外面	内面	備考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他				
第55図	259	IV	R-8	口縁~胴部	にぶい黄橙	橙	○	○	○		良	条痕文	ケズリ後ナデ	煤付着
	260	IV	-	口縁~胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	条痕文	ケズリ後ナデ	煤付着
第56図	261	IV	U-9, 10	口縁~胴部	にぶい黄橙	にぶい黄褐		○			良	条痕文	ケズリ後ナデ	煤付着
	262	IV	U-9	口縁部	橙	にぶい黄褐		○			良	条痕文	ケズリ後ナデ	
	263	IV	V-10	口縁部	にぶい黄橙	橙		○			良	条痕文	ケズリ後ナデ	
	264	IV	U-9	口縁部	にぶい橙	橙	○	○			良	条痕文	ケズリ後ナデ	煤付着
	265	IV	T-8	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○				良	条痕文	ケズリ後ナデ	
	266	IV	T-8	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○				良	条痕文	ケズリ後ナデ	
	267	IV	U-10	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	○	○			良	条痕文	ケズリ後ナデ	煤付着
	268	IV	T-8	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			良	条痕文	ケズリ後ナデ	
	269	IV	R-8	口縁部	橙	橙		○			良	条痕文	ケズリ後ナデ	煤付着
	270	IV	S-8, U-10	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄褐		○			良	条痕文	ケズリ後ナデ	補修孔
第57図	271	IV	U-10	口縁部	明黄褐	にぶい黄橙	○	○			良	条痕文	ケズリ後ナデ	煤付着
	272	IV	T-8	口縁部	にぶい黄	にぶい黄橙	○	○			良	条痕文	ケズリ後ナデ	煤付着
	273	IV	S-8	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			良	条痕文	ケズリ後ナデ	煤付着
	274	IV	S-8	胴部	にぶい黄橙	橙	○				良	条痕文	ケズリ後ナデ	
	275	IV	U-9	胴部	橙	にぶい黄橙		○			良	条痕文	ケズリ後ナデ	煤付着
	276	IV	U-9	胴部	灰黄褐	橙	○	○			良	条痕文	ケズリ後ナデ	
	277	IV	T-8	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○				良	条痕文	ケズリ後ナデ	
	278	IV	U-9	胴部	にぶい黄橙	橙		○	○		良	条痕文	ケズリ後ナデ	煤付着
第58図	279	IV	S-9	口縁~胴部	橙	橙	○	○	○		良	条痕文	ケズリ後ナデ	煤付着
	280	IV	R-9	口縁~胴部	黄褐	橙	○	○			良	条痕文	ケズリ後ナデ	煤付着
	281	IV	S-9	口縁~胴部	浅黄褐	橙	○	○			良	条痕文	ケズリ後ナデ	煤付着
	282	IV	T-8	胴部	橙	橙		○			良	条痕文	ケズリ後ナデ	
	283	IV	O-5	胴部	にぶい褐	にぶい黄橙		○			良	条痕文	ケズリ後ナデ	
	284	IV	V-10, U-9	胴部	にぶい黄橙	橙	○				良	条痕文	ケズリ後ナデ	
	285	IV	S-8	胴部	にぶい黄	にぶい黄橙	○				良	条痕文	ケズリ後ナデ	煤付着
	286	IV	T-8	胴部	にぶい黄橙	橙		○			良	条痕文	ケズリ後ナデ	
	287	IV	U-10	胴部	にぶい黄橙	にぶい褐		○			良	条痕文	ケズリ後ナデ	
	288	IV	R-8	胴~底部	にぶい黄橙	橙		○			良	条痕文	ケズリ後ナデ	
第60図	289	IV	R-9	胴~底部	にぶい黄橙	橙	○	○			良	条痕文	ケズリ後ナデ	
	290	IV	U-9, 10	底部	にぶい褐	橙	○	○			良	ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ	
	291	IV	U-10	底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ	
	292	IV	-	底部	橙	にぶい黄橙	○	○			良	ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ	
	293	IV	U-9	底部	橙	橙	○	○			良	ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ	
	294	IV	T-8	底部	にぶい褐	灰黄褐	○	○			良	ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ	
	295	IV	U-9	底部	にぶい黄橙	明褐	○	○			良	ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ	
	296	IV	U-9	底部	明赤褐	明赤褐	○	○	○		良	ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ	
	297	IV	T-9	底部	明赤褐	明赤褐	○	○			良	ケズリ後ナデ・ミガキ	ケズリ後ナデ	



第61図 縄文時代早期 石器出土状況

②石器 (第62図～第75図)

縄文時代早期の石器は、石鏃、石斧、礫器、磨石、石皿等が出土した。

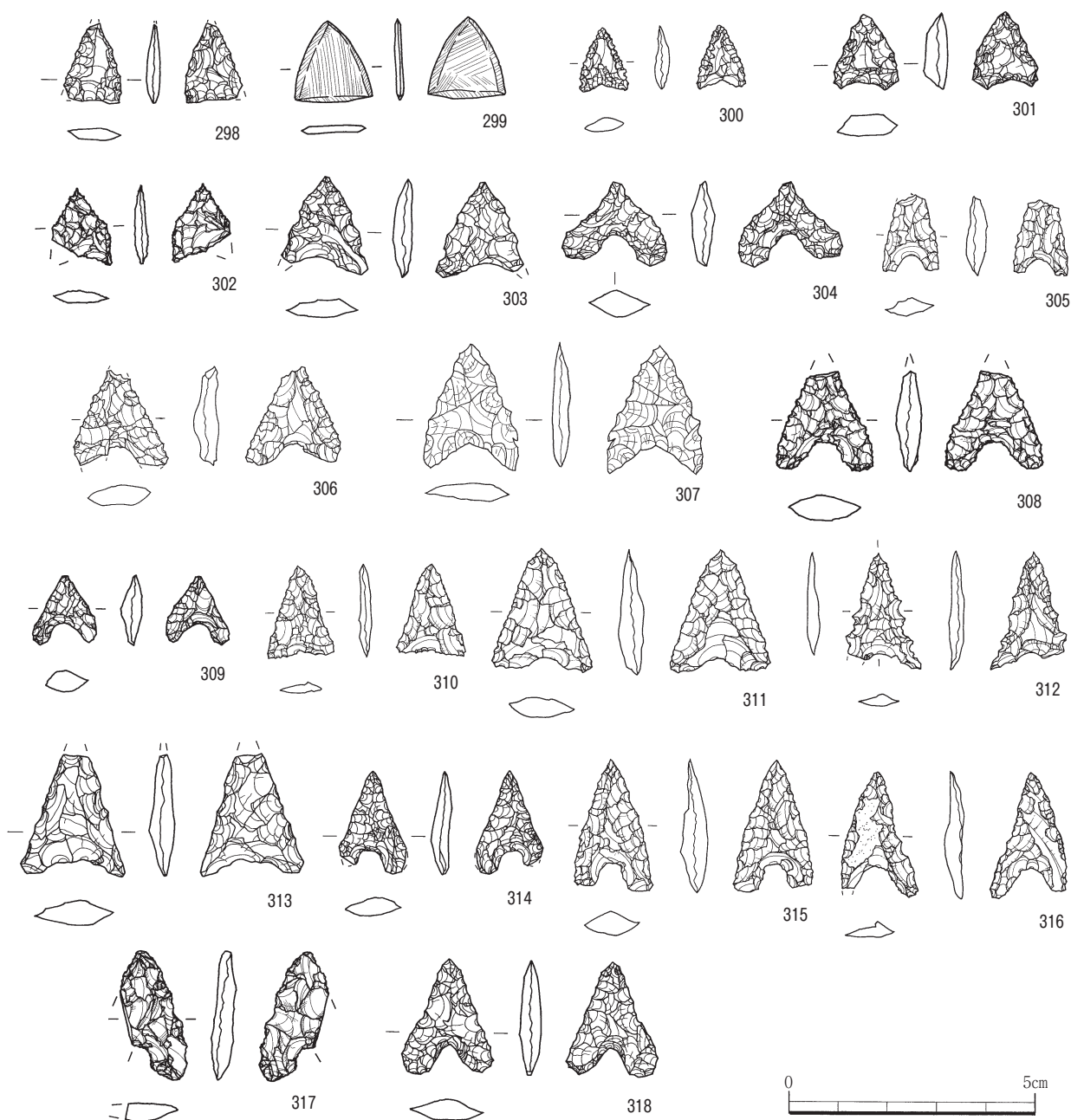
石鏃 (第62図・第63図 298～336)

石鏃は、本報告書P39の農業開発総合センター遺跡群内の石鏃分類図によって分類した。Aaa 2点、Aab 6点、Aac 4点、Aba 1点、Abb 3点、Abc11点、Acc 3点、Bab 1点、Bca 1点、不明なものが7点である。石鏃は打製が37点でほとんどが入念な交互剥離

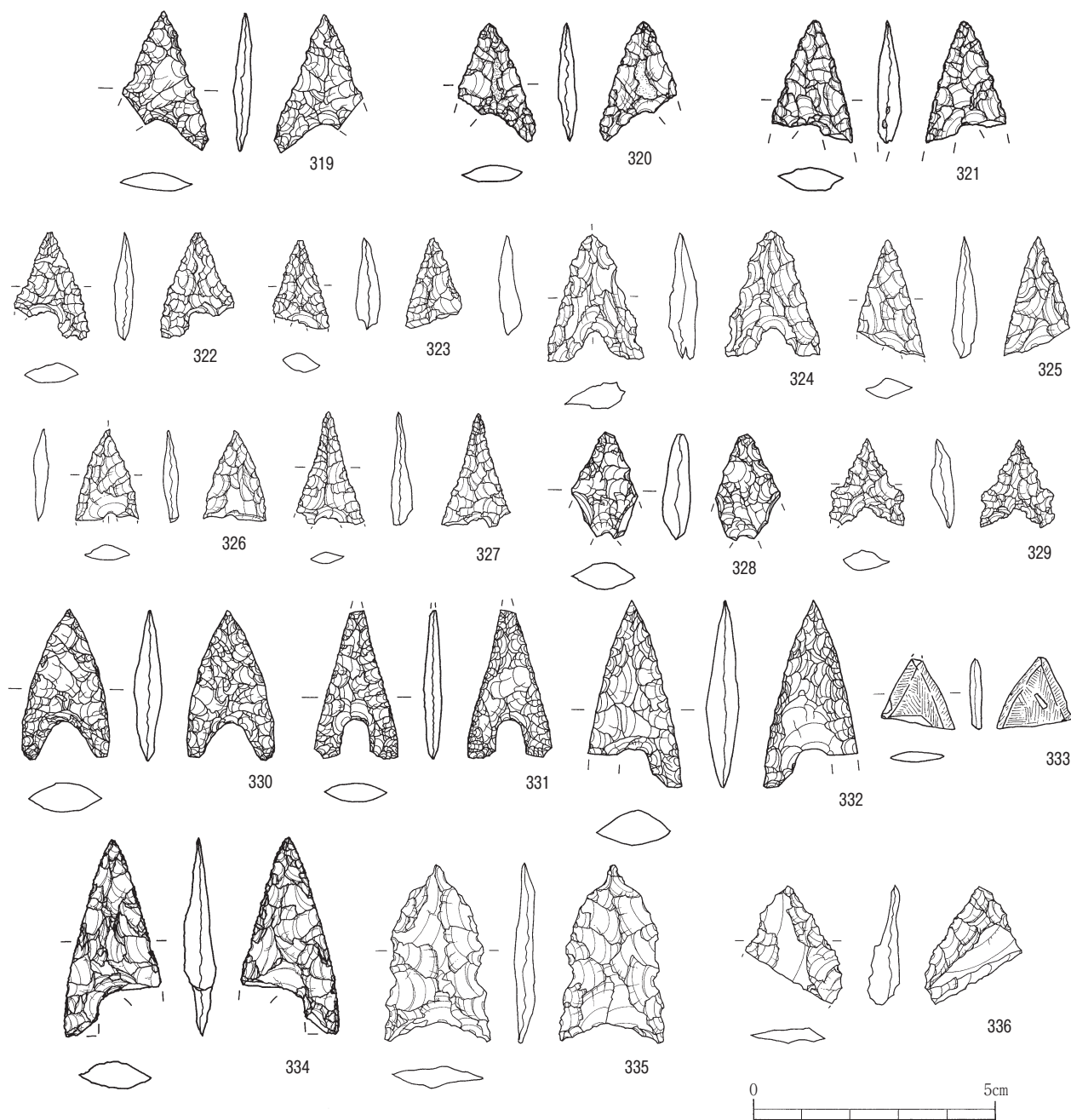
により調整されている。磨製が2点で299は全面に磨きがかけている。40点中24点が破損しており、先端部が破損しているものは4点、先端部と基端の両方破損しているのは3点、基端が破損しているのは17点で片方のみ破損が8点、両方とも破損しているのが9点である。平均重量は約1.2gである。石材は黒曜石が19点で最も多かった。

スクレイパー (第64図 337～340)

スクレイパーは4点図化した。337は上牛鼻産類



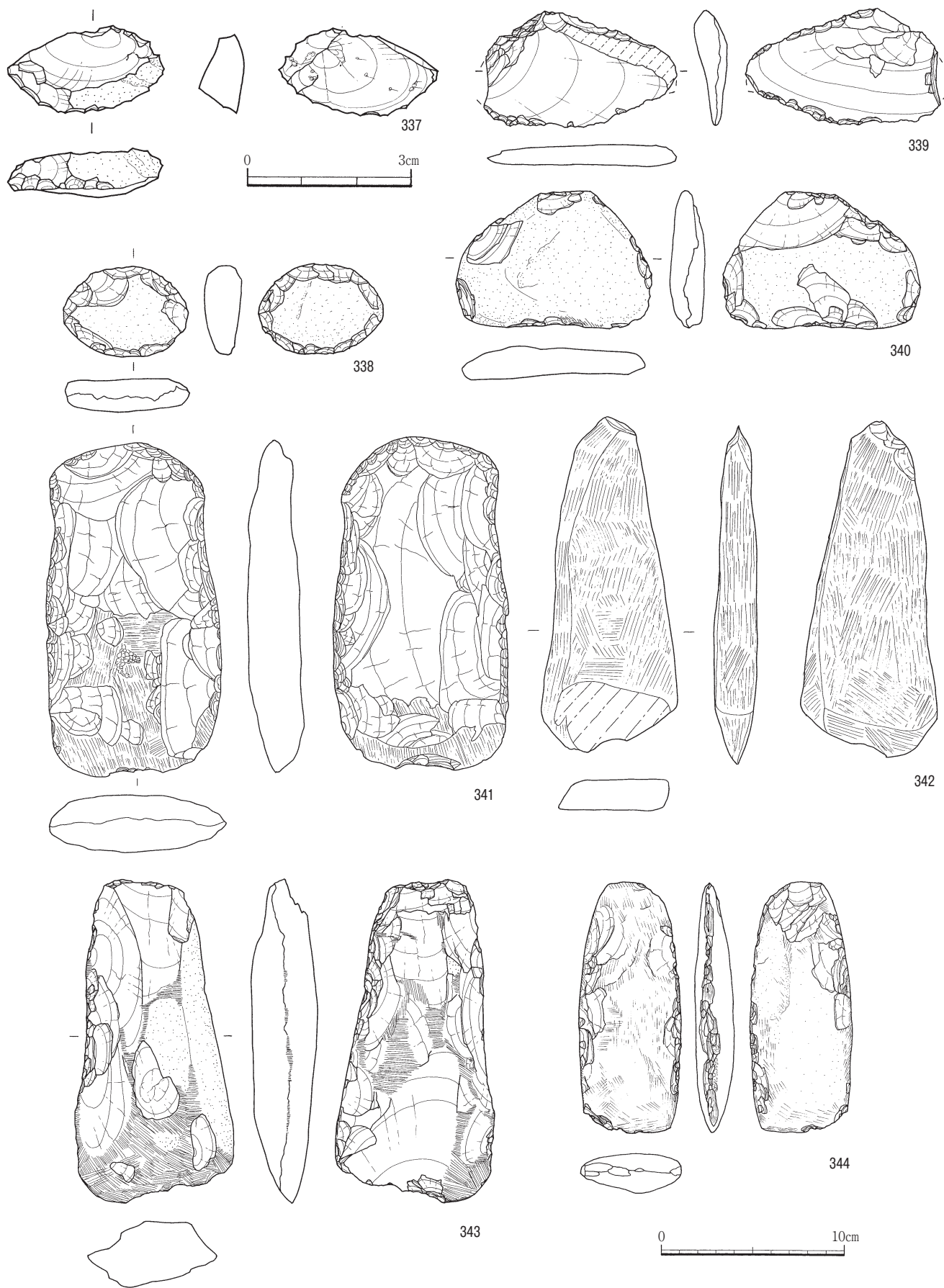
第62図 縄文時代早期 石器 1



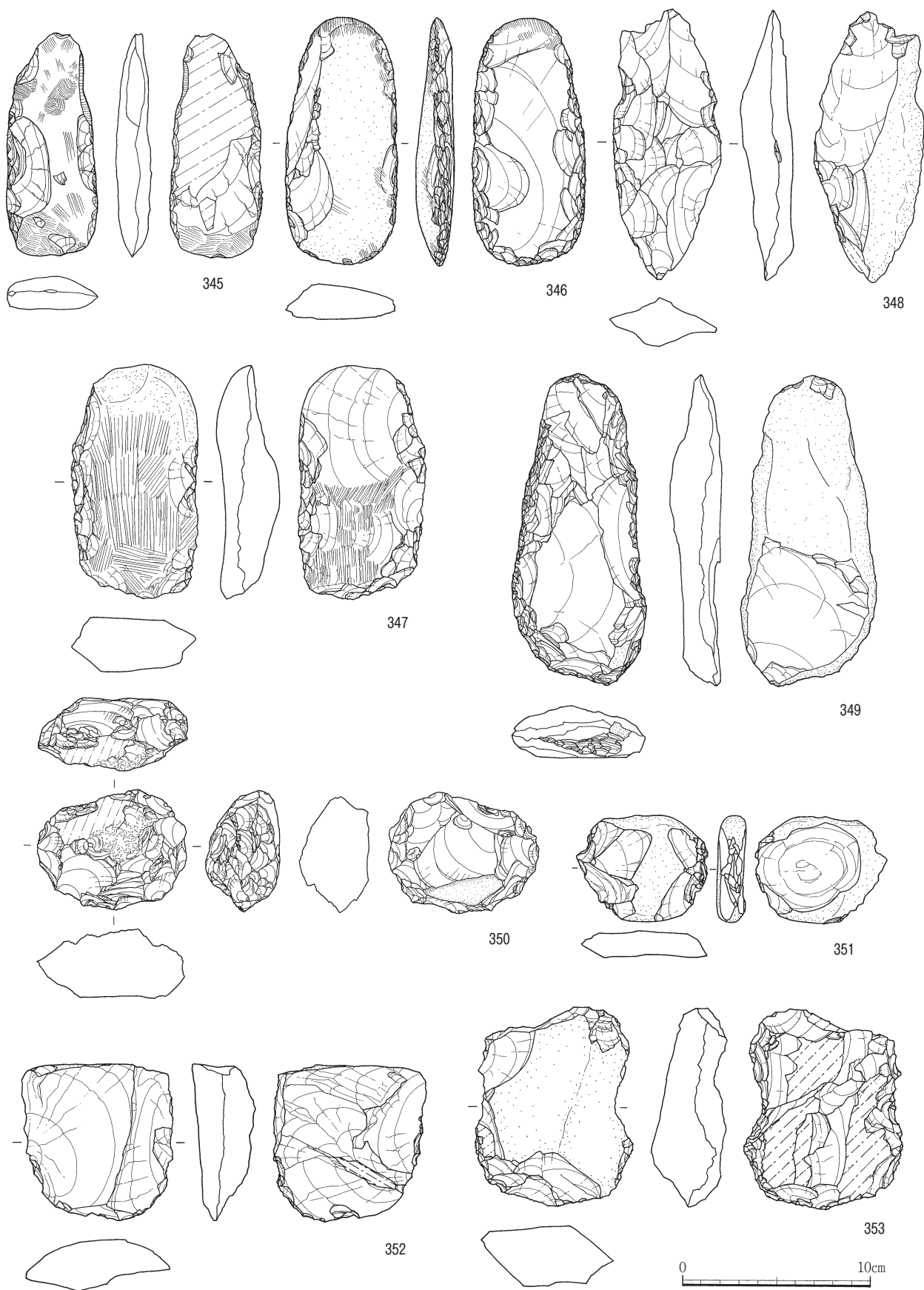
第63図 縄文時代早期 石器2

縄文時代早期石器観察表

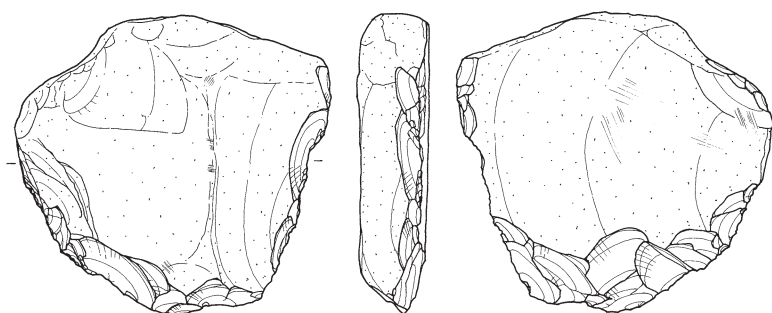
挿図番号	番号	器種	出土区	層位	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考分類
第 62 図	298	打製石鏃	U-9	IV	頁岩	(1.6)	1.3	0.3	0.46	A-a-a
	299	磨製石鏃	U-8	IV	頁岩	1.7	1.6	0.3	0.63	A-a-a
	300	打製石鏃	Q-7	IV	黒曜石(日東)	1.3	0.7	0.3	0.26	A-a-b
	301	打製石鏃	M-6	IV	黒曜石(上牛鼻)	1.6	1.3	0.4	0.85	A-a-b
	302	打製石鏃	U-9	IV	玉随	(1.6)	(1.3)	0.2	0.4	A-a-b
	303	打製石鏃	S-7	IV	瑪瑙玉随	2.0	1.7	0.4	1.06	A-a-b
	304	打製石鏃	T-8	IV	瑪瑙玉随	1.7	0.5	2.2	0.93	A-a-b
	305	打製石鏃	R-9	IV	頁岩	(1.6)	1.2	0.4	0.61	A-a-b
	306	打製石鏃	T-8	IV	黒曜石(三船)	(2.0)	1.9	0.4	1.28	A-a-c
	307	打製石鏃	M-5	IV	黒曜石(上牛鼻)	2.5	2.0	0.3	1.25	A-a-c
	308	打製石鏃	T-9	IV	鉄石英	(2.1)	1.9	0.5	1.67	A-a-c
	309	打製石鏃	T-9	IV	黒曜石(上牛鼻)	1.4	1.3	0.45	0.4	A-a-c
	310	打製石鏃	-	IV	黒曜石	1.9	0.9	0.3	0.43	A-b-a
	311	打製石鏃	Q-7	IV	頁岩	1.5	2.0	0.5	1.79	A-b-b
	312	打製石鏃	U-10	IV	黒曜石(上牛鼻)	2.4	(1.9)	0.3	0.68	A-b-b
	313	打製石鏃	L-5	IV	シルト質頁岩	(2.5)	2.2	0.5	1.69	A-b-b
	314	打製石鏃	T-8	IV	瑪瑙玉随	2.1	1.4	0.4	0.68	A-b-c
	315	打製石鏃	-	IV	黒曜石(上牛鼻)	2.7	1.6	0.5	1.78	A-b-c
	316	打製石鏃	T-9	IV	黒曜石(上牛鼻)	2.5	1.6	0.4	0.77	A-b-c
	317	打製石鏃	U-10	IV	黒曜石(日東)	0.7	(1.4)	0.4	1.38	A-b-c
	318	打製石鏃	P-6	IV	黒曜石	2.3	1.8	0.4	1.23	A-b-c



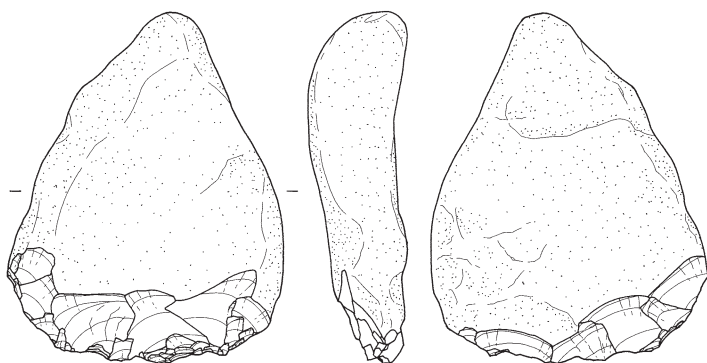
第64図 縄文時代早期 石器3



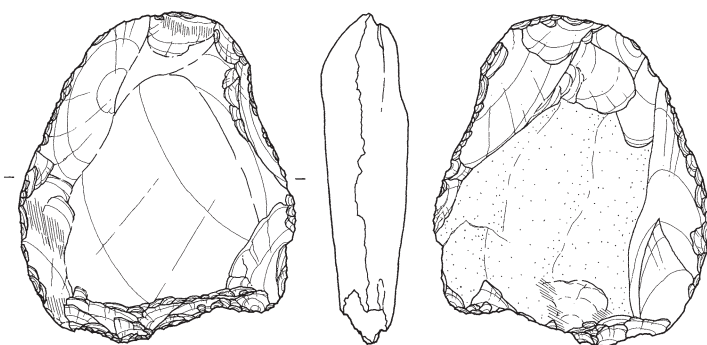
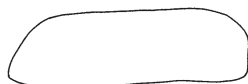
第65図 縄文時代早期 石器4



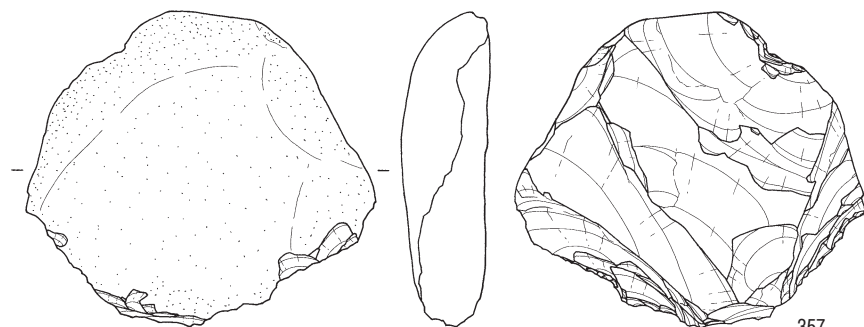
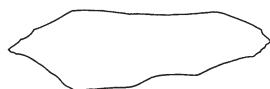
354



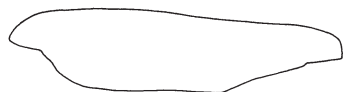
355



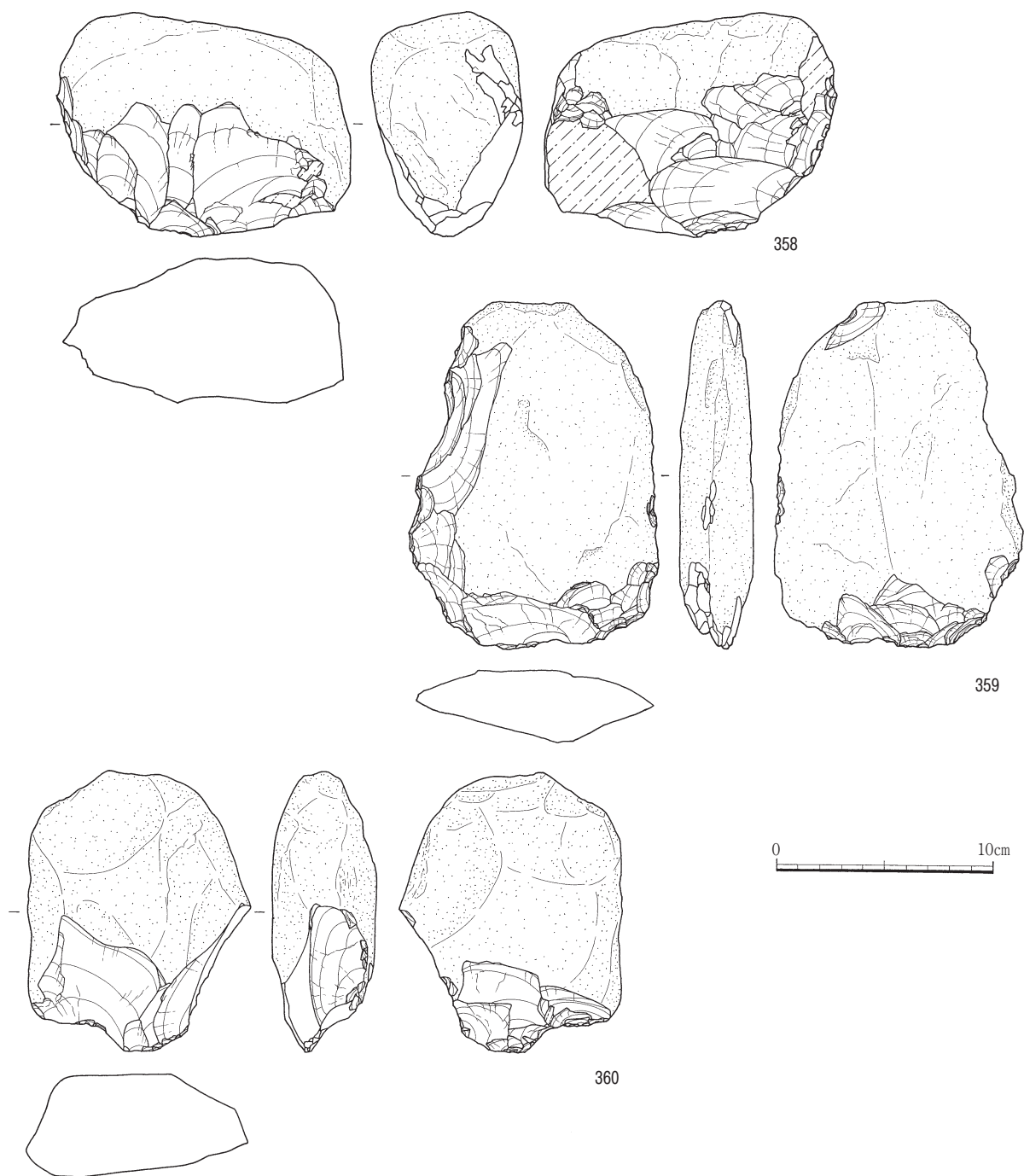
356



357



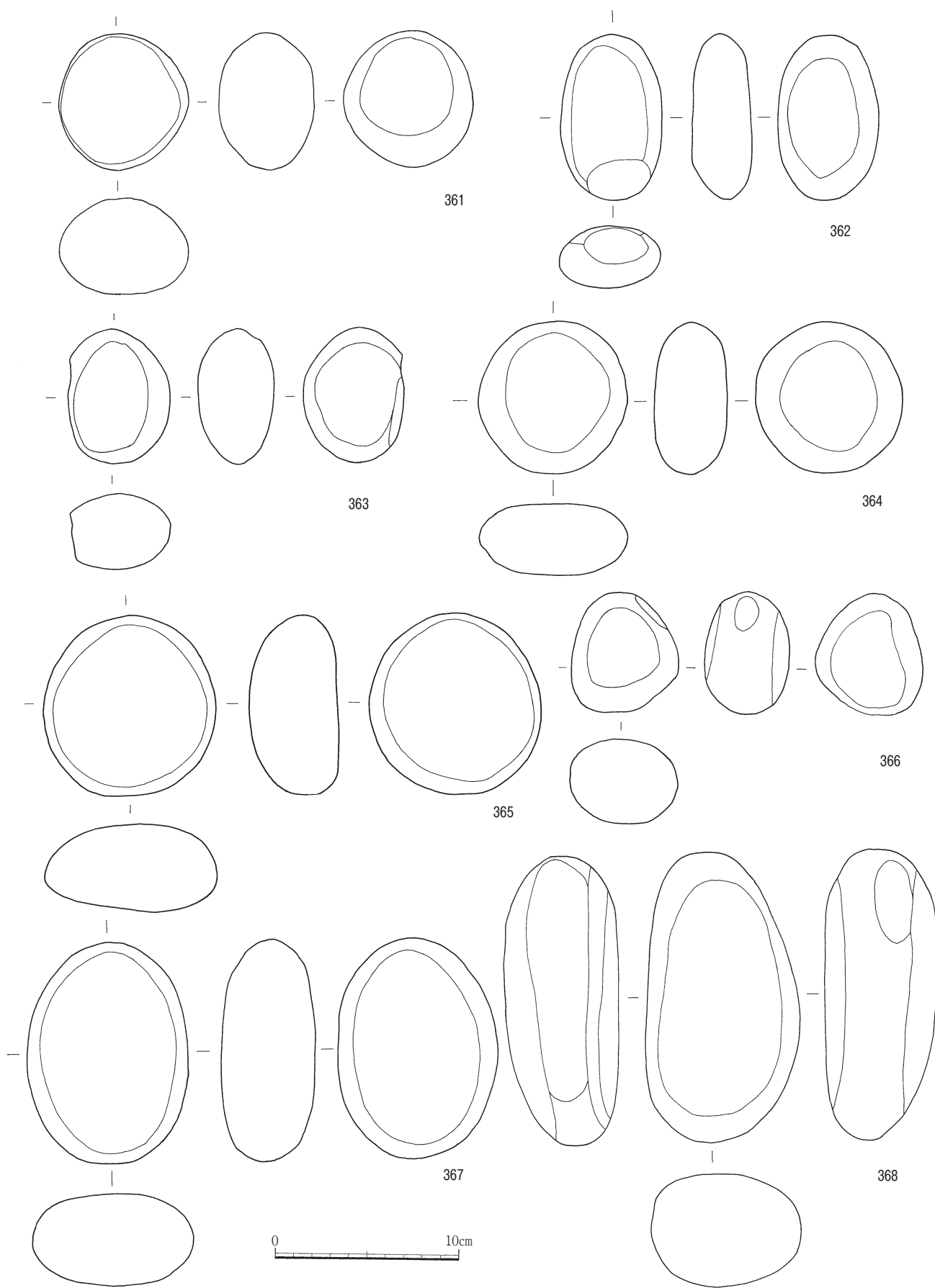
第66図 縄文時代早期 石器5



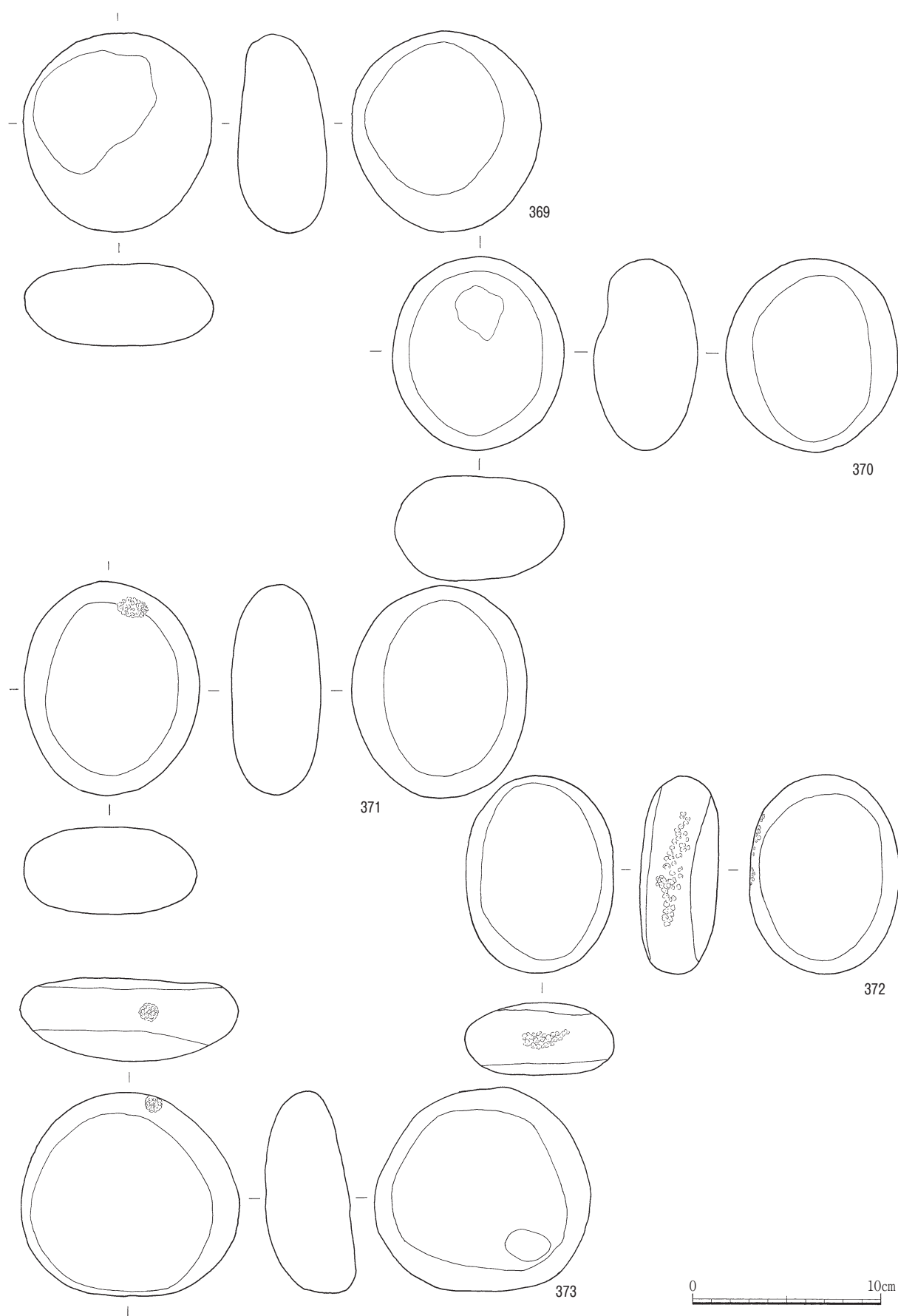
第67図 縄文時代早期 石器6

縄文時代早期石器観察表

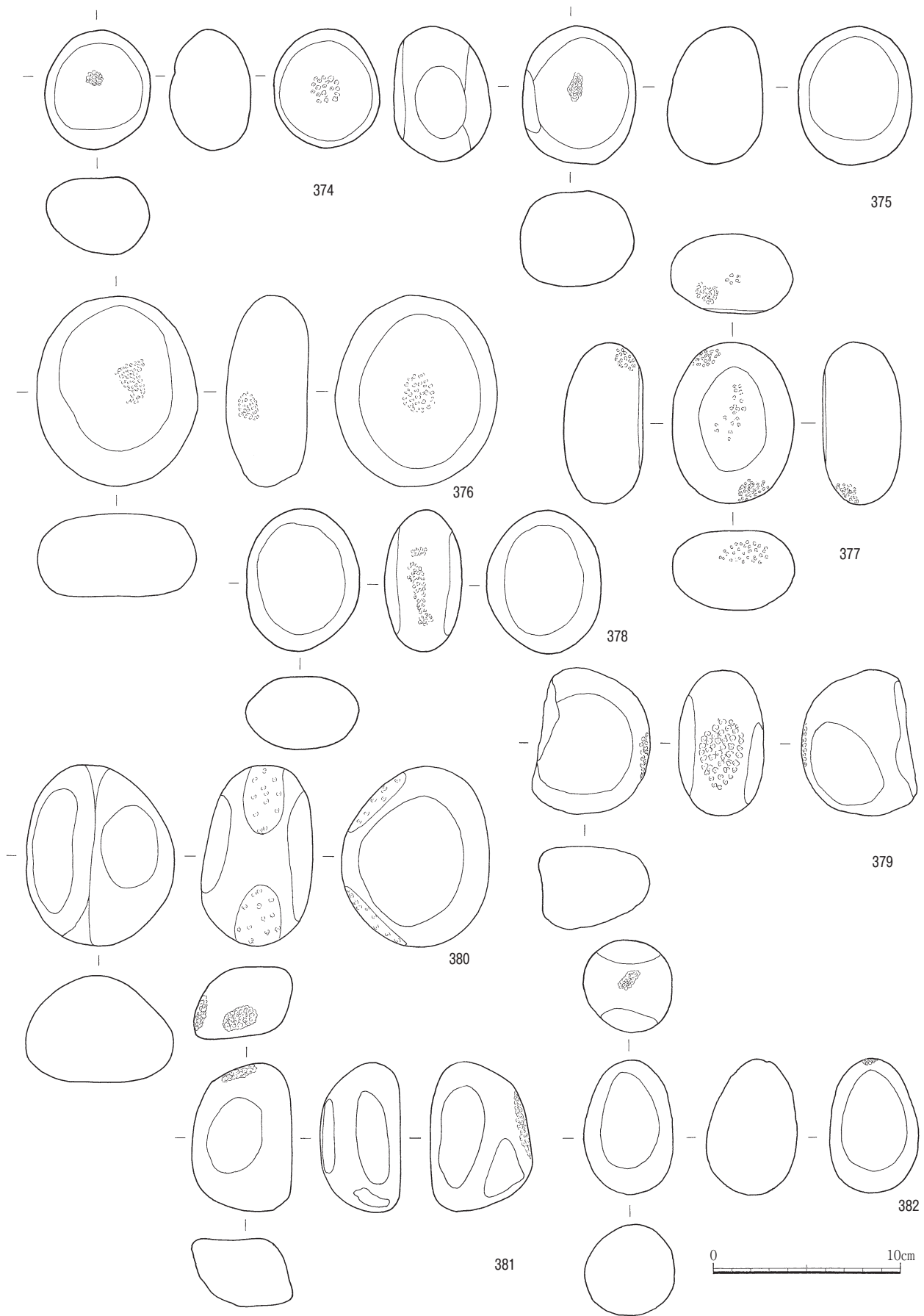
挿図番号	番号	器種	出土区	層位	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
第 63 図	319	打製石鏃	U-10	IV	頁岩	2.6	(1.6)	0.4	1.01	A-b-c
	320	打製石鏃	T-8	IV	黒曜石(日東)	(2.5)	(1.7)	0.4	1.07	A-b-c
	321	打製石鏃	T-8	IV	頁岩	(7.55)	1.65	0.5	1.3	A-b-c
	322	打製石鏃	T-9	IV	黒曜石	2.2	1.6	0.4	0.93	A-b-c
	323	打製石鏃	S-9	IV	黒曜石(日東)	(1.9)	(1.2)	0.4	0.79	A-b-?
	324	打製石鏃	T-8	IV	頁岩	2.6	2.0	0.6	1.89	A-b-c
	325	打製石鏃	S-8	IV	頁岩	(2.5)	(1.5)	0.4	1.29	A-b-?
	326	打製石鏃	R-9	IV	頁岩	(1.9)	(1.3)	0.3	0.69	A-b-?
	327	打製石鏃	-	IV	黒曜石(上牛鼻)	2.4	1.5	0.4	0.93	A-b-?
	328	打製石鏃	S-8	IV	黒曜石(日東)	(2.2)	(1.3)	0.6	1.43	A-b-?
	329	打製石鏃	S-9	IV	黒曜石(三船)	1.8	1.6	0.5	0.72	B-a-b
	330	打製石鏃	T-8	IV	黒曜石	3.1	1.9	0.6	2.16	A-b-c
	331	打製石鏃	M-4	IV	黒曜石	(3.1)	1.8	0.4	1.22	A-c-c
	332	打製石鏃	T-8	IV	頁岩	3.8	2.1	0.7	3.13	A-c-c
	333	磨製石鏃	Q-7	IV	頁岩	(1.2)	1.5	0.2	0.4	?
	334	打製石鏃	T-8	IV	頁岩	4.2	(2.2)	0.6	3.09	A-c-c
	335	打製石鏃	T-9	IV	頁岩	3.7	2.2	0.4	3.17	B-c-a
	336	打製石鏃	T-9	IV	鉄石英	1.5	(1.5)	0.7	1.91	?



第68図 縄文時代早期 石器7



第69図 縄文時代早期 石器8



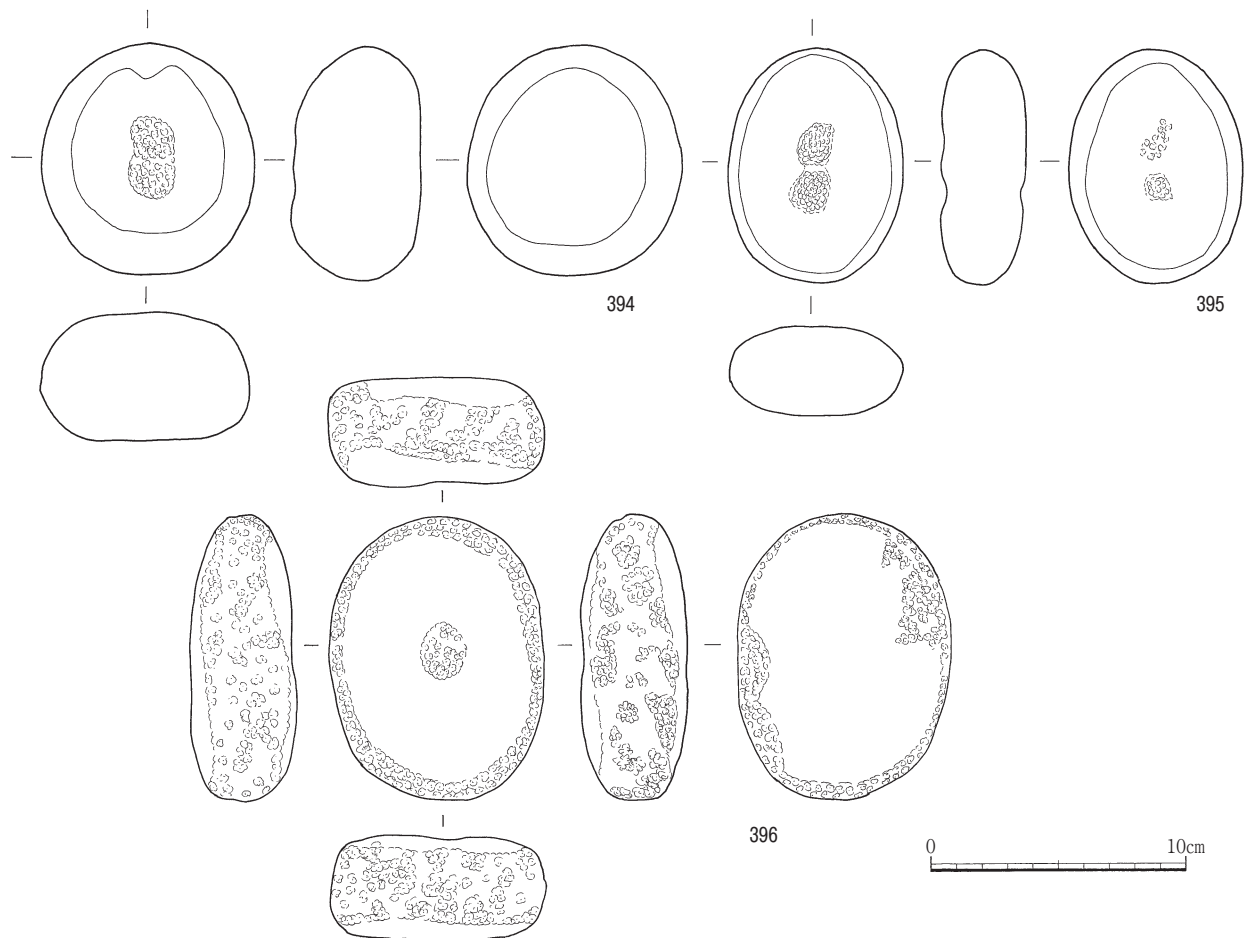
第70図 縄文時代早期 石器9



第71図 縄文時代早期 石器10



第72図 縄文時代早期 石器11



第73図 縄文時代早期 石器12

似の黒曜石で一部風化がみられる。下部に刃部形成が施されている。338は砂岩製で両側面に剥離を施している。339は横長剥片を利用し側面に刃部を有するものである。340は自然面を残し、下部に刃部形成を施す。

石斧（第64図・第65図 341～349）

341～345は磨製石斧である。341は両側面に剥離を施しているが、刃部は磨きが施されている。342は全面に丁寧な磨きが施される。343は刃部と基部に磨きが施される。344は自然面を残し、両面の刃部に磨きが施される。345は裏面が欠損しているが刃部に丁寧な磨きが施されている。346～349は打製石斧である。346は自然面を残し、側面に剥離が施されている。347は両面に磨きが施されているが側縁と刃部には敲打による剥離が施されている。348は縦長剥片にやや粗い剥離が施されている。349は

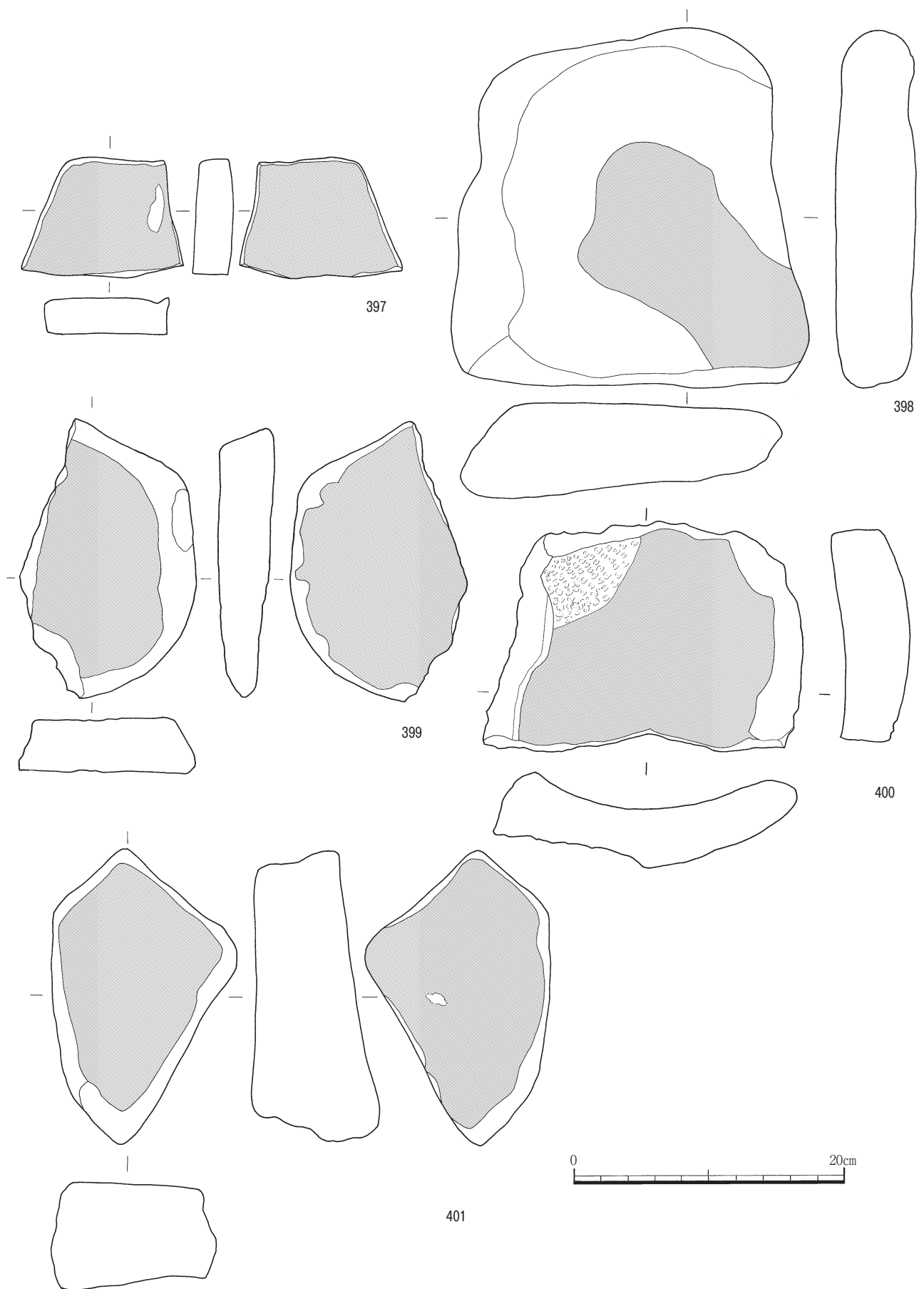
側縁と刃部に剥離が施されている。

石核 礫器（第65～67図 350～360）

350は頁岩製の石核である。351～360は礫器である。352は側面に剥離を施し、下部を鋭利にし刃部形成が施されている。353は自然面を残し、側縁に抉りを施し、下部は刃部形成が施されている。354～360は自然面を多く残し、下部に刃部形成を行っている。

磨石 敲石 凹石（第68図～第73図 361～396）

361～396は磨石、敲石、凹石である。円礫を用いた磨石が多く、石材は砂岩が多い。361～370は両面と側縁、または下部に磨石の機能のあるもの。371～382は磨石の機能を持つものと一部に敲石の機能を持つものである。383～388、390～392は磨石の機能と側縁に敲石の機能を持つものである。389・394・395は磨石と凹石の機能を持つものである。



第74図 縄文時代早期 石器13

393・396は磨石と敲石、凹石の機能を持つものである。

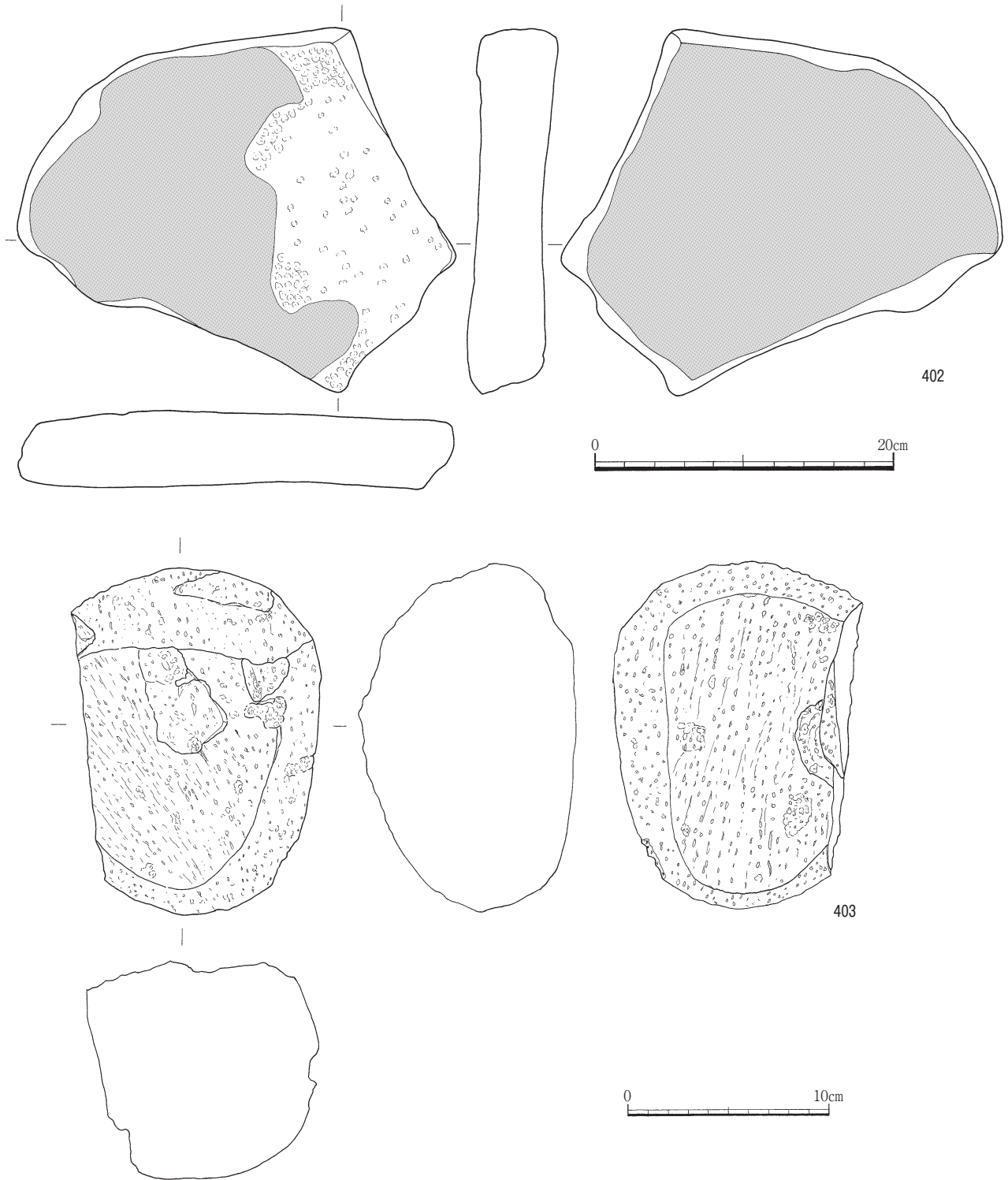
石皿（第74図・第75図 397～402）

6点を図化した。石材は砂岩のものが多い。
397・399・401は両面とも作業面があるものである。

398は片面のみの作業面である。399は33号集石で出土している。400・402は敲打痕がみられる。

軽石製品（第75図 403）

403は軽石製品である。用途は不明であるが、各所に磨痕が見られる。



第75図 縄文時代早期 石器14

縄文時代早期石器観察表

挿図番号	番号	器種	出土区	層位	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さ g	備考
第64図	337	スクレイパー	R-7	IV	黒曜石（上牛鼻）	1.6	2.85	0.8	3.4	
	338	スクレイパー	U-10	IV	砂岩	4.85	6.1	1.8	75	
	339	スクレイパー	U-9	IV	頁岩	6.3	10.55	1.6	105	
	340	スクレイパー	V-9	IV	頁岩	7.5	10.75	1.85	180	
	341	磨製石斧	O-5	IV	頁岩	18.2	9.2	3.1	790	
	342	磨製石斧	U-10	IV	頁岩	17.7	7.4	1.7	420	
	343	磨製石斧	U-9	IV	頁岩	17.65	8.75	3.6	550	
第65図	344	磨製石斧	U-9	IV	頁岩	13.7	5.5	2.0	225	
	345	磨製石斧	Q-6	IV	頁岩	11.8	4.6	1.75	125	
	346	打製石斧	T-9	IV	頁岩	13.3	6.0	2.0	210	
	347	打製石斧	T-9	IV	頁岩	12.4	6.85	2.95	320	
	348	打製石斧	T-9	IV	頁岩	14.5	5.8	2.5	182	
	349	打製石斧	Q-5	IV	頁岩	16.5	7.1	2.7	329	
	350	石核	S-9	IV	頁岩	6.45	7.9	3.9	215	
第66図	351	礫器	T-8	IV	頁岩	5.6	7.1	1.5	70.5	
	352	礫器	S-9	IV	頁岩	8.3	8.15	3.1	238	
	353	礫器	S-8	IV	頁岩	10.55	8.45	3.7	370	
第67図	354	礫器	R-7	IV	頁岩	11.8	12.6	2.9	515	
	355	礫器	T-9	IV	頁岩	13.8	10.9	3.3	650	
	356	礫器	T-8	IV	頁岩	13.0	10.9	3.3	510	
	357	礫器	R-7	IV	頁岩	12.35	13.9	3.4	652	
第68図	358	礫器	R-7	IV	頁岩	10.3	13.55	6.9	1255	
	359	礫器	L-5	IV	頁岩	15.9	11.55	3.4	690	
	360	礫器	T-8	IV	頁岩	12.9	10.3	4.85	825	
第69図	361	磨石	P-6	IV	安山岩	7.5	7.0	5.3	360	
	362	磨石	Q-6	IV	砂岩	9.0	5.4	3.2	250	
	363	磨石	U-9	IV	砂岩	7.5	(5.5)	4.2	255	
	364	磨石	L-6	IV	安山岩	8.3	8.0	3.9	385	
	365	磨石	S-8	IV	安山岩	9.9	9.4	4.8	650	
	366	磨石	T-8	IV	砂岩	6.6	5.8	4.6	225	
	367	磨石	R-7	IV	安山岩	12.0	8.8	5.0	855	
第70図	368	磨石	P-5	IV	砂岩	15.8	8.5	6.3	1245	
	369	磨石	-	IV	安山岩	10.5	11.0	4.5	680	
	370	磨石	Q-6	IV	安山岩	10.2	9.0	5.5	740	
	371	磨石・敲石	S-8	IV	安山岩	11.3	9.4	4.7	745	
	372	磨石・敲石	S-8	IV	安山岩	10.5	7.9	3.9	500	
	373	磨石・敲石	O-5	IV	安山岩	10.7	11.6	4.4	800	
	374	磨石・敲石	S-9	IV	砂岩	6.5	5.6	4.2	210	
第71図	375	磨石・敲石	R-7	IV	砂岩	7.9	6.2	5.1	310	
	376	磨石・敲石	U-9	IV	砂岩	10.3	8.6	4.4	540	
	377	磨石・敲石	Q-7	IV	安山岩	8.6	6.5	4.2	345	
	378	磨石・敲石	S-9	IV	砂岩	7.6	6.0	4.0	270	
	379	磨石・敲石	U-9	IV	砂岩	7.8	(6.3)	4.5	300	
	380	磨石・敲石	T-9	IV	砂岩	9.6	7.9	5.9	590	
	381	磨石・敲石	T-8	IV	砂岩	8.0	5.5	3.7	240	
第72図	382	磨石・敲石	P-6	IV	砂岩	7.2	4.3	4.9	230	
	383	磨石・敲石	T-9	IV	砂岩	6.9	6.5	3.5	220	
	384	磨石・敲石	M-6	IV	砂岩	8.2	6.2	4.0	290	
	385	磨石・敲石	S-7	IV	砂岩	8.1	7.6	5.0	450	
	386	磨石・敲石	S-9	IV	砂岩	7.3	6.4	3.3	210	
	387	磨石・敲石	M-6	IV	チャート	9.2	6.6	3.9	330	
	388	磨石・敲石	T-9	IV	安山岩	9.4	7.4	4.1	500	
第73図	389	磨石・凹石	U-9	IV	砂岩	8.8	5.9	4.6	295	
	390	磨石・凹石	S-7	IV	安山岩	10.1	8.5	4.4	500	
	391	磨石・凹石	T-9	IV	砂岩	12.0	9.3	5.4	860	
	392	磨石・凹石	R-7	IV	安山岩	(10.2)	12.2	5.2	1040	
第74図	393	磨石・凹石・凹石	U-9	IV	頁岩	9.6	6.9	4.2	340	
	394	磨石・凹石	S-9	IV	砂岩	9.0	8.4	4.9	540	
	395	磨石・凹石	-	IV	砂岩	9.3	6.8	3.4	310	
第75図	396	磨石・凹石・凹石	T-8	IV	安山岩	11.2	8.5	4.3	650	
	397	石皿	R-6	IV	頁岩	8.6	12.0	2.7	520	
	398	石皿	T-9	IV	安山岩	21.8	13.8	9.8	7800	集石33号
	399	石皿	L-6	IV	砂岩	20.8	13.1	4.0	1400	
	400	石皿	T-8	IV	砂岩	16.4	22.3	5.1	2800	
第76図	401	石皿	L-5	IV	砂岩	21.8	13.8	9.8	2500	
	402	石皿	T-8	IV	砂岩	24.3	29.5	5.3	4500	
	403	軽石製品	R-6	IV	軽石	17.2	12.0	10.8	850	

3 縄文時代晩期の調査

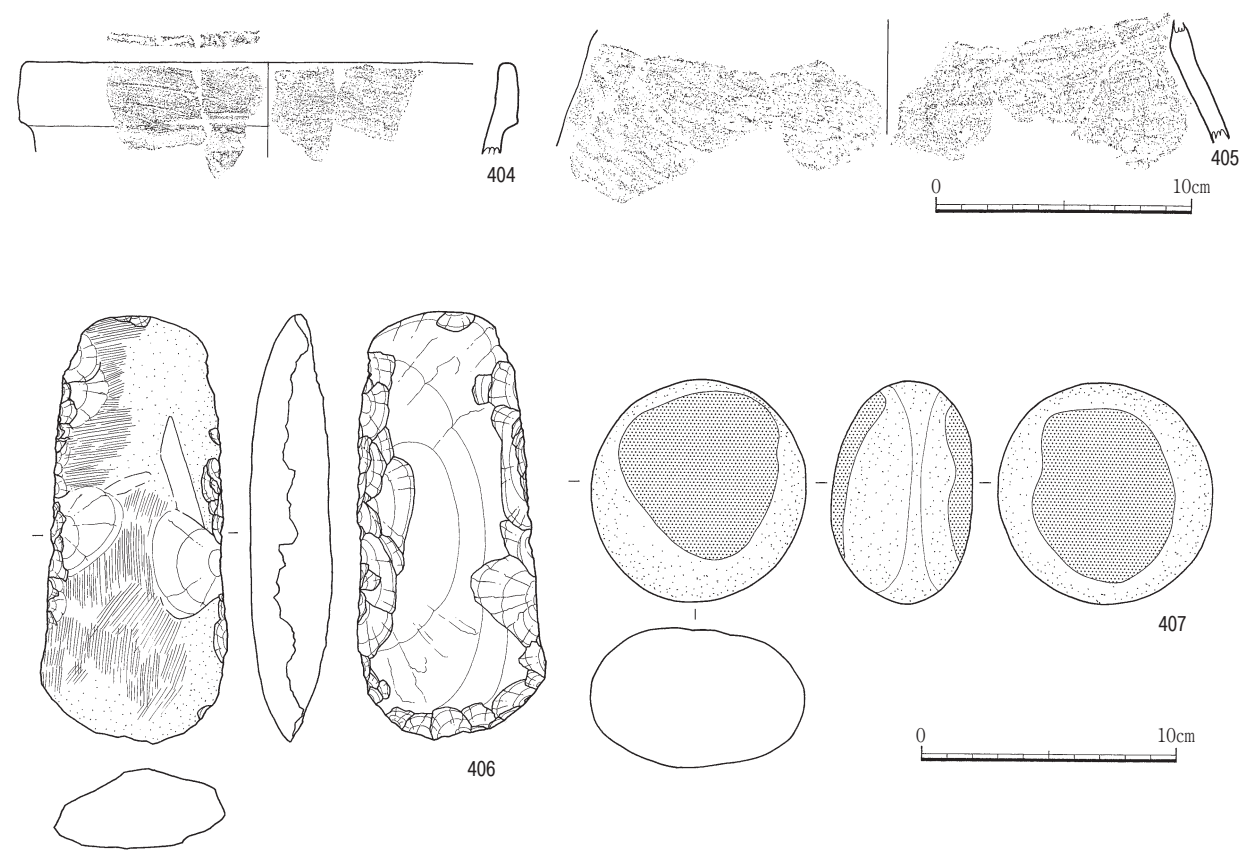
縄文時代晩期では遺構は検出されなかった。遺物は土器・石器ともに数点ずつ出土した。

(1) 土器（第76図 404・405）

404は深鉢型土器の口縁部である。405は胴部である。

(2) 石器（第76図 406・407）

406は打製石斧である。両側面に剥離を施している。上面に磨痕が見られる。407は円礫を利用し、両面に磨石の機能を持つものである。敲打痕などはみられない。



第76図 縄文時代晩期 土器・石器

縄文時代晩期土器観察表

挿図 番号	番号	層位	出土区	部位	色調		胎土				焼成	外面	内面	備考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他				
第76 図	404	Ⅲ	U-9	口縁部	オリーブ褐	暗灰黄	○	○			良	ナデ	ケズリ後ナデ	
	405	Ⅲ	F-9	胴部	褐	暗褐	○	○			良	ナデ	ケズリ後ナデ	

縄文時代晩期石器観察表

挿図番号	番号	器種	出土区	層位	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	備考
第76図	406	打製石斧	N-5	Ⅲ	頁岩	16.75	7.45	3.2	500	
	407	磨石	U-8	Ⅲ	砂岩	8.7	8.5	5.5	600	

第6節 小結

荒田遺跡では、旧石器時代から縄文時代晩期の遺構・遺物が出土している。

旧石器時代

旧石器時代ではS－7区、T－8区、U・V－9・10区でブロックが3基検出された。石材は黒曜石が多く、S－7区、T－8区ではナイフ型石器が出土し、U・V－9・10区では細石刃が集中して出土している。

縄文時代草創期

縄文時代草創期の遺構はT－8区のⅧ層上面で集石が1基検出された。集石には掘り込みは見られなかった。N－4区では頁岩のブロックが検出された。ブロック内の器種が打製石斧と思われるものが多く、また、頁岩の剥片やチップの広がりから石器の製作跡と思われる。

遺物では土器が出土したがほとんどのものが風化が著しく図化することが難しかった。爪痕の見られる隆帯文土器を2点図化できた。石器は磨石を3点図化した。

縄文時代早期

縄文時代早期の遺構は集石が35基、土坑が3基検出された。集石はT・U－9・10区に集中して検出されているが全体的には広範囲で出土している。掘り込みが見られたものは4基であった。遺物では、土器がⅡ類土器からⅪ類土器の10種類に分類した。南北の標高差が3mあり、その影響なのか、広範囲での土器の接合が見られた。それぞれの類に比類する土器型式は次の通りである。

Ⅱ類土器 加栗山式土器

Ⅲ類土器 石坂式土器

Ⅳ類土器 下剥峯式土器

Ⅴ類土器 桑ノ丸式土器

Ⅵ類土器 中原式土器

Ⅶ類土器 押型文土器

Ⅷ類土器 平椀式土器

Ⅸ類土器 塞ノ神式土器

X類土器 右京西タイプ

Ⅱ類からⅣ類土器は数点の出土であった。Ⅴ類土器はU－9区で出土したほぼ完形に近いものや施文

に多くの種類が見られる物が出土した。本遺跡で出土量が最も多かったのはⅦ類土器の押型文土器である。口縁部が直行し復元口径が約43cmの大型のものから口縁部が外反する復元口径が約11cmの小型のものまで幅広く出土した。Ⅴ・Ⅶ類土器はT－8・9区やU－9・10区に多く出土している。Ⅸ類土器はS－8・9区に集中して出土している。X類土器はⅦ類土器について出土量が多かった右京西タイプである。復元口径41cmの大型のものなどが出土した。口唇部に刻み目があり、条痕文が施されたものであるが、口唇部の器形が平坦で内径しているものが多かった。これは、下剥峯式土器や桑ノ丸式土器の特徴に類似している。農業センター遺跡群では、右京西タイプの出土量が少ないので新たな資料となるであろう。また、281は口唇部の刻みからX類土器の範疇に入れてあるが器面は丁寧に磨きがかけられてあった。

石器は農業開発総合センター遺跡群の他の遺跡とほとんど変わりがなかった。石鏃はT－8・9区に多く出土していた。出土したもので多かったのは磨石で62点あったが、そのうち、36点を図化した。

縄文時代晩期

縄文時代晩期の遺構は検出されなかった。土器は上加世田式と思われる土器が出土した。石器は打製石斧と磨石と計2点図化した。

参考文献

- 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(83)
農業開発総合センター遺跡群Ⅰ「窪見ノ上遺跡 建石ヶ原遺跡 古里遺跡 西原遺跡」2005
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(41)
「上野原遺跡(第2～7地点)」2002
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(28)
「上野原遺跡(第10地点)」2001

桜 谷 遺 跡

第Ⅵ章 桜谷遺跡の発掘調査成果

第1節 調査の経過

桜谷遺跡は、平成14年5月～10月、平成15年1月～2月に調査を実施した。本調査は、研究水田部分の削平部分を対象とした。

平成14年度日誌抄

平成14年

5月 調査開始。表土剥ぎ、Ⅲ層・Ⅳ層掘り下げ。縄文早期の集石遺構が検出され、遺物も多く出土する。

6月 Ⅳ層掘り下げ継続。早期遺物出土、集石遺構検出。弥生時代中期の竪穴式住居跡検出・掘り下げ。下層確認調査（トレンチ調査）。

7月 Ⅲ層・Ⅳ層掘り下げ継続。早期遺物出土、集石遺構検出。縄文晩期の土坑調査。弥生時代竪穴式住居跡実測。

8月 Ⅳ層掘り下げ。下層確認調査。土層断面実測。8日鹿児島大学本田道輝助教授現地指導。

導。

9月 Ⅳ層掘り下げ。Ⅶ層・Ⅷ層掘り下げ。旧石器ブロック検出。

10月 Ⅶ層・Ⅷ層掘り下げ。旧石器ブロック検出・遺物取り上げ。

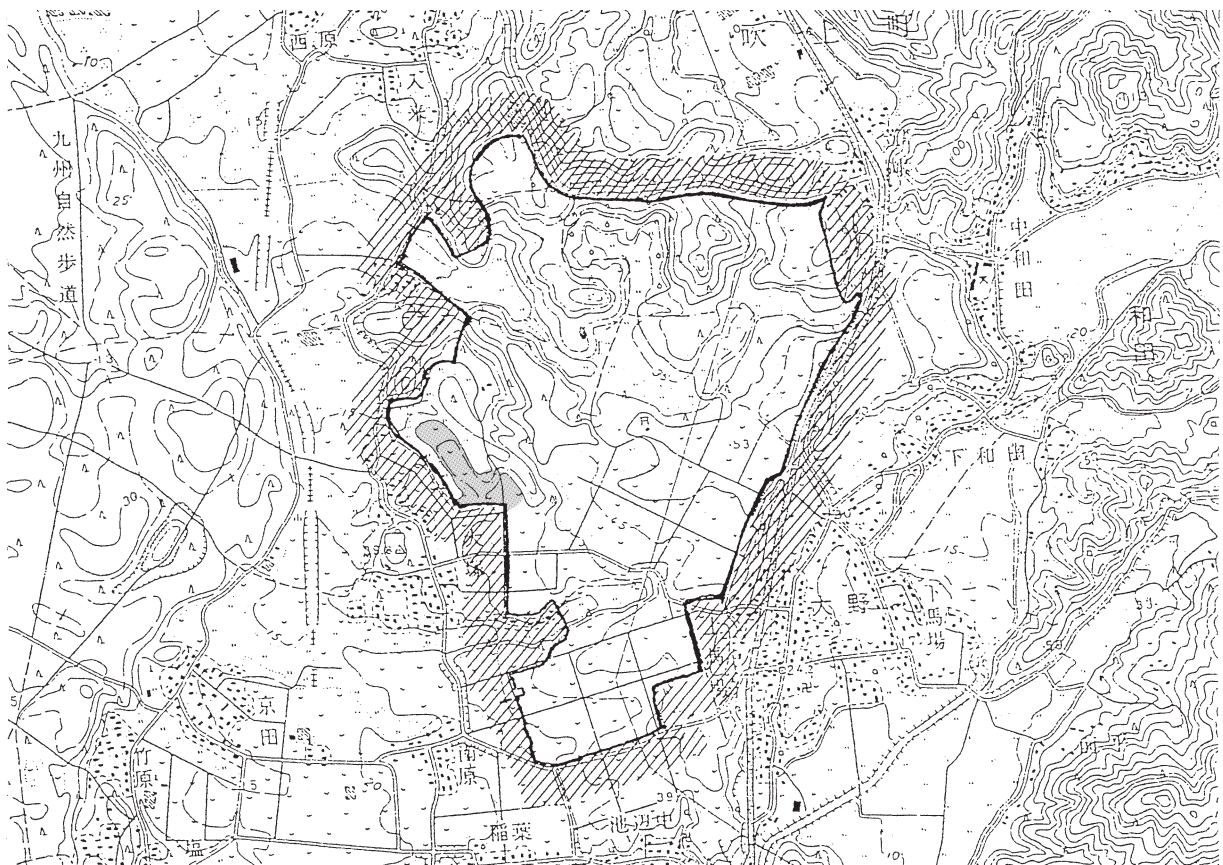
11月 7日鹿児島大学森脇広教授現地指導。

12月 12日・13日熊本大学小畑弘己助教授現地指導。16日・17日立命館大学矢野健一助教授現地指導。

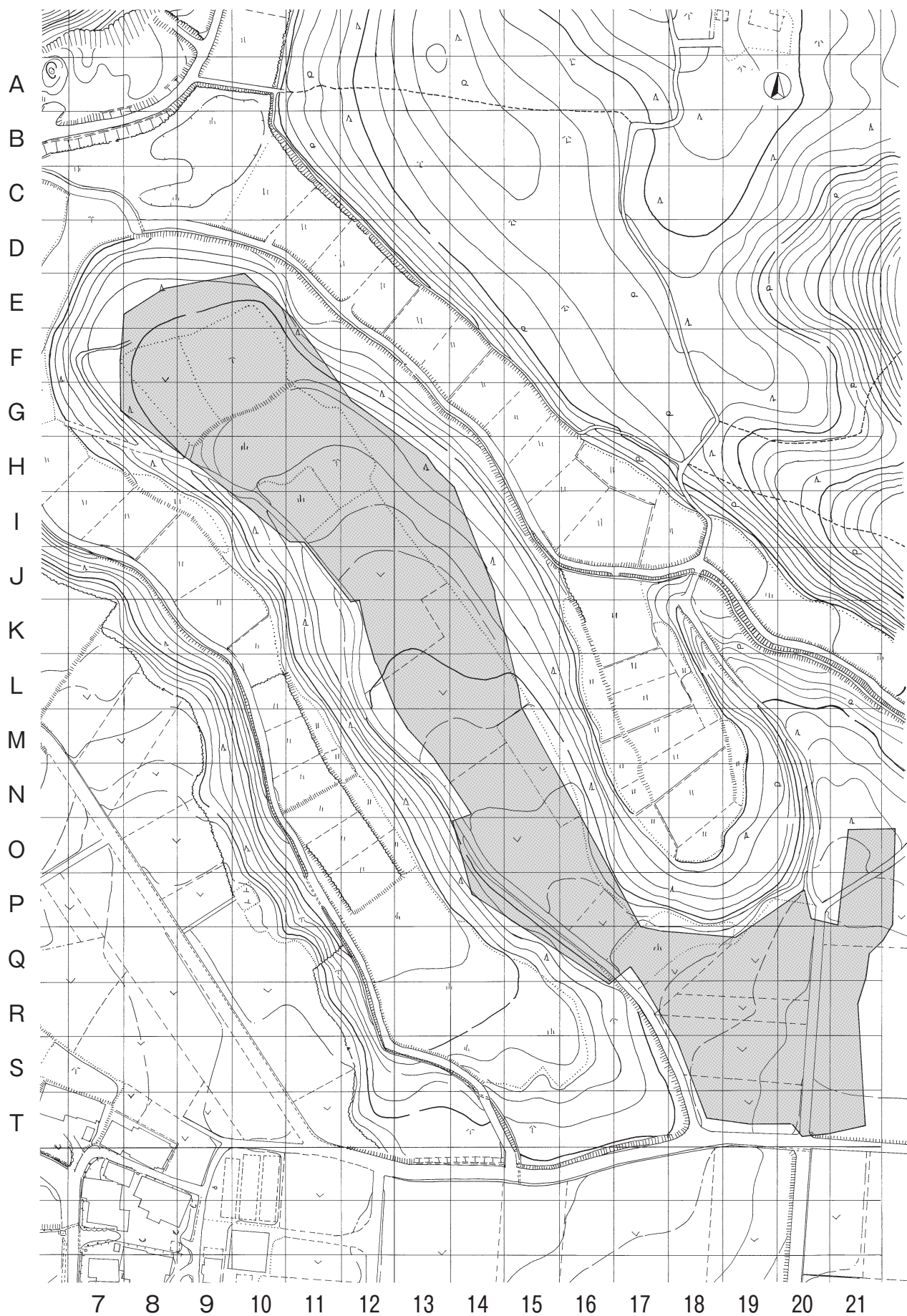
第2節 遺跡の層序

桜谷遺跡における層序は、農業開発総合センター遺跡群の標準的な層序と同様である。東側・西側・北側には谷が入り込む、いわゆる舌状台地状（幅約60m）を呈している。台地と谷部の比高差は7～10mである。台地の南側が高く標高約29mで、北側は標高約20mとだんだん低くなっている。

全体的に、Ⅱ層・Ⅲ層が削平されている。北側では弥生時代中期の竪穴式住居跡が検出されたが、遺構の部分だけの検出で、遺物包含層は削平されている。

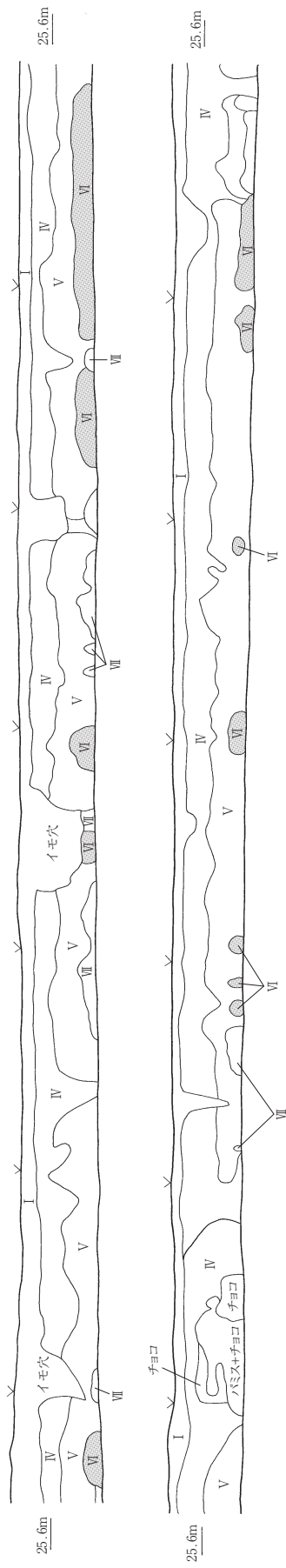


第1図 桜谷遺跡位置図 (1/25000)

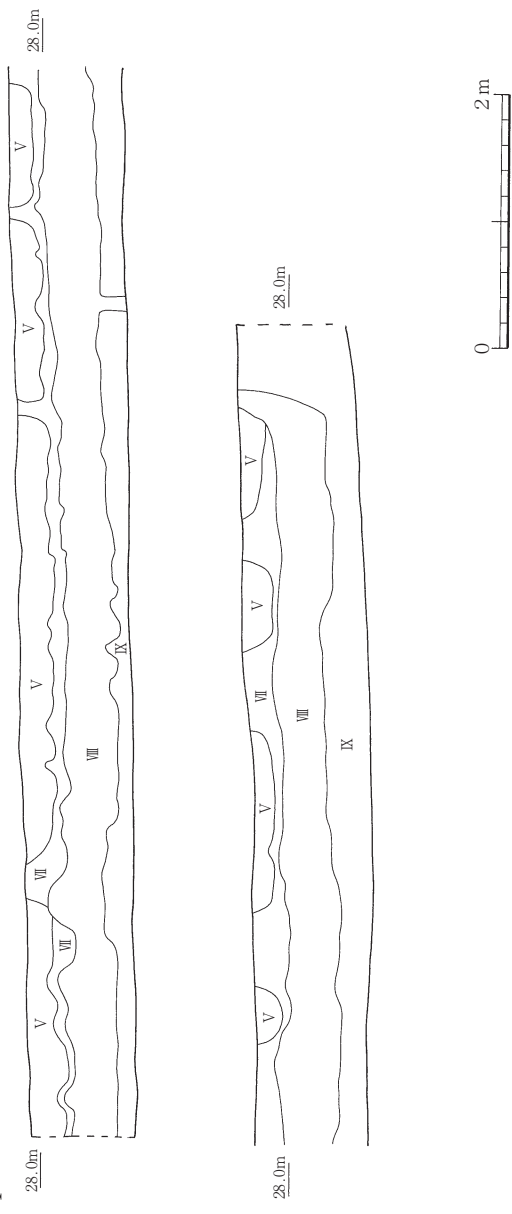


第2図 桜谷遺跡地形図・調査範囲・グリッド配置図 (1/2000)

3



4



第4図 土層断面図2

る。また、標高20m前後の北側の低い範囲では、液状化現象が各所にみられる。

第3節 発掘調査の方法及び概要

発掘調査は国土座標にあわせた20×20mの調査範囲（グリッド）を設定して実施し、遺跡地内の北側からA・B・C…、西側から1・2・3…とした。

遺跡は、谷を挟んで東側は荒田遺跡があり、大野原台地へ続く南面は神原遺跡に接している。標高20～29mの緩斜地にあり、東…北…西側に比高差7～10mの谷が入り込んでいる。

上部の地層が削平されている範囲が多く、古墳時代以降の遺構は検出されず、遺物も数点しか出土しなかった。弥生時代中期前葉の竪穴式住居跡が1基検出されているが、遺物包含層は削平されている。縄文時代晩期についても土坑が3基と柱穴列が1基検出されているが、遺物包含層は残存していない。Ⅳ・Ⅴ層は遺跡のほぼ全域に残存し、縄文時代早期の遺構・遺物が多く出土している。遺構は集石遺構が36基検出され、1か所石器（石鏃）製作跡と思われるブロックが検出されている。遺物は石坂式土器を中心に岩本式・前平式・志風頭式・加栗山式・吉田式・押型文土器・桑ノ丸式・塞ノ神式等豊富な資料が出土している。特に押型文土器は底部に網代底がみられたり、山形押型文と貝殻刺突文の2種の文様を有するものなど特殊なものが多い。石器も環状石斧・有孔石器といった特殊な石器を初め石鏃・石斧・磨石・石皿等豊富である。

Ⅶ層、Ⅷ層は分層が困難であったが、縄文草創期と思われる土器2点と石鏃2点、磨石1点が出土し、旧石器時代でナイフ型石器文化期と思われるブロックからナイフ型石器・台形石器・スクレイパー等が、細石器文化期と思われるブロックから細石刃・細石刃核が検出されている。

第4節 旧石器時代の調査

旧石器時代としては、Ⅷ層から石器や剥片が出土し、ブロックが2か所検出された。ブロックはナイフ形石器文化期のものと細石器文化期のものと思われるが、これらの2時期をⅧ層内で分層することは困難であった。また縄文時代草創期の包含層であるⅦ層との分層も困難で、Ⅷ層より草創期の遺物も出土する状況であったことから、これら3時期の遺物は混在して出土している可能性が考えられる。

遺構（第5図～第7図）

ブロック1（第6図）

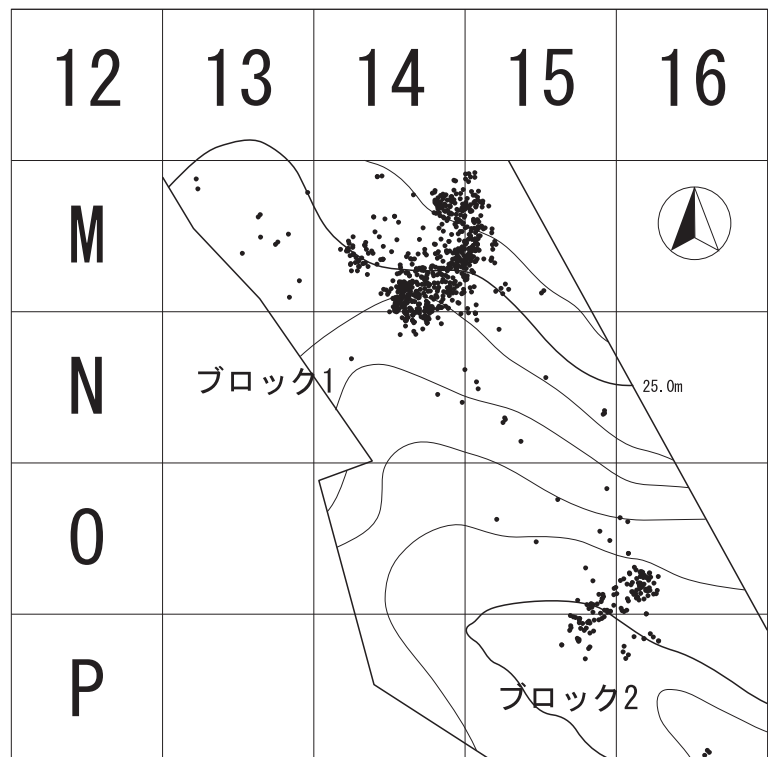
M-14区を中心に検出された。ナイフ形石器・台形石器・三稜尖頭器・スクレイパー・石核・剥片等が集中して出土している。石材は黒曜石・チャート・玉随・頁岩を主体とするものである。

ブロック2（第7図）

O・P-15・16区を中心に検出された。細石刃・細石刃核・スクレイパー・石核・剥片等が集中して出土している。石材は黒曜石・チャート・玉随・頁岩を主体とするものである。

遺物（第8図～第12図 1～39）

出土遺物については、Ⅷ層内でナイフ形石器文化



第5図 旧石器時代遺構配置図及び遺物出土状況

期と細石器文化期を分層することが困難であったことや、2時期の遺物が一部混在して出土していることから、ブロックごとに掲載するのではなく器種ごとに掲載した。

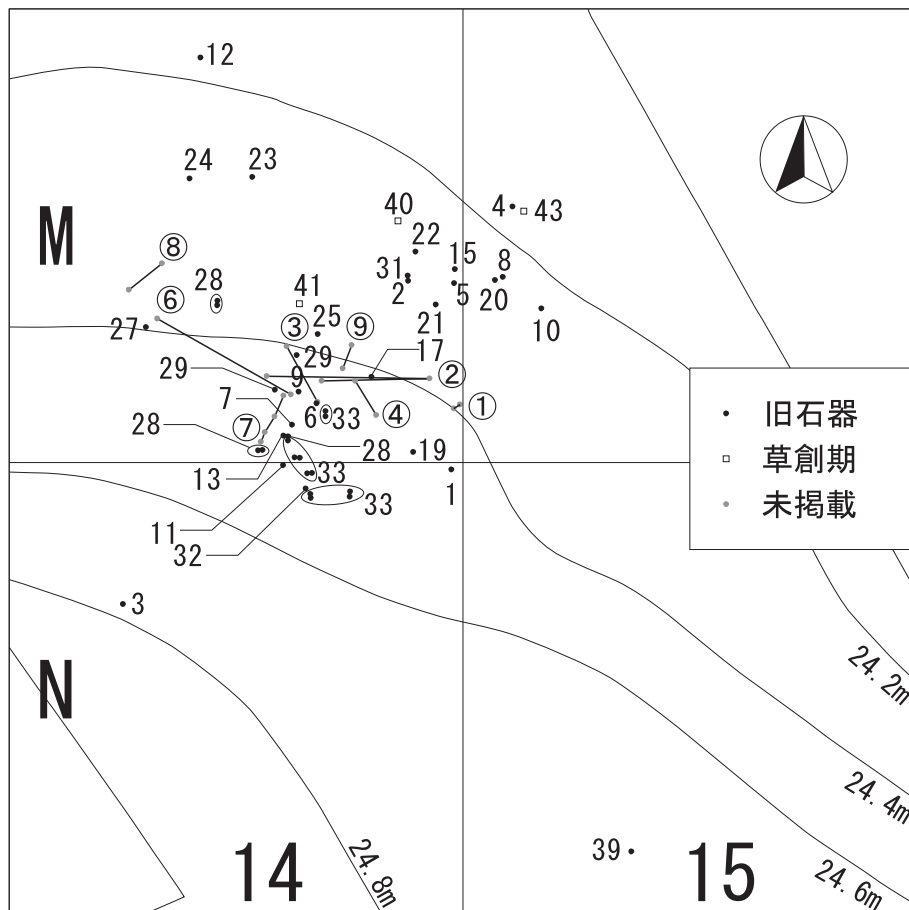
使用されている石材については、観察表の中で黒曜石を産地によりA～Dの4種類に分類したが、産地が明確でないものについては、黒曜石とだけ記載した。A～Dの産地については、縄文時代早期石器（p244）を参照されたい。

1・2はナイフ形石器である。比較的小形のものである。1はチャート製で、左側縁にブランディングを施したものである。2は桑ノ木津留産の黒曜石を使用したものである。先端部と基部は欠損している。先端部右側縁にブランディングが施される。3～11は台形石器である。全て黒曜石製である。小形のものから大形のものまで出土している。剥片の鋭利な部分を上部水平方向に用い、両側縁は細かいブランディングを施す。

12・13は三稜尖頭器である。縦長剥片を素材とし、両側面全体に整形加工を施したものである。12は黒曜石製で、13は頁岩製である。14はチャート製の楔形石器である。上下辺に剥離がみられる。

15～24はスクレイパーである。15・16・18は左側縁に二次加工が施されたものである。15は黒曜石製、16はチャート製である。17・20・22は、両端部に二次加工が施されるものである。17・20・22は日東産の黒曜石である。19はチャート製のもので、上部と左側縁に二次加工を施すものである。21は下辺部と右側縁に二次加工が施されたものである。日東産の黒曜石である。23は頁岩製の大型剥片を素材として、下辺部に二次加工を施したエンドスクレイパーである。上辺部に一部自然面が残る。24は左側縁の一部に自然面を残し、その他の周縁に二次加工を施したものである。頁岩製である。

25～27は使用痕剥片である。25の石材は玉随である。右側面に微細剥離が観察される。26は頁岩製の



第6図 旧石器時代ブロック1 遺物出土状況

ものである。左側面に微細剥離がみられる。27はチャート製である。27の右側面に使用痕が観察される。また左側面には自然面が残る。

28～33は石核である。28は3点の剥片が接合したものである。玉随製である。29-1・29-2は大型剥片の頁岩を素材とした石核で、礫皮面を打面にして剥片を剥いている。30は上牛鼻産の黒曜石を素材とした石核である。平坦な節理面を打面にして小型の縦長剥片を剥いている。31は日東産の黒曜石を素材としたもので、求心状に剥離を行っている。32・33は玉随を素材とした石核である。28を含め同一母岩の可能性も推測される。33は5点が接合したものである。

34～36は細石刃である。石材は34が玉随製で、他はチャート製である。3点とも両端部が、欠損している。

37～39は細石刃核である。37・39は上牛鼻産の黒曜石を素材としたもので、38はチャート製である。

平坦面を打点として細石刃を剥ぎ取っている。37は裏面に、39は左側面に風化した自然面を残す。

なお、図化しなかったが接合資料として①～⑤、⑧・⑨を写真図版30に掲載した。①～⑤は頁岩製、⑧・⑨は玉随製である。

第5節 縄文時代の調査

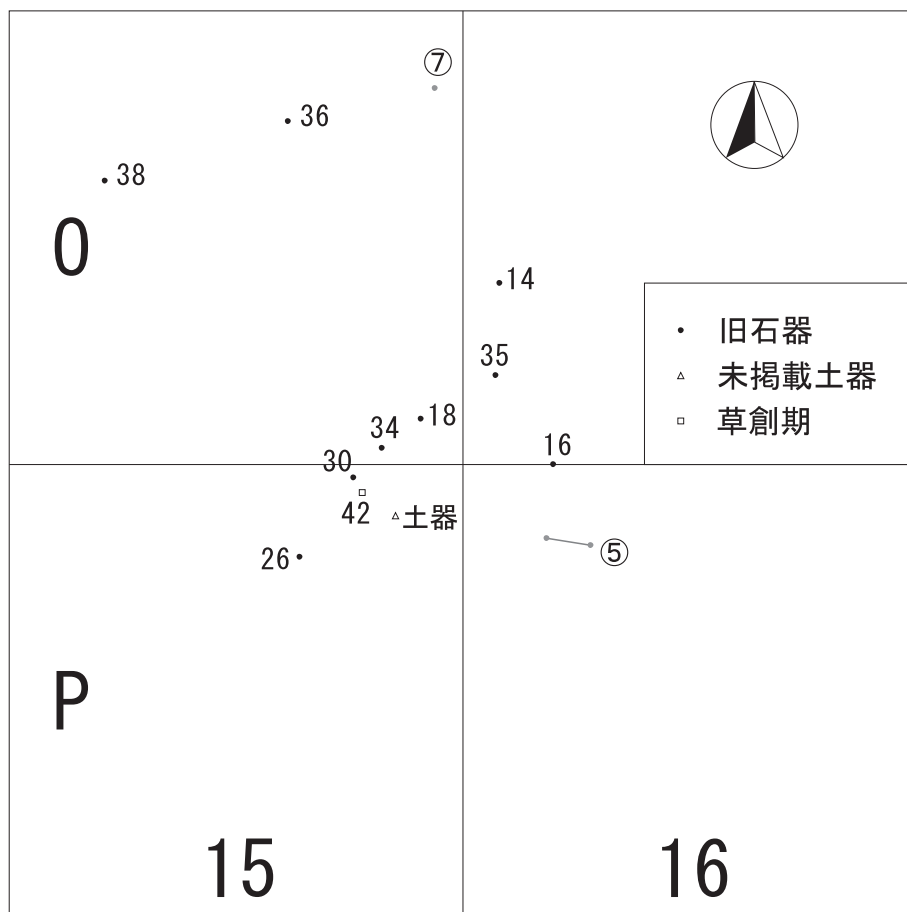
1 縄文時代草創期

縄文時代草創期は、遺構は検出されず遺物も土器2点、石鏃2点、磨石1点と非常に少ない。

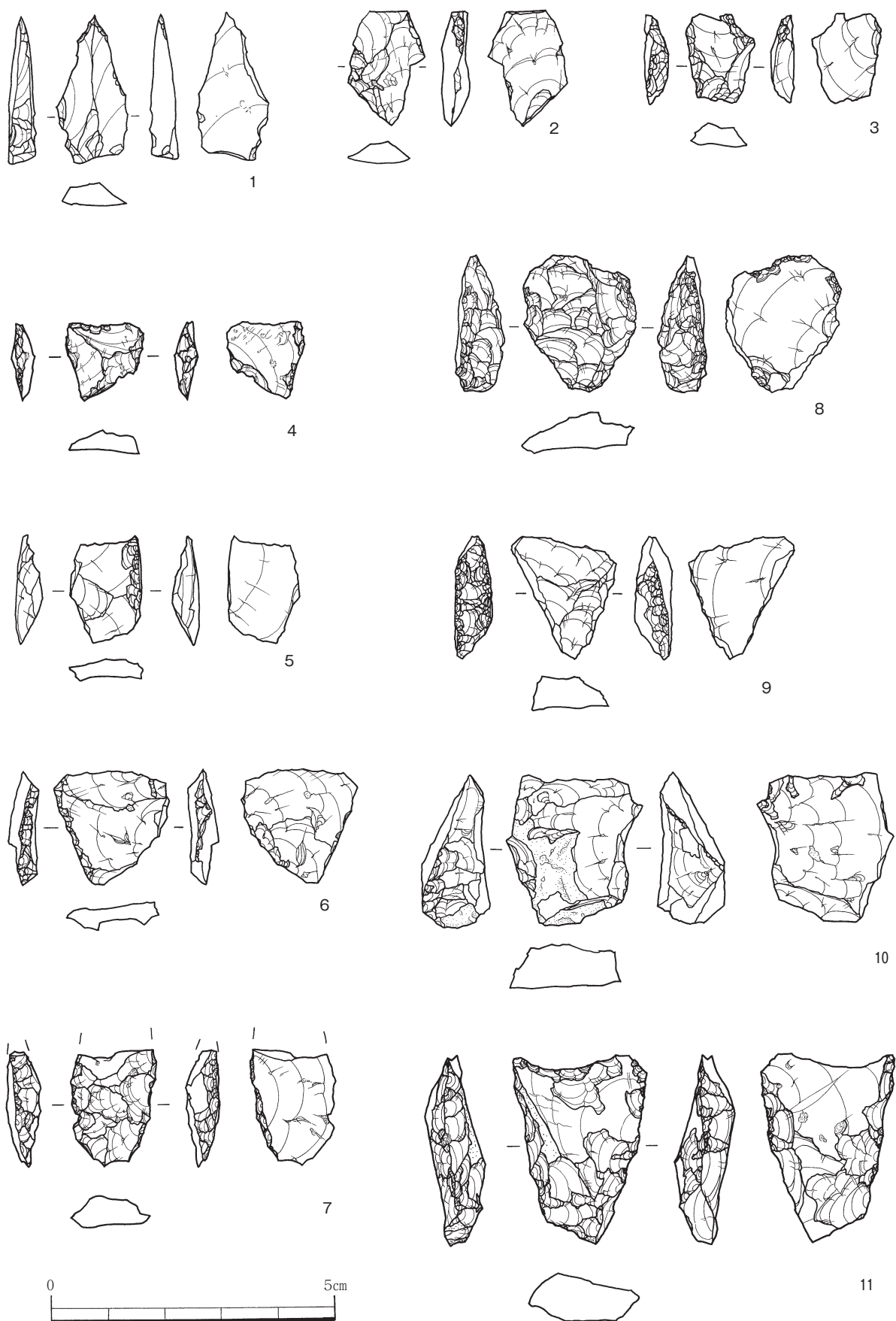
これらの出土遺物は前述の旧石器時代細石刃文化期の終末期に重なる資料の可能性も考えられるが、本遺跡では縄文時代草創期に相当するⅦ層と旧石器時代に相当するⅧ層との区別が困難であったため、草創期の出土遺物として取り扱うこととした。

遺物（第13図 40～43）

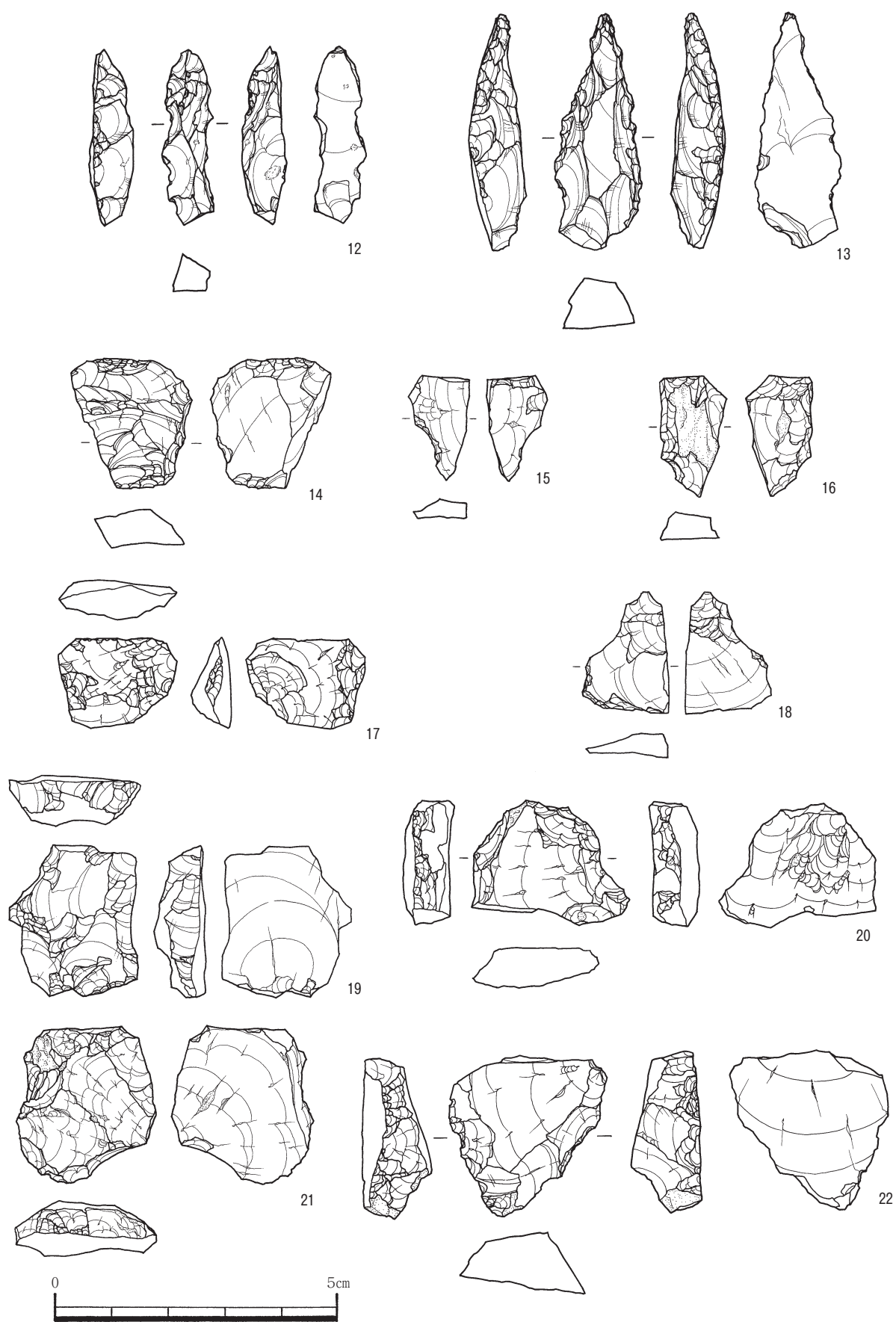
土器はM-14、P-15区から1点ずつ出土した。焼成不良のため脆く、表面も摩滅が激しい。2点の



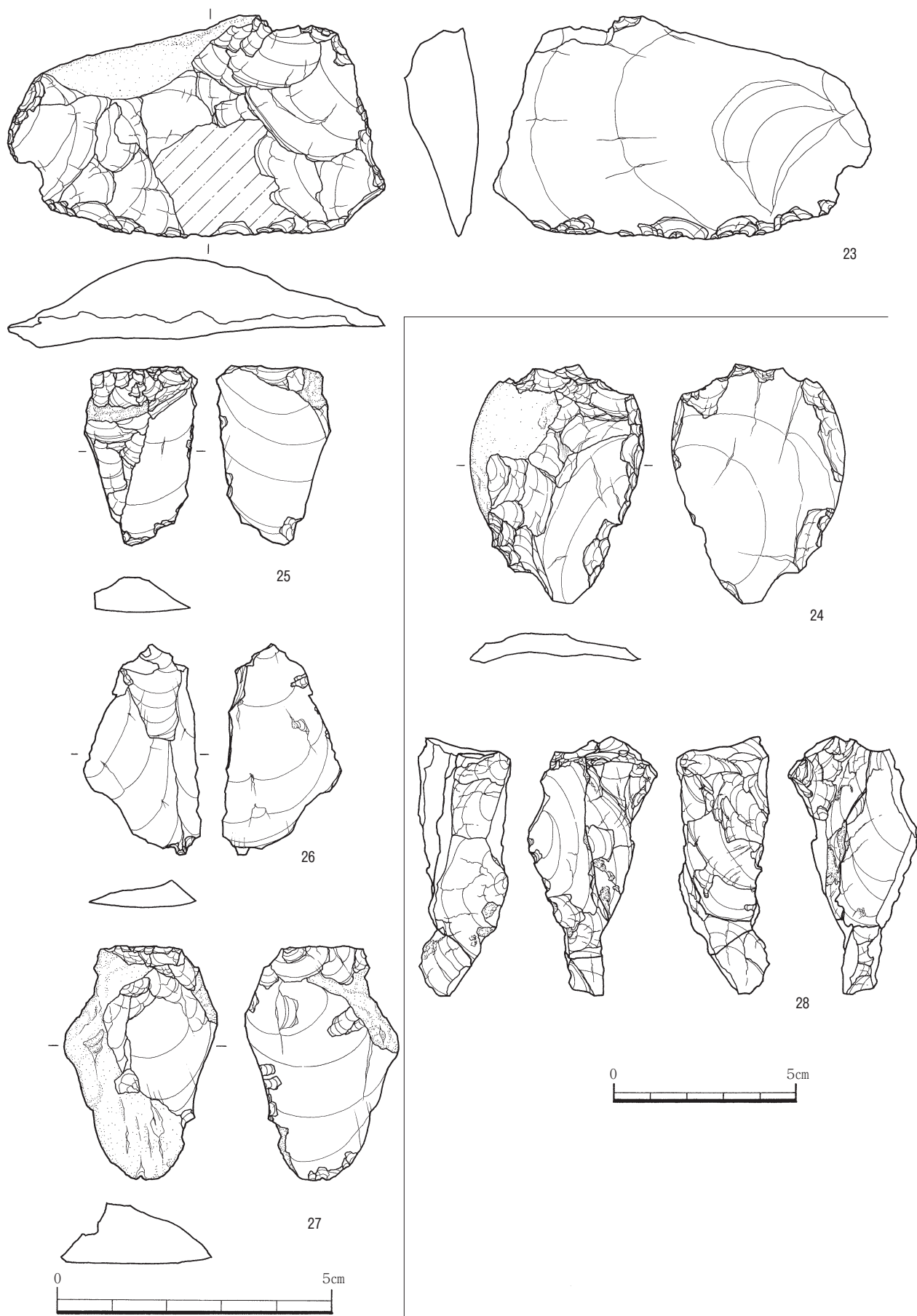
第7図 旧石器時代ブロック2遺物出土状況



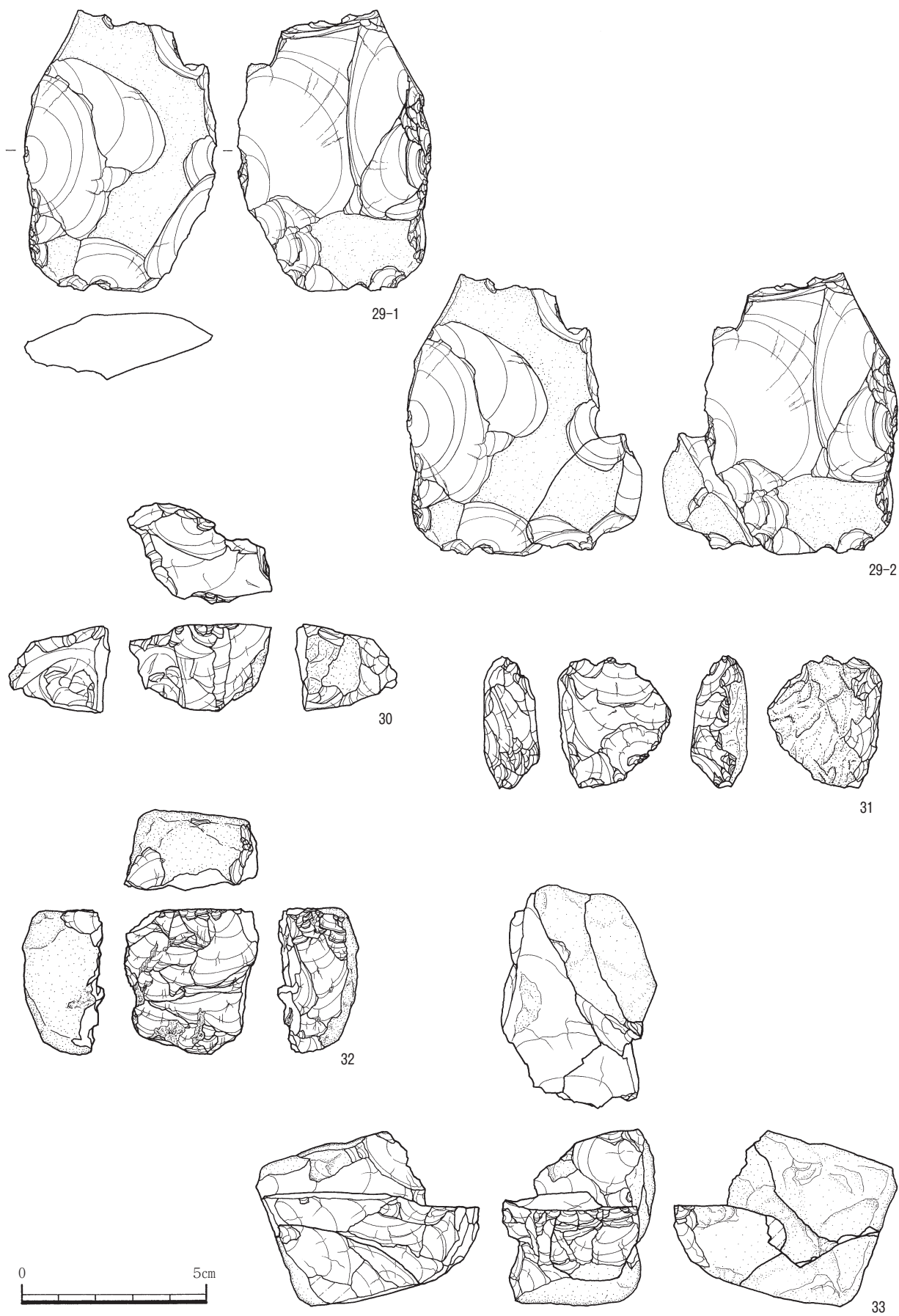
第8図 旧石器1



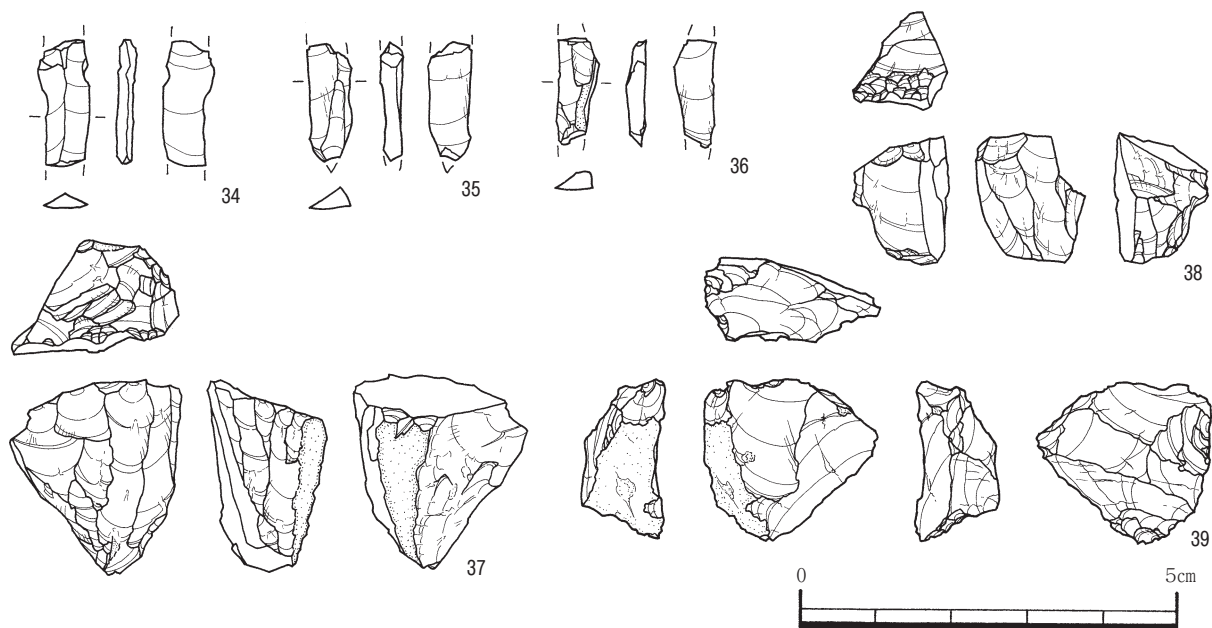
第9図 旧石器2



第10図 旧石器3



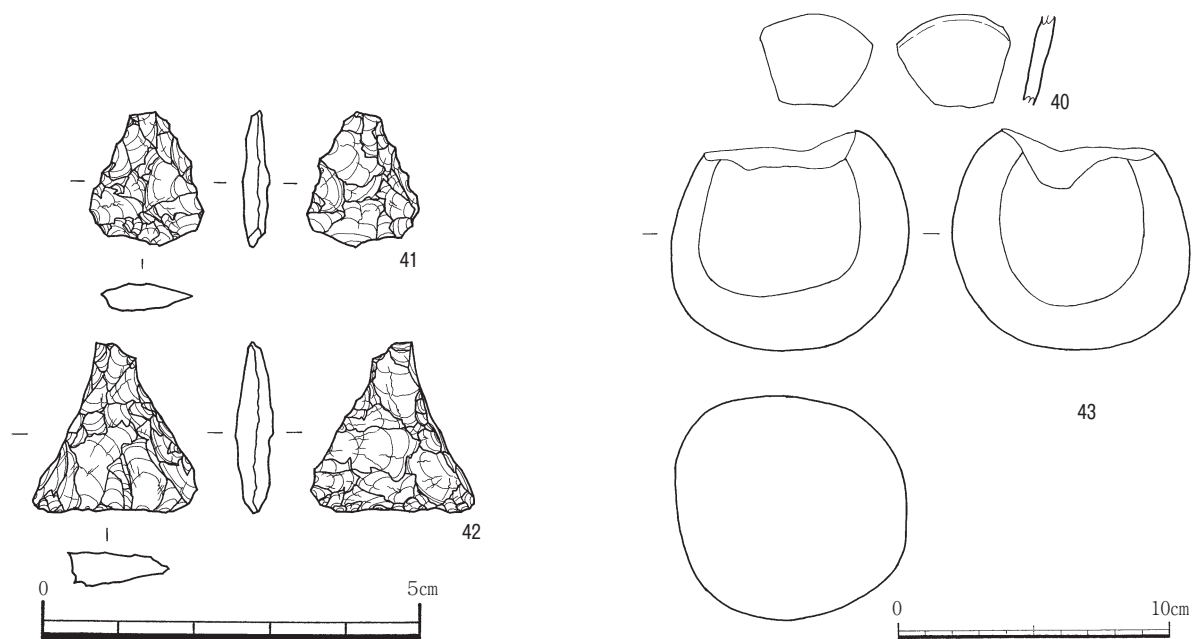
第11図 旧石器4



第12図 旧石器5

旧石器時代石器観察表

挿図 番号	掲載 番号	注記番号	層	器種	出土区	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
第8図	1	666	VIII	ナイフ型石器	N-14	チャート	2.6	1.3	0.5	1.3	
	2	8325	VIII	ナイフ型石器	M-14	黒曜石D	2.1	1.4	0.5	0.9	
	3	7941	VIII	台形石器	N-14	黒曜石D	1.7	1.3	0.6	0.6	
	4	8170	VIII	台形石器	M-15	黒曜石	1.4	1.4	0.5	0.5	
	5	8309	VIII	台形石器	M-14	黒曜石A	1.9	1.2	0.6	0.9	
	6	8465	VIII	台形石器	M-14	黒曜石A	2.1	2.1	0.5	1.5	
	7	8452	VIII	台形石器	M-14	黒曜石	(2.1)	1.5	0.6	(1.7)	
	8	8198	VIII	台形石器	M-15	黒曜石	2.5	2.1	0.7	2.9	
	9	8463	VIII	台形石器	M-14	黒曜石	2.3	1.9	0.7	1.8	
	10	8239	VIII	台形石器	M-15	黒曜石A	2.7	2.3	0.8	5.7	
	11	8592	VIII	台形石器	N-14	黒曜石C	3.4	2.4	1.1	5.7	
第9図	12	8523	VIII	三稜尖頭器	M-14	黒曜石C	3.2	0.8	0.8	1.8	
	13	8011	VIII	三稜尖頭器	M-14	頁岩	4.2	1.6	1.0	5.4	
	14	8803	VIII	楔形石器	O-15	チャート	2.3	2.2	0.6	4.0	
	15	8316	VIII	スクレイパー	M-14	黒曜石	1.8	1.1	0.3	0.6	
	16	8757	VIII	スクレイパー	P-16	チャート	2.1	1.2	0.5	1.4	
	17	8373	VIII	スクレイパー	M-14	黒曜石A	1.7	2.1	0.7	1.7	
	18	8705	VIII	スクレイパー	O-15	チャート	2.1	1.5	0.5	1.6	
	19	8633	VIII	スクレイパー	M-14	チャート	2.7	2.2	0.9	5.3	
	20	8199	VIII	スクレイパー	M-15	黒曜石A	4.3	2.8	0.8	5.0	
	21	8304	VIII	スクレイパー	M-14	黒曜石A	2.0	2.5	1.0	5.8	
第10図	22	8320	VIII	スクレイパー	M-14	黒曜石A	2.9	2.9	1.1	7.3	
	23	8587	VIII	スクレイパー	M-14	頁岩	3.8	6.9	1.4	31.4	
	24	8585	VIII	スクレイパー	M-14	頁岩	6.5	4.7	0.6	22.2	
	25	8389	VIII	使用痕剥片	M-14	玉随	3.3	2.0	1.6	4.7	
	26	8741	VIII	使用痕剥片	P-15	黒曜石C	3.8	2.1	0.5	2.9	
	27	8833	VIII	使用痕剥片	M-14	チャート	4.3	2.8	1.1	12.4	
第11図	28	8561・8522 8536	VIII	石核	M-14	玉随	7.0	2.9	2.5	49.6	
	29	8476・8499	VIII	石核	M-14	頁岩	7.6	6.3	1.8	115.6	29-1・29-2
	30	8717	VIII	石核	P-15	黒曜石C	2.4	3.9	2.7	20.1	
	31	8325	VIII	石核	M-14	黒曜石A	3.6	3.1	1.5	14.3	
	32	8610	VIII	石核	N-14	玉随	3.9	3.6	2.2	37.1	
第12図	33	8627・8609 8611・8433 8446	VIII	石核	M・N-14	玉随	4.8	4.1	5.8	111.3	
	34	6360	VIII	細石刃	O-15	玉随	(1.7)	0.7	0.3	(0.5)	
	35	6724	VIII	細石刃	O-16	チャート	(1.6)	0.6	0.3	(0.2)	
	36	6815	VIII	細石刃	O-15	チャート	(1.5)	0.6	0.3	(0.2)	
	37	1080	VIII	細石刃核	I-14	黒曜石C	2.6	2.3	1.6	0.9	
	38	6612	VIII	細石刃核	O-15	チャート	2.6	1.3	1.3	3.1	
	39	2264	VIII	細石刃核	N-15	黒曜石C	2.2	2.3	1.1	4.0	



第13図 縄文時代草創期 出土遺物

縄文時代草創期土器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	部位	色調		胎土				焼成	調整		備考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他		外面	内面	
第13図	40	M-14	VIII	胴部	黒褐	暗褐	○	○			不良	ナデ?	ナデ?	
	未掲載	P-15	VIII	胴部	にぶい橙	灰褐	○	○	○		不良	ナデ?	ナデ?	

縄文時代草創期石器観察表

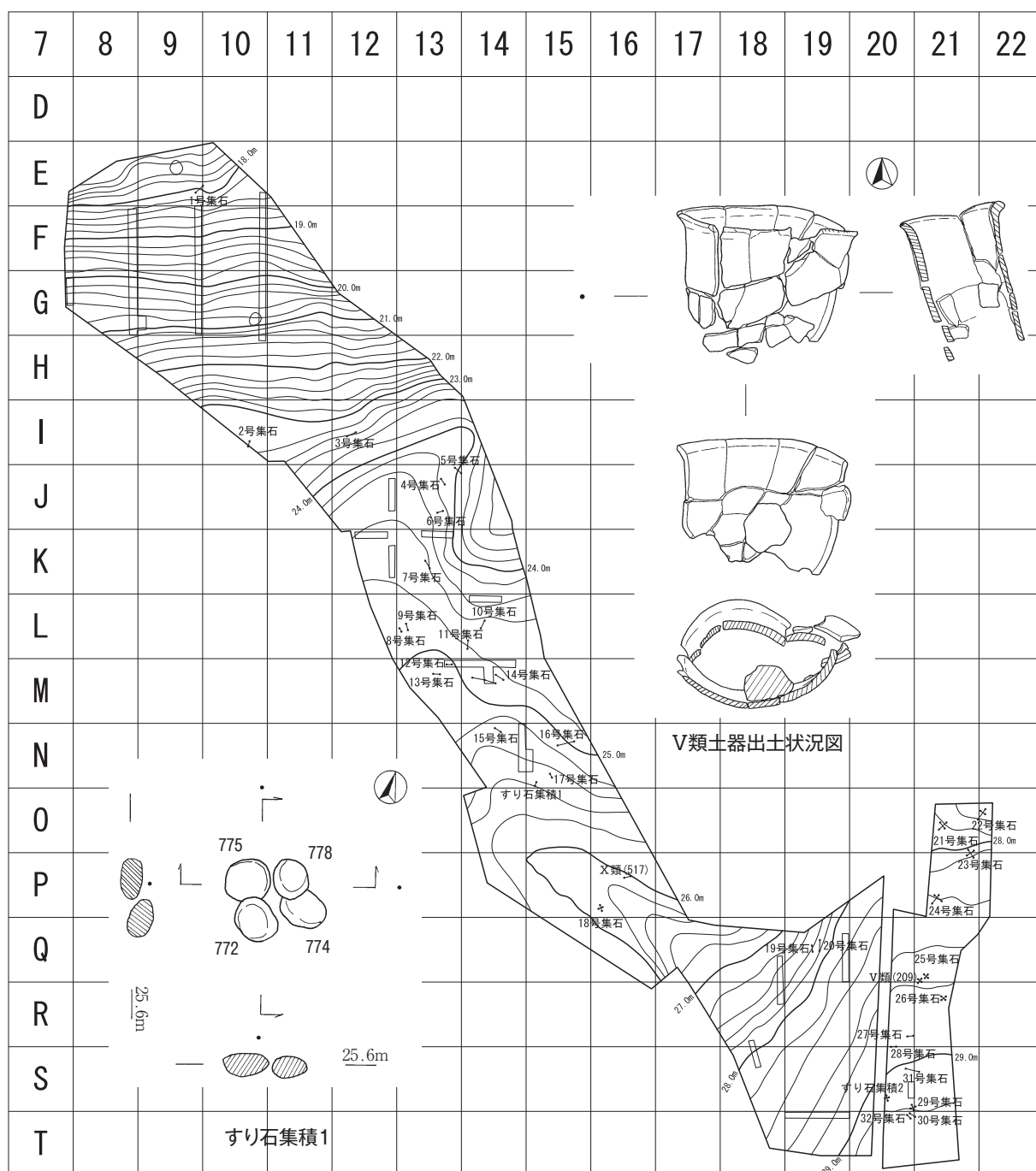
挿図 番号	遺物 番号	注記番号	層	器種	出土区	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
第13図	41	8483	VIII	石鏃	M-14	玉随	1.9	1.5	0.4	0.9	C-a-a
	42	8720	VIII	石鏃未製品	P-15	玉随	2.5	2.2	0.5	1.7	-
	43	8167	VIII	磨石	M-15	安山岩	7.5	8.7	8.2	900	

うち1点は実測に絶えうる大きさではなかったため、1点のみを掲載した。

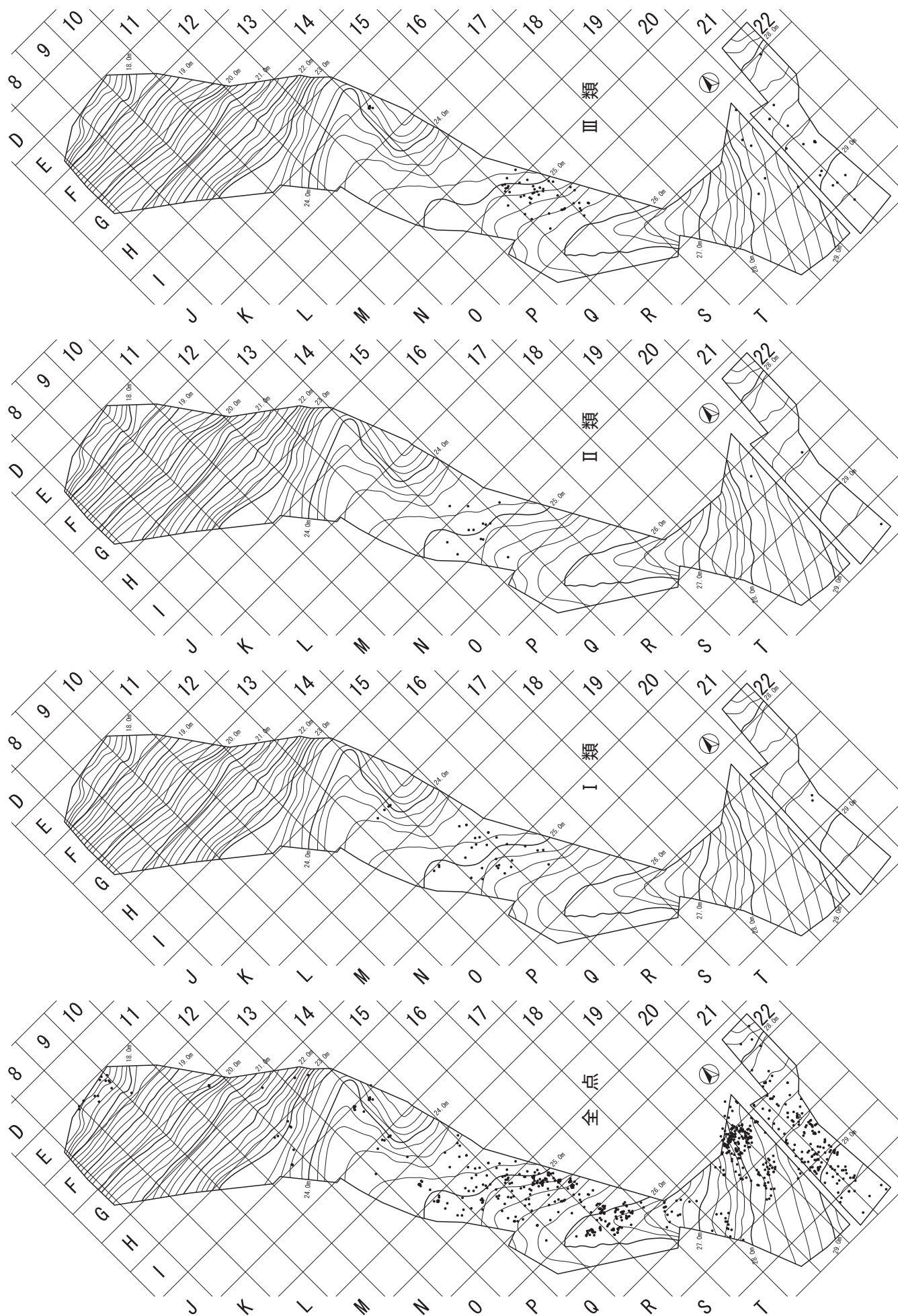
40は胴部である。内面は煤付着のためか、黒褐色を呈するが、摩滅が激しいため詳細は不明である。41・42は石鏃である。側稜部の挟りが浅いため、中央部の稜は見られない。基部は挟りがなく、粗いつくりである。43は磨石である。一部欠損しており、両面に磨り面を有する。

2 縄文時代早期

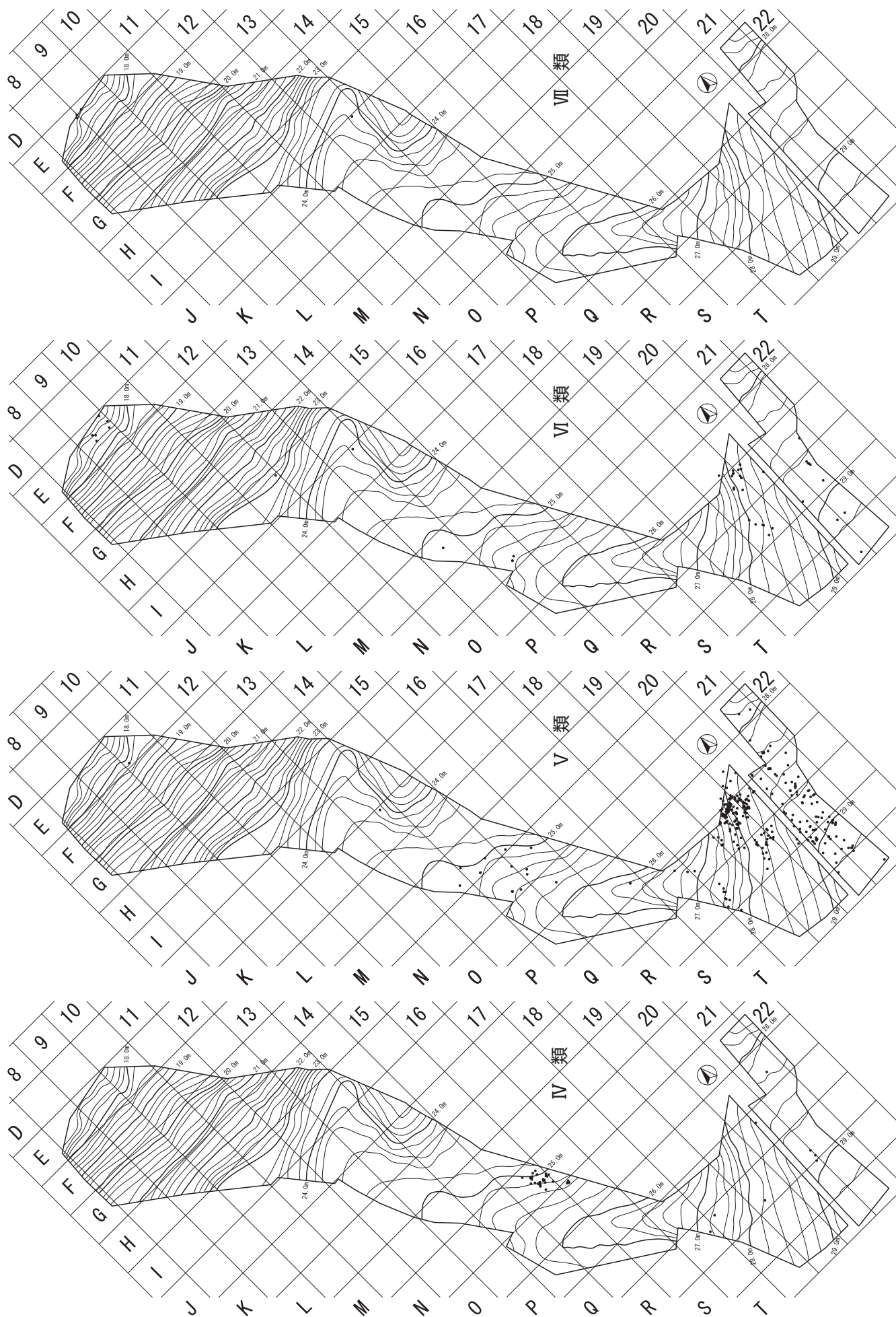
縄文時代早期は、本遺跡の中心となる時代で、遺構・遺物ともに遺跡の中央と北側に集中しており、遺構数、遺物量ともに非常に多い。遺構は、集石遺構が36基、石器（石鏃）製作跡と思われるブロックが1か所検出されている。遺物は、早期前葉から後葉に相当するI類土器からVII類土器が出土している。石器も、環状石斧・有溝砥石と思われる特殊な石器をはじめ、石鏃・石斧・磨石・石皿等が出土している。



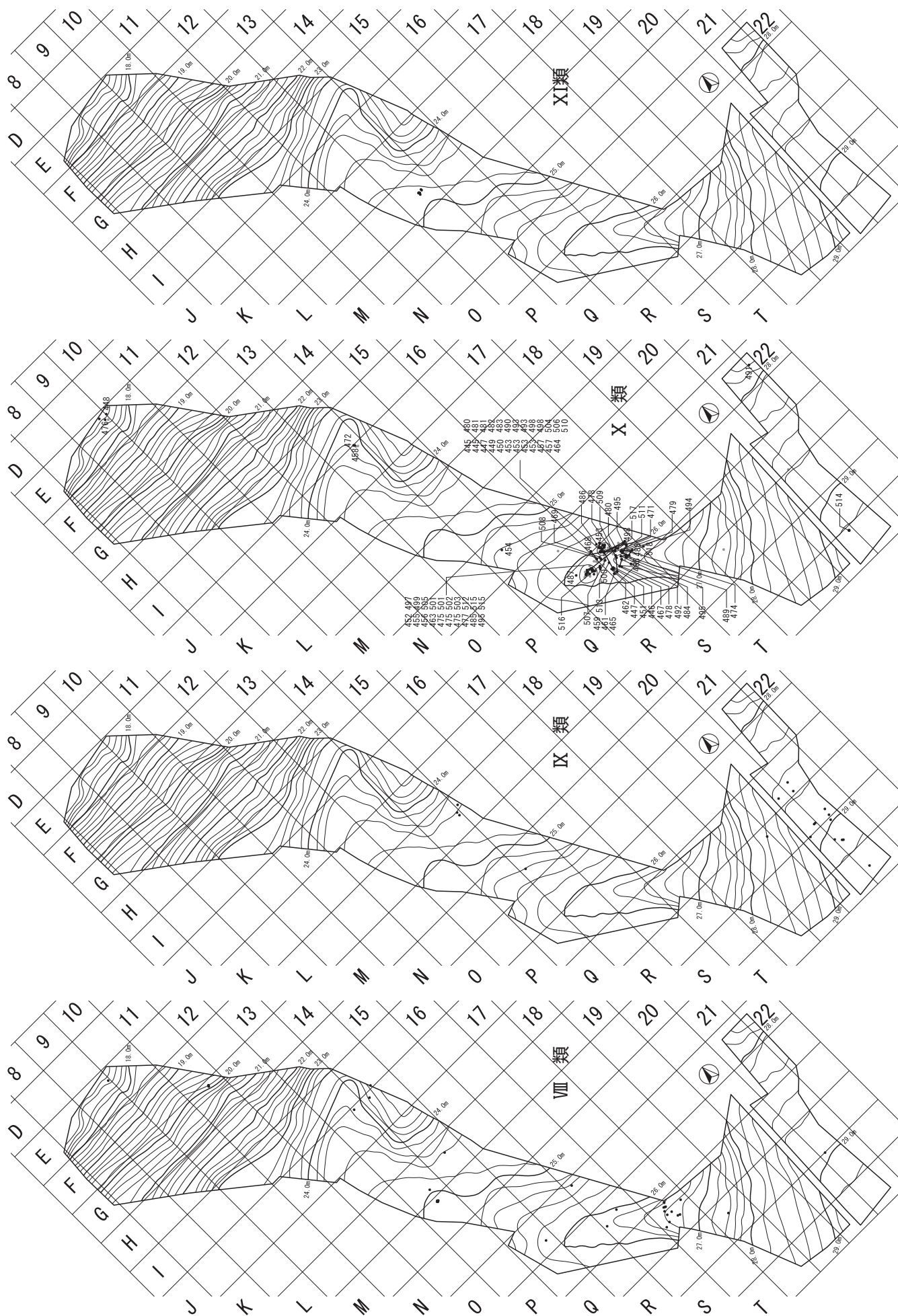
第14図 縄文時代早期 遺構配置図及び遺物出土状況図



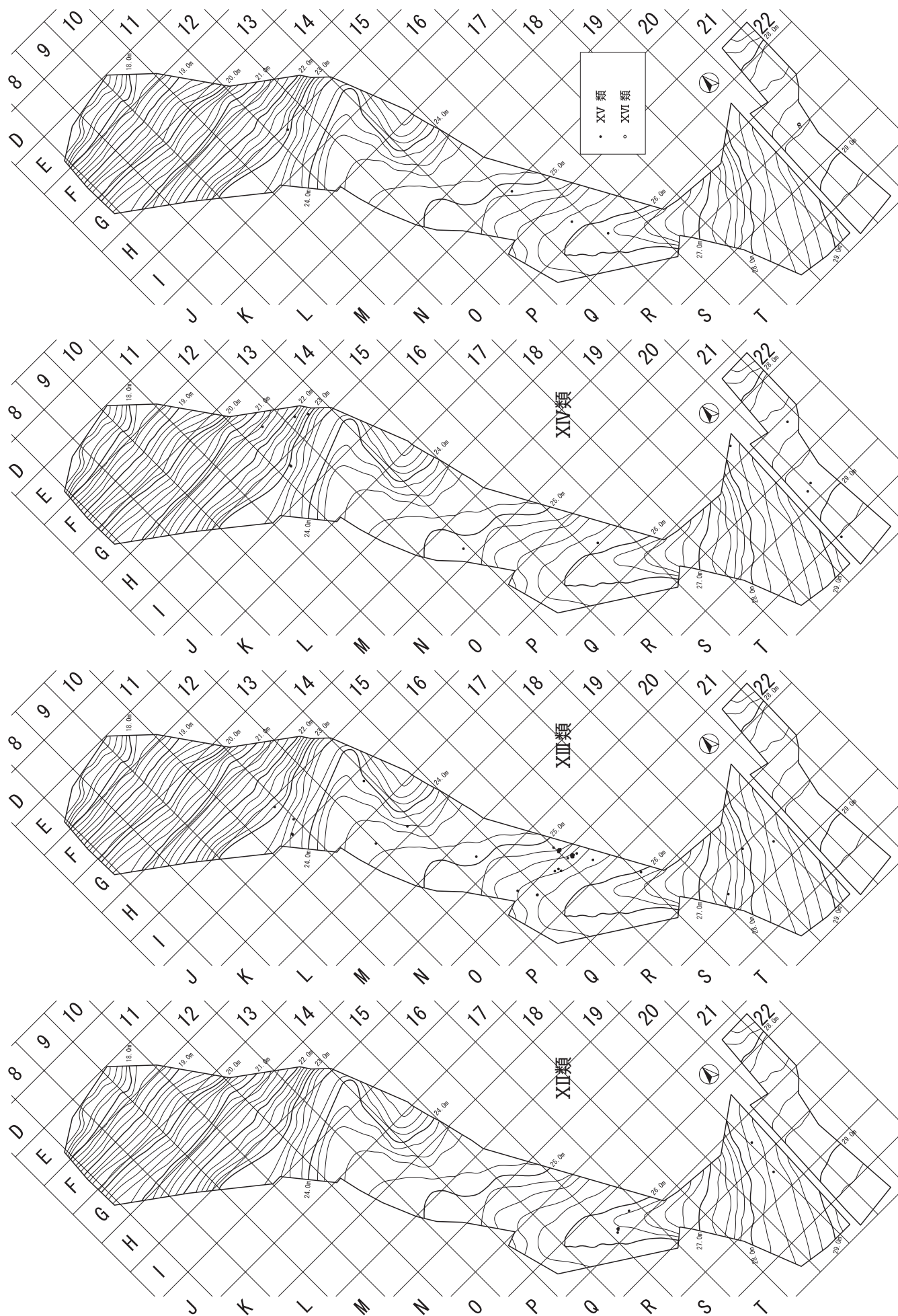
第15図 縄文時代早期 土器出土状況 1



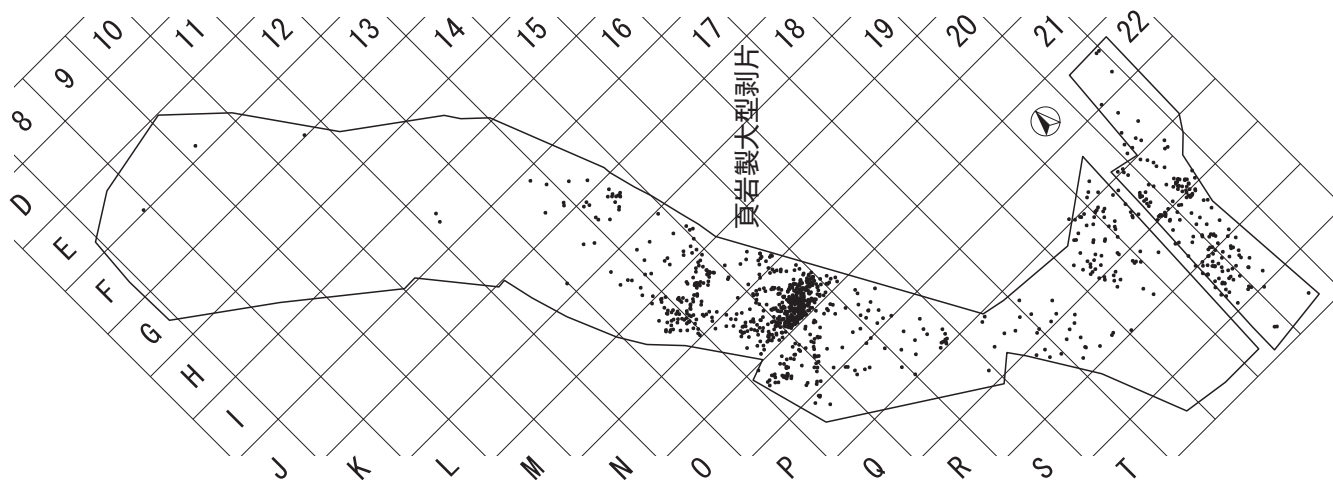
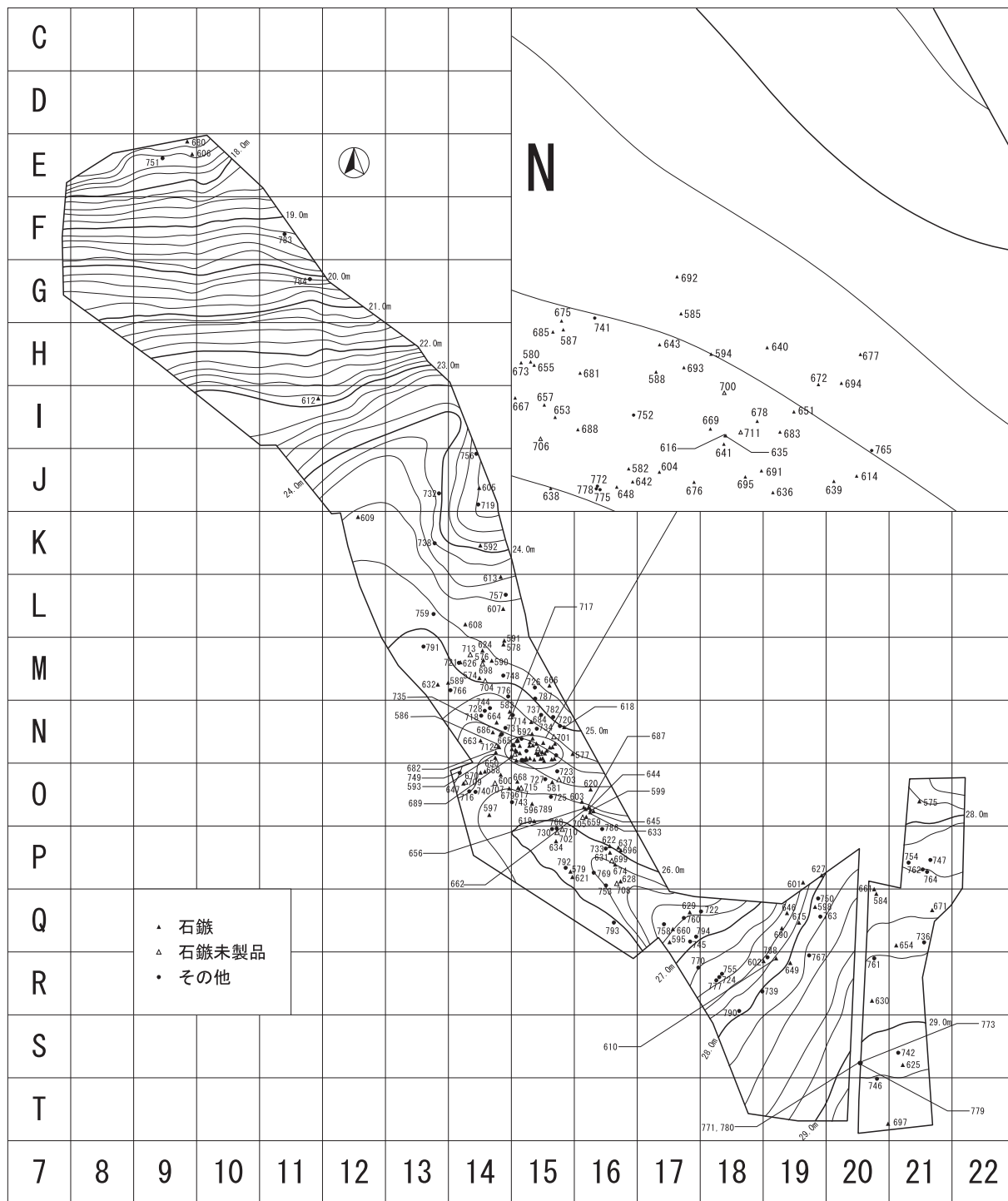
第16図 縄文時代早期 土器出土状況2



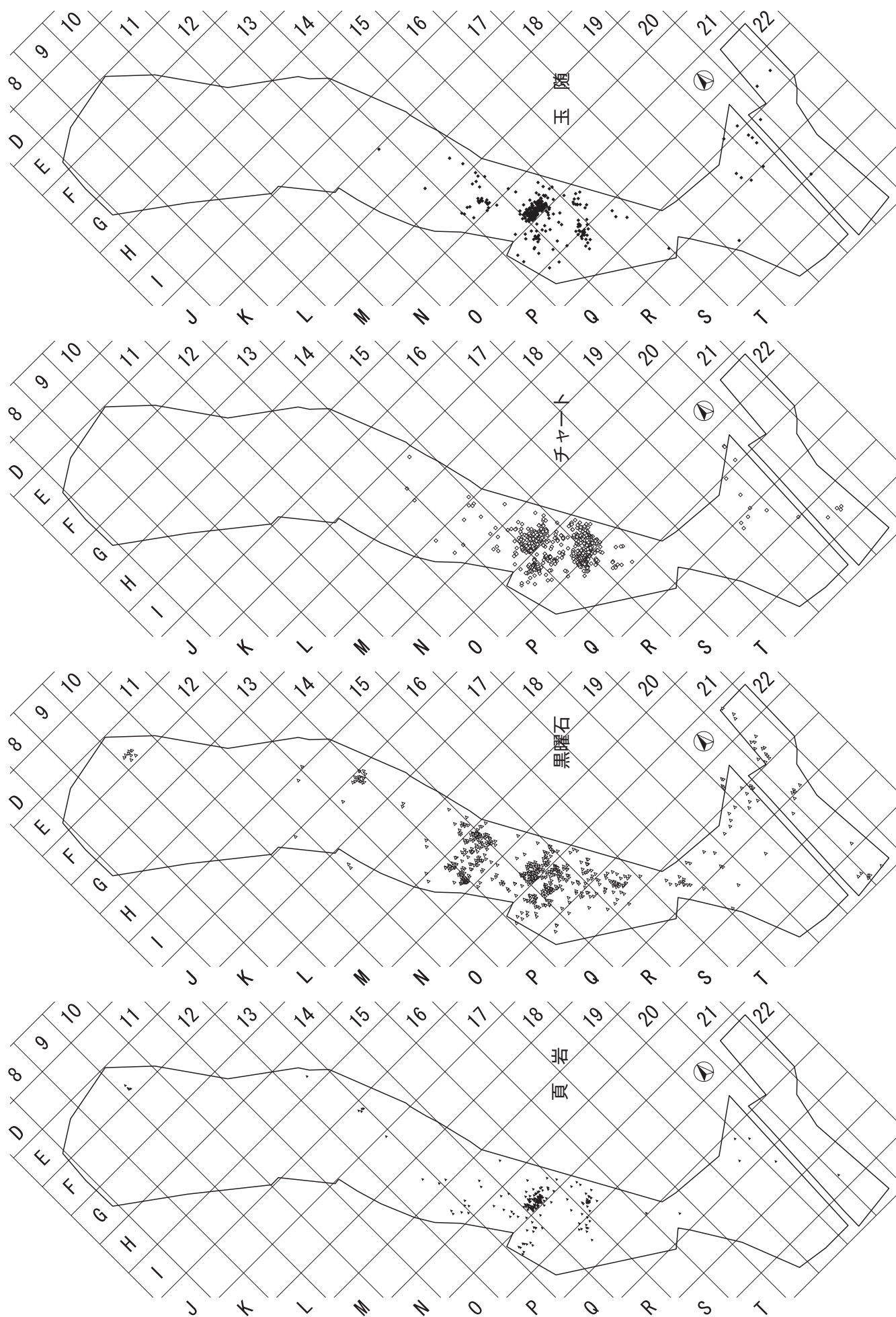
第17図 縄文時代早期 土器出土状況3



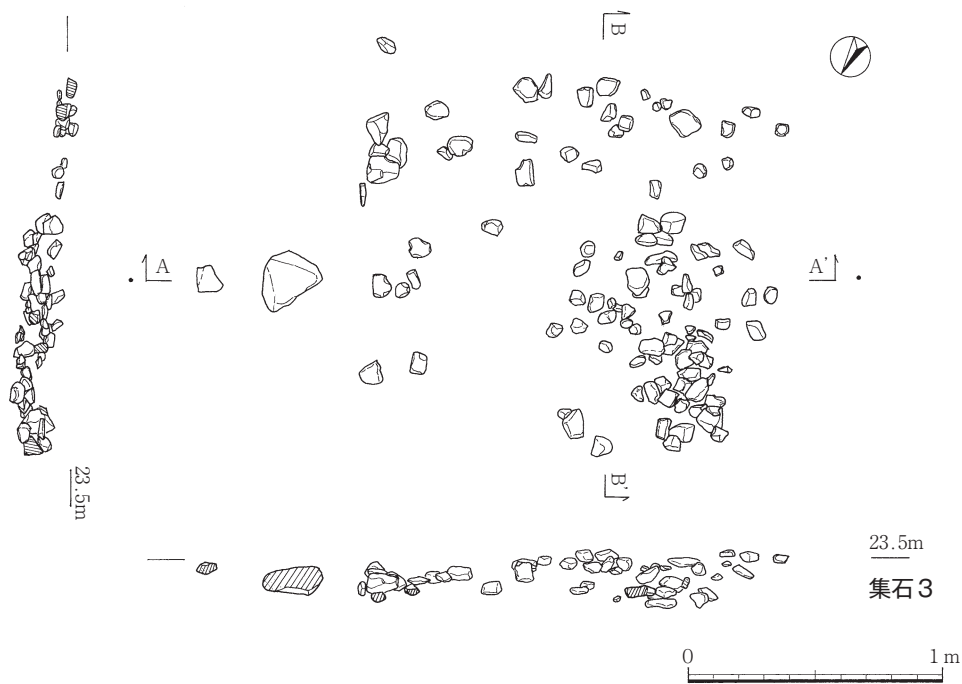
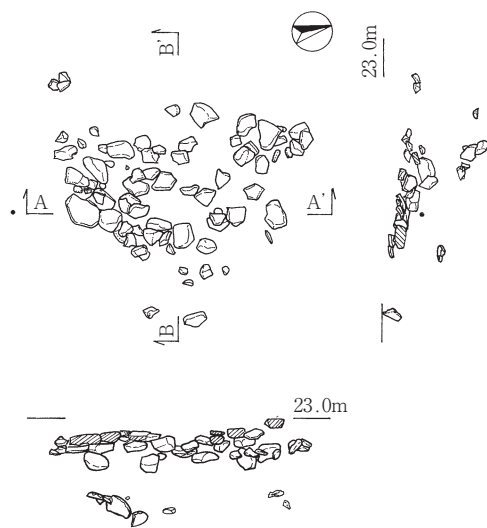
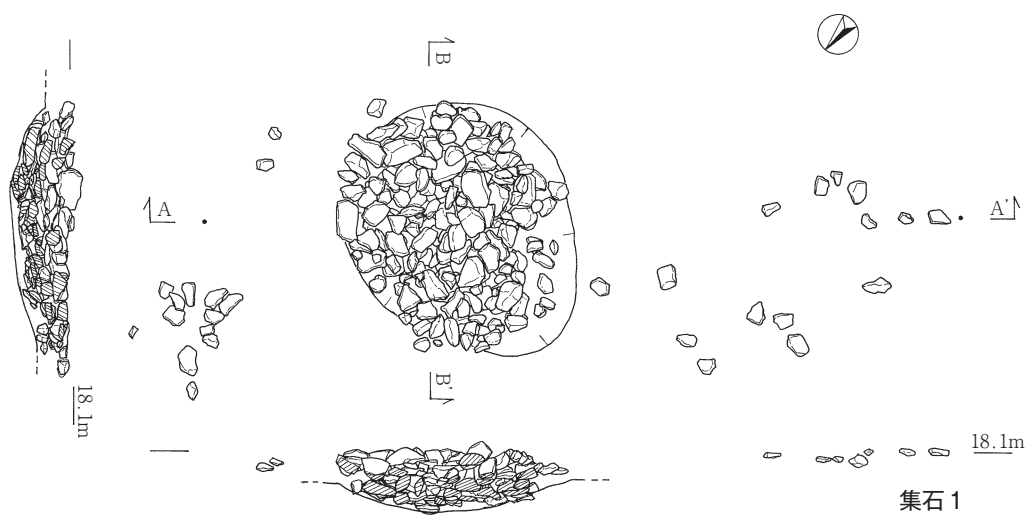
第18図 縄文時代早期 土器出土状況 4



第19図 縄文時代早期 石器出土状況及び頁岩製大型剥片出土状況



第20図 石材別 小型剥片出土状況



第21図 集石遺構 1

(1) 遺構 (第21図～第31図 集石 1～集石36)

縄文時代早期では、集石が36基検出された。

集石1

E-9・10区で検出された。礫数327である。10cm以上の礫を多用している。密集度が高く掘り込みも確認された。

集石2

I-10区で検出された。礫数75である。礫は少量であるが密集している。

集石3

I-12区で検出された。礫数107である。広範囲にわたり礫が散在している。

集石4

J-13区で検出された。礫数137である。密集度は高い。

集石5

J-13区で検出された。礫数62である。中心部で礫の密集が見られるが全体に散在した状態である。

集石6

J-13区で検出された。礫数57である。礫は少量であるが密集している。

集石7

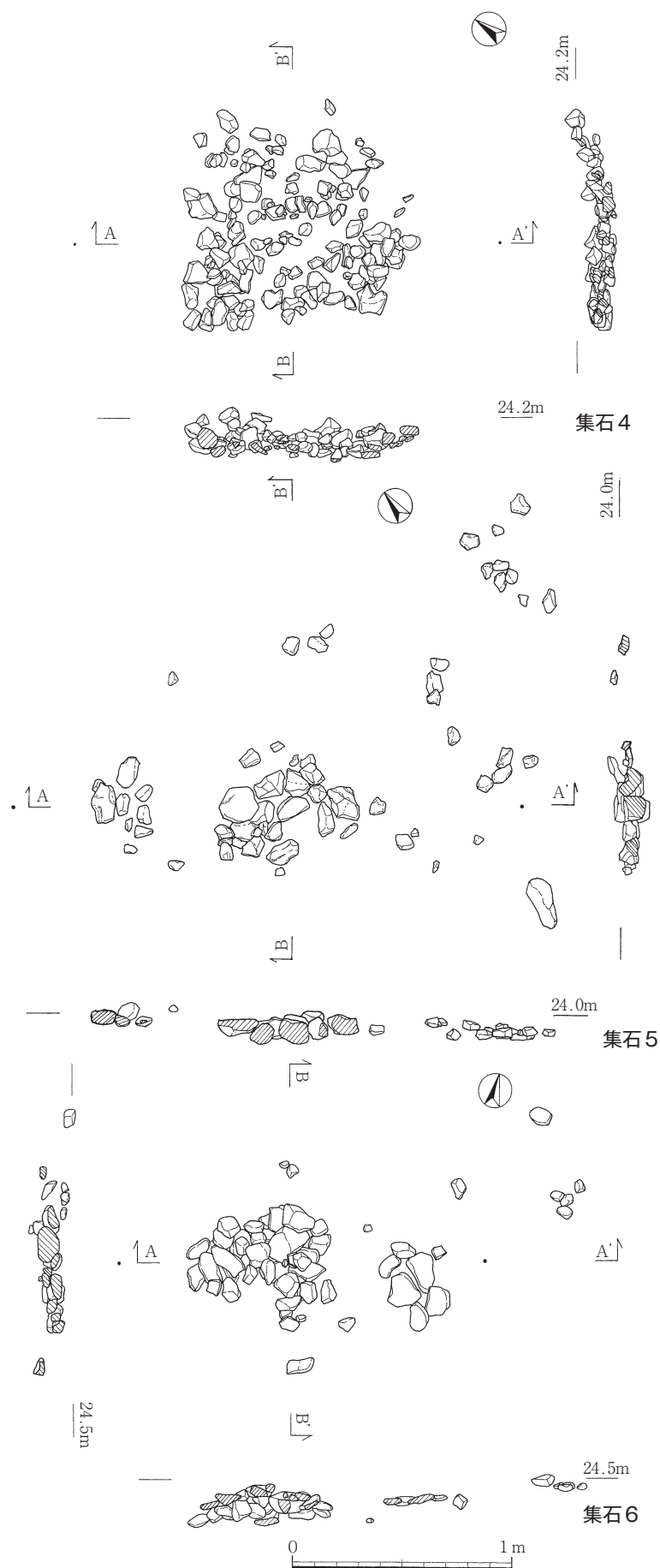
K-13区で検出された。礫数123である。10cm以内の礫を多用しており密集度は高い。

集石8

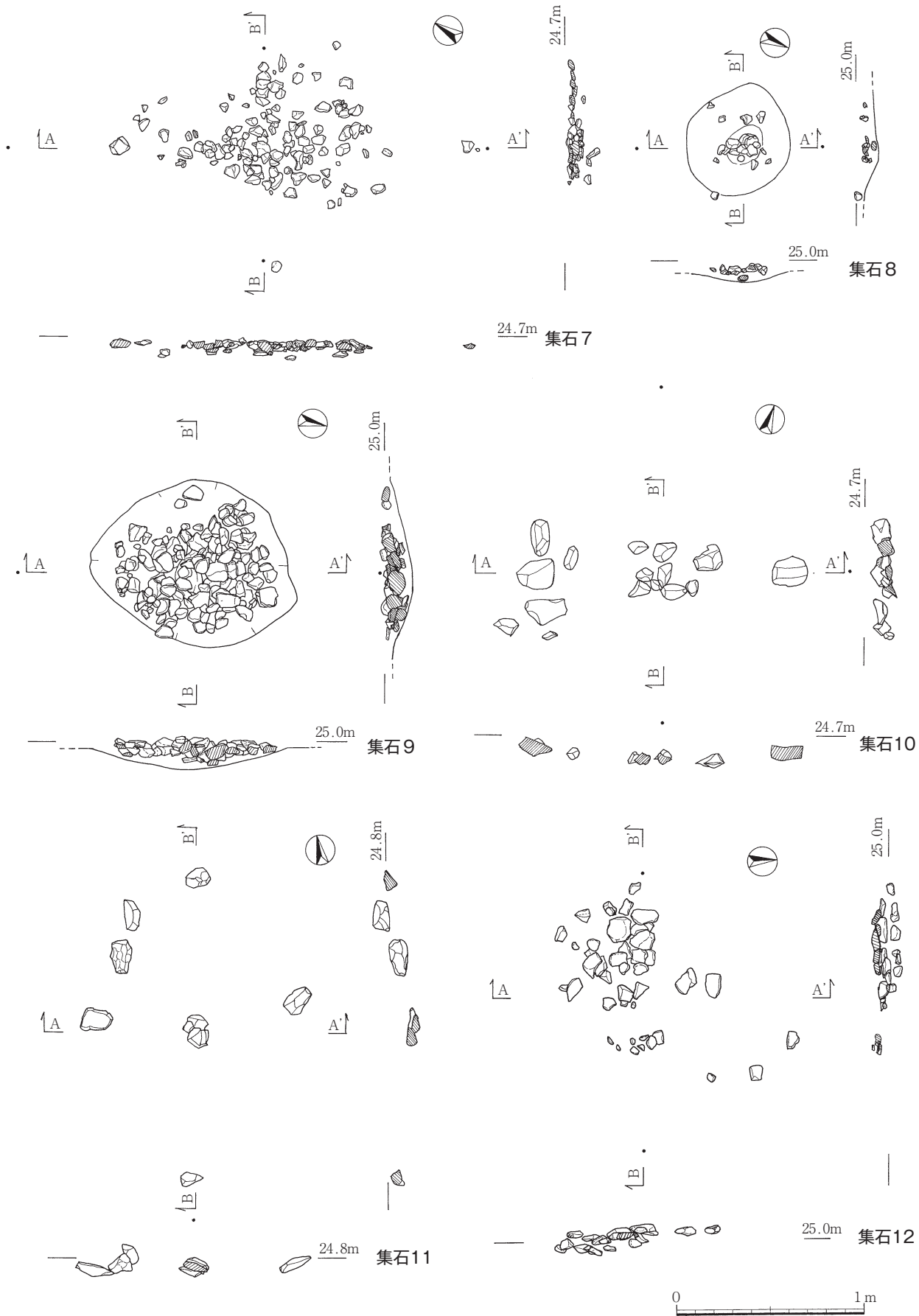
L-13区で検出された。礫数20である。礫は少量であるが比較的密集している。掘り込みが確認できた。

集石9

L-13区で検出された。礫数145である。礫の密集度が高く掘り込みが確認できた。



第22図 集石遺構2



第23図 集石遺構3

集石10

L-14区で検出された。礫数16である。残存する礫も少量でまとまりに欠ける。

集石11

L-14区で検出された。礫数8である。礫は少量でまとまりに欠ける。

集石12

M-13区で検出された。礫数45である。礫は少量であるが比較的密集している。

集石13

M-13区で検出された。礫数80である。礫は西側で密集しているが東側に散在している。浅い掘り込みが確認された。

集石14

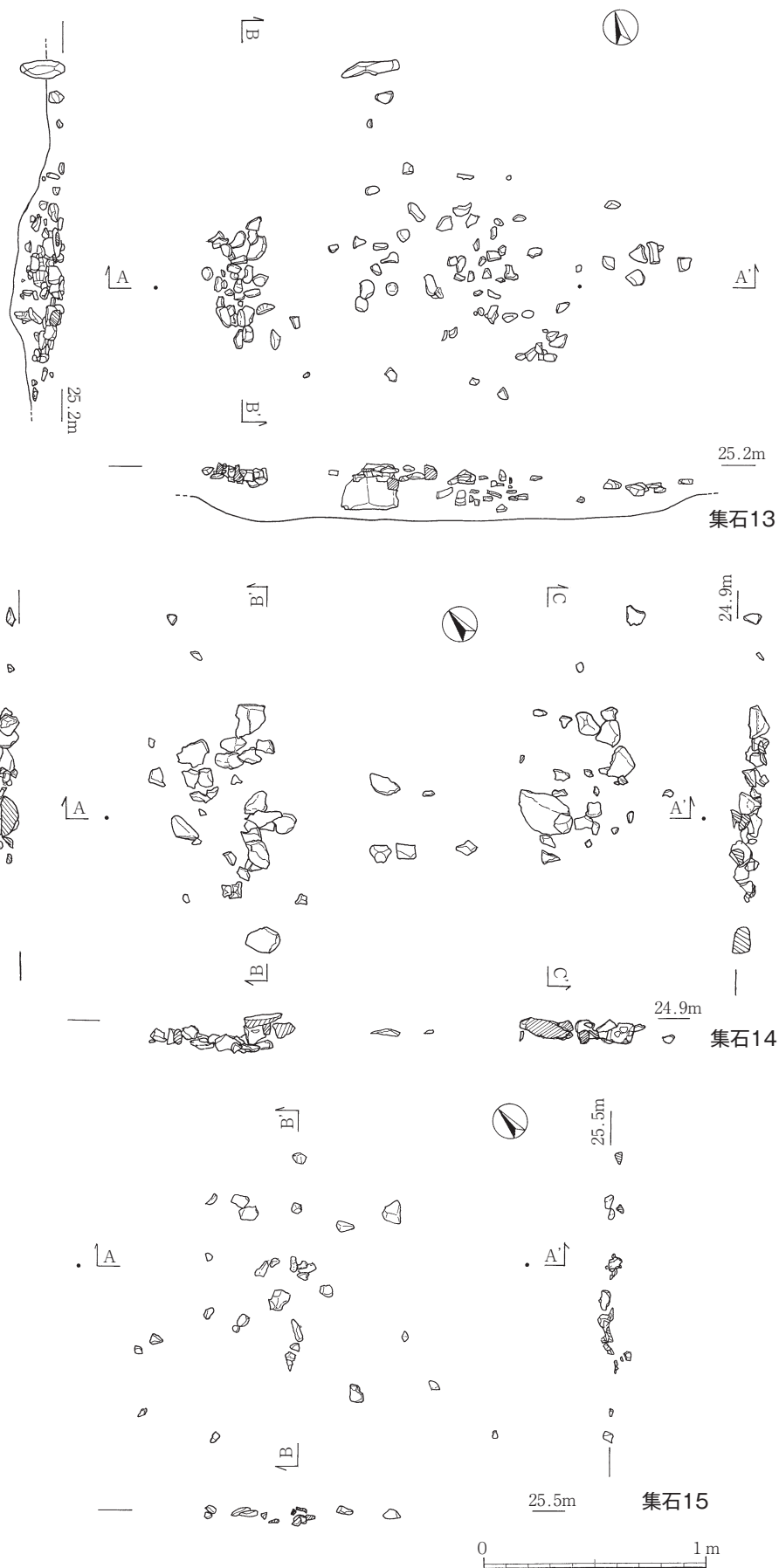
M-14区で検出された。礫数67である。範囲内の両端に礫の密集が見られる。

集石15

N-14区で検出された。礫数29である。礫は少量でありまとまりに欠ける。

集石16

N-15区で検出された。礫数211である。礫が長径約4 m50cm短径約3 mの広範囲に散在している。礫の密集度は低い。



第24図 集石遺構4

集石17

N-15区で検出された。礫数35である。10cmを超える礫を多用しているがややまとまりに欠ける。

集石18

P-16区で検出された。礫数56である。礫は少量であるが比較的密集している。土器片が3点出土し

ている。

集石19

Q-19区で検出された。礫数100である。20cmを超える礫もあるが、ほとんどが小礫である。密集度は高い。石坂式土器の破片が10点出土した。



第25図 集石遺構5

集石20

Q-19区で検出された。礫数100である。中心部から南側にかけてやや密集している。北側周辺部はまとまりに欠ける。石坂式土器の破片が5点出土した。

集石21

O-21区で検出された。礫数454である。10cm以内の小礫を多用している。礫の密集度は高い。掘り

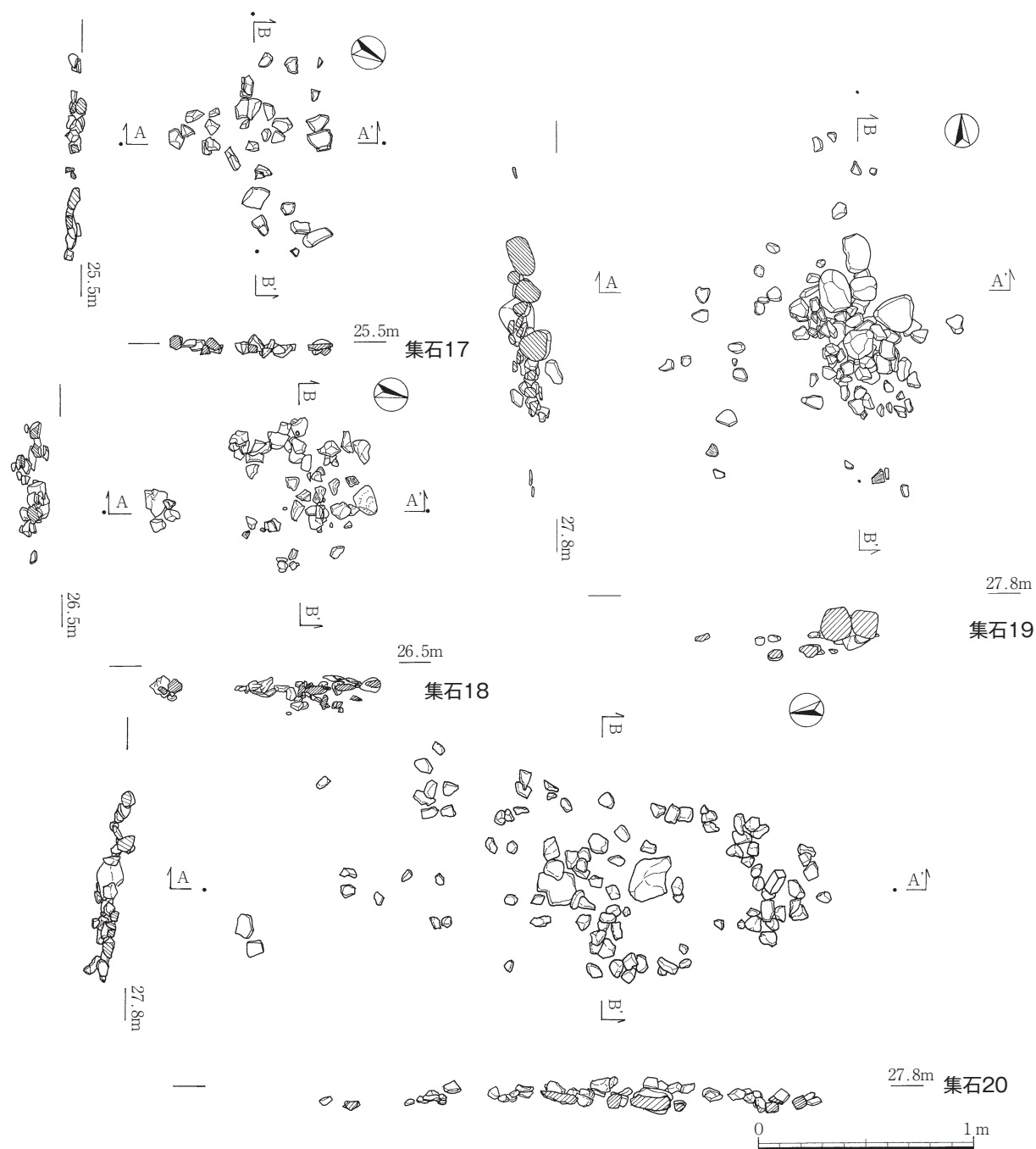
込みが確認された。石鏃が1点出土した。

集石22

O-21・22区で検出された。礫数122である。10cm以内の小礫を多用している。押型文土器の破片が2点出土した。

集石23

O・P-21区で検出された。礫数113である。密集度は低い。



第26図 集石遺構6

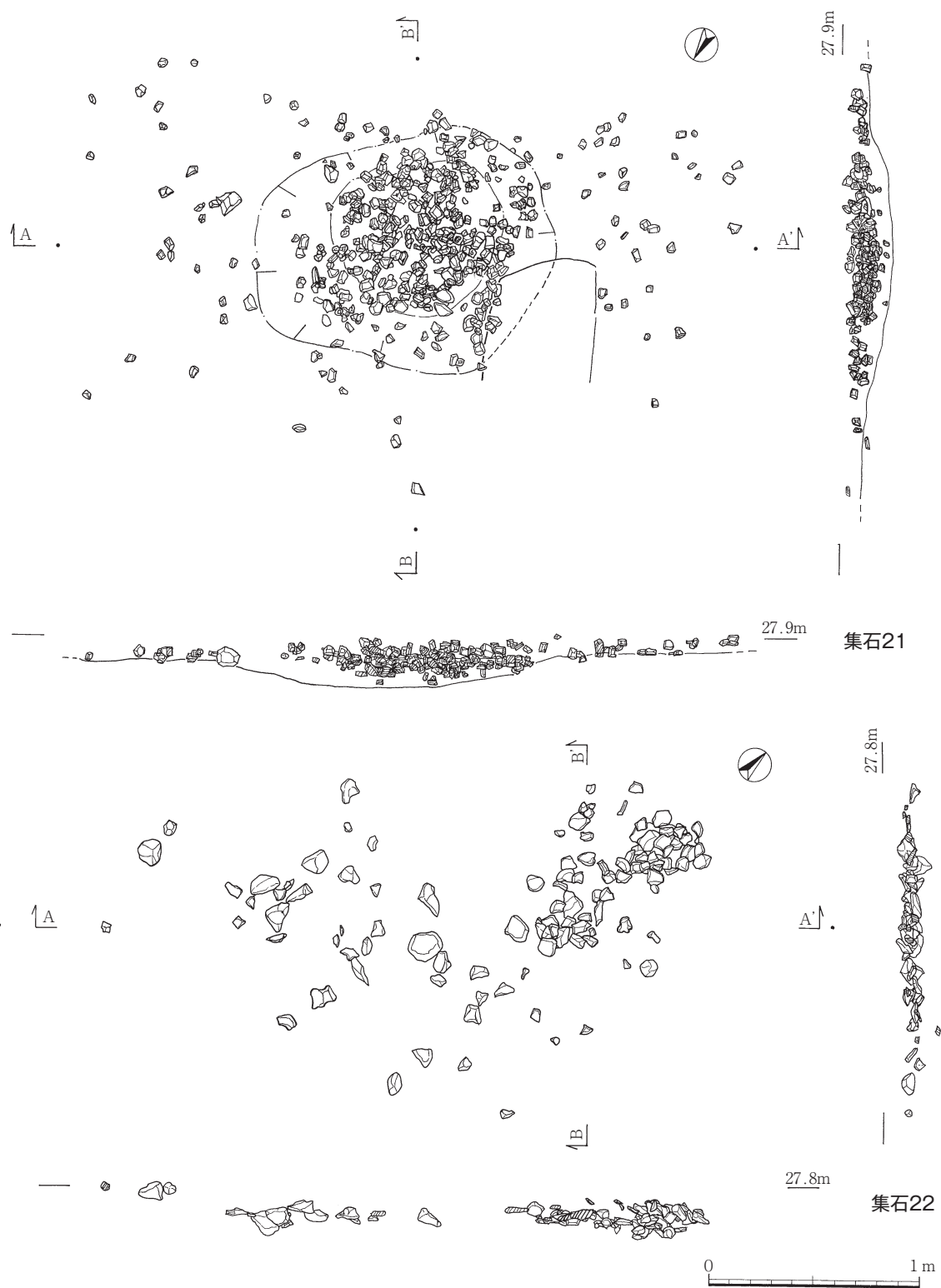
集石24

P-21区で検出された。礫数45である。小さめの礫を多用している。集石周辺部から石坂式土器の破

片が多数出土している。

集石25

Q-21区で検出された。礫数43である。礫は少量



第27図 集石遺構 7

であるが比較的密集している。石坂式土器の破片が5点供伴している。

集石26

R-21区で検出された。礫数47である。20cmを超える礫を多用している。

集石27

R-20区で検出された。礫数33である。礫はまとまりに欠ける。土器片が6点出土している。

集石28

R・S-20区で検出された。礫数52である。礫は少量であるが比較的密集している。

集石29

S-20区で検出された。礫数91である。礫は比較的密集している。浅い掘り込みが確認された。

集石30

T-20・21区で検出された。礫数203である。小礫を多用しており密集度合いが高い。

集石31

S-20・21区で検出された。礫数233である。長径約4m短径約3mの広い範囲に10cm以下の小礫が散在している。集石内からは炭化物（炭化材）が出土しており、樹種同定での結果マキ属、また放射性炭素年代測定の結果は、 $9,370 \pm 50$ BP（補正年代 $9,280 \pm 60$ BP）の値を得ている。

集石32

T-20区で検出された。礫数78である。礫はまとま

りに欠ける。

集石33

礫数25である。礫は少量でまとまりに欠ける。



第28図 集石遺構8

集石34

礫数24である。礫は少量でまとまりに欠ける。

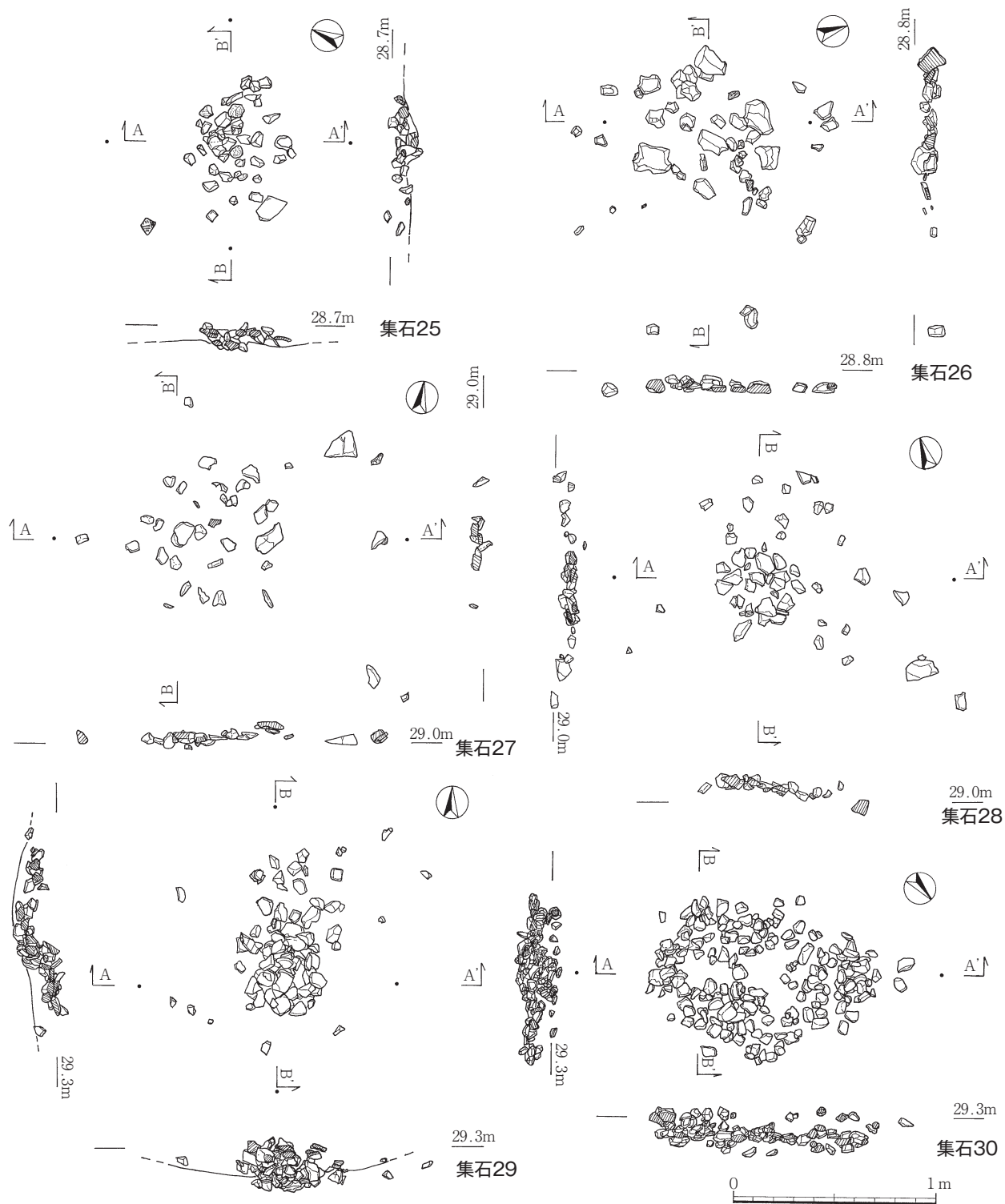
集石33・34はM-14区で検出されたが詳細な位置については不明である。

集石35

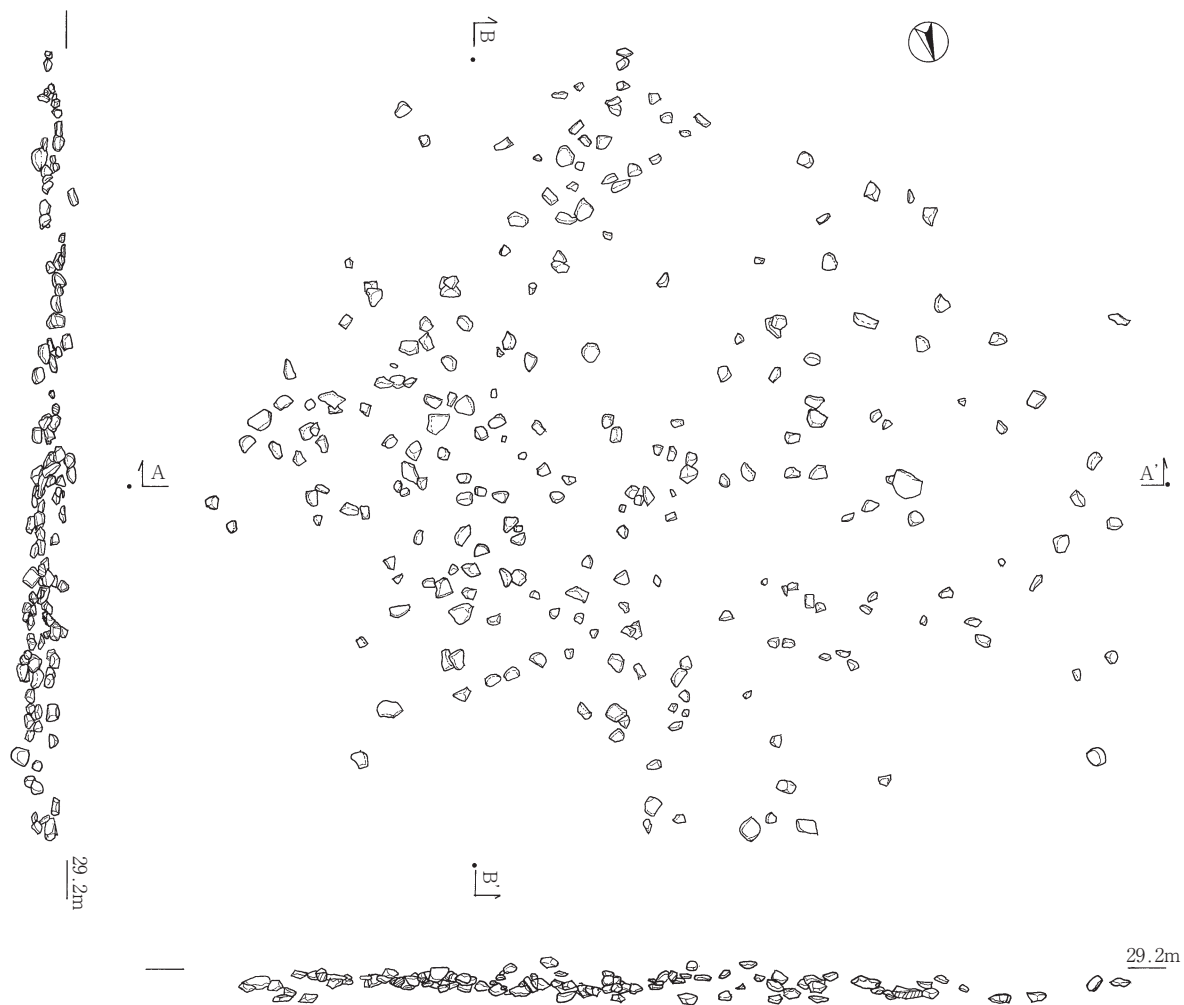
礫数19である。密集度は低い。位置は不明である。

集石36

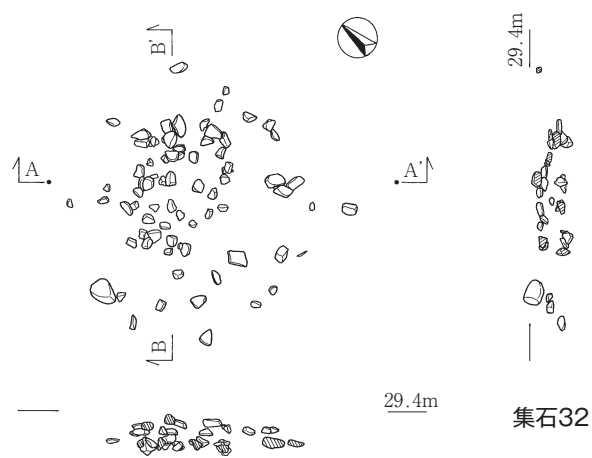
礫数15である。礫は少量であるが比較的密集している。位置は不明である。



第29図 集石遺構9



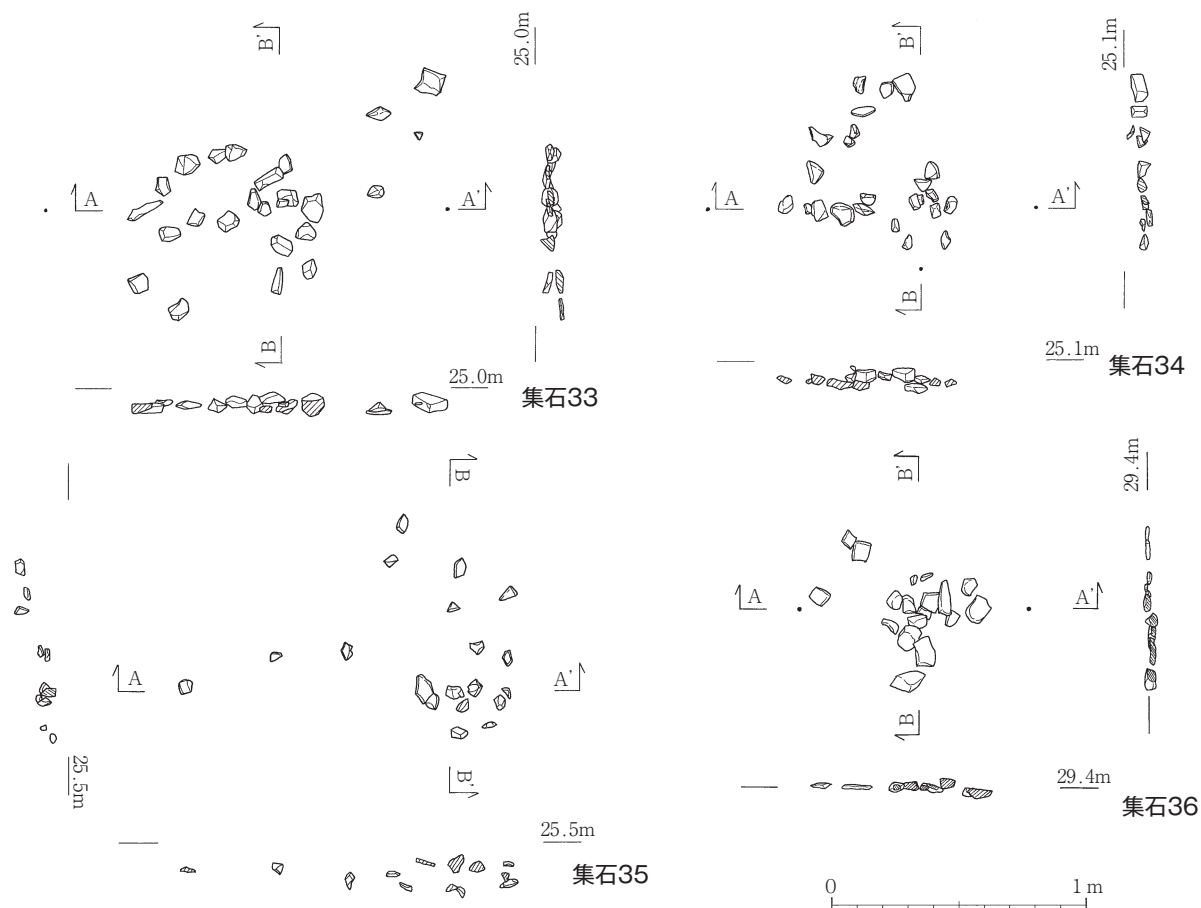
集石31



集石32



第30図 集石遺構10



第31図 集石遺構11

(2) 遺物 (第32図～第94図)

①土器 (第32図～第74図)

縄文時代の早期の土器はⅠ類からⅦ類に分類できた。

Ⅰ類土器 (第32図・第33図 44～72)

Ⅰ類土器は口縁内面に明瞭な段を有する貝殻条痕文系円筒土器である。口唇部はヘラもしくは貝殻による連続刺突が施される。結果正面観が小波状を呈する。

44～64は口縁部である。44～49は口縁部に横位の貝殻刺突文が3～5条施される。50～64は斜位の貝殻刺突文が施されている。63の内面には赤色顔料が付着している。65～69は胴部である。貝殻条痕による調整がなされている。70～72は底部である。71は底面にハケによる丁寧な調整がなされている。

Ⅱ類土器 (第34図 73～87)

Ⅱ類土器は口唇部が水平もしくは外面に傾斜する

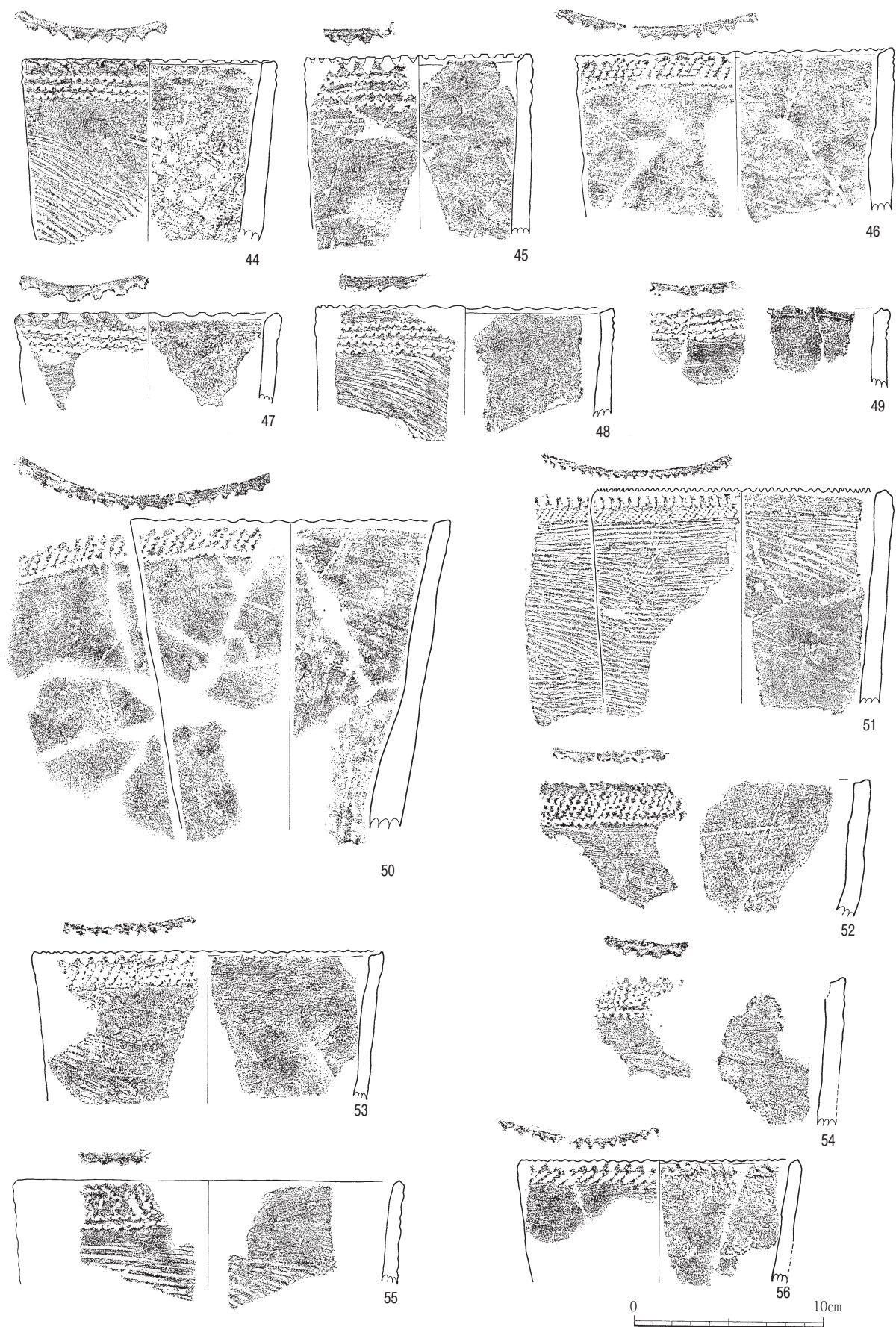
貝殻条痕文系円筒土器である。15点を図化した。

73～80は口縁部に「く」の字または逆「く」の字状の連続刺突が施されている。胴部は横、斜位の貝殻条痕が施されている。75・76は口縁部内面に不明瞭ながら段が確認できるためⅠ類に分類される可能性もある。81は口縁部に棒状の工具による連続刺突が施されている。84は口縁部に横位、胴部にかけて斜、縦位の貝殻刺突文が施されている。85は口縁部に竹管状の工具による連続刺突が施されている。86・87は胴部である。斜位の貝殻条痕による調整がなされている。

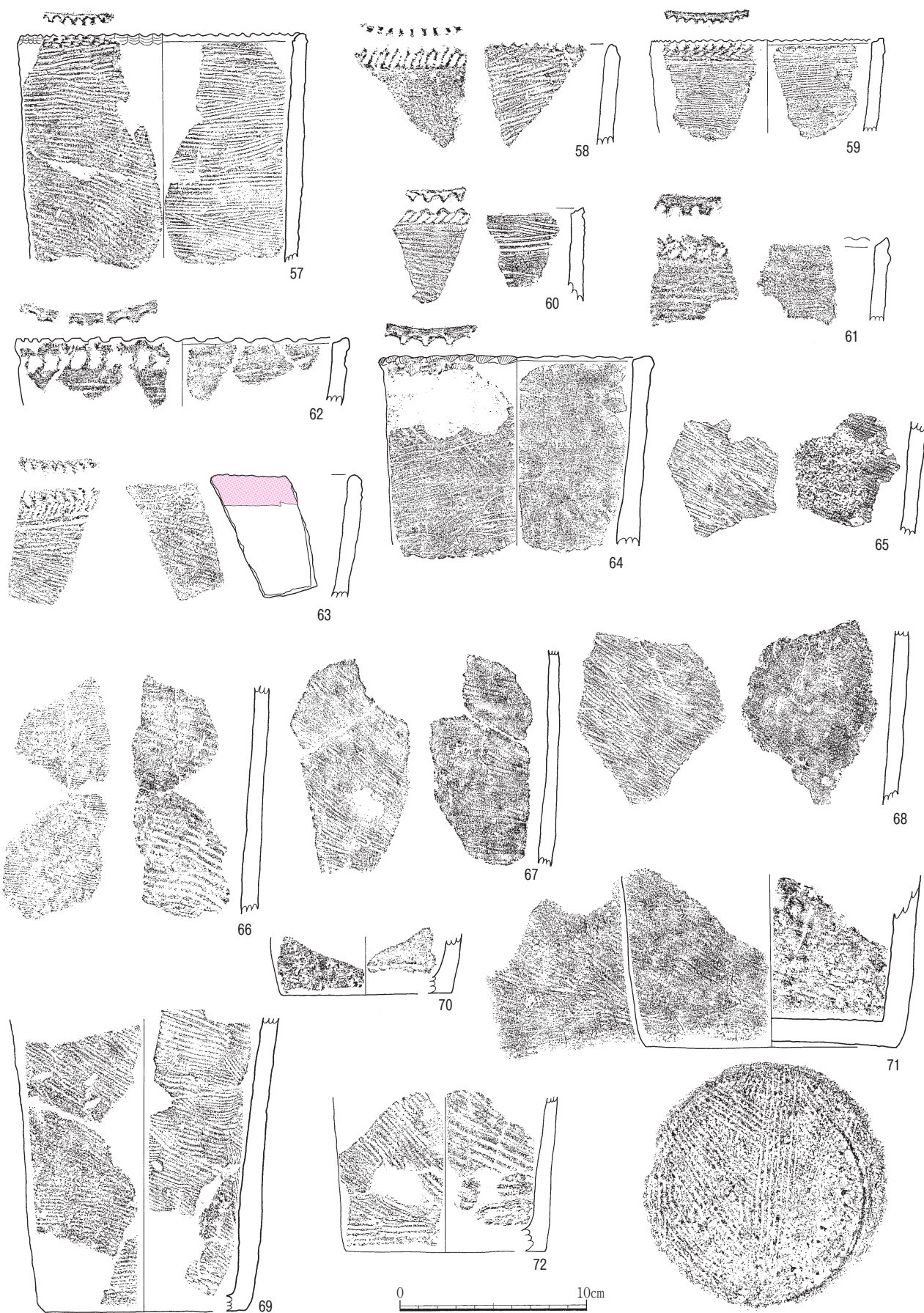
Ⅲ類土器 (第35図～第37図 88～146)

Ⅲ類土器は、口縁部に横位の貝殻刺突文、胴部に斜位の条痕を施し、その上から貝殻刺突文を重ねているものである。また、楔形貼付文を有するものもある。器形は円筒と角筒がある。

88～98は口縁部直下に左右に刺突を施した楔形貼



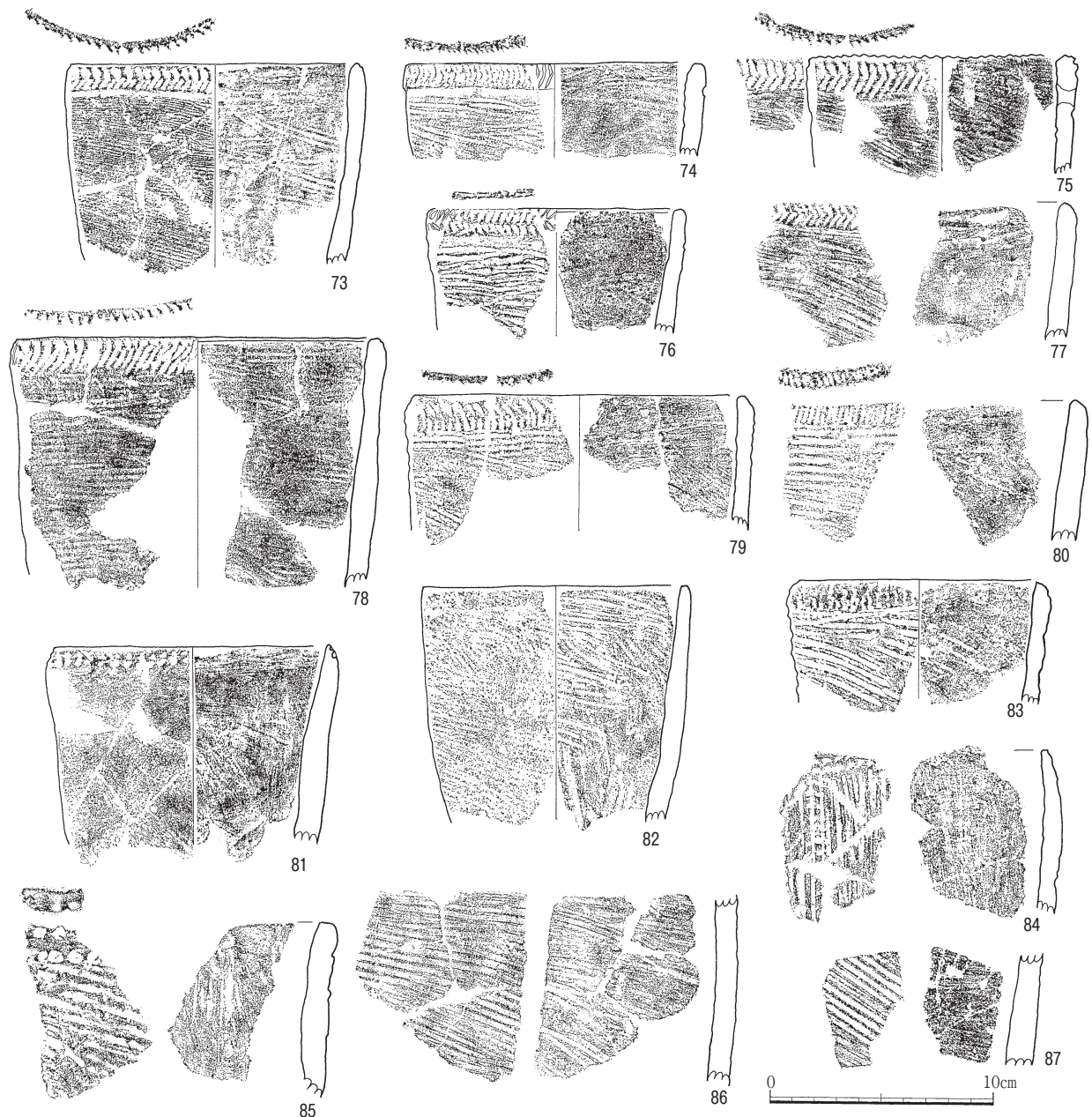
第32図 縄文時代早期 土器Ⅰ（Ⅰ類）



第33図 縄文時代早期 土器2 (I類)

付文を有する円筒の口縁部である。楔間に縦位や斜位の貝殻刺突文が直線状に施されている。92は摩滅が激しいが楔がかすかに確認できる。88・90・92・95は口縁がやや外反している。99～103は楔形貼付文がある円筒の胴部である。斜位の条痕が施された後、貝殻刺突文を重ねているものである。99と102はヘラ状の工具による補修孔が穿たれている。104・105は楔形貼付文のない円筒の口縁部である。104は口縁部に横位の貝殻刺突文が4条廻り、胴部は横の条痕の上に斜位または縦位の貝殻刺突を重ね

ている。106～125は円筒形の胴部である。斜位の貝殻条痕文の上に縦位もしくは横位の貝殻刺突文を重ねている。126～139は角筒である。126～128は口縁部である。126は角部に向かって波状になり、楔形貼付文を有する。また、ヘラ状の工具による補修孔が穿たれている。127・128は楔形貼付文をもたない。129～139は角筒の胴部である。129～138は斜位の貝殻条痕文の上に貝殻刺突文を重ねている。139は貝殻押引文が施されている。140～146は底部である。胴部の立ち上がり部分に縦位の刻みを施す。胴部に



第34図 縄文時代早期 土器3（Ⅱ類）

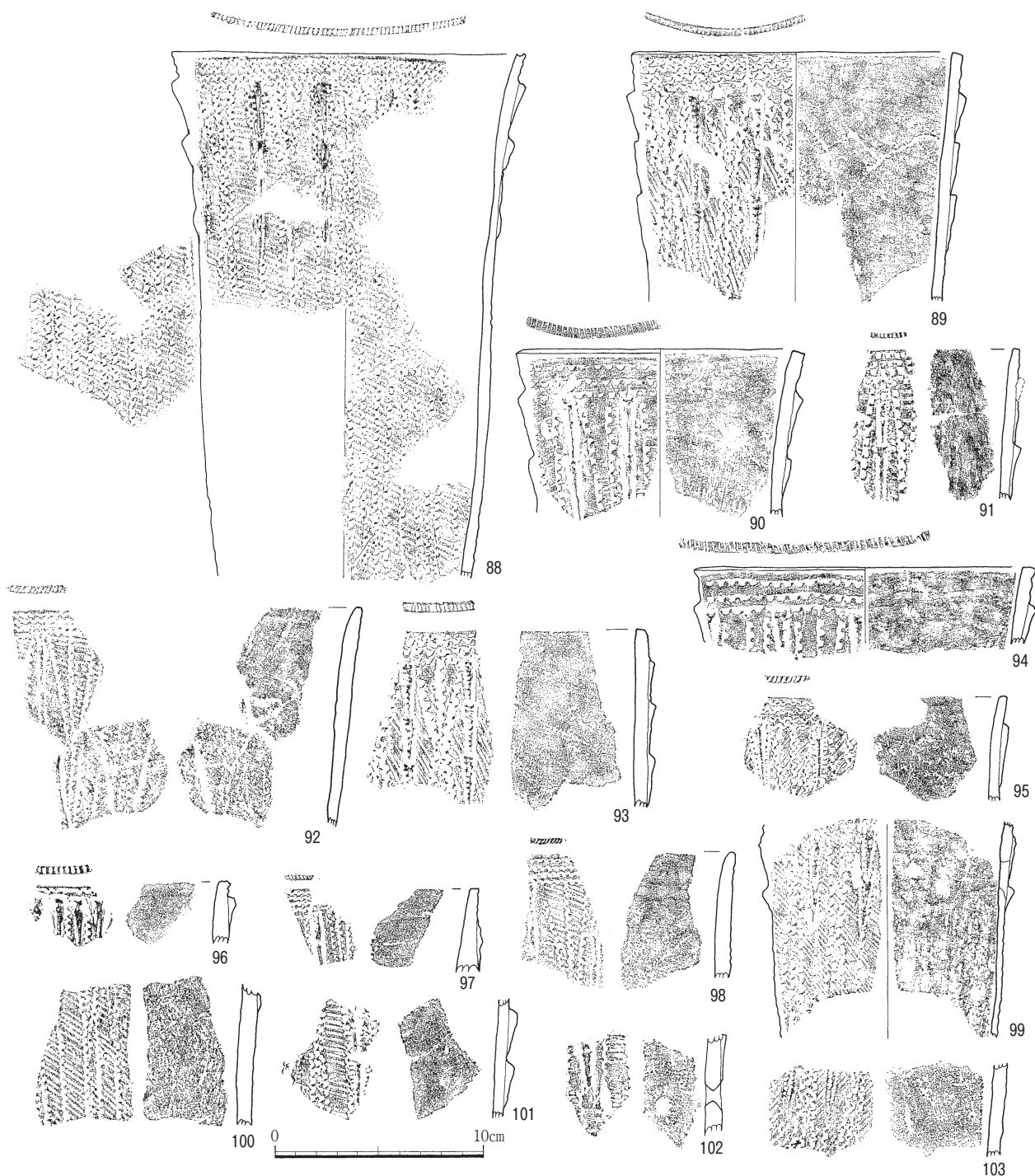
施された条痕文，貝殻刺突文は刻みの周辺部分まで施されている。

IV類土器（第38図・第39図 147～173）

IV類土器は口縁部が外反し，横位の貝殻刺突文がめぐり，その下に楔形貼付文や密接な貝殻刺突文を施すことで楔状を呈するものである。また，胴部には

は貝殻押引文が施されるものである。

147～153は楔形貼付文が施されている口縁部である。楔形貼付文の左右には刺突，上部には刻みが施される。147は楔形貼付文が2段貼り付けられている。胴部には貝殻押引文が施されている。154～157は楔形貼付文が貼り付けられた胴部である。楔形貼



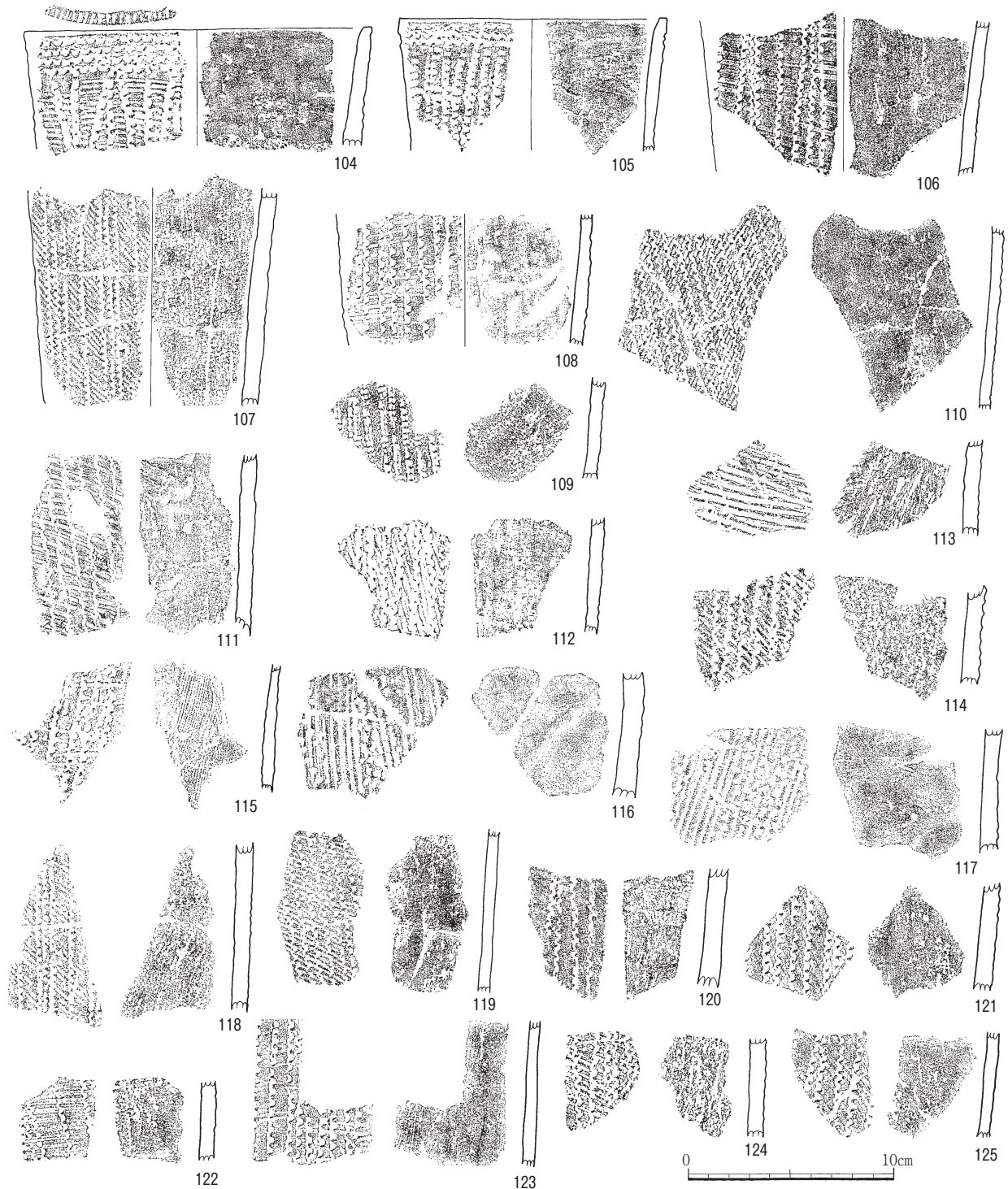
第35図 縄文時代早期 土器4（Ⅲ類）

付文の左右には刺突文が施される。158・159は楔形貼付文をもたない口縁部である。158は口縁部に横位の貝殻刺突文が3条廻り、その下部に斜位の貝殻刺突文、その下部に貝殻押引文が施されるものである。159は口縁部に横位の貝殻刺突文が3条廻りその下部に貝殻押引文が施されるものである。160～

169は胴部である。貝殻押引文が施されている。170～173は底部である。胴部の立ち上がり部分に縦位の刻みを施すものである。

V類土器（第40図～第57図 174～382）

V類土器は、口縁部に貝殻刺突文が廻り、胴部には貝殻条痕が施されている円筒形の土器である。貝

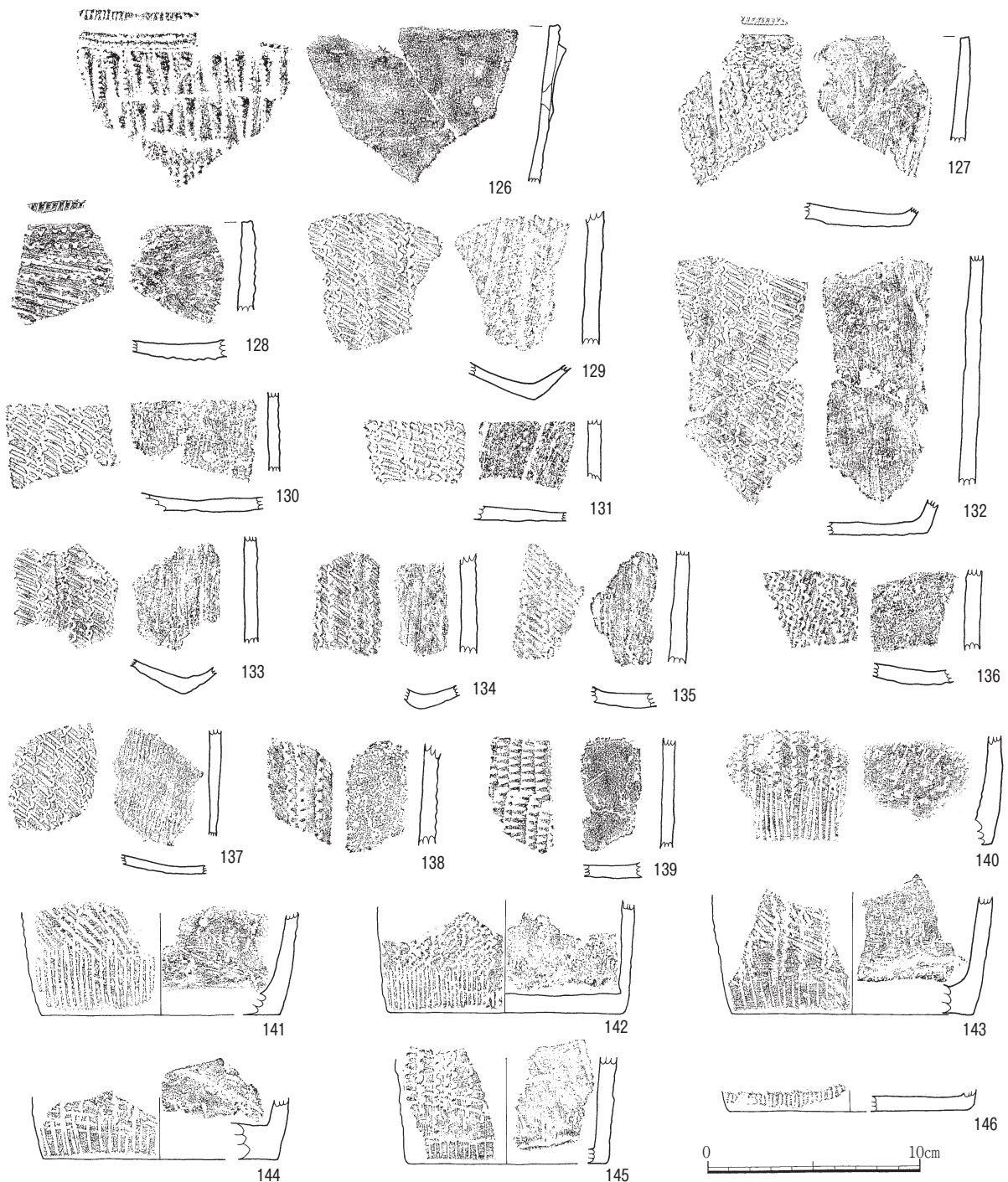


第36図 縄文時代早期 土器5（Ⅲ類）

殻条痕文は綾杉状のものがほとんどであるが、縦位、横位のものもある。口唇部には刻目を施すものが大半である。口縁部が肥厚し外反するものと、ほぼ直行するものがある。

174～263は外反もしくはやや外反する口縁部をもつタイプである。174～179は口縁部に横位の貝殻刺突文を2～4条ほど廻らすものである。さらに、そ

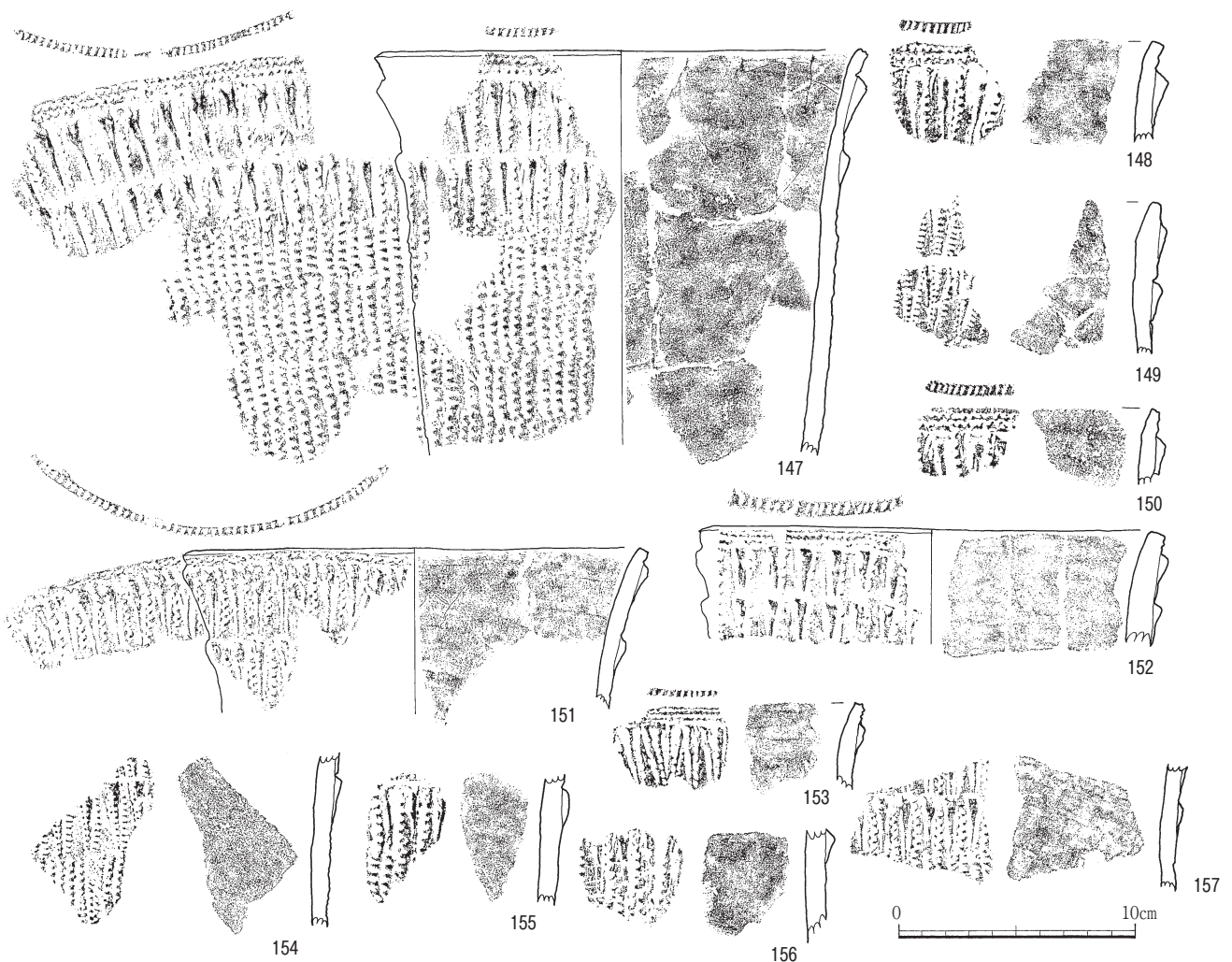
の下に斜位の貝殻刺突文を廻らすものである。口唇部には刻目が施されている。176・178・179の胴部には綾杉状の貝殻条痕文が施されている。180～189は口縁部に横位の貝殻刺突文を施すものである。口唇部には刻目が施されている。189は横位の貝殻刺突文の下部に棒状工具による刺突文が廻らされている。190～218は口縁部に斜位の貝殻刺突文を施すもので



第37図 縄文時代早期 土器6（Ⅲ類）

ある。190～195は口唇部に刻目、胴部に綾杉状の貝殻条痕文が施されるものである。194はヘラ状の工具による補修孔が穿たれている。集石24から出土した。196～202は口唇部に刻目、胴部に縦位、横位、斜位の貝殻条痕を施すものである。201は胴部に縦位の貝殻条痕を施文した後に貝殻刺突文を施している。202は斜位の貝殻条痕文を施した後に貝殻刺突文が施されている。209～217は口唇部に刻目を持たないタイプである。209～215は胴部に綾杉状の貝殻条痕文が施されている。209は土器内部に熱を受けた礫を伴って出土した（14図参照）。218は口唇部から口縁部にかけて斜位の貝殻刺突文が施されるものである。胴部には棒状の工具によると思われる条痕が見られる。219～249は口縁部に羽状の貝殻刺突文を施すものである。219～246は口唇部に刻目が施さ

れている。219の破片の一部は集石25の中から出土した。円形の補修孔が2個穿たれている。224は羽状の貝殻刺突文の下に横位の貝殻刺突文が2条施されている。231はヘラ状の工具による補修孔が穿たれている。237は口唇部に上から見て逆「く」の字状の刻目が施されている。241は羽状の貝殻刺突文の下に棒状工具によると思われる刺突文が連続して施されている。243は羽状の貝殻刺突文の下に横位の貝殻刺突文が施されている。247～249は口唇部に刻目のないタイプである。249は羽状の貝殻刺突文が深くまばらに施されている。250～252は口縁部に横位の貝殻条痕文が施されるものである。253～256は口縁部に縦位の貝殻刺突文が施されるものである。253・254は胴部に綾杉状の条痕文が施されている。255は縦位の貝殻刺突文の下に横位の貝殻条痕文が1



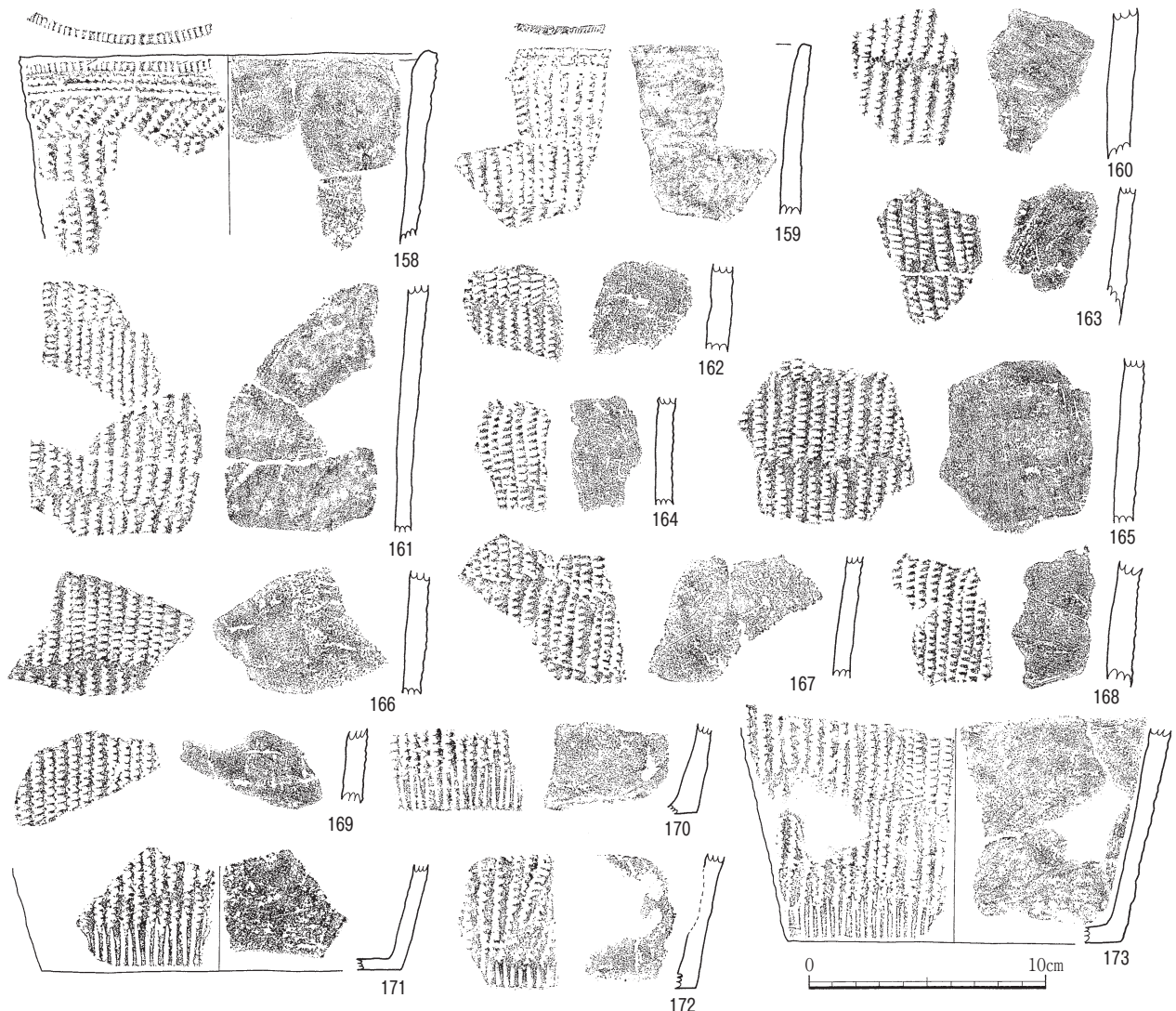
第38図 縄文時代早期 土器 7（Ⅳ類）

条施されている。

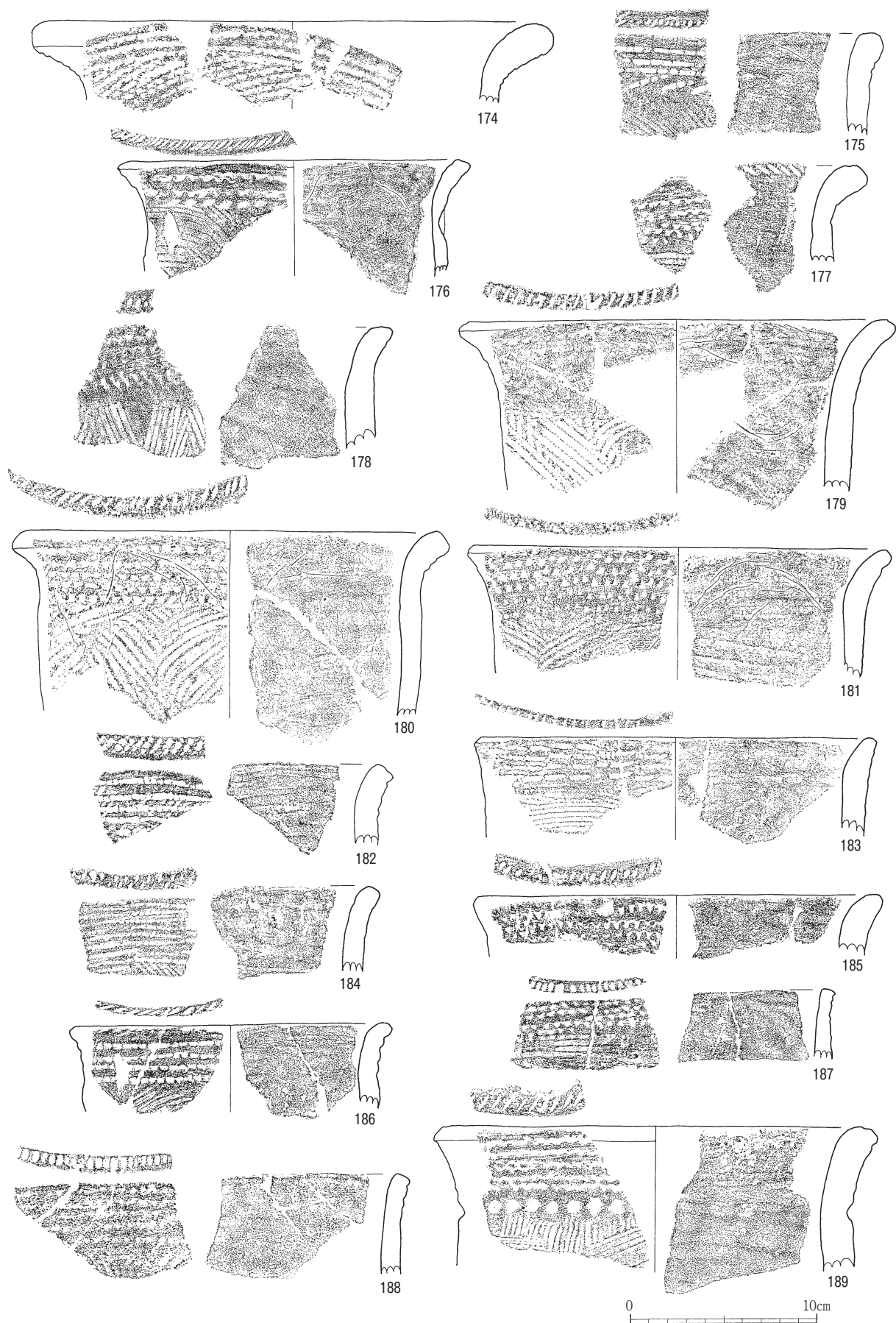
257～263は口縁部が波状を呈するものである。257は口縁部に斜位の貝殻刺突文が施され、波状の頂上部付近で羽状の貝殻刺突文に変わるものである。口唇部には刻目が施されている。258～262は口縁部に横位の貝殻条痕文を施すものである。261は口唇部に鋸歯状の刻目が施されている。263は口縁部に羽状の貝殻刺突文が施されるものである。

264～289は直行する口縁をもつものである。264～266は口縁部に横位の貝殻刺突文をもつものである。267～270は棒状の工具による横位の刺突文を施すものである。271～275は口縁部に斜位の貝殻条痕文を施すものである。271～273は口唇部に刻目を施すものである。272は口縁の上部まで斜位の貝殻条

痕文を施した後に貝殻刺突文を施している。274～279は口縁部に刻目が無いタイプである。274は円形の補修孔が穿たれている。279の同一個体と思われる。276は貝殻条痕文の下に横位の貝殻刺突文が1条施されている。278は胴部に横位の条痕文が施される。280・281は口縁部に羽状の貝殻刺突文をもつものである。280は羽状の貝殻刺突文の上下に横位の貝殻刺突文が1条施されている。282は口縁部に横位または斜位の貝殻条痕文が施されるものである。283～288は口縁部に縦位の貝殻刺突文を施すものである。283～287は口唇部に刻目が施されている。284の口唇部には貝殻刺突文が施されている。284は貝殻刺突文の上下に、285・289は下に横位の貝殻刺突文が1条施されている。288は口唇部に刻目を



第39図 縄文時代早期 土器8 (Ⅳ類)



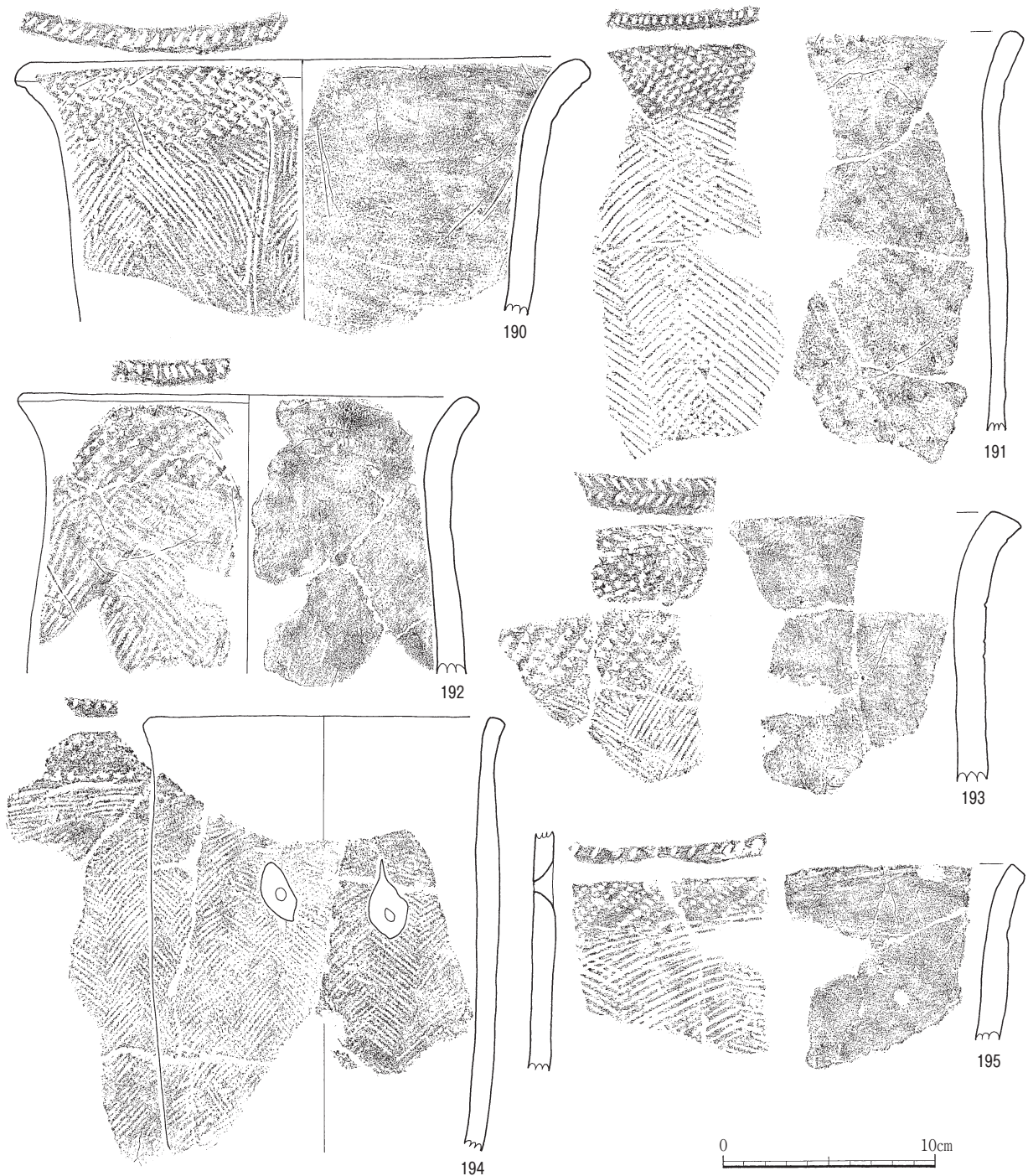
第40図 縄文時代早期 土器9（V類）

たない。289は口縁部上部まで横位の条痕文を施すものである。

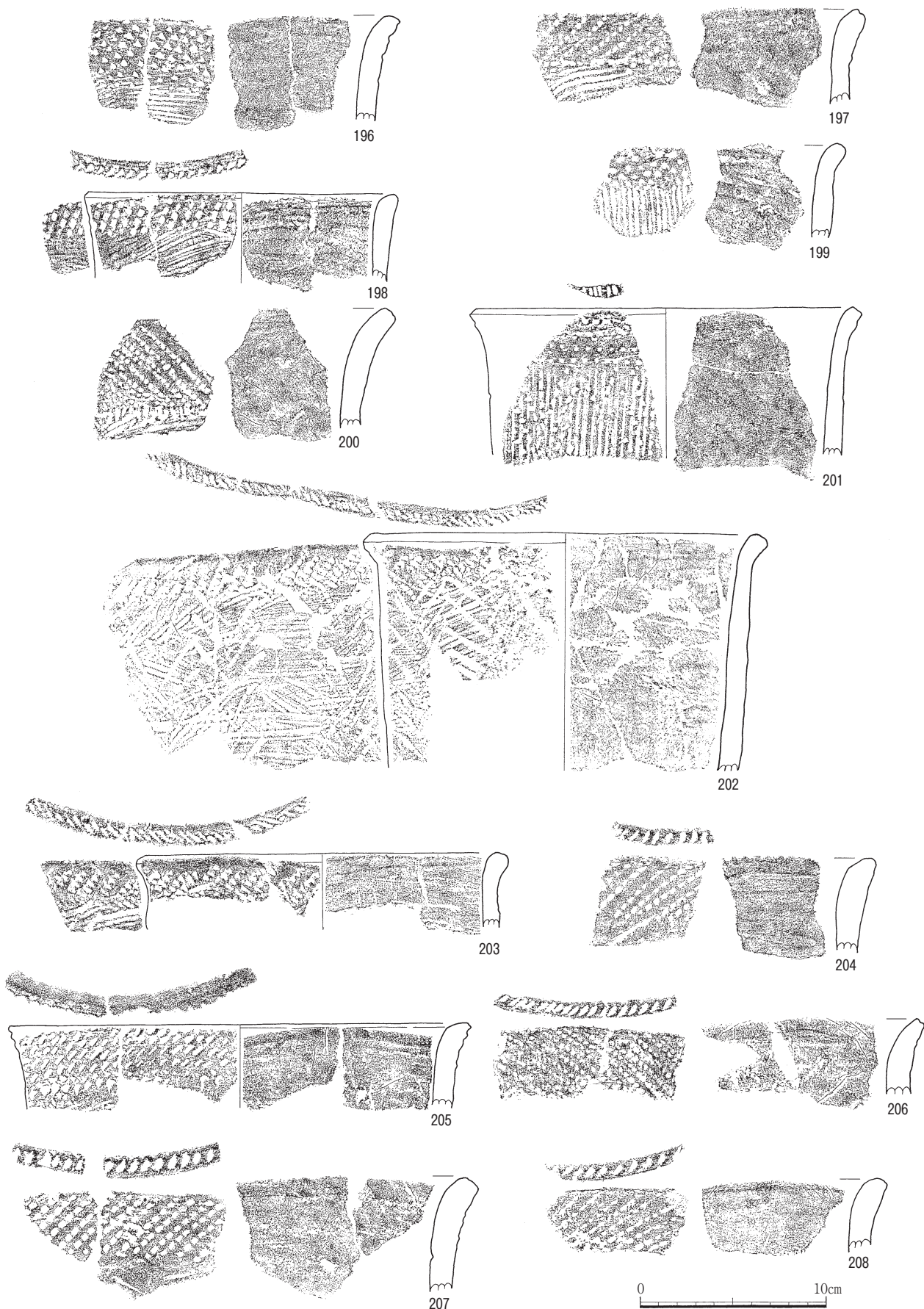
290～299は口縁部に瘤状突起を貼り付けるものである。290は突起の上面に刻目、側面に横位の貝殻刺突文を施している。291～293は突起の側面に横位の貝殻刺突文を施している。293は突起の上面にも貝殻刺突文を施している。294・295は瘤状突起側面

に刺突文を施している。296～298は突起の側面に縦位の貝殻刺突文を施すものである。295・298は突起部分を横に貫く穴があけられている。298の突起の上面は刻目が施されている。299は突起部分まで貝殻条痕文が施されている。

300・301は口縁部が波状を呈するものである。口縁部に棒状の工具による刺突文が施されている。



第41図 縄文時代早期 土器10 (V類)



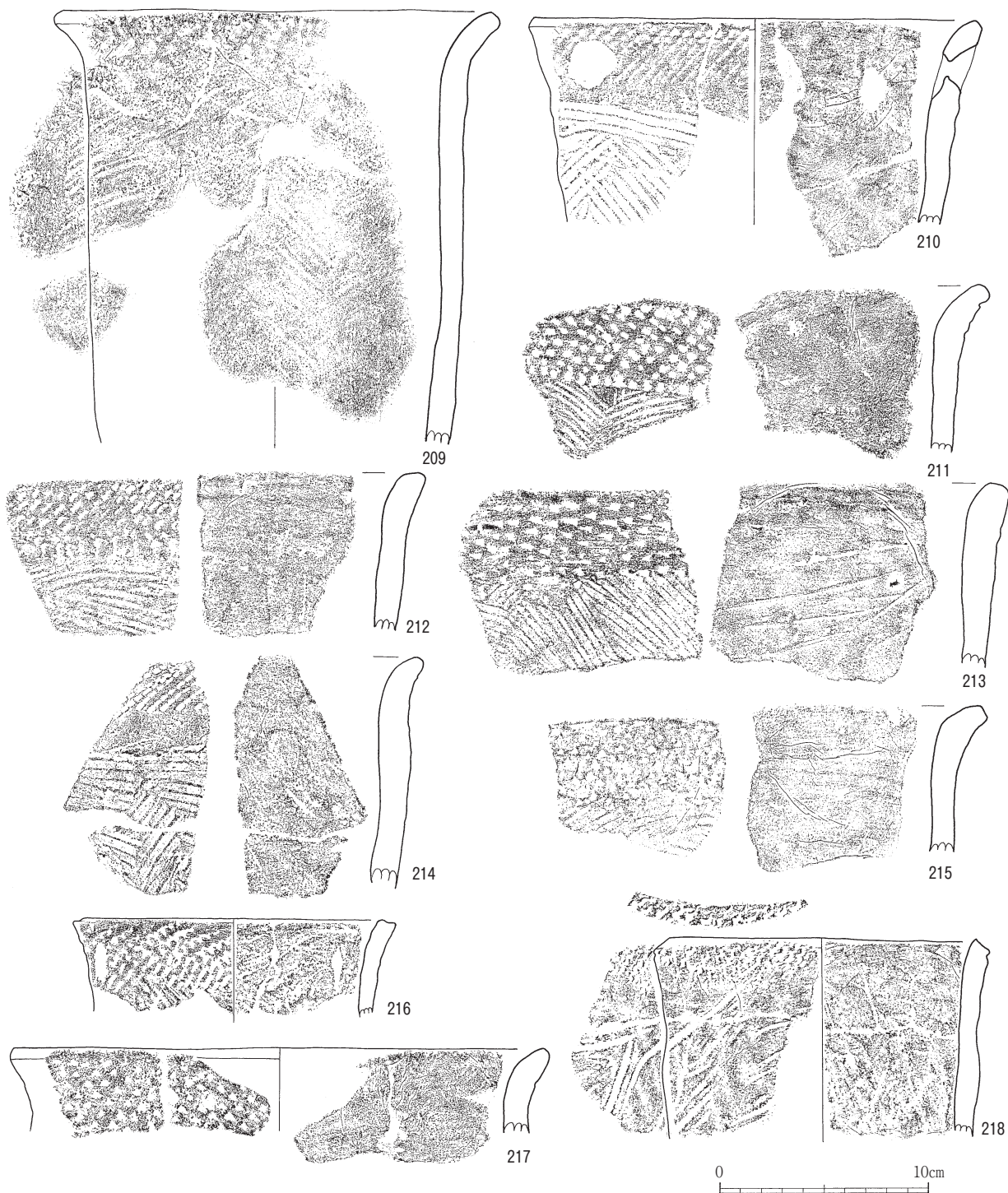
第42図 縄文時代早期 土器11 (V類)

胴部には貝殻条痕文が施されている。

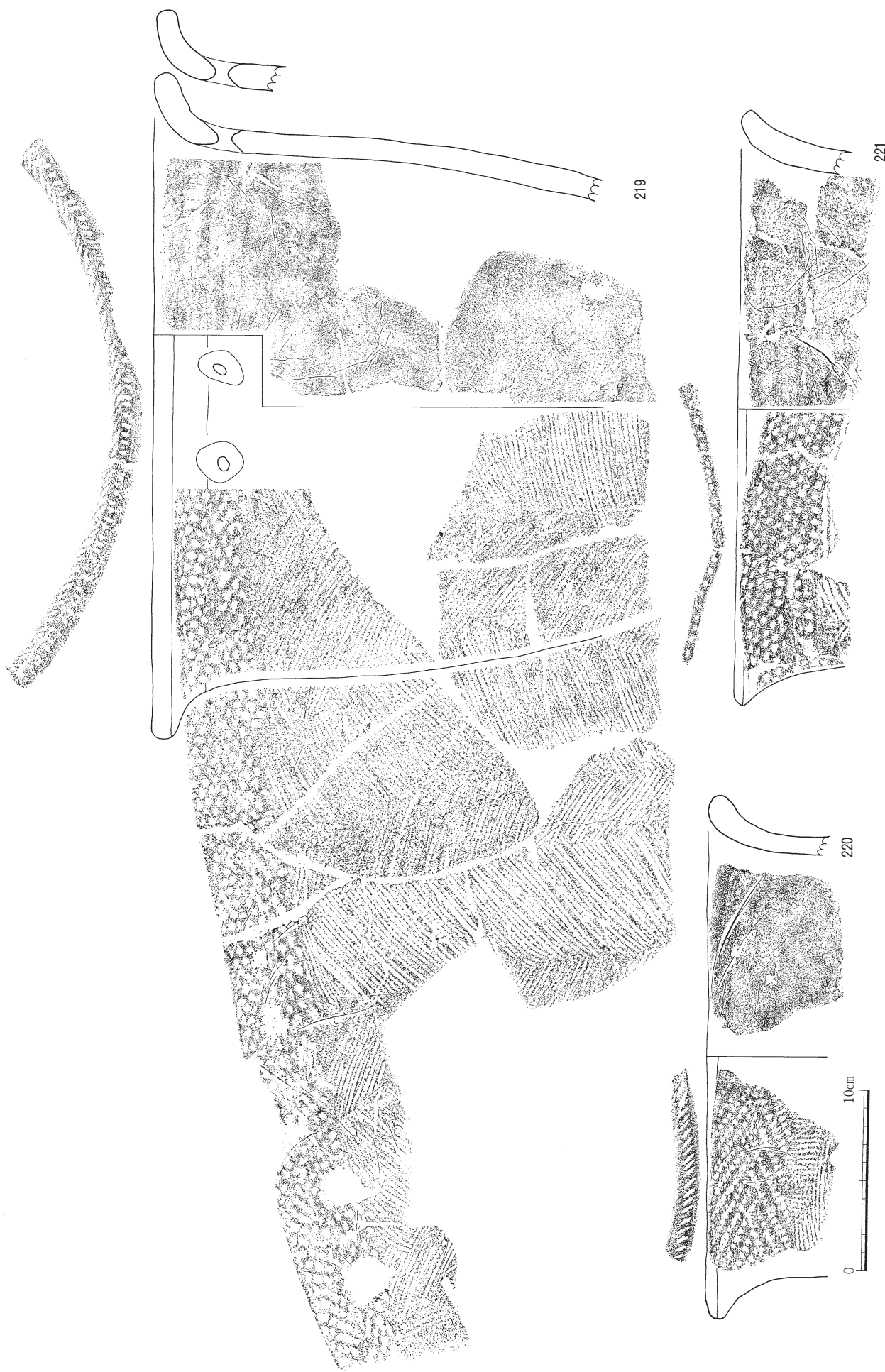
302～338は胴部である。302～320は綾杉状の貝殻条痕文を施すものである。307は270の同一個体と思われる。313は集石24から出土した。321～323は綾杉状の貝殻条痕文を施した後に縦位の条痕文を施すものである。326は縦位の条痕文が施されている。328は条痕文を施した後に貝殻刺突文が施されてい

る。329～338は「V」字状の貝殻刺突文が施されている。

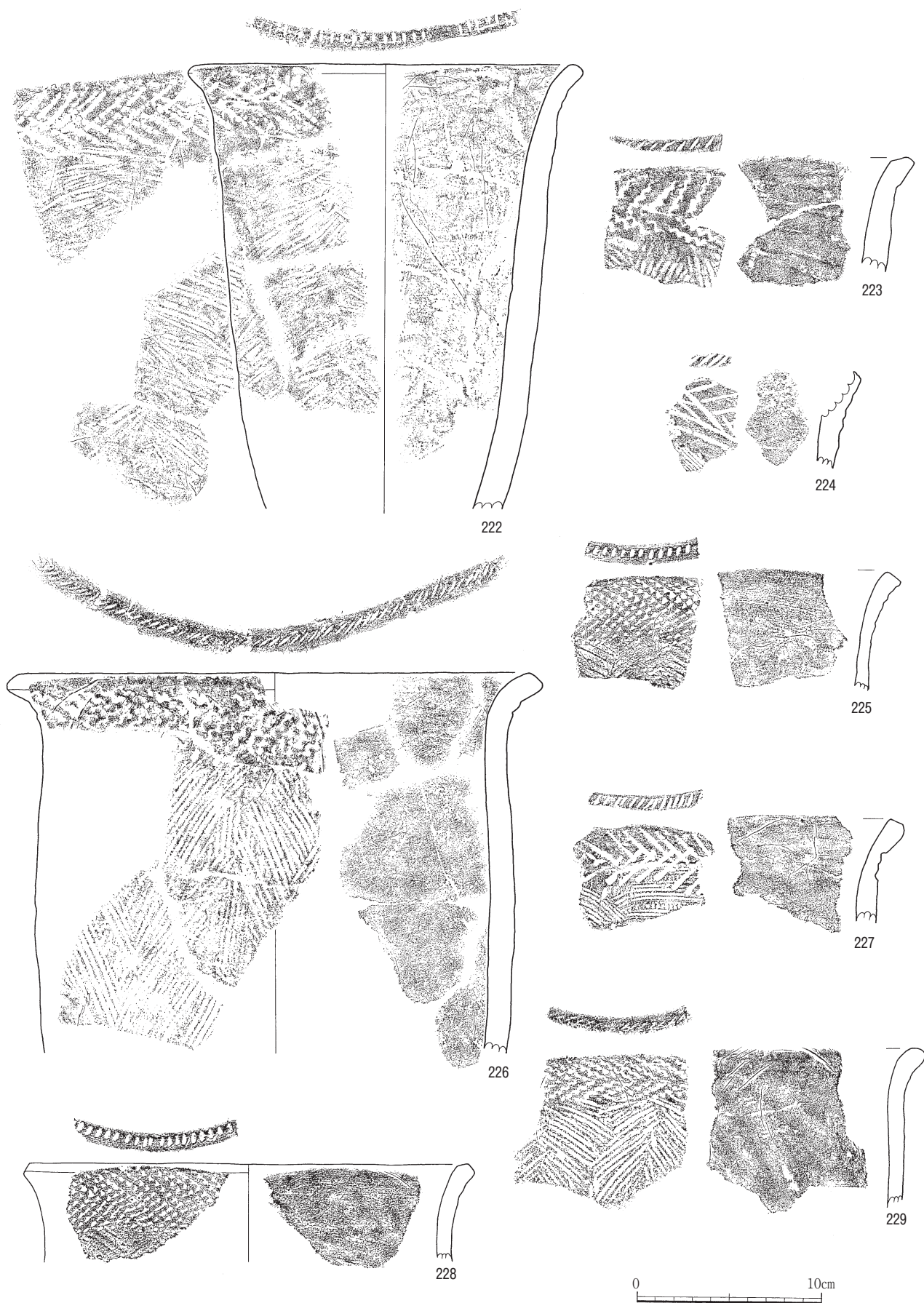
339～382は底部である。339～350は底部下面の外周に刻目が施されている。339～347は刻目の上部に横位の条痕文が施されている。339・340の内面は指ナデで調整されている。346は集石20から出土した。348・349は胴部の立ち上がりに縦位の条痕が施され



第43図 縄文時代早期 土器12 (V類)



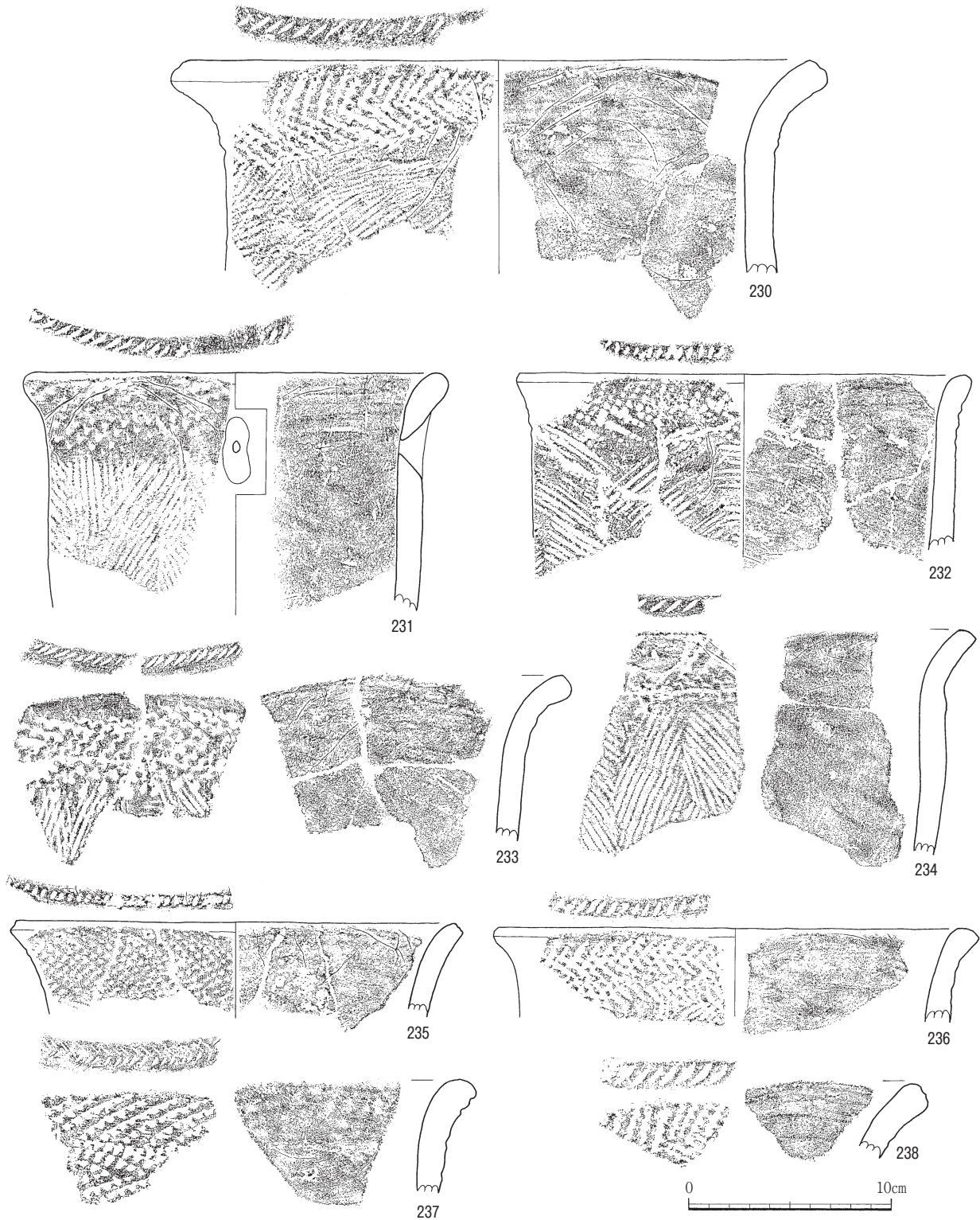
第44図 縄文時代早期 土器Ⅱ (V類)



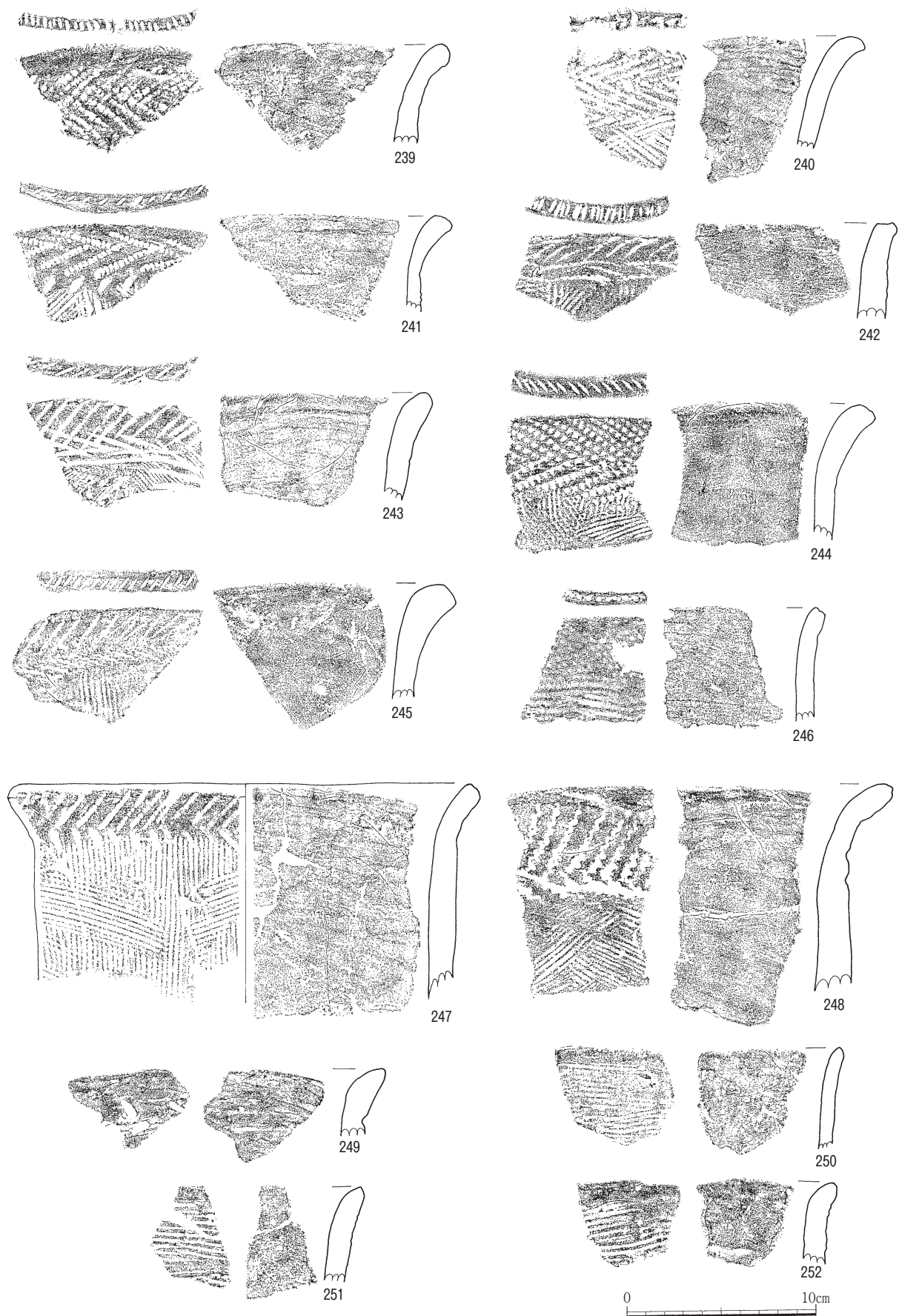
第45図 縄文時代早期 土器14 (V類)

ている。351～358は底部下面の外周の刻目が鋸歯状のものである。359～378は底部下面の外周まで斜位、横位、縦位の条痕文が施されるものである。361は胴部の内面と底部の内面に貝殻条痕文が見られる。374の底部外面はヘラケズリによる調整が見られる。

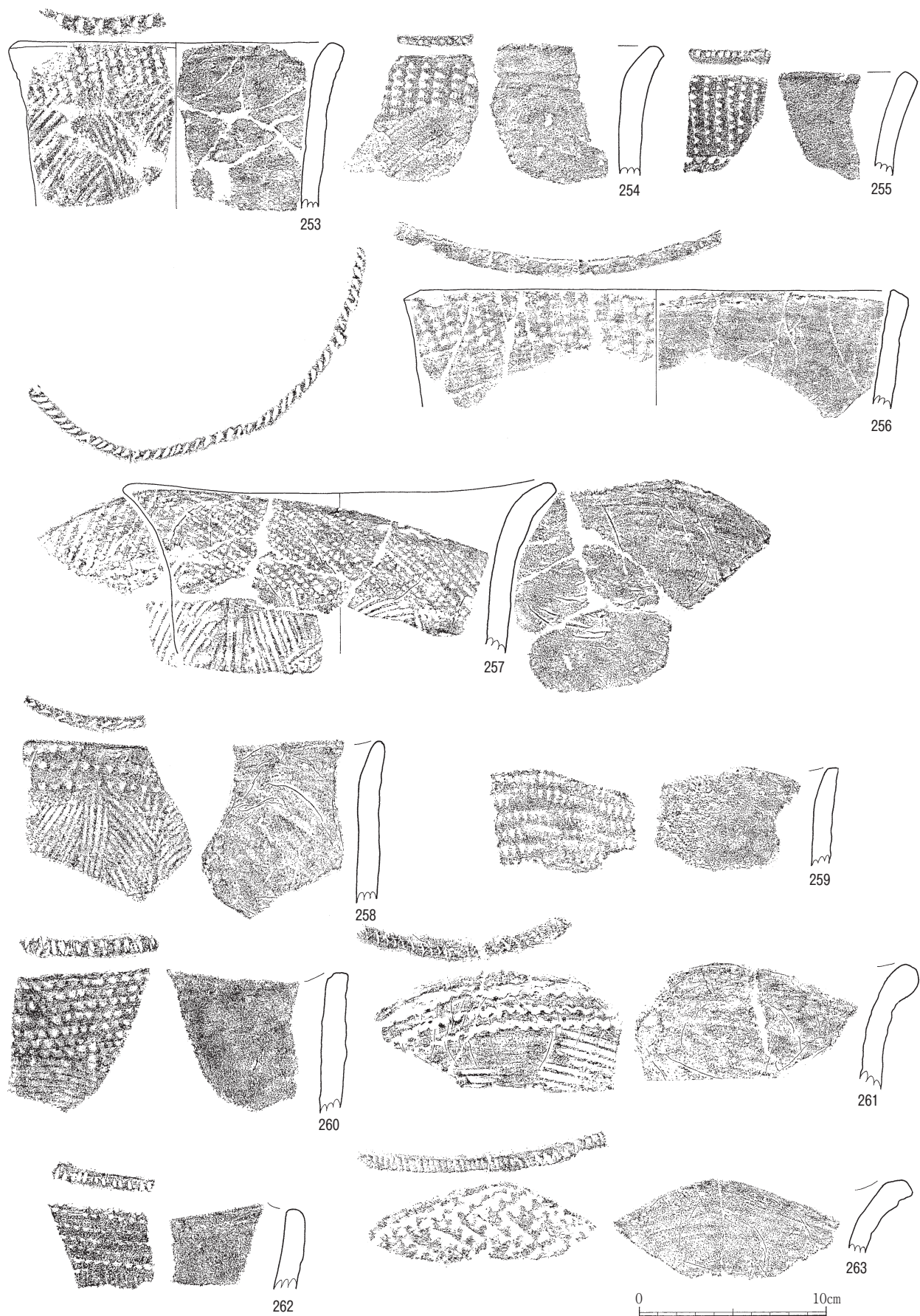
377の底部外面は条痕文が施されている。379の胴部はナデで調整されている。380は胴部、底部外面にヘラケズリによる調整が見られる。382は外面底部にわずかにミガキによる調整が見られる。



第46図 縄文時代早期 土器15 (V類)



第47図 縄文時代早期 土器16 (V類)



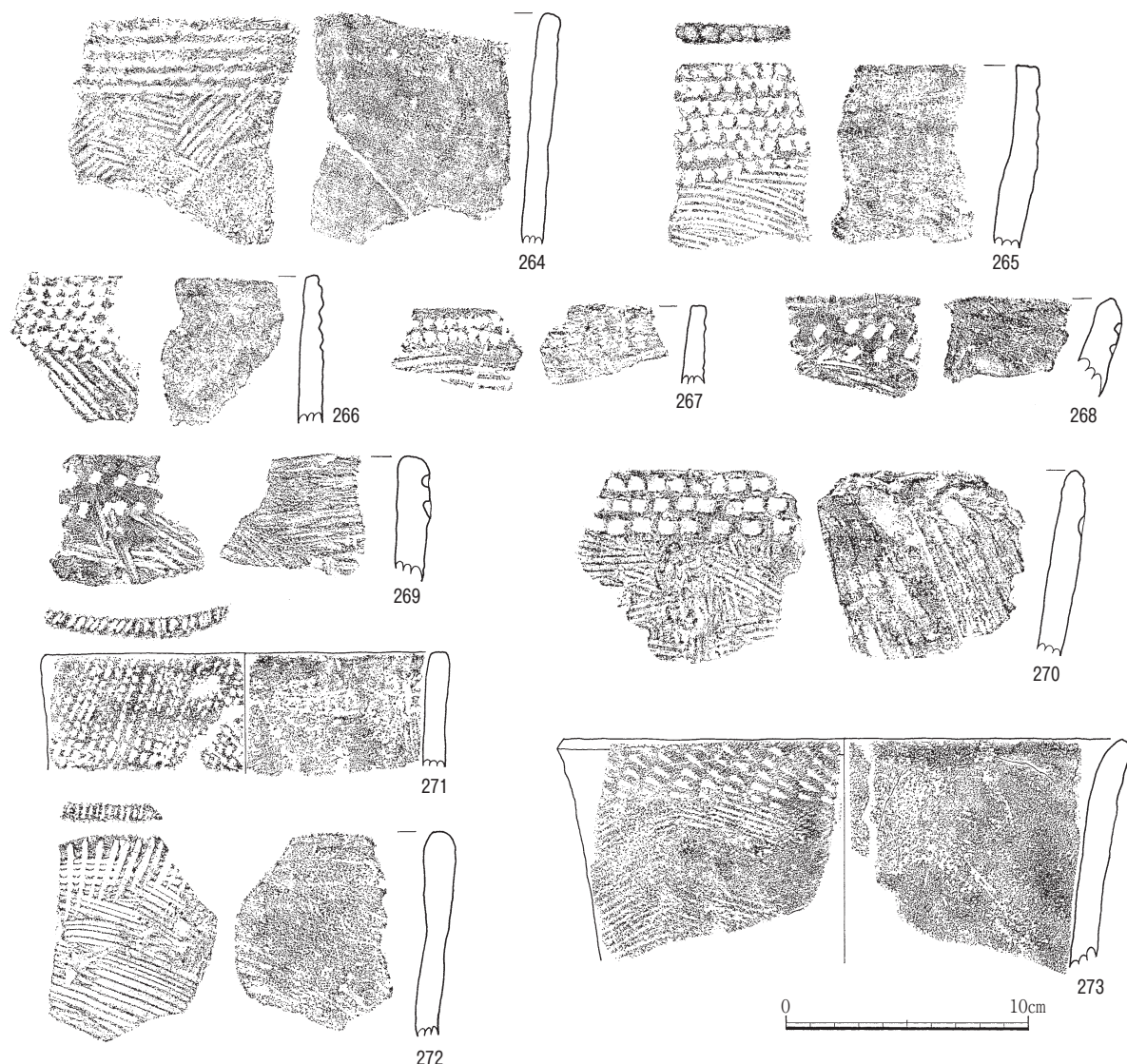
第48図 縄文時代早期 土器17 (V類)

VI類土器（第58図・第59図 383～407）

VI類土器は口縁部が直行ないしわずかに内湾し、口縁部から底部まで貝殻刺突文のみで文様が構成されるものである。

383～394は口縁部である。383～388は口縁部が若干内湾しているものである。386～389は口縁部の上端のみ内湾するものである。383・384は「C」の字状に貝殻刺突文が連続して施されている。385は口縁部に連続した斜位の貝殻刺突文、その下に横位、斜位の貝殻刺突文が施されている。386は斜位の貝殻刺突文が施され、瘤状の突起が貼り付けられている。387は口縁部に横位の刺突文が2条、その下に斜位の貝殻刺突文が綾杉状に施されている。388～390は横位、斜位の貝殻刺突文が施されている。388

は内面をケズリで調整している。390は瘤状突起部分である。391～394は口縁部が直行するものである。391は口縁部上端に横位の貝殻刺突文が2条廻り、その下に斜位の貝殻刺突文が綾杉状に施されている。また、にぶい赤褐色の土と灰色の土を交互に積んで土形成している。392は口縁部に斜位の貝殻刺突文が施されている。口唇部には刻目が施されている。393は口唇部、口縁部に棒状の施文具による刺突文が施されている。394は横位、斜位の貝殻刺突文が施されている。内面はケズリで調整されている。395～407は胴部である。395～405は貝殻刺突文が施されている。396と399～401は同一個体と思われる。406・407は棒状の施文具による刺突が横位に施され、その下に貝殻刺突文が施されている。



第49図 縄文時代早期 土器18（V類）



第50図 縄文時代早期 土器19 (V類)

VII類土器（第59図 408～410）

VII類土器は口縁部がわずかに内湾し、口縁部から胴部にかけて横位または縦位の羽状の短沈線文を施すものである。408・409は口縁部である。408は口縁部に横位の貝殻刺突文、その下に横位の羽状の短沈線文が施されている。409・410は口縁部から胴部に縦位の沈線文、その横に羽状の貝殻刺突文が縦位に施されるものである。

VIII類土器（第60図・第61図 411～430）

VIII類土器は口縁部が直行ないし内湾し、口縁部内面が肥厚しバケツ形の器形を呈するものである。施文は短い条痕や沈線による羽状文や縦位の流水文を施すものである。内面は丁寧に磨かれているものが多い。

411～420は羽状文が施された口縁部である。412は円形の補修孔が穿たれている。口唇部から内面は丁寧に磨かれている。417の口縁部はやや丸みを帯びているが施文が類似しているためVIII類土器として扱った。419は横位の条痕文が施され、補修孔が穿たれている。421は横位の条痕が施されている。422は斜位の短い条痕が施されている。施文パターンが

整然さにかける。423～425は流水文が施されている。426～428は胴部である。427は横位の貝殻刺突文が数条施され、その下に羽状文が施されている。429・430は底部である。430は羽状文が施され内面は磨かれている。

IX類土器（第62図・第63図 431～444）

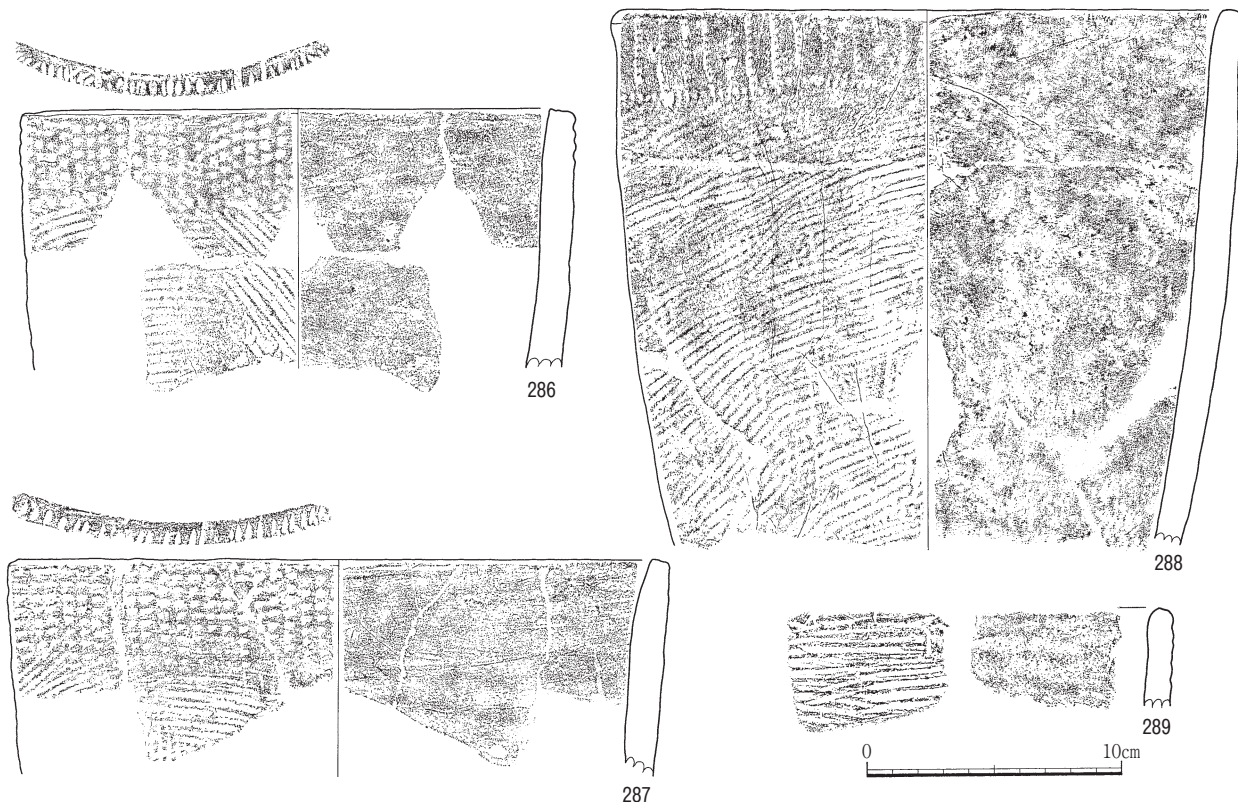
円筒形条痕文土器と呼ばれるものである。

431～441は口縁部である。431は胴部がわずかに膨らみ、口縁部はやや外反する。端部は丸くつくりされている。外面は縦位の条痕を施した後、胴部中程から口縁部にかけて波状の条痕文が横位に施されている。432～441は横位の波状の条痕が施されるものである。435は円形の補修孔が穿たれている。442～444は胴部である。横位の条痕文が施されている。

X類土器（第64図～第69図 445～518）

X類土器は器面に山形・楕円の押型文を施文するものである。

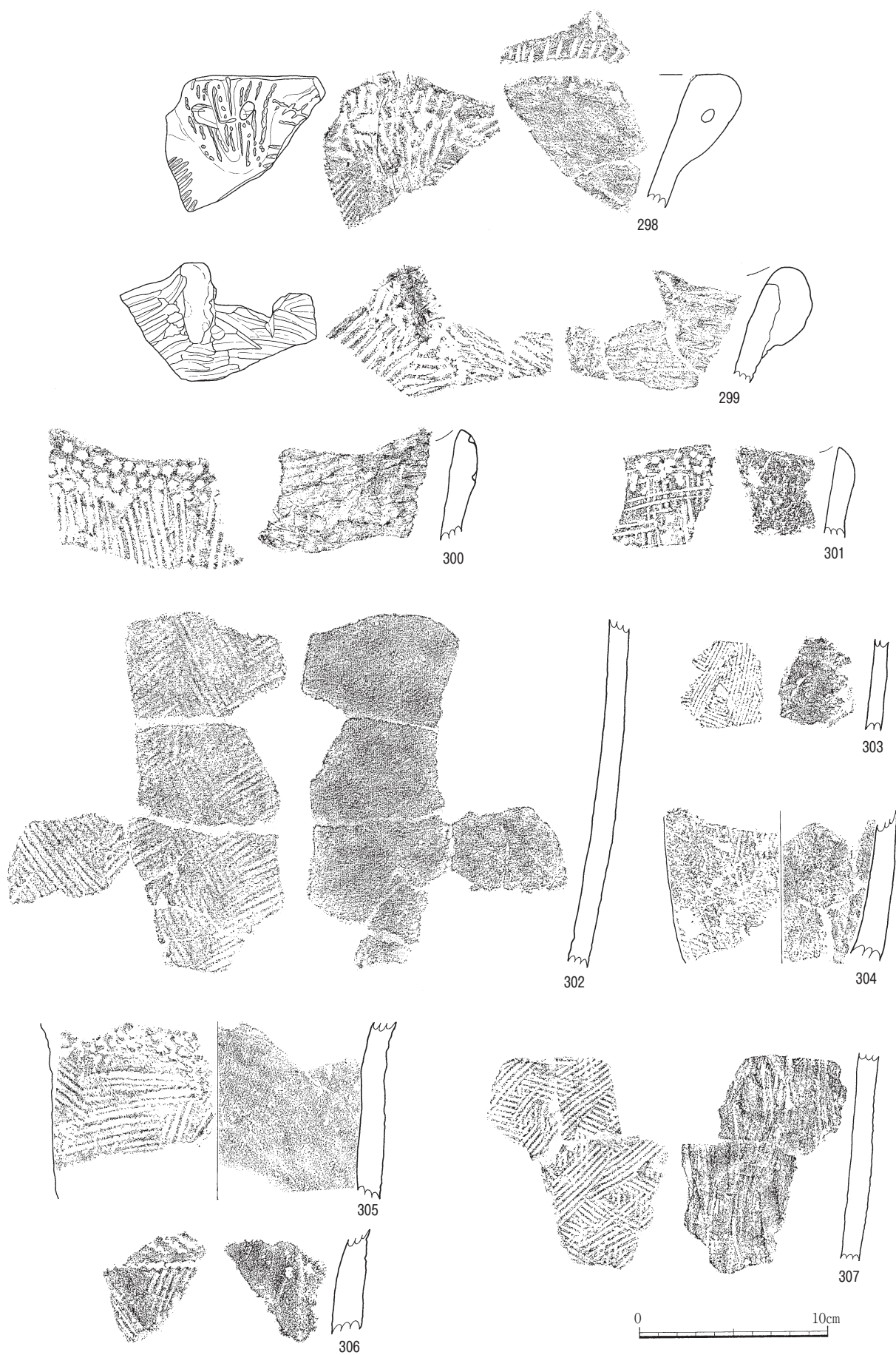
445～474は山形の押型文土器である。445～452は口縁部である。445は膨らんだ胴部から口縁部にかけて窄まり外反するものである。446～452は外反も



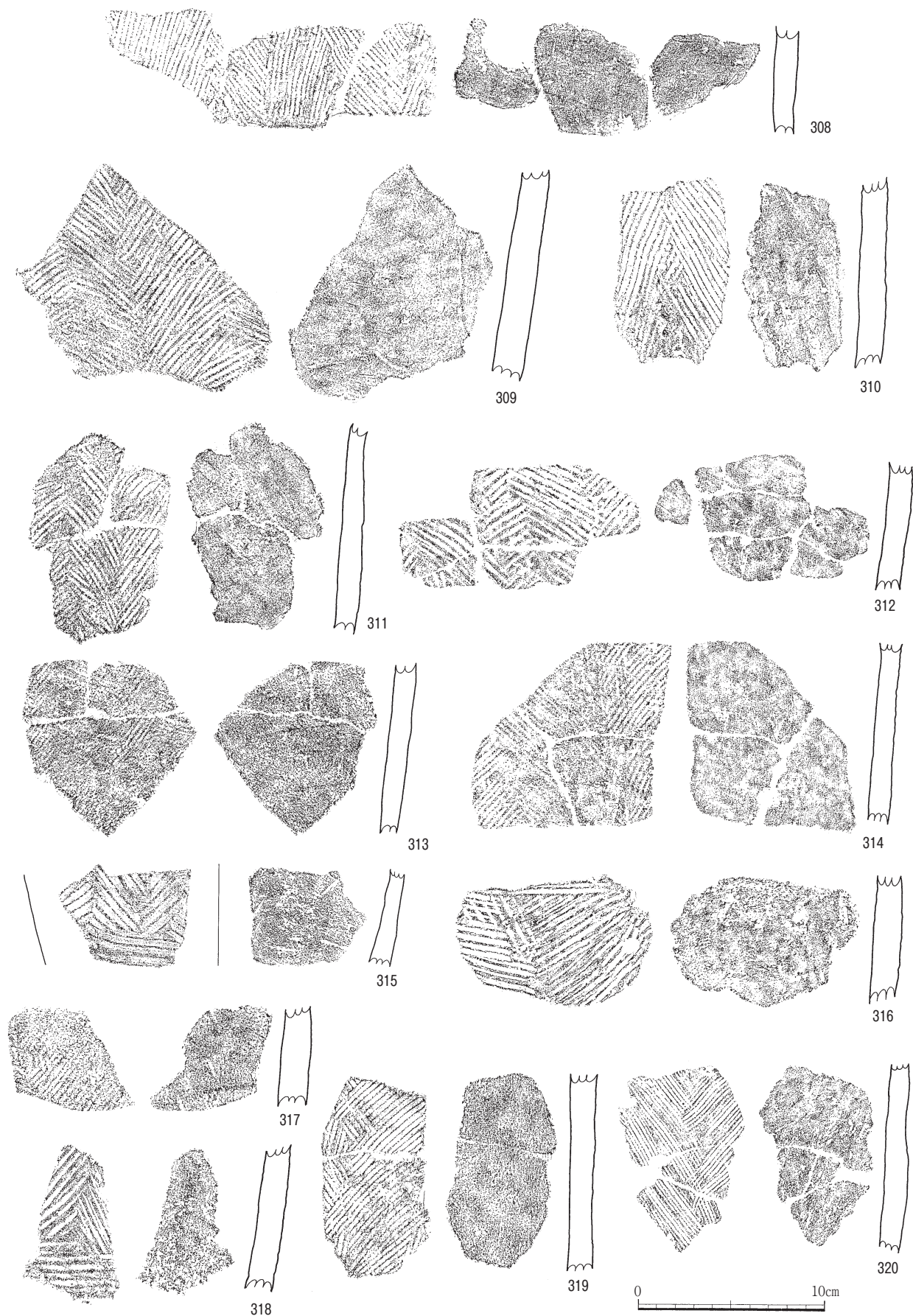
第51図 縄文時代早期 土器20（V類）



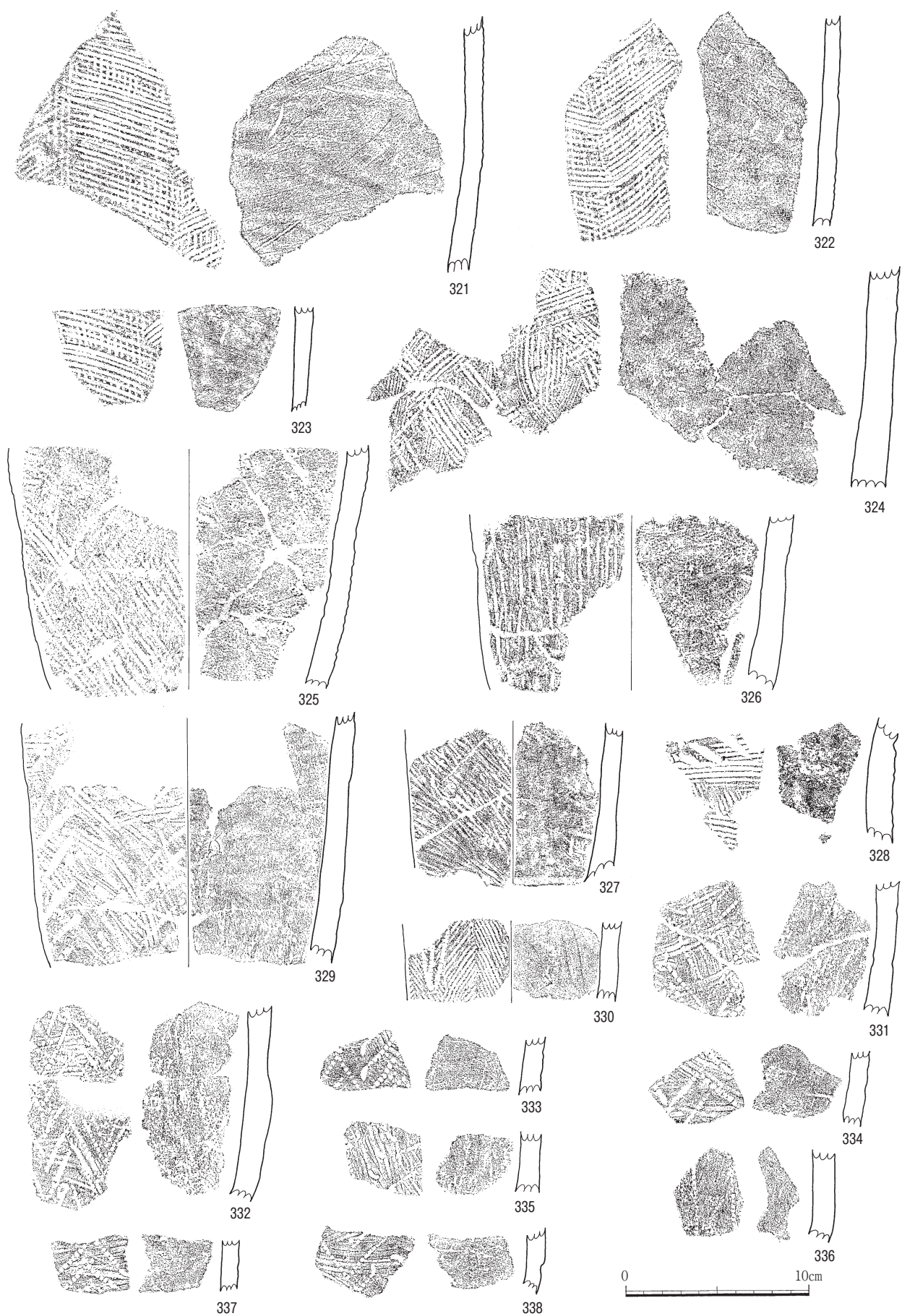
第52図 縄文時代早期 土器21 (V類)



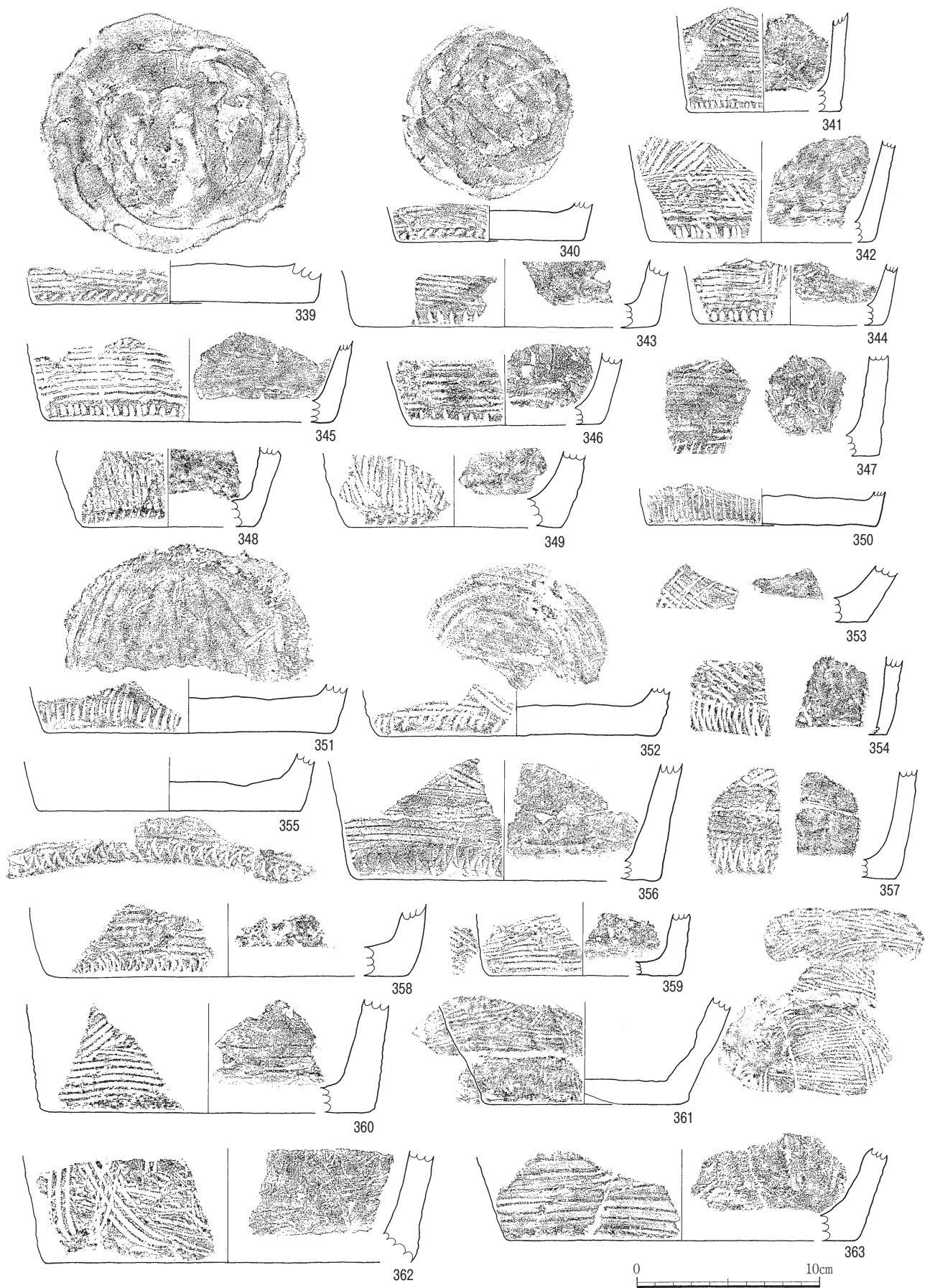
第53図 縄文時代早期 土器22 (V類)



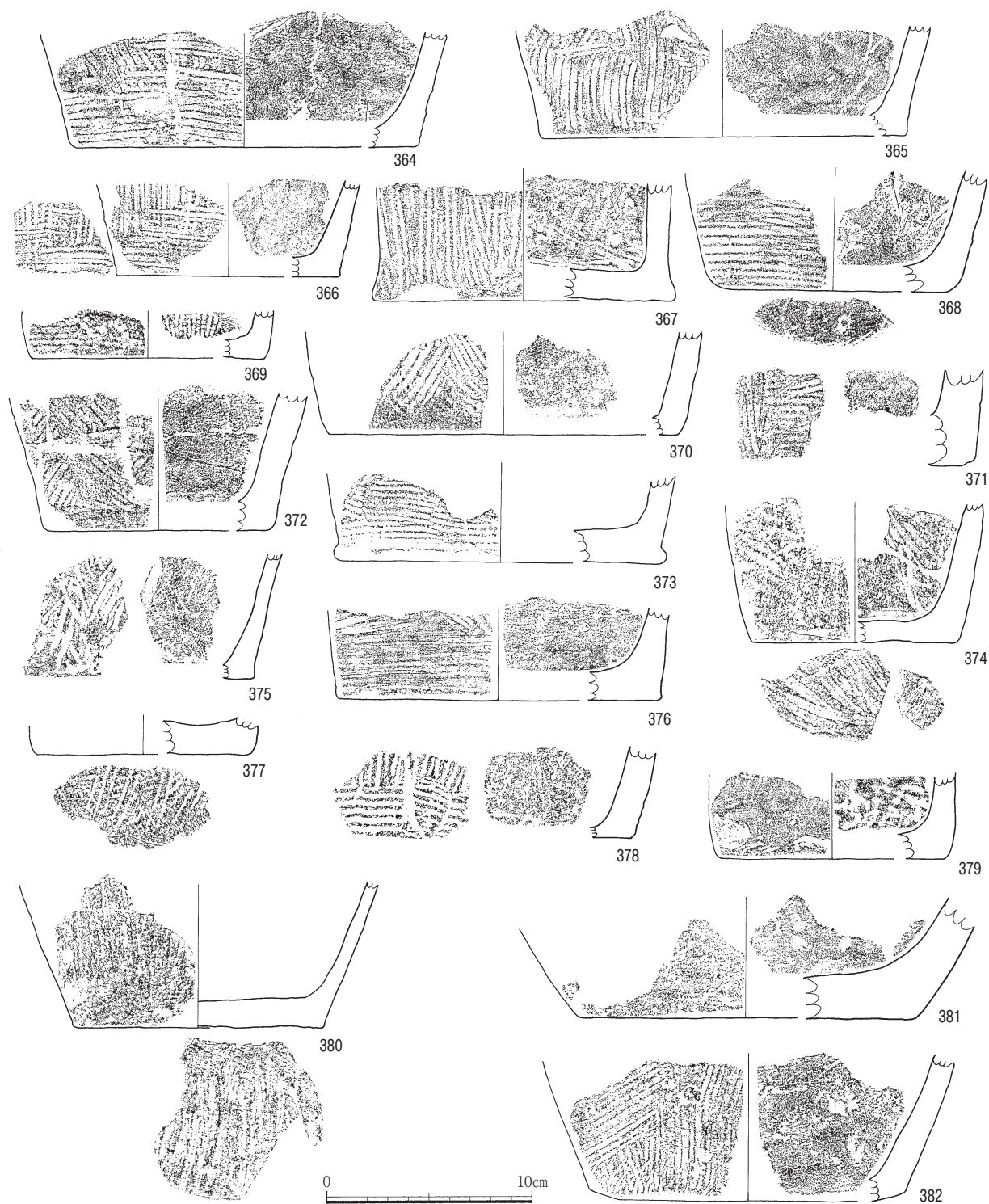
第54図 縄文時代早期 土器23 (V類)



第55図 縄文時代早期 土器24 (V類)



第56図 縄文時代早期 土器25 (V類)

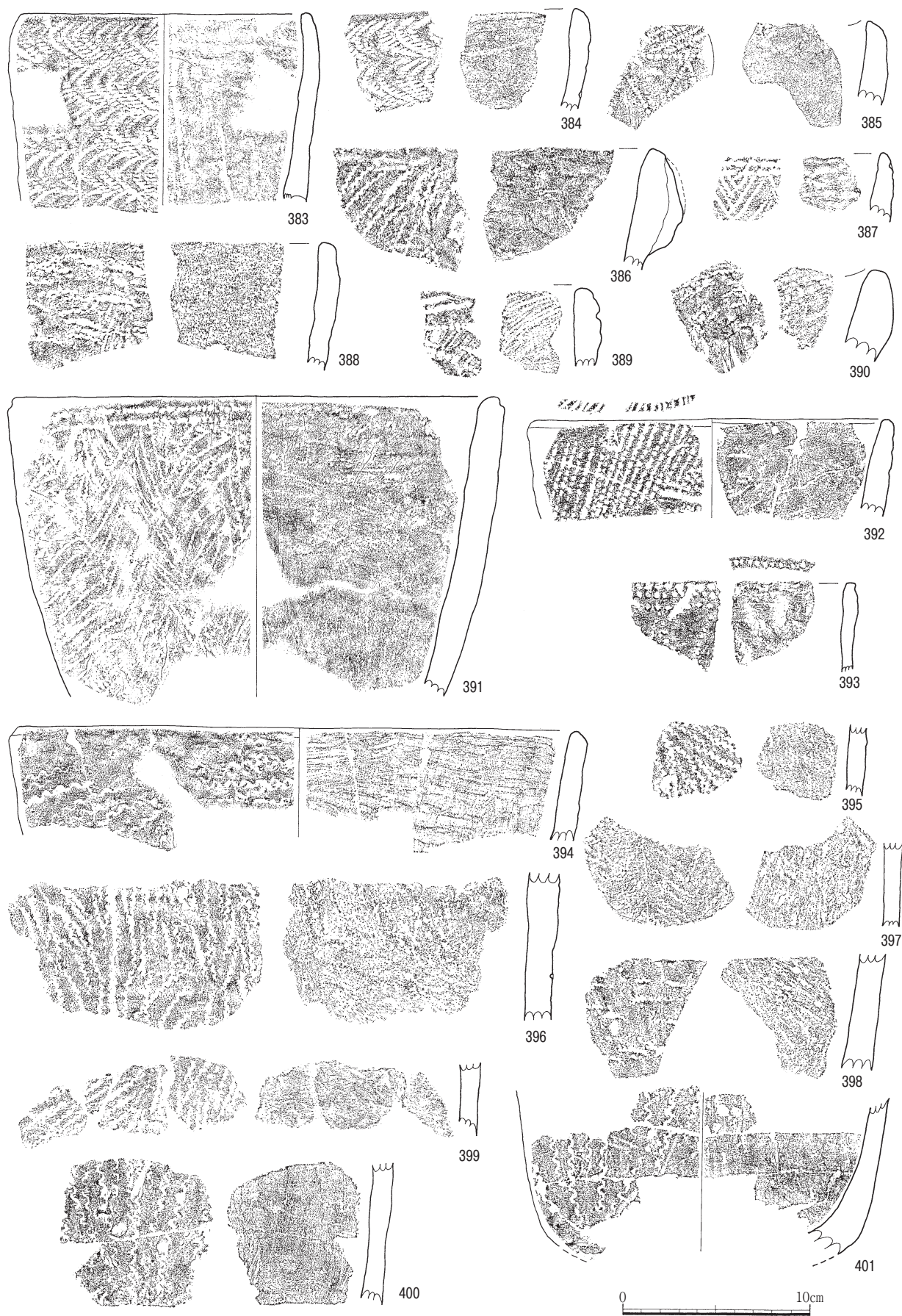


第57図 縄文時代早期 土器26 (V類)

しくはやや外反するものである。445～447, 449～452の口縁部内面の上端に山形の押型文が施されている。453～471は胴部である。472～474は底部である。

475～516は楕円の押型文土器である。475～491は

口縁部である。475・476は直行するものである。475は口縁部内面の上端に楕円形の押型文が施されている。また、円形の補修孔が穿たれている。477・478は膨らんだ胴部から口縁部にかけて窄まり外反する。479～490は口縁部が外反するものである。



第58図 縄文時代早期 土器27 (VI類)

481・484は口唇部に刻目が施されている。488・489は内面に楕円形の押型文が施され、外面はナデで調整されている。491は口縁部が窄まるものである。外面に楕円形の押型文が施されているが押型文部分の一部がなでて消されている。集石22から出土した。492～512は胴部である。495・506は外面の押型文が一部なでて消されている。513～516は底部である。517は完形品である。平底で胴部はまっすぐに立ち上がり口縁部は外反する。外面は山形の押型文と貝殻刺突文が不規則に施されている。口縁部内面上部に貝殻刺突文が施されている。底部外面は条痕文が施されている。518は苺の表面状の文様が施されている。

XI類土器（第70図 519～522）

XI類土器は口縁部が大きく外反し、頸部でくびれ、胴部中央部よりやや下方で「く」の字状に張り出す器形をもつ土器である。

519・521・522は山形の押型文が施されている。

521・522は同一個体である。520は上部に山形の押型文、下部に撚糸文が施されている。

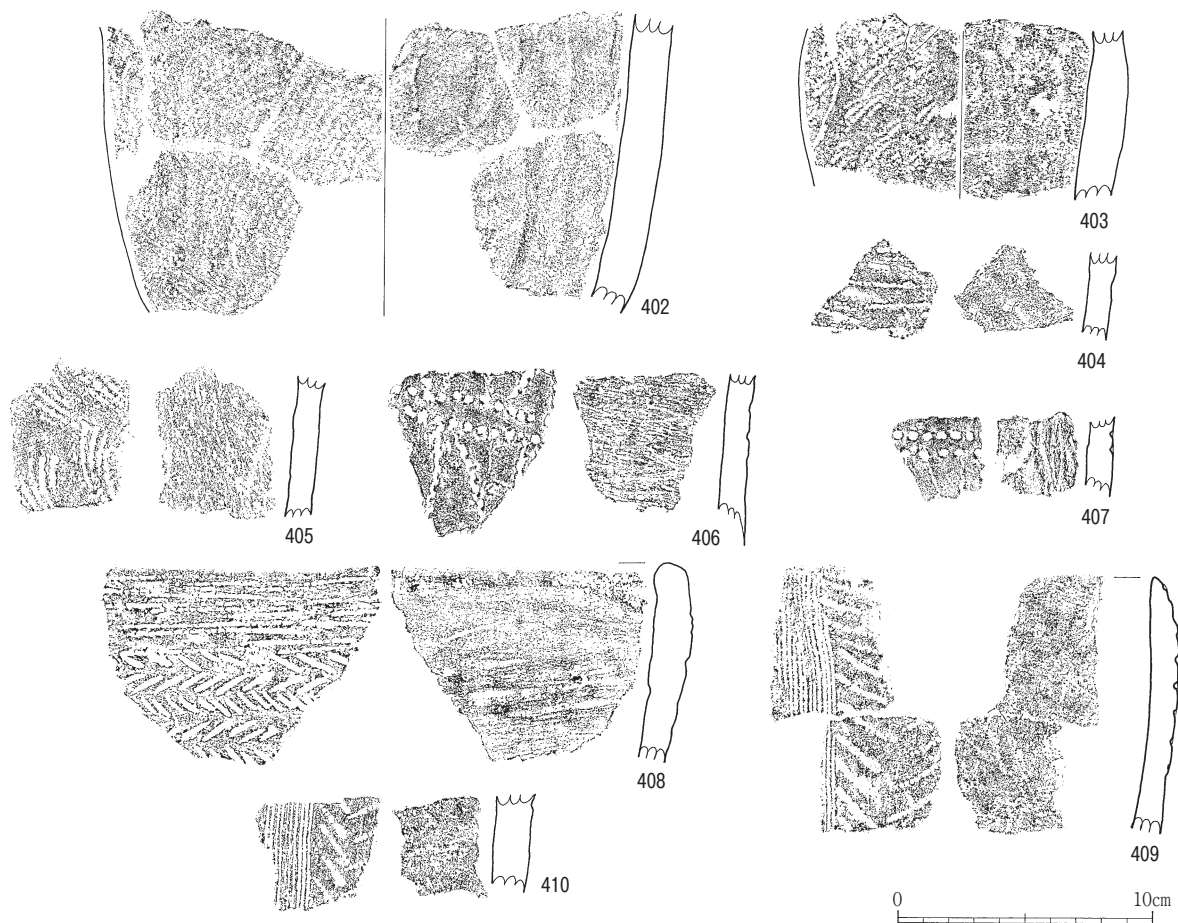
XII類土器（第70図 523～528）

XII類土器は縄文が施されているものである。523～527は口縁部である。523～526は口唇部に縄文が施され棒状の工具による連続した刺突文が施されている。524は集石18から出土した。528は胴部である。

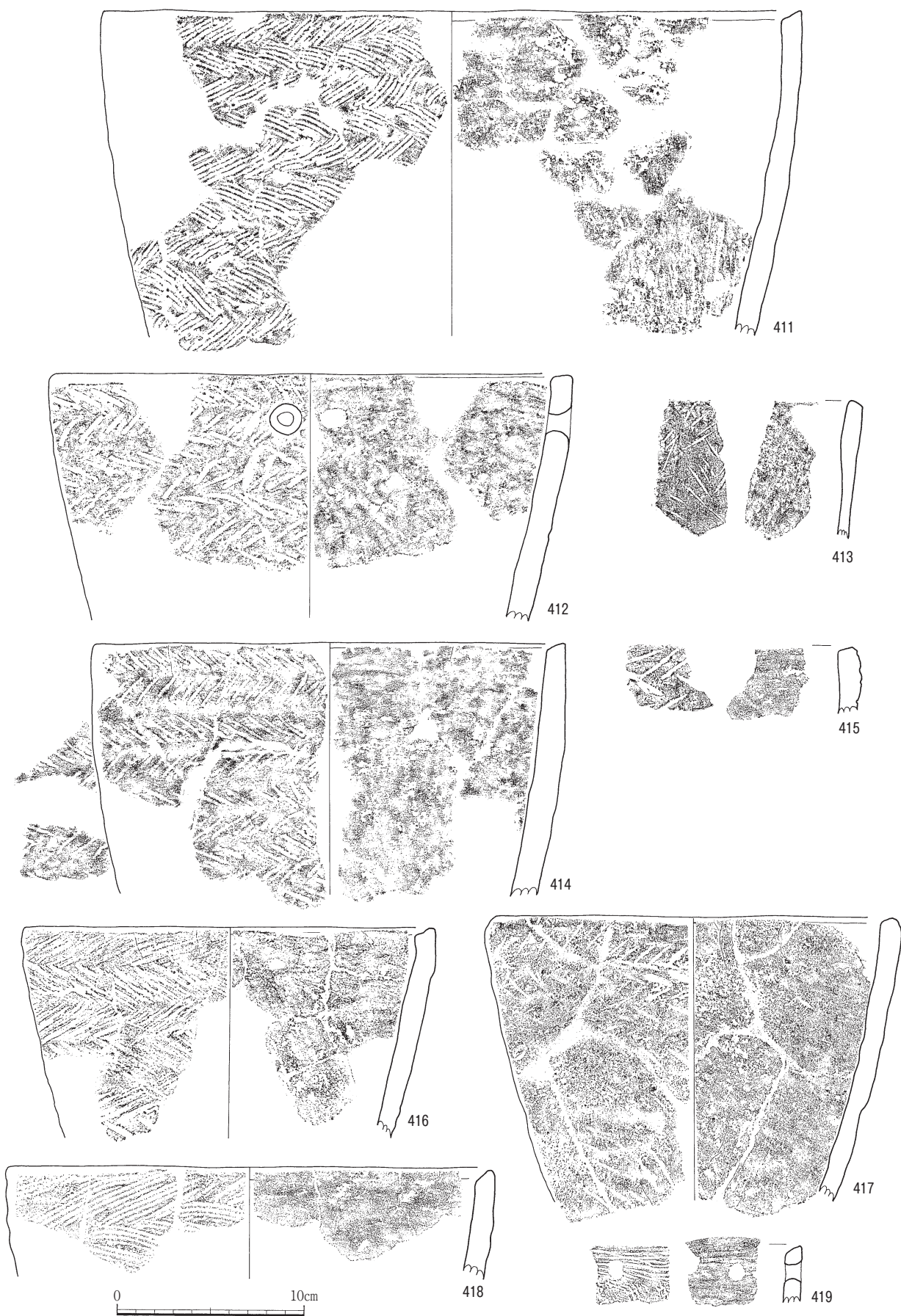
XIII類土器（第71図・第72図 529～556）

XIII類土器は、円筒形もしくは口縁部がラッパ状に開き、胴部は垂直に伸びる形態のものである。XIII類土器は文様により2つに分類した。XIII aは貝殻刺突文と条痕文が施されるものである。XIII bは沈線文と撚糸文が施されるものである。

529は完形である。口唇部は水平で口縁部上端に貝殻刺突文が施され細かな波状を呈する。胴部の上部に連続した貝殻刺突文が3条廻り、胴部下部には貝殻による沈線文が斜位に施されている。530・531は口縁部が大きく開き口唇部に貝殻刺突文が施され



第59図 縄文時代早期 土器28 (VI・VII類)



第60図 縄文時代早期 土器29 (Ⅷ類)

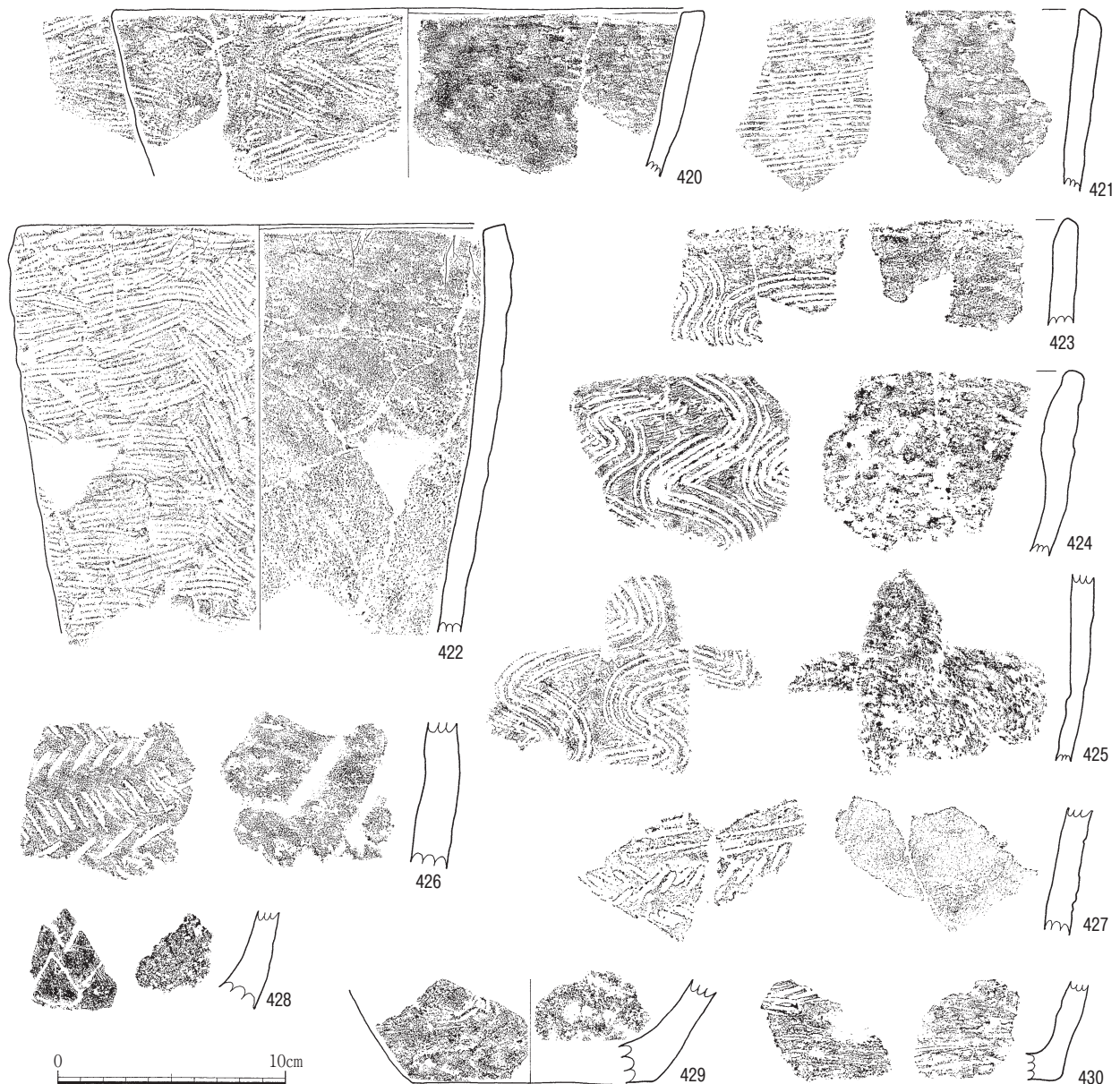
ている。口縁部上部に2～3条の沈線その下に連続した貝殻刺突文さらにその下に沈線が施されるものである。532～544は胴部である。532・533・535～537は貝殻刺突文の下に横位の沈線文が廻りその下に縦位の条痕文が施されるものである。538～544は貝殻もしくは櫛状の施文具により斜位、横位の条痕文が施されている。

545～550はラッパ状に開く口縁部である。口唇部に刻目が施されている。外面に数条の沈線文が施されている。551～556は胴部である。551は屈曲部分である。552・553は撚糸文が施され、沈線文が横位、

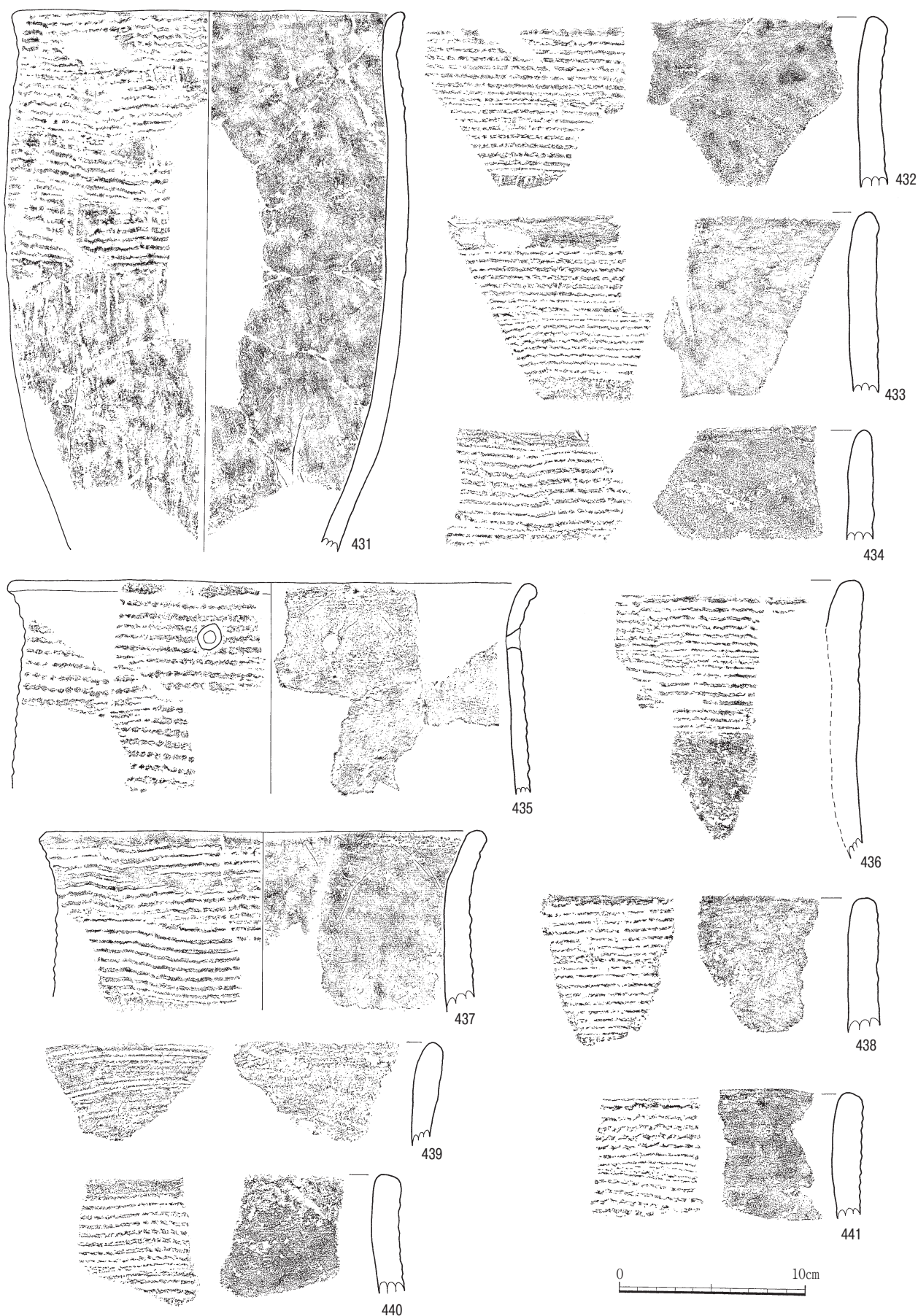
斜位に施され、刺突文が施されるものである。552の撚糸文は間隔を置きながら施されている。554、555は沈線区画を施文し、その区画内を撚糸文で充当するものである。556は撚糸文が施されている。

XV類土器（第73図 557～567）

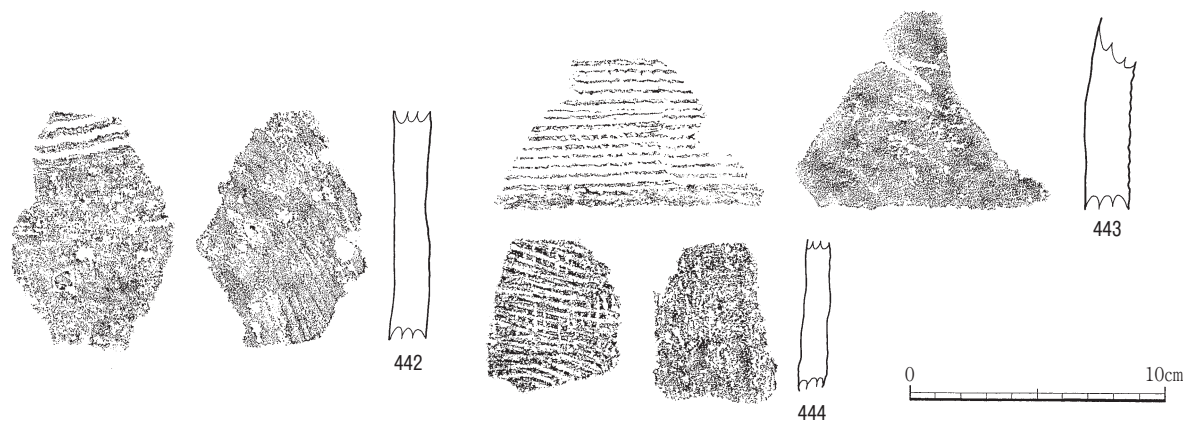
XV類土器は11点である。口縁部が緩やかに立ち上がり外面に条痕文が施されるものである。557～560は口縁部である。口縁部上端に横位の条痕文、その下に縦位、斜位の条痕文が施されている。561～566は胴部である。567は底部である。



第61図 縄文時代早期 土器30（Ⅷ類）



第62図 縄文時代早期 土器31 (Ⅸ類)



第63図 縄文時代早期 土器32（Ⅸ類）

XV類土器（第74図 568～572）

早期の特徴を持つものの、細分化が不可能なものを一括してXV類として扱った。568は斜位の条痕文が施されている。569は横位、縦位の条痕文が施されている。円形の補修孔が穿たれている。570は棒状の工具による刺突文が施されている。571は口縁

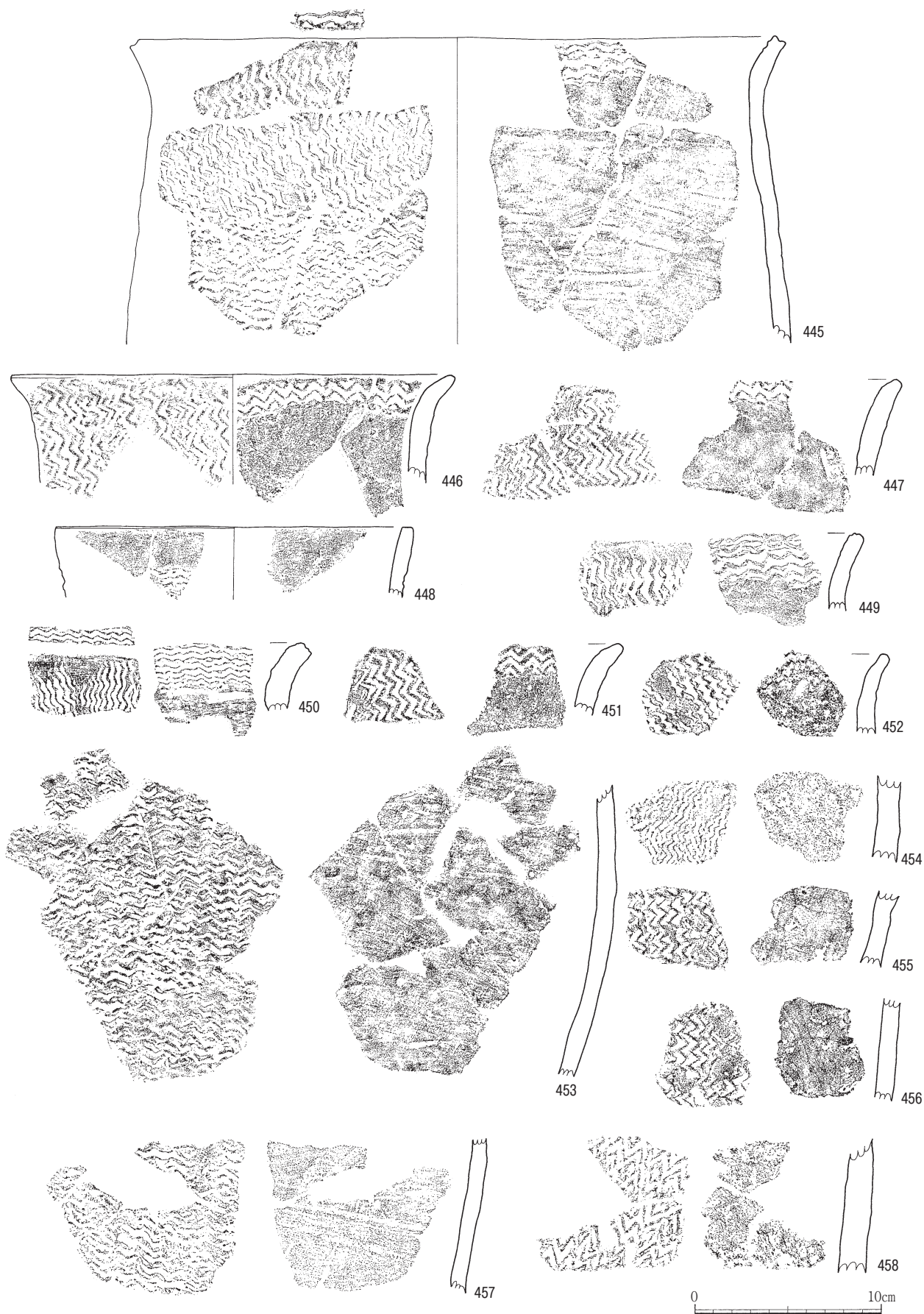
部上端に貝殻刺突が施されている。その結果、刺突文以外の部分に粘土の隆起が見られる。

XVII類土器（第74図 572・573）

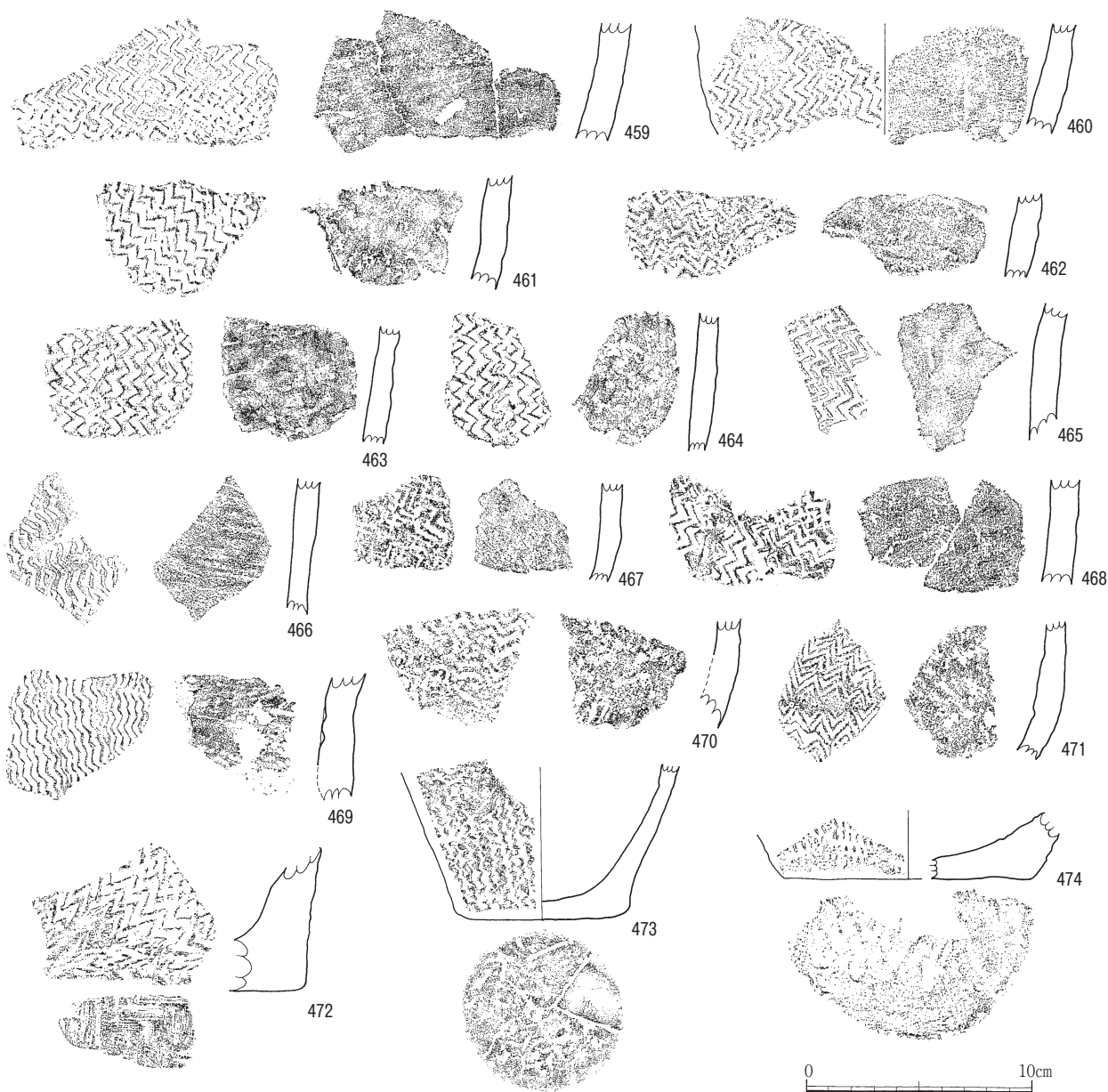
無文の土器をXVII類とした。572・573の2点である。円筒形で口縁部がやや開いている。

縄文時代早期土器観察表

挿図 番号	番号	出土区	層位	部位	色調		胎土				焼成	調整		類	備考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他		外面	内面		
第 32 図	44	M-14	Ⅳ	口縁部	橙	にぶい橙	○		○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	I	
	45	M-14	Ⅳ	口縁部	にぶい橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	I	
	46	M-13	Ⅳ	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	I	
	47	R-21	Ⅳ	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	I	
	48	N-14	Ⅳ	口縁部	橙	にぶい赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	I	
	49	M-14	Ⅳ	口縁部	黒褐	にぶい橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	I	
	50	M-13・14	Ⅳ	完形	橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ	I	
	51	L-14・15	Ⅳ	口縁部	赤褐	橙	○	○	○	微量	良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	貝殻条痕文・ヘラケズリ	I	
	52	N-15	Ⅳ	口縁部	橙	にぶい橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	I	
	53	N-14	Ⅳ	口縁部	にぶい橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	I	
	54	N-15	Ⅳ	口縁部	橙	にぶい赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	I	
	55	M-14	Ⅳ	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	I	
第 33 図	56	N-15	Ⅳ	口縁部	橙	にぶい橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ナデ	I	
	57	M-14	Ⅳ	口縁部	橙	橙	○		○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	貝殻条痕文	I	補修孔
	58	M-15	Ⅳ	口縁部	橙	にぶい赤褐	○	○			良	貝殻刺突文	貝殻条痕文・ナデ	I	
	59	N-14	Ⅳ	口縁部	黒褐	黒褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	貝殻条痕文	I	
	60	N-14	Ⅳ	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	貝殻条痕文	I	
	61	K-13	Ⅳ	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	I	
	62	K-13	Ⅳ	口縁部	にぶい橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	I	
	63	M-15	Ⅳ	口縁部	橙	橙	○		○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	I	朱塗り
	64	R-21	Ⅳ	口縁部	暗赤褐	赤褐	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	I	
	65	M-14	Ⅳ	胴部	暗赤褐	赤褐	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ	I	
	66	N-14	Ⅳ	胴部	黒褐	赤褐	○	○	○		良	貝殻条痕文	貝殻条痕文・ナデ	I	
	67	M-15	Ⅳ	胴部	にぶい橙	橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	I	
第 34 図	68	M-14	Ⅳ	胴部	にぶい橙	橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	貝殻条痕文	I	内面スス付着
	69	M-15	Ⅳ	底部	にぶい橙	橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	I	
	70	N-15	Ⅳ	底部	にぶい橙	にぶい橙	○	○			良	ナデ	ナデ	I	
	71	L-14	Ⅳ	底部	浅黄橙	橙	○	○	○		良	ナデ	ヘラケズリ	I	
	72	M-14	Ⅳ	底部	にぶい橙	橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	I	
	73	M-13	Ⅳ	口縁部	明赤褐	にぶい橙	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	II	
	74	M-14	Ⅳ	口縁部	赤褐	にぶい黄橙	○		○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	貝殻条痕文・ナデ	II	
	75	M-14	Ⅳ	口縁部	橙	橙	○		○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	貝殻条痕文	II	補修孔



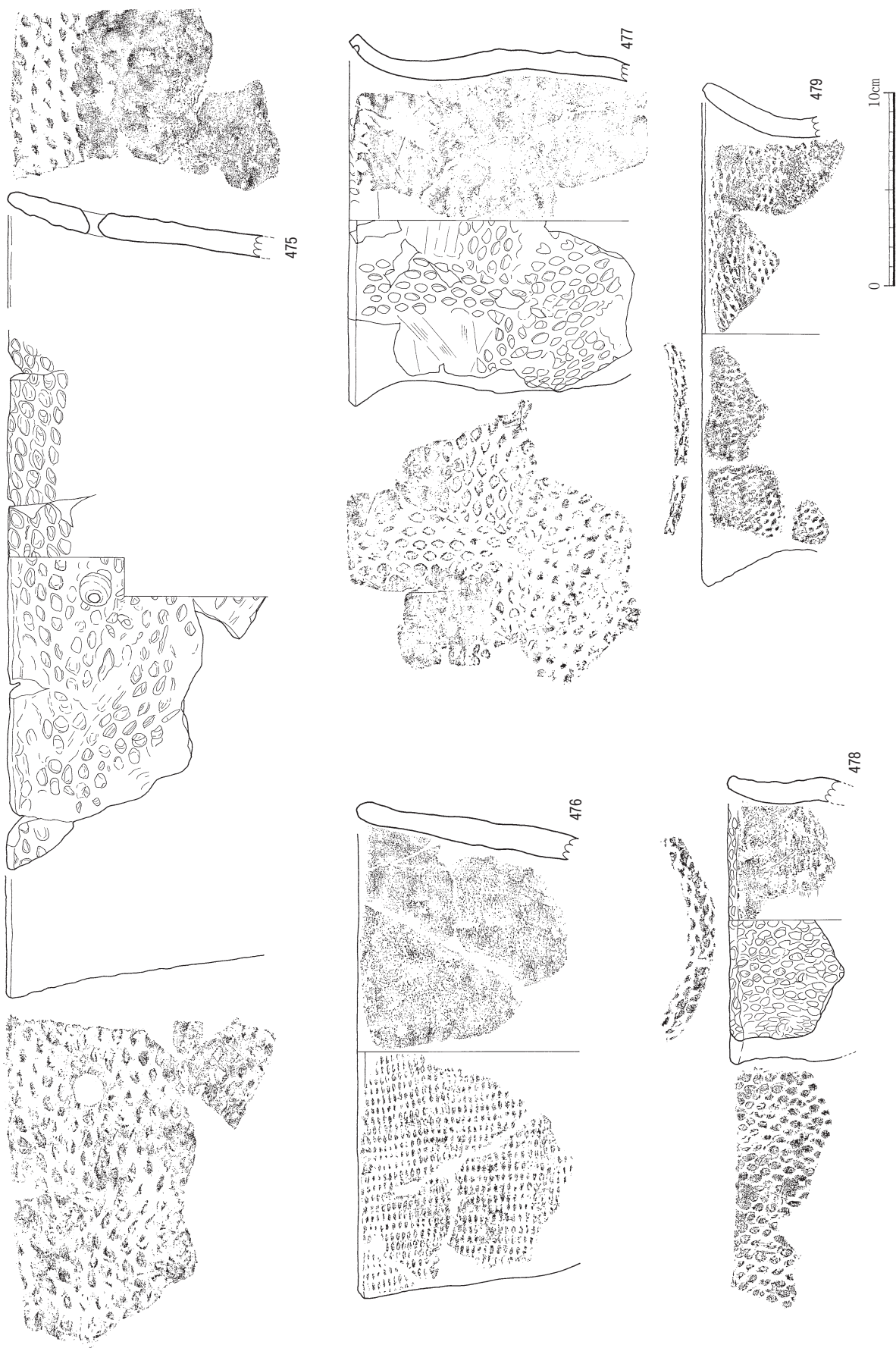
第64図 縄文時代早期 土器33 (X類)



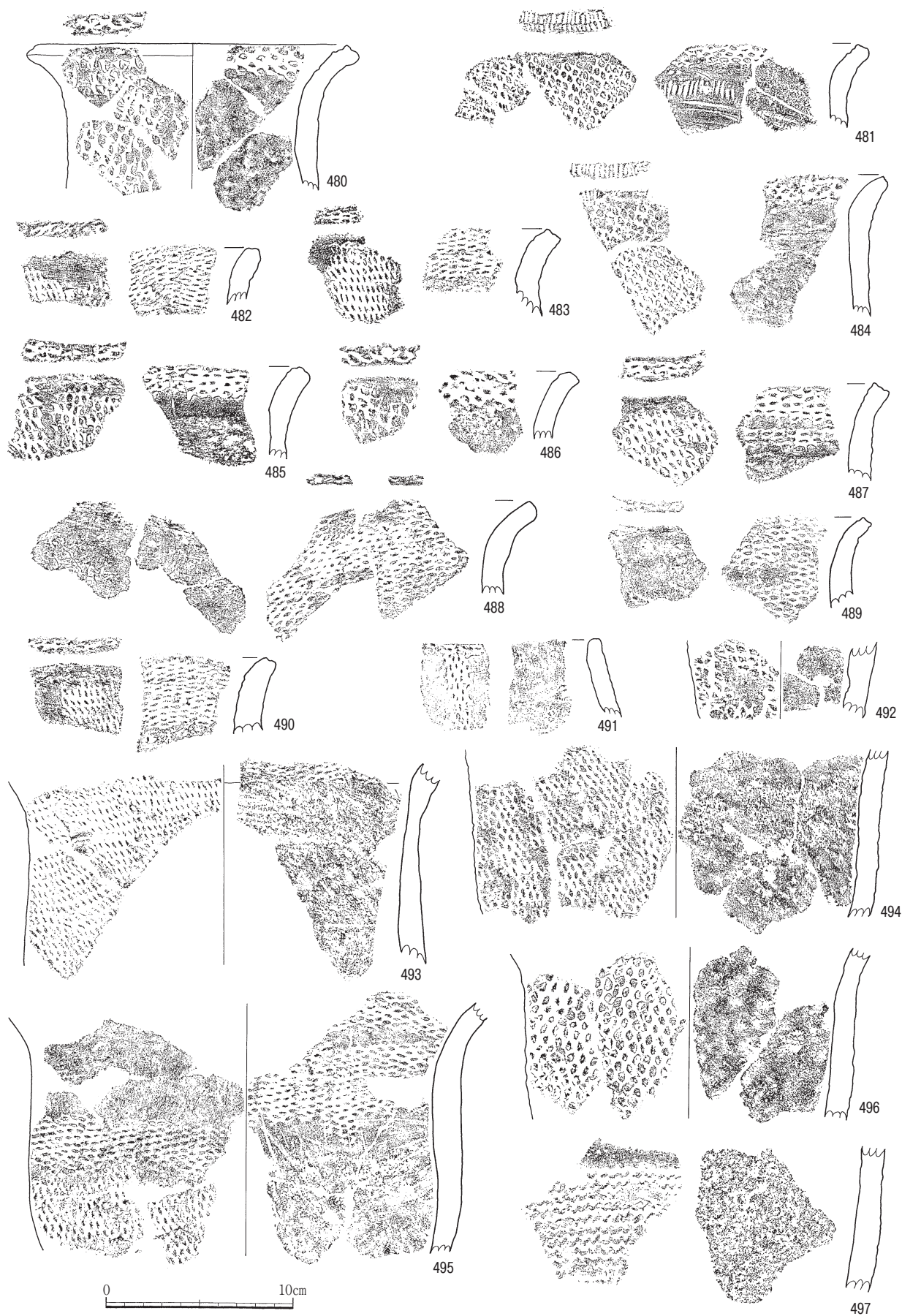
第65図 縄文時代早期 土器34（X類）

縄文時代早期土器観察表

挿図 番号	番号	出土区	層位	部位	色調		胎土				焼成	調整		類	備考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他		外面	内面		
第 34 図	76	M-14	IV	口縁部	褐灰	にぶい橙		○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ナデ	II	
	77	M-14	IV	口縁部	明褐灰	橙	○	○	○		良	ヘラによる刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	II	
	78	M-14	IV	口縁部	明赤褐	にぶい橙	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	II	
	79	M-14	IV	口縁部	橙	橙	○		○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	貝殻条痕文	II	
	80	N-14	IV	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	II	
	81	L-14	IV	口縁部	褐灰	赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	II	
	82	M-15	IV	口縁部	浅黄橙	赤	○	○			良	貝殻条痕文	ヘラケズリ	II	
	83	Q-20	IV	口縁部	黒褐	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	II	
	84	Q-21	IV	口縁部	にぶい橙	灰黄褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	II	
第 35 図	85	T-22	IV	口縁部	灰黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	棒状刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	II	
	86	M-13	IV	胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○			良	貝殻条痕文	貝殻条痕文	II	
	87	M-14	IV	胴部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	II	
	88	N・O-15	IV	口縁部	赤褐	赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	III	
	89	R-21	IV	口縁部	明赤褐	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	III	
	90	N-15	IV	口縁部	浅黄橙	灰黄褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	III	
	91	S-20	IV	口縁部	にぶい橙	赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	III	
	92	N-15	IV	口縁部	橙	明褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	III	



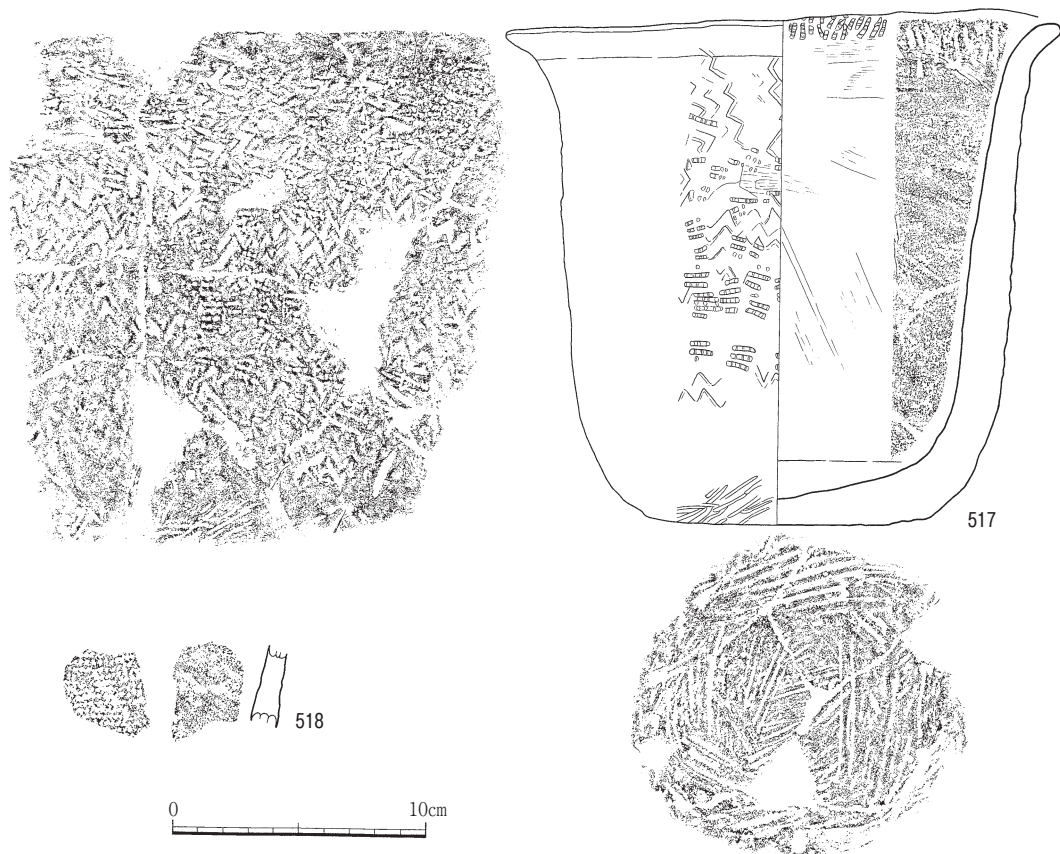
第66図 縄文時代早期 土器35 (X類)



第67図 縄文時代早期 土器36 (X類)



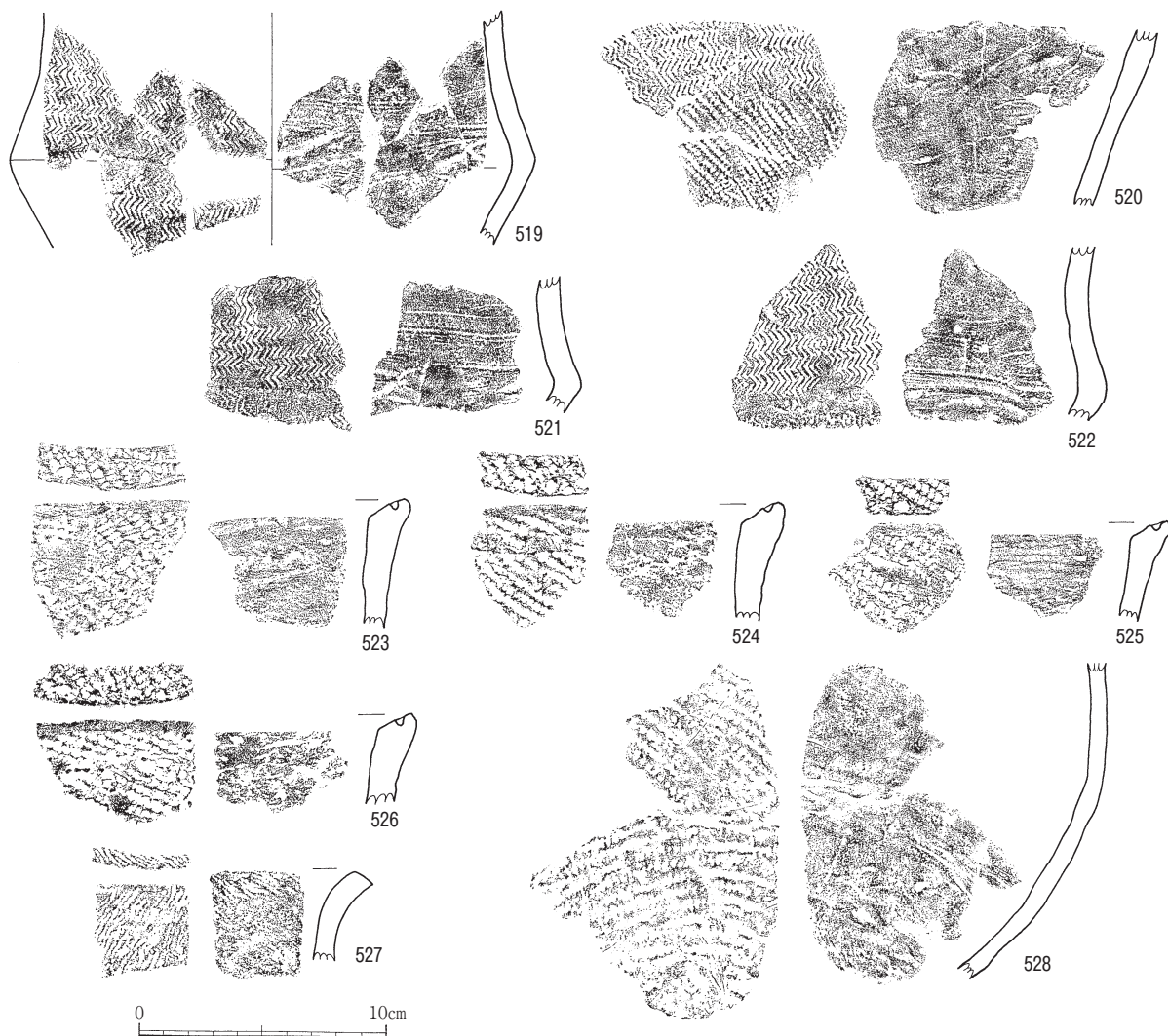
第68図 縄文時代早期 土器37 (X類)



第69図 縄文時代早期 土器38（X類）

縄文時代早期土器観察表

挿図 番号	番号	出土区	層位	部位	色調		胎土				焼成	調整		類	備考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他		外面	内面		
第 35 図	93	R-21	Ⅳ	口縁部	赤褐	にぶい赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅲ	
	94	N-15	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅲ	
	95	M-15	Ⅳ	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅲ	
	96	O-16	Ⅳ	口縁部	橙	橙			○		良	貝殻刺突文	ナデ	Ⅲ	
	97	P-21	Ⅳ	口縁部	赤褐	灰褐	○	○			良	貝殻刺突文	ナデ	Ⅲ	
	98	O-16	Ⅳ	口縁部	にぶい橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ナデ	Ⅲ	
	99	N-15	Ⅳ	胴部	にぶい赤褐	暗赤褐	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	補修孔
	100	O-16	Ⅳ	胴部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅲ	
	101	N-15	Ⅳ	胴部	赤褐	にぶい赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ナデ	Ⅲ	
	102	O-16	Ⅳ	胴部	橙	にぶい赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅲ	
第 36 図	103	N-15	Ⅳ	胴部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ナデ	Ⅲ	
	104	Q-21	Ⅳ	口縁部	橙	橙	○		○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅲ	
	105	N-15	Ⅳ	口縁部	橙	にぶい橙	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	106	S-20	Ⅳ	胴部	赤褐	褐灰	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	107	N-15・O-16	Ⅳ	胴部	にぶい橙	橙	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅲ	
	108	N-14	Ⅳ	胴部	暗灰黄	橙	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅲ	
	109	R-20	Ⅳ	胴部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	110	M-15	Ⅳ	胴部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅲ	
	111	O-15・16	Ⅳ	胴部	赤褐	灰黄褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	112	R-21	Ⅳ	胴部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	113	Q-20	Ⅳ	胴部	浅黄橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	114	S-20	Ⅳ	胴部	灰褐	にぶい橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	115	N-14・15	Ⅳ	胴部	浅黄橙	浅黄橙	○	○	○	小礫	良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	116	R-20	Ⅳ	胴部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅲ	
	117	R-19	Ⅳ	胴部	橙	橙	○		○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	118	N・O-16	Ⅳ	胴部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	119	N-15	Ⅳ	胴部	浅黄橙	浅黄橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	120	P-21	Ⅳ	胴部	にぶい黄橙	橙	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	121	N-15	Ⅳ	胴部	橙	橙	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	122	S-21	Ⅳ	胴部	赤褐	灰褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	123	M-15	Ⅳ	胴部	浅黄橙	褐灰	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	124	S-20	Ⅳ	胴部	にぶい橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅲ	
	125	N-15	Ⅳ	胴部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	



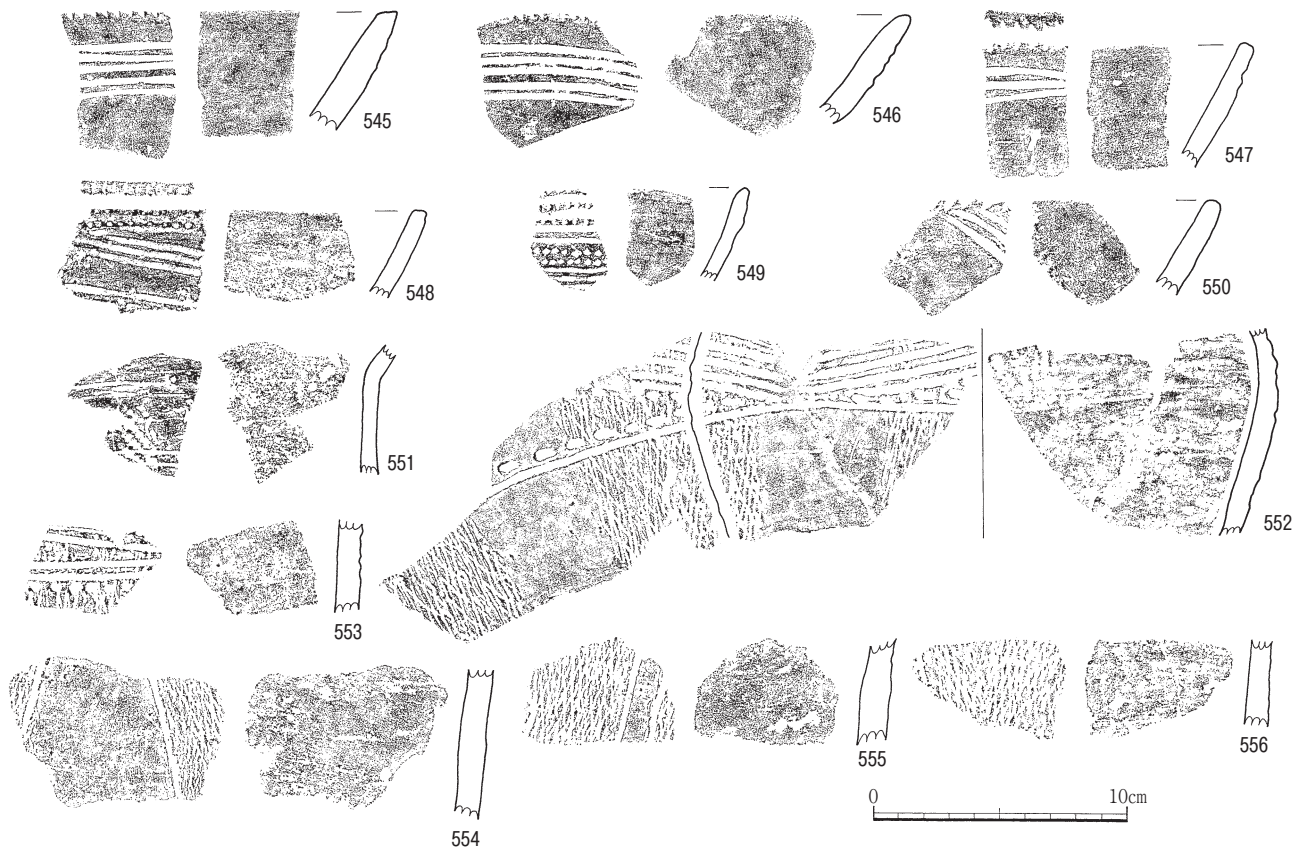
第70図 縄文時代早期 土器39 (XI・XII類)

縄文時代早期土器観察表

挿図 番号	番号	出土区	層位	部位	色調		胎土				焼成	調整		類	備考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他		外面	内面		
第 37 図	126	P-21	IV	口縁部	橙	にぶい橙	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅲ	補修孔
	127	N-15	IV	口縁部	褐灰	黒褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	128	Q-20	IV	口縁部	橙	橙	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	129	J-14	IV	胴部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	130	J-14	IV	胴部	橙	灰褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	131	J-14	IV	胴部	橙	にぶい橙	○				良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	132	J-14	IV	胴部	にぶい橙	橙	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	133	J-14	IV	胴部	暗褐	橙	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	134	J-14	IV	胴部	褐灰	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	135	P-20	IV	胴部	黒褐	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	136	N-15	IV	胴部	橙	にぶい橙		○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅲ	
	137	J-14	IV	胴部	黒褐	橙		○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅲ	
	138	N-15	IV	胴部	橙	橙	○		○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	139	N-15	IV	胴部	褐	黒褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	140	S-21	IV	底部	明黄褐	明黄褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	141	Q-20	IV	底部	明赤褐	赤褐	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅲ	
	142	M-15	IV	底部	橙	にぶい橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
第 38 図	143	O-15	IV	底部	橙	橙	○				良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	144	Q-20	IV	底部	橙	にぶい橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅲ	
	145	O-15	IV	底部	にぶい橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	146	O-16	IV	底部	橙	橙	○	○	○		良		ナデ	Ⅲ	
	147	N-15	IV	口縁部	橙	にぶい橙	○	○	○		良	貝殻押引文	ヘラケズリ後ナデ	IV	
	148	N-15	IV	口縁部	明赤褐	にぶい橙			○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	IV	
	149	Q-20	IV	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	押引文	ヘラケズリ後ナデ	IV	



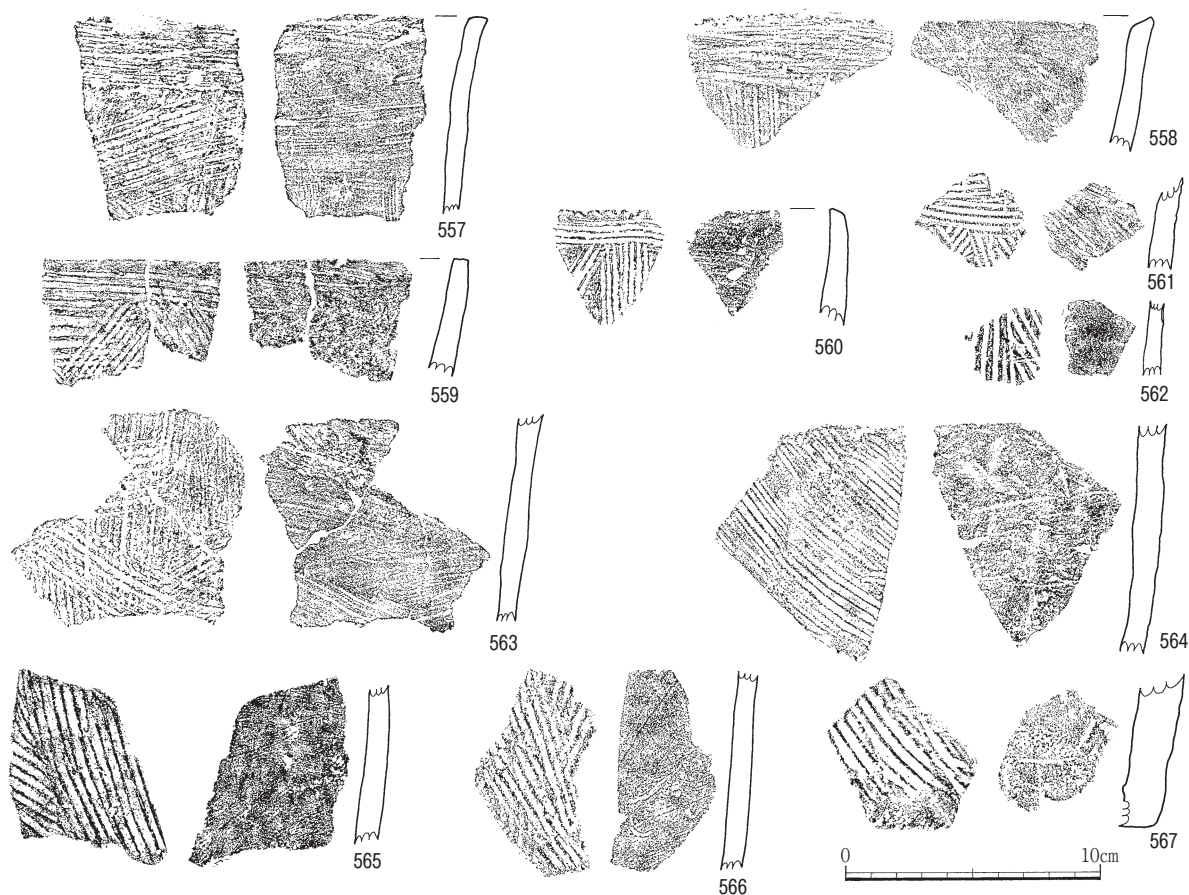
第71図 縄文時代早期 土器40 (XIII類)



第72図 縄文時代早期 土器41 (ⅫⅢ類)

縄文時代早期土器観察表

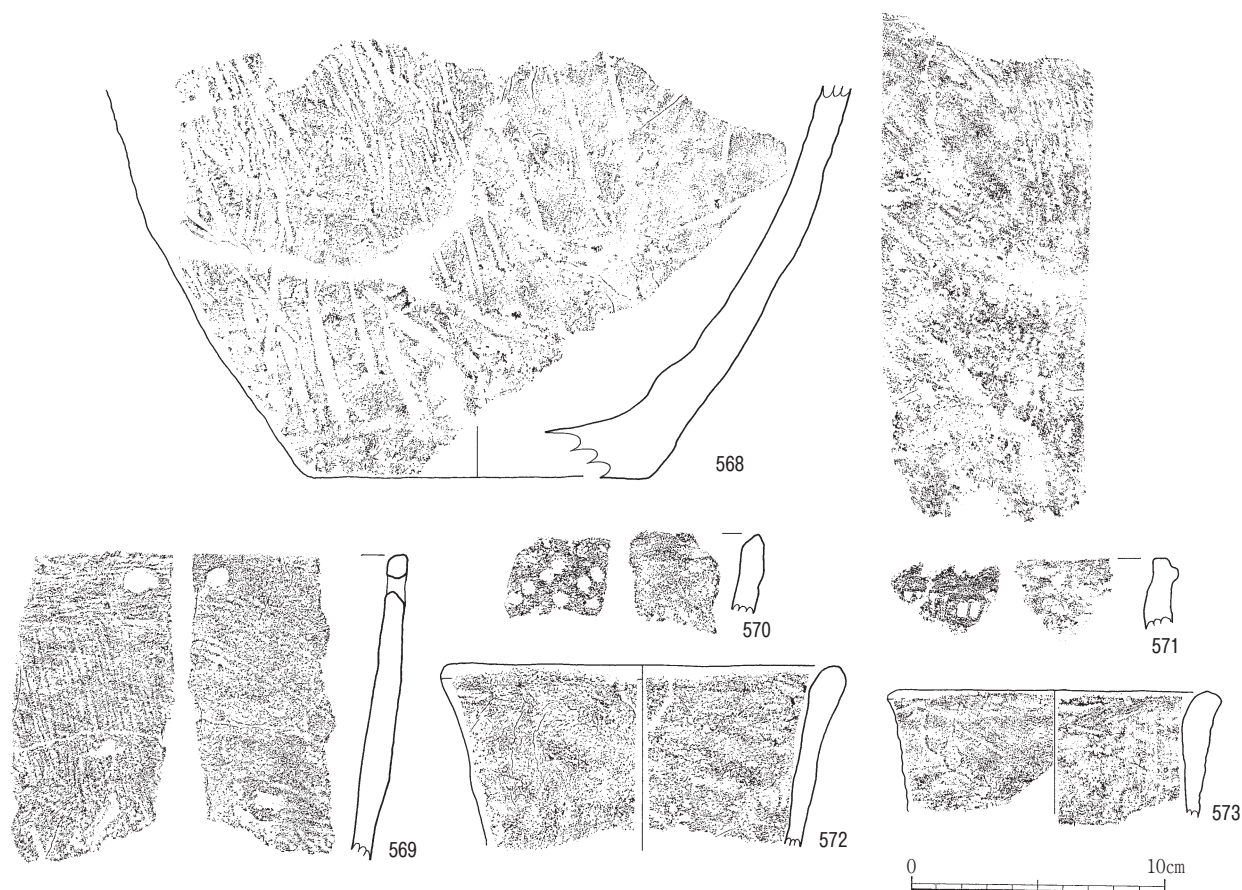
挿図 番号	番号	出土区	層位	部位	色調		胎土				焼成	調整		類	備考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他		外面	内面		
第 38 図	150	N-15	Ⅳ	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	○		○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅳ	
	151	O-16	Ⅳ	口縁部	明赤褐	にぶい橙	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅳ	
	152	R・S-20	Ⅳ	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅳ	
	153	R-18	Ⅳ	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅳ	
	154	P-21	Ⅳ	胴部	橙	にぶい橙	○		○		良	押引文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅳ	
	155	N-15	Ⅳ	胴部	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○		良	押引文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅳ	
	156	N-15	Ⅳ	胴部	にぶい赤褐	にぶい褐	○	○			良	押引文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅳ	
第 39 図	157	O-16	Ⅳ	胴部	明赤褐	明赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅳ	
	158	N-15	Ⅳ	口縁部	にぶい橙	明赤褐	○	○	○		良	押引文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅳ	
	159	N-15	Ⅳ	口縁部	橙	明褐	○	○	○		良	押引文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅳ	
	160	N-15	Ⅳ	胴部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻押引文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅳ	
	161	N-15	Ⅳ	胴部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻押引文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅳ	
	162	N-15	Ⅳ	胴部	橙	橙	○		○		良	貝殻押引文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅳ	
	163	R-19	Ⅳ	胴部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻押引文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅳ	
	164	N-15	Ⅳ	胴部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻押引文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅳ	
	165	N-15	Ⅳ	胴部	橙	橙	○		○		良	貝殻押引文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅳ	
	166	N-15	Ⅳ	胴部	橙	橙	○	○			良	貝殻押引文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅳ	
	167	N-15	Ⅳ	胴部	橙	橙	○		○		良	貝殻押引文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅳ	
	168	N-15	Ⅳ	胴部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻押引文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅳ	
	169	N-15	Ⅳ	胴部	橙	橙	○		○		良	貝殻押引文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅳ	
	170	N-15	Ⅳ	底部	浅黄橙	橙	○	○	○		良	貝殻押引文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅳ	
	171	N-15	Ⅳ	底部	橙	橙	○	○			良	貝殻押引文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅳ	
	172	R-17	Ⅳ	底部	橙	橙	○	○			良	貝殻押引文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅳ	
	173	N-15	Ⅳ	底部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻押引文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅳ	
第 40 図	174	Q-20	Ⅳ	口縁部	橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	175	O-21	Ⅳ	口縁部	赤褐	明赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	176	R-20	Ⅳ	口縁部	明褐	橙	○	○			良	貝殻刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	177	S-21	Ⅳ	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	178	P-19	Ⅳ	口縁部	橙	黒褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	179	P-21・Q-20	Ⅳ	口縁部	赤褐	暗褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	180	Q-19	Ⅳ	口縁部	橙	にぶい橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	181	R-19	Ⅳ	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	



第73図 縄文時代早期 土器42 (XV類)

縄文時代早期土器観察表

挿図 番号	番号	出土区	層位	部位	色調		胎土				焼成	調整		類	備考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他		外面	内面		
第 40 図	182	S-18	Ⅳ	口縁部	暗赤褐	暗赤褐	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	183	R-20・S-21	Ⅳ	口縁部	暗赤褐	にぶい赤褐	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	184	Q-19	Ⅳ	口縁部	赤褐	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	185	R-20	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	灰黄褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	186	Q-17・18	Ⅳ	口縁部	橙	灰黄褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	187	Q-19	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	明赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	188	S-20	Ⅳ	口縁部	にぶい赤褐	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	189	Q-19	Ⅳ	口縁部	にぶい赤褐	黒褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・竹管文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	190	P-20	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
第 41 図	191	Q-19・20	Ⅳ	口縁部	浅黄橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	192	Q-20	Ⅳ	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻条痕文・綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	193	P・Q-20	Ⅳ	口縁部	明赤褐	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	194	P-21	Ⅳ	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	補修孔
	195	M-14	Ⅳ	口縁部	橙	にぶい赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ナデ	V	
	第 42 図	196	Q-20	Ⅳ	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V
197		Q-19	Ⅳ	口縁部	暗褐	にぶい褐	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
198		Q-19・20	Ⅳ	口縁部	赤褐	赤褐	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
199		R-21	Ⅳ	口縁部	黄褐	灰褐	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
200		S-20	Ⅳ	口縁部	橙	灰褐	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
201		P-21	Ⅳ	口縁部	橙	橙	○		○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
202		P-19	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	灰黄褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
203		Q-19・P-21	Ⅳ	口縁部	にぶい橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
204		R-21	Ⅳ	口縁部	赤褐	にぶい赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	V	
205		Q-20	Ⅳ	口縁部	橙	褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	V	
206		R-21	Ⅳ	口縁部	灰褐	褐	○	○			良	貝殻刺突文	ナデ	V	
207		Q-20	Ⅳ	口縁部	赤褐	褐	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	V	
第 43 図	208	R-21	Ⅳ	口縁部	明黄褐	黒褐	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	209	Q-21	Ⅳ	完形	にぶい橙	橙	○	○	○		良	貝殻条痕文・綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	V	
	210	P-16	Ⅳ	口縁部	橙	橙	○	○			良	貝殻刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	V	補修孔
	211	Q-20	Ⅳ	口縁部	明赤褐	赤褐	○	○			良	貝殻刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	212	-	Ⅳ	口縁部	橙	にぶい橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	



第74図 縄文時代早期 土器43 (XV・XVI類)

縄文時代早期土器観察表

挿図 番号	番号	出土区	層位	部位	色調		胎土				焼成	調整		類	備考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他		外面	内面		
第43 図	213	R-21	IV	口縁部	黒褐	赤褐	○	○		小礫	良	貝殻刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	214	Q-19	IV	口縁部	にぶい黄褐	にぶい褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	215	Q-19	IV	口縁部	にぶい赤褐	黒褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	216	O-15	IV	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	V	
	217	Q-19	IV	口縁部	赤褐	にぶい褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	218	Q-20	IV	口縁部	にぶい黄橙	黒褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・沈線文	ヘラケズリ後ナデ	V	
第44 図	219	Q・R-21	IV	口縁部	明赤褐	明赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	補修孔
	220	P-21・Q-19	IV	口縁部	橙	褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	221	P-20・Q-19	IV	口縁部	にぶい赤褐	赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	222	Q-19	IV	完形	橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	V	
	223	Q-19	IV	口縁部	にぶい赤褐	にぶい橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	224	Q-20	IV	口縁部	灰黄褐	灰	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
第45 図	225	Q-19	IV	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	226	Q-21	IV	完形	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	227	Q-20	IV	口縁部	暗灰黄	暗灰黄	○	○	○		良	貝殻刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	228	Q-19	IV	口縁部	にぶい橙	浅黄橙	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	229	Q-19	IV	口縁部	灰褐	灰褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ナデ	V	
	230	Q-19	IV	口縁部	にぶい黄橙	にぶい橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
第46 図	231	R-21	IV	口縁部	にぶい褐	にぶい赤褐	○	○			良	貝殻刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	補修孔
	232	P-21	IV	口縁部	褐灰	褐灰	○	○	○		良	貝殻刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	233	Q-21	IV	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	234	Q-19	IV	口縁部	赤褐	暗赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	235	P・Q-19	IV	口縁部	にぶい橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	236	Q-19	IV	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	237	P-21	IV	口縁部	明赤褐	にぶい赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	238	O-21	IV	口縁部	にぶい褐	にぶい橙	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	V	
第47 図	239	Q-19	IV	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	240	P-21	IV	口縁部	にぶい褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	241	R-21	IV	口縁部	褐	灰褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	242	-	IV	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	

縄文時代早期土器観察表

挿図 番号	番号	出土区	層位	部位	色調		胎土				焼成	調整		類	備考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他		外面	内面		
第 47 図	243	Q-20	Ⅳ	口縁部	灰黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・縹杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	244	Q-20	Ⅳ	口縁部	橙	褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ナデ	V	
	245	Q-20	Ⅳ	口縁部	褐	黒褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	246	R-19	Ⅳ	口縁部	灰褐	にぶい赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	247	R-18	Ⅳ	口縁部	黄橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・縹杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	V	
	248	P-19・Q-20	Ⅳ	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・縹杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	249	Q-20	Ⅳ	口縁部	にぶい褐	にぶい赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	250	R-21	Ⅳ	口縁部	黒褐	黒褐	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	251	S-20	Ⅳ	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○		良	貝殻条痕文	ナデ	V	
	252	R-19	Ⅳ	口縁部	にぶい橙	にぶい赤褐	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
第 48 図	253	Q-20	Ⅳ	口縁部	暗赤褐	赤褐	○	○			良	貝殻刺突文・縹杉状貝殻条痕文	ナデ	V	
	254	Q-20	Ⅳ	口縁部	褐灰	橙	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	255	Q-19	Ⅳ	口縁部	橙	にぶい橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	256	R-21	Ⅳ	口縁部	明赤褐	明赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	257	Q-19	Ⅳ	口縁部	浅黄	にぶい黄橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	258	P-20	Ⅳ	口縁部	暗赤褐	赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・縹杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	259	Q-21	Ⅳ	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	260	E-10	Ⅳ	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	261	Q-19	Ⅳ	口縁部	橙	にぶい赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
第 49 図	262	R-20	Ⅳ	口縁部	にぶい赤褐	明赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	263	Q-21	Ⅳ	口縁部	灰褐	暗赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	264	S-20	Ⅳ	口縁部	にぶい橙	橙	○	○			良	貝殻刺突文・縹杉状貝殻条痕文	ナデ	V	
	265	S-21	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	266	S-20	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	267	R-21	Ⅳ	口縁部	褐	褐	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	268	R-20	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	にぶい橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	269	S-20	Ⅳ	口縁部	橙	にぶい黄	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	270	S-20	Ⅳ	口縁部	灰黄褐	にぶい橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
第 50 図	271	Q-19	Ⅳ	口縁部	浅黄橙	橙	○				良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	272	S-21	Ⅳ	口縁部	橙	黒褐	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	V	
	273	Q・S-19	Ⅳ	口縁部	暗赤褐	暗赤	○	○	○		良	貝殻刺突文・縹杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	274	S-21	Ⅳ	口縁部	灰褐	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	V	補修孔
	275	R-20・21	Ⅳ	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	V	
	276	N-15	Ⅳ	口縁部	暗褐	にぶい黄橙	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	277	S-20	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	橙	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	278	S-21・T-20	Ⅳ	口縁部	黒褐	橙	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	V	
	279	S-20	Ⅳ	口縁部	にぶい橙	橙	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
第 51 図	280	S-20	Ⅳ	口縁部	にぶい橙	橙	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	281	S-21	Ⅳ	口縁部	橙	にぶい橙	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	282	S-21	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	にぶい橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	V	
	283	Q-19	Ⅳ	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・縹杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	284	Q-19	Ⅳ	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	285	R-20	Ⅳ	口縁部	褐灰	褐灰	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	286	Q-19	Ⅳ	口縁部	赤	赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・縹杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	287	Q-19	Ⅳ	口縁部	橙	にぶい橙	○		○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	288	Q-20	Ⅳ	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・縹杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
第 52 図	289	Q-19	Ⅳ	口縁部	黒褐	黒褐	○	○			良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	290	Q-19・R-18・21	Ⅳ	口縁部	橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・縹杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	291	S-20	Ⅳ	口縁部	赤	にぶい黄褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・縹杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	292	S-20	Ⅳ	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	293	S-20	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄	○	○			良	貝殻刺突文・縹杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	294	S-21	Ⅳ	口縁部	赤褐	褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	295	Q-21	Ⅳ	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	296	S-20	Ⅳ	口縁部	灰黄褐	にぶい黄橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	297	S-21	Ⅳ	口縁部	褐	黒褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ	V	
第 53 図	298	R-18	Ⅳ	口縁部	橙	橙	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	299	R-21	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	褐灰	○	○			良	貝殻条痕文	ヘラケズリ	V	
	300	R-21	Ⅳ	口縁部	暗灰黄	暗灰黄	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	V	
	301	T-22	Ⅳ	口縁部	黒褐	黒褐	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	302	R-19	Ⅳ	胴部	暗赤褐	橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	303	S-20	Ⅳ	胴部	褐	褐		○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	304	M-15	Ⅳ	胴部	にぶい褐	にぶい橙	○	○			良	貝殻条痕文	ヘラケズリ	V	
	305	Q-19	Ⅳ	胴部	赤褐	褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・縹杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	306	Q-19	Ⅳ	胴部	暗灰黄	にぶい橙		○	○		良	貝殻刺突文・縹杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
第 54 図	307	R・S-21	Ⅳ	胴部	灰黄褐	にぶい橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	308	Q-19	Ⅳ	胴部	橙	橙	○	○			良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	309	S-21	Ⅳ	胴部	褐	橙		○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	310	Q-19	Ⅳ	胴部	赤褐	橙	○				良	貝殻条痕文	ヘラケズリ	V	

縄文時代早期土器観察表

挿図 番号	番号	出土区	層位	部位	色調		胎土				焼成	調整		類	備考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他		外面	内面		
第54図	311	R-20	Ⅳ	胴部	赤褐	橙		○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	312	R-19	Ⅳ	胴部	赤	赤褐	○				良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	313	P-21	Ⅳ	胴部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	集石24から出土
	314	Q-20	Ⅳ	胴部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	315	Q-19	Ⅳ	胴部	橙	橙	○	○			良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	V	
	316	P-21	Ⅳ	胴部	黒褐	にぶい橙	○	○	○		良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	317	-	-	胴部	赤	赤	○				良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	318	-	-	胴部	黒褐	黄褐	○	○			良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ ナデ	V	
	319	Q-20	Ⅳ	胴部	橙	橙			○		良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	320	Q-19	Ⅳ	胴部	赤褐	赤褐	○	○	○		良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
第55図	321	Q-19	Ⅳ	胴部	橙	橙	○	○	○		良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	322	R-19	Ⅳ	胴部	橙	橙		○	○		良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	323	R-19	Ⅳ	胴部	橙	橙			○		良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	324	Q・R-19・R-20	Ⅳ	胴部	褐	橙	○	○	○		良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	325	N-14	Ⅳ	胴部	浅黄橙	浅黄橙	○	○			良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	326	S-20	Ⅳ	胴部	赤褐	赤	○	○			良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	327	M-14	Ⅳ	胴部	褐	橙	○	○	○		良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	328	R-18	Ⅳ	胴部	にぶい黄	灰黄	○	○			良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	329	Q-19	Ⅳ	胴部	にぶい黄橙	黄褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	330	P-20	Ⅳ	胴部	暗褐	橙	○	○			良	綾杉状貝殻条痕文・貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	331	Q-19	Ⅳ	胴部	暗灰黄	黄褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ	V	
	332	S-20・P-19	Ⅳ	胴部	灰	黄褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	333	Q-20	Ⅳ	胴部	にぶい黄橙	灰黄褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ナデ	V	
	334	P-21	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	黄灰	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	335	P-20	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	にぶい褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	336	S-21	Ⅳ	胴部	にぶい橙	橙	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	337	Q-20	Ⅳ	胴部	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	338	N-15・P-21	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	黒褐	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
第56図	339	P-21	Ⅳ	底部	橙	橙	○				良	貝殻条痕文	ヘラケズリ	V	
	340	Q-19	Ⅳ	底部	赤褐	赤褐	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ	V	
	341	R-19	Ⅳ	底部	にぶい橙	橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	342	S-20	Ⅳ	底部	橙	橙	○	○	○		良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	343	R-20	Ⅳ	底部	にぶい橙	橙	○	○			良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	344	Q-20	Ⅳ	底部	橙	橙		○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	345	Q・R-19	Ⅳ	底部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	346	Q-19	Ⅳ	底部	黒褐	にぶい橙	○	○			良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	集石20より出土
	347	Q-19	Ⅳ	底部	赤褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	貝殻条痕文・刻目	ナデ	V	
	348	Q-19	Ⅳ	底部	にぶい黄褐	黒褐	○	○	○		良	貝殻条痕文・刻目	ナデ	V	
	349	P-19	Ⅳ	底部	にぶい褐	にぶい黄橙	○	○			良	貝殻条痕文・刻目	ナデ	V	
	350	R-20	Ⅳ	底部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	351	Q-20	Ⅳ	底部	橙	橙	○	○			良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	352	S-21	Ⅳ	底部	赤褐	橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	353	Q-19	Ⅳ	底部	にぶい橙	にぶい黄橙	○	○			良	貝殻条痕文	ナデ	V	
	354	R-21	Ⅳ	底部	黄灰	黄褐	○	○	○		良	貝殻条痕文・刻目	ヘラケズリ・ナデ	V	
	355	Q-20	Ⅳ	底部	橙	明赤褐	○		○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	356	R-20	Ⅳ	底部	黒褐	橙	○	○			良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	357	R-19	Ⅳ	底部	黒褐	橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	358	R-18	Ⅳ	底部	橙	にぶい橙	○	○			良	貝殻条痕文	ヘラケズリ	V	
	359	R-19	Ⅳ	底部	黒褐	黄褐	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	360	S-21	Ⅳ	底部	黒褐	橙	○	○			良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	361	S-21	Ⅳ	底部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	貝殻条痕文	V	
	362	S-20	Ⅳ	底部	黒褐	橙	○	○			良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	363	Q-21	Ⅳ	底部	黒褐	橙	○				良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
第57図	364	Q-19	Ⅳ	底部	黒褐	橙	○				良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	365	Q-20	Ⅳ	底部	明黄褐	橙		○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	366	R-19	Ⅳ	底部	にぶい褐	明赤褐	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ	V	
	367	R-21	Ⅳ	底部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	368	P-20	Ⅳ	底部	明赤褐	橙	○				良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	369	N-14	Ⅳ	底部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ	V	
	370	R-20	Ⅳ	底部	にぶい黄褐	にぶい黄橙	○	○	○		良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ・ナデ	V	
	371	Q-19	Ⅳ	底部	にぶい橙	橙	○	○			良	貝殻条痕文	ナデ	V	
	372	S-20	Ⅳ	底部	黒褐	にぶい橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ	V	
	373	R-18	Ⅳ	底部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	374	Q-20	Ⅳ	底部	明褐	橙	○				良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	375	Q-19	Ⅳ	底部	にぶい黄橙	にぶい橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ	V	
	376	Q-21	Ⅳ	底部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	377	K-13	Ⅳ	底部	明黄褐	明黄褐	○	○	○		良	貝殻条痕文・ナデ	ヘラケズリ	V	
	378	R-19	Ⅳ	底部	灰褐	にぶい赤褐	○	○			良	貝殻条痕文	ナデ	V	

縄文時代早期土器観察表

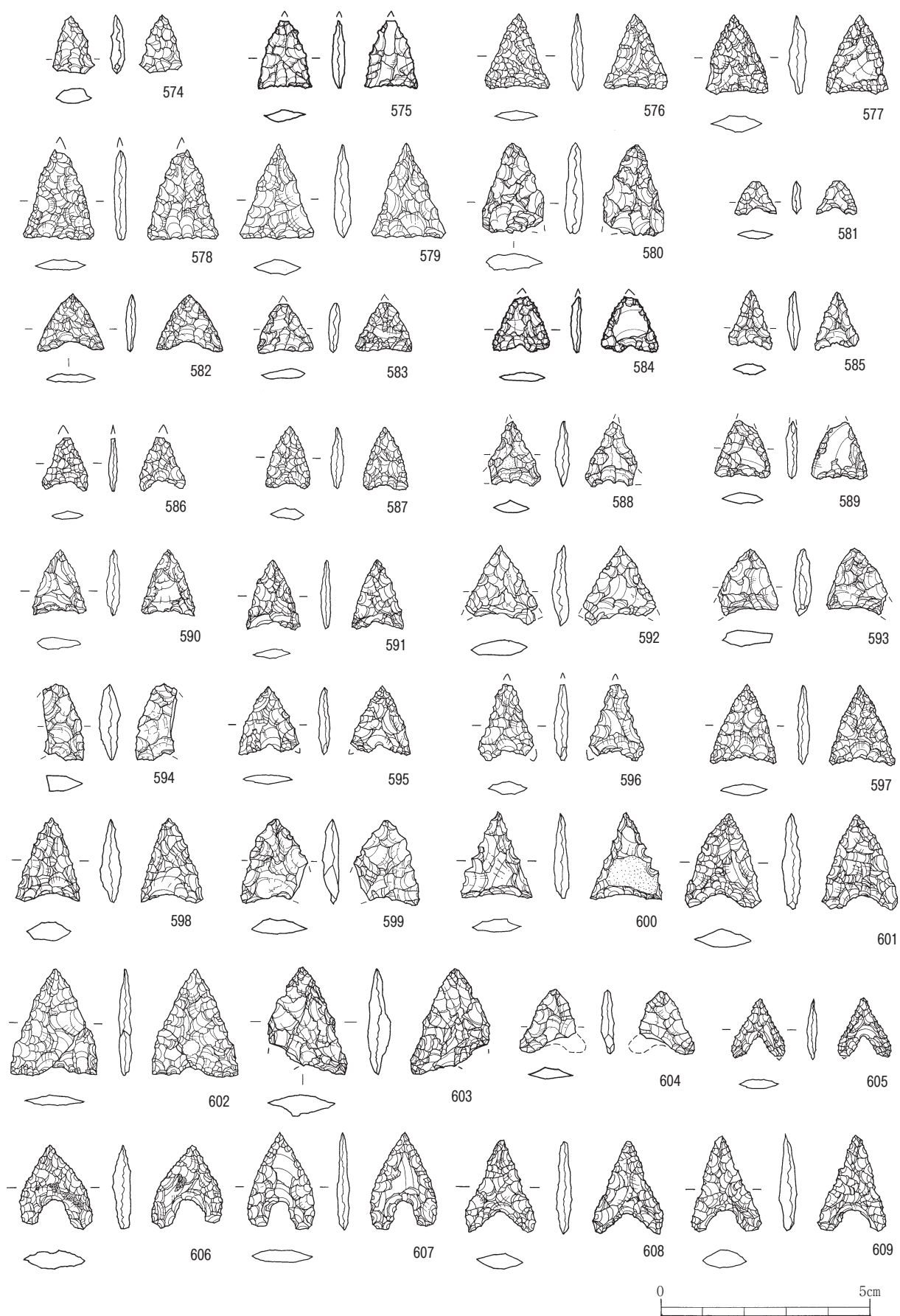
挿図 番号	番号	出土区	層位	部位	色調		胎土				焼成	調整		類	備考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他		外面	内面		
第57図	379	M-14	Ⅳ	底部	橙	にぶい橙		○	○		良	貝殻条痕文・ナデ	ヘラケズリ・ナデ	V	
	380	N-15	Ⅳ	底部	浅黄	浅黄	○	○	○		良	貝殻条痕文	ナデ	V	
	381	R-20	Ⅳ	底部	黒褐	浅黄橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	V	
	382	Q-17	Ⅳ	底部	にぶい橙	黄褐	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ・ナデ	V	
第58図	383	R-19・Q-19	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			良	貝殻押引文	ヘラケズリ	Ⅵ	
	384	T-21	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			良	貝殻押引文	ヘラケズリ	Ⅵ	
	385	R-21	Ⅳ	口縁部	にぶい橙	橙	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅵ	
	386	E-9	Ⅳ	口縁部	浅黄	明黄褐	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅵ	
	387	S-20	Ⅳ	口縁部	褐灰	にぶい褐	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ	Ⅵ	
	388	E-9	Ⅳ	口縁部	褐	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ	Ⅵ	
	389	S-21	Ⅳ	口縁部	灰褐	橙	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅵ	
	390	E-9	Ⅳ	口縁部	褐	にぶい赤褐	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ	Ⅵ	
	391	-	-	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ	Ⅵ	
	392	N-14	Ⅳ	口縁部	にぶい橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅵ	
	393	R-21	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	褐	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ	Ⅵ	
	394	Q-19	Ⅳ	口縁部	明黄褐	灰黄褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ	Ⅵ	
	395	R-19	Ⅳ	胴部	にぶい橙	橙	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ	Ⅵ	
	396	E-9	Ⅳ	胴部	浅黄	明黄褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ	Ⅵ	
	397	I-11	Ⅳ	胴部	にぶい褐	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅵ	
	398	E-9	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	橙	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ	Ⅵ	
	399	R-19	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅵ	
第59図	400	Q-19	Ⅳ	胴部	灰	橙	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ	Ⅵ	
	401	Q-19・20	Ⅳ	胴部	黄褐	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ	Ⅵ	
	402	R-21	Ⅳ	胴部	にぶい赤褐	にぶい褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅵ	
	403	P-21	Ⅳ	胴部	にぶい褐	橙	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅵ	
	404	J-13	Ⅳ	胴部	にぶい褐	橙	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ	Ⅵ	
	405	E-9	Ⅳ	胴部	褐灰	にぶい赤褐	○	○	○	疎少量	良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅵ	
	406	-	Ⅳ	胴部	黒褐	橙	○				良	貝殻刺突文	ヘラケズリ	Ⅵ	
	407	M-13	Ⅳ	胴部	黒褐	橙	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ	Ⅶ	
	408	J-13	Ⅳ	口縁部	明褐	にぶい黄橙	○	○	○	疎少量	良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅶ	
	409	E-8・9	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	灰白	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅶ	
第60図	410	E-9	Ⅳ	胴部	にぶい黄	にぶい黄	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	Ⅶ	
	411	L-13	Ⅳ	口縁部	明赤褐	にぶい赤褐	○	○	○	小疎	良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅶ	
	412	Q-17	Ⅳ	口縁部	赤褐	にぶい橙	○	○	○	小疎	良	沈線	ミガキ	Ⅶ	補修孔
	413	S-21	Ⅳ	口縁部	黒褐	橙	○	○	○		良	沈線	ヘラケズリ後ナデ	Ⅶ	
	414	Q-17	Ⅳ	口縁部	黄橙	赤褐	○	○	○	小疎	良	沈線	ミガキ	Ⅶ	
	415	Q-17	Ⅳ	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○		良	沈線	ヘラケズリ後ナデ	Ⅶ	
	416	M-13・J-14	Ⅳ	口縁部	赤褐	赤褐	○	○	○	小疎	良	沈線	ミガキ	Ⅶ	
	417	R-18	Ⅳ	口縁部	暗赤	赤褐	○	○			良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅶ	
	418	Q-17	Ⅳ	口縁部	灰黄褐	明赤褐	○	○	○		良	貝殻条痕文	ミガキ	Ⅶ	
第61図	419	O-14	Ⅳ	口縁部	にぶい橙	灰黄褐		○			良	貝殻条痕文	ミガキ	Ⅶ	補修孔
	420	Q-17	Ⅳ	口縁部	明赤褐	にぶい橙	○	○	○		良	貝殻条痕文・沈線	ヘラケズリ後ナデ	Ⅶ	
	421	E-9	Ⅳ	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ	Ⅶ	
	422	L-14	Ⅳ	口縁部	にぶい赤褐	明赤褐	○	○	○	小疎	良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅶ	
	423	G-12	Ⅳ	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	沈線・流水文	ヘラケズリ	Ⅶ	
	424	G-12	Ⅳ	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	沈線・流水文	ヘラケズリ	Ⅶ	
	425	G-12	Ⅳ	胴部	橙	橙	○	○	○		良	沈線・流水文	ヘラケズリ	Ⅶ	
	426	-	-	胴部	にぶい黄褐	赤褐	○	○	○		良	沈線	ヘラケズリ	Ⅶ	
	427	J-13・I-14	Ⅳ	胴部	にぶい黄橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・沈線	ナデ	Ⅶ	
	428	P-16	Ⅳ	胴部	赤褐	にぶい橙	○	○	○		良	沈線	ナデ	Ⅶ	
	429	P-16	Ⅳ	胴部	明赤褐	にぶい橙	○	○		小疎	良	ヘラケズリ	ヘラケズリ	Ⅶ	
	430	O-16	Ⅳ	底部	赤褐	にぶい橙	○	○			良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅶ	
第62図	431	N-15	Ⅳ	完形	浅黄	浅黄	○	○	○		良	貝殻条痕文	ナデ	Ⅸ	
	432	T-22	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ナデ	Ⅸ	
	433	S-21	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	浅黄橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ナデ	Ⅸ	
	434	R-21	Ⅳ	口縁部	褐灰	黒褐	○	○	○		良	貝殻条痕文	ナデ	Ⅸ	
	435	L-14	Ⅳ	口縁部	にぶい橙	黄橙	○		○		良	貝殻条痕文	ナデ	Ⅸ	補修孔
	436	S-21	Ⅳ	口縁部	褐灰	黒褐	○	○	○		良	貝殻条痕文	ナデ	Ⅸ	
	437	R-21	Ⅳ	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ナデ	Ⅸ	
	438	R-21	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	橙	○	○	○	小疎	良	貝殻条痕文	ナデ	Ⅸ	
	439	R-19	Ⅳ	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ	Ⅸ	
	440	S-21	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	浅黄橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ナデ	Ⅸ	
	441	R-21	Ⅳ	口縁部	褐灰	橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ナデ	Ⅸ	
第63図	442	Q-20	Ⅳ	胴部	褐灰	橙	○	○	○	小疎	良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅸ	
	443	Q-21	Ⅳ	胴部	にぶい黄橙	浅黄橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ナデ	Ⅸ	
	444	S-20	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ	Ⅸ	
第64図	445	P-16・Q-19	Ⅳ	口縁部	褐灰	淡黄	○	○	○		良	山形押型文	山型押型文・ヘラケズリ	X	
	446	P-16	Ⅳ	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	山形押型文	山型押型文・ヘラケズリ	X	

縄文時代早期土器観察表

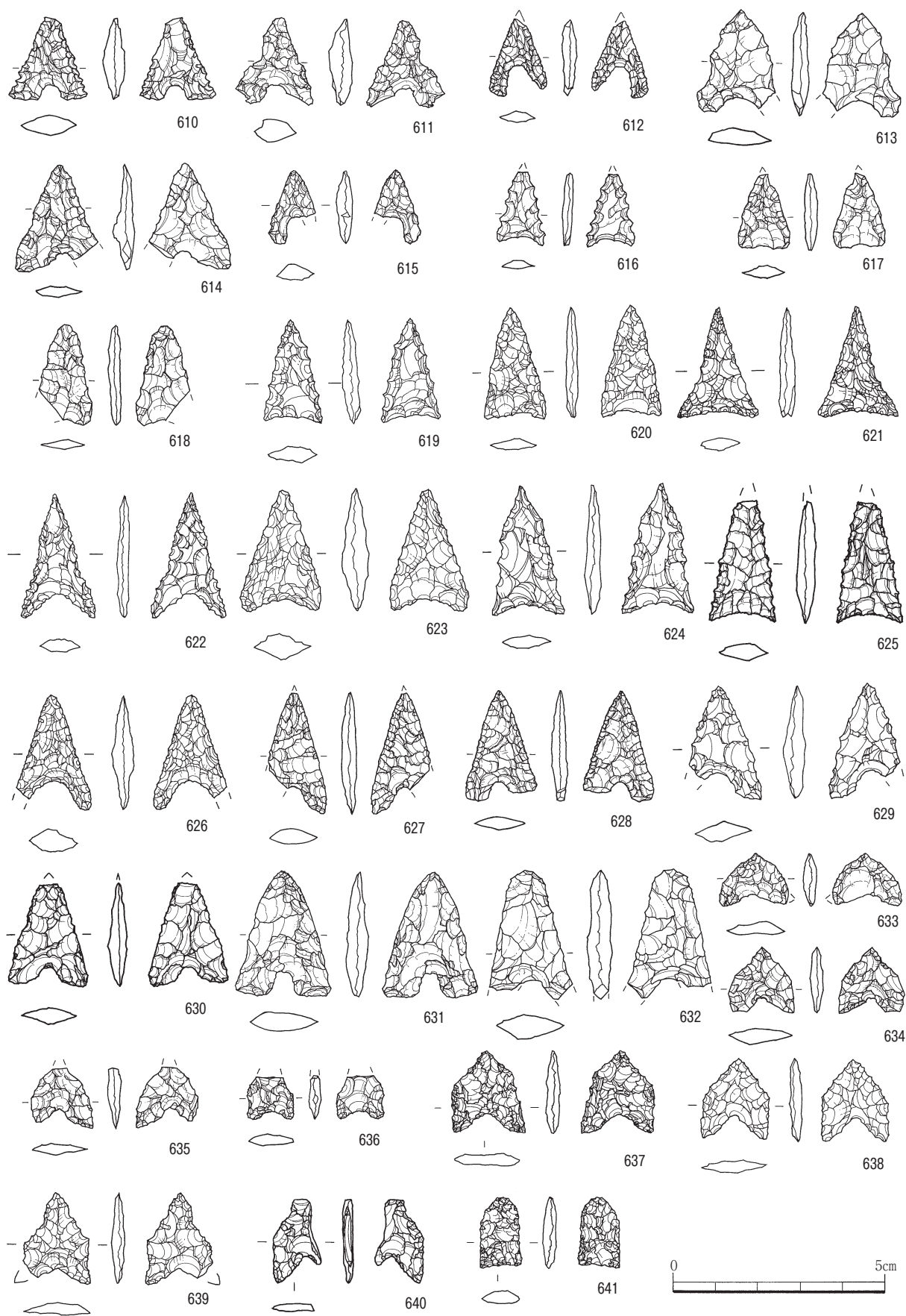
挿図 番号	番号	出土区	層位	部位	色調		胎土				焼成	調整		類	備考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他		外面	内面		
第 64 図	447	P-16	Ⅳ	口縁部	にぶい橙	橙		○	○		良	山形押型文	山形押型文・ヘラケズリ	X	
	448	E-10	Ⅳ	口縁部	灰黄	橙	○	○	○		良	山形押型文	ナデ	X	
	449	P-16	Ⅳ	口縁部	灰白	浅黄橙		○	○		良	山形押型文	山形押型文・ヘラケズリ	X	
	450	P-16	Ⅳ	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	○	○			良	山形押型文	山形押型文・ヘラケズリ	X	
	451	P-16	Ⅳ	口縁部	にぶい橙	橙	○	○	○		良	山形押型文	山形押型文・ナデ	X	
	452	P-15	Ⅳ	口縁部	灰黄褐	にぶい黄橙	○			礫少量	良	山形押型文	ヘラケズリ	X	
	453	P-16	Ⅳ	胴部	にぶい黄橙	黄橙	○	○			良	山形押型文	ヘラケズリ	X	
	454	N-14	Ⅳ	胴部	灰黄褐	橙	○	○	○		良	山形押型文	ヘラケズリ	X	
	455	P-15	Ⅳ	胴部	褐灰	橙	○	○	○		良	山形押型文	ヘラケズリ	X	
	456	P-15	Ⅳ	胴部	にぶい黄橙	橙	○	○	○		良	山形押型文	ヘラケズリ	X	
第 65 図	457	P-16・Q-19	Ⅳ	胴部	褐灰	橙			○		良	山形押型文	ヘラケズリ	X	
	458	I・J-13	Ⅳ	胴部	褐灰	橙	○	○	○		良	山形押型文	ヘラケズリ	X	
	459	P-16	Ⅳ	胴部	灰黄褐	明黄褐	○	○	○		良	山形押型文	ヘラケズリ	X	
	460	O-16	Ⅳ	胴部	にぶい橙	橙	○	○			良	山形押型文	ヘラケズリ	X	
	461	P-16	Ⅳ	胴部	明赤褐	にぶい黄褐	○		○		良	山形押型文	ヘラケズリ	X	
	462	P-16	Ⅳ	胴部	灰黄	橙	○	○	○		良	山形押型文	ヘラケズリ	X	
	463	P-15	Ⅳ	胴部	黒褐	橙	○	○			良	山形押型文	ヘラケズリ	X	
	464	P-16	Ⅳ	胴部	にぶい赤褐	橙	○	○	○		良	山形押型文	ヘラケズリ	X	
	465	P-16	Ⅳ	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	山形押型文	ナデ	X	
	466	P-16	Ⅳ	胴部	浅黄橙	浅黄橙	○		○		良	山形押型文	ヘラケズリ	X	
第 66 図	467	P-16	Ⅳ	胴部	褐灰	赤褐	○	○	○		良	山形押型文	ヘラケズリ	X	
	468	O・P-16	Ⅳ	胴部	にぶい黄橙	橙	○	○	○		良	山形押型文	ヘラケズリ	X	
	469	P-16	Ⅳ	胴部	にぶい褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	山形押型文	ヘラケズリ	X	
	470	-	-	胴部	にぶい橙	橙	○		○		良	山形押型文	ヘラケズリ	X	
	471	P-16	Ⅳ	胴部	黒褐	橙	○	○			良	山形押型文	ヘラケズリ	X	
	472	J-13	Ⅳ	底部	灰黄褐	橙	○				良	山形押型文	ヘラケズリ	X	
	473	N-14	Ⅳ	底部	浅黄橙	浅黄橙	○		○		良	山形押型文	ヘラケズリ	X	
	474	P-16	Ⅳ	底部	橙	橙	○	○	○		良	楕円押型文	ヘラケズリ	X	
	475	P-15	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	楕円押型文	楕円押型文・ヘラケズリ後ナデ	X	補修孔
	476	E-9	Ⅳ	口縁部	にぶい橙	橙	○			礫	良	楕円押型文	楕円押型文・ヘラケズリ後ナデ	X	
第 67 図	477	P-15	Ⅳ	口縁部	にぶい橙	橙		○	○		良	楕円押型文	ヘラケズリ後ナデ	X	
	478	P-16	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	橙	○	○	○		良	楕円押型文	ヘラケズリ後ナデ	X	
	479	P-16	Ⅳ	口縁部	赤褐	赤褐	○	○	○		良	楕円押型文	楕円押型文・ヘラケズリ	X	
	480	P-16	Ⅳ	口縁部	灰褐	橙	○	○	○		良	楕円押型文	楕円型押型文・ヘラケズリ後ナデ	X	
	481	P-16	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	楕円押型文	ヘラケズリ	X	
	482	P-16	Ⅳ	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	楕円押型文・ナデ	楕円押型文	X	
	483	P-16	Ⅳ	口縁部	橙	灰黄褐	○	○	○		良	楕円押型文	楕円押型文	X	
	484	P-16・R-18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	楕円押型文	楕円型押型文・ヘラケズリ	X	
	485	P-15	Ⅳ	口縁部	橙	橙	○	○			良	楕円押型文	楕円押型文・ナデ・ヘラケズリ	X	
	486	O-16	Ⅳ	口縁部	にぶい橙	橙	○	○			良	楕円押型文	ヘラケズリ	X	
第 68 図	487	P-15	Ⅳ	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	楕円押型文	楕円型押型文・ヘラケズリ	X	
	488	P-16	Ⅳ	口縁部	橙	浅黄橙	○	○	○	小礫	良	ナデ	楕円押型文・ヘラケズリ後ナデ	X	
	489	P-16	Ⅳ	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	ナデ	楕円押型文	X	
	490	P-16	Ⅳ	口縁部	橙	にぶい橙	○	○	○		良	楕円押型文	楕円押型文・ヘラケズリ	X	
	491	O-21	Ⅳ	口縁部	にぶい橙	浅黄橙	○	○			良	楕円押型文・ナデ	ヘラケズリ	X	集石22から出土
	492	P-16	Ⅳ	胴部	にぶい橙	橙	○	○	○		良	楕円押型文	ナデ	X	
	493	P-16	Ⅳ	胴部	赤	にぶい黄橙	○	○	○		良	楕円押型文	ヘラケズリ後ナデ	X	
	494	P-16	Ⅳ	胴部	暗赤褐	橙	○	○	○		良	楕円押型文	ヘラケズリ	X	
	495	P-16・N-15	Ⅳ	胴部	橙	橙	○	○	○		良	楕円押型文	ヘラケズリ	X	
	496	-	-	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			良	楕円押型文	楕円型押型文・ヘラケズリ	X	
第 69 図	497	P-15	Ⅳ	胴部	暗灰黄	橙	○	○	○		良	楕円押型文	ヘラケズリ	X	
	498	P-16	Ⅳ	胴部	にぶい橙	橙	○	○			良	楕円押型文	ヘラケズリ	X	
	499	P-15	Ⅳ	胴部	黒褐	橙	○	○		礫少量	良	山形押型文	ヘラケズリ	X	
	500	P-15	Ⅳ	胴部	浅黄橙	浅黄橙	○				良	楕円押型文	ナデ	X	
	501	P-15	Ⅳ	胴部	褐灰	橙	○		○		良	楕円押型文	ヘラケズリ	X	
	502	P-15	Ⅳ	胴部	灰黄褐	橙	○	○	○		良	楕円押型文	ヘラケズリ	X	
	503	P-15	Ⅳ	胴部	褐	橙	○	○	○		良	楕円押型文	ヘラケズリ	X	
	504	P-16	Ⅳ	胴部	褐灰	橙	○		○		良	楕円押型文	ヘラケズリ後ナデ	X	
	505	P-15	Ⅳ	胴部	灰黄褐	橙	○	○	○		良	楕円押型文	ヘラケズリ	X	
	506	P-16	Ⅳ	胴部	橙	暗赤褐	○	○	○		良	楕円押型文・ナデ	ヘラケズリ	X	
	507	P-16	Ⅳ	胴部	灰白	にぶい黄橙	○	○			良	楕円押型文	ヘラケズリ	X	
	508	P-16	Ⅳ	胴部	灰	明黄褐	○				良	楕円押型文	ヘラケズリ	X	
	509	P-16	Ⅳ	胴部	にぶい橙	橙	○	○			良	楕円押型文	ヘラケズリ	X	
	510	P-16	Ⅳ	胴部	浅黄	橙	○	○	○		良	楕円押型文	ヘラケズリ	X	
	511	P-16	Ⅳ	胴部	にぶい橙	橙	○	○	○		良	楕円押型文・ナデ	ヘラケズリ後ナデ	X	
	512	P-15	Ⅳ	胴部	橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	ヘラケズリ	ナデ	X	
	513	P-16	Ⅳ	底部	橙	橙	○	○	○		良	楕円押型文	ヘラケズリ	X	
	514	T-20	Ⅳ	底部	褐灰	にぶい橙	○		○		良	楕円押型文	ヘラケズリ後ナデ	X	

縄文時代早期土器観察表

挿図 番号	番号	出土区	層位	部位	色調		胎土				焼成	調整		類	備考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他		外面	内面		
第 68 図	515	P-15	Ⅳ	底部	灰黄褐	橙	○				良	楕円押型文	ヘラケズリ後ナデ	X	
	516	P-15	Ⅳ	底部	灰白	浅黄橙		○	○		良	楕円押型文	ヘラケズリ	X	
第 69 図	517	P-16	Ⅳ	完形	橙	橙	○	○	○		良	山形押型文・貝殻刺突文	ナデ・貝殻刺突文	X	
	518	P-17	Ⅳ	胴部	橙	橙	○	○	○		良	楕円押型文	ナデ	X	イチゴ
第 70 図	519	L-13	Ⅳ	胴部	灰黄褐	灰黄褐	○	○	○		良	山形押型文	ヘラケズリ	XI	
	520	L-13	Ⅳ	胴部	浅黄橙	浅黄橙	○		○		良	山形押型文	ヘラケズリ	XI	
	521	L-13	Ⅳ	胴部	浅黄橙	浅黄橙	○		○		良	山形押型文	ヘラケズリ	XI	
	522	L-13	Ⅳ	胴部	浅黄橙	浅黄橙	○		○		良	山形押型文	ヘラケズリ	XI	
	523	P-16	Ⅳ	口縁部	浅黄	浅黄	○	○	○		良	撫糸文	ヘラケズリ	XII	
	524	P-16	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	明黄褐		○	○	小礫	良	撫糸文	ヘラケズリ	XII	集石18から出土
	525	P-16	Ⅳ	口縁部	暗赤褐	明黄褐		○	○		良	撫糸文	ナデ	XII	
	526	P-16	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	明黄褐		○	○	小礫	良	撫糸文	ヘラケズリ	XII	
	527	P-16	Ⅳ	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	撫糸文	ヘラケズリ	XII	
	528	Q-20・R-19	Ⅳ	胴部	褐灰	浅黄橙		○	○		良	撫糸文	ヘラケズリ	XII	
第 71 図	529	O-15	Ⅳ	完形	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○		良	刺突文・沈線文	ヘラケズリ	XIII	
	530	O-16	Ⅳ	口縁部	赤褐	橙	○				良	沈線・刺突文	ナデ	XIII	
	531	O-15	Ⅳ	口縁部	赤褐	赤褐	○	○	○		良	沈線・刺突文	ナデ	XIII	
	532	O-14	Ⅳ	胴部	明褐	黒褐	○	○	○		良	沈線	ヘラケズリ後ナデ	XIII	
	533	J-13	Ⅳ	胴部	黒褐	橙	○	○	○		良	沈線・刺突文	ナデ	XIII	内面スス付着
	534	R-19	Ⅳ	胴部	暗赤褐	橙	○	○	○		良	刺突文	ナデ	XIII	
	535	O-16	Ⅳ	胴部	赤褐	赤褐	○	○	○		良	沈線・刺突文	ナデ	XIII	
	536	O-14	Ⅳ	胴部	明赤褐	明赤褐	○		○		良	沈線・刺突文	ナデ	XIII	
	537	O-16	Ⅳ	胴部	黒褐	赤褐	○	○	○		良	沈線・刺突文	ヘラミガキ	XIII	
	538	O-16	Ⅳ	胴部	明赤褐	にぶい黄褐		○			良	沈線・撫糸文・ナデ	ヘラケズリ後ナデ	XIII	
	539	O-16	Ⅳ	胴部	赤褐	赤褐	○	○	○		良	沈線	ナデ	XIII	
	540	N-16	Ⅳ	胴部	暗赤褐	赤褐	○	○	○	小礫	良	沈線	ヘラミガキ	XIII	
	541	N-14	Ⅳ	胴部	にぶい褐	橙	○	○	○		良	沈線	ナデ	XIII	
	542	J-12	Ⅳ	胴部	黒褐	橙	○	○	○		良	沈線	ナデ	XIII	
	543	O-16	Ⅳ	胴部	暗褐	暗褐	○	○	○		良	沈線	ヘラナデ	XIII	
	544	O-16	Ⅳ	胴部	赤褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	沈線	ヘラナデ	XIII	
第 72 図	545	K-13	Ⅳ	口縁部	浅黄橙	浅黄橙	○		○		良	沈線	ナデ	XIII	
	546	M-14	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			良	沈線	ナデ	XIII	
	547	I-11	Ⅳ	口縁部	明褐灰	灰白	○		○		良	沈線・刺突文	ナデ	XIII	
	548	P-17	Ⅳ	口縁部	橙	黄橙	○	○	○		良	沈線・刺突文	ナデ	XIII	
	549	R-18	Ⅳ	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	○		○		良	沈線・刺突文	ナデ	XIII	
	550	I-11	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○		小礫	良	沈線	ナデ	XIII	
	551	-	-	胴部	黒褐	灰褐	○	○	○		良	沈線・撫糸文	ナデ	XIII	
	552	O-16	Ⅳ	胴部	にぶい黄橙	褐灰	○	○	○		良	沈線・撫糸文・ナデ	ナデ	XIII	
	553	I-11	Ⅳ	胴部	黄橙	にぶい黄橙	○	○			良	沈線・撫糸文・刺突文	ナデ	XIII	
	554	I-11	Ⅳ	胴部	褐灰	橙	○	○		小礫	良	沈線・撫糸文・ナデ	ナデ	XIII	
	555	I-11	Ⅳ	胴部	褐灰	橙	○	○		小礫	良	沈線・撫糸文・ナデ	ナデ	XIII	
	556	R-19	Ⅳ	胴部	灰黄褐	褐	○	○	○		良	撫糸文	ナデ	XIII	
第 73 図	557	H-12	Ⅳ	口縁部	灰黄褐	浅黄	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	XIV	
	558	H-12	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○				良	条痕文	ナデ	XIV	
	559	I-12	Ⅳ	口縁部	にぶい橙	明赤褐	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	XIV	
	560	O-16	Ⅳ	口縁部	灰黄	橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	XIV	
	561	Q-20	Ⅳ	胴部	灰黄褐	浅黄	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	XIV	
	562	M-13	Ⅳ	胴部	にぶい褐	暗褐		○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	XIV	
	563	H-12	Ⅳ	胴部	にぶい橙	橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ナデ	XIV	
	564	R-21	Ⅳ	胴部	にぶい橙	灰黄褐	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ	XIV	
	565	S-21	Ⅳ	胴部	橙	にぶい橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ	XIV	
第 74 図	566	R-20	Ⅳ	胴部	赤褐	にぶい赤褐	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ	XIV	
	567	P-20	Ⅳ	底部	灰褐	橙	○	○			良	貝殻条痕文	ヘラケズ	XIV	
	568	P-16	Ⅳ	底部	赤褐	明赤褐	○	○	○	小礫	良	沈線	ヘラケズリ	XV	
	569	L-12	Ⅳ	口縁部	にぶい橙	橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	XV	補修孔
	570	O-15	Ⅳ	口縁部	黄橙	浅黄橙	○		○	小礫	良	竹管刺突文	ナデ	XV	
	571	N-15	Ⅳ	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	XV	
	572	S-21	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	にぶい橙	○	○	○		良	ナデ	ヘラケズリ後ナデ	XVI	
	573	S-21	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	にぶい橙	○	○	○		良	ナデ	ヘラケズリ後ナデ	XVI	



第75図 縄文時代早期 石器 1



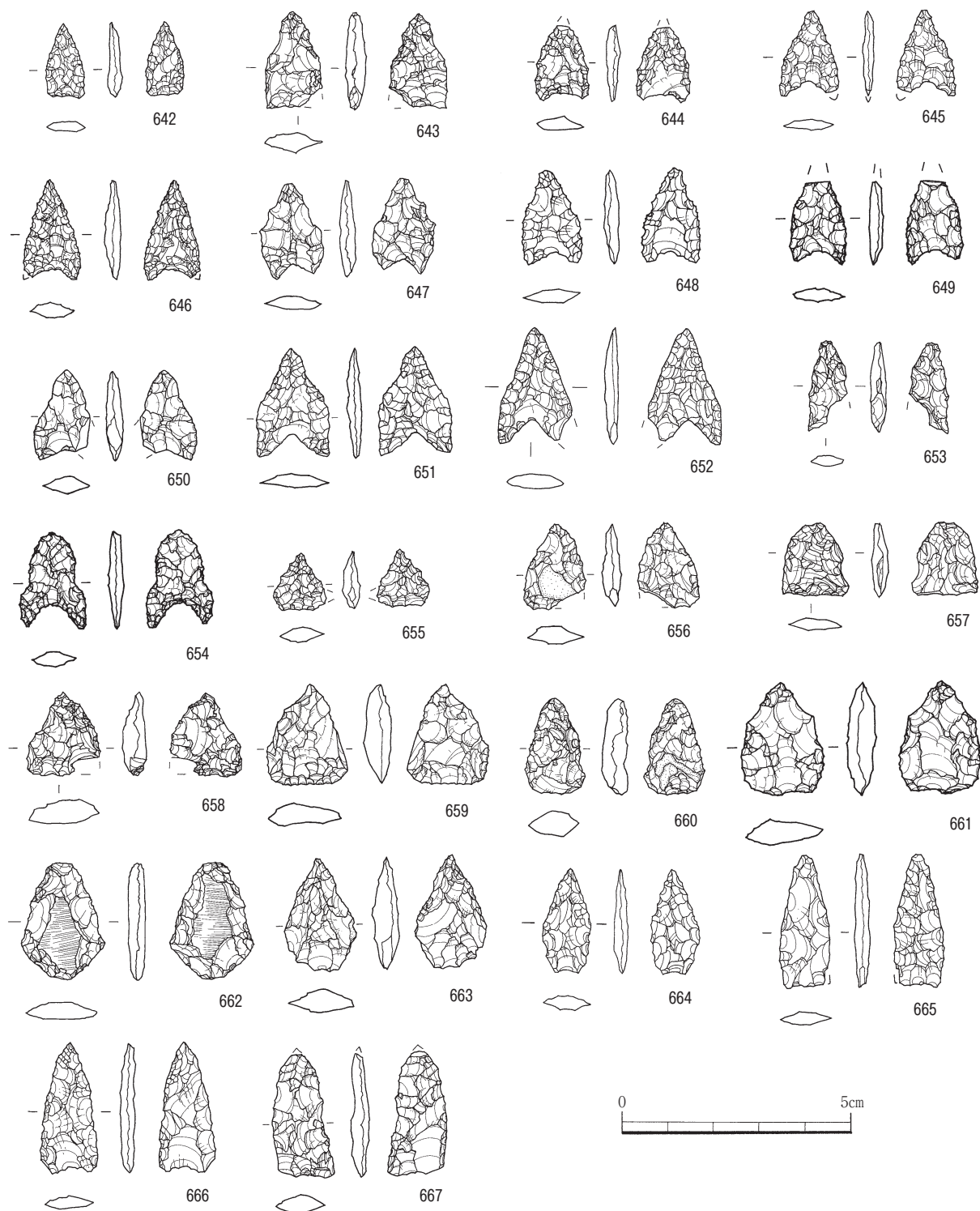
第76図 縄文時代早期 石器2

②石器（第75図～第94図）

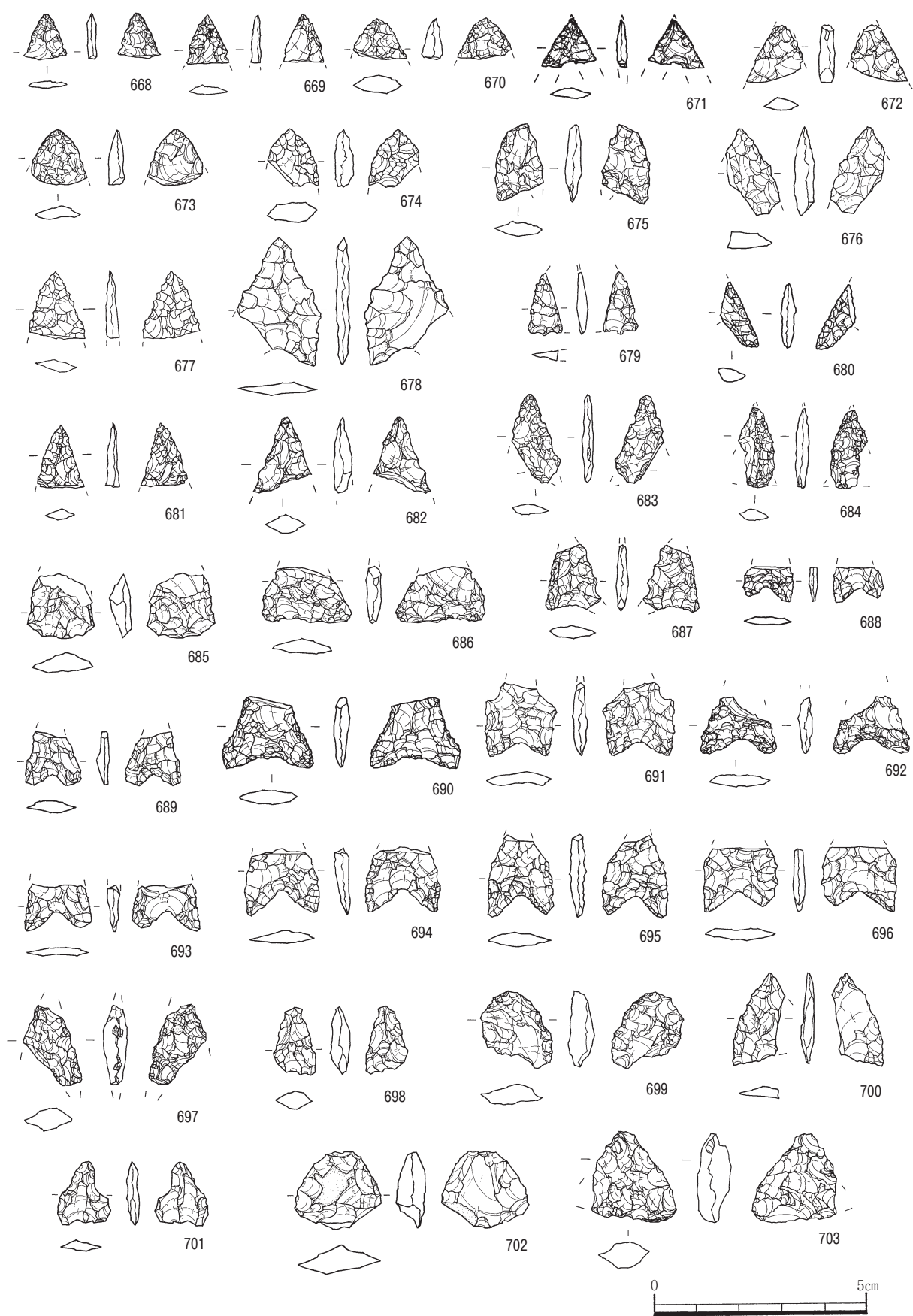
石器はIV層から総数418点出土した。石鏃を中心とした石器製作跡と思われる場所からは、それに関連する石核、剥片、碎片、石鏃未製品、石鏃等が出土している。また、石斧未製品、石斧等も見られる。その他に石槍、石匙、スクレイパー、礫器、石斧、

環状石斧、磨石、敲石、凹石、石皿等が出土している。

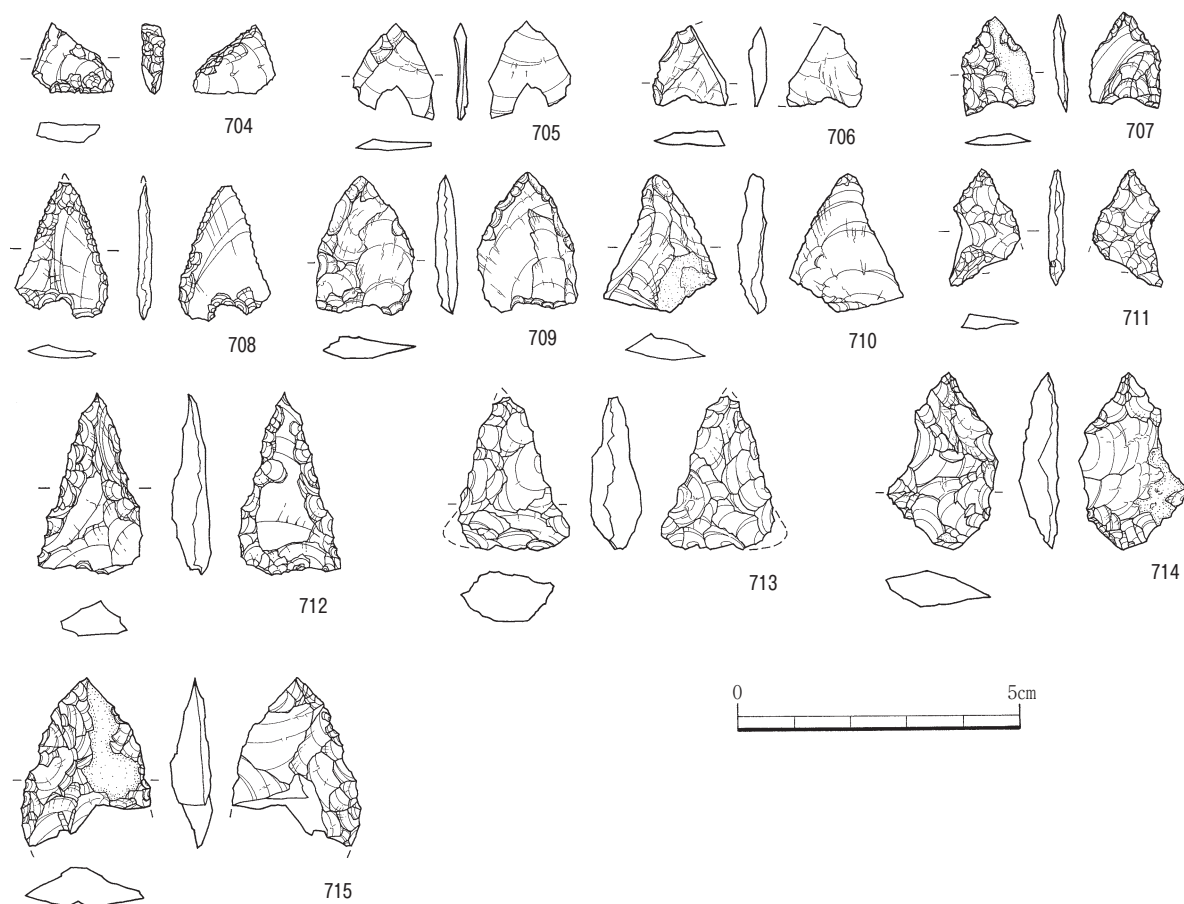
石材は黒曜石、頁岩、玉随、チャート、安山岩、砂岩等が使用されている。黒曜石については、さらに次のA～Dの4つに細分化し、明確でないものについては黒曜石とした。また、チャートについては、



第77図 縄文時代早期 石器3



第78図 縄文時代早期 石器4



第79図 縄文時代早期 石器5

乳白色，青灰色，灰褐色でやや光沢のあるものをチャートとして分類したが，本遺跡の近隣で算出する瑪瑙玉随にも類似しており，その可能性も否定できない。

黒曜石A 黒色・ガラス質で，小粒の不純物が多く含まれる。大口市日東産に類似する。

黒曜石B 青灰色。不純物の少ない良質の黒曜石。針尾，淀姫産等西九州系に類似する。

黒曜石C 黒色で炭状。光を通さず，不純物が少ない。薩摩川内市樋脇町上牛鼻，いちき串木野市平木場産に類似する。

黒曜石D 灰色もしくはアメ色で半透明のガラス質。不純物は少なく，黒色の紐状の縞が入る。宮崎県えびの市桑ノ木津留産に類似する。

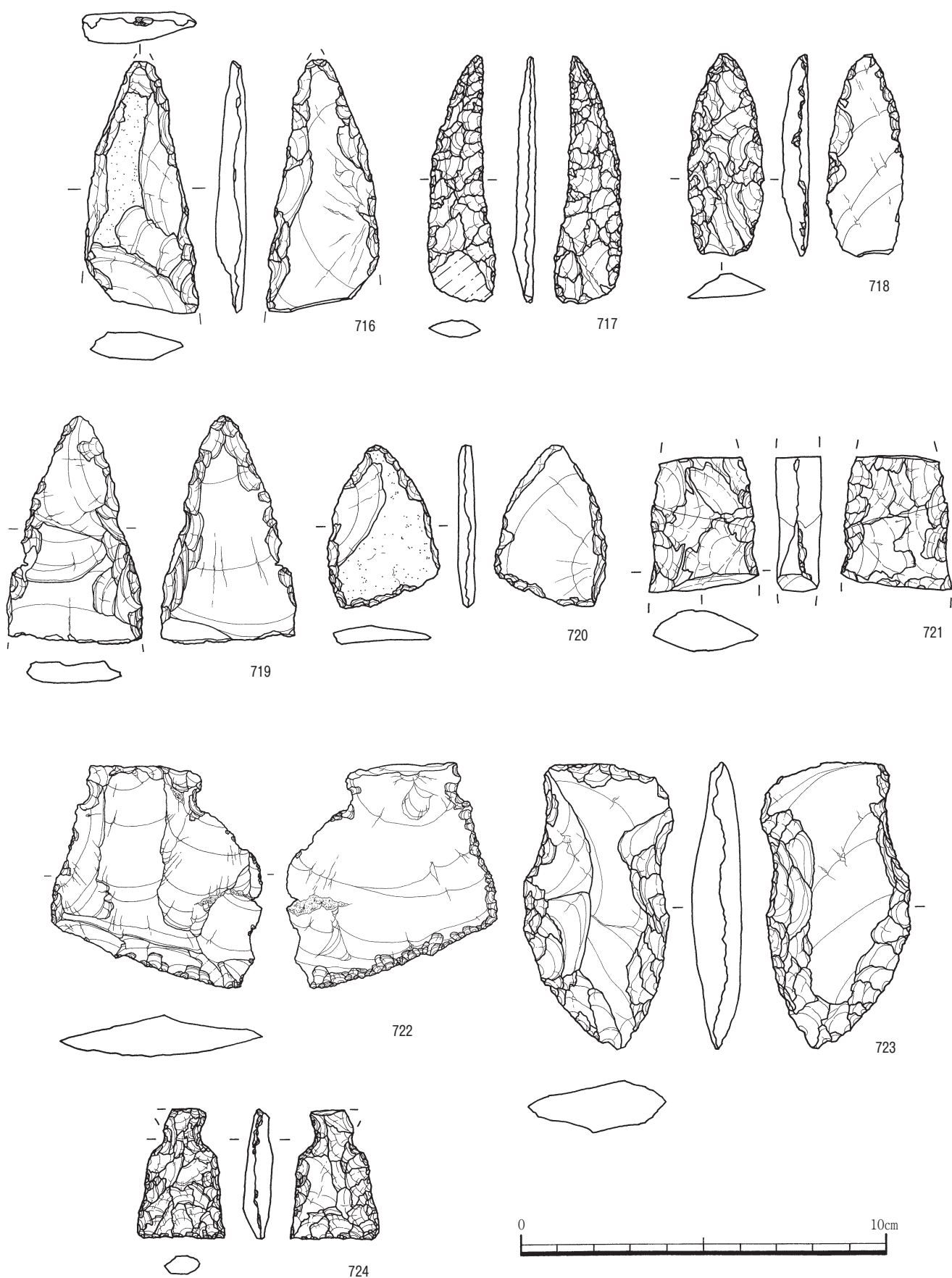
石鏃（第75図～第79図 574～715）

石鏃は，未製品を含め打製のものが158点出土し，

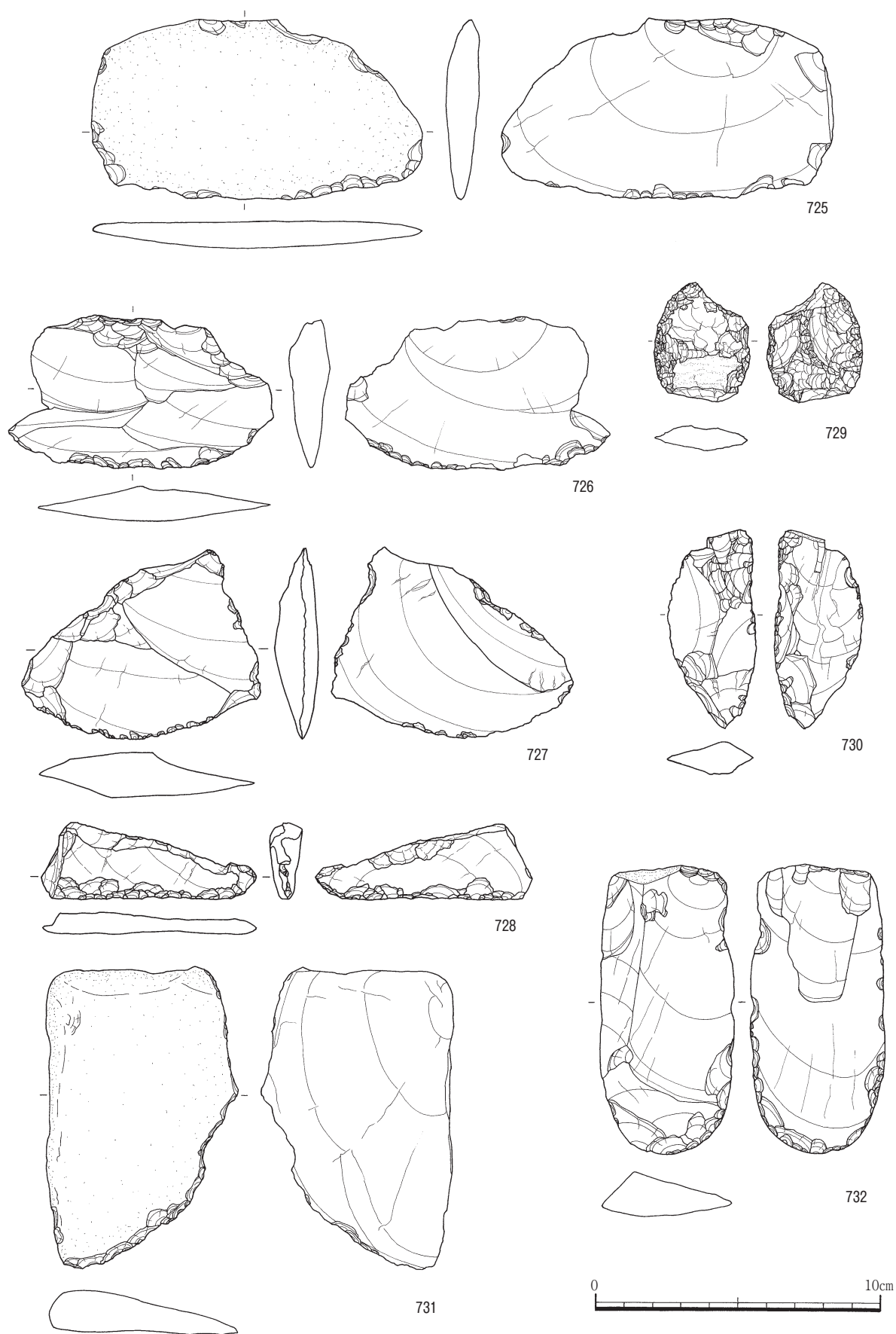
そのうち142点を掲載した。574～697の124点が製品で，18点が未製品である。石材は，黒曜石・チャート・頁岩・玉随等で，掲載できなかったものも含めた石材別出土数は，黒曜石Aが1点，黒曜石Bが9点，黒曜石Cが10点，黒曜石Dが11点，黒曜石が8点，チャートが55点，頁岩が38点，玉随が30点である。形態は，本報告書P39の石鏃分類図により分類した。形態が分類できる資料は，図化した124点中94点で，その中でA a bに分類されるものが23点と一番多かった。

575は集石21号内から出土したものである。

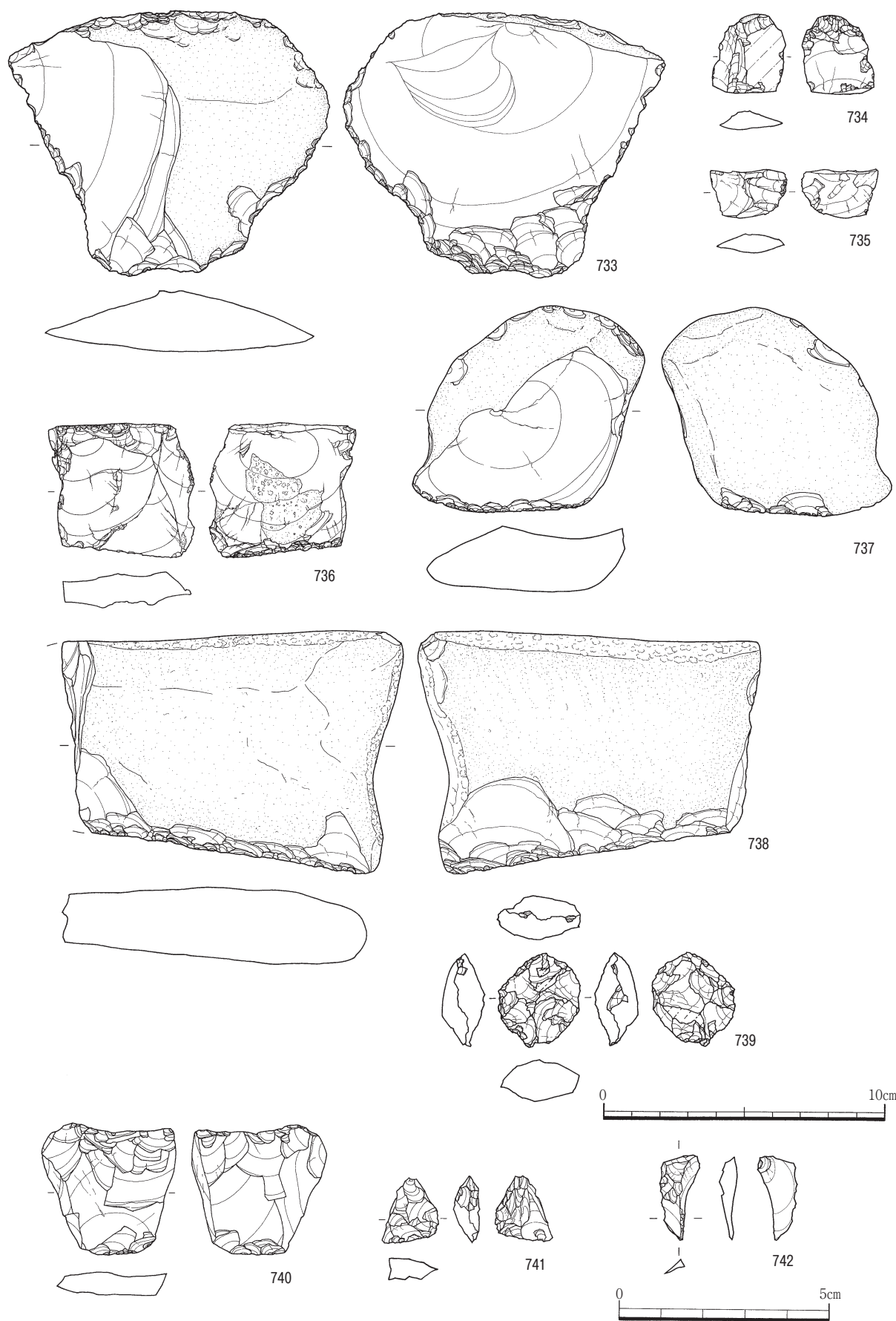
石鏃未製品は23点のうち18を掲載した。そのうち698～703・711・713・714は，両面に押圧剥離を施すが，挟りが確認できず成形途中と思われるものである。704～710・712・715は，一部に押圧剥離を施すものの，未加工部分も見られるものである。挟りは，確認できるものとできないものがある。



第80図 縄文時代早期 石器6



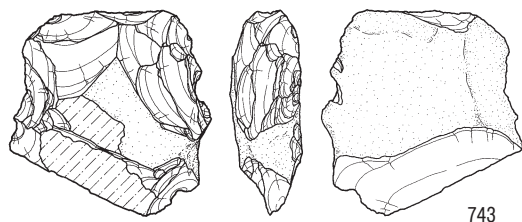
第81図 縄文時代早期 石器7



第82図 縄文時代早期 石器8

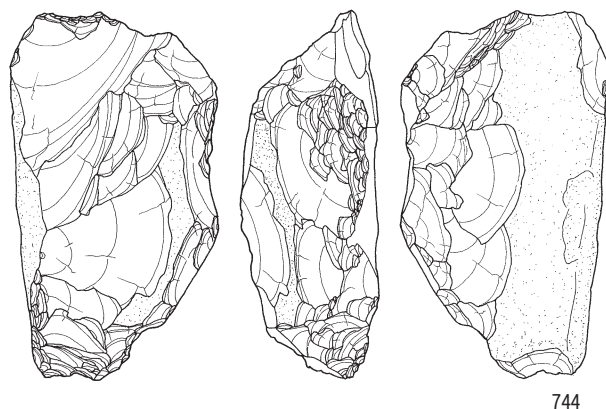
石槍（第80図 716～721）

716～721の6点が出土した。717を除き、ほぼ左右対象の形態である。6点とも刃部調整は、平坦剥離が施される。718は未製品の可能性も考えられる。721は尖頭部と基部が欠損している。



石匙（第80図 722～724）

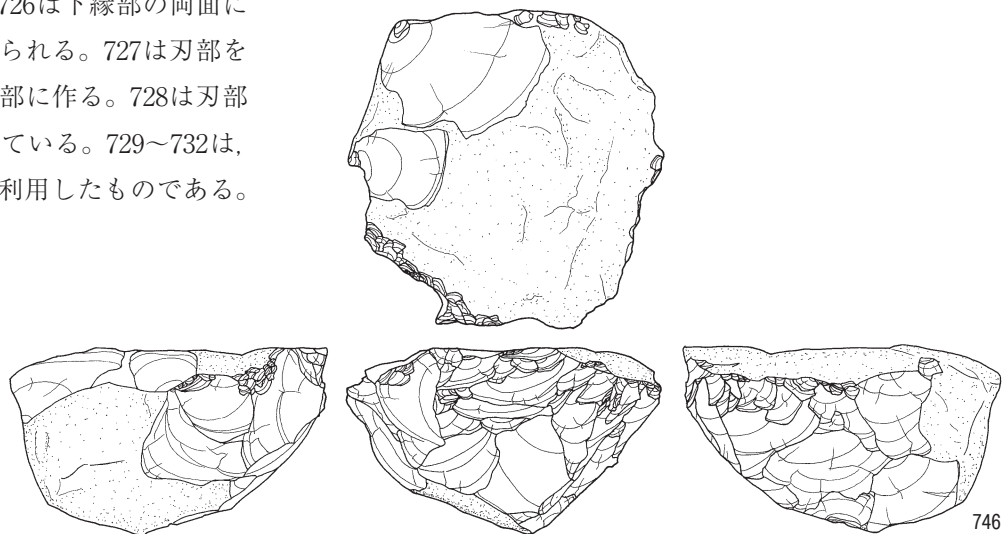
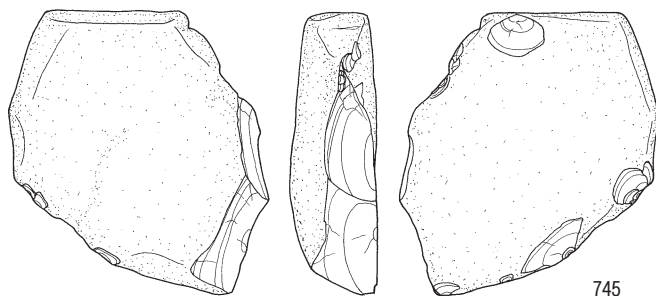
3点出土した。722は玉随製である。刃部は両面調整で、裏面の底辺と右側縁辺に丁寧な調整を施す。723・724は安山岩である。723は縦長型で、石鋸の可能性も考えられるが、刃部が左右対称でないことから石匙とした。724は縦長の台形型で、刃部は両面調整で、縁辺に施す。



スクレイパー（第81図・第82図

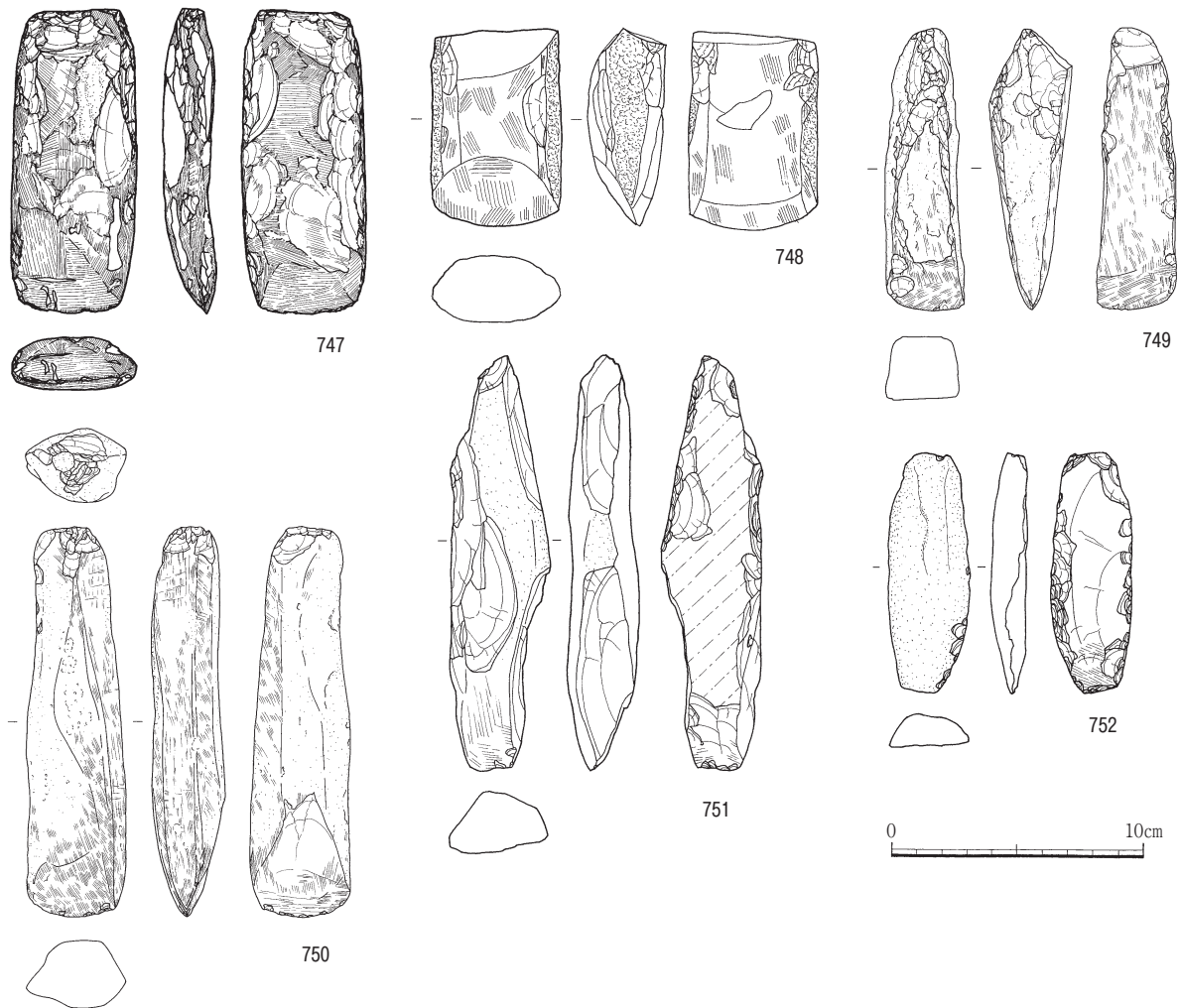
725～738）

スクレイパーは全部で17点出土した。その中から、横長型のもの4点（725～728）と縦長型のもの4点（729～732）、角型のもの6点（733～738）の14点を掲載した。725～728は頁岩製で、剥片を横位に利用したものである。725は、上縁部の一部と下縁部の両面に刃部をつくり、上面に自然面を残す。726は下縁部の両面に刃部調整が見られる。727は刃部を上縁部と下縁部に作る。728は刃部以外が欠損している。729～732は、剥片を縦長に利用したものである。



0 10cm

第83図 縄文時代早期 石器9



第84図 縄文時代早期 石器10

729・730はチャート製である。729の刃部は、両面への押圧剥離により作られる。上端は欠損しているものと思われる。730は左縁部に刃部がつくられる。731・732は頁岩製である。731の上面は自然面である。733～738は角形のものである。733は玉随製で、下縁部に刃部がつくられる。734・735は小形のもので、頁岩製である。どちらも一部欠損している。736・737は大形のもので、どちらも頁岩製のものである。738はスクレイパーとしたが、他の石器の可能性も考えられる。下辺に刃部が作られている。

楔形石器・二次加工剥片（第82図 740～742）

楔形石器は2点出土した。740はチャート製のものです、左側は欠損しているものと思われる。741は頁岩製のものです、上下二辺に打ち欠いた痕跡が見られる。右側は欠損している。

二次加工のある剥片は742の1点のみである。

チャート製である。逆三角形の形状をした縦長剥片で、上面の左辺上部に加工痕が見られる。

石核（第82図 739・第83図 743～746）

石核は全部で7点出土した。その中で小形のもの1点（739）と大形のもの4点（743～746）を掲載した。739は、「亀の甲型」と呼ばれる円盤状の石核で、小形の剥片をとったものである。黒曜石C製である。743は頁岩製で、周縁を打ち欠いて剥片を取っており、求心状の剥離が観察される。744は頁岩製で、扁平礫の一方から剥片を取っている。745は頁岩製で、自然面を打面にし、大きな剥離を取っている。側面と裏面にも一部自然面が残る。746は手のひら大以上の大きな自然礫を周辺から打ち欠いて剥片を取っている。

磨製石斧（第84図 747～752）

磨製石斧については頁岩製のものが10点出土した。その中から6点を掲載した。747・748は両面及び側面を丁寧に磨いたものである。749は細長い自然礫を利用し、両面全体を磨いているが側面は自然面である。750・751は刃部のみを両面磨いた局部磨製石斧で、750は基部に剥離の痕跡がある。751は側辺を打ち欠いている。752は小形の石斧である。礫の縁辺部を打ち欠いて剥片を取り、その先端部を磨いて刃部をつくる。上面は自然面で、下面の縁辺部は打ち欠いている。

打製石斧（第85図 753～757）

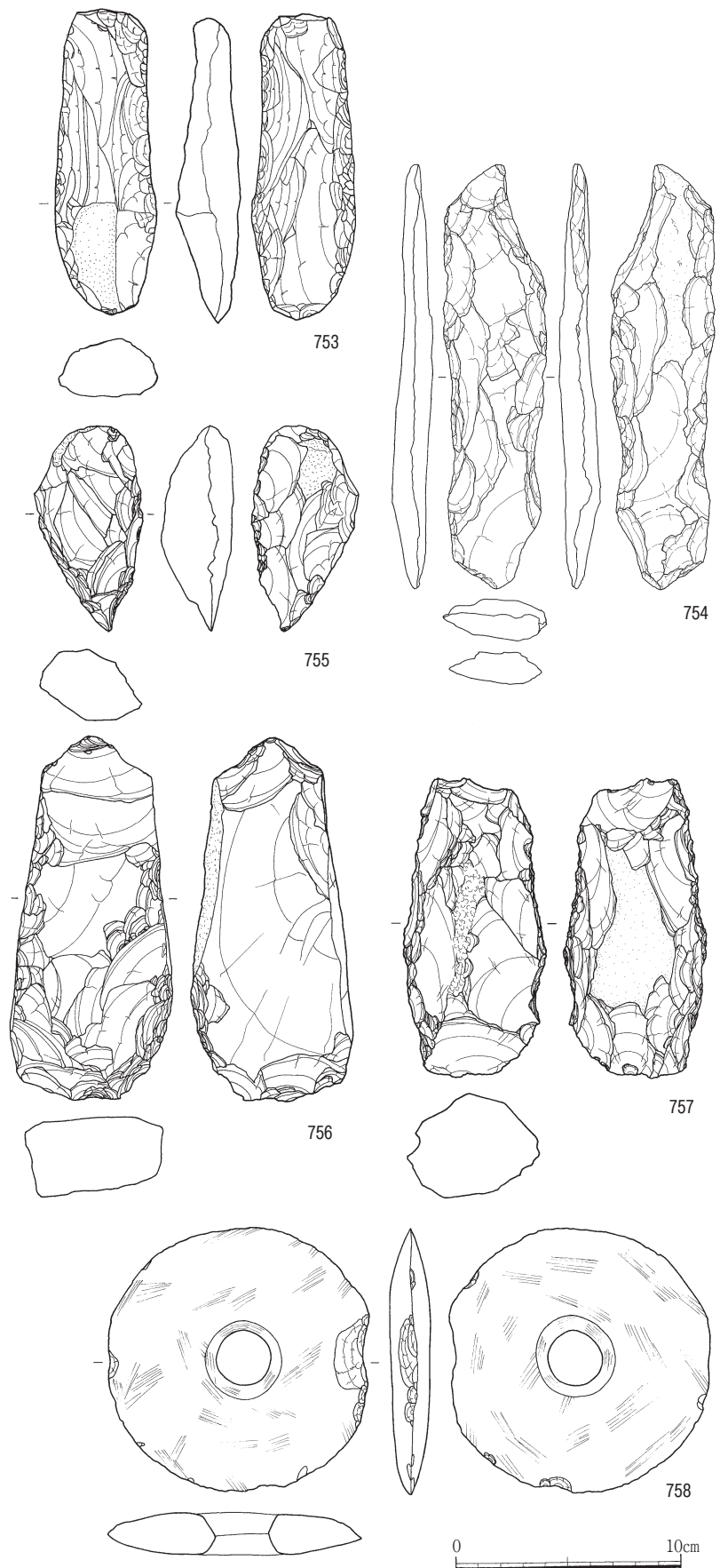
打製石斧については未製品も含め、頁岩製のものが19点出土した。その中から5点を掲載した。753は小形の石斧で浅い抉りを有する。754は打製のものであるが、石斧ではない可能性が考えられる資料である。755は小形石斧の未製品である。756・757は大形石斧の未製品である。

環状石斧（第85図 758）

頁岩製である。扁平な円形状を呈し、周縁は刃状に狭まる。中央には棒を差し込むための孔がけられる。中央孔内も含め、全面丁寧に研磨されている。

礫器（第86図 759～762・第87図 763～768）

礫器は全部で26点出土した。その中から10点を掲載した。石材はすべて頁岩を素材としている。759～762・764・765は、両面から剥離を加え刃部を形成するものである。763・766～768は扁平な礫



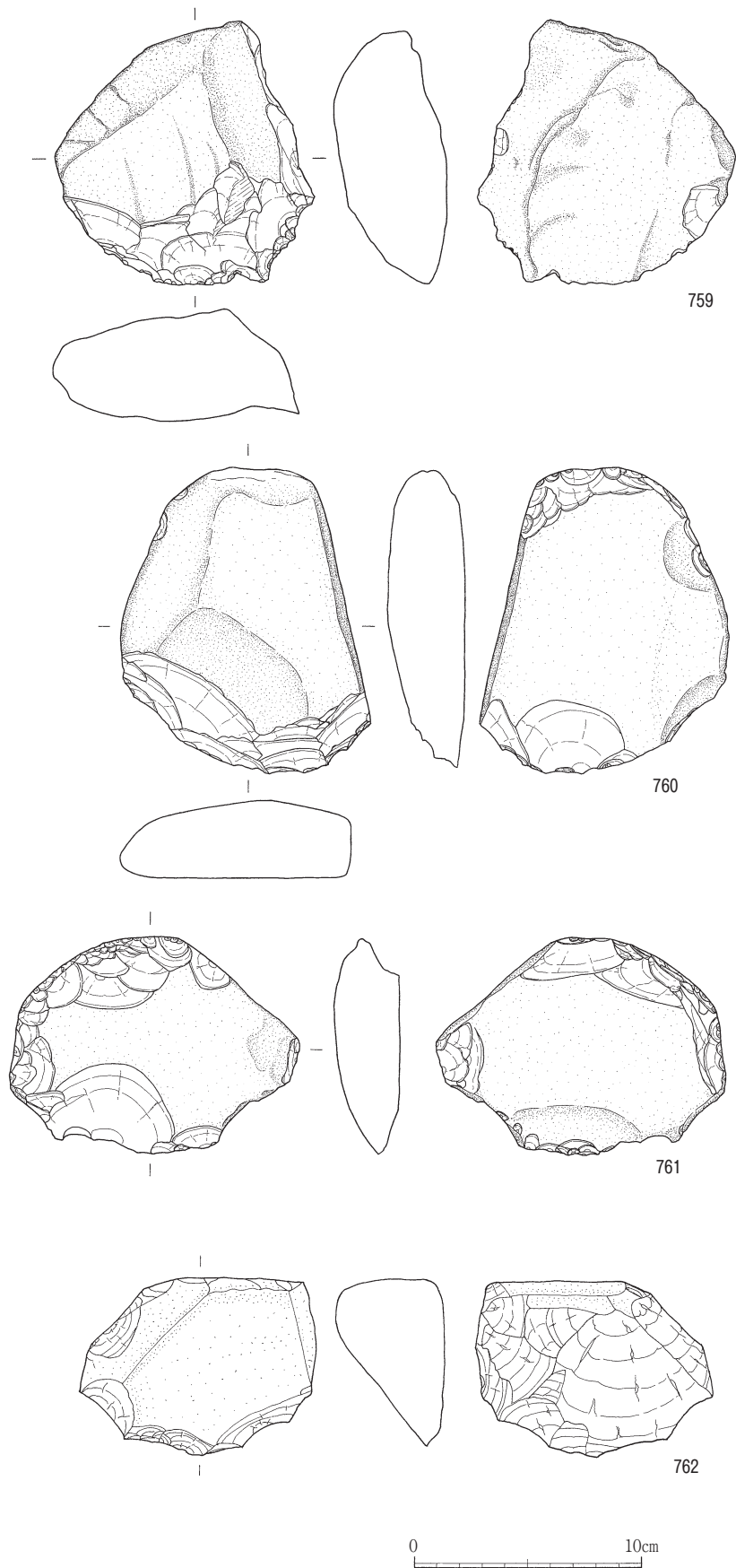
第85図 縄文時代早期 石器11

の一部に片面から剥離を加え刃部をつくるものである。

磨石・敲石・凹石（第88図～第90図 769～786）

遺跡全体で磨石・敲石類の石器は全部で約169点出土した。また、遺構としては取り扱わなかったが、磨石等を集めた集積がN-15区とS-20区から検出され、それぞれ4個と3個の磨石・敲石が集められた状態で出土している。これら7点を含め、18点を掲載した。

769～776は、敲打痕が見られず磨り面だけ観察できるものである。771は凝灰岩製で他は安山岩製である。772・774・775はN-15区の集積内から出土したもので、774は上部の3つの石を取り除いた後、その下部から検出されたものである。773はS-20区の集積内から出土したものである。777～780は、敲打痕・磨り面の両方が観察できるものである。777は砂岩製で他は安山岩製である。778はN-15区の集積内から出土したものである。779・780はS-20区の集積内から出土したものである。781～786は凹み部分が顕著な凹石で、両面に凹み部分が観察できる。全て砂岩製である。785は凹みがつながり帯状をなす。786は、砂岩製の短い棒状の敲石である。両端に敲打痕が見られる。



第86図 縄文時代早期 石器12

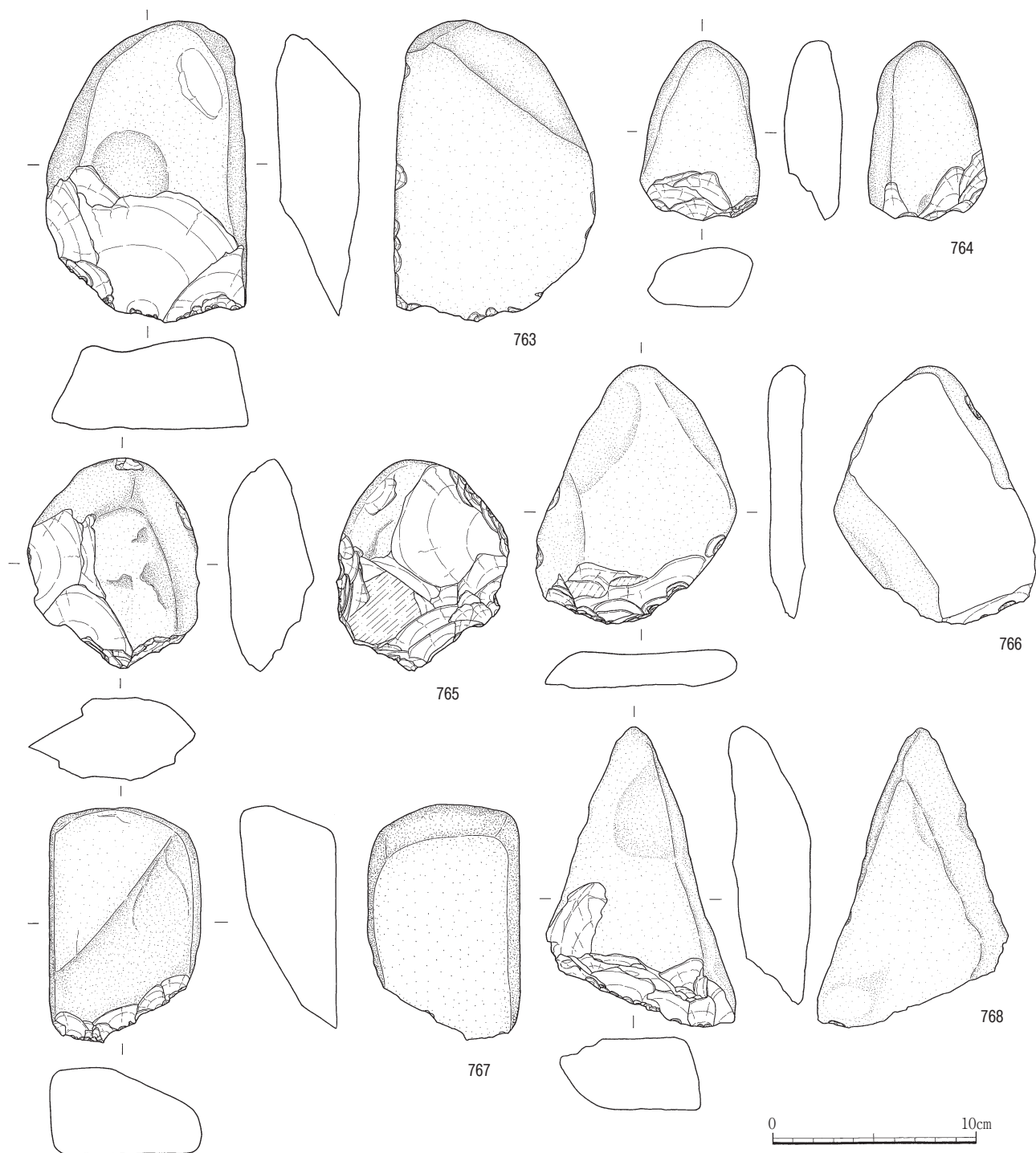
石皿（第91図～第93図 787～790）

小片も含め20点出土した。そのうち5点を掲載した。5点とも大形のものである。787・788は片面が作業面で、周縁部は調整が施される。789～791は両面が作業面となるものである。789は花崗岩製のもので、片面の中央部は凹んでいる。

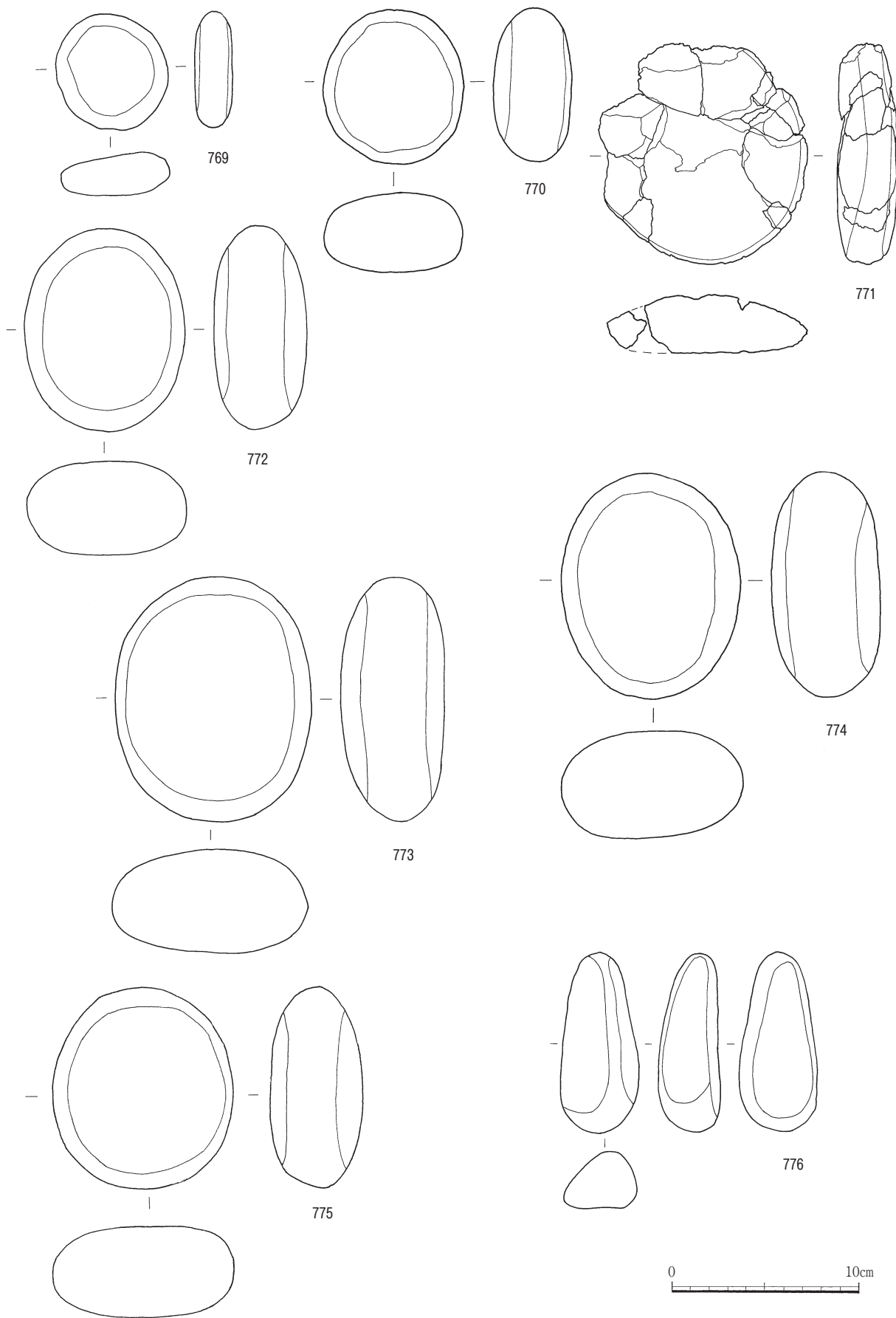
790は周縁部が加工されず、自然礫のままのものである。

その他の石器（第94図 792・793）

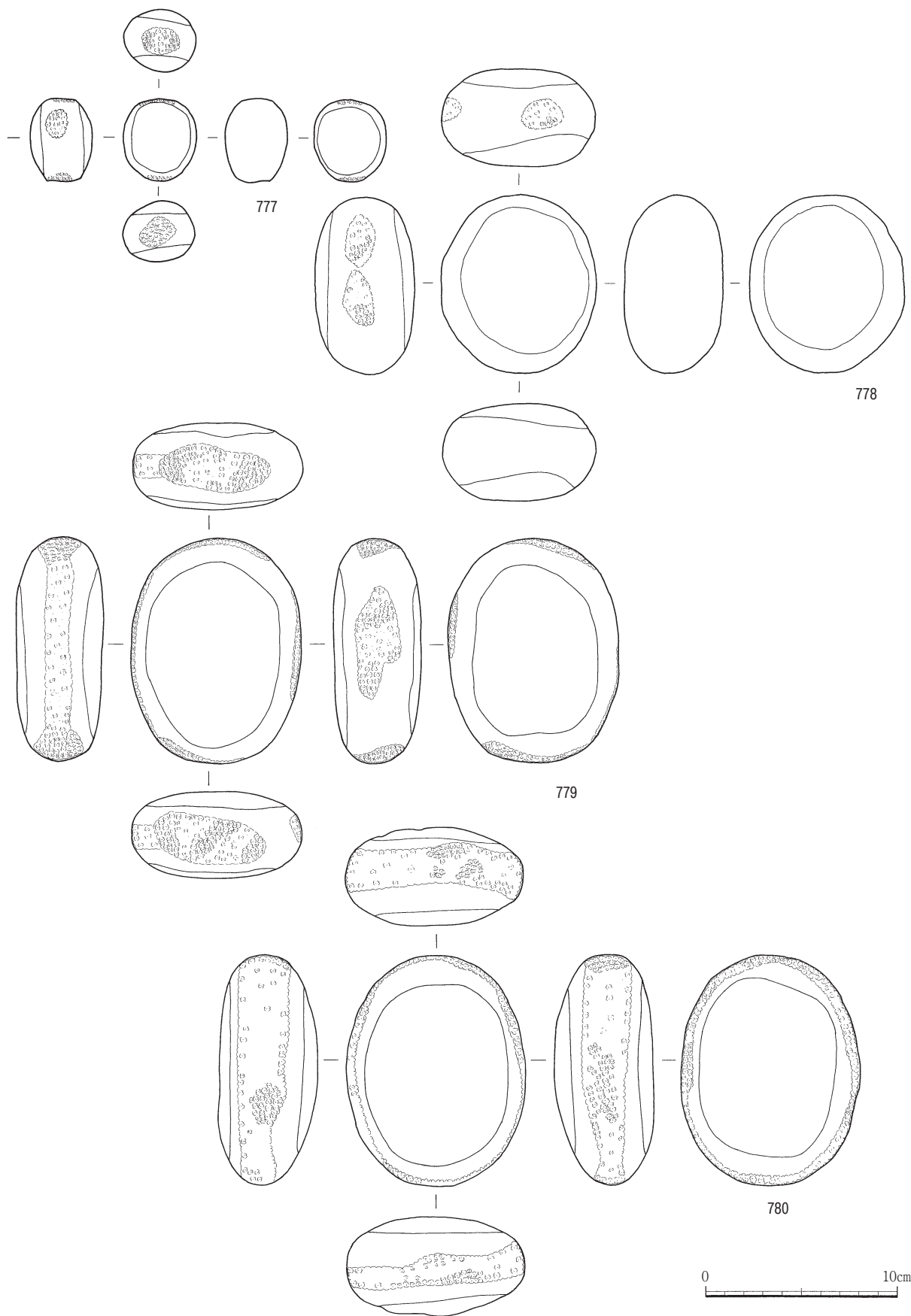
792・793は有溝砥石である。792は安山岩を、793は凝灰岩を素材としたものである。矢柄研磨器ではないかと思われるが、詳細な用途は不明である。



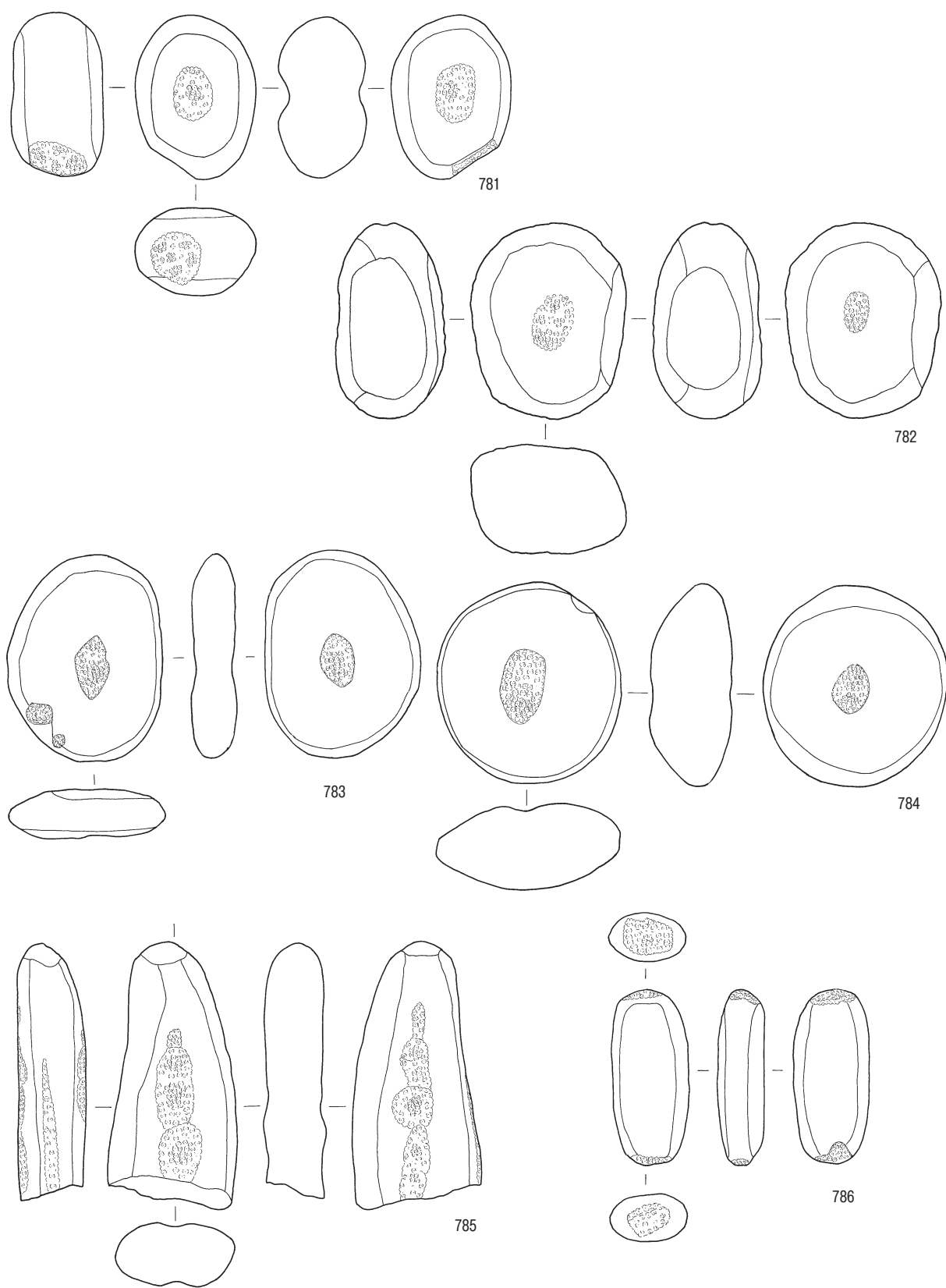
第87図 縄文時代早期 石器13



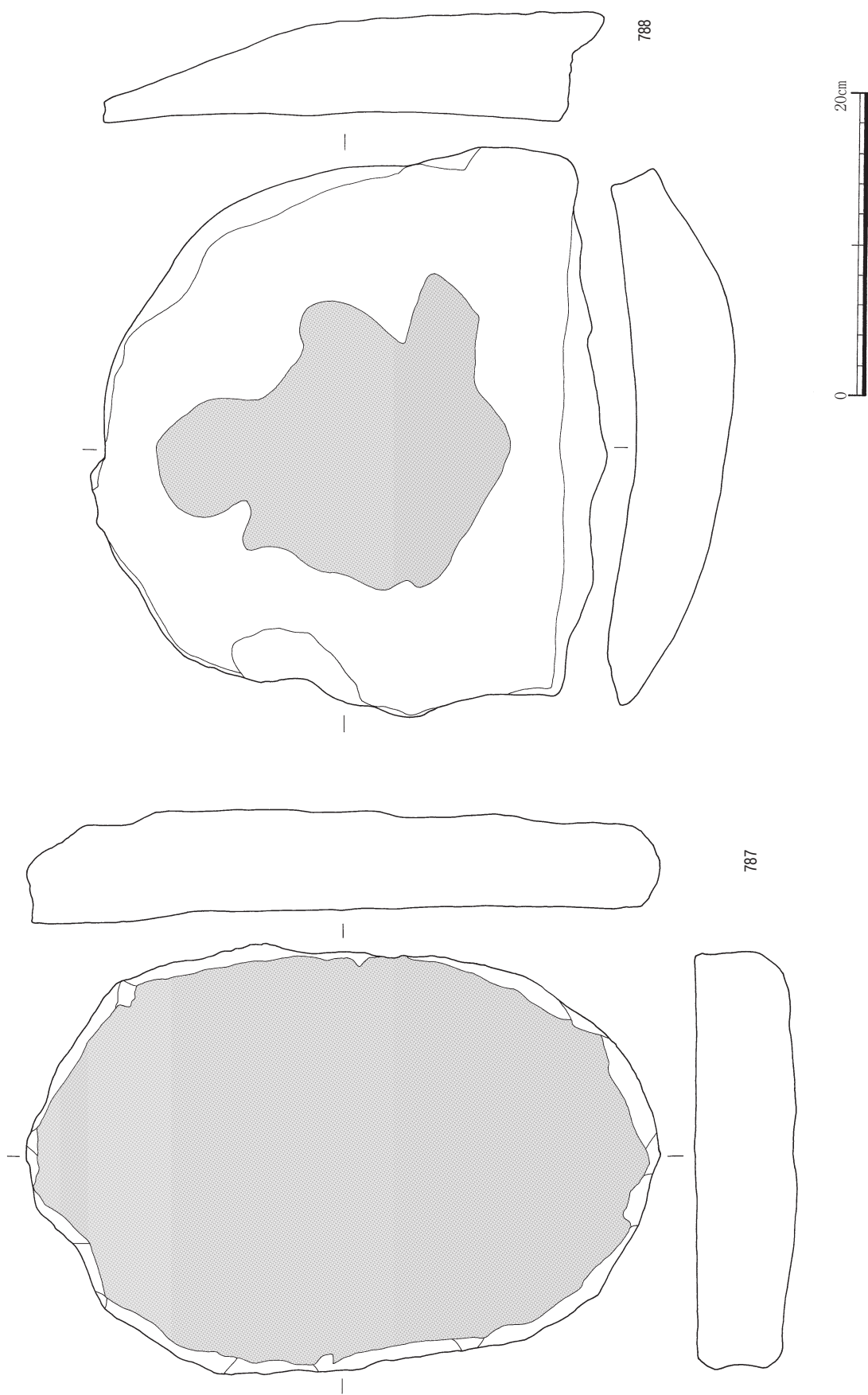
第88図 縄文時代早期 石器14



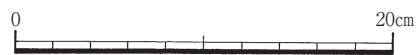
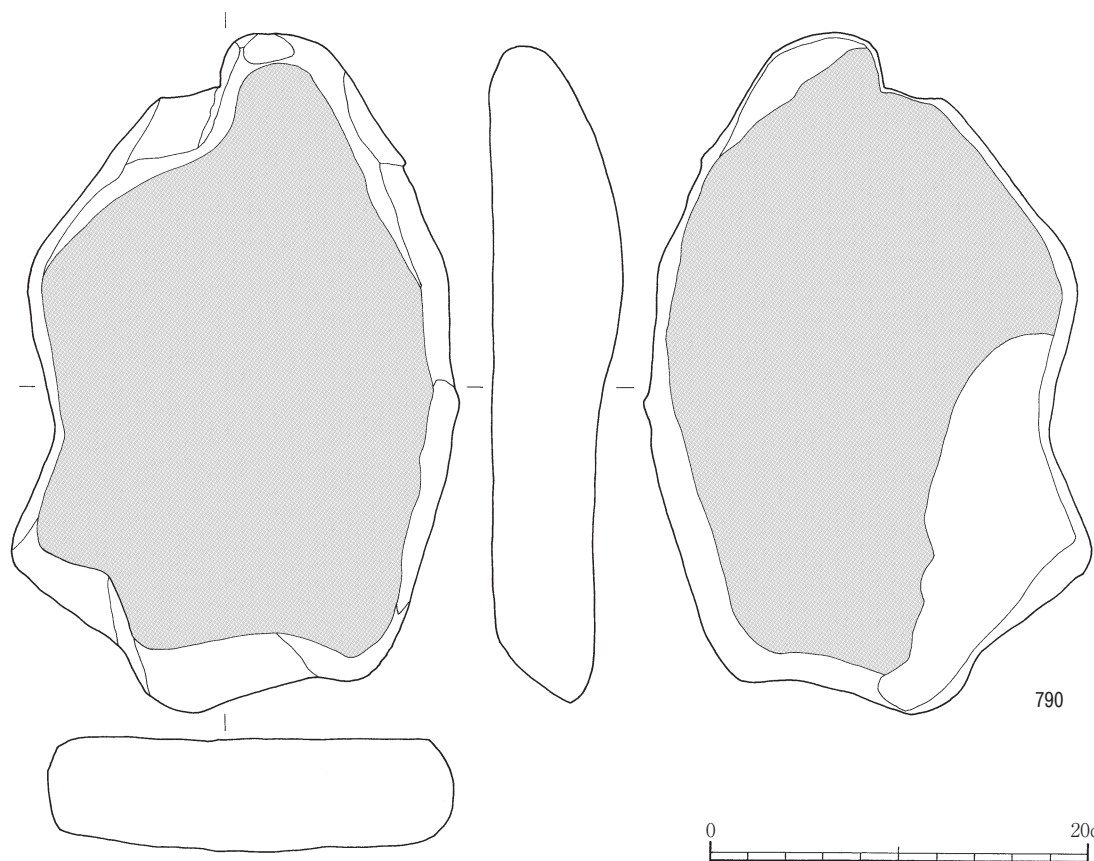
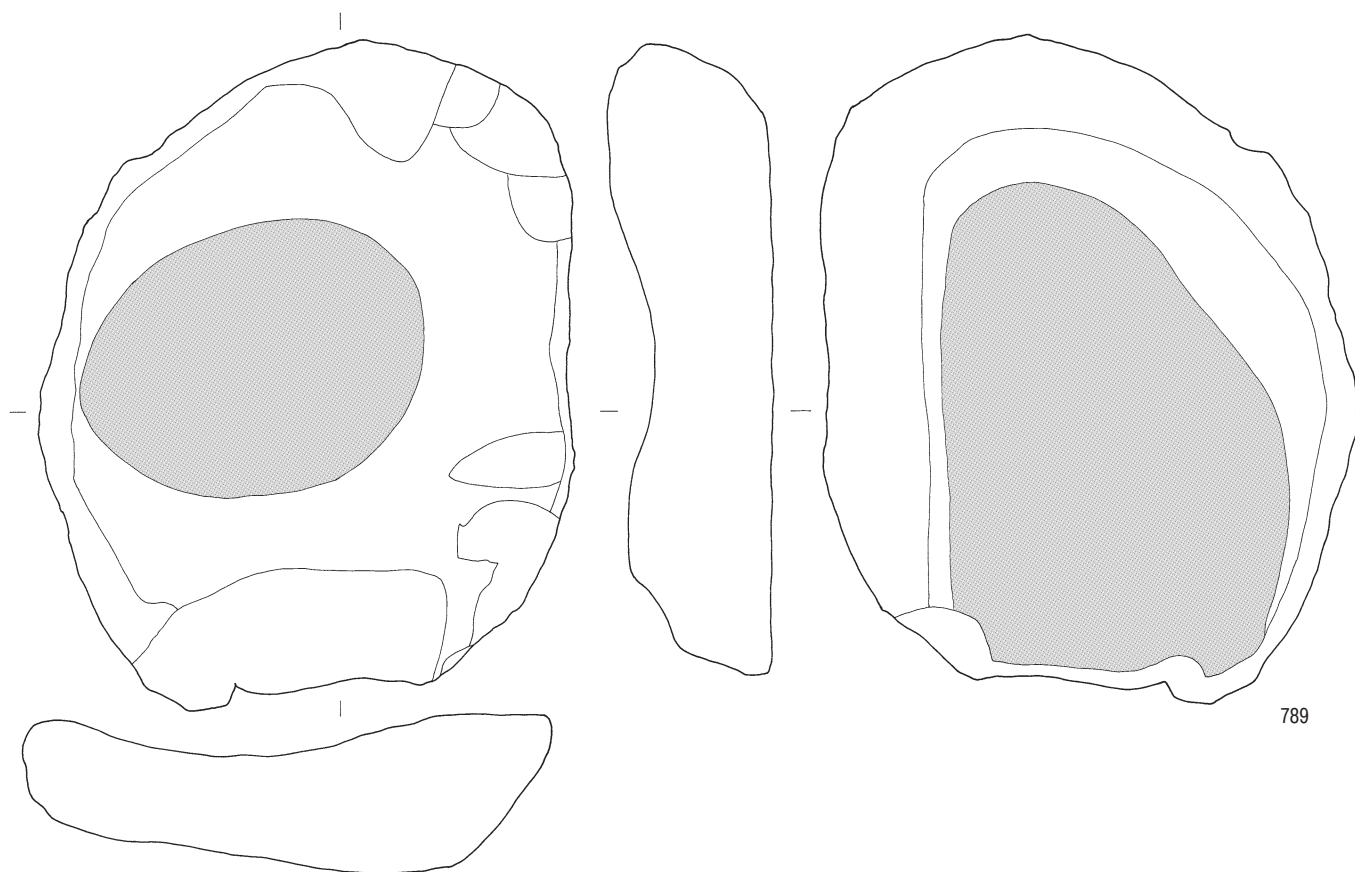
第89図 縄文時代早期 石器15



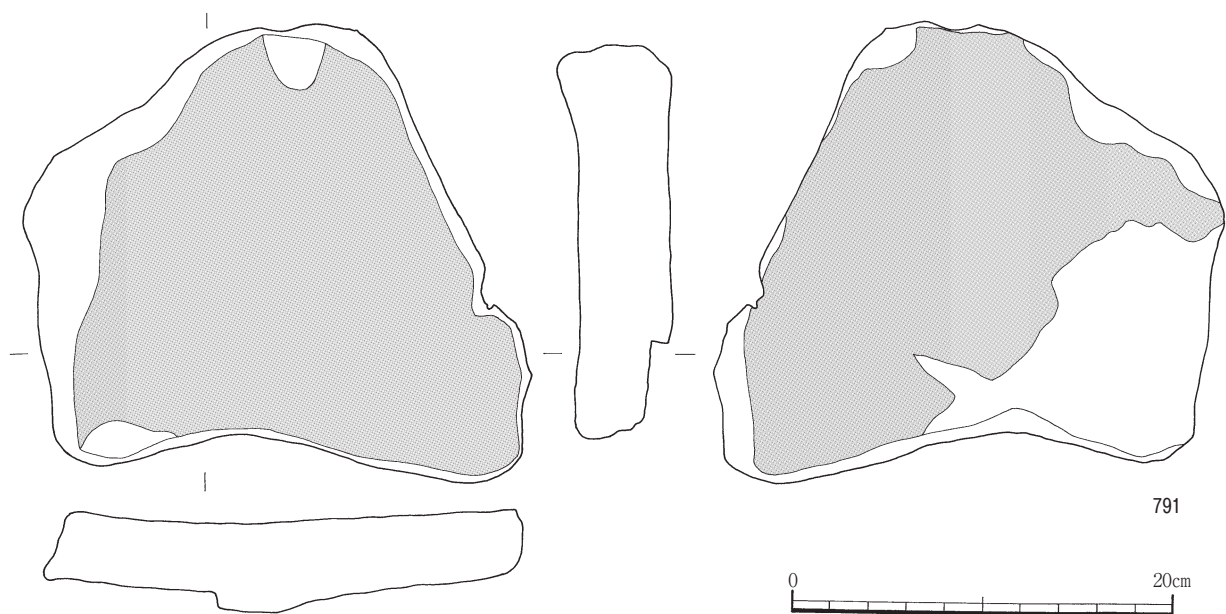
第90図 縄文時代早期 石器16



第91図 縄文時代早期 石器17



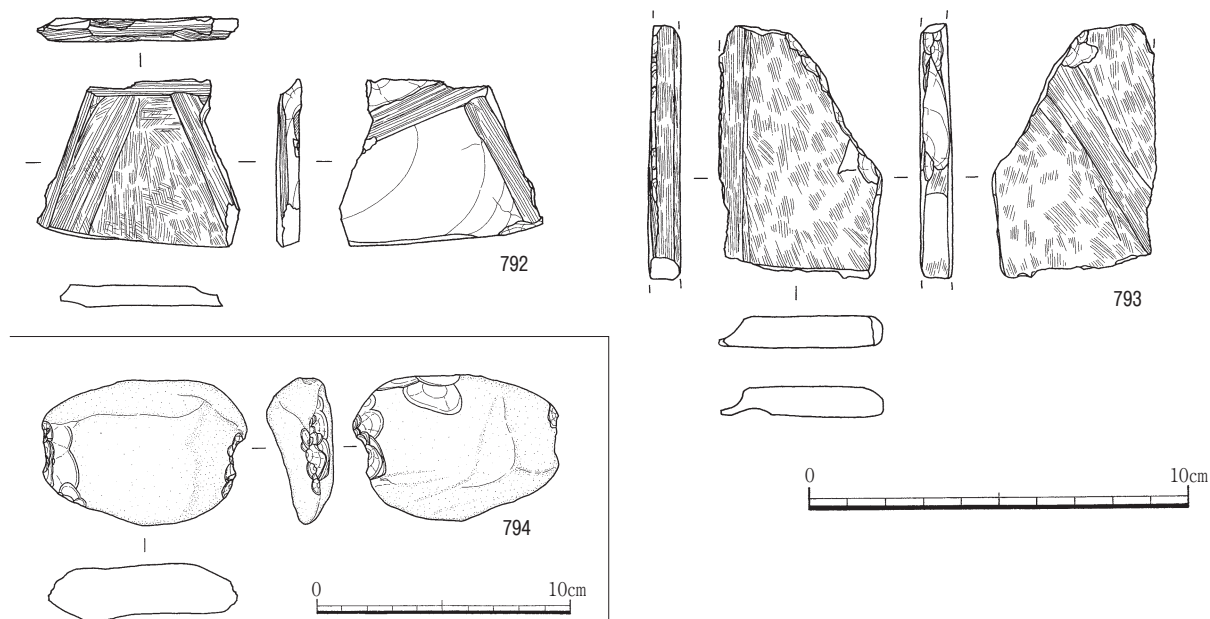
第92図 縄文時代早期 石器18



第93図 縄文時代早期 石器19

縄文時代早期石器観察表

挿図 番号	掲載 番号	注記 番号	層	器種	出土区	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
第 75 図	574	7890	IV	石鏃	M-14	黒曜石D	1.4	1.0	0.4	0.4	A-a-a
	575	9916	IV	石鏃	O-21集石21号内	頁岩	(1.6)	1.3	0.3	(0.6)	A-a-a
	576	7779	IV	石鏃	M-14	チャート	1.8	1.6	0.3	0.6	A-a-a
	577	2616	IV	石鏃	N-15	黒曜石D	1.9	1.5	0.4	0.8	A-a-a
	578	7819	IV	石鏃	M-14	黒曜石D	(2.1)	1.7	0.3	(0.8)	A-a-a
	579	7605	IV	石鏃	P-15	頁岩	2.3	1.6	0.4	1.0	A-a-a
	580	837	IV	石鏃	N-15	玉随	2.2	(1.5)	1.4	(1.1)	A-a-a
	581	6513	IV	石鏃	O-15	チャート	0.8	1.0	0.2	0.2	A-a-b
	582	2779	IV	石鏃	N-15	チャート	1.4	1.6	0.2	0.4	A-a-b
	583	2764	IV	石鏃	N-14	黒曜石D	(1.2)	1.4	0.3	(0.4)	A-a-b
	584	11904	IV	石鏃	Q-20	黒曜石C	(1.3)	1.4	0.3	(0.4)	A-a-b
	585	1938	IV	石鏃	N-15	チャート	1.4	1.0	0.3	0.3	A-a-b
	586	496	IV	石鏃	N-14	チャート	(1.3)	1.1	0.2	(0.2)	A-a-b
	587	3074	IV	石鏃	N-15	頁岩	1.5	1.1	0.3	0.3	A-a-b
	588	2148	IV	石鏃	N-15	頁岩	1.6	(1.3)	0.3	(0.5)	A-a-b
	589	1147	IV	石鏃	M-13	玉随	(1.4)	1.4	0.3	(0.4)	A-a-b
	590	7870	IV	石鏃	M-14	頁岩	0.3	1.3	0.3	0.5	A-a-b
	591	1480	IV	石鏃	M-14	チャート	1.4	1.3	0.2	0.4	A-a-b
	592	392	IV	石鏃	K-14	黒曜石C	(1.9)	(1.8)	0.4	(0.9)	A-a-b
	593	487	IV	石鏃	N-14	チャート	(1.6)	(1.5)	0.5	(0.8)	A-a-b
	594	2868	IV	石鏃	N-15	チャート	(1.8)	(1.0)	(0.5)	(0.7)	B-a-b
	595	3738	IV	石鏃	Q-17	チャート	1.6	(1.4)	0.2	(0.4)	A-a-b
	596	6645	IV	石鏃	O-15	チャート	(1.8)	(1.3)	0.3	(0.5)	A-a-b
	597	7539	IV	石鏃	O-14	黒曜石D	1.9	1.6	0.3	0.6	A-a-b
	598	4859	IV	石鏃	Q-19	頁岩	2.0	1.5	0.5	0.9	A-a-b
	599	6750	IV	石鏃	O-16	チャート	2.0	1.6	0.4	1.0	A-a-b
	600	7197	IV	石鏃	O-14	頁岩	2.1	0.7	0.3	1.0	A-a-b
	601	6078	IV	石鏃	Q-19	チャート	2.3	1.8	0.5	1.3	A-a-b
	602	9189	IV	石鏃	R-19	黒曜石C	2.6	2.7	0.3	1.2	A-a-b
	603	3282	IV	石鏃	O-16	チャート	2.5	(1.9)	0.5	(1.5)	A-a-b
	604	2851	IV	石鏃	N-15	チャート	1.5	(1.3)	0.3	(0.4)	A-a-c
	605	1068	IV	石鏃	J-14	黒曜石B	1.4	1.3	0.3	2.0	A-a-c
	606	3172	IV	石鏃	E-9	頁岩	2.0	1.7	0.5	0.9	A-a-c
	607	325	IV	石鏃	L-14	黒曜石B	2.3	1.6	0.3	0.7	A-a-c
	608	262	IV	石鏃	L-14	黒曜石B	2.2	1.7	0.4	0.7	A-a-c
	609	83	IV	石鏃	J-12	黒曜石B	2.3	1.7	0.4	0.9	A-a-c
第 76 図	610	4272	IV	石鏃	R-19	黒曜石B	2.0	1.9	0.6	1.1	A-a-c
	611	3341	IV	石鏃	N-15	黒曜石B	2.1	1.9	0.6	1.1	A-a-c
	612	3199	IV	石鏃	I-11	チャート	(1.8)	1.4	0.4	(0.4)	A-a-d
	613	336	IV	石鏃	L-14	玉随	2.4	1.9	0.4	1.4	A-a-c



第94図 縄文時代早期 石器20

平坦な両面には、研磨により形成されたと思われる溝状の凹みが見られ、その内面には研磨痕のような筋状の痕跡が残る。794は石錘である。両サイド

に網を取り付けるために挟りがつくられる。頁岩製のものである。

縄文時代早期石器観察表

挿図 番号	掲載 番号	注記 番号	層	器種	出土区	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
第 76 図	614	2442	IV	石鏃	N-15	チャート	(2.5)	(1.0)	0.5	(1.2)	A-a-c
	615	5858	IV	石鏃	Q-19	頁岩	1.7	(1.1)	0.4	(0.4)	A-a-c
	616	2273	IV	石鏃	N-15	頁岩	(1.7)	1.2	0.3	(0.5)	A-b-b
	617	6652	IV	石鏃	O-15	頁岩	(1.8)	(1.7)	0.3	(0.5)	A-b-b
	618	2003	IV	石鏃	N-15	頁岩	(2.4)	(1.4)	0.3	(0.7)	A-b-b
	619	7055	IV	石鏃	O-15	頁岩	2.5	1.4	0.4	1.1	A-b-b
	620	3234	IV	石鏃	O-16	チャート	2.1	1.4	0.3	0.9	A-b-b
	621	7606	IV	石鏃	P-15	頁岩	2.6	1.9	0.3	1.1	A-b-b
	622	3576	IV	石鏃	P-16	頁岩	2.9	1.8	0.3	1.0	A-b-b
	623	-	IV	石鏃	-	頁岩	2.8	1.9	0.7	2.4	A-b-b
	624	1631	IV	石鏃	M-14	頁岩	3.1	1.7	0.3	1.6	A-b-b
	625	12106	IV	石鏃	S-21	黒曜石C	(2.9)	1.4	0.5	(1.6)	A-b-b
	626	1684	IV	石鏃	M-14	頁岩	2.7	(1.8)	0.5	(1.3)	A-b-c
	627	5068	IV	石鏃	P-19	黒曜石B	(2.9)	(1.4)	0.4	(1.0)	A-b-c
	628	3351	IV	石鏃	P-16	黒曜石B	2.6	1.7	0.4	1.0	A-b-c
	629	3711	IV	石鏃	Q-17	頁岩	2.7	1.7	0.5	1.6	A-b-c
	630	10555	IV	石鏃	R-20	頁岩	(2.5)	1.9	0.5	(1.4)	A-b-c
	631	3559	IV	石鏃	P-16	頁岩	3.0	2.3	0.5	2.3	A-b-c
	632	1129	IV	石鏃	M-13	頁岩	(3.0)	(2.0)	0.6	(2.8)	A-b-c
	633	3295	IV	石鏃	O-16	チャート	(1.3)	(1.7)	0.2	(0.5)	B-a-b
	634	7041	IV	石鏃	P-15	チャート	1.6	1.6	0.3	0.6	B-a-b
	635	2274	IV	石鏃	N-15	頁岩	(1.4)	1.5	0.3	(0.5)	B-a-b
	636	2395	IV	石鏃	N-15	黒曜石D	(1.1)	(1.2)	0.3	(0.3)	B-a-b
	637	3471	IV	石鏃	P-16	チャート	2.0	1.8	0.3	0.8	B-a-b
	638	811	IV	石鏃	N-15	チャート	1.9	1.6	0.3	0.7	B-a-b
	639	2440	IV	石鏃	N-15	玉随	(2.1)	(1.6)	0.3	(0.7)	B-a-b
	640	3101	IV	石鏃	M-14	チャート	2.0	1.2	0.2	0.4	B-a-b
第 77 図	641	2470	IV	石鏃	N-15	安山岩	1.7	1.0	0.3	0.5	B-b-a
	642	923	IV	石鏃	N-15	玉随	1.6	0.8	0.3	0.4	B-b-a
	643	2870	IV	石鏃	N-15	チャート	2.1	(1.2)	0.5	(1.0)	B-b-a
	644	3285	IV	石鏃	O-16	チャート	(1.7)	1.2	0.3	(0.6)	B-b-b
	645	6755	IV	石鏃	O-16	チャート	(1.9)	(1.3)	0.2	(0.4)	B-b-b

縄文時代早期石器観察表

挿図 番号	掲載 番号	注記 番号	層	器種	出土区	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
第 77 図	646	4727	IV	石鏃	Q-19	黒曜石C	2.2	1.2	0.3	0.7	B-b-b
	647	7459	IV	石鏃	O-14	玉随	2.1	1.4	0.4	0.7	B-b-b
	648	915	IV	石鏃	N-15	玉随	2.1	1.3	0.3	0.8	C-a-a
	649	7306	IV	石鏃	R-19	玉随	(1.8)	1.3	0.4	(0.7)	C-a-a
	650	461	IV	石鏃	N-14	玉随	1.9	1.2	0.4	0.8	C-a-a
	651	2432	IV	石鏃	N-15	玉随	2.4	1.6	0.3	0.8	B-b-c
	652	48T21	IV	石鏃	-	玉随	2.6	1.6	0.3	0.9	B-b-c
	653	825	IV	石鏃	N-15	頁岩	2.0	0.9	0.4	0.5	B-b-c
	654	10095	IV	石鏃	Q-21	黒曜石	2.1	1.4	0.4	0.7	B-b-c
	655	3039	IV	石鏃	N-15	チャート	1.3	(1.2)	0.4	0.4	C-a-a
	656	6734	IV	石鏃	O-16	チャート	(1.8)	(1.3)	0.4	(0.8)	C-a-a
	657	2889	IV	石鏃	N-15	チャート	1.4	1.4	0.3	0.6	C-a-a
	658	7177	IV	石鏃	O-14	チャート	1.8	(1.6)	0.5	(1.2)	A-a-a
	659	6713	IV	石鏃	O-16	チャート	2.2	1.8	0.6	1.7	C-a-a
	660	3709	IV	石鏃	Q-17	黒曜石B	2.1	1.4	0.5	1.4	C-b-a
	661	11908	IV	石鏃	Q-20	玉随	2.5	1.8	0.7	2.7	C-b-a
	662	3291	IV	石鏃	O-16	頁岩	2.5	1.8	0.4	1.7	C-b-a
	663	7968	IV	石鏃	N-14	玉随	2.5	1.6	0.6	0.7	C-b-a
	664	580	IV	石鏃	N-14	頁岩	2.3	1.1	0.4	0.7	C-c-b
	665	8639	IV	石鏃	N-14	頁岩	2.9	1.1	0.3	1.1	C-c-b
第 78 図	666	1830	IV	石鏃	M-15	玉随	2.9	1.2	0.3	1.0	C-c-b
	667	2074	IV	石鏃	N-15	玉随	2.7	1.4	0.4	1.2	C-c-b
	668	6666	IV	石鏃	O-15	玉随	1.1	1.0	0.2	0.2	-
	669	2266	IV	石鏃	N-15	チャート	(1.2)	(0.9)	(0.5)	(0.4)	-
	670	7179	IV	石鏃	O-14	チャート	(1.0)	(1.2)	(0.2)	(0.2)	-
	671	9875	IV	石鏃	Q-21	チャート	(1.2)	(1.8)	0.2	(0.3)	-
	672	2424	IV	石鏃	N-15	チャート	(1.4)	(1.4)	0.4	(0.6)	-
	673	834	IV	石鏃	N-15	玉随	1.3	1.3	0.3	0.6	-
	674	3428	IV	石鏃	P-16	黒曜石D	(1.4)	(1.2)	(0.5)	(0.6)	-
	675	3073	IV	石鏃	N-15	頁岩	(1.8)	(1.1)	0.3	(0.7)	-
	676	2313	IV	石鏃	N-15	チャート	(2.1)	(1.4)	(0.5)	(1.0)	-
	677	2995	IV	石鏃	N-15	チャート	(1.6)	(1.3)	0.3	(0.6)	-
	678	2938	IV	石鏃	N-15	頁岩	3.0	2.0	0.3	1.4	-
	679	7100	IV	石鏃	O-14	黒曜石C	(1.5)	(0.8)	0.3	(0.2)	-
	680	3159	IV	石鏃	E-9	チャート	(1.5)	(0.9)	(0.3)	(0.3)	-
	681	854	IV	石鏃	N-15	チャート	1.6	1.1	0.3	(0.4)	-
	682	498	IV	石鏃	N-14	頁岩	(1.8)	(1.4)	0.5	(0.5)	-
	683	2381	IV	石鏃	N-15	玉随	(2.1)	(1.1)	0.3	(0.9)	-
	684	1964	IV	石鏃	N-15	チャート	(1.0)	(0.9)	0.3	(0.4)	-
第 79 図	685	842	IV	石鏃	N-15	チャート	(1.5)	1.6	0.5	(1.0)	A-?-a
	686	564	IV	石鏃	N-14	チャート	(1.4)	2.1	0.4	(1.2)	?-?-a
	687	3286	IV	石鏃	O-16	チャート	(1.6)	(1.3)	0.3	(1.5)	A-?-b
	688	890	IV	石鏃	N-15	チャート	(0.8)	1.2	1.2	(0.1)	A-?-b
	689	2073	IV	石鏃	N-15	頁岩	(1.3)	1.8	0.3	(0.4)	A-?-b
	690	4670	IV	石鏃	Q-19	頁岩	(1.6)	2.1	0.3	(0.9)	A-?-b
	691	2407	IV	石鏃	N-15	玉随	(1.7)	1.7	0.4	(0.8)	B-?-b
	692	1952	IV	石鏃	N-15	チャート	(1.3)	(1.8)	0.3	(0.5)	?-?-b
	693	2181	IV	石鏃	N-15	頁岩	(1.1)	(1.6)	0.3	(0.4)	?-?-c
	694	2426	IV	石鏃	N-15	玉随	(1.6)	1.8	0.4	(0.7)	B-?-c
	695	3091	IV	石鏃	N-14	玉随	(2.0)	1.5	0.4	(0.8)	B-?-c
	696	3468	IV	石鏃	P-16	玉随	(1.5)	1.7	0.3	(0.6)	B-?-c
	697	12189	IV	石鏃	T-20	黒曜石	(1.9)	(1.4)	0.5	(1.0)	A-?-c
	698	7798	IV	石鏃未製品	M-14	黒曜石	1.6	1.0	0.5	0.6	-
	699	3488	IV	石鏃未製品	P-16	チャート	(1.4)	2.0	0.4	(1.6)	-
	700	2234	IV	石鏃未製品	N-15	頁岩	(1.1)	2.3	0.3	(0.6)	-
	701	2533	IV	石鏃未製品	N-15	チャート	1.5	1.3	0.3	0.4	-
	702	6346	IV	石鏃未製品	P-15	チャート	1.8	2.0	0.7	2.2	-
	703	3332	IV	石鏃未製品	O-15	チャート	2.1	2.0	0.6	(2.6)	-
第 80 図	704	7898	IV	石鏃未製品	M-14	黒曜石A	1.3	1.4	0.3	0.5	-
	705	6716	IV	石鏃未製品	O-16	チャート	1.7	1.5	0.2	0.3	-
	706	3008	IV	石鏃未製品	N-15	頁岩	(1.4)	(1.3)	0.3	(0.4)	-
	707	7114	IV	石鏃未製品	O-14	黒曜石D	1.7	1.3	0.2	0.3	-
	708	3353	IV	石鏃未製品	P-16	チャート	(2.4)	1.6	0.3	(0.7)	-
	709	7458	IV	石鏃未製品	O-14	頁岩	2.4	1.7	0.4	1.4	-
	710	6314	IV	石鏃未製品	P-15	チャート	2.4	2.0	0.5	1.5	-
	711	2276	IV	石鏃未製品	N-15	玉随	2.0	(1.2)	(0.3)	(0.5)	-
第 80 図	712	534	IV	石鏃未製品	N-14	黒曜石C	3.2	1.8	0.6	2.9	-
	713	7759	IV	石鏃未製品	M-14	玉随	(2.7)	(2.0)	0.9	(3.6)	-
	714	656	IV	石鏃未製品	N-14	玉随	3.1	2.0	0.7	3.0	-
	715	6659	IV	石鏃未製品	O-15	チャート	(3.0)	(2.3)	0.7	(3.0)	-
	716	7488	IV	石槍	O-14	頁岩	(6.9)	3.1	0.8	16.4	-
	717	744	IV	石槍	N-15	頁岩	6.8	1.8	0.6	5.8	-
	718	692	IV	石槍	N-14	安山岩	5.5	2.5	0.7	8.0	-
	719	1075	IV	石槍	J-14	頁岩	(6.3)	3.7	0.6	11.6	-

縄文時代早期石器観察表

挿図 番号	掲載 番号	注記 番号	層	器種	出土区	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
第80図	720	2025	Ⅳ	石槍	N-15	頁岩	4.5	3.1	0.5	6.6	－
	721	7730	Ⅳ	石槍	M-14	安山岩	(3.7)	2.9	1.2	17.7	－
	722	4029	Ⅳ	石匙	Q-18	玉随	6.1	5.8	1.1	38.0	－
	723	6476	Ⅳ	石匙	O-15	安山岩	7.8	3.9	1.4	39.3	－
	724	3935	Ⅳ	石匙	R-18	安山岩	3.6	2.4	0.7	5.9	－
第81図	725	3311	Ⅳ	スクレイパー	O-15	頁岩	6.3	11.7	1.2	101.2	－
	726	1797	Ⅳ	スクレイパー	M-15	頁岩	5.2	9.3	1.4	55.0	－
	727	6517	Ⅳ	スクレイパー	O-15	頁岩	6.7	8.4	1.6	66.1	－
	728	686	Ⅳ	スクレイパー	N-14	頁岩	2.7	7.6	1.2	17.9	－
	729	－	Ⅳ	スクレイパー	－	チャート	4.2	3.3	0.7	13.9	－
	730	7048	Ⅳ	スクレイパー	P-15	チャート	7.0	3.0	1.1	20.2	－
	731	569	Ⅳ	スクレイパー	N-14	頁岩	10.6	6.6	1.5	122.1	－
	732	413	Ⅳ	スクレイパー	J-13	頁岩	10.2	4.7	1.6	82.4	－
第82図	733	3561	Ⅳ	スクレイパー	P-16	頁岩	9.4	11.3	2.2	247.6	－
	734	771	Ⅳ	スクレイパー	N-15	頁岩	2.8	2.5	0.7	5.6	－
	735	15	Ⅳ	スクレイパー	N-14	頁岩	1.7	2.8	0.7	3.6	－
	736	9949	Ⅳ	スクレイパー	Q-21	玉随	4.8	5.2	0.6	37.9	－
	737	777	Ⅳ	スクレイパー	N-15	頁岩	7.8	7.0	2.3	151.1	－
	738	371	Ⅳ	スクレイパー	K-13	頁岩	8.5	(12.0)	2.6	420.0	－
	739	4238	Ⅳ	石核	R-18	黒曜石	3.4	2.9	1.6	12.1	－
	740	7494	Ⅳ	楔形石器	O-14	頁岩	3.0	3.2	2.6	7.6	－
	741	1924	Ⅳ	楔形石器	N-15	チャート	1.6	1.4	0.6	1.1	－
	742	10874	Ⅳ	使用痕剥片	S-21	チャート	2.0	0.9	0.4	0.4	－
第83図	743	7069	Ⅳ	石核	O-15	頁岩	8.1	7.7	2.7	190	－
	744	679	Ⅳ	石核	N-14	頁岩	14.5	8.1	5.4	790	－
	745	3783	Ⅳ	石核	Q-17	頁岩	11.1	9.8	3.5	480	－
	746	11956	Ⅳ	石核	T-20	頁岩	12.3	12.5	7.3	1300	－
第84図	747	9687	Ⅳ	磨製石斧	P-21	頁岩	12.1	4.9	2.2	195	－
	748	1430	Ⅳ	磨製石斧	M-14	頁岩	7.7	3.0	2.8	189	－
	749	7456	Ⅳ	磨製石斧	O-14	頁岩	11.2	3.2	2.5	135	－
	750	9459	Ⅳ	磨製石斧	Q-19	頁岩	15.7	4.0	2.7	230	－
	751	3186	Ⅳ	磨製石斧	E-9	頁岩	16.5	4.0	2.5	215	－
	752	2108	Ⅳ	磨製石斧	N-15	頁岩	9.5	3.1	1.4	50	－
第85図	753	3369	Ⅳ	打製石斧	P-16	頁岩	13.4	4.5	2.5	160	－
	754	11633	Ⅳ	打製石製品	P-21	頁岩	19.0	4.6	1.4	150	－
	755	3955	Ⅳ	打製石斧未製品	R-18	頁岩	9.2	4.7	3.2	130	－
	756	1066	Ⅳ	打製石斧未製品	J-14	頁岩	16.1	7.0	3.3	515	－
	757	328	Ⅳ	打製石斧未製品	L-14	頁岩	13.2	6.3	4.5	465	－
	758	3701	Ⅳ	環状石斧	Q-17	頁岩	11.8	11.3	1.9	320	－
第86図	759	241	Ⅳ	礫器	L-13	頁岩	11.6	11.0	4.6	735	－
	760	3699	Ⅳ	礫器	Q-17	頁岩	13.4	10.4	3.4	685	－
	761	11371	Ⅳ	礫器	R-20	頁岩	9.4	12.7	2.9	480	－
	762	9817	Ⅳ	礫器	P-21	頁岩	7.6	10.1	4.7	420	－
第87図	763	4953	Ⅳ	礫器	Q-19	頁岩	14.7	9.8	4.5	890	－
	764	9699	Ⅳ	礫器	P-21	頁岩	8.8	5.8	2.9	185	－
	765	2453	Ⅳ	礫器	N-15	頁岩	10.4	8.3	4.1	390	－
	766	1537	Ⅳ	礫器	M-14	頁岩	12.6	9.3	1.8	305	－
	767	9134	Ⅳ	礫器	R-19	頁岩	11.5	7.4	4.2	600	－
	768	6327	Ⅳ	礫器	P-15	頁岩	14.6	9.3	3.7	470	－
第88図	769	3380	Ⅳ	磨石	P-16	安山岩	6.1	5.8	2.0	119	－
	770	3810	Ⅳ	磨石	R-17	安山岩	8.2	7.4	4.2	365	－
	771	214	Ⅳ	磨石	L-13	凝灰岩	(11.8)	(11.0)	3.1	305	－
	772	904	Ⅳ	磨石	N-15	安山岩	10.8	8.5	5.0	630	－
	773	10802	Ⅳ	磨石	S-20	安山岩	13.0	10.4	5.5	1095	－
	774	3340	Ⅳ	磨石	N-15	安山岩	1.9	9.5	5.6	920	－
	775	905	Ⅳ	磨石	N-15	安山岩	10.8	9.6	4.9	730	－
	776	8666	Ⅳ	磨石	N-15	安山岩	6.5	4.2	3.0	165	－
第89図	777	3930	Ⅳ	敲石	R-18	砂岩	4.3	3.8	3.2	79	－
	778	903	Ⅳ	敲石	N-15	安山岩	9.5	8.0	5.1	560	－
	779	10801	Ⅳ	敲石	S-20	安山岩	11.7	8.8	4.5	740	－
	780	10803	Ⅳ	敲石	S-20	安山岩	12.0	9.3	5.1	860	－
第90図	781	－	表採	凹石	－	砂岩	8.3	6.2	4.4	280	－
	782	2015	Ⅳ	凹石	N-15	砂岩	9.8	7.6	5.3	620	－
	783	979	Ⅳ	凹石	F-11	砂岩	10.3	7.9	2.2	320	－
	784	955	Ⅳ	凹石	G-11	砂岩	10.1	4.0	9.3	490	－
	785	1412?	Ⅳ	凹石	－	砂岩	13.0	6.5	3.1	370	－
	786	6216	Ⅳ	敲石	P-16	砂岩	8.8	3.9	2.3	130	－
第91図	787	1789	Ⅳ	石皿	M-15	安山岩	42.0	28.6	6.7	12100	－
	788	9193	Ⅳ	石皿	R-19	安山岩	34.3	37.8	7.3	12600	－
第92図	789	3303	Ⅳ	石皿	O-15	花崗岩	33.8	28.0	8.5	12500	－
	790	4225	Ⅳ	石皿	R-18	安山岩	34.9	22.0	4.9	8100	－
第93図	791	1736	Ⅳ	石皿	M-13	安山岩	22.8	25.5	6.0	3900	－
第94図	792	7594	Ⅳ	有溝砥石	P-15	安山岩	4.4	5.3	0.6	17.1	－
	793	7640	Ⅳ	有溝砥石	Q-16	凝灰岩	6.7	4.3	0.8	35.0	－
	794	3769	Ⅳ	石錘	Q-17	頁岩	5.7	8.0	2.0	139.3	－

3 縄文時代前期・後期の調査

縄文時代前期・後期については、遺構は検出されず土器も約30点と非常に少ないことから、まとめて報告しておきたい。土器は同一個体と思われる破片が多く、個体数としては5点であった。

795～797はⅪⅦ類に分類したものである。795・796は同一個体で、外面は条痕文の上に刻目を施した微隆起突帯が廻る。内面の器面調整も条痕文である。前期の甕式土器に比定される。

798～801はⅪⅧ類に分類したものである。798・799は同一個体で、798は口縁部である。800・801も同一個体である。4点とも外面には横位の短沈線が施される。前期曾畑式土器に比定される。

802～806はⅪⅨ類土器に分類したものである。5点とも同一個体であるが、接合することはできなかった。外面の文様は、沈線と細い棒状工具の先端部による刺突文によって構成されているが、全体の様子はつかめなかった。内面調整は、上部はミガキで、下部は条痕文である。後期に位置づけられるものと思われるが、型式名は不明である。

807はⅪⅩ類土器に分類したものである。外面は口縁部付近にのみ浅い凹線が施され、以下は無文である。後期の阿高式土器の系統に比定されるものと思われる。

4 縄文時代晩期の調査

縄文時代晩期の調査としては、遺構が土坑4基と柱穴列が検出され、遺物は土器と石器が出土した。

(1) 遺構 (第97図)

1号土坑 (第97図)

O-15区、Ⅲ層上面で検出された。平面プラン長径約1.6m×短径約1.2mの楕円形である。遺物は出土しなかった。

2号土坑 (第97図)

Q-17区、Ⅲ層上面で検出された。平面プランは直径約1.5mのほぼ円形である。土坑内からは縄文時代晩期に相当する土器片12点と石1点、炭化物が出土した。土器片は小片が多く、掲載できるものはなかった。炭化物（炭化材）については樹種同定及び放射性炭素年代測定を行っており、常緑広葉樹の

コナラ属アカカシ亜属で、年代は3140B P（修正年代3000B P）の結果を得ている。808は浅鉢形土器の底部である。ミガキ調整が施される。

3号土坑 (第97図)

O-21区、Ⅲ層上面で検出された。平面プランは歪な楕円形で、長径約2.3m×短径約1.7mを測る。土坑内からは土器片14点と剥片3点が出土したが、掲載に耐えうる資料は1点だけであった。

柱穴列 (第97図)

R-20・21区、Ⅳ層上面で検出された。柱穴の平面の形状はほぼ円形であるが、深さが両端のものだけやや浅い。また、右端の柱穴の軸はやや南西にずれる。

(2) 遺物 (第98図 809～820・第99図 821～832)

①土器 (第98図 809～820・第99図 821～826)

土器については、深鉢形土器と浅鉢形土器に大きく二つとその他のものに分類し、深鉢形土器と浅鉢形土器についてはさらにⅪⅩ類土器とⅪⅪ類土器に分類した。その他の土器はⅪⅫ類とした。出土量はそれほど多くない。

深鉢形土器 (第98図・第99図 809～821)

ⅪⅩ類土器に分類したものは809の1点であった。809は口縁部で、外面に4条の沈線が廻るものである。先端部は欠損している。

ⅪⅪ類土器に分類したものは、810～821である。810～818は口縁部である。810～814は、文様帯に沈線状の条痕文が斜位または横位に施される。815～818も文様帯に条痕文が施されるものと思われるがはっきりしない。819～821は胴部である。器面調整は内外面ともヘラナデであるが、821は部分的に条痕文が観察される。

浅鉢形土器 (第99図 822～824)

822～824はⅪⅪ類土器に分類したものである。822は口縁部から胴部で、口縁部は幅広につくられる。内外面はミガキ調整が施される。823・824は頸部から口縁部までが非常に短いものである。内外面はミガキ調整が施される。823は頸部と肩部が「く」の字状に屈曲する。

その他 (第99図 825・826)

825・826はⅪⅫ類土器に分類したものである。縄

文時代晩期に相当するものと思われるが、深鉢形または浅鉢形とは異なる形状のものである。

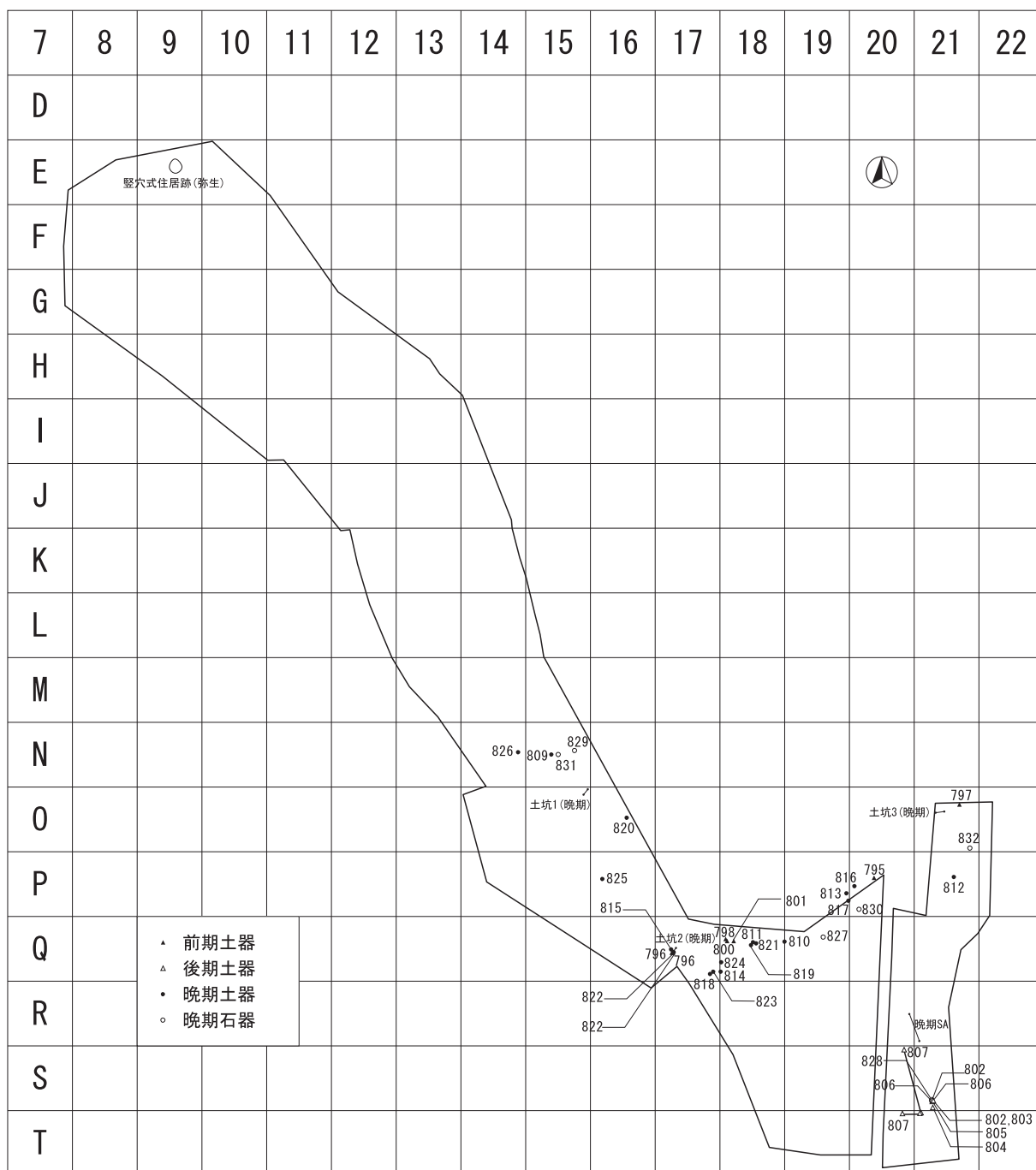
粗製のもので、器壁が厚い。

②石器（第99図 827～832）

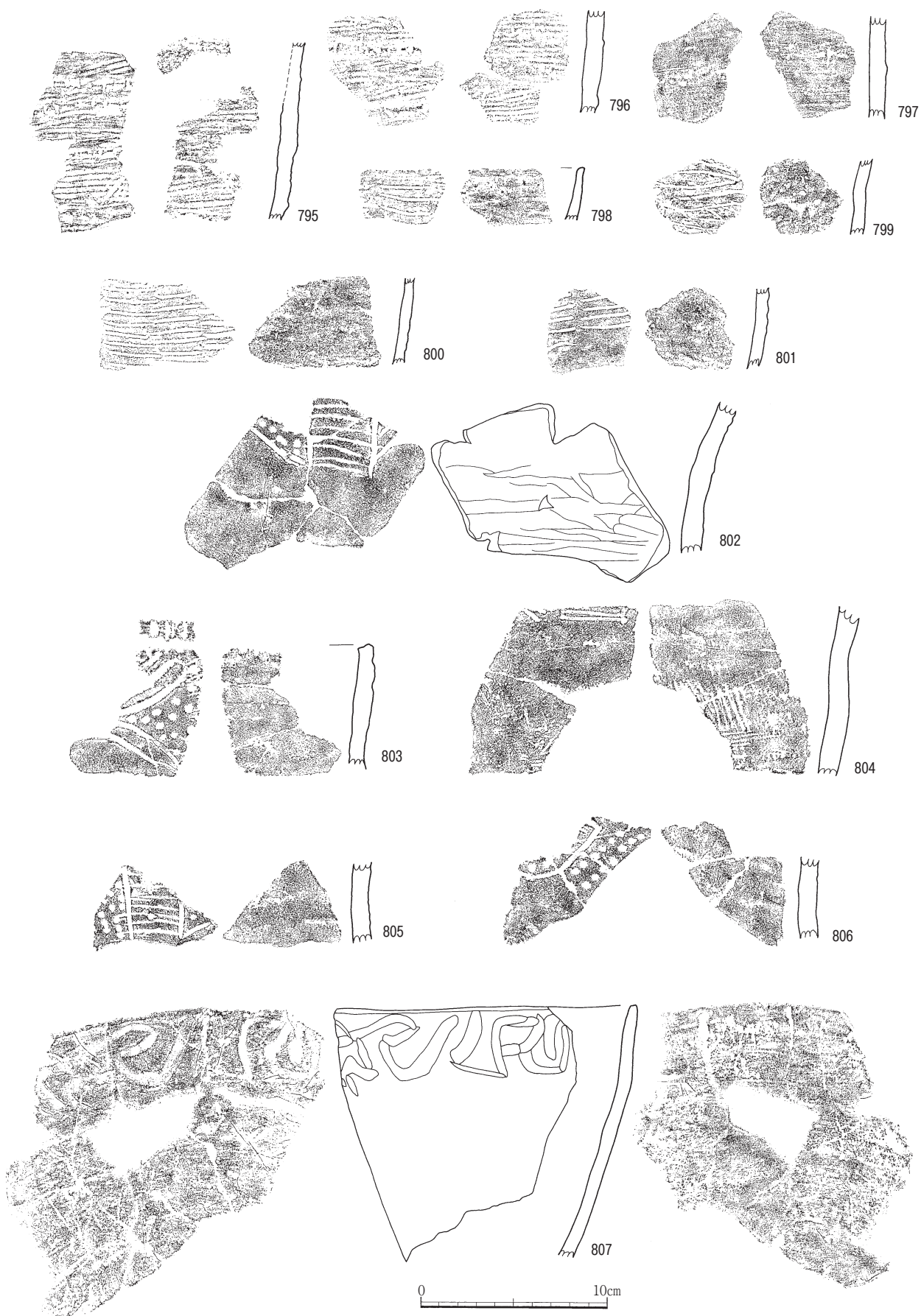
石器は打製石鏃2点、磨製石鏃3点、打製石斧1点が出土している。

827・828は打製石鏃である。827は基部が欠損しており先端部だけが残る。刃部は細かく丁寧な押圧剥離により鋸歯状をなす。上牛鼻産の黒曜石と思わ

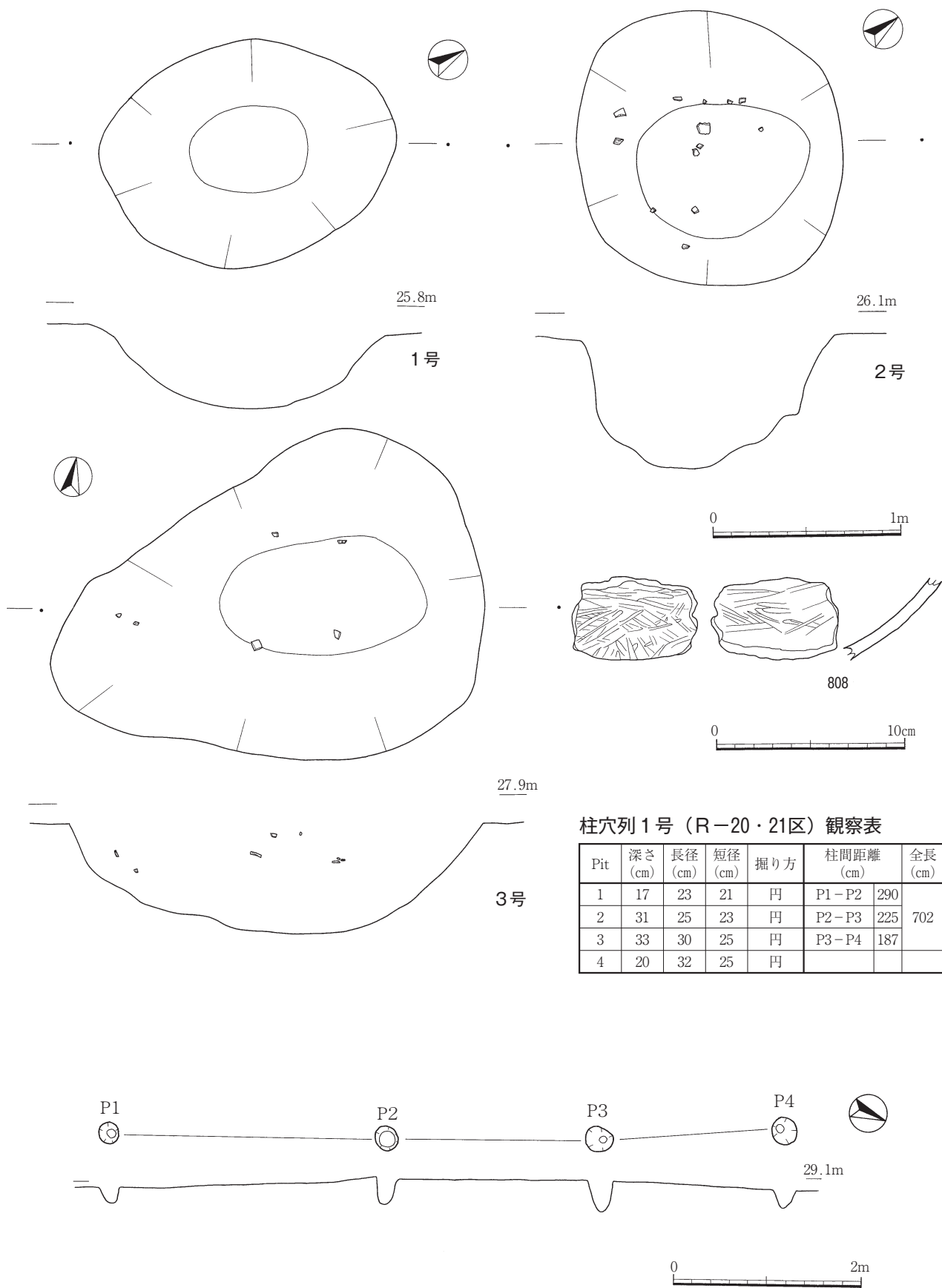
れる。828は、挟りの深いタイプのものと思われる。鉄石英製である。829～831は磨製石鏃である。全て頁岩製である。ほぼ正三角形の形状を呈し、両面とも丁寧に磨かれている。829は先端部のみである。832は打製石斧である。形状は幅広く扁平で非常に薄い。刃部は使用痕も残り、摩耗が激しい。土掘り具と思われる。頁岩製である。



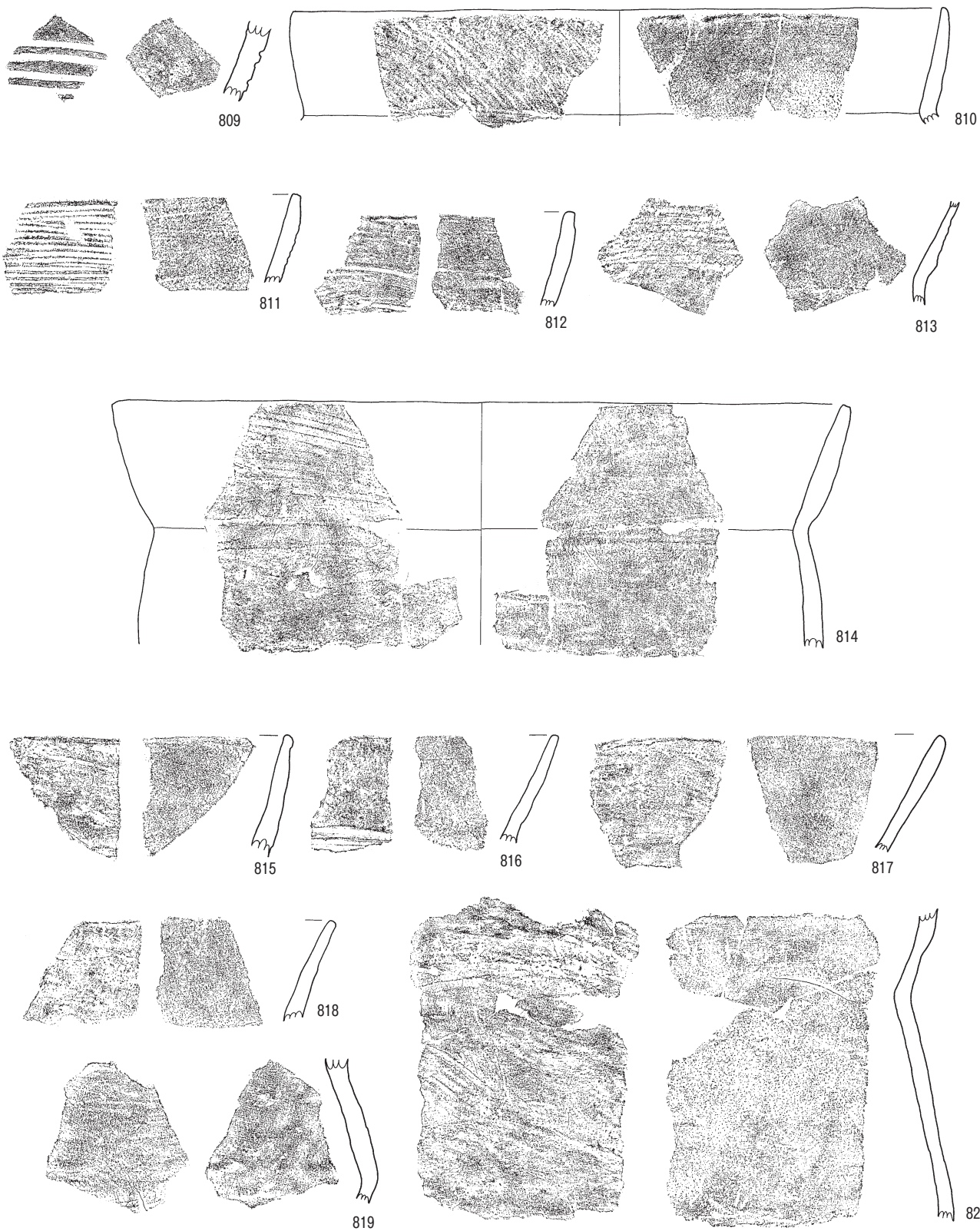
第95図 縄文時代前期～弥生時代遺構配置図及び遺物出土状況



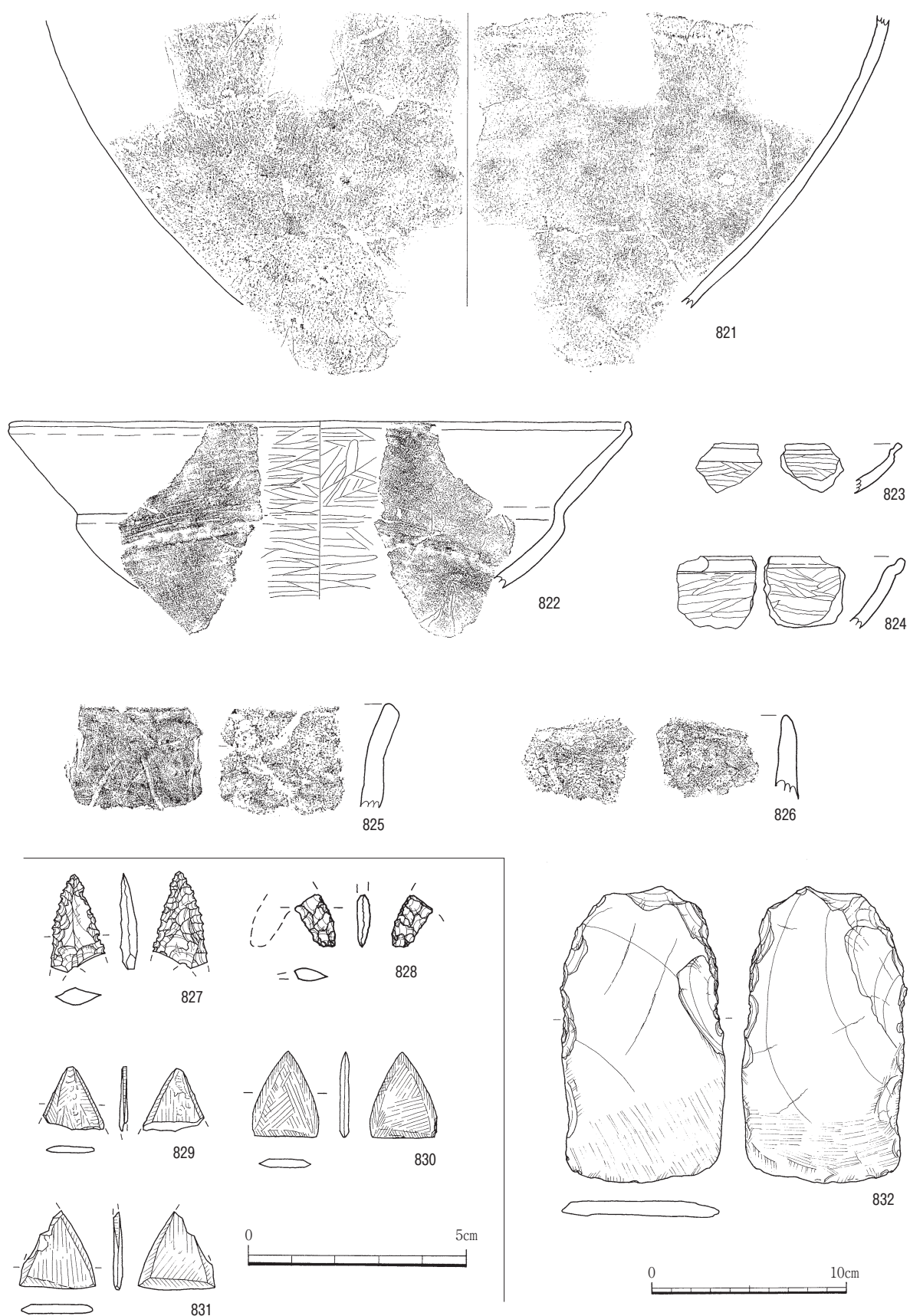
第96図 縄文時代前期・後期 土器（第Ⅶ類～第Ⅸ類）



第97図 土坑 1 ～ 3 ・ 土坑 3 内出土遺物及び柱穴列



第98図 縄文時代晩期出土遺物 1



第99図 縄文時代晩期出土遺物2

第6節 弥生時代の調査

弥生時代の包含層はⅡ層であるが、本遺跡ではほとんどの場所で削平を受けている。遺跡の北側E－9区で竪穴式住居跡が1軒検出されたが、遺構の部分だけの検出で、遺物包含層は削平されている。

竪穴式住居跡（第100図）

弥生時代の竪穴式住居跡はE－9区で1軒が検出された。

長軸はほぼ東西方向で4.20m、短軸は3mの長方形プランで深さは50～60cmである。柱穴は東壁の南北隅に2個並び西側壁は2段になり、上部は不整形である。遺物は北壁よりの床面に直上に集中して見られるが個体数は多くはない。中央付近に炭化物の集中した黒色土が認められる。

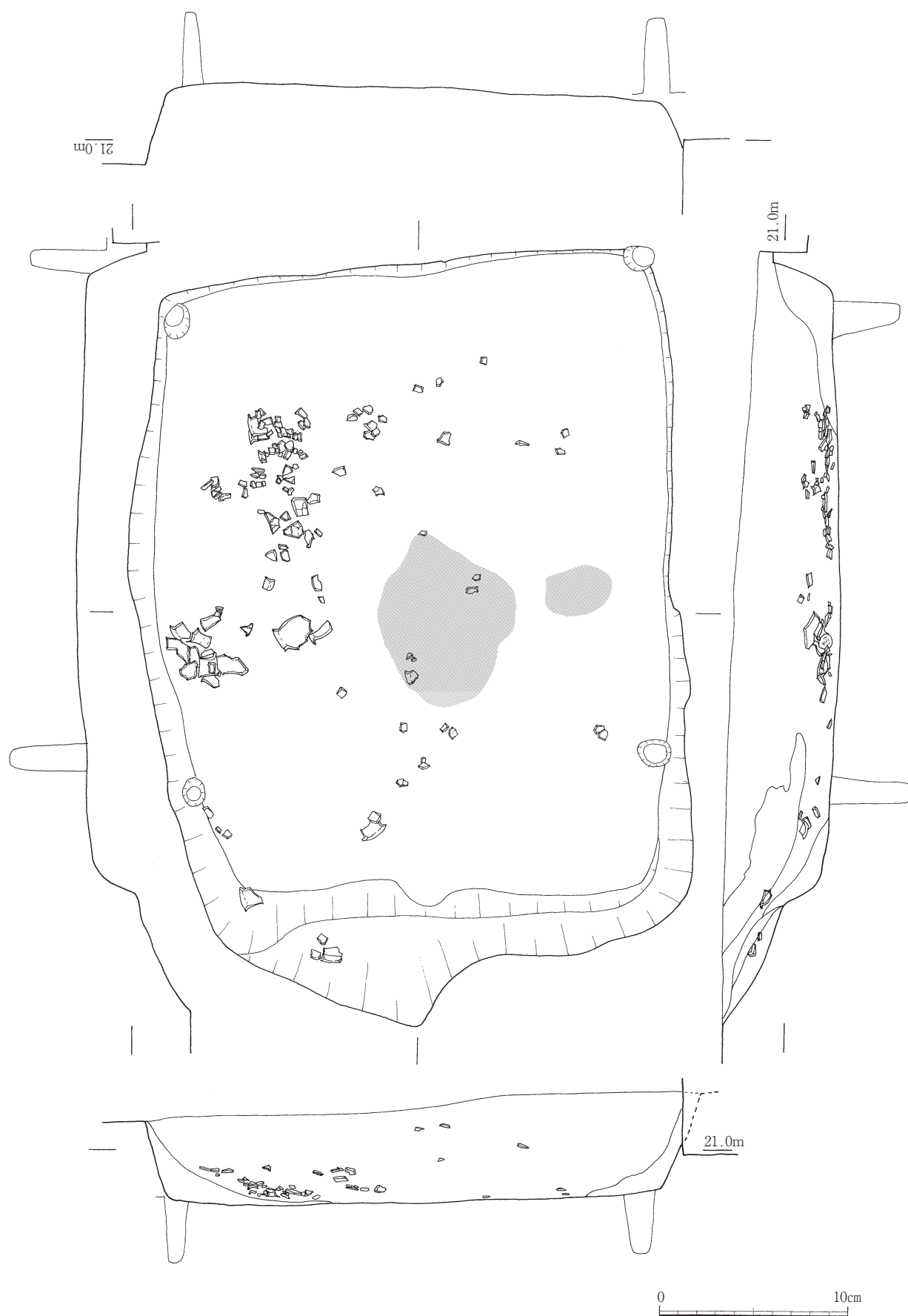
833～839は甕形土器である。833は口縁部径22cm、器高22cmを測る。底部は充実した脚台であるが、中央部がわずかに凹む。口縁部下部には1条の三角形貼付突帯を廻らす。器面調整は丁寧なハケ目調整であるが一部ヘラ磨きも見られる。834は口縁部径21.8cm、器高26cmを測る。底部は充実した脚台でわずかに凹む。胴部はやや膨らみ口縁部近くで内湾する。口縁部は逆L字条に外反する。外部はハケ目調整後ヘラ磨きが施され、内面はヘラ磨きである。835は口縁部径14cmを測る。胴部は膨らまず、口縁部はやや垂れ下がり気味に外反する。口縁部下位に1条の沈線を廻らす、すれ違うものである。836は口縁部径23cmを測り、口縁部は逆L字条に外反する。837と838は口縁部が垂れ下がり気味に外反する

縄文時代前期・後期・晩期土器観察表

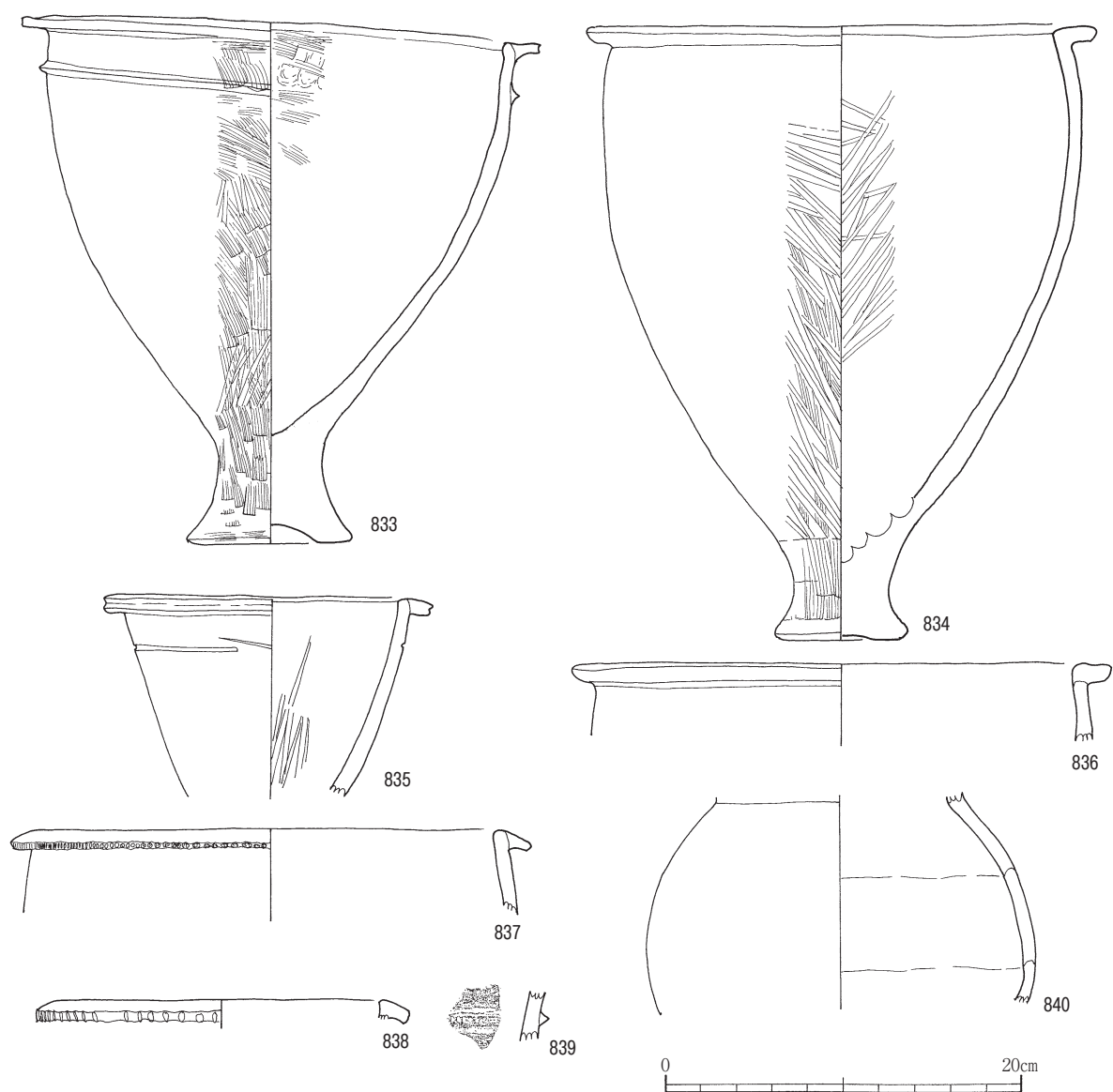
挿図番号	掲載番号	遺物番号	出土区	層位	部位	色調		胎土				焼成	調整		備考
						内	外	石英	長石	角閃石	その他		外面	内面	
第96図	795	5113	－	Ⅲ	胴部	にぶい橙	橙	○	○	○		良	条痕文・微隆突帯に刻目	条痕文	
	796	3615・3612	Q－17	Ⅲ	胴部	にぶい赤褐	橙	○		○		良	条痕文・微隆突帯に刻目	条痕文	
	797	9911	O－21	Ⅳ	胴部	にぶい褐	にぶい褐		○			良	微隆突帯に刺突文	ナデ	
	798	4031	Q－18	Ⅳ	口縁部	にぶい橙	にぶい褐	○	○			良	短沈線	ナデ	
	799	－	－	Ⅳ	胴部	にぶい橙	にぶい橙		○			良	短沈線	ナデ	
	800	4026	Q－18	Ⅳ	胴部	にぶい橙	橙		○			良	短沈線	ナデ	
	801	4043	Q－18	Ⅳ	胴部	にぶい橙	にぶい橙	○	○			良	短沈線	ナデ	
	802	11998・12001	S－21	Ⅲ	胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○			良	条痕文・刺突文	ナデ	
	803	12001	S－21	Ⅳ	胴部	にぶい赤褐	黒褐	○	○			良	条痕文・刺突文	ナデ	
	804	11426	S－21	Ⅳ	胴部	にぶい赤褐	橙	○	○			良	条痕文	貝殻条痕後ナデ	
	805	12052	S－21	Ⅳ	胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○			良	条痕文・刺突文	ナデ	
	806	12000・11997	S－21	Ⅲ	胴部	にぶい橙	にぶい黄褐	○	○			良	条痕文・刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	807	11976・11977 11078・12045	S－22	Ⅳ	口縁～胴部	にぶい黄褐	明赤褐	○	○			良	口縁部に凹線文	ナデ	
第97図	808	土坑2	Q－17	－	底部	黒	黒					良	ミガキ	ミガキ	
第98図	809	1946	N－15	Ⅳ	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	沈線	ナデ	
	810	4423	Q－19	Ⅲ	口縁部	にぶい橙	にぶい褐	○	○			良	条痕後ナデ	ナデ	
	811	4055	Q－18	Ⅲ	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○		○		良	条痕文	条痕後ナデ	
	812	9660	P－21	Ⅲ	口縁部	にぶい黄	にぶい黄橙	○	○			良	条痕後ナデ	ナデ	
	813	5028	P－19	Ⅳ	胴部	にぶい黄橙	褐灰		○			良	条痕後ナデ	ナデ	
	814	3862	Q－18	Ⅲ	口縁～胴部	橙	にぶい赤褐	○	○			良	条痕後ナデ	ケズリ後ナデ	
	815	3630	Q－17	Ⅲ	口縁部	にぶい黄橙	橙		○			良	ヘラナデ	ナデ	
	816	6153	P－20	Ⅲ	口縁部	にぶい黄橙	にぶい橙	○	○			良	ヘラナデ	ナデ	
	817	5030	P－19	Ⅲ	口縁部	にぶい黄橙	にぶい橙	○				良	ヘラナデ	ナデ	
	818	3780	Q－17	Ⅲ	口縁部	にぶい橙	にぶい黄褐		○			良	ヘラナデ	ナデ	
	819	4060	Q－18	Ⅲ	胴部	にぶい橙	にぶい黄褐		○	○		良	ヘラナデ	指ナデ	
	820	3254	O－16	Ⅳ	胴部	にぶい赤褐	にぶい黄褐	○	○			良	ヘラナデ	ナデ	
第99図	821	4052	Q－18	Ⅲ	胴部	灰黄褐	褐	○	○			良	ナデ	ナデ	
	822	3618・3619	Q－17	Ⅲ	口縁部	にぶい褐	にぶい褐		○			良	ミガキ	ミガキ	
	823	3771	Q－17	Ⅲ	口縁部	浅黄橙	浅黄橙	○				良	ミガキ	ミガキ	
	824	3863	Q－18	Ⅲ	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○			良	ミガキ	ミガキ	
	825	6277	P－16	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	褐		○	○		良	ナデ	ナデ	
	826	568	N－14	Ⅳ	口縁部	暗灰黄	にぶい黄橙	○	○			良	ナデ	ナデ	

縄文時代晩期石器観察表

挿図番号	番号	注記番号	器種	出土区	層位	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	備考分類
第99図	827	3876	打製石鏃	Q－19	Ⅲ	黒曜石	2.2	1.3	0.4	0.8	－
	828	11995	打製石鏃	S－21	Ⅲ	鉄石英	1.2	0.9	0.3	0.3	－
	829	2034	磨製石鏃	N－15	Ⅳ	頁岩	1.5	1.4	0.2	0.3	－
	830	5207	磨製石鏃	P－20	Ⅳ	頁岩	2.0	1.5	0.2	0.8	－
	831	1944	磨製石鏃	N－15	Ⅳ	頁岩	1.8	1.8	0.2	0.7	－
	832	9901	打製石斧	O－21	Ⅲ	頁岩	15	8.2	0.8	175	－



第100図 弥生時代中期 竪穴式住居跡



第101図 竪穴式住居内出土遺物

もので、端部に刻目を施すものである。口縁部径は、837は22cm、838は16cmである。837の内面には靱痕が観察される。839は刻目突帯を有する胴部である。

840は壺形土器の胴部である。

土器は弥生時代中期前半の入来式土器と思われ、住居跡も同時期と考えられる。

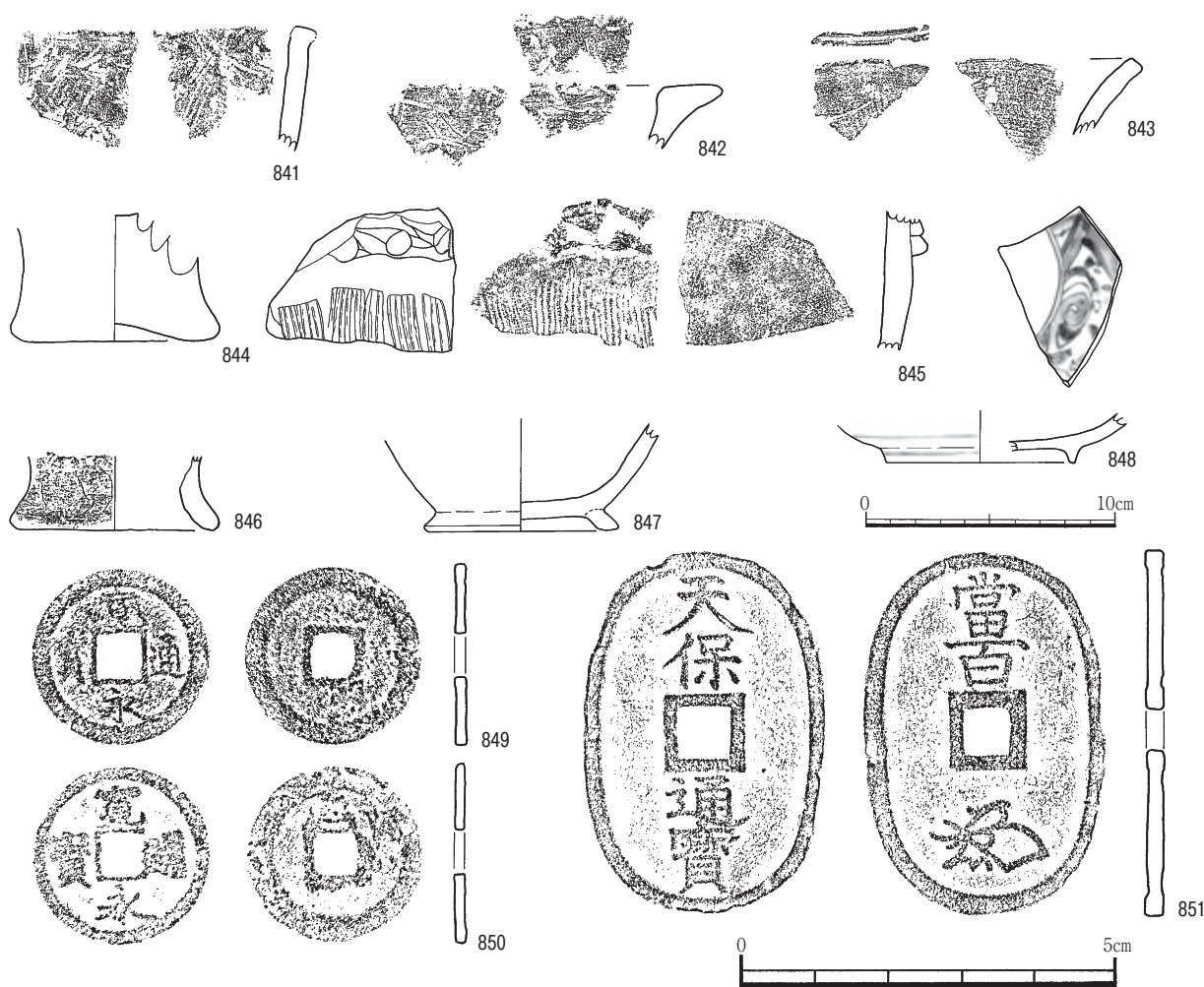
第7節 その他の時代の調査

本遺跡は全体的に、弥生時代以降に相当するⅡ層・Ⅲ層が削平されているが、表層から弥生時代以降の時代の遺物がわずかではあるが出土していることから、これらの出土遺物についても報告しておく

たい。

841～844は弥生時代の土器である。841は甕の口縁部である。前期のものと思われる。842は甕、843は壺の口縁部である。844は充実高台の底部である。842～844は中期に相当するものと思われる。

845・846は古墳時代の成川式土器である。845は甕の胴部である。外面は縄目突帯が貼り付けられハケ目調整が施される。846は底部である。847は土器の碗である。底部はヘラ切りで、高台は貼り付けである。848は景德鎮窯系の青花皿である。849・850は寛永通宝、851は天保通宝である。



第102図 その他の出土遺物

弥生時代土器観察表

挿図 番号	掲載 番号	遺物番号	出土区	層位	部位	色調		胎土				焼成	調整		備考
						内	外	石英	長石	角閃石	その他		外面	内面	
第 101 図	833	-	E-9	住居内	口縁～底部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○				良	ハケ目・ヘラミガキ	ナデ	
	834	-	E-9	住居内	口縁～底部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○				良	ハケ目後ヘラミガキ	ヘラミガキ	
	835	-	E-9	住居内	口縁～胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○				良	ナデ	ナデ	
	836	-	E-9	住居内	口縁部	黒褐	黒褐	○	○			良	ナデ	ナデ	
	837	-	E-9	住居内	口縁部	橙	橙		○	○		良	ナデ・口縁端部刻目	ヘラミガキ	内面に刳痕
	838	-	E-9	住居内	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄褐		○	○		良	ナデ・口縁端部刻目	ナデ	
	839	-	E-9	住居内	胴部	黒褐	にぶい橙	○	○	○		良	ナデ・突帯	ナデ	外面煤付着
	840	-	E-9	住居内	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	ナデ?	ナデ	

その他の遺物観察表

観察 表	掲載 番号	遺物番号	出土区	層位	部位	色調		胎土				焼成	調整		備考
						内	外	石英	長石	角閃石	その他		外面	内面	
第 102 図	841	351	K-13	IV	口縁部	にぶい橙	にぶい黄褐	○	○			良	ナデ	ナデ	
	842	-	-	表	口縁部	にぶい橙	にぶい褐		○	○		良	ナデ	ナデ	
	843	432	J-13	IV	口縁部	にぶい褐	灰黄褐		○	○		良	ナデ	ナデ	
	844	-	-	表	底部	にぶい黄橙	にぶい橙		○	○		良	ナデ	ナデ	
	845	-	-	表	胴部	橙	橙	○	○			良	ハケ目	ナデ	
	846	-	-	表	底部	にぶい橙	にぶい橙		○			良	ナデ	ナデ	
	847	-	-	表	胴部～底部	浅黄橙	にぶい黄橙			○		良	ナデ	ナデ	
	848	-	-	表	胴部～底部	-	-					良	-	-	
	849	-	-	表	-	-	-					-	-	-	
	850	-	-	表	-	-	-					-	-	-	
	851	-	-	表	-	-	-					-	-	-	

第8節 小結

桜谷遺跡では旧石器時代、縄文時代草創期・早期・前期・後期・晩期、弥生時代の遺構遺物が検出された。

旧石器時代は、ブロックが2か所検出された。ブロックはナイフ形石器文化期のものと細石器文化期のものではナイフ、台形石器、三稜尖頭器、スクレイパー等が出土した。細石器文化期のブロックからは細石核、細石刃、スクレイパー等が出土した。しかし、本遺跡において、これらの二つの文化期を分層することは困難で、また一部で2時期の遺物が混在して出土している状況も見られたため、純粋なブロックでない可能性も考えられる。

縄文時代早期では、集石が中央部と東側の調査区からやや集中した形で検出された。

土器はⅠ～ⅩⅦ類土器の16類に分類した。それぞれの比定する土器型式は以下のとおりである。

- Ⅰ類土器 岩本式土器（早期前半）
- Ⅱ類土器 前平式土器（早期前半）
- Ⅲ類土器 加栗山式土器（早期前半）
- Ⅳ類土器 吉田式土器（早期前半）
- Ⅴ類土器 石坂式土器（早期前半）
- Ⅵ類土器 下剥峰式土器（早期前半）
- Ⅶ類土器 辻タイプ（早期前半）
- Ⅷ類土器 桑ノ丸式土器（早期前半）
- Ⅸ類土器 中原式土器（早期前半）
- Ⅹ類土器 押型文土器（早期前半）
- Ⅺ類土器 手向山式土器（早期前半）
- Ⅻ類土器 縄目の文様が施された土器
- Ⅼ類土器 塞ノ神式土器（早期後半）
- Ⅽ類土器 右京西タイプ（早期後半）
- Ⅾ類土器 その他
- Ⅿ類土器 無文の土器

最も出土量の多いのはⅤ類石坂式土器である。口縁部が外反するものと直行するものの2タイプがある。桜谷遺跡では外反するタイプが主である。前迫亮一氏の分類における古段階に相当する。

Ⅰ～Ⅲ類土器の補修孔はヘラ状の工具によってあけられた楕円形のものであるが、Ⅵ類土器以降の補修孔はドリル状の工具による円形のものである。Ⅴ類土器の補修孔は楕円形、円形の両方のタイプがある。

岩本式土器、前平式土器、加栗山式土器、吉田式土器（Ⅰ～Ⅳ類土器）また、石坂式土器、下剥峰式土器（Ⅴ、Ⅵ類土器）はそれぞれ集中域が重なる。押型文（Ⅹ類土器）、塞ノ神式土器（Ⅼ類土器）にはそれぞれ出土に集中域が見られる。

石器については、石鏃を中心とした石器製作跡が検出されており、それに関連する石核、剥片、碎片、石鏃未製品、石鏃等が出土している。石材は黒曜石（日東・針尾・上牛鼻・桑ノ木津留産等）、頁岩、チャート、玉随が中心である。石鏃の形態は、二等辺三角形で挟りを有するものが多い。また、「大久保型」と呼ばれる形態のものも出土していることから、本遺跡の石鏃（石鏃製作跡）は縄文時代早期中葉以降に相当するものと思われる。しかし、石鏃及び剥片の出土状況（第20図）と早期中葉以降の土器の出土状況は一致しない結果となり、その根拠については不明である。

また、石鏃製作跡と同じ集中域に、頁岩の大型剥片の集中域（第19図）も見られ未製品も出土していることから、石斧等も製作していたと考えられる。

その他に特記すべき出土遺物として、環状石斧と有溝砥石が上げられる。環状石斧は、石斧としたが、その詳細な用途は不明である。県内で縄文時代早期の包含層から出土した環状石斧は、上野原遺跡から7点、桐木・耳取遺跡から4点出土している。有溝砥石は2点出土した。用途としては矢柄研磨器と考えられるが詳細は不明である。九州では出土例が少なく、また縄文時代草創期に出土する例が見られるが、本遺跡では早期の包含層内より出土した。

縄文時代前期・後期は、Ⅻ～ⅩⅩ類の土器が出土した。Ⅻ類は前期の曾畑式土器に比定される。Ⅼ類土器は、前期の轟式土器に比定される。ⅩⅩ類土器は明確な型式名は当てられないが、後期の阿高系土器の範疇になるものと思われる。

縄文時代晩期については、土坑3基と柱穴列1基が検出された。数量は多くないが土器や石器も出土しており、ⅩⅩⅠ類土器は上加世田式土器、ⅩⅩⅡ類土器は入佐式土器に比定される。

弥生時代以降については、遺跡の大部分の範囲で削平を受けており、一部残存するのみであったが、弥生時代中期前半の入来式土器が伴う竪穴式住居が1基検出されている。

第Ⅶ章 まとめ

農業開発総合センター遺跡群について

中村耕二

農業開発総合センターは、日置市吹上町と南九州市金峰町にまたがる施設で、その建設に伴う発掘調査は平成8年から平成15年まで費やし、遺跡の数も23遺跡に及ぶ。

調査の結果、旧石器時代から中世・近世までの遺構・遺物が検出され、この地域が古くから生活に適していたことを窺わせるものである。また、それぞれの時代で貴重な資料も発見されている。

旧石器時代は、窪見ノ上遺跡・小中原遺跡・建石ヶ原遺跡・宗円堀遺跡・中尾遺跡・神原遺跡・荒田遺跡・桜谷遺跡で発見されている。神原遺跡では、礫群を伴う細石器文化の時期のブロック5基が確認されている。荒田遺跡も細石器文化の時期を中心に多くの遺物が出土し、ブロック2基も見られる。建石ヶ原遺跡・桜谷遺跡では遺物の量は少ないものの、ナイフ形石器・剥片尖頭器などが出土している。また、小中原遺跡・中尾遺跡では落とし穴も検出される。

縄文時代草創期は、小中原遺跡、諏訪牟田遺跡・宗円堀遺跡・中尾遺跡で発見されている。諏訪牟田遺跡では隆帯文土器に伴って集石遺構も検出されている。中尾遺跡では集石遺構10基、連穴土坑13基が検出されている。

縄文時代早期は、住居跡などは検出されていないが、当時は生活環境が良好だったことを裏付けるように調査を実施したほとんどの遺跡から遺物が出土している。特に早期中葉の石坂式土器は各所から出土し量も多く注目される。窪見ノ上遺跡では前期前葉の岩本式土器がまとまって出土している。諏訪牟田遺跡では前平式土器が多く出土している中でレモン形の土器が見られる。馬廻遺跡は狭小な遺跡であるにもかかわらず、石坂式土器・桑ノ丸式土器の完形土器が出土している。小中原遺跡では、前平式土器の完形土器とその近くに石槍3本が重なり合って出土する集積遺構も検出されている。その他、集石遺構7基が検出された尾ヶ原遺跡、押型文土器が多く出土した桜谷遺跡・荒田遺跡などがある。

縄文時代前期・中期・後期は遺跡の数も少なく、遺物の出土量も少ない。窪見ノ上遺跡で前期の曾畑式土器、中期の春日式土器、尾ヶ原遺跡で前期の曾畑式土器・深浦式土器、中期の春日式土器がわずかながら出土している。後期は小中原遺跡・建石ヶ原遺跡等で数点出土しているのみである。

縄文時代晩期になると早期と同様ほとんどの遺跡で出土し、遺物の量も膨大である。特筆されるのは建石ヶ原遺跡の道跡である。幅2mの浅い窪みで硬化面が確認される。硬化面の上部には開聞岳起源の灰コラ（縄文時代晩期相当の時代）が堆積している。また、埋設土器も諏訪前遺跡・諏訪牟田遺跡・諏訪脇遺跡・尾ヶ原遺跡・南原内堀遺跡で検出されている。晩期の遺跡でよく見られる緑色の石で作られた玉類も諏訪前遺跡・諏訪牟田遺跡・小中原遺跡等で出土し、諏訪前遺跡では攻玉砥石も出土している。住居跡は少なく、諏訪牟田遺跡で径3mの堅穴住居跡が検出されているのみである。ただ、柱穴4個～6個が一行に並んだ柱穴列と呼んだ遺構が数多く検出される。これがなんらかの建物ではないかと考えられるものである。

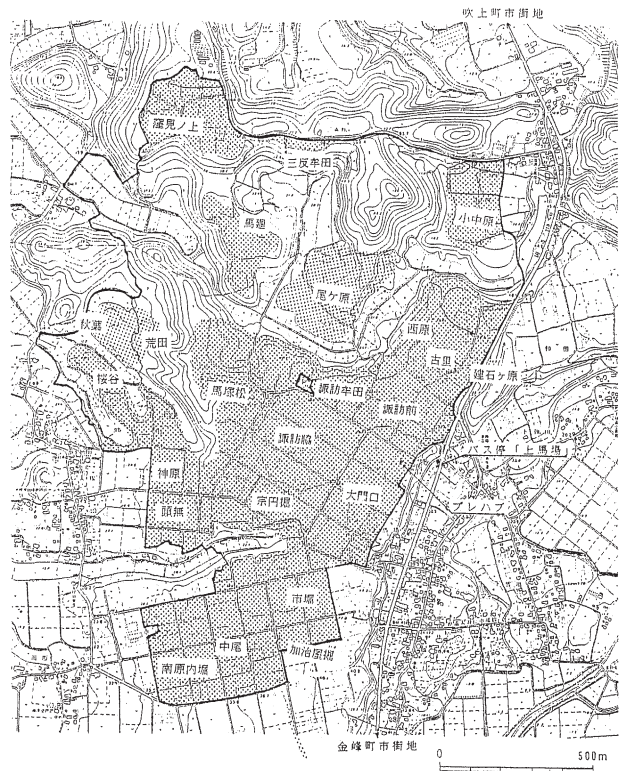
弥生時代の遺跡も少ない。前期・中期・終末の遺跡が確認されている。前期は馬塚松遺跡で高橋式が出土し、2間×2間の高床倉庫と思われる総柱建物が検出される。桜谷遺跡では、中期前半の入来式土器を伴う堅穴住居跡が単基で検出される。諏訪前遺跡・諏訪牟田遺跡では計3軒の堅穴住居跡が検出され、壺形土器に「龍」を描いた線刻土器が出土している。

古墳時代の遺跡も少ないが、小中原遺跡・尾ヶ原遺跡で注目される集落が検出されている。特に須恵器と成川式土器が相伴して出土しており、南九州の古墳時代土器の編年に寄与するものと思われる。

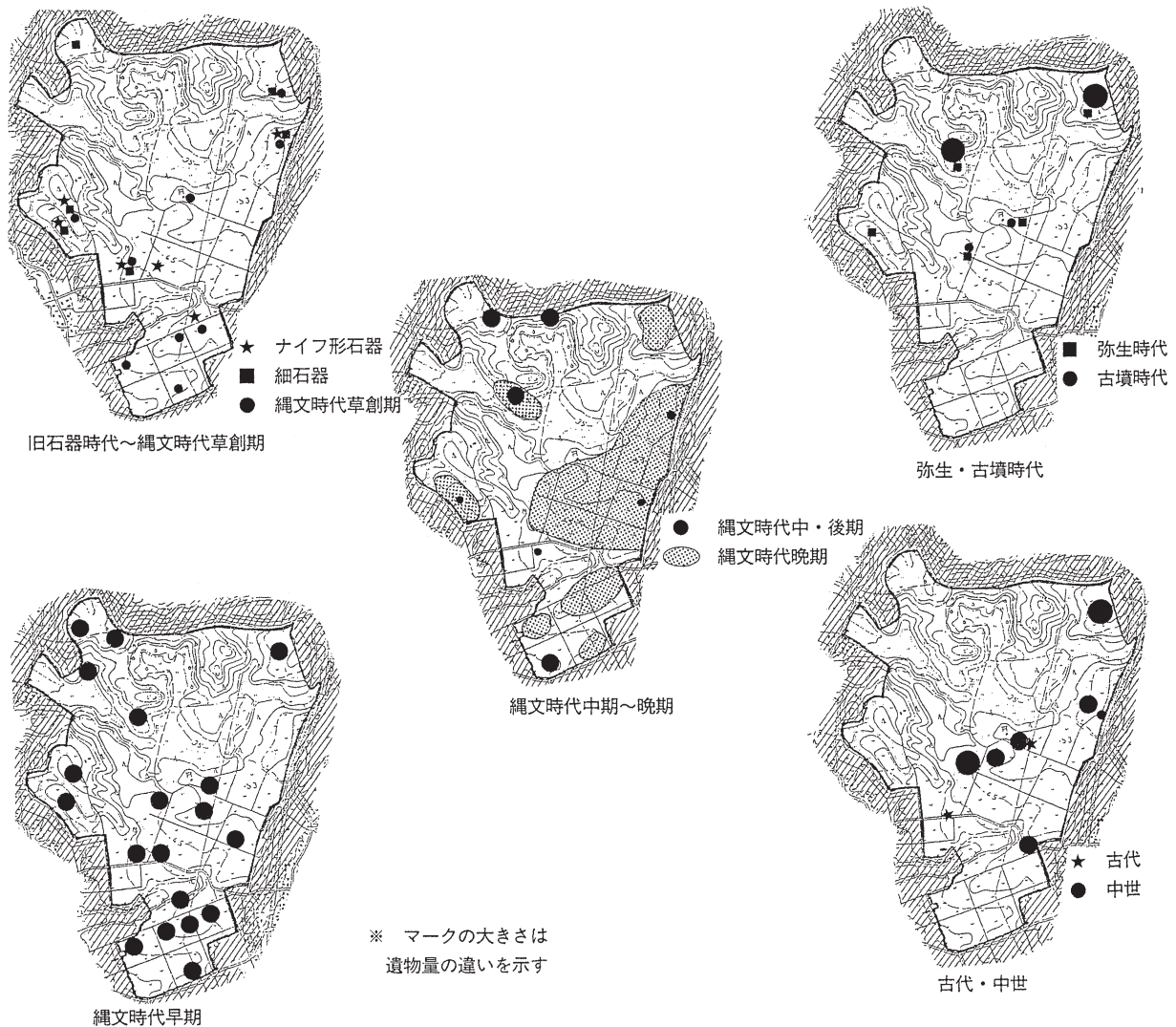
古代の遺跡も少ない。掘立柱建物跡群が検出されている諏訪牟田遺跡とV字状の大溝が検出された神原遺跡・頭無遺跡があげられる。溝からは9～10世紀頃の須恵器の甕や壺、土師器が出土している。

中世は、馬塚松遺跡をはじめ諏訪牟田遺跡・諏訪脇遺跡・宗円堀遺跡・市堀遺跡・古里遺跡・小中原遺跡において掘立柱建物跡群が検出され、広い範囲

で集落が形成されていたことが判明している。その中で馬塚松遺跡・諏訪牟田遺跡は青磁・白磁等の磁器が多く出土し、中心的な集落であったものと思われる。また、建石ヶ原遺跡では長方形周溝墓も検出されている。



第1図 各遺跡の位置



第2図 農業センター遺跡群の時代別遺跡の推移

農業開発センター遺跡群各遺跡概要一覧表

番号	遺跡名	時代	遺 構	主 な 遺 物
1	窪 見 ノ 上	縄 文 早 期	集石遺構	岩本式土器・石斧
2	馬 廻	縄 文 早 期		前平式・石坂式土器
3	三 反 牟 田	縄 文 後 期		石鏃
4	吹 上 小 中 原	旧 石 器 縄 文 早 期 古 墳 中 世	落とし穴 石槍集積遺構 竪穴住居跡群 掘立柱建物跡群	細石器 前平式土器 須恵器Ⅰ式
5	建 石 ケ 原	旧 石 器 縄 文 晩 期 中 世	道跡 方形周墳墓・溝	三稜尖頭器・細石器 入佐式土器 青磁
6	古 里	中 世	掘立柱建物跡群・溝	青磁・白磁
7	西 原	縄 文 早 期		
8	諏 訪 牟 田	縄 文 草 創 期 縄 文 早 期 縄 文 晩 期 弥 生 終 末 古 代 中 世	集石遺構 竪穴住居跡・埋設土器 竪穴住居跡 掘立柱建物跡・溝 掘立柱建物跡	隆帯文土器 前平式・石坂式土器 入佐式土器 土師器 青磁
9	諏 訪 前	縄 文 晩 期 弥 生 終 末	埋設土器・土坑 竪穴住居跡	入佐式土器・玉類 ドラゴンの絵画土器
10	馬 塚 松	縄 文 早 期 弥 生 前 期 中 世	高床倉庫 掘立柱建物跡群	石坂式土器 石包丁 青磁・白磁
11	尾 ケ 原	縄 文 早 期 縄 文 前・中期 縄 文 晩 期 弥 生 中 期 古 墳 中 世	集石遺構 埋設土器 小児用合口壺棺 竪穴住居跡	前平式・石坂式・桑ノ丸式 曾畑式・深浦式・春日式土器 打製石斧・石錘 須玖式・黒髪式土器 成川式土器・須恵器Ⅱ式
12	諏 訪 脇	縄 文 晩 期 中 世	埋設土器 掘立柱建物跡	玦状耳飾り
13	宗 円 堀	旧 石 器 縄 文 晩 期		ナイフ形石器・細石器 管玉
14	大 門 口	縄 文 晩 期	柱穴列	玦状耳飾り
15	市 堀	中 世	掘立柱建物跡群	
16	頭 無 迫 田	縄 文 早 期	集石遺構	石坂式土器
17	頭 無	縄 文 早 期		平椀式土器
18	神 原	旧 石 器 古 代	礫群 溝	細石器 須恵器
19	桜 谷	旧 石 器 縄 文 早 期 弥 生 中 期	石鏃製作跡 竪穴住居跡	ナイフ形石器 石坂式・押型文土器 入来式土器・靱痕のある土器
20	荒 田	旧 石 器		ナイフ形石器・細石器
21	秋 葉	縄 文 早 期		石坂式・押型文土器
22	中 尾	縄 文 草 創 期 縄 文 早 期	連穴土坑・集石遺構 集石遺構	隆帯文土器
23	南 原 内 堀	縄 文 中 期 縄 文 晩 期	埋設土器	阿高式・西平式・指宿式土器 管玉
24	加 治 屋 堀	縄 文 晩 期		

成川様式土器の様相

中村耕二

農業開発総合センター遺跡群では、日置市吹上小中原遺跡・尾ヶ原遺跡・諏訪前遺跡・諏訪牟田遺跡において成川様式の時代の竪穴式住居跡や土器溜まりが検出され一括資料が出土している。特に吹上小中原遺跡・尾ヶ原遺跡においては成川様式土器と須恵器が同一住居内から出土しており、編年の指標となるものと思われる。これまで中村直子等による分類・編年が確立しているところではあるが、もう少し細分できないか検討してみたい。

1 諏訪前遺跡1号住居跡

4m×3.8mの方形プランで、住居内からは多量の土器片が出土している。また、「ドラゴン」を描いたと思われる絵画土器（壺形土器）も見られる。甕形土器は底部は中空の浅い脚台で、胴部はやや張るものである。口縁部は「くの字状」に外反し、内面の稜は明瞭なものである。器面は全面ハケ目調整と下半部にヘラケズリが施されるものがある。壺形土器は、底部は平底で胴部はあまり膨らまないもので、胴部に刻目突帯を廻らすものと、突帯を有しないものがある。弥生後期の松木菌式に続くもので弥生時代終末に位置付けられるものと思われる。

2 諏訪前遺跡2号住居跡

5.2×5.7mの略方形プランで、5箇所の間仕切り状の突出部がある。遺物は少ないが、甕形土器・壺形土器・鉢形土器等が出土している。完形の甕形土器からみると1号住居跡と類似しているが、脚台の高さ及び口縁部内面の稜線がややなだらかな点を考えると1号より後出するものと思われる。

3 吹上小中原遺跡土器溜まり

半径約2mの範囲に甕形土器・壺形土器・鉢形土器等が固まって出土しており、土器溜りとして処理した。甕形土器は中空の脚台で口縁部は「くの字状」に外反するが概してなだらかで、内面の稜線は明瞭ではない。器面はヘラケズリのみ、ヘラケズリとハケ目のみと様々である。また、頸部のくびれ部から口縁部へかけてハケ目によるカキ上げ技法がみられ

るのが特徴である。壺形土器では全体の形状を見られるものがないが、底部は丸底で胴部が膨らむタイプと思われる。諏訪前遺跡の1号・2号住居跡出土の土器より後出するものと思われる。

4 吹上小中原遺跡4号住居跡

一部が削平されているが、推定で4.8m×3.6mの長方形プランで住居内から多量の土器が出土した。その中には須恵器（蓋・高坏・大形甕）も含まれており共判する成川式土器の年代を考える上で好資料となる。須恵器はTK208平行のⅠ期の段階と思われる。共判する成川式土器をみると、甕形土器は中空の脚台から胴部はやや張り、上位にすれ違い突帯を有する。口縁部は突帯部から内湾し端部近くで短く外反する独特の器形を呈するものと直行気味に外反するものが見られる。壺形土器は、丸底の底部から胴部は膨らむもので最大径が胴部上位の肩部に近い部分にある。すれ違いの突帯を廻らすものと突帯を有しないものがある。高坏の脚部はゆるやかで、裾部で大きく広がるもので、杯部の下位は水平に近く接合部から上方へ立ち上がるものである。接合部には明瞭な段が認められる。これからは中村直子編年の辻堂原式に比定できるものと思われる。

5 尾ヶ原遺跡2号住居跡

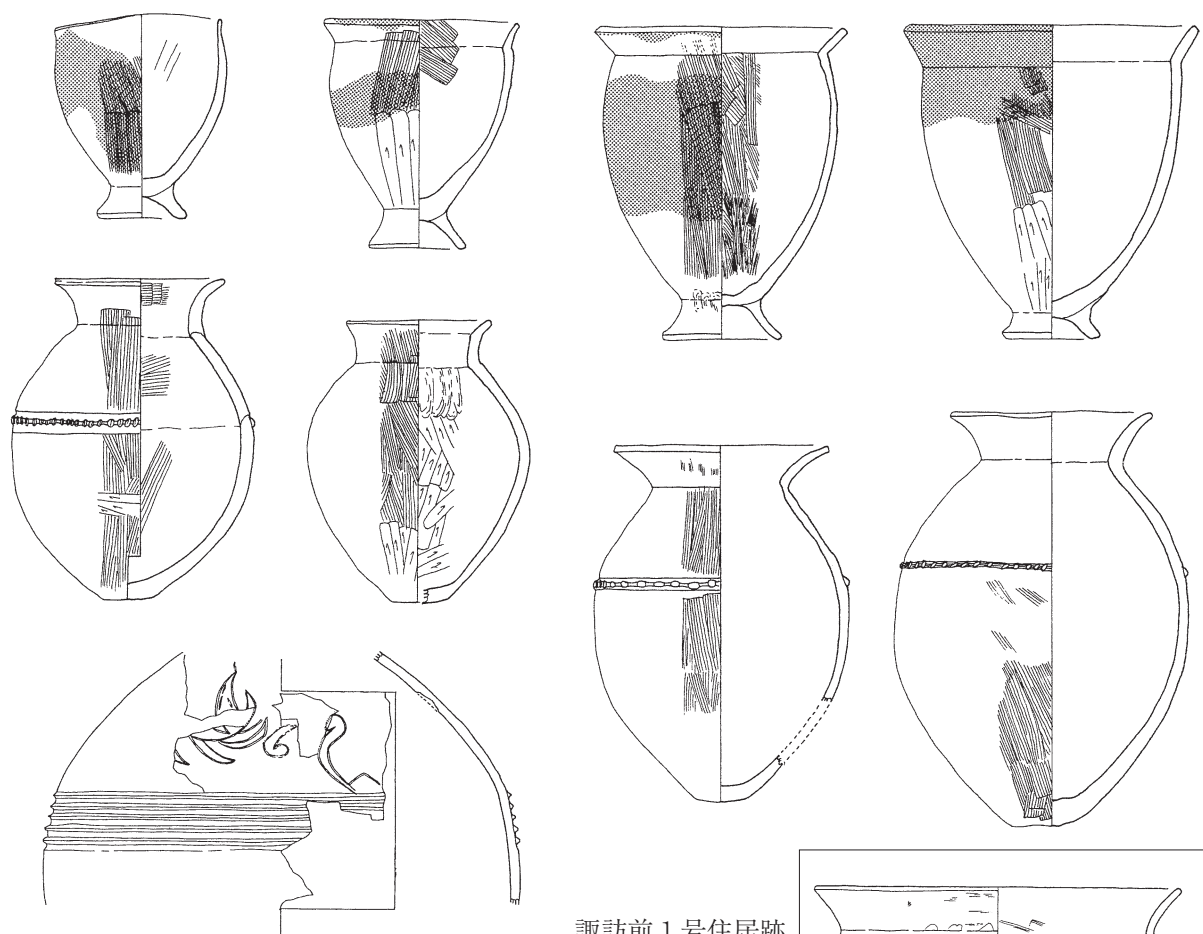
3.23×3mのほぼ方形プランで住居内からは須恵器を含む土器が出土している。甕形土器は胴部上位に刻目突帯を廻らし、口縁部が内湾するものである。壺形土器。高坏では完形になるものが無く情報不足である。須恵器は須恵器Ⅱ式と思われる杯である。笹貫式土器に比例出来よう。

6 尾ヶ原遺跡3号住居跡

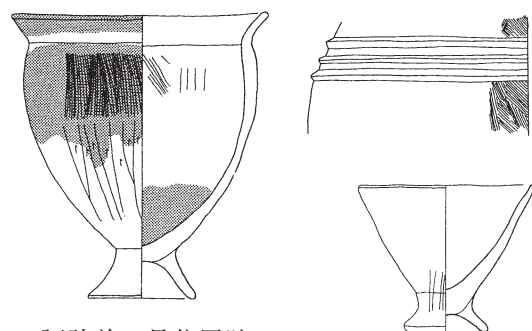
4.4×4.5mの方形プランで住居内からは須恵器を含む土器が出土している。甕形土器などの成川式は3号住居跡とほぼ同様の笹貫式と思われるが、須恵器は2号住居跡のものよりやや古いと思われる。

7 尾ヶ原遺跡4号住居跡

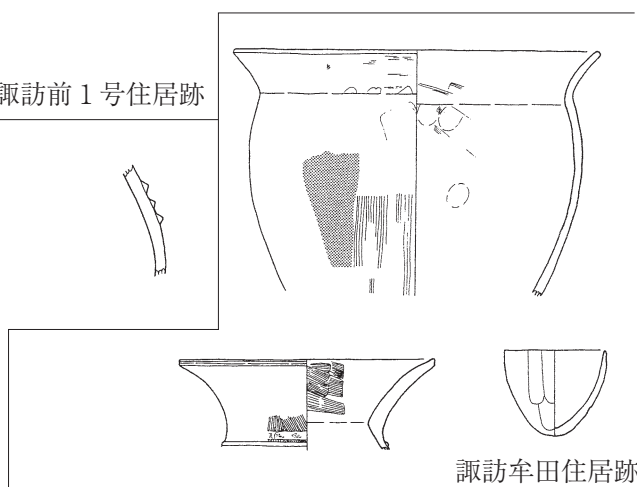
4.8×4.4mの方形プランで住居内から須恵器を含



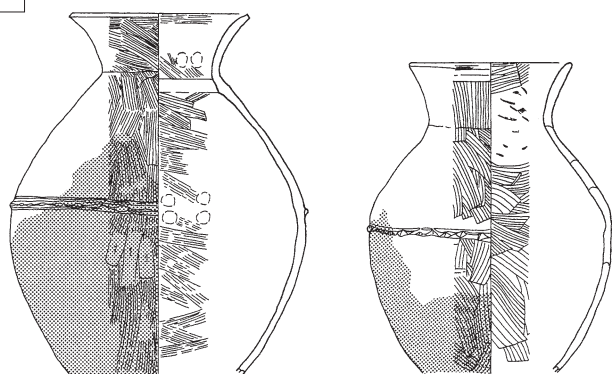
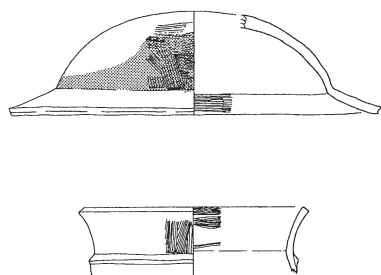
諷訪前 1号住居跡



諷訪前 2号住居跡



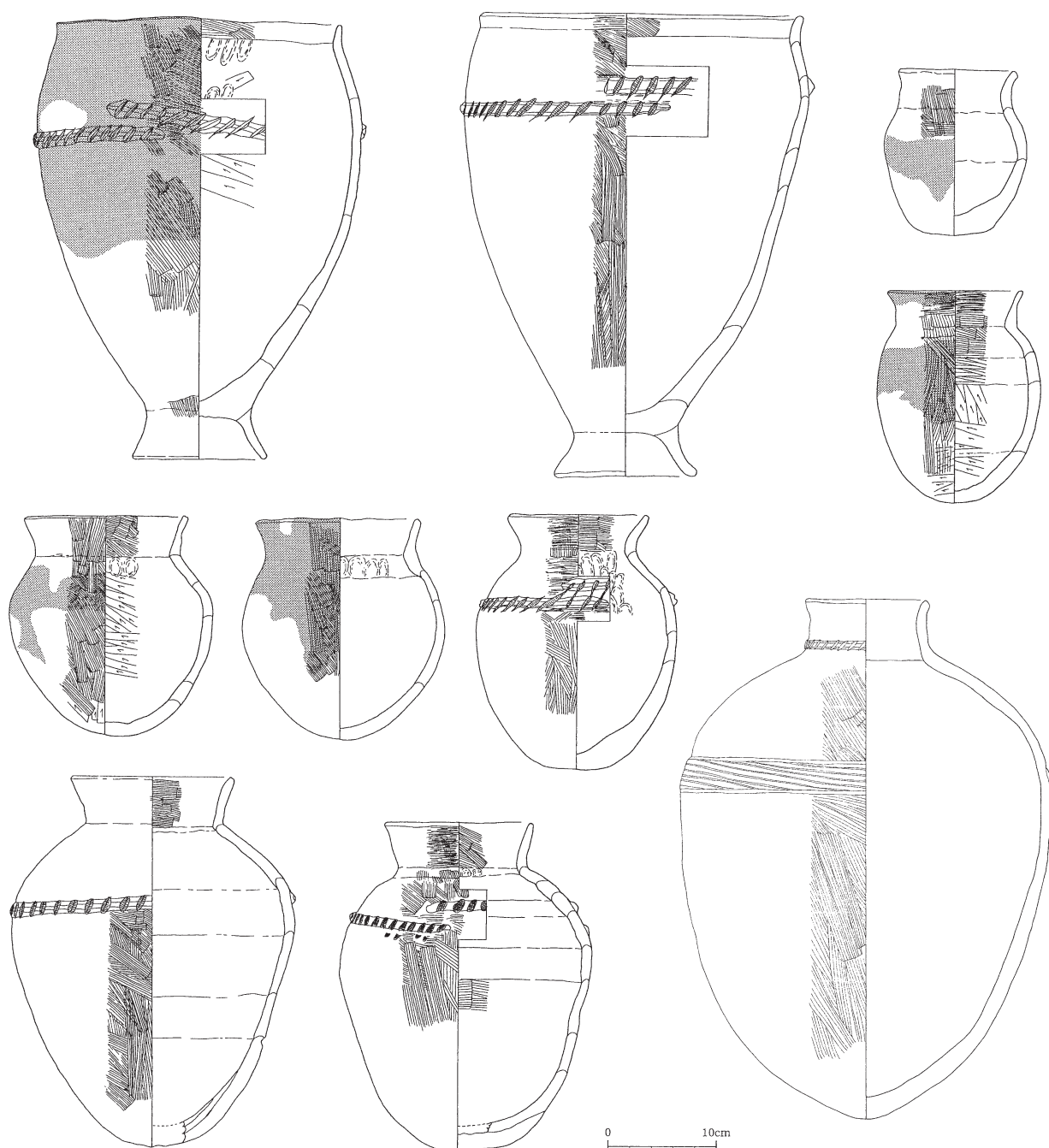
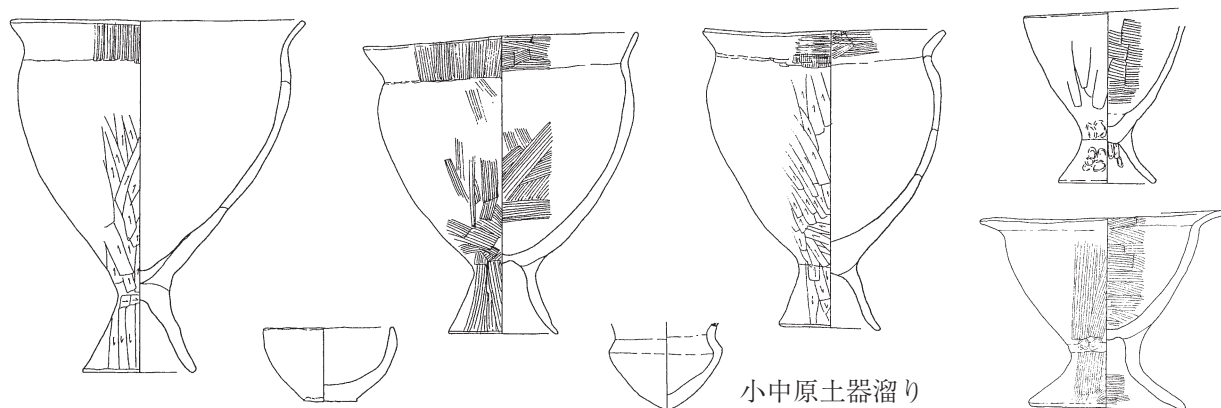
諷訪牟田住居跡



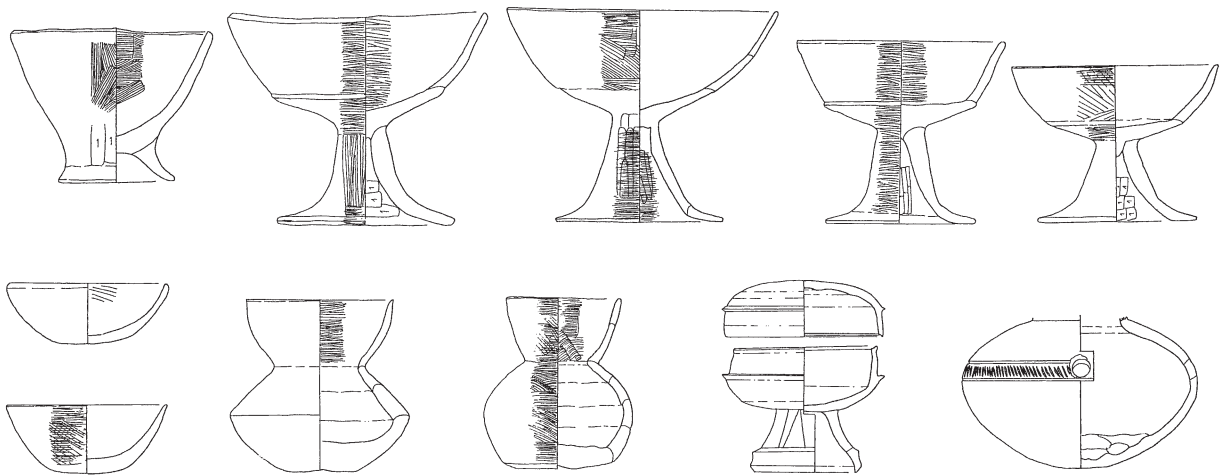
尾ヶ原 1号住居跡

0 10cm

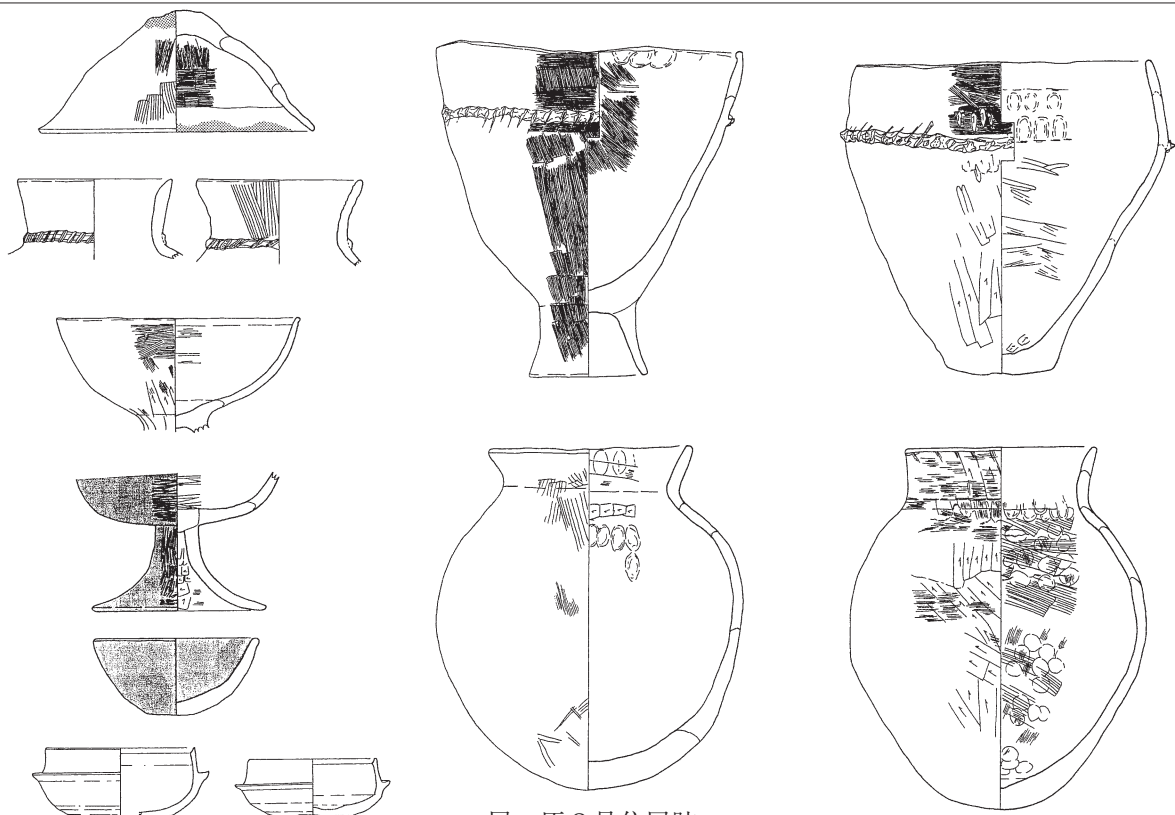
第3図 諷訪前・諷訪牟田・尾ヶ原遺跡住居内土器



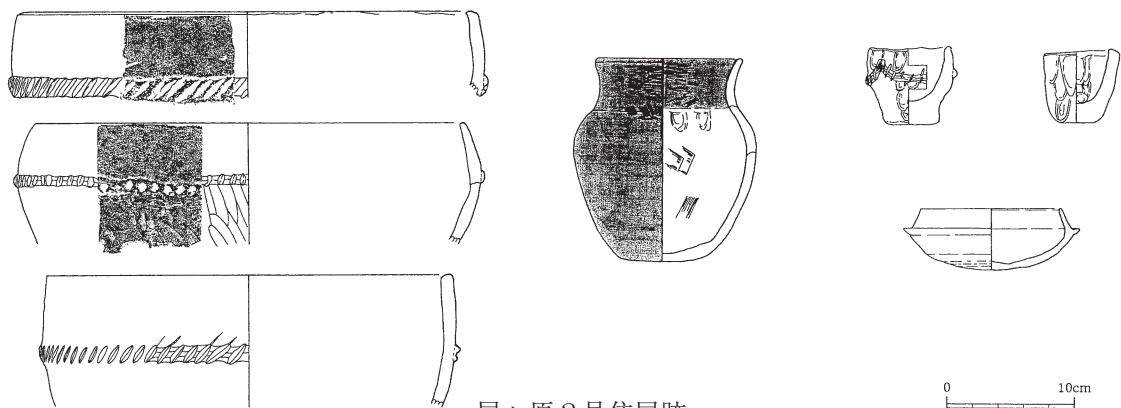
第4図 小中原・尾ヶ原遺跡 住居内出土土器



小中原 4号住居跡

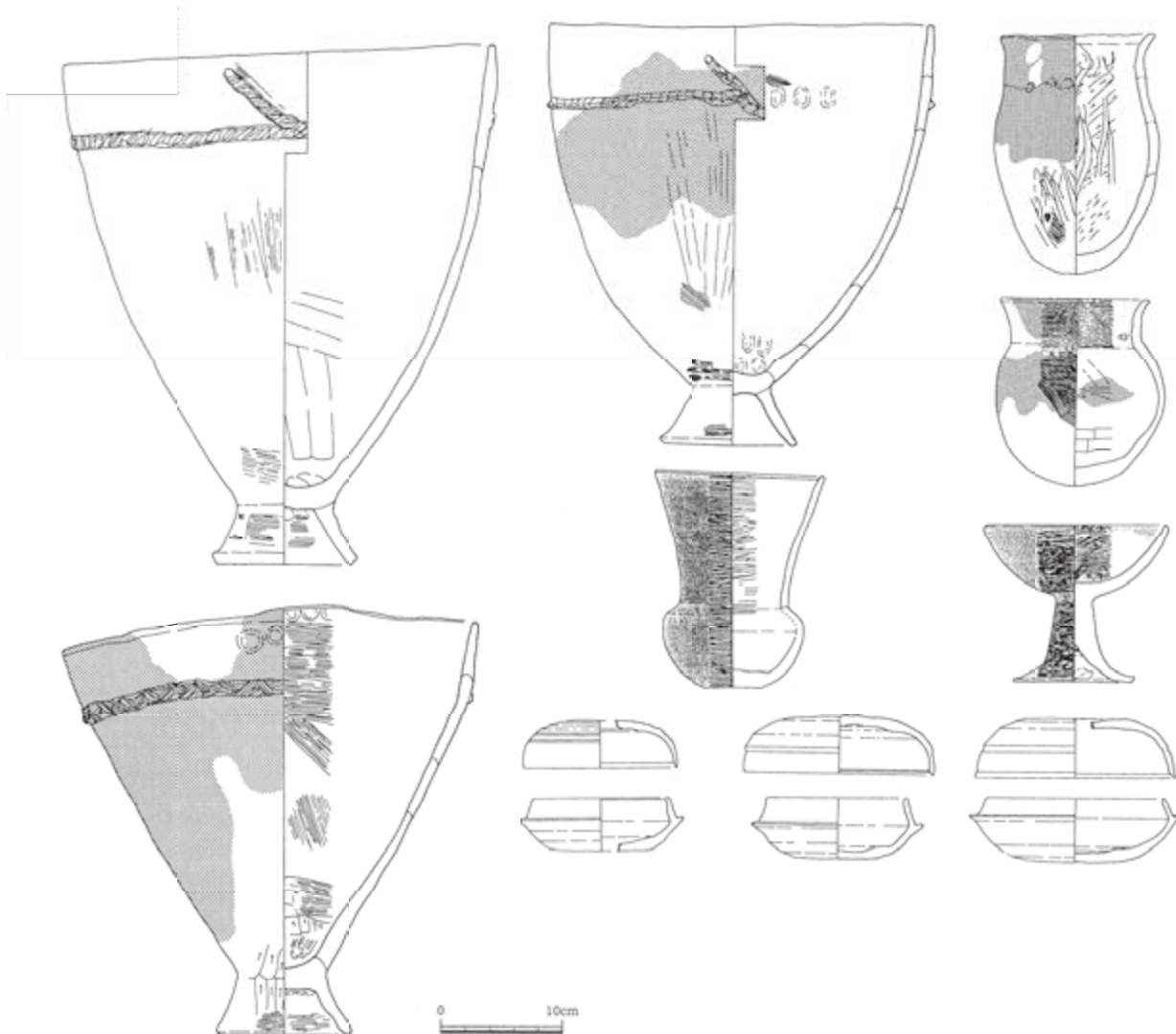


尾ヶ原 3号住居跡



尾ヶ原 2号住居跡

第5図 小中原土器溜り 住居内土器



第6図 尾ヶ原遺跡4号住居跡

む土器が出土している。須恵器及び土器は2号住居跡と類似しており、ほぼ同時期と考えられる。

8 諏訪牟田遺跡住居跡

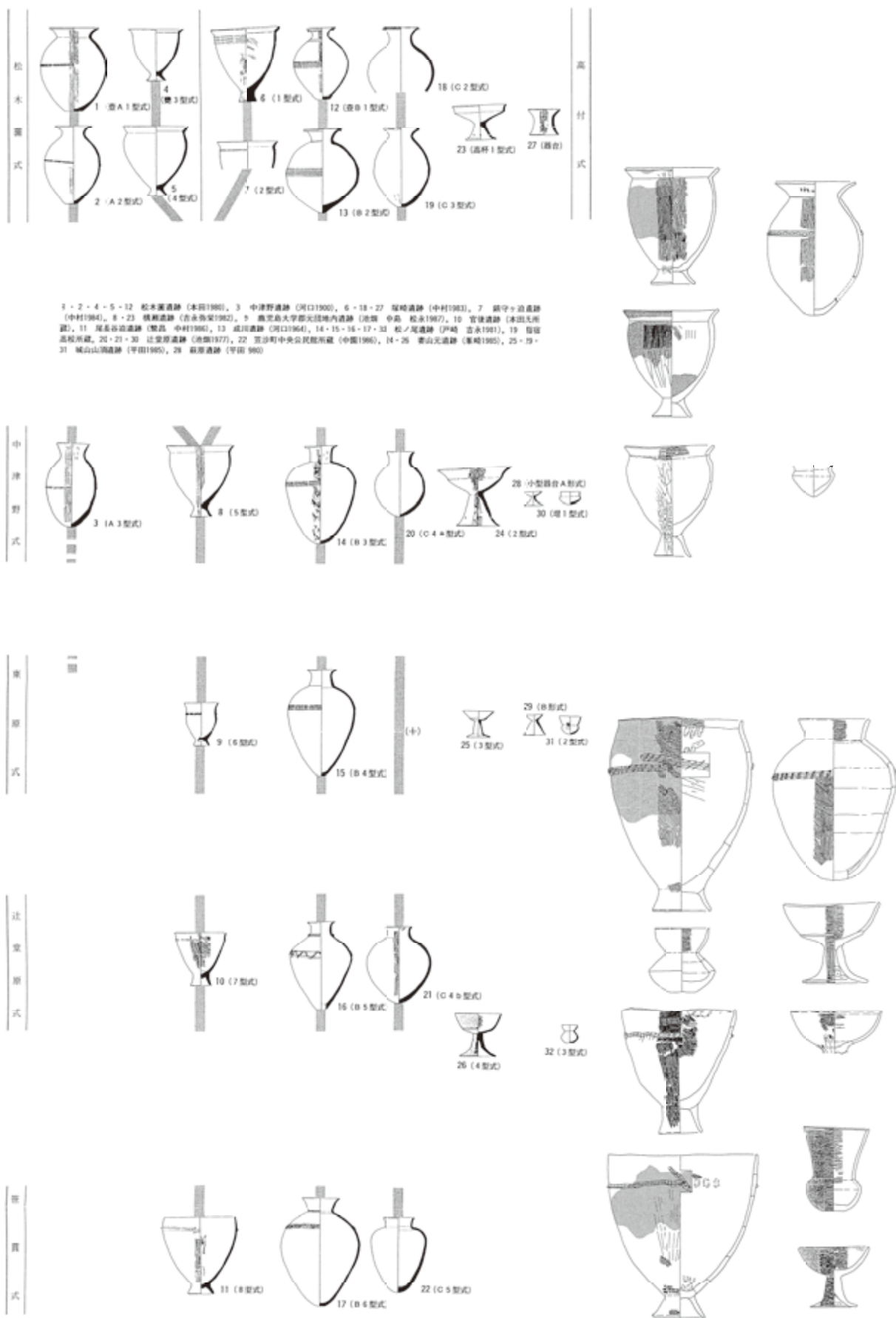
方形の両側に張り出しを有する特異な形状の住居跡である。住居内からは少ないが甕形土器・壺形土器等が出土している。甕形土器は口縁部が外反するが、内面の稜線は明瞭ではない。

農業開発総合センター遺跡群内から出土した成川様式土器についての編年試案を試みたいと考える。

諏訪前1号・2号住居跡出土の土器群と吹上小中原の土器溜りの土器群では若干の時期差が見られる。諏訪前遺跡の甕形土器では口縁部内面の稜線が明瞭で底部の上げ底も浅いものである。また、壺形土器

では、底部が平底に近い丸底気味で、松木菌式に後続し、弥生時代の範疇に入るものと思われるが、小中原遺跡では、甕形土器の口縁部内面の稜線が明瞭で無くなり、埴に近い器形の土器も見られる点から、中村編年の中津野式に比定できる。その編年の中でも器台、疍等がみられ器種が豊富になることが指摘できる。本論では、この段階を中津野式の新段階と位置付けて古墳時代に入るものと考えたい。

須恵器Ⅰ式を伴う小中原遺跡の4号住居跡の土器についてみると、前述の諏訪間遺跡、土器溜りの土器群とは相当の時間差が考えられ、中村氏編年の東原式の段階が欠如しているものと考えられる。甕形土器の口縁部に内湾した後外反するという独特の器形が見られるが、壺形土器、高坏、埴についてみ



第7図 成川様式土器編年試案 (中村直子編年に加筆)

ると中村編年の辻堂原式に比定出来るが、須恵器Ⅰ式を伴うことから、5世紀前半頃と考えられる。

尾ヶ原遺跡では2号・3号・4号住居跡で須恵器が共判している。それらについてみると、3号住居跡では須恵器Ⅱ式、2・4号住居跡では須恵器Ⅱ式のMT15型式～TK10型式の特徴を有しており、6世紀前半代が考えられるが、3号住居の須恵器がやや先行するものと思われる。

いずれも成川様式の中では笹貫式の範疇でとらえ

られるものである。現段階での編年で、6世紀代の成川様式土器については、笹貫式とされているが、須恵器Ⅲ式を伴う6世紀後半のものもあり相当の時間幅がある。また、土器そのものにも変化がみられることから今後細分化が必要となるものと考えられる。

<参考文献>

中村直子 1987「成川式土器再考」『鹿大考古6号』
鹿児島大学法学部考古学研究室

農セの押型文土器について

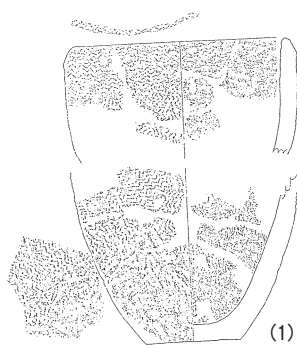
新中なるみ

農業開発総合センター遺跡群（以下農セ）では、調査・報告した23遺跡中13遺跡で押型文土器が出土している。（鍛冶屋堀遺跡は表採遺物なので対象から外している。）本年度報告の荒田遺跡・桜谷遺跡でも押型文土器が多数出土している。荒田遺跡では下剥峯式土器以前の土器が数点しか出土しておらず、押型文土器が広範囲で出土していた。また、桜谷遺跡でも特徴のある出土状況が見られた。南九州の押型文土器は大分編年を中心に多岐にわたって研究され、論じられている。これらのことをふまえて、農セの押型文土器についてまとめていきたい。（掲載遺跡順は表1を参照。）

はじめに各遺跡の押型文土器の主な器形をあげてみたい。（図中の番号は紙面の便宜上改めて打ち直してある。）窪見ノ上遺跡では、直行した口縁部を持ち、内側には一部施文があるものと底部に厚みがあり安定したもの（1）や外反した口縁部を持ち内側に原体条痕と横位の施文が施されたもの（7）が出土している。また、外反した口縁部を持ち内側に施文の施されたもの（15）が出土している。馬廻遺跡・吹上小中原遺跡では内側に施文のある口縁部付近の土器（17・16）が出土している。大門口遺跡では平底の底部ではあるが胴部が開いており、外面の下部は無文の土器（24）が出土している。尾ヶ原遺跡ではやや直行した口縁部を持ち、内側に施文のないもの（6）が出土している。また、外反した口縁部を持ち、内側に施文のあるもの（12）が出土している。諏訪前遺跡は縦位に施された山形押型文の胴部（23）

が出土している。諏訪脇遺跡ではほとんどのものが外反した口縁部を持ち内側に施文のあるもの（13・14）が出土している。また、外側の施文のあとナデ消しを施されたもの（18）が出土している。頭無迫田遺跡にも施文のあとナデ消しを施されたもの（22）が出土している。宗円堀遺跡では外反した口縁部を持ち、内側に施文のないもの（21）が出土している。本年度報告の3遺跡を見てみると中尾遺跡は外反した口縁部を持ち内側に施文のあるもの（10）がほとんどであった。また、外反した口縁部を持ち、内側に施文があるもので、内側施文が原体条痕で胴部にも横位の条痕文が施されているもの（本報告書番号211・212）が出土している。荒田遺跡では直行した口縁部を持ち口唇部が平坦で内側に施文のないもの（2・3）。外反した口縁部を持ち内側に施文のあるもの（9）。外反した口縁部を持ち胴部にふくらみを持ち、内側に施文のあるもので外面にナデ消しのあるもの（20）。外反した口縁部を持ち、内側に原体条痕と横位の施文が施されたもの（8）が出土している。また、押型文と条痕文が施されたもの（本報告書番号232）が出土している。底部では厚みがあり安定したもの（本報告書番号228）と平底の底部ではあるが胴部が開いて安定性のないもの（本報告書番号231）が出土している。桜谷遺跡では、直行した口縁部を持ち、内側に施文のないもの（4・5）と外反した口縁部を持ち内側に施文のあるもの（11）。外反する口縁部を持ち、内側に施文があり、外面にナデ消しのあるもの（19）が出土している。また、

A類

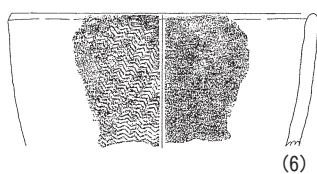
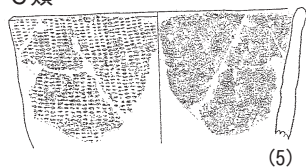


B類

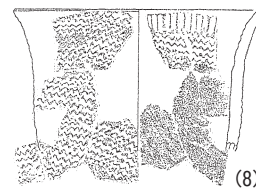


0 10cm

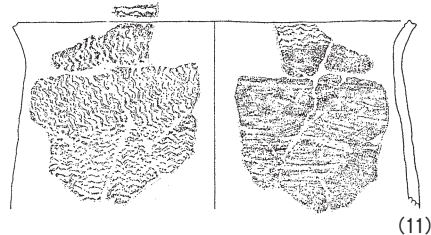
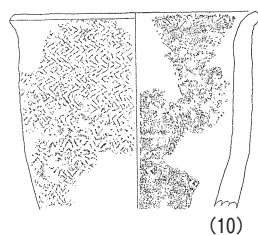
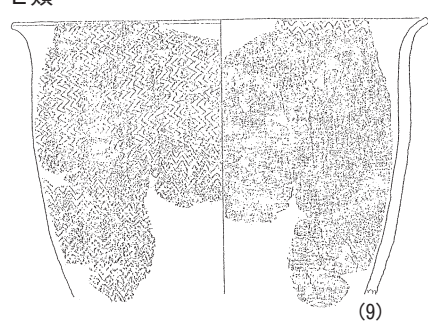
C類



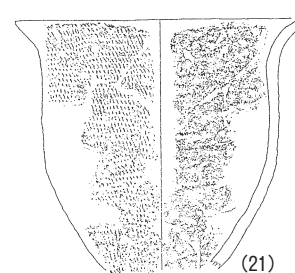
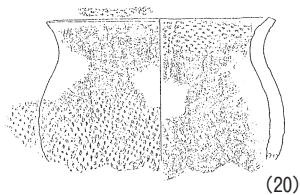
D類



E類



G類



F類



未分類



0 10cm

- (1) (7) (15) 窪見ノ上 (16) 馬廻 (17) 吹上小中原
(24) 大門口 (6) (12) 尾ヶ原 (23) 諏訪前
(13) (14) (18) 諏訪脇 (21) 宗門掘 (22) 頭無迫田
(10) 中尾 (3) (8) (9) (20) 荒田 (4) (5) (11) (19) 桜谷

第8図 農セの主な押型文土器

貝殻刺突文と山形押型文が混同して施された土器
(本報告書番号517)が出土している。

この押型文土器を分類していくと次の通りになる。
(第1図)

- A類 直行した口縁部を持ち、口唇部が内側に入り、
内側に施文が一部あるもの。施文は山形文で
横位。(1)
- B類 直行した口縁部を持ち、口唇部は平坦で内側
に施文のないもの。施文は山形文で斜位。
(2～4)
- C類 やや外反した口縁部を持ち、内側に施文のな
いもの。施文は山形文と楕円文で横位と斜位。
(5・6)
- D類 外反した口縁部を持ち内側には原体条痕と横
位の施文が施されているもの。施文は山形文
と楕円文で横位と斜位。(7・8)
- E類 外反した口縁部を持ち内側に横位の施文が施
されているもの。施文は山形文と楕円文で縦
位が多いが斜位や横位もある。(9～17)
- F類 外反した口縁部を持ち内側に横位の施文が施
されているもの。外側にはナデ消しが施され

ている。施文は山形文と楕円文で縦位。
(18・19)

- G類 外反した口縁部を持ち胴部にふくらみのある
もの。施文は楕円文と山形文で縦位。(20・
21)

次に、これらの土器と同一グリッドから出土した
土器を表1に示した。A類の(1)は岩本式土器・
前平式土器が同一グリッドから出土している。この
グリッドは岩本式土器が多く完形品が出土している。
B類の(2)は出土範囲が広く、集中して出土して
いる所では、加栗山式土器・桑ノ丸式土器・右京西
タイプが同一グリッドから出土しており、(3)は桑
ノ丸式土器・塞ノ神式土器・右京西タイプの土器が
同一グリッドから出土しており、(4)とC類の(5)
は下剥峯式土器・桑ノ丸式土器と同一グリッドであ
る。D類の(7)は石坂式土器・桑ノ丸式土器と同
一グリッドである。E類の(9)は広範囲の出土で
加栗山式土器・桑ノ丸式土器・中原式土器・塞ノ神
式土器・右京西タイプの出土が見られる。(12)で
は石坂式土器が出土している。(13)は桑ノ丸式土
器・手向山式土器が出土している。(14)は手向山式

表1 農業センター遺跡群の押型文土器出土数と同グリッド内の土器型式

土器型式 掲載総数			グリッド (掲載個数)	主な土器 (第1図)	分類	岩本	前平	加栗山	石坂	下剥峯	桑ノ丸	中原	手向山	平埴	塞ノ神	右京西
1	窪見ノ上遺跡	37	B-5(5) C-6(3)	7・15	D・E				○		○					
			B-6(3) C-5(15)						○	○		○				
			J-4(3)	1	A	○	○									
			K-4(2)			○			○							
2	馬廻遺跡	7	C-4(6)							○						
			D-4(1)	17	E				○		○					
3	小中原遺跡	1	L-1(1)	16	E			○								
4	大門口遺跡	1	E-13(1)	24												
5	尾ヶ原遺跡	25	C-3(10)	12	E				○							
			D-3(2)						○	○						
			L-10(2)	6	E											
6	諏訪前遺跡	3	I-11(3)	23												
7	諏訪脇遺跡	106	B-3(51)	13・18	E・F						○		○			
			C-2(7)								○				○	
			C-3(5)	14	E								○			
			D-1(5)								○					
8	宗門堀遺跡	1	L・K-18(1)	21	G	○			○	○	○	○				○
9	頭無迫田遺跡	5	J-5(1)											○		
			J-10(3)	22												
10	中尾遺跡	24	B-13(12)	10	E											
11	荒田遺跡	61	U-10(1)	2	B			○			○					○
			T-8・9(8)	3	B						○				○	○
			S-8(1)	9	E			○			○	○			○	○
			L・M-6(12)	20	G						○					
12	桜谷遺跡	74	E-9・10(2)	4・5	B・C					○	○					

土器が同一グリッドで出土している。(16)は加栗山式土器が出土している。(17)は石坂式土器の完形品と桑ノ丸式土器が同一グリッドで出土している。F類の(18)は桑ノ丸式土器と手向山式土器が出土している。G類の(20)は桑ノ丸式土器が出土している。(21)は接合面が大きく多くの土器が出土している。(6・8・10・11・19・22~24)では同一グリッドでの出土は見られなかった。

また、A~G類に分類したものをあわせたものを表2に示した。A類は(1)のみであるが、岩本式土器と前平式土器が出土している。B類の(2・3)は接合範囲が広範囲で多くの土器が出土している。(4)は下剥峯式土器と桑ノ丸式土器が出土している。C類は下剥峯式土器と桑ノ丸式土器が出土している。D類は石坂式土器と桑ノ丸式土器の出土である。E類は加栗山式土器以降のものが出土しており、広範囲の土器の出土状況である。F類は桑ノ丸式土器と手向山式土器の出土であった。G類は(21)は多くの土器が出土しているが、(20)は桑ノ丸式土器の出土となっている。

表2 同一グリッド出土土器と分類のまとめ

	岩本	前平	加栗山	石坂	下剥峯	桑ノ丸	中原	手向山	平権	塞ノ神	右京西
A類	○	○									
B類			○		○	○				○	○
C類					○	○					
D類				○		○					
E類			○	○		○	○	○		○	○
F類						○		○			
G類	○			○	○	○	○				○

これらの遺跡の中で、特徴のあるものは桜谷遺跡の出土状況である。桜谷遺跡は、押型文土器が単独で集中して出土している(P.177第17図X類参照)。この遺跡は他の土器型式でも出土状況に特徴があり、岩本式土器・前平式土器・加栗山式土器・吉田式土器がM~O-13~16区で出土し、石坂式土器・下剥峯式土器がQ~T-19~21区で出土している。また、桑ノ丸式土器がQ-17区で出土している。他の土器型式では重なりが見られるのだが、押型文土器は単独で集中して出土しているということがわかる。この遺跡は石坂式土器の出土量が多く、次いで押型文土器が集中して出土している。この集中した押型文

土器を詳しく分類したもの以外でも見てみると、表面がナデ消しされたもの(本報告書番号477)や外反した口縁部を持ち内側に施文があるが口唇部が山形になり、その口唇部と頸部に刻目が施されたもの(本報告書番号481)などもあり、ただ押型文土器とまとめるわけにはいかないようなものがある。また、掲載されている73点のうち65点はP-15・16区を中心とし、集中した範囲に出土しているが、残りの8点のうちE-9・10区で出土した2点(4・5)は直行した口縁部を持ち、内側に施文のないものである。また、J-13区で出土している2点は山形押型文で同一個体と思われる胴部・底部(本報告書番号458・472)である。N-14区(本報告書番号454)で出土しているものは山形押型文の胴部である。O-22(本報告書番号491)は直行した口縁部を持ち外側はナデ消しが施され内側に施文がないものが出土している。T-20(本報告書番号514)では楕円押型文の底部が出土している。

次に、この分類を既存の押型文土器の型式にあてはめてみると、A・B類は桑ノ丸式土器の器形に押型文を施文した(新東1990)ものにあたる。また、A~C類は弘法原式土器(水ノ江1998)、上野原遺跡第10地点縄文早期中葉土器編年案の押型文土器様式(八木澤2001)ではⅡ期・Ⅲ期、岩永編年(岩永2006)ではⅠ期、山下・栴畑編年(山下・栴畑2007)では第1段階にあたる。さらに、D~G類はヤトコロ式土器あるいは出水下層式土器にあたる。上野原遺跡第10地点縄文早期中葉土器編年案の押型文土器様式(八木澤2001)ではⅣ期・Ⅴ期、岩永編年(岩永2006)では、Ⅱ期~Ⅲ期(新)にあたり、また山下・栴畑編年(山下・栴畑2007)では第2段階・第3段階にあたる。このように押型文土器の編年は細部において異なった見解が乱立しているようであるが、大筋の編年の流れに関しては概ね一致しているようである。また分類したものも必ずしも編年にそっているわけではない。しかし、この現状について、堂込秀人氏は「まず、異なる土器型式の共時性の証明や、地域性の検討、分布域の重なる遺物の垂直分布状況などが示される必要がある。」(堂込2003)という指摘もあり、他の地域と多少違いがあっても問題はな

いだろう。さらに、桜谷遺跡ではE・F類が単独で出土しており、先の検討の通り、E・F類と時期差があると思われるB・C類の出土はE・F類とは離れた所である。また、他の遺跡でもA～C類とD～G類が同じグリッドから出土していることはない。これらのことや南九州貝殻文系土器との関係などから、農セの押型文土器とその出土状況は桑ノ丸式土器から手向山式土器までの間に出水下層式土器の単純期があったことを示唆しているのではないだろうか。この問題について堂込氏は「型式学的にも桑ノ丸式土器→押型文土器→手向山式土器→平椅式土器→塞ノ神式土器と一系統式で連続していくもの」(堂込2003)と指摘しており、また、八木澤一郎氏は「貝殻文円筒形土器群の完全なる終焉は、いわゆる「出水下層式土器」と呼ばれる土器群が出現するまで下る」(八木澤2001)という点においては、農セの押型文土器も整合している。さらに、出水下層式土器が単独で存続する期間について八木澤氏は「極めて短期間であるが存在する」(八木澤2001)と述べている。しかし、この存続する期間に関して農セの押型文土器では言及する材料を見つけることができなかった。

このように農セの押型文土器は、薩摩半島西南部でも出水下層式土器が単独で出土し、またその単純期が確認されたという点で、長い間検討が必要とされていた南九州の押型文土器の様相に関しての重要な資料に位置づけられるだろう。この資料を活用した新たな見解が出されることを期待したい。

今回、農セの押型文土器をまとめるにあたり、力不足でなかなか結論を導き出すことができなかった。また、解釈などの違いについては、今後の課題とし、ご容赦いただきたい。今後は、南九州貝殻文系土器との関係や石器組成などさまざまな点から論究していきたい。

最後にこのまとめを書くにあたり、黒川忠広氏にご指導を頂いた。ここに記して御礼申し上げます。

<引用・参考文献>

出水市教育委員会 2000「出水貝塚」 出水市埋蔵文化財発掘調査報告書 (11)
岩永哲夫 2006「南九州の押型文土器」 宮崎考古

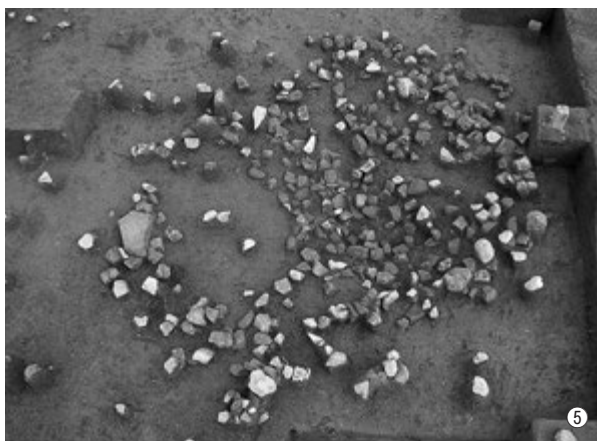
第20号

上杉彰紀 2006「南九州における縄文時代早期前半の様相」～平底円筒形押型文土器の位置づけをめぐって～ 九州縄文時代早期研究ノート第4号
大坪芳典・遠部慎 2000「南九州の押型文土器研究についての覚書」 鹿児島考古No.34
遠部慎 2000「ヤトコロ式土器と出水下層式土器の関係―押型文土器研究史の一断章「ヤトコロ式土器」成立―」 九州旧石器第4号
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2002「上野原遺跡(第2～7地点)」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (41)
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2001「上野原遺跡(第10地点)」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (28)
木崎康弘 1998「中九州西部押型文土器の編年」九州の押型文土器―論攷編―
黒川忠広 2003「南の押型文土器」 利根川24・25
坂本嘉弘 1996「東九州の押型文土器研究の現状と課題」 九州の押型文土器―論攷編―
新東晃一 1990「縄文早期土器の補修」 南九州縄文通信No.3
堂込秀人 2003「南九州における押型文土器文化期の存在」 利根川24・25
町田勝則 2003「押型文文化の石器を考えるにあたり」 利根川24・25
水ノ江和同 1998「九州における押型文土器の地域性」 九州の押型文土器―論攷編―
八木澤一郎 2003「堂込秀人「南九州における押型文土器文化期の存在」を読んで」―縄文早期中葉期における南九州回轉施文系土器の系譜と様相の確立に向けて(予察)―」 利根川24・25
山崎純男 平川祐介 1986「九州の押型文土器」 考古学ジャーナルNo.267
山下大輔 栗畑光博 2007「南九州貝殻文円筒形土器と押型文土器の関係」 縄文時代第18号
横手浩二郎 2003「九州における近年の押型文土器研究動向」 利根川24・25

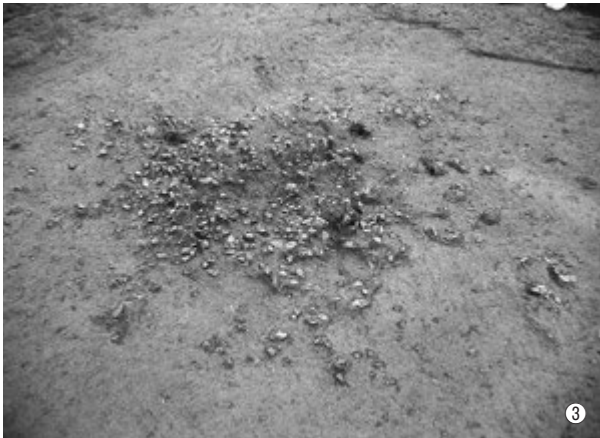
版 圖 真 寫



中尾遺跡全景
縄文時代草創期 遺構検出状況（B～D－9～11区）

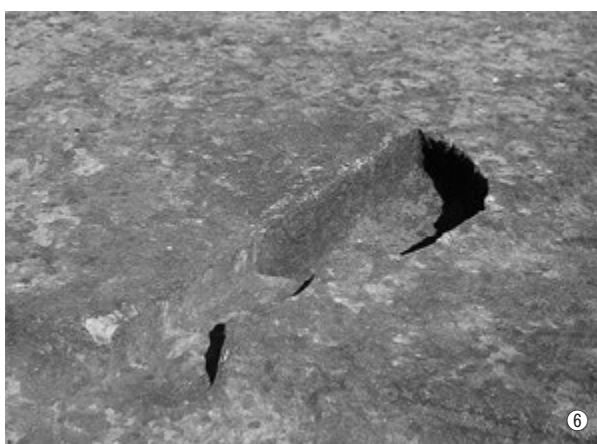


①土層断面（C－9区西壁） ②・③旧石器時代落とし穴状遺構
④・⑤縄文時代草創期 1・2号集石遺構



縄文時代草創期

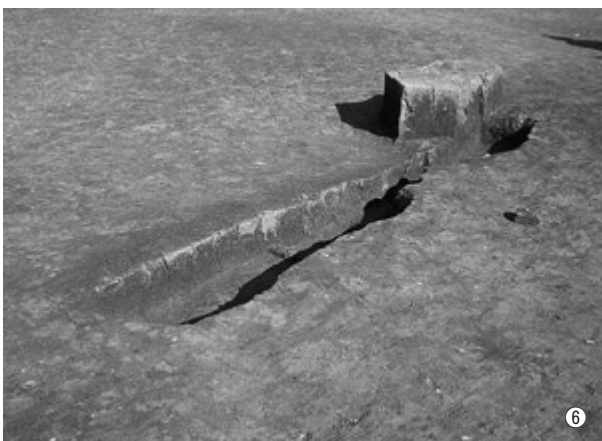
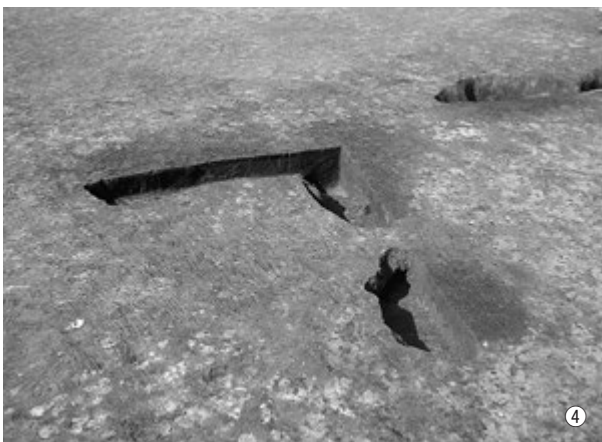
①～④ 3～6号集石遺構 ⑤調査風景（C-10～11区）



縄文時代草創期

①～④ 7～10号集石遺構 ⑤・⑥ 1・2号連穴土坑

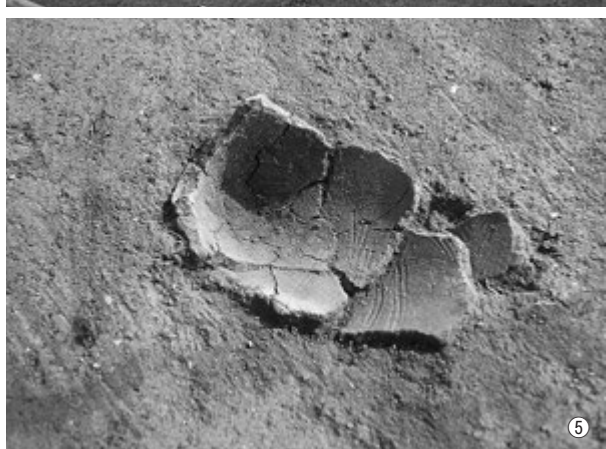
⑦ 遺構検出状況 (C-11区)



縄文時代草創期

①～④ 3～6号連穴土坑 ⑤ 4号連穴土坑煙道部

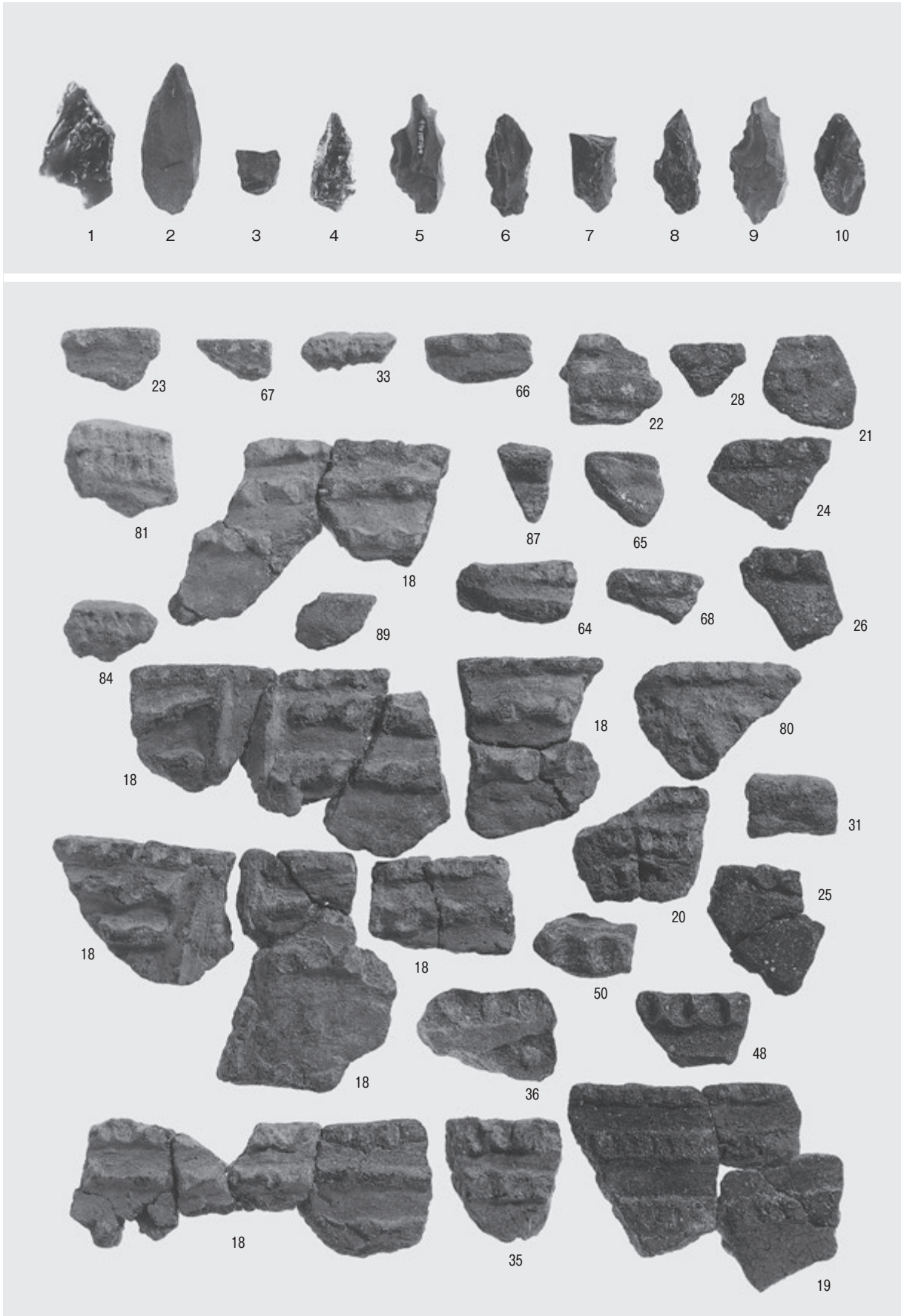
⑥・⑦ 7号・8号連穴土坑



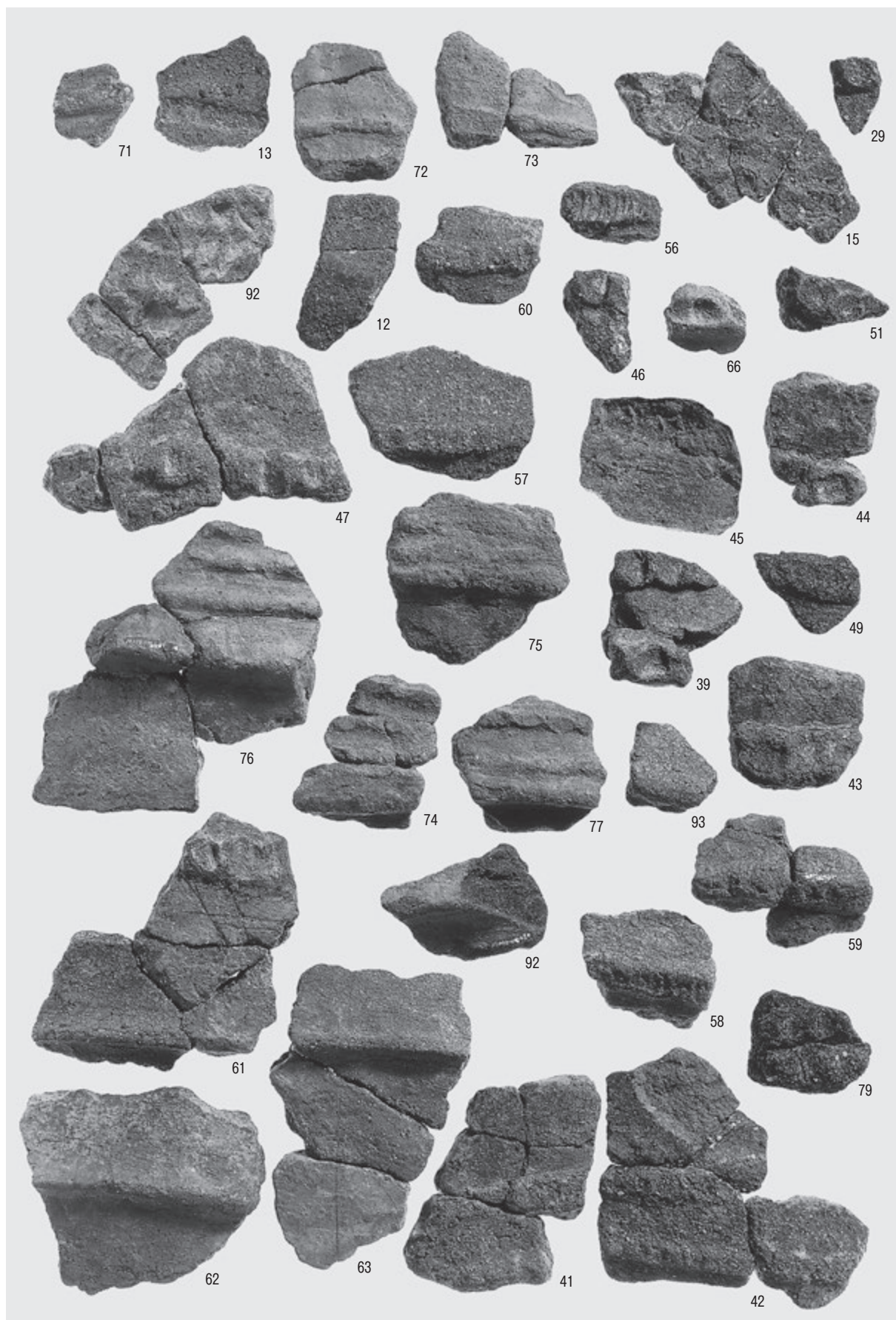
縄文時代草創期 ① 1号落とし穴状遺構 ② 土器(18) 出土状況 ③ 遺物出土状況 (C—10~11区)

縄文時代早期 ④ 2号集石遺構 ⑤ 土器(233) 出土状況

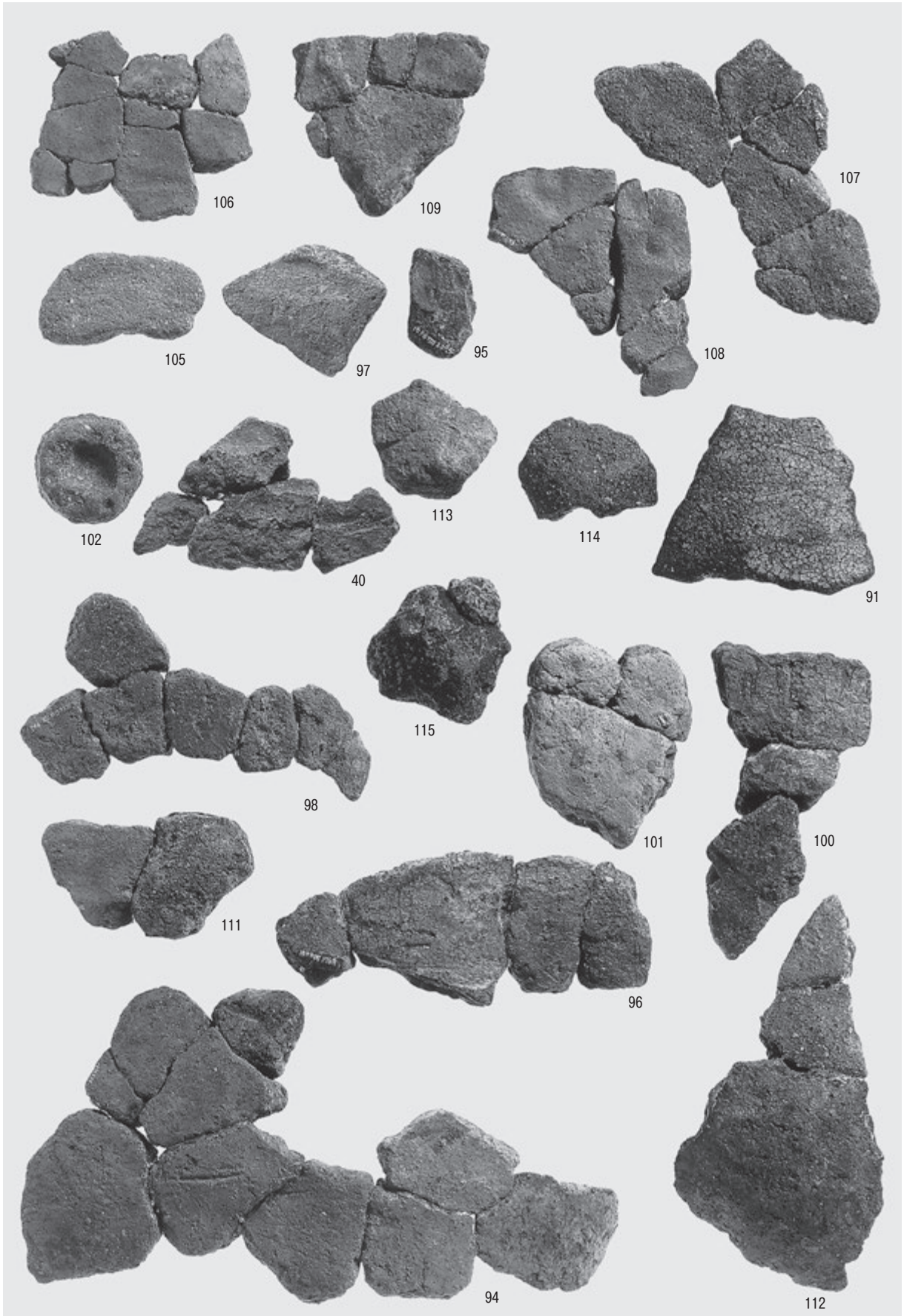
縄文時代晩期 ⑥ 2号集石遺構 ⑦ 7・8号掘立柱建物跡検出状況 ⑧ 土器(285・293) 出土状況



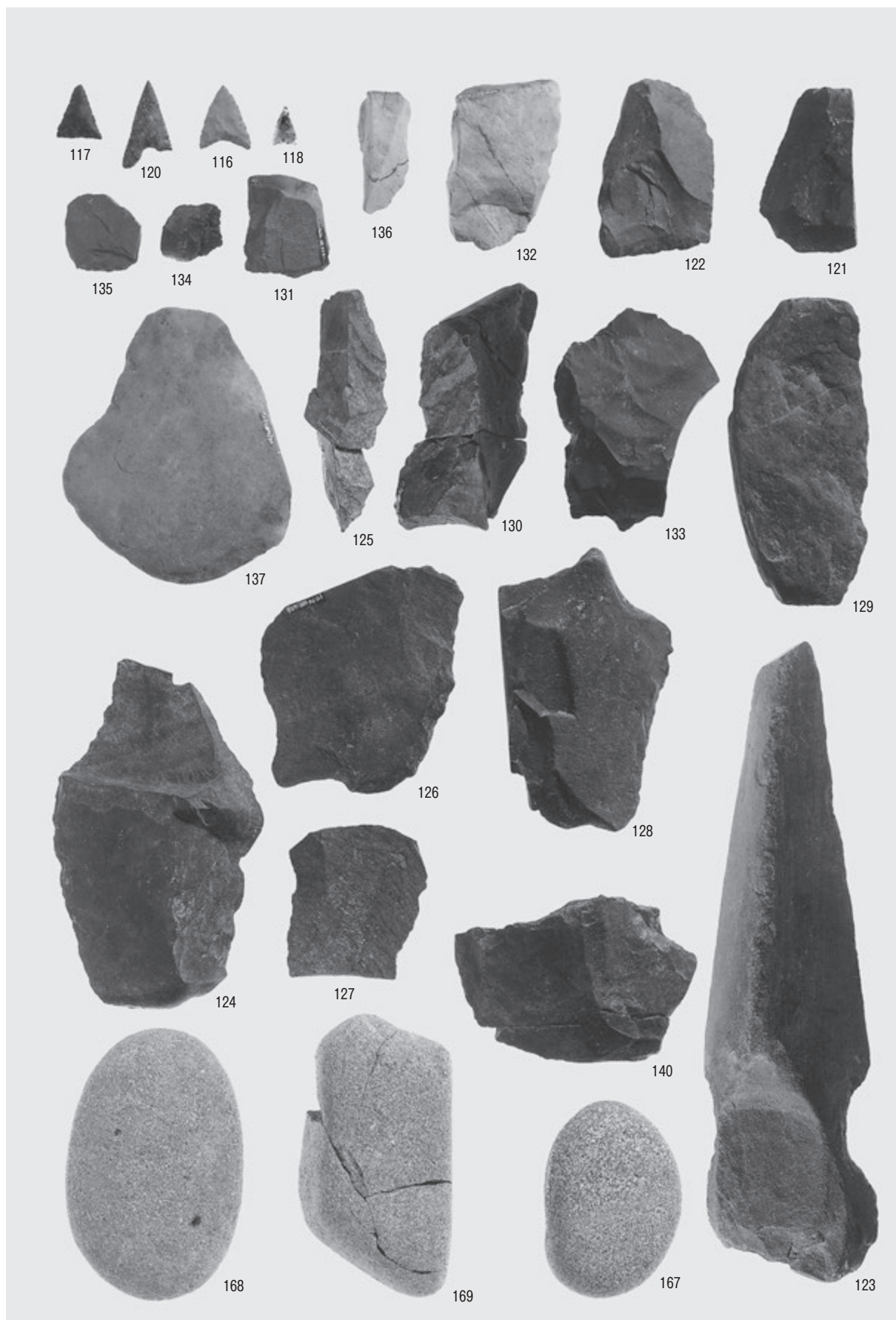
旧石器
縄文時代草創期 土器 1



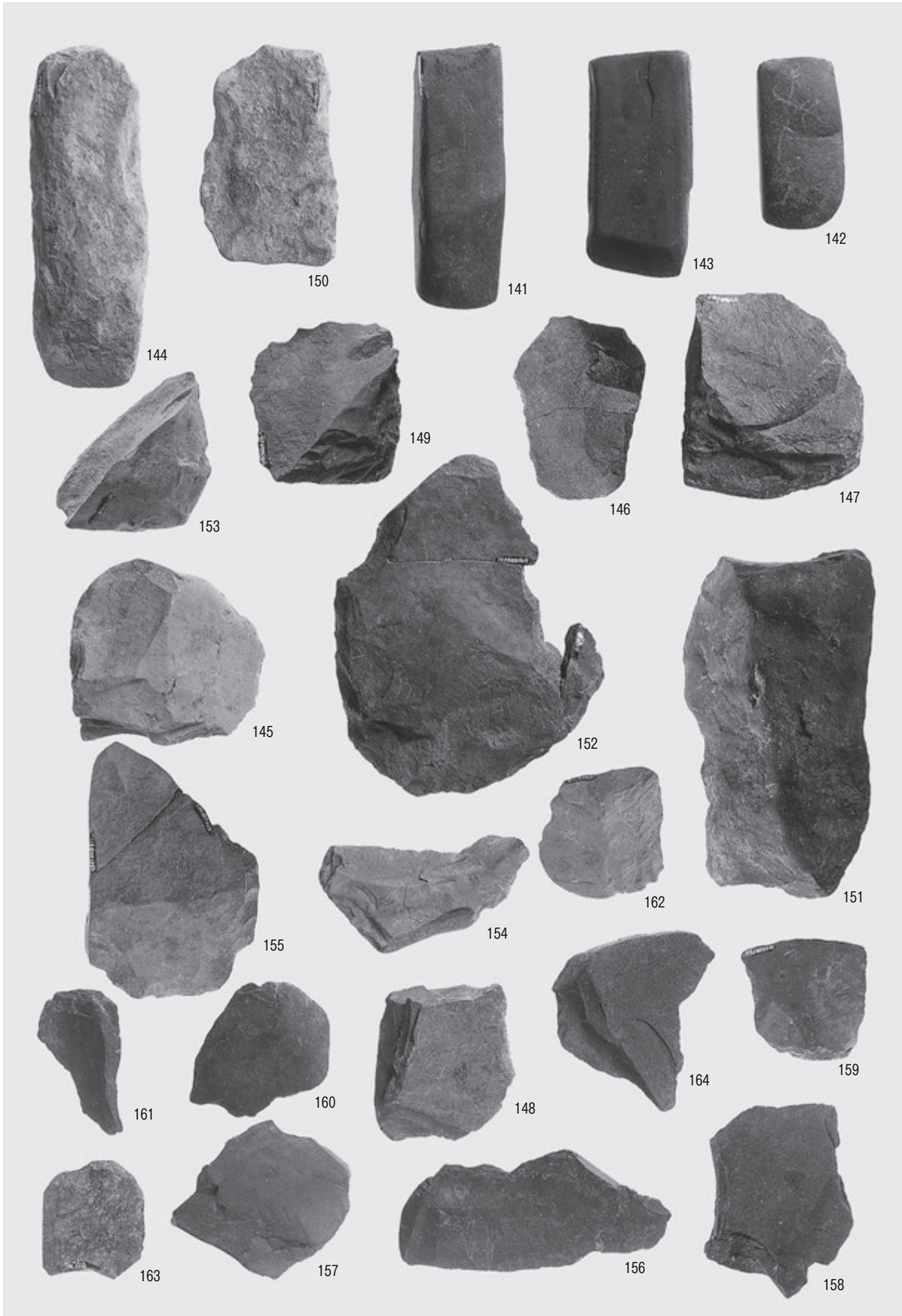
縄文時代草創期 土器2



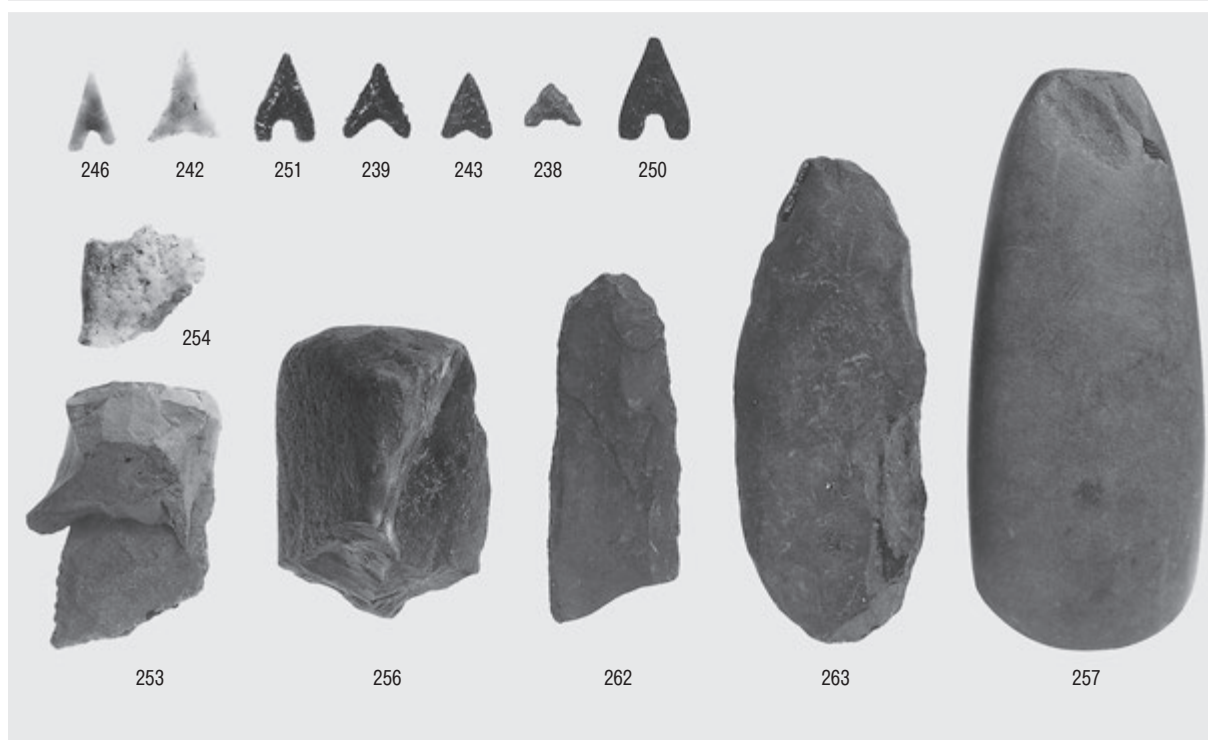
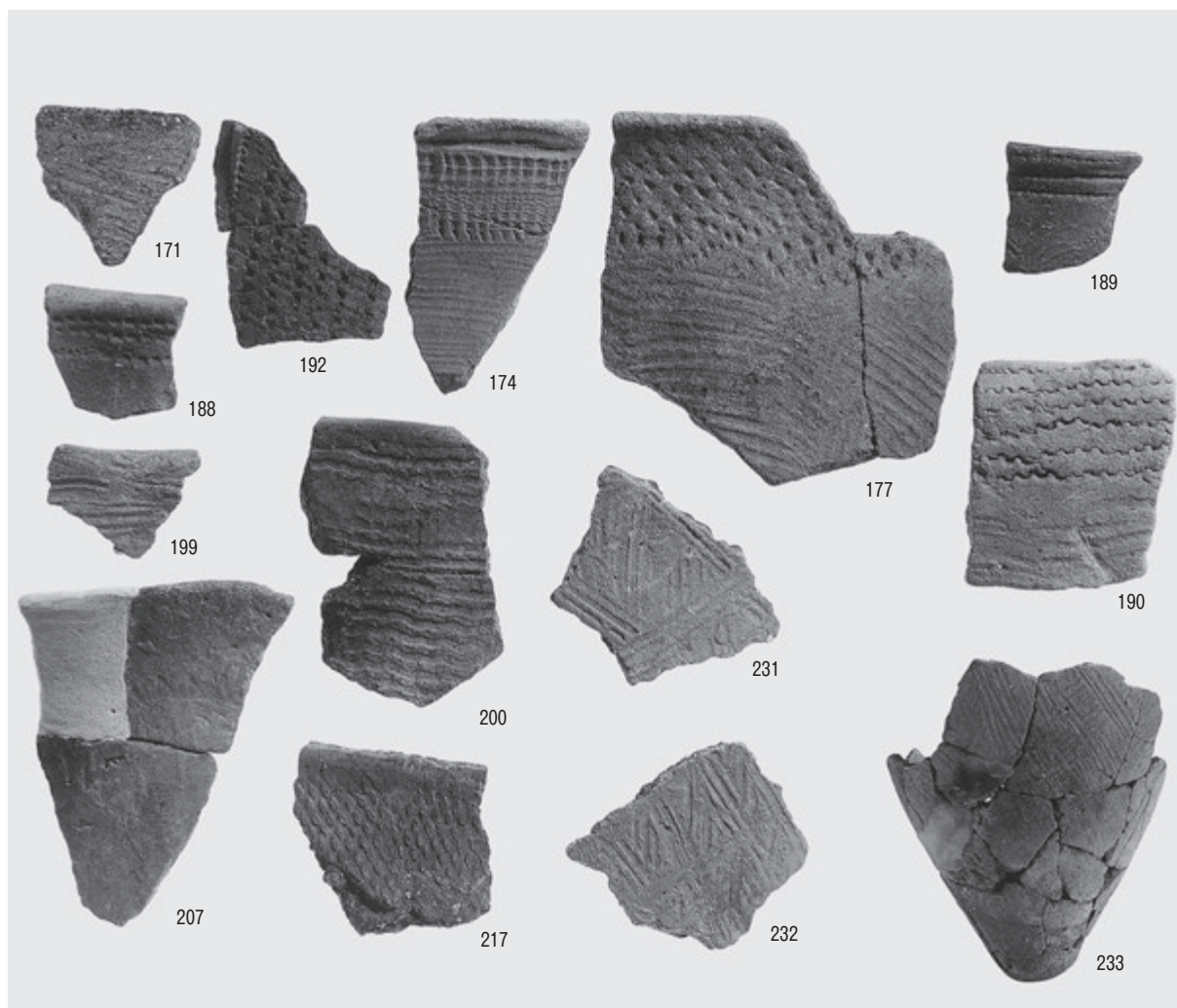
縄文時代草創期 土器 3



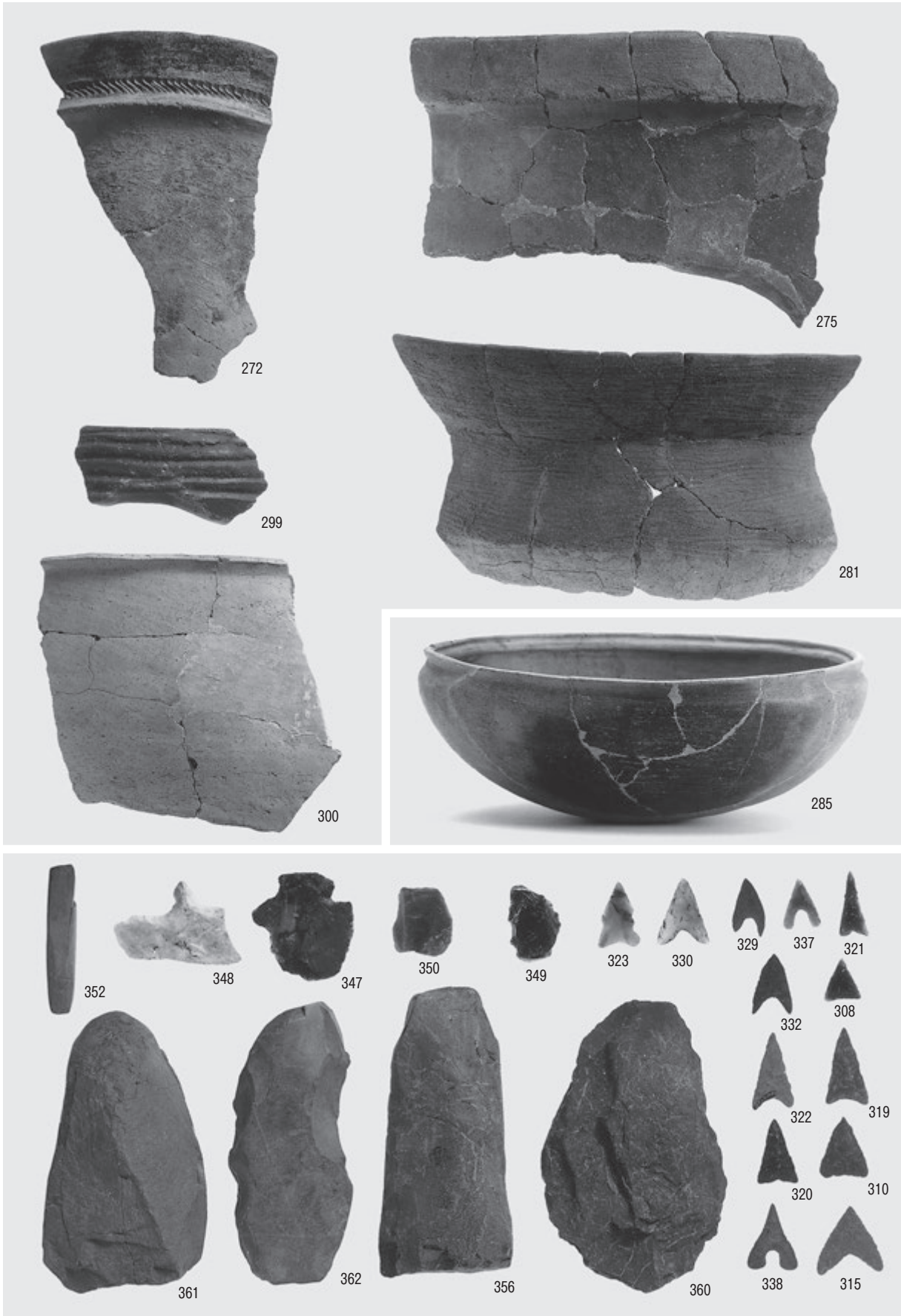
縄文時代草創期 石器 1



縄文時代草創期 石器 2



縄文時代早期 土器・石器



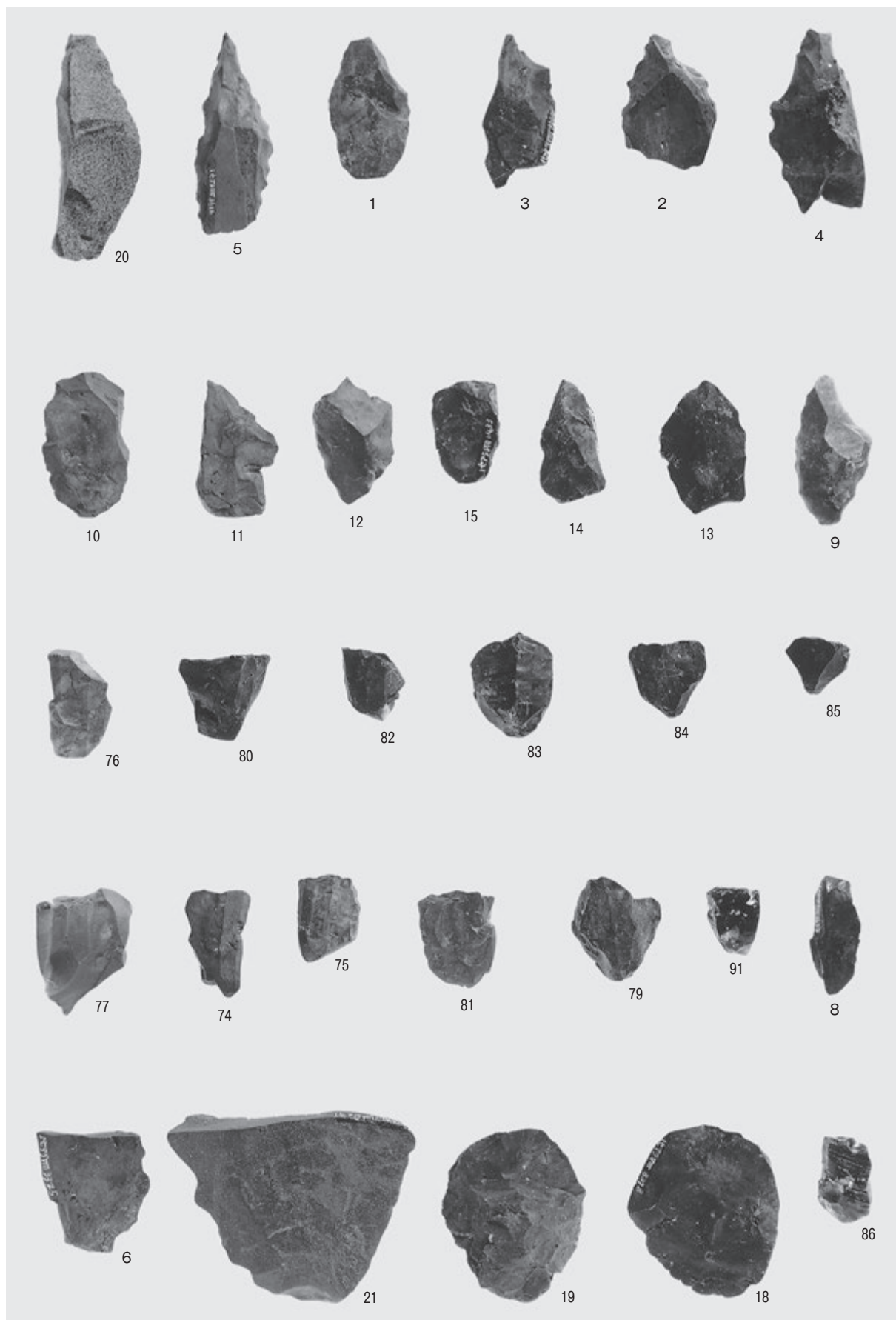
縄文時代後期・晩期 土器
縄文時代晩期 石器



①荒田遺跡 近景 ②土層断面 ③・④旧石器時代遺物出土状況
⑤石斧出土状況 ⑥縄文時代草創期 集石遺構



縄文時代早期 ①～⑥10・12・20・23・29・31号集石遺構
⑦1号土坑 ⑧V類土器出土状況



旧石器時代



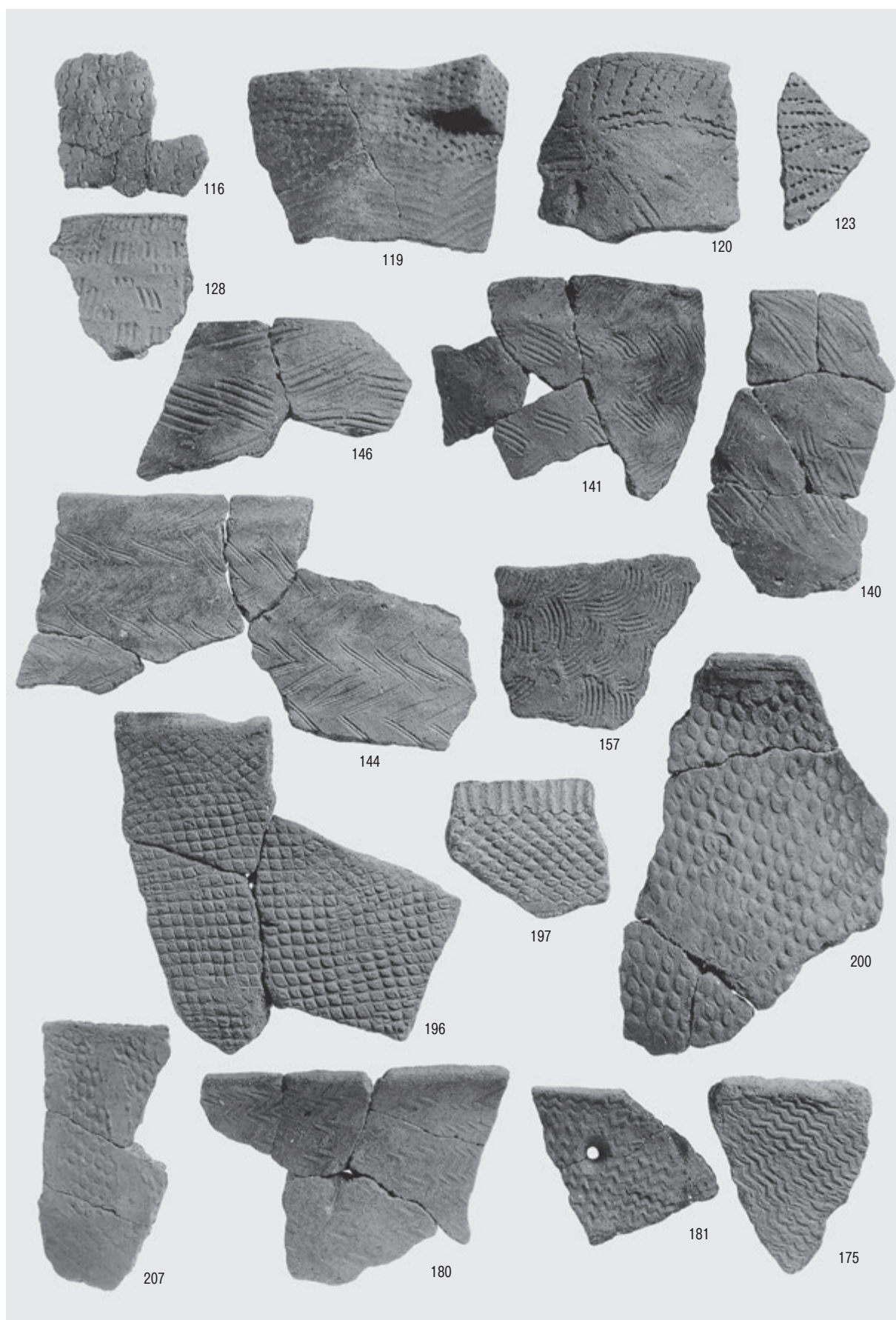
縄文時代草創期 石器・土器



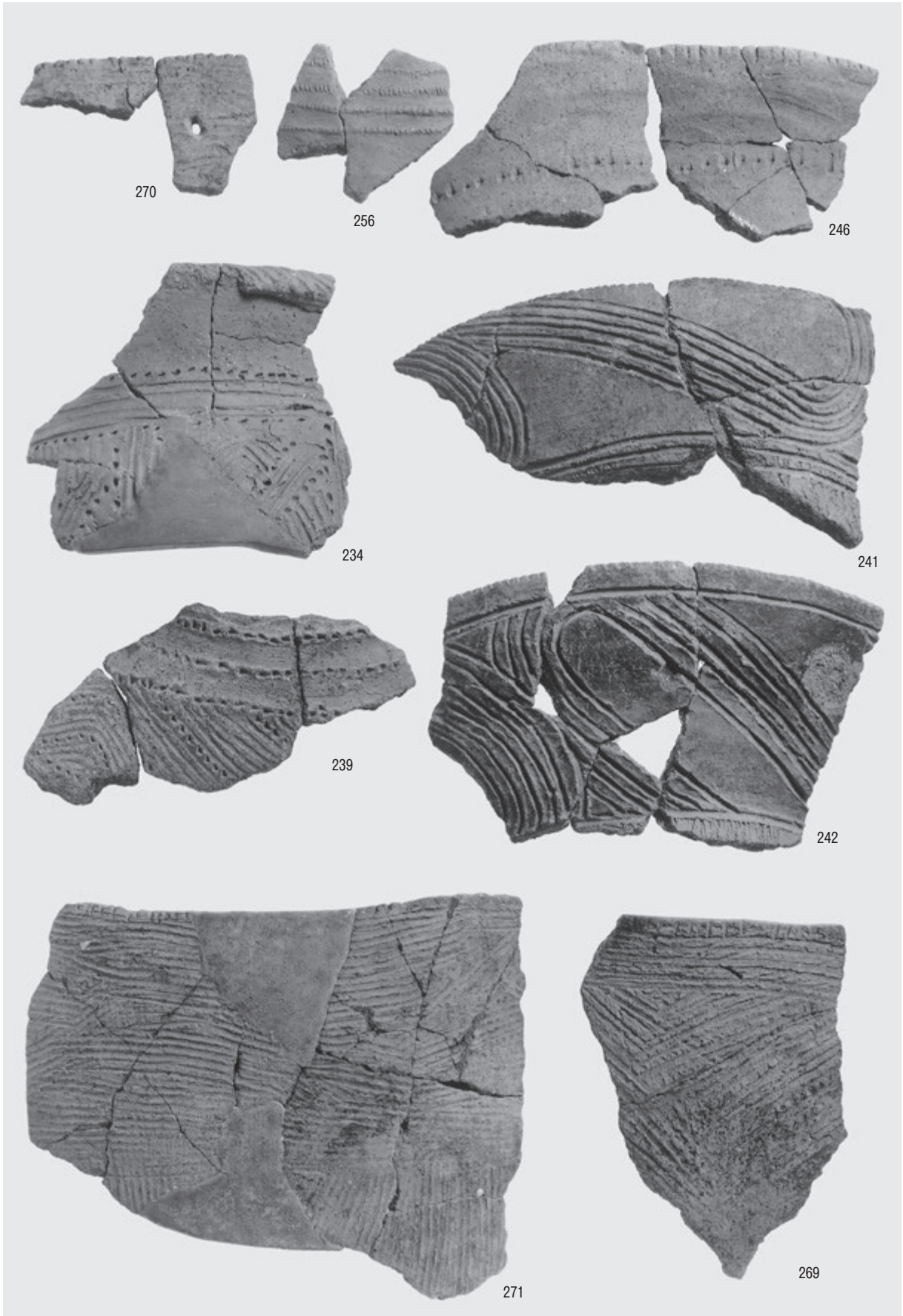
縄文時代早期 土器 1



縄文時代早期 土器 2



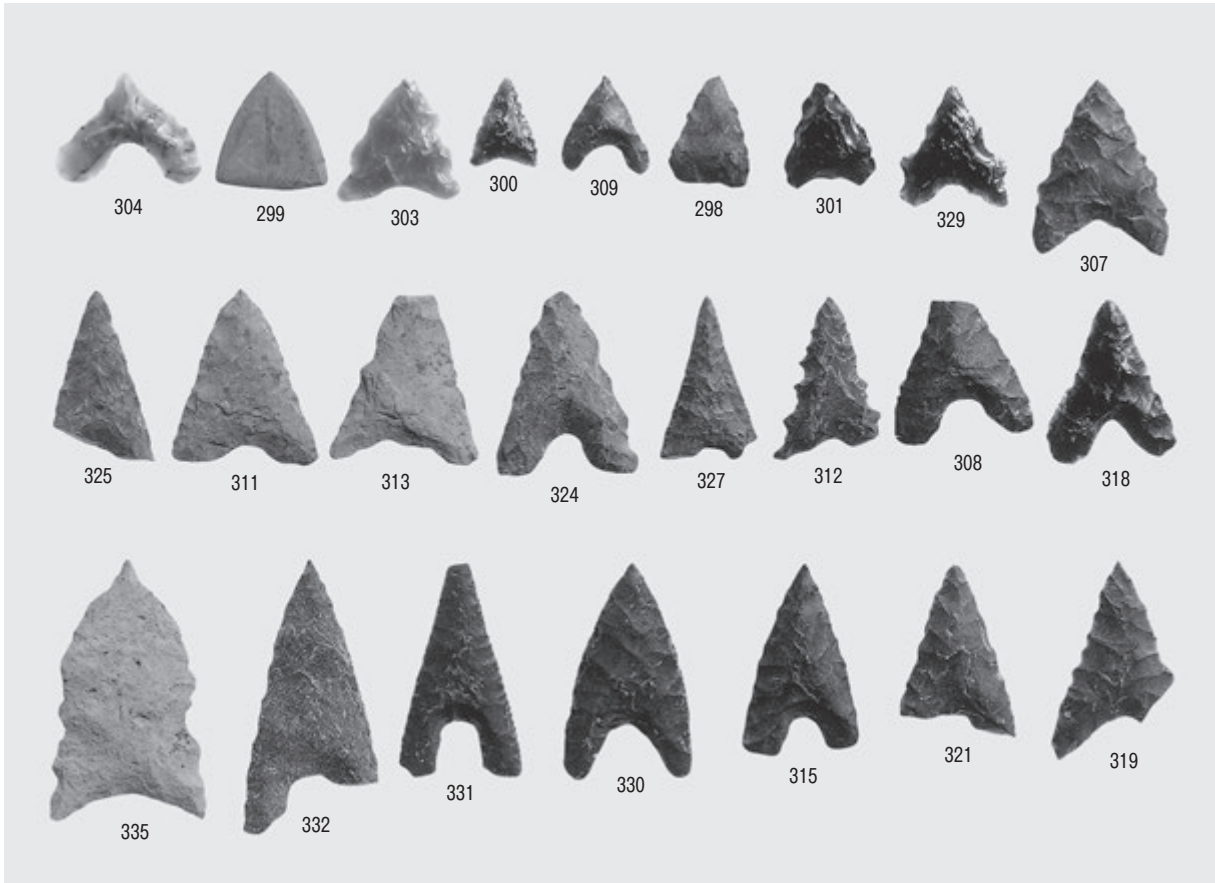
縄文時代早期 土器 3



縄文時代早期 土器 4



縄文時代早期 土器 5



縄文時代早期 石器 1



縄文時代早期 石器 2



桜谷遺跡 全景



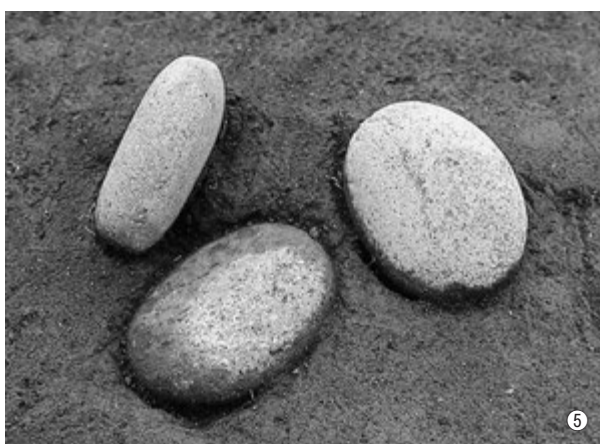
①土層断面

②旧石器時代遺物出土状況

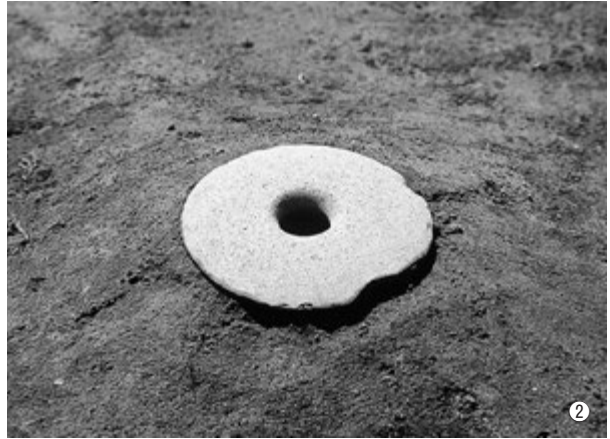
③～⑥縄文時代早期1・3～5号集石遺構



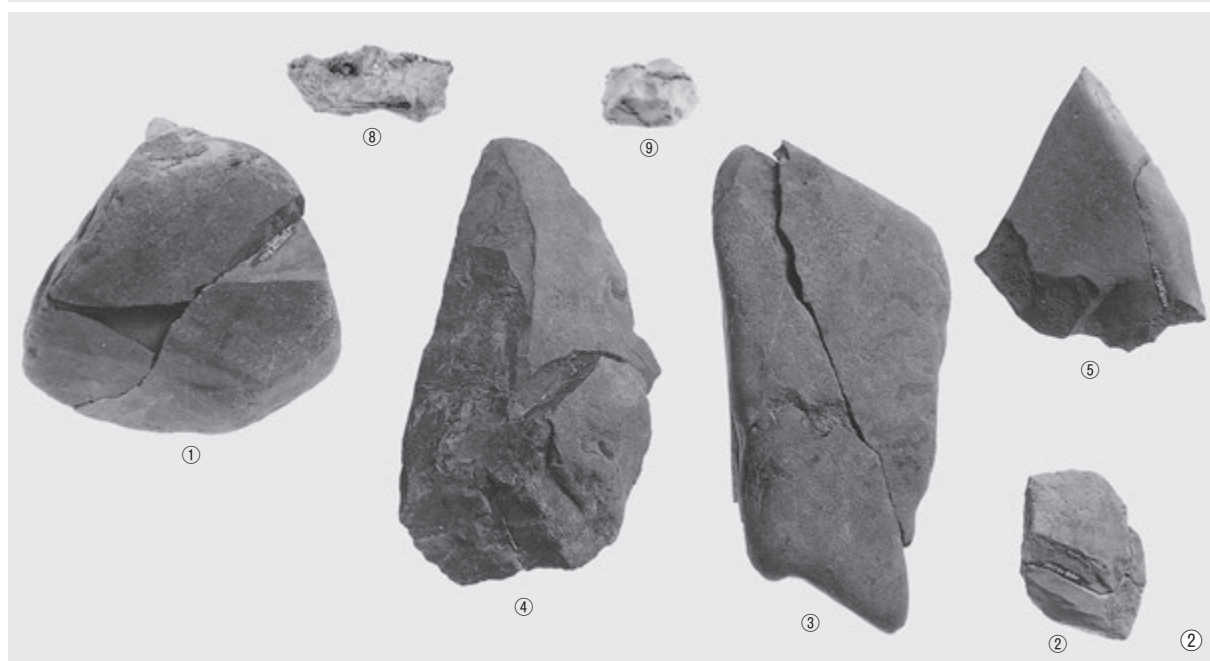
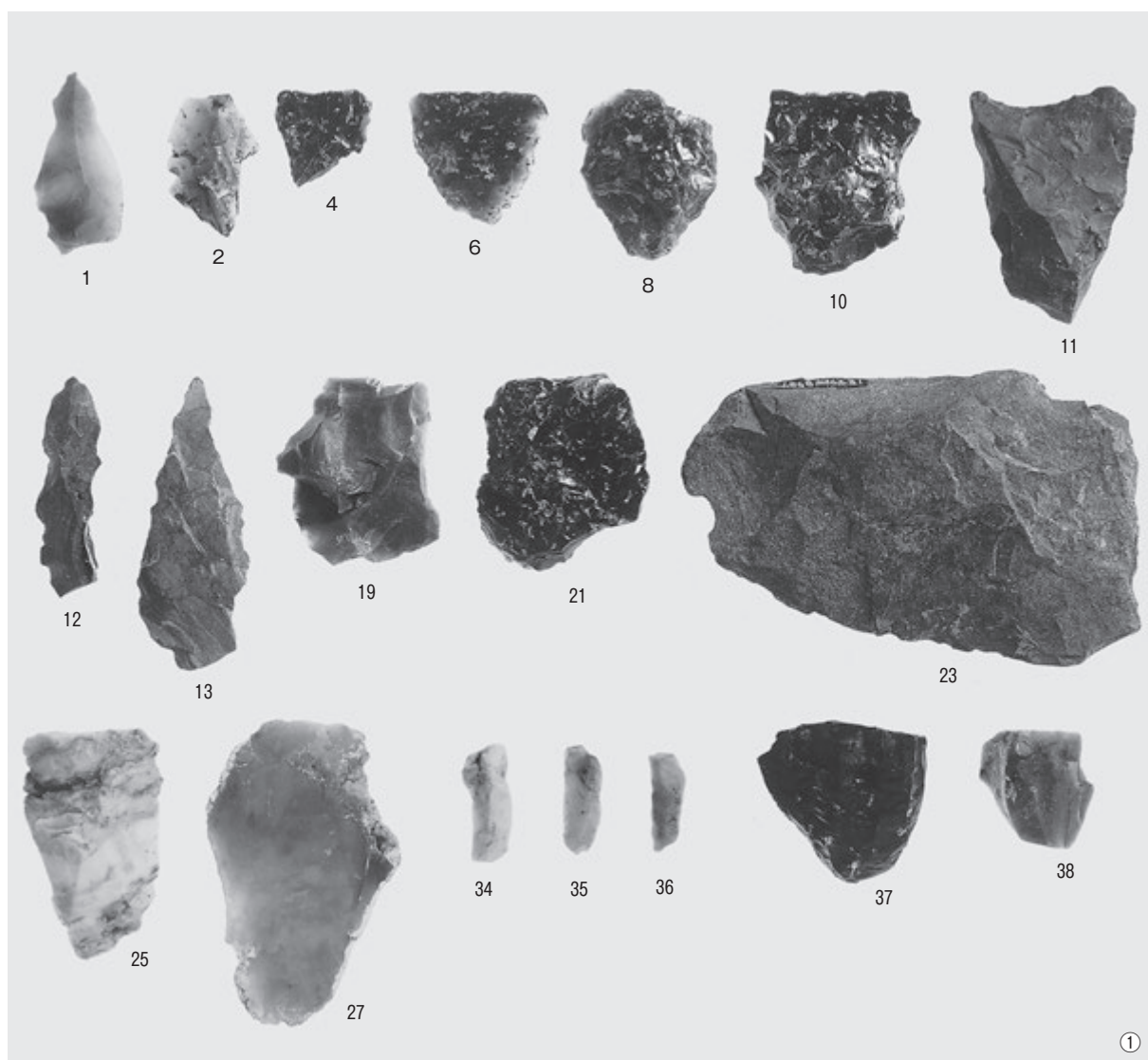
①～⑥縄文時代早期6・7・9・12～14号
集石遺構



縄文時代早期 ①～④20・21・24・25号集石遺構
⑤磨石集積遺構



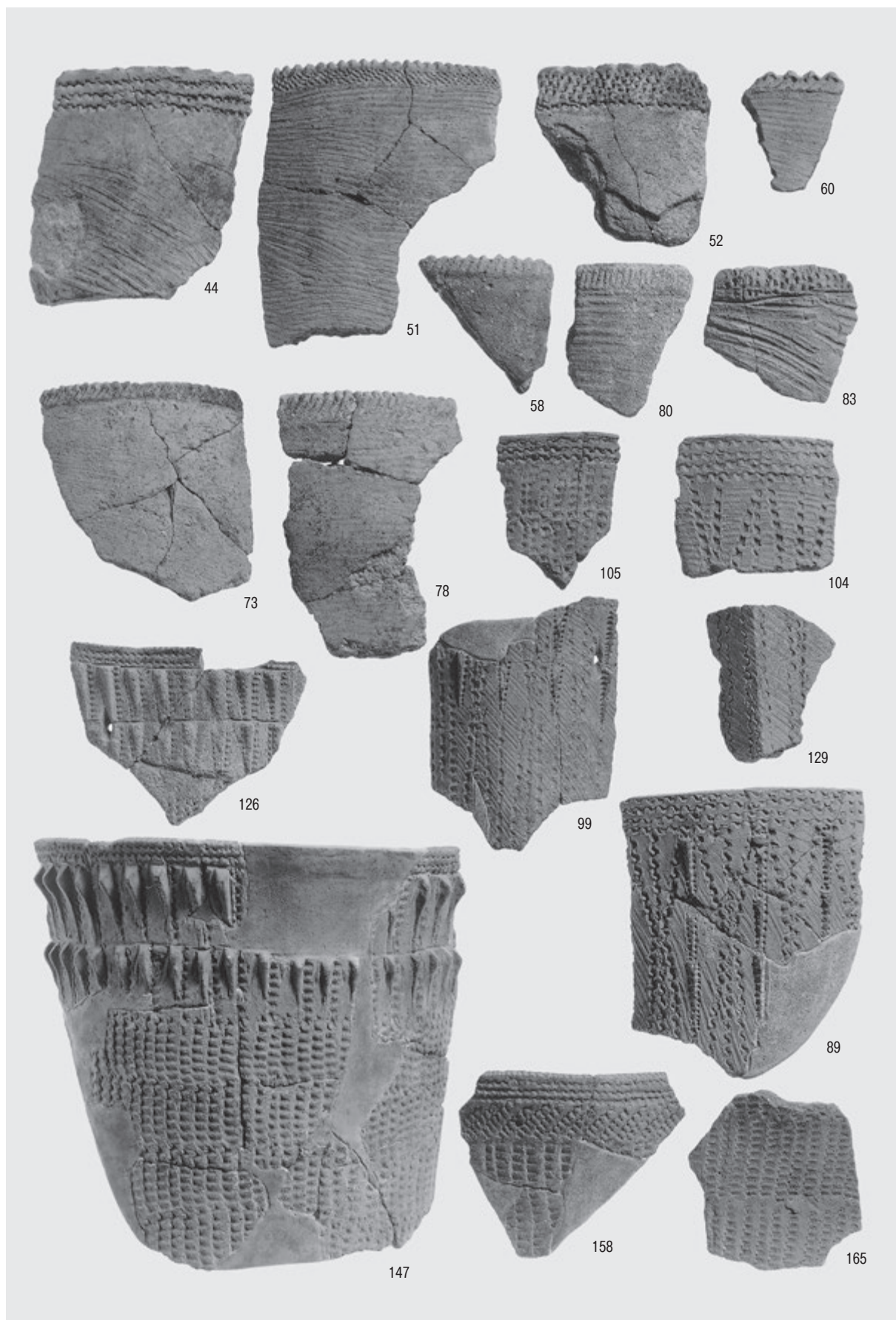
縄文時代早期 ①石皿出土状況 ②環状石斧出土状況 ③有溝砥石出土状況
 ④X類土器出土状況
 弥生時代 ⑤竪穴式住居跡検出状況



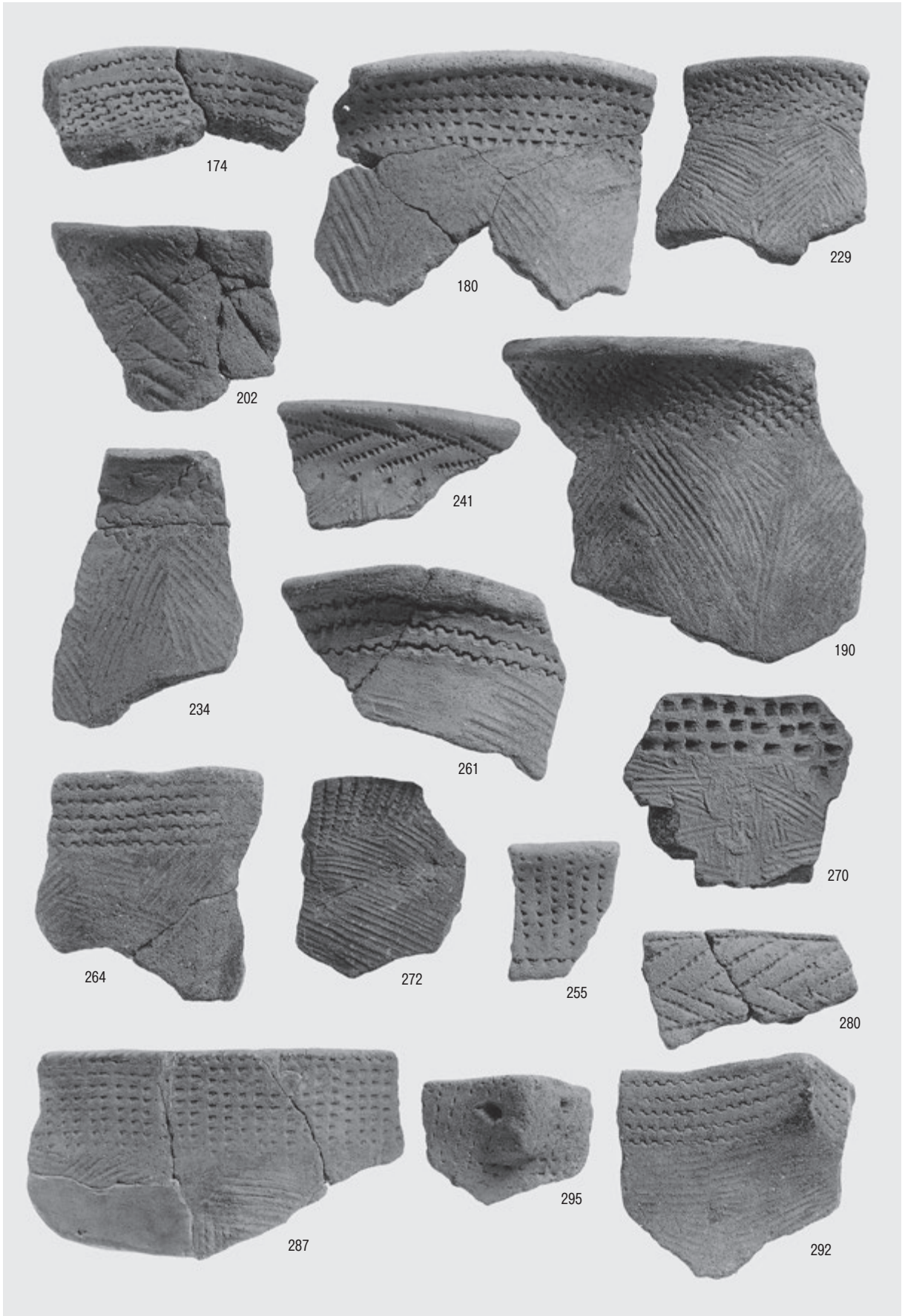
①旧石器 ②旧石器時代 接合資料



縄文時代早期 土器 1



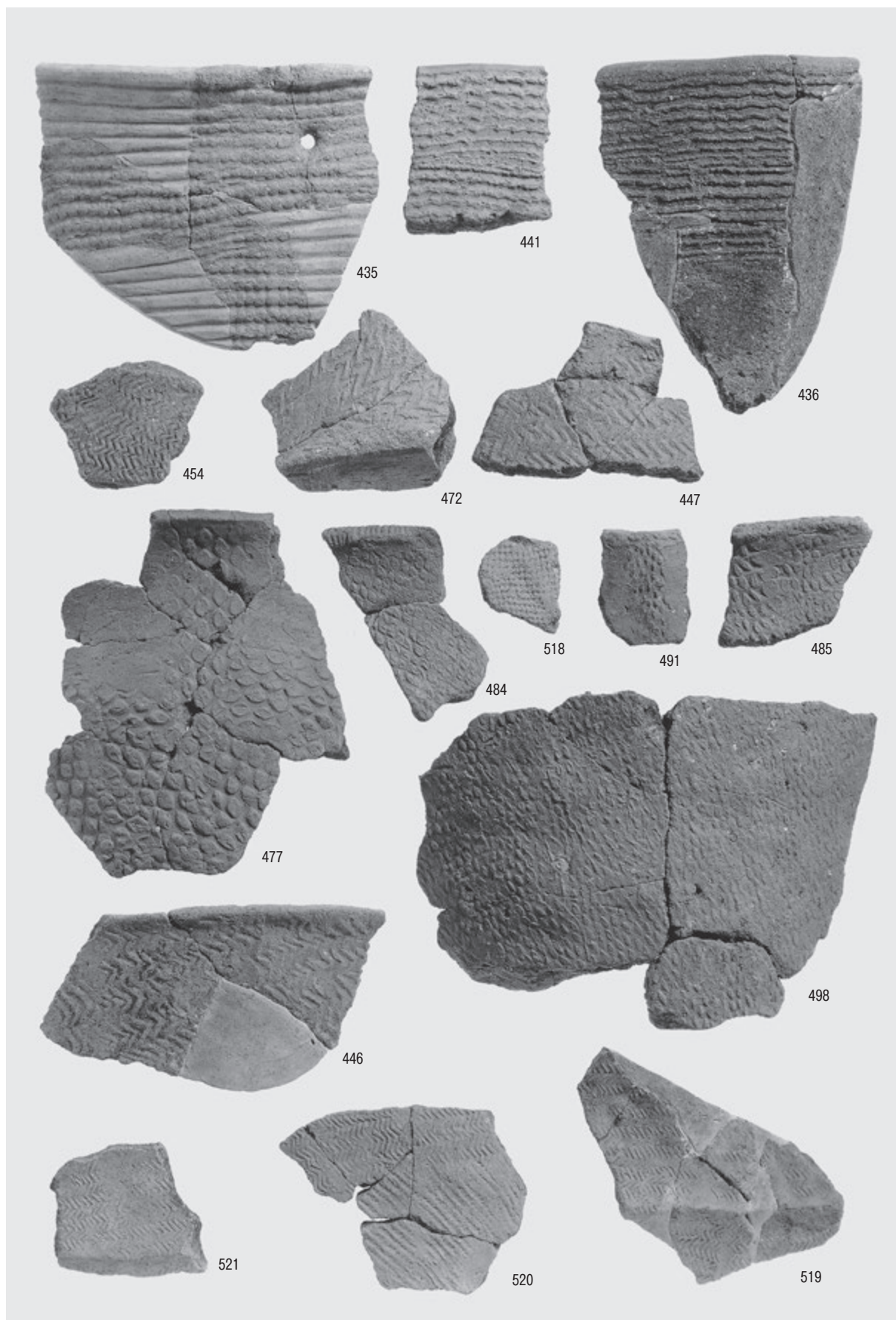
縄文時代早期 土器 2



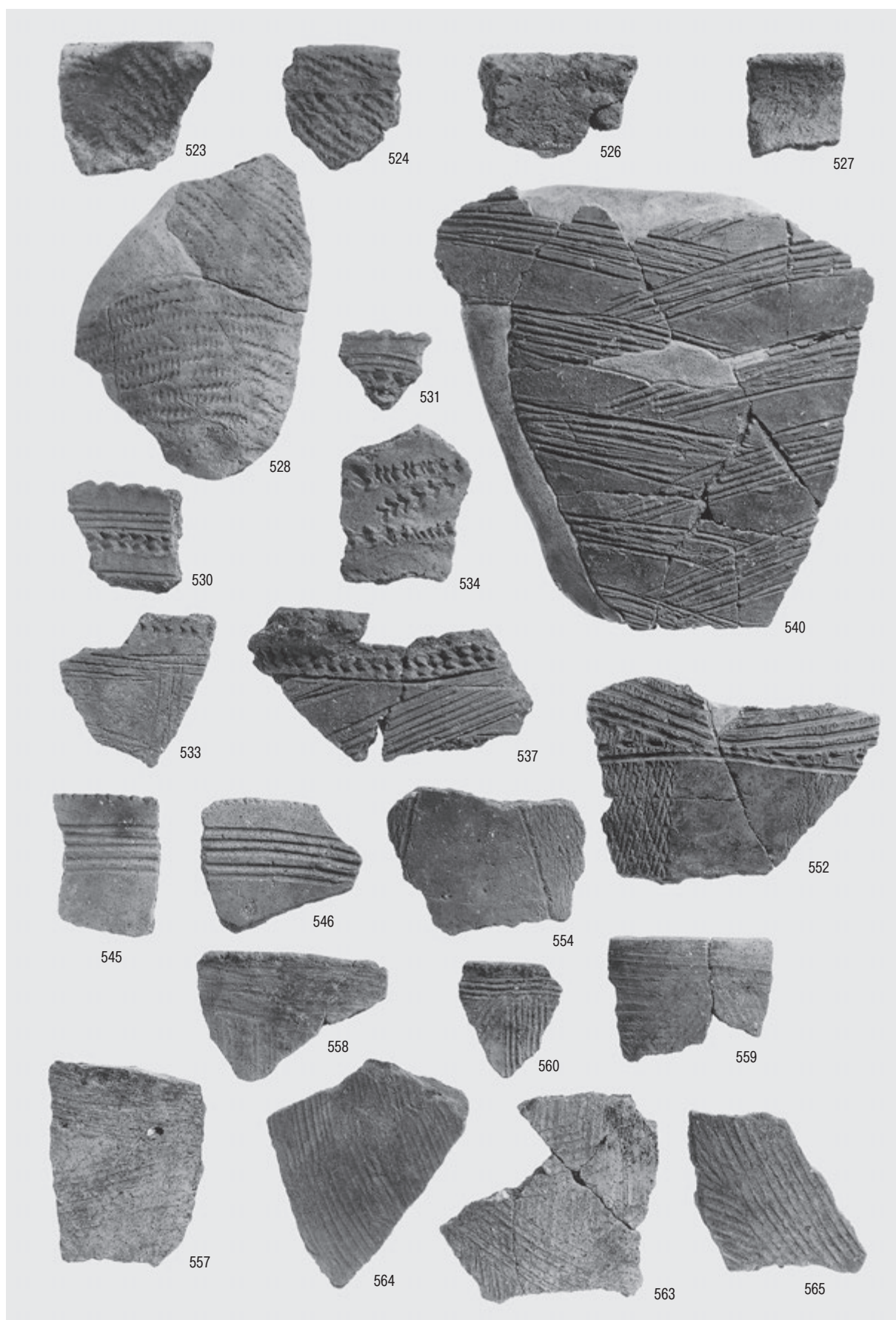
縄文時代早期 土器 3



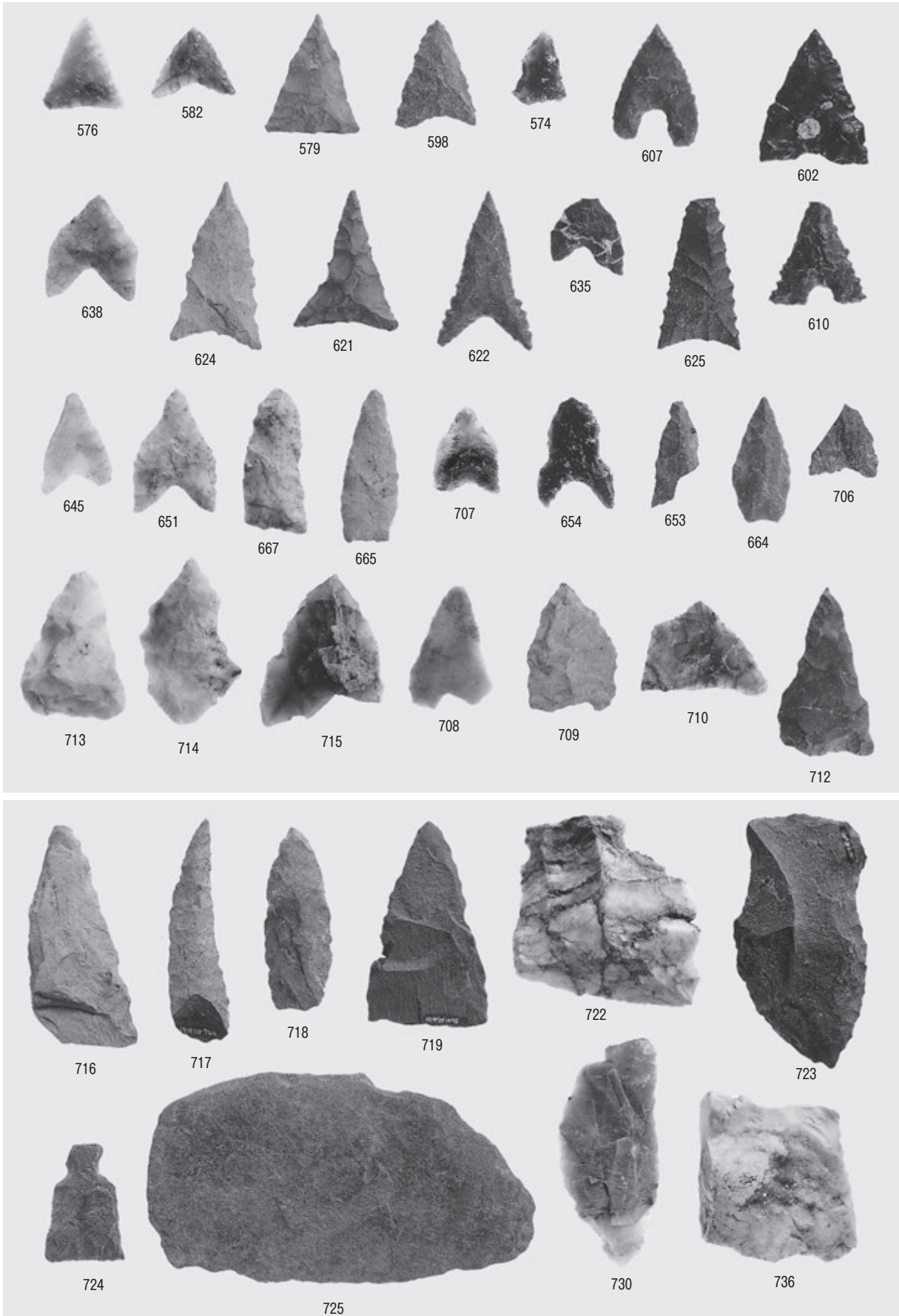
縄文時代早期 土器 4



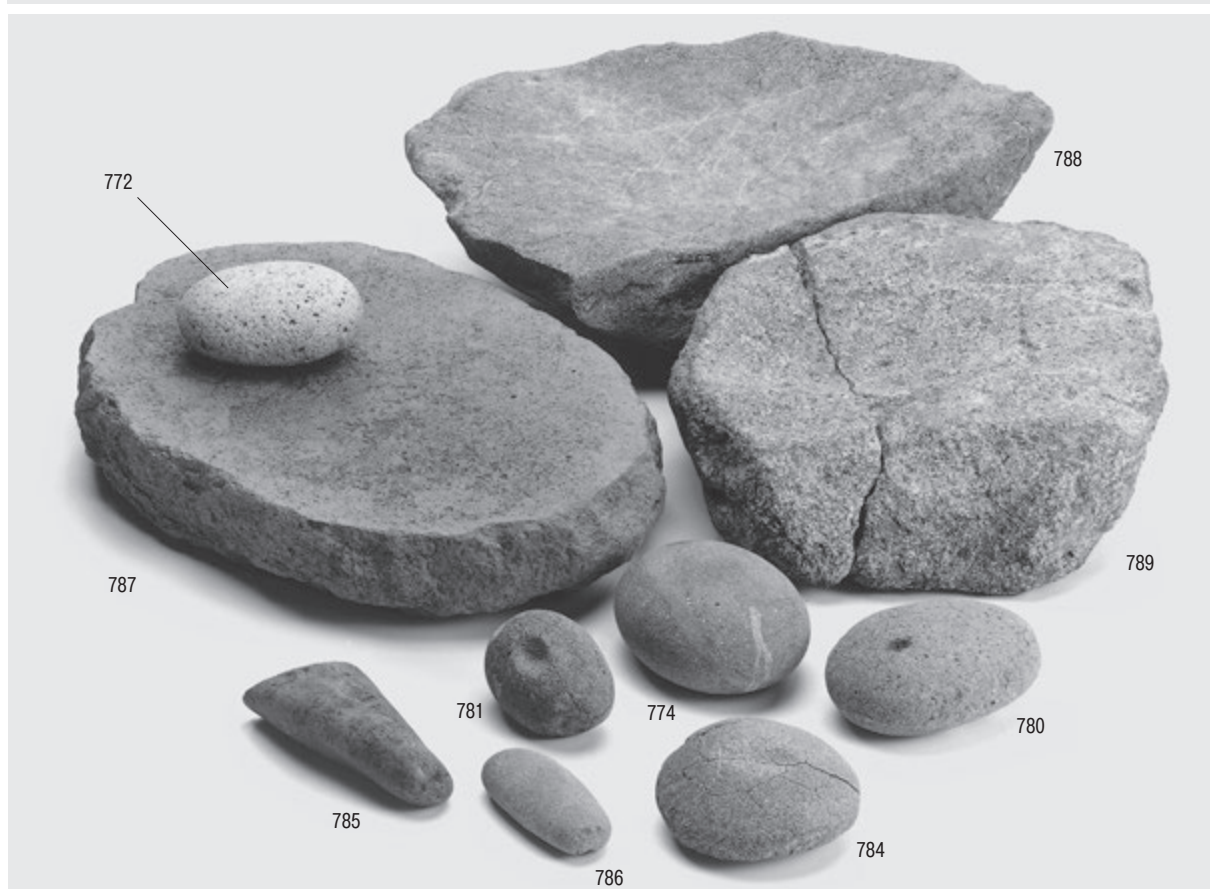
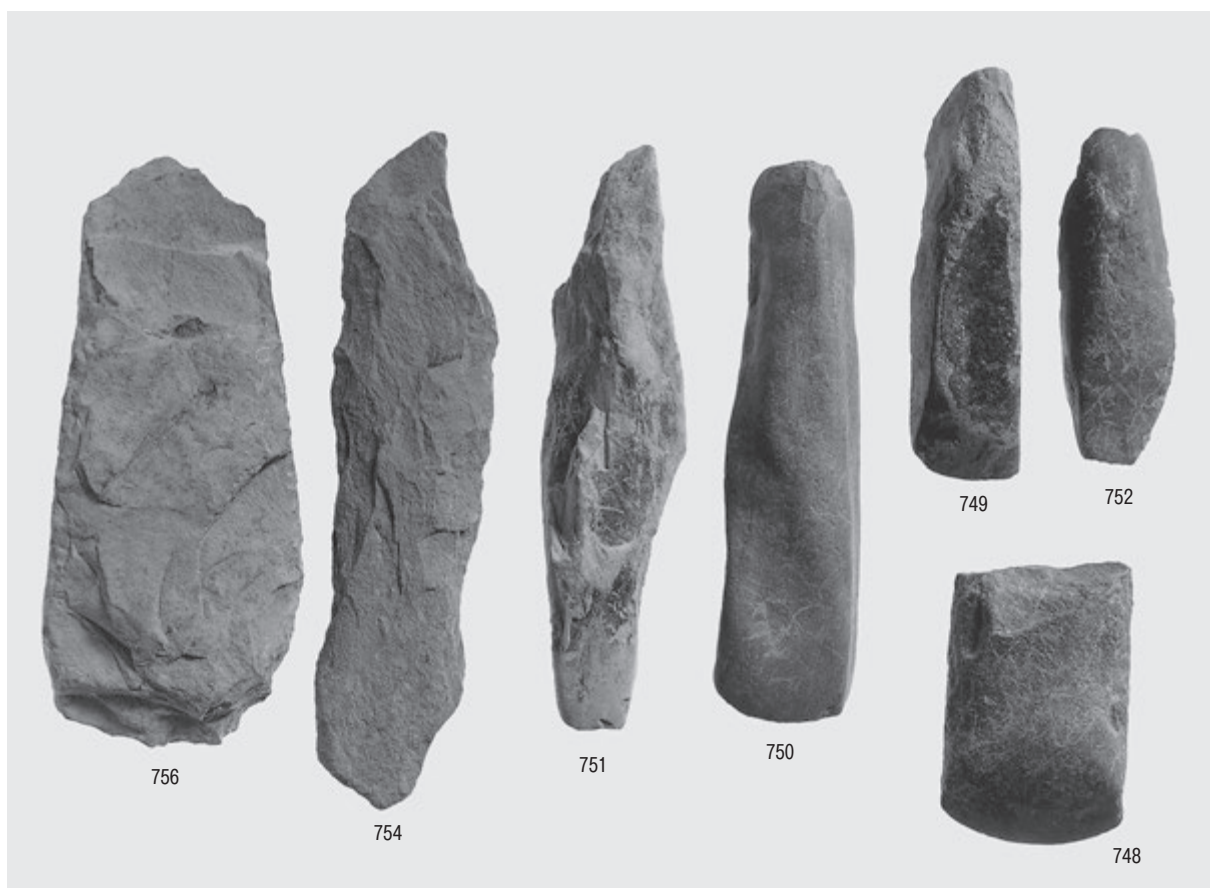
縄文時代早期 土器 5



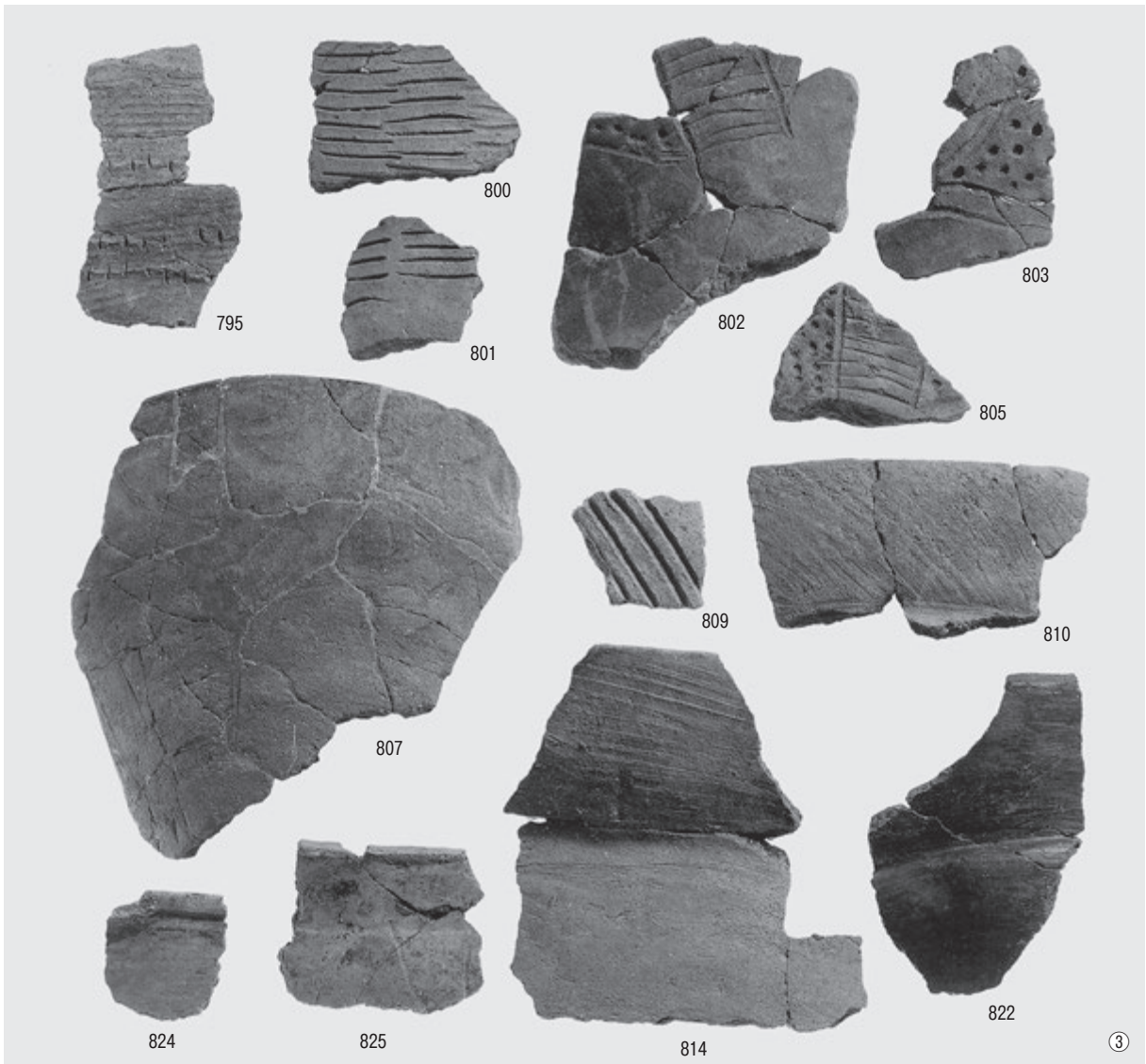
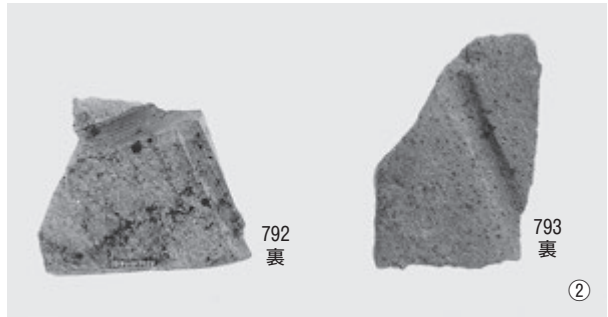
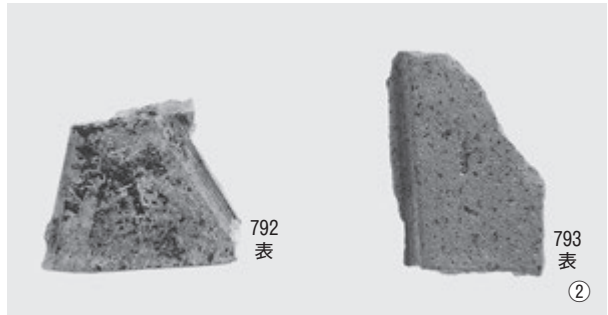
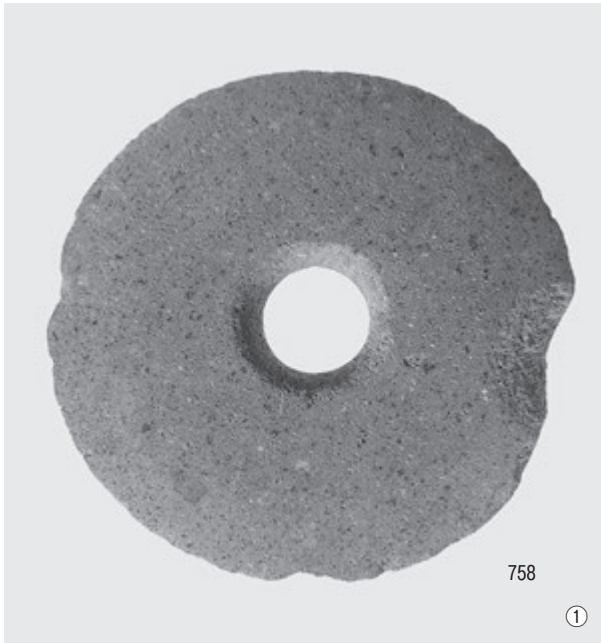
縄文時代早期 土器 6



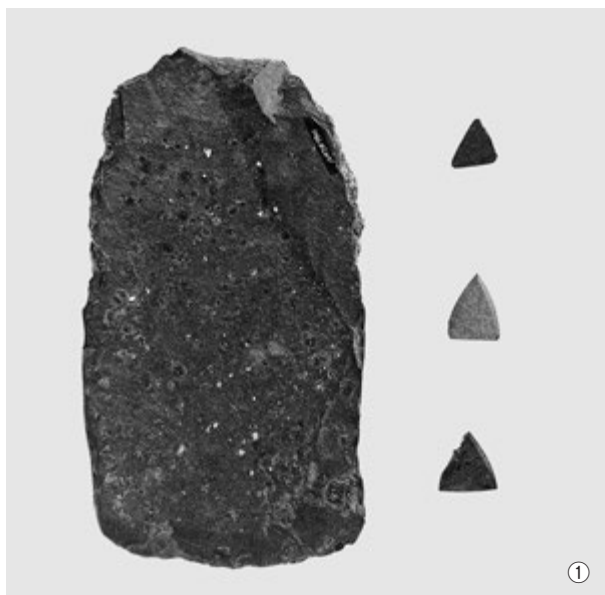
縄文時代早期 石器 1



縄文時代早期 石器 2



①・②縄文時代早期 石器 3
③縄文時代前・後・晩期 土器



①



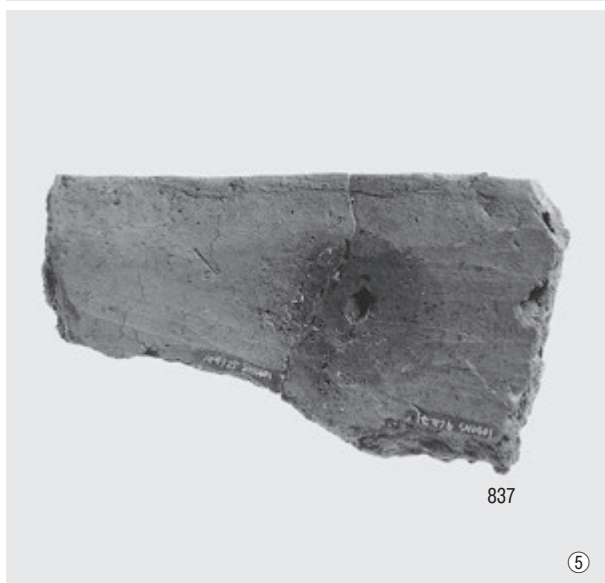
②



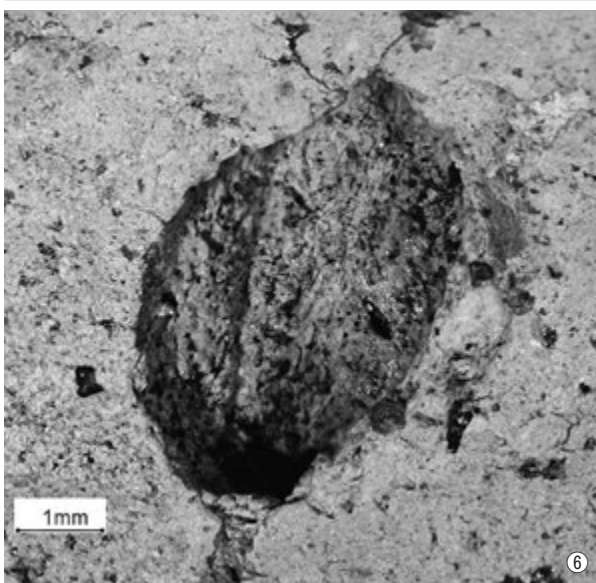
③



④



⑤



⑥

①縄文時代晩期 石器

弥生時代中期 ②～④竪穴式住居内出土土器

⑤粉痕のついた土器 ⑥電子顕微鏡拡大写真

あ　と　が　き

農業開発総合センター建設に伴う調査報告書も6冊を数え、いよいよ最終報告書となりました。今回は、23遺跡のうち、中尾遺跡・荒田遺跡・桜谷遺跡の3遺跡の刊行となりました。

荒田遺跡・桜谷遺跡の県内では希少な文様を有する縄文時代早期の押型文土器や中尾遺跡の縄文時代草創期の集石遺構と伴って出土した隆帯文土器等、貴重な資料を掲載した報告が出来たのではないかと思います。

本報告書が、郷土の歴史を解明する一助を為すことが出来れば幸いです。

最後になりますが、発掘調査に携わっていただきました南さつま市（旧加世田市・旧金峰町）日置市（旧吹上町・旧日吉町）の多くの皆様、埋蔵文化財センターにおいて、報告書刊行のために整理作業に携わっていただいた皆様に深く感謝し御礼申し上げます。

また、発掘調査並びに整理作業中に以下の方々にご指導をいただきました。末尾ではありますがお礼申し上げます。

上村俊雄（国際大学教授）、河口貞徳（鹿児島県考古学会長）、新東晃一（南九州縄文研究会長）、橘昌信（別府大学教授）、中村直子（鹿児島大学准教授）、永山修一（ラ・サール学園教諭）、本田道輝（鹿児島大学准教授）、矢野健一（立命館大学教授）、森脇広（鹿児島大学教授）

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（138）

農業開発総合センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ

農業開発総合センター遺跡群Ⅵ

なか　お　い　せき　あらた　い　せき　さくらだに　い　せき
中尾遺跡・荒田遺跡・桜谷遺跡

発行月　2009年3月

発　行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318
鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号
Tel.0995-48-5811

印　刷　株式会社　トライ社
〒892-0834
鹿児島市南林寺町12-6
Tel.099-226-0815